

小松市内遺跡発掘調査報告書 I

二ツ梨豆岡向山窯跡

狐山遺跡

2005. 3

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 対象となった埋蔵文化財は、個人農地開発に伴って実施された「二ツ梨豆岡向山窯跡」、個人住宅建設に伴って実施された「狐山遺跡」である。
3. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受け、小松市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。なお、調査から報告書作成に至るまで望月精司の指導・教示を得ている。

【二ツ梨豆岡向山窯跡】

[調査地] 石川県小松市二ツ梨町96-1番3, 96-1番4、上荒屋町ソ2番1, ソ2番3, ソ2番4

[調査面積] 試掘調査面積7,794 m²
本調査 1,700m²

[調査期間と調査担当者]

試掘調査	A・B・C・D地区	平成12年12月4日～12月20日	望月 精司・西田由美子
	E・F地区	平成14年3月8日～3月14日	川畑 謙二
本調査	A地区	平成14年6月12日～12月25日	川畑 謙二・岩本 信一
	B地区	平成13年10月11日～平成14年3月26日（灰原）	西田由美子・川畑 謙二
		平成14年6月12日～9月12日	西田由美子
	B'地区	平成15年5月9日～9月18日	西田由美子
	C地区	平成14年8月27日～平成15年2月26日	西田由美子

【狐山遺跡】

[調査地] 石川県小松市串茶屋町丙56-3番地

[調査面積] 211m²

[調査期間と発掘調査担当者]

試掘調査	平成15年7月16日	宮田 明
発掘調査	平成15年9月1日～9月18日	下濱 貴子

5. 二ツ梨豆岡向山窯跡の遺構の測量については、津田隆志、坂下義視、麻本賢治の協力を得ている。なお、測量補助として発掘調査臨時作業員を雇用した。
6. 出土品整理及び遺物実測・製図については、二ツ梨豆岡向山窯跡は平成14年度から平成16年度にかけて出土品整理臨時作業員を雇用し、西田が担当した。狐山遺跡は、下濱が担当した。
7. 二ツ梨豆岡向山窯跡の編集は西田が担当し、望月、廣田いずみ、下濱、西田が執筆した。執筆分担は、第1章・3章が廣田・西田、第2章が廣田、第4章から第5章が西田、第5章第3節が望月である。狐山遺跡の編集・執筆は下濱が担当した。なお、二ツ梨豆岡向山窯跡の編集には坂下義視・埴田容子の協力を得た。
8. 写真撮影は、遺構を上記調査担当者が実施し、モノクロ遺物写真を望月が、カラー遺物写真を西田・下濱が担当した。また、二ツ梨豆岡向山窯跡の空中写真は株式会社太陽測地社に委託した。
9. 本書で示す方位はすべて真北であり、水平基準は海拔高（m）で示した。なお、二ツ梨豆岡向山窯跡の第2図及び狐山遺跡の第1図は、国土地理院発行25,000分の1地形図（平成9年度発行「小松」）を使用した。また、二ツ梨豆岡向山遺跡第4図・第5図は小松市発行2,500分の1国土基本図「粟津」、狐山遺跡第2図には小松市発行2,500分の1国土基本図「串」を使用した。
10. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図・写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
11. その他、二ツ梨豆岡向山窯跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の機関・団体・個人よりご協力、ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音訓）

池澤俊幸、諫山えりか、石木秀啓、石田明夫、池野正男、上原真人、上村安夫、牛谷好伸、小田由美子、柿田祐司、鹿島昌也、亀田修一、川村 尚、川畑 誠、木立雅朗、北野博司、倉田義弘、後藤建一、坂井秀弥、斉藤秀一、佐々木義則、佐藤竜馬、柴田 睦、城ヶ谷和宏、菅原祥夫、武田健次郎、田嶋明人、田中照久、出越秀和、中村久一、西 英晃、丹羽野裕、野原大輔、長谷川陸、浜中有紀、菱田哲郎、平石 充、藤原 学、舟山良一、森内秀造、余語琢磨、吉岡康暢、嘉見俊宏、渡辺 一、綿貫邦夫、窯跡研究会、北陸古代土器研究会、八幡市教育委員会、

また、狐山遺跡発掘調査の際には、調査箇所の隣人である橋 祥一郎氏には多大なご協力を頂いた、記して感謝したい。

目次

例言

遺物図版及び遺物の凡例

【二ツ梨豆岡向山窯跡発掘調査】

第1章 位置と環境 …………… (廣田・西田) ……	1
第1節 地理的環境と立地 ……………	1
第2節 南加賀窯跡群の名称 ……………	1
第3節 遺跡の環境 ……………	5
第2章 調査の経緯と経過 …………… (廣田) ……	6
第1節 調査に至るまでの経緯 ……………	6
第2節 試掘調査の経緯と概要 ……………	7
第3節 本調査の経緯と概要 ……………	8
第3章 南加賀窯跡群と ……………	11
二ツ梨豆岡向山窯跡の概要 (廣田・西田)	
第1節 南加賀窯跡群の分布と戸津オオダニ地区	12
第2節 二ツ梨豆岡向山窯跡の概要 ……………	13
第1項 2大オオダニと二ツ梨豆岡向山支群	13
第2項 二ツ梨豆岡向山窯跡の調査概要 ……	13
第4章 遺構 …………… (西田) ……	17
第1節 A地区の調査 ……………	17
第1項 2号窯 ……………	17
第2項 1-A号窯 ……………	22
第3項 1-B号窯 ……………	27
第4項 その他の遺構 ……………	32
第5項 昭和58年度灰原調査との照合 ……	38
第2節 B地区(B'地区)の調査 ……………	39
第1項 8号窯 ……………	40
第2項 7号窯 ……………	51
第3項 その他の遺構 ……………	56
第3節 C地区の調査 ……………	64
第1項 9号窯 ……………	65
第2項 10号窯 ……………	66

【狐山遺跡発掘調査】 …………… (下濱) ……

第1章 位置と環境 ……………	216
第2章 調査に至る経緯と経過 ……………	218
第1節 調査に至るまでの経緯 ……………	218
第2節 発掘調査の経過 ……………	218
第3章 調査の成果 ……………	219
第1節 調査区の状況と概要 ……………	219
第2節 遺構 ……………	219
第3節 遺物 ……………	219
第4節 遺跡の時期の評価 ……………	221

二ツ梨豆岡向山窯跡 遺構・遺物写真 …………… 223

狐山遺跡 遺構・遺物写真 …………… 245

報告書抄録

第5章 遺物 …………… (西田) ……	72
第1節 8世紀の須恵器 ……………	73
第1項 A地区出土 須恵器 ……………	74
第2項 B地区出土 須恵器 ……………	79
第3項 C地区出土 須恵器 ……………	94
第4項 出土須恵器時期と二ツ梨豆岡向山 ……	106
8世紀須恵器窯の動向について	
第2節 8世紀の土師器と特殊遺物 ……………	107
第1項 C地区出土 土師器 ……………	108
第2項 鷗尾 ……………	112
第3節 10世紀の須恵器 ……………	117
第1項 A地区出土 須恵器 ……………	116
第2項 B地区出土 須恵器 ……………	137
第3項 出土須恵器の時期について ……	160
第4節 10世紀の瓦 …………… (望月) ……	161
第1項 A地区出土 瓦 ……………	163
第2項 B地区出土 瓦 ……………	167
第3項 南加賀窯跡群の平安期軒先瓦に ……	181
関する編年的考察	
第3節 10世紀の窯道具 …………… (西田) ……	189
遺物観察表 ……………	195

凡 例

【ニツ梨豆岡向山窯跡】

遺構について

- ・窯の計測方法、部位名称及び分類については、『須恵器窯構造資料集 2 - 8世紀中頃～12世紀を中心として』窯跡研究会2004の「【須恵器窯跡構造を論じる上での用語解説】須恵器窯構造に関する構造名称や部位名称及びその機能」に、総じて基づいている。

窯構造名分類では、A類が掘り抜き構造（地下式）で、この内、2類が地下焼成部掘り抜き式・焚口から焼成部は仮設天井架構、焼成部口から排煙口までが掘り抜き構造をもつものを示す。

焚口・焼成部構造では、あ類が、ほぼ水平か緩く焚口に向かってあがる床傾斜の燃焼部で焼成部境から焚口までがほぼ同じ幅をもつもの、この内あ2類においては焼成部幅よりも若干幅狭の燃焼部構造、焼成部の長いa類と通常の長さをもつb類に細分、を示している。え類が、燃焼部床面が焚口に向かって強い傾斜をするとともに、焚口壁が明瞭に立ち上がる構造のもの、傾斜燃焼部構造といえるものである。

排煙口・煙道構造については、Ⅲ類が奥壁をもち、明確な煙道をもつもので、煙道がほぼ直立するもの、直立煙道型であり、この内、Ⅲ1類が煙道が天井に付設されるもので、湯床の傾斜がややあり、煙道長50～100cm未満となる短縮煙道をa類、緩傾斜床面で煙道長100cm以上を測るものをb類としている。

以上、本書に関連する分類のみを掲載している。

- ・土層註は「新版標準土色帖」に基づいている。

遺物について

- ・土器の器種名は、基本的に須恵器・土師器ともに食膳具は北陸古代土器研究会で使用するものに準じた。坏、碗、鉢、皿を使用し、無台はA、有台はBとした。が、一部筆者の判断で設定したものもある。
- ・貯蔵具の器種名は、従来の名称を使用しているが、北野博司の器種分類案（北陸古代土器研究1999）「須恵器貯蔵具の器種分類案」『第8号北陸古代土器研究 つほとかめ』に基づき、北陸古代土器研究会で常用いる名称を補う形で付記している。また、この中に記載されていない器種については筆者の設定したものがある。
- ・本書で示した土器編年並びに暦年代観については、1988年北陸古代土器研究会シンポジウムの際の田嶋明人氏の古代土器編年軸を基本として、1997年北陸古代土器研究会10・11世紀シンポジウムの際の田嶋明人氏の南加賀編年修正を加えたもの（＝田嶋編年）に、望月精司氏が南加賀窯跡資料とニツ梨一貫山窯跡資料、並びに歴代年間を付記したもの（小松市教育委員会2004）「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」『ニツ梨一貫山窯跡』に準じている。

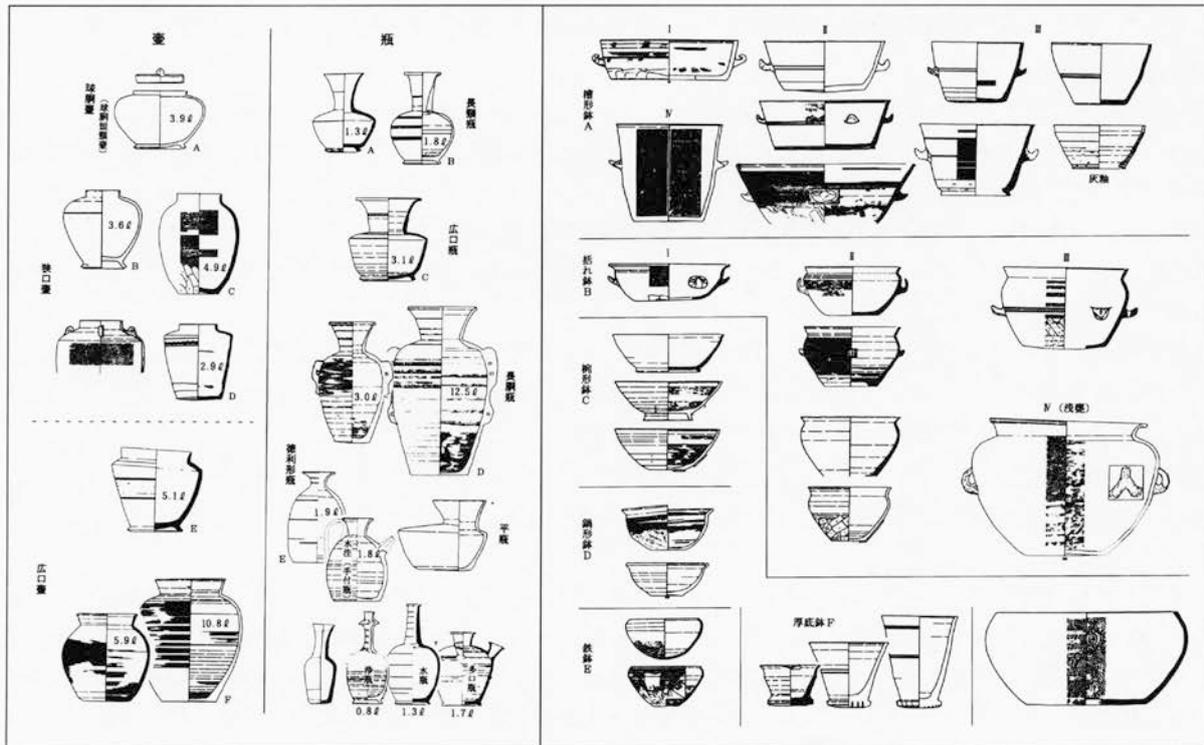
遺物図版に関して

- ・遺物図版は出土地ごとにまとめて提示してある。図はいずれも白抜き断面であるが、土師器はC地区出土だけに限られ、第71～74図である。また、土師器においては、赤彩及び内黒処理されている範囲を、赤彩が薄い網点（10%網点）で、内黒が濃い網点（25%網点）で示してある。
- ・遺物図版内の縮尺は、須恵器・土師器食膳具と須恵器（須恵質）特殊品、陶錘、刀子、砥石等の特殊品を1/3で、須恵器貯蔵具、土師器煮炊具、瓦、鴟尾を1/4で、8世紀大甕のみ1/6でそれぞれ分けて統一している。なお、窯道具の焼台は1/3、匣鉢は1/4となっている。
- ・土器図版中で示す右側断面に書き込んである「↕」は、ヘラケズリの範囲を、左表面並びに展開図中の「→」はケズリの方向を示す。
- ・土器図版中の右断面の中の破線は、粘土紐接着痕を示す。

遺物観察表に関して

- ・遺物の性格を示す用語として、「置台」は、製品であったものを置台として転用して使用した痕跡を示すもの、「製品」は製品を示す。
- ・焼成、焼き色（色調）で示す用語は、「堅緻」が良好以上の強い堅緻な焼きのもの、「良好」が堅緻よりも焼き締まりの弱いもの、「良」が還元状態は保つが焼き締まりの弱いもの、「酸化」は表面が酸化するもの、「半生」は良と生焼けの中間の状態のもの、「生焼け」は白い還元状態のものや焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。焼き色は、降灰部分や釉付着部分を除いた大まかな色調である。2種類の用語を提示している場合は、その遺物が約半割ずつの焼き色もっていることを示す。

- ・法量で示した、口=口径、底=底径、台=台径、台高=高台高、つまみ径=蓋つまみ径、つまみ高=蓋つまみ高さ、基=基部径、坏高=高坏坏部高、高=器高、残高=残存器高、頸=頸部径、頸高=口頸部高、胴=胴部最大径、長=長軸長、巾=最大径、厚=平均厚、最厚=最大厚、孔=孔径を示し、「残」は残存部分での法量を示す。単位はcmである。
- ・完存は、無記であれば全体での完存割合、口、胴、底、坏、脚の表示があれば、その部位のみ完存割合を示す。
- ・胎土で示す用語は、須恵器では、「普通」が南加賀窯跡群の戸津オオダニ地区で通常見られる、素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土、「砂多」が、通常の胎土よりも砂の混入が多いもの、「良」が砂粒の混入が少ない良質の土を示す。
- ・備考中の坏B重焼痕の分類は、北野博司氏の分類(石川県埋蔵文化財センター 1988)「重焼の観察」『辰口西部遺跡群I』に基づき、I類は、蓋身正位に合わせたものを1単位として2段程度に重ねたもの。II a類は、蓋を逆位にして身を重ねたものを1単位として柱状に重ねたもの、II b類は、蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として交互に蓋口同士が合わさるように柱状に重ねたものを示す。
- ・備考に示した○○ℓは、容器内側の容積(容量)で、ここで示したものは口縁部以下の容積のみ示している。また、陶錘などに示す○○gは重量を示す。
- ・貯蔵具の胴部成形・調整で示すタタキ及び当て具の分類については、花塚信雄氏の分類(金沢市教育委員会 1984)「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』に基づいており、「Ha類」が木目直行の平行文、「Hb類」が木目左下がりの平行線文、「Hc類」が木目右下がりの平行線文、「He類」は木目の見えない平行線文、「Da類」が木目の見えない同心円文、「Db類」が木目が年輪状に入る同心円文、「Dc類」が柾目状木目が入る同心円文、「SD類」が年輪木目のみが見える細かな同心円文(木製無文)で示してある。
- ・土師器の色調については、赤は赤彩部分、土は胎土を断面からみた色調、黒は内黒焼成の黒色部分を示し、色調で示した記号は「新版標準土色帖」に基づいており、あ=2.5YR4/6、い=2.5YR5/6、う=2.5YR5/8、え=2.5YR6/4+2.5Y7/3、お=5YR4/8、か=5YR5/8、き=5YR7/8、く=5YR5/6、け=5YR6/6、こ=7.5YR3/1、さ=7.5YR4/1、し=7.5YR7/4、す=7.5YR7/6、せ=7.5YR7/6・6/6、そ=7.5YR5/8、た=7.5YR7/8、ち=7.5YR8/1、つ=7.5YR8/2、て=7.5YR8/4、と=7.5YR8/6、な=10YR4/1、に=10YR5/6、ぬ=10YR5/8、ね=10YR7/3、の=10YR7/4、は=10YR8/2、ひ=10YR8/3、ふ=10YR8/2・8/3、へ=10YR8/4、ほ=10YR7/6、ま=10YR8/6、み=10YR4/8、む=10R5/6、め=10R5/8、も=N3/~2/を示す。
- ・出土地点について、焚口全面土坑の焚口を略している。



壺・瓶・鉢類の器種分類図(北野1999を転載)

ニツ梨豆岡向山窯跡発掘調査

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境と立地

小松市は石川県南西部に位置し、さらに小松市の南東部にニツ梨豆岡向山窯跡は位置する。石川県は大きく加賀地域と能登地域に分けられるが、加賀は県内最大の河川である手取川によってさらに北加賀と南加賀に分けられるのが一般的である。南加賀は、西に日本海、東に白山前山丘陵を形成する能美・江沼丘陵に挟まれた地域で、南北にはそれぞれ江沼盆地・能美平野が広がる。この江沼盆地と能美平野の中間位置に加賀三湖（木場潟、柴山潟、今江潟）により形成された潟埋積平野、三湖台地、月津台地が広がる（加賀三湖の昭和27(1952)年からの干拓事業や度重なる台地の平地化により旧地形を現在は留めていない現状）。これらの南東に白山前山丘陵と境を接し、いたるところに小谷を形成しており、本遺跡はこの潟埋積平野に面した低丘陵末端部に位置している。

その立地及び自然環境に目を向けると、人が住まい、交流するための条件—漁撈、稲作、水運の各面に影響する条件—が揃っていることがわかる。特に「水」に注目するとその有利性が浮かび上がってくる。白山山系に源を持ち県内では美川に次ぐ規模を誇る梯川が東から西に向けて流れ安宅湊で日本海に注ぐほか、入り組んだ地形により生じた幾つもの河川が木場潟と柴山潟に注ぎ、さらに木場潟、柴山潟は今江潟を介して梯川と繋がる。平野部におけるこうした水利が、漁撈による直接的な恵みは勿論のこと、繰り返される氾濫により肥沃な土地をもたらしたのは明白である。

一方、平野部の東側及び県境であり市内最高峰の大日山（標高1,368m）のある北側を始め、市域の大部分は山地に続く丘陵地である。莫大で豊富な資源を有することは明白で、この窯跡の立地に目を向けると、平野に近く交通の便に優れている点、一帯の地形及び土質が窯作りに適している点、谷部での良質粘土が堆積している点等、窯業に適した立地条件を備えていた位置に、南加賀窯跡群が展開し、本遺跡は立地する。



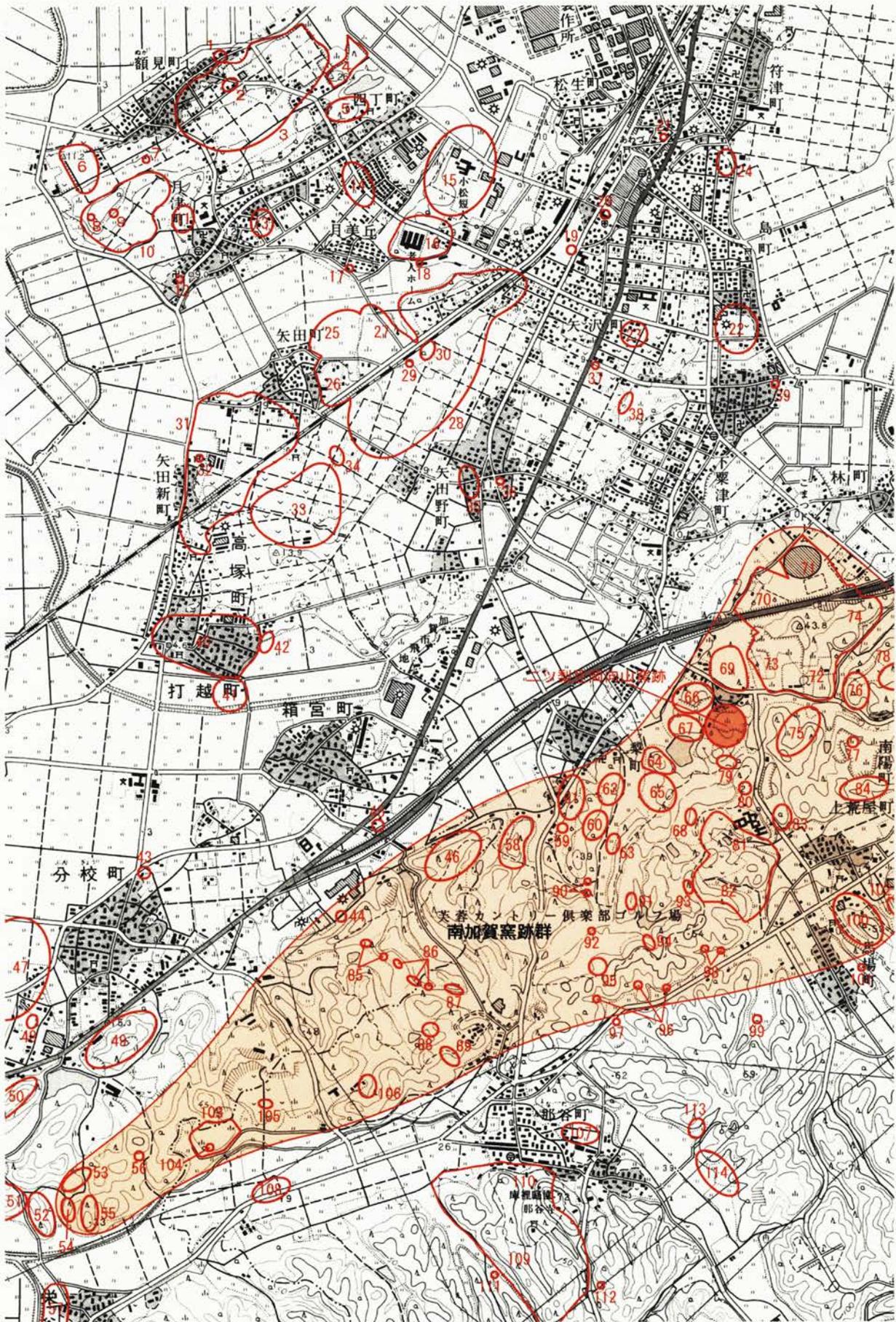
第1図 石川県小松市の位置

第2節 南加賀窯跡群の名称

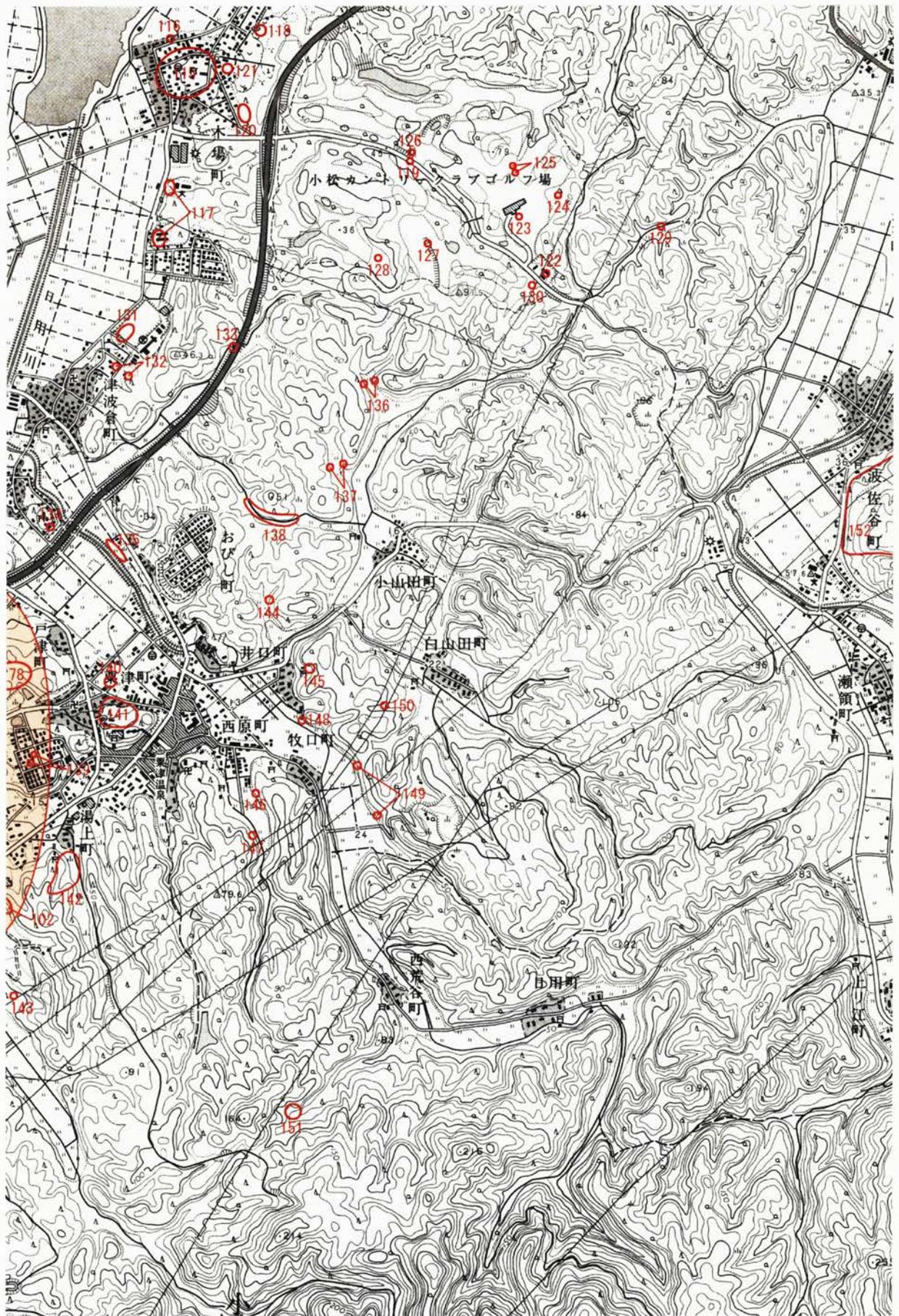
本遺跡は、南加賀窯跡群に含まれるものである。「南加賀窯跡群」は、広義には、石川県小松市の蓮台寺・木場地区及び栗津地区から加賀市東部の分校地区にまたがって位置する、長軸が約10kmに及ぶ、製陶遺跡群と分布が重複、あるいは近接する製鉄遺跡をも含む、大規模な遺跡群である。近年の発掘調査の成果から、遺跡の分布が併存はするものの、同時期に同一斜面で併存することはなく、現在では、製陶遺跡群＝「南加賀窯跡群」と製鉄遺跡群＝「南加賀製鉄遺跡群」、それぞれと別々のものとして認識されている。

また、製陶遺跡群「南加賀窯跡群」としての認識は、6世紀初頭から10世紀前半代までの古代土器生産遺跡群と12世紀末から14世紀までの中世陶器生産遺跡群の総称である。古代から中世へは200年間の断絶があり、全く別の製陶遺跡として存在しているため、古代土器生産遺跡群と中世陶器生産遺跡群とに区別されているのである。よって、本書で使用する「南加賀窯跡群」は、古代土器生産遺跡群を示す。

なお、南加賀窯跡群の概要は第3章において述べることとする。



第2図 周辺の遺跡



第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名称	種別	時代
	ニツ梨豆岡向山古窯跡群	窯跡	古墳～平安
1	額見神社前A遺跡	散布地	縄文
2	額見神社前B遺跡	散布地	縄文
3	額見町遺跡	集落跡	古代～中世
4	臼のほぞ古墳	古墳	古墳
5	串町遺跡	散布地	縄文・古代
6	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世
7	左門殿古墳	古墳	古墳
8	茶臼山古墳	古墳	古墳
9	茶臼山祭祀遺跡	祭祀跡	奈良
10	茶臼山遺跡	散布地	弥生・古代
11	月津オカ遺跡	散布地	古代～中世
12	興宗寺古墳	古墳	古墳
13	月津A遺跡	集落跡	奈良
14	月津新遺跡	散布地	縄文
15	念仏林遺跡	集落跡	縄文
16	念仏林南遺跡	集落跡	縄文～古墳
17	念仏塚古墳	古墳	古墳
18	念仏林古墳	古墳	古墳
19	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳
20	養輪塚古墳	古墳	古墳
21	石山古墳	古墳	古墳
22	島遺跡	散布地	古墳～奈良
23	島B遺跡	散布地	奈良・平安
24	島C遺跡	古墳?	古墳
25	矢田A遺跡	散布地	縄文
26	矢田B遺跡	散布地	古墳
27	矢田借屋古墳群	古墳	古墳
28	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代
29	百人塚古墳	古墳	古墳
30	矢田野古墳群	古墳	古墳
31	矢田新遺跡	集落跡	古代～中世
32	丸山古墳	古墳	古墳
33	刀何理遺跡	集落跡	古代～中世
34	狐森塚古墳	古墳	古墳
35	矢田野神社前遺跡	散布地	平安
36	中村古墳	古墳	古墳
37	島経塚	経塚	
38	下栗津横穴群	横穴	
39	下栗津1～2号横穴	横穴	
40	打越城跡	城跡	安土桃山
41	打越A遺跡	散布地	縄文
42	打越B遺跡	散布地	弥生
43	分校高山古墳	古墳	古墳
44	箱宮A遺跡	散布地	中世
45	箱宮B遺跡	散布地	中世
46	箱宮窯跡群	窯跡	奈良～中世
47	分校A遺跡	散布地	古墳
48	分校山王古墳群	古墳	古墳
49	分校カン山古墳群	古墳	古墳
50	分校チャカ山古墳群	古墳	古墳
51	松山城跡	城跡	南北朝
52	松山東古墳群	古墳	古墳
53	分校窯跡群	窯跡	古墳
54	松山窯跡群	窯跡	古墳
55	分校古墳群	古墳	古墳
56	分校ブドウ山古墳	古墳	古墳
57	栄谷A遺跡	散布地	奈良・平安
58	矢田野長尾山遺跡	窯跡・製鉄跡	平安・鎌倉
59	矢田野向山古窯跡	窯跡	奈良
60	ニツ梨釜釜遺跡	窯跡・製鉄跡	奈良
61	ニツ梨釜谷古窯跡群	窯跡	奈良・平安
62	ニツ梨東山古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
63	ニツ梨横川遺跡	窯跡・製鉄跡	奈良
64	ニツ梨丸山古窯跡群	窯跡	古墳
65	ニツ梨峠山古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
66	ニツ梨豆岡山古窯跡	窯跡	古墳
67	ニツ梨殿様池古窯跡	窯跡	古墳・平安
68	ニツ梨サンマイダニヤマ古窯跡群	窯跡	平安
69	ニツ梨一貫山古窯跡群	窯跡・製鉄跡	奈良・平安
70	林超勝寺跡	寺院跡	中世
71	林遺跡	窯跡・製鉄跡	古墳～平安
72	戸津古窯跡群	窯跡	古墳～中世
73	戸津六字ヶ丘古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
74	戸津シンプザワ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
75	戸津オオタニ遺跡	窯跡・製鉄跡	奈良
76	戸津ワクダニ遺跡	製鉄跡	平安～室町

番号	遺跡名称	種別	時代
77	戸津2号窯	窯跡	平安
78	戸津ショウガタニ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
79	ニツ梨グミノキバラ古窯跡群	窯跡	奈良～平安
80	上荒屋キダシ古窯跡群	窯跡	奈良
81	上荒屋サンマイダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
82	上荒屋ジャモンダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	古墳・平安
83	上荒屋トリダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安・鎌倉
84	上荒屋オジヤマ遺跡	窯跡・製鉄跡	鎌倉
85	那谷大久保谷1`2号製鉄跡	製鉄跡	
86	那谷小天王谷1`3号製鉄跡	製鉄跡	
87	那谷小天王谷古窯跡群	窯跡	鎌倉
88	那谷大天王谷古窯跡群	窯跡	鎌倉
89	那谷カミヤ古窯跡群	窯跡	鎌倉
90	ニツ梨奥谷遺跡	製鉄跡	
91	ニツ梨奥谷古窯跡群	窯跡	平安末期
92	那谷カナクソダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	鎌倉
93	ニツ梨カセイデ古窯跡群	窯跡	
94	矢田野1～2号横穴	横穴墓	
95	那谷1～6号横穴	横穴墓	
96	那谷中山谷遺跡	製鉄跡	
97	那谷梅ヶ谷遺跡	製鉄跡	
98	上荒屋ユルイデン遺跡	製鉄跡	
99	上荒屋那谷口遺跡	製鉄跡	
100	上荒屋ホウジョウヤマ遺跡	窯跡・製鉄跡・寺院・墳墓	平安・中世
101	馬場ニカヤマ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
102	上荒屋ハカタンニ遺跡	窯跡	鎌倉
103	那谷金比羅山古窯跡群	窯跡	古墳末期
104	那谷金比羅山古墳	古墳	古墳末期
105	那谷桃の木山古窯跡	窯跡	奈良
106	那谷オオクボ古窯跡	窯跡	鎌倉
107	那谷遺跡	散布地	鎌倉
108	那谷B遺跡	集落跡	平安
109	那谷城跡	城跡	室町
110	那谷寺遺跡	寺院	室町
111	那谷ゴザダニ遺跡	製鉄跡	
112	那谷ジケダニ遺跡	製鉄跡	
113	那谷エモンジャ遺跡	窯跡・製鉄跡	鎌倉
114	那谷コモクソ遺跡	製鉄跡	
115	池田城跡	城跡	
116	木場古墳	古墳	古墳
117	木場古墳群	古墳	古墳
118	木場温泉遺跡	散布地	縄文
119	木場A遺跡	製鉄跡	奈良
120	木場B遺跡	散布地	平安・中世
121	木場C遺跡	散布地	弥生
122	木場遺跡(A地区)	製鉄跡	奈良・平安
123	木場遺跡(B地区)	製鉄跡	平安
124	木場遺跡(C地区)	製鉄跡	
125	木場遺跡(D地区)	製鉄跡・横穴	
126	木場遺跡(E地区)	製鉄跡	
127	木場遺跡(F地区)	製鉄跡	
128	木場遺跡(G地区)	製鉄跡	
129	長谷醬油屋の山遺跡	製鉄跡	
130	大曲遺跡	製鉄跡	
131	大谷山貝塚	貝塚	縄文
132	津波倉ホツジ遺跡	地下式坑	室町末期
133	津波倉ハクマイダニ遺跡	製鉄跡	
134	林八幡神社経塚	経塚	鎌倉
135	井口遺跡	散布地	奈良・平安
136	小山田オクサダニ遺跡	製鉄跡	
137	小山田スギトギ遺跡	製鉄跡	
138	小山田コガダニ遺跡	製鉄跡	
139	戸津1～2号製鉄跡	製鉄跡	
140	戸津八幡神社前遺跡	散布地	奈良～中世
141	戸津本蓮寺跡	寺院跡	室町
142	湯上エノカミダニ古窯跡群	窯跡・製鉄跡	鎌倉
143	馬場タニヤマ遺跡	製鉄跡	
144	井口エンドウ遺跡	製鉄跡	
145	井口神社遺跡	製鉄跡	
146	西原ムカイヤマカナクソ遺跡	製鉄跡	
147	西原フルヤシキ遺跡	製鉄跡	
148	牧口中世墓	墳墓	鎌倉～室町
149	牧口キドラ遺跡	製鉄跡	
150	白山田ドヤマ遺跡	製鉄跡	
151	西荒谷カマダニ古窯跡群	窯跡	室町
152	波佐谷城跡	城跡	室町

第3節 遺跡の環境

周辺には窯跡群、製鉄遺跡群の他、多くの窯跡群が分布、確認されている。特に木場潟、今江潟、柴山潟に囲まれた三湖台地・月津台地には、南加賀窯跡群と深い関わりをもつものもあることが近年判明している。

これらの台地上に人が住まうようになるのは旧石器～縄文時代草創期に遡るが、明確な集落がみられるのは縄文前期である。この期以降、連綿と人々の生活が続けられた事が台地上に分布する多数の集落・古墳・散布地等により確認されている。以下、台地の遺跡動向を概観してゆく。

集落として展開され始めた時期は、三湖が入り江の状態だったと考えられる縄文前期で、大谷山貝塚等が挙げられる。縄文中期には、念仏林遺跡、念仏林南遺跡、茶臼山A遺跡等、多くの集落が台地上に成立する。縄文後・晩期になると、遺跡分布の中心は丘陵上へ移動し台地上では希薄になる。弥生時代末～古墳時代初頭に再び集落が営まれるようになり、古墳時代中期・後期には周辺でも遺跡数が増加する。矢田野遺跡・矢田B遺跡・刀何理遺跡等が群集。古墳時代後期には「三湖台古墳群」と呼ばれている古墳群が展開する。小規模円墳を主体とする、粘土室主体部、須恵質埴輪を伴った矢田借屋古墳群、須恵質埴輪の形象・円筒埴輪を出土する矢田野エジリ古墳、月津台地最大の全長52mに及ぶ前方後円墳である白のほぞ古墳、台地最北端に位置する御幸塚古墳等が含まれる。また、木場潟の対岸の丘陵にも木場古墳群が存在する。古墳群出土の須恵器では、矢田野エジリ古墳・御幸塚古墳・矢田借屋古墳群出土埴輪及び須恵器の胎土と二ツ梨群産の胎土の分析により、地元で生産された土器と大阪陶邑からの搬入品とが古墳に供給された事がわかっている。^{※注}

飛鳥・奈良時代、月津台地は行政区割でいえば越前国江沼郡に属し、薬師遺跡・島遺跡・矢田新遺跡・矢田野神社前遺跡・額見町遺跡等の集落が営まれた。額見町遺跡は中世までの複合遺跡であるが、オンドル状遺構を持つ堅穴住居と共に多数の土師器焼成坑・製鉄関連遺物や律令関連遺物が出土しており、朝鮮半島から渡来人が製法を伝播し、それらが脈々と受け継がれていった事を示唆すると共に、その地域の中核集落として別格であった事がわかっている。島遺跡では8世紀後半から9世紀前半の南加賀窯跡群産の須恵器や土師器が多数出土している。

平安時代、全国で最も遅い弘仁14年(823)に加賀国が立国されると古府町周辺の集落が活気づくが、引き続き遺跡額見町遺跡・刀何理遺跡・矢田新遺跡等の集落での活動が続けられており、散布地として島B遺跡・矢田野神社前遺跡等が知られている。

周辺の遺跡と南加賀窯跡群の消長とを併せて考察することにより、両者の関連性が一層はっきりと浮かび上がる事だろう。なお、各遺跡の位置・種別・時代については遺跡位置図と「周辺の遺跡一覧表」と地図をされたい。

※注 「矢田野エジリ古墳発掘調査報告書」の中で埴輪胎土の比較時に使用された名称を引用している。これは、この辞典で、埴輪併焼窯として二ツ梨殿様池窯が県内唯一として知られていたことにより、須恵質埴輪の胎土を比較する際に、殿様池窯出土のものを二ツ梨群産と特定していることによる。

引用参考文献

- (社)石川県埋蔵文化財保存協会 1993「小松市林遺跡 一般国道8号線小松バイパス改築工事に係る発掘調査報告書」
小松市教育委員会、信開産業株式会社 1992「矢田野エジリ古墳発掘調査報告書」
小松市教育委員会 1992「戸津古窯跡群Ⅱ 昭和50・60年度戸津古窯跡群発掘調査報告書」
小松市教育委員会 1993「戸津古窯跡群Ⅲ 昭和57・61年度戸津六字ヶ丘古窯跡発掘調査報告書」
小松市教育委員会 1993「二ツ梨豆岡向山古窯跡 昭和58年度果樹園平地化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
小松市教育委員会 1998「島遺跡 昭和58年度市道島～宮前線道路改良工事及び平成7年度下水道汚水管渠埋込工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
小松市教育委員会 1998～2001「額見町遺跡 串・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書」(1～4)
小松市教育委員会 1999「林タカヤマ窯跡-小松ドーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」
小松市教育委員会、志乃丘商事株式会社 2000「今江五丁目遺跡-宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」
小松市教育委員会 2002「二ツ梨一貫山窯跡-日本自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
小松市教育委員会 1998「こまつ遺跡ガイドブック」
西田由美子 2003「小松市二ツ梨豆岡山窯跡」【第9回須恵器窯跡構造検討会(北陸例会)資料】 窯跡研究会
望月精司 2003「9・10世紀における北陸の須恵器窯構造」【第9回須恵器窯跡構造検討会(北陸例会)資料】 窯跡研究会

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至るまでの経緯

1. 昭和58年のA地区灰原調査

昭和57年、小松市二ツ梨町在住の小林清正氏は、氏の所有するぶどう園の平地化構造改善事業を計画した。計画地は、小松市二ツ梨町96字1番1号に所在する面積3,101㎡の急傾斜地であった。この地は、以前より須恵器窯跡の確認されている南加賀窯跡群に含まれる区域にあたることから、小松市教育委員会はその計画について、氏に発掘調査の必要性を指導、両者が協議を重ねた結果、昭和58年度の文化庁国庫補助金を受け小松市教育委員会が発掘調査を実施することを取り決めた。昭和58年4月、昭和58年度国庫補助事業の内定通知を受け、同年5月国庫補助事業申請書を提出、同年6月24日より着手、トレンチ調査により、調査区域には窯体は存在しないものと確信、灰原のみ分布する状況であることを確認した。そして、調査区域として灰原の分布する範囲約300㎡を設定し、同年7月9日から調査を実施した。同年9月26日に現地調査を完了した。現地調査後は、遺物の洗浄・注記・接合・実測等の作業を行い、平成5年3月、報告書を刊行した。

調査の詳細については『二ツ梨豆岡向山古窯跡 昭和58年度果樹園平地化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（小松市教育委員会、平成5年3月刊行）を参照されたいが、概要は以下のとおりである。

調査によって検出できた遺構は、須恵器窯跡の灰原のみであった。ぶどう棚の構築によって、階段状に4回にわたって削り取られていたため、灰原の遺存状態は悪く、層位の連続性を捉えるのが困難であった。しかしながら、灰層として3箇所を確認でき、斜面に向かって左から順に、1～3号窯跡灰原とした。灰原の重複をみると、2号窯跡灰原→1号窯跡灰原→3号窯跡灰原の新旧関係を捉えることができた。また、灰原の分布状態から、1～3号窯跡の3基の窯跡が丘陵斜面に並列して存在することが推定できた。

出土遺物はすべて、当窯跡において生産又は使用された須恵器窯跡関連のもので、遺物箱（64cm×41cm×14cm）で67箱であった。内訳は、須恵器55箱、瓦5箱、陶硯・陶鉢1/2箱、窯道具7箱で、各灰原別出土量は、1号窯跡灰原19箱、2号窯跡灰原7箱、3号窯跡灰原41箱、帰属不明の9世紀代の遺物1/2箱であった。

2号窯跡灰原から出土した須恵器の器種別構成の識別個体数は、食膳具（坏B・坏A・高坏）259、調理具（すり鉢・鉢）11、煮炊具（甑）3、貯蔵具（短頸壺・長頸瓶・横瓶・小甕・中甕・大甕）42となっており、構成割合をみると、食膳具75%、調理具5%、煮炊具1%、貯蔵具19%となる。遺物の特徴から、2号窯跡は、8世紀第1四半期

1号窯跡灰原出土須恵器は、口縁部計測法（/36）で食膳具（坏A・碗A・碗B・皿B・皿D）1,306、調理具（すり鉢・平鉢・広口鉢）259、煮炊具（長胴甕・埴・甑）111、貯蔵具（小瓶・長頸瓶・双耳瓶・平底短頸壺・甕）1,064で、構成割合は、食膳具48%、調理具9%、煮炊具4%、貯蔵具39%である。特殊器種として陶鉢と陶硯等があった。

3号窯跡灰原出土須恵器は、口縁部計測法（/36）で食膳具（碗A・碗B・皿C・皿D）2,419、調理具（平鉢・広口鉢）395、煮炊具（長胴甕・埴）175、貯蔵具（小瓶・長頸瓶・双耳瓶・短頸瓶・平底短頸壺・甕）1,891で、構成割合は、順に49%、8%、4%、39%であった。特殊器種では、コップ形、徳利型瓶、浄瓶、胴部穿孔の壺、陶硯等があった。これら遺物の特徴の検証により、1号窯跡と3号窯は連続した操業を行っていたものと判断でき、厳密に分けることはできないものの、1号窯は10世紀の第1四半期から第2四半期に、3号窯は10世紀の第2四半期から第4四半期に操業したものと考えられる。さらに、3号窯跡灰原からは瓦も出土している。10世紀のものに限られ、その量は遺物箱5箱程度、3号窯跡出土須恵器の1/6程度であるが、国府・国分寺関連施設への供給を示唆するものと言えよう。

以上がA地区灰原調査の概要である。

第2節 試掘調査の経緯と概要

平成12年1月18日、小松市二ツ梨町在住の小林英明氏より、ぶどう園として使用している二ツ梨町96-1他について、急傾斜地であるため果樹園平地化を計画しているが、埋蔵文化財が確認されているのであれば調査を行って欲しい旨の協議及び発掘調査依頼が小松市教育委員会に提出された。周知の埋蔵文化財包蔵地である「二ツ梨豆岡向山窯跡」に該当することから、同年1月24日、氏に対して、試掘調査を行い、現状保存か発掘調査による記録保存を行う旨の回答を行った。同年2月4日、氏より文化庁に「埋蔵文化財発掘の届出」（文化財保護法第57条の2第1項の規定による）が提出された。2月10日、市教育委員会は石川県教育委員会に対し、平成11年度末に試掘調査を行い、その結果に基づいて調査面積及び調査期間を設定する予定であり、本調査は平成13年度以降になるものと予想される旨の「埋蔵文化財発掘届出の提出について」進達を行った。同年2月21日、石川県教育委員会より、事前の試掘調査により埋蔵文化財の有無及びその範囲を確認するよう、また、埋蔵文化財が確認された場合は保存又は文化庁の指導の下での記録保存が必要である、との回答が市を通じてなされ、市に対しては事前の試掘調査について遺漏なきよう通知があった。

平成12年11月18日、氏より市に詳細分布調査の実施依頼があったため、同年12月4日から12月20日まで、小松市二ツ梨町96-1番3・4、上荒屋町ソ2番1・3・4所在の7,794㎡について詳細分布調査を実施することとした。詳細分布調査は、平成12年度国庫補助事業を用い、対象地をA～F地区に分け、人力でのトレンチ調査によって行った。地区割り及びトレンチ位置図は第4図のとおりである。

調査対象地は雑木林及び荒地であったため、まず伐採・畝刈り及び片付け作業を行った。その後A地区斜面裾部より任意に幅約1mのトレンチ及び土層断面を設定、遺構確認面まで掘削及び精査を斜面頂上部に向かって行った。その際、平面図及び断面略図を作成し、遺構確認時には写真撮影を行った。10・11号窯では、遺構範囲を確認するため入念にトレンチを設けた。この期間に詳細分布調査を行った区域はA～D地区であり、E地区では区域全体に調査が及ばず、13年度に再度調査を行うこととした。F地区についても同様である。調査区は、過去に果樹園が営まれていたこともあり、全域にわたって階段状の平坦面が設けられていた上、石垣も設置されており、これらによる破壊が認められた。各地区における調査結果は、以下のとおりである。

A地区では、9本のトレンチを設けたが窯体の存在は既に周知されていたため、トレンチ南側で窯崩壊に伴う陥没埋土を確認し、掘削はなるべく避けるため再確認に留まった。B地区では、北側の斜面裾部に設けたA断面で8世紀、10世紀の遺物と灰原を確認、多量の須恵器を検出した。1トレンチを10～15cm掘削時に窯前庭部と思われる炭多量混入の黒色覆土を検出、2トレンチでも窯体と思われる埋土及び赤色硬化する窯壁を検出した。トレンチ内からは多くの土師器も検出され、周辺に土師器焼成坑の存在が推測された。B地区北西側にあたる44トレンチ内では、炭窯跡と思われる炭混入層を確認した。C地区においては、13トレンチを30cm掘削した時点で、甕等の多量の遺物を伴う灰原を検出し、14・15トレンチでも窯体と思われる遺構埋土を検出した。出土遺物から窯跡は8世紀のものと判断された。また、遺構確認面の深さから保存状態は良好と思われた。14トレンチからは土師器も検出され、周辺に土師器焼成坑が存在する可能性が示唆された。D地区では、まず斜面裾部E断面において多量の6世紀土器を含む灰原層を検出。F・G断面においても1.5m以上に及ぶ厚い灰原層を確認し、多量の須恵器と共に須恵質円筒埴輪断片を全体量のうち1/10程度検出した。これにより埴輪併焼窯と判断し、斜面頂上へ向かい細かくトレンチを設け、灰原範囲を確認した。J断面では、非常に多く炭を含む黒色土層を検出した。これが窯の前庭部と判断できれば2基の窯が存在すると考えられた。また、L断面では、窯体陥没痕と予測できる赤褐色土ベースの覆土を検出した。

平成12年度の試掘調査の結果として、A地区から周知の窯跡3基、B地区から2基、C地区から1基、D地区から2基の窯跡と灰原の規模を確認できた。また炭窯跡や土師器焼成坑の存在も推測できた。新たに発見された窯跡は、炭窯跡を含め6号窯から11号窯とした。埴輪併焼窯跡はそれまで、石川県内では二ツ梨殿様池窯跡の1例のみ確認されていたため、2例目の発見となった。部分的な破壊は予想されたが、灰原層の厚さや遺物の多さ等から、残存状況は良いと考えられた。

詳細分布調査の結果について小松市教育委員会は、平成13年1月17日に書面で氏に報告した。対象地区の本調査と未調査区であるE・F地区の詳細分布調査とを、平成13年度より行う予定である旨も伝えた。

第3節 本調査の経緯と概要

前節で述べたとおり、平成12年1月、小林英明氏より小松市教育委員会に対し、果樹園平地化事業計画に伴う埋蔵文化財の取扱いの協議及び発掘調査依頼が提出され、協議を重ねた結果、詳細分布調査を平成12年12月に実施した。それと並行して、本調査の費用について文化庁の文化財関係国庫補助（個人農地本調査）を受けるための手続きを行った。依頼された区域の面積は8,000㎡近くと広大であり、単年度で全域にわたる発掘調査は困難なため、複数年度にわたる継続事業として実施する方向となった。

平成12年7月7日、小松市教育委員会は石川県教育長に対し「平成13年度文化財関係国庫補助事業計画について」を提出、二ツ梨豆岡向山窯跡の発掘調査の計画を報告した。平成13年4月4日、小松市教育委員会は石川県教育委員会より内定通知を受け、4月20日、文化庁長官宛に「平成13年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」を提出し、6月1日、交付決定の通知を受けた。9月10日、より小松市教育委員会に対し、二ツ梨町96-1番・4番地内の約1,400㎡について発掘調査依頼がなされ、市教育委員会は、9月13日、国庫補助事業により発掘調査を10月3日から12月31日の予定で行う旨、回答した。10月1日、「果樹園平地化事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を氏と市教育長との間で交わし、10月10日に氏より「発掘調査承諾書」が提出された。同日、石川県教育委員会に対し「発掘調査報告」を行い、A地区・B地区の本調査着手が決定した。平成13年度における事業実施期間は、平成13年10月4日から平成14年3月29日まで、現地調査は平成13年10月11日から平成14年3月26日までであった。

平成14年度の事業実施の経過は、平成13年度の手順とほぼ同じである。平成13年7月16日、石川県教育長宛に「平成14年度文化財関係国庫補助事業計画」を提出（平成13年12月20日、内容を一部訂正し、再提出）、平成14年4月5日、県より内定通知を受けた。4月16日、文化庁長官宛に「平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」を提出した。5月17日、氏より二ツ梨町96部1-4他700㎡について、発掘調査の実施依頼が行われた。5月21日、国庫補助事業により6月12日より平成15年3月31日までの予定で実施する旨の回答を行うとともに、協議書を交わした。5月30日、補助金の交付決定がなされ、5月31日には氏より発掘調査承諾書が提出された。本調査実施が決定した。事業期間は、平成14年5月20日から平成15年3月31日まで、現地調査は平成14年6月12日から平成15年2月26日までであった。

平成15年度についても、ほぼ同じ手続きで本調査を実施した。平成14年7月22日、「平成15年度文化財関係国庫補助事業計画について」を県に提出（12月17日に内容を一部変更して再提出）、平成15年4月7日に内定通知を受けた。平成15年4月15日、文化庁に「平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」を提出した。4月17日、二ツ梨町96部1-4の一部である100㎡について、小林英明氏より市に対し埋蔵文化財発掘調査の実施依頼がなされ、4月22日、市は発掘調査を実施する旨回答し、4月25日には氏より発掘調査承諾書が提出されたので、同日、埋蔵文化財の取扱いに関する協定書を交わした。続いて5月2日、発掘調査報告書を県に提出した。国庫補助金の交付決定通知は5月30日に受けた。平成15年度における事業実施期間は、平成15年4月17日より平成16年3月31日であり、現地調査は5月9日より9月18日までであった。これをもって全域の調査を完了した。また、各年度における現地調査終了後は、出土遺物の整理作業を行った。

各年度毎の調査概要は、以下のとおりである。本調査は不要と判明した区域があり、調査面積の合計は当初依頼された面積約8,000㎡とは一致していない。

さらに、平成16年度には遺物の接合、復元、実測、遺構・遺物のトレース作業等整理作業を継続、報告書刊行作業を行い、本報告書刊行に至った。本報告書も国庫補助金を受けている。

1. 平成13年度の調査

調査期間：平成13年10月04日～平成14年03月29日

調査面積：本調査 B地区 1,100㎡

詳細分布調査 E地区 約1,400㎡ F地区 約650㎡

本調査 平成13年10月11日～平成14年03月26日（B地区）

平成13年10月11日～平成13年10月31日 表土除去

平成13年10月11日～平成13年03月26日 遺構の確認・掘削、各遺構の写真撮影

	平成13年10月30日～平成13年10月31日	グリッド杭設置
	平成13年11月20日	基準杭設置
	平成13年11月21日～平成14年03月26日	土層断面図・平面図等作成
	平成14年03月26日	平成13年度の現地作業終了
詳細分布調査	平成14年03月08日～平成14年3月14日 (E・F地区)	
	平成14年03月08日～平成14年03月09日	E地区試掘調査
	平成14年03月09日～平成14年03月14日	F地区試掘調査
調査事務	平成13年10月04日～平成14年03月29日	
整理作業	平成14年02月18日～平成14年02月28日	遺物の洗浄作業
整理事務	平成14年02月04日～平成14年03月29日	

〈調査方法〉

本調査

人力による伐採木運搬、表土除去作業の後、窯体位置と灰原区域の確認作業を行った。窯体主軸に沿って5m×5mのグリッドを、灰原区域は2.5m×2.5mのグリッドを設定した。人力により灰原区域と窯前庭部の掘削を行い、その後土坑やピット等遺構の掘削を行った。掘削にはセクションベルトを設け土層確認を行うとともに、土層断面図、写真撮影の記録を取った。灰原・窯前庭部掘削完了後に全景写真を撮り、その後平面図を作成した。

詳細分布調査

調査区に任意にトレンチを設け地山面が確認できるまで人力によって掘り下げ、調査結果を撮影し、トレンチ設置位置を記録した。

〈調査結果〉

本調査 (B地区の発掘調査) では、10世紀前半須恵器窯跡の焚口、前庭部、灰原1箇所及び同時期の土坑3基、8世紀前半の土器集中1箇所、製鉄排滓散布地1箇所の遺構を検出した。遺物は、須恵器 (食膳具、貯蔵具、陶硯、専用焼台)、瓦、土師器、鉄滓等を出土。遺物箱150箱となった。

詳細分布調査 (E地区・F地区) では、遺構や灰原の確認はなかった。少量の須恵器は出土しているが、いずれも耕作土中であり、周辺の須恵器窯灰原からの流入と考えられた。

2. 平成14年度の調査

調査期間：平成14年05月20日～平成15年03月31日

調査面積：本調査 A地区 300m² B地区 100m² C地区 300m²

	平成14年06月12日～平成15年02月26日	
	(A地区 平成14年06月12日～平成14年12月25日)	
	(B地区 平成14年06月12日～平成14年09月12日)	
	(C地区 平成14年08月27日～平成15年02月26日)	
	平成14年06月12日～平成14年06月22日	A地区表土除去
	平成14年06月13日	A地区グリッド杭設置
	平成14年06月13日～平成14年12月24日	遺構の確認・掘削、各遺構の写真撮影
	平成14年06月24日～平成14年02月26日	土層断面図・平面図等作成
	平成14年08月27日～平成14年09月19日	C地区表土除去
	平成14年10月03日～平成14年10月22日	C地区表土除去
	平成14年10月22日～平成14年10月25日	C地区グリッド杭設置
	平成14年11月20日	基準杭設置
	平成14年12月20日	空中写真撮影
	平成15年02月26日	平成14年度の現地作業終了
調査事務	平成14年05月20日～平成15年03月31日	
整理作業	平成15年03月03日～平成15年03月12日	遺物の洗浄作業
整理事務	平成15年02月27日～平成15年03月13日	

〈調査方法〉

人力による伐採木運搬、表土除去作業の後、窯体位置と灰原区域の確認作業を行った。窯体主軸に沿って5 m×5 mのグリッドを設定し、その後、人力により窯前庭部、窯体の掘削を行い、同時に土坑やピット等遺構の掘削を行った。これら掘削にセクションベルトを設け土層確認を行うとともに、土層断面図、写真撮影の記録を行った。場合により遺物出土状況図並びに写真撮影を行った。窯体・窯前庭掘削完了後に全景写真を撮り、平面図・エレベーション図・側面図を作成した。

〈調査結果〉

8世紀前半須恵器窯跡3基（地下式、直立煙道緩傾斜窯）、10世紀前半須恵器窯跡3基（窯体内部急傾斜・段状成形の瓦陶兼業窯）、土坑13基、製炭土坑1基、ピットを検出した。遺物は、須恵器（食膳具、貯蔵具、陶硯、土錘、土師器（食膳具、煮炊具）、瓦（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦）、窯道具の貯蔵具専門焼台が出土。遺物箱100箱となった。

3. 平成15年度の調査

調査期間：平成15年04月17日～平成16年03月31日

調査面積：本調査 B'地区 100m²

本調査	平成15年05月09日～平成15年09月18日	
	平成15年05月09日～平成15年05月26日	表土除去
	平成15年05月27日	グリッド杭設置
	平成15年05月19日～平成15年09月12日	遺構の確認・掘削、各遺構の写真撮影
	平成15年05月29日～平成15年09月18日	土層断面図・平面図等作成
	平成15年07月16日	空中写真撮影
	平成15年09月18日	平成15年度の現地作業終了
調査事務	平成15年04月17日～平成15年03月31日	
整理作業	平成15年10月01日～平成16年03月30日	遺物の洗浄、注記、分類、接合、実測
整理事務	平成15年09月29日～平成16年03月31日	

〈調査方法〉

人力による伐採木運搬、表土除去作業の後、窯体位置の確認作業を行った。窯体主軸に沿って5 m×5 mのグリッドを設定し、人力により窯体の掘削を行った。窯体の掘削の際にはセクションベルトを設けて土層確認を行うとともに、1/20縮尺の土層断面図の作成、土層断面の写真撮影を行った。床面出土遺物については、1/10縮尺の遺物出土状況図の作成、出土状況の写真撮影を行った。窯体掘削完了後に全景写真を撮影し、1/20縮尺の平面図・エレベーション図・側面図を作成した。

〈調査結果〉

8世紀前半の須恵器窯跡2基（地下式、直立煙道緩傾斜型）の遺構を検出した。須恵器（食膳具、貯蔵具）、鴟尾などの遺物が出土し、遺物箱約30箱となった。

※平成15年度の整理作業

発掘調査報告書を平成16年度に刊行する予定であったため、現地調査終了後に出土品性理作業を先行して実施。遺物の洗浄、注記、分類、接合、実測作業を実施した。

第3章 南加賀窯跡群と二ツ梨豆岡向山窯跡の概要

第1節 南加賀窯跡群の分布と戸津オオダニ地区

1. 立地と概要

南加賀窯跡群は、古代江沼郡に所在する加賀地域最大の須恵器窯跡群である。小松市林町、粟津町、戸津町、上荒屋町、南陽町、湯上町、馬場町、二ツ梨町、那谷町、蓮代寺町、及び加賀市箱宮町、分校町、栄谷町、松山東西約4.5km、南北約1～3kmの範囲の古代土器生産遺跡群で、立地する地形は、白山前山丘陵のうち、江沼盆地の東端をなし柴山潟に注ぐ動橋川と、その支流の那谷川及び木場潟に祖側馬場川の解析により形成された、標高20～40mの末端部分にあたる。

須恵器生産は、6世紀初頭から10世紀中頃まで営まれ、出現期の6世紀初頭では埴輪の併焼、7世紀末と10世紀前半に瓦の併焼を確認、8世紀初頭から10世紀後半まで土師器併焼及び土師器焼成坑も多く行われる。須恵器供給は、古代江沼・能美群で5～8割のシェアをもち、手取川を越え石川郡、加賀郡へも定量の供給がなされている。また、同じ立地内で7世紀には砂鉄精錬が開始、11世紀までかなり大規模に行われ、地域の中核をなす古代の製陶・製鉄のコンビナートとして機能、須恵器生産は10世紀中頃までにかけて終焉し、土師器生産も10世紀後半代は姿を見せなくなる。以上が南加賀窯跡群の古代土器生産遺跡群の概要である。そして、12世紀末から14世紀には、中世陶器生産が営まれる。古代土器生産と中世陶器生産は直接的に繋がるものではなく、200年の製陶活動断絶を挟み、全く別の製陶遺跡として存在するものとして認識されており、後者を中世陶器生産遺跡群として区別している。二ツ梨豆岡向山窯跡は、この南加賀窯跡群の古代土器生産遺跡に含まれる1つの支群である。

2. 南加賀窯跡群の分布

分布域は、河川流域や主谷を単位としている。主に、動橋川流域地区、馬場川流域地区、オオダニ地区の3つに分けられる。馬場川流域地区と動橋川流域地区は、操業期間に偏りがあり、全体の3割を占めるのみである。これに対しオオダニ地区は開窯から終焉まで操業が確認される地区である。オオダニ地区にはさらに南北に走る二ツ梨オオダニと東西に走る戸津オオダニの2大オオダニがあり、この谷を基点に分布する二ツ梨オオダニ地区と戸津オオダニ地区に分かれる。さらに戸津オオダニ地区よりも北側の平野部に面して支谷に分布する区域を戸津・林地区、西側にある支谷に分布する区域を矢田野・箱宮地区としている。この中でも中心となるのは戸津オオダニ地区、二ツ梨オオダニ地区である。この谷から派生あるいは移動する形で営みを確認している地区・支群数は6地区29支群であり、須恵器窯が202基、土師器焼成坑が70基確認されている。

3. 南加賀窯跡群における製陶活動の変遷

須恵器生産の開始6世紀初頭、主に二ツ梨オオダニ地区に分布しており、一部戸津・林地区でも確認される。生産規模は大きくないが、当窯跡群産須恵器が能登や越中まで流通しており、この時期としてはかなり安定した生産を行っていることが特徴と言えよう。須恵器は食器が中心となるが、前半代を中心として埴輪併焼が行われたことから、古墳祭祀・儀礼用具の生産を主たる目的としていたと考えられる。

分布地区	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
戸津・林地区	■	■	■		
戸津オオダニ地区			■	■	■
二ツ梨オオダニ地区		■	■	■	■
矢田野・箱宮地区			■	■	■
馬場川流域地区			■	■	■
動橋川流域地区		■	■	■	■

第2表 南加賀窯跡群の動向

7世紀に入ると、南加賀窯跡群の南端にあたる動橋川流域地区で新たに生産が始まる。それと同時かやや遅れて、窯場は二ツ梨オオダニ地区から戸津・林地区へと移動する。この時期は、窯数や生産規模が拡大するほか、新たな生産単位の導入が行われており、これまでの生産組織の大きな変革期と位置付けることができる。中期以降もそれらの窯場での生産は継続するものの、停滞・収束の方向性をもち、7世紀末～8世紀初頭に両窯場での須恵器生産は停止。一方で、7世紀後葉は寺院建立に伴って瓦生産が行われた。

8世紀初頭、戸津・林地区、動橋川流域地区に加え、二ツ梨オオダニ地区での生産が再開するとともに、戸津オオ

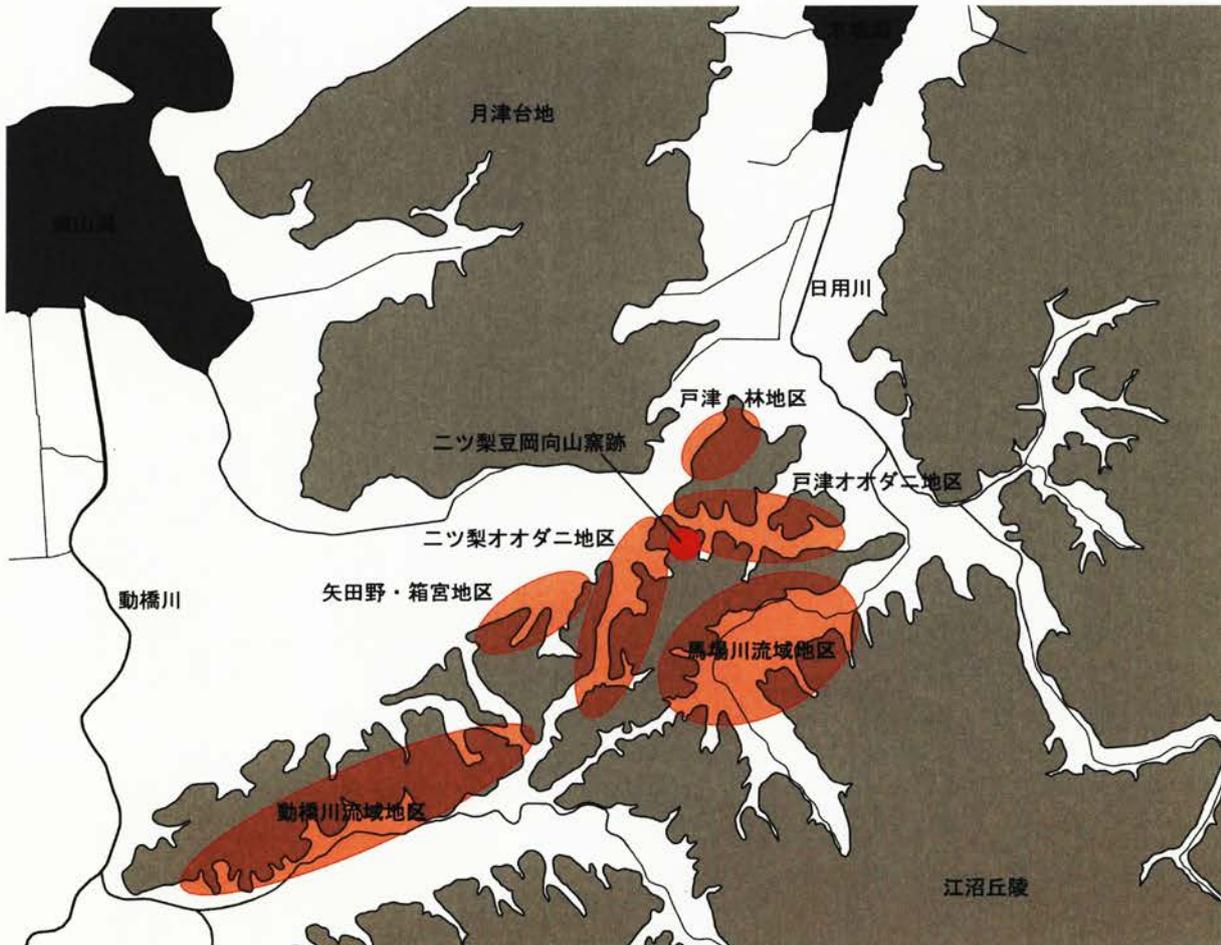
ダニ地区での生産も開始する。前葉以降は、戸津・林地区、動橋川流域地区での生産は停止し、両オオダニ地区が中心となる。また新たに矢田野・箱宮地区でも生産が開始された。土師器生産の導入されるのも当期である。窯跡数・窯場の分布とも広がりを見せており、言うなれば南加賀窯跡群の最盛期にあたる。

8世紀中頃から9世紀初頭にかけて、各地区における支群数は減少し衰退の様相をもちながら、戸津オオダニ地区へ窯場が集約する傾向がみられる。生産形態について変化が見られるのはこの時期である。それまで一つの斜面で単独基あるいは少数基築窯が行われていたのに対し、量産・集中経営が可能な複数基並列築窯が始まったのである。同時に土師器焼成坑の集約化が顕れ、前半代とは大きく変化する。しかし窯場数はこの時期確実に半減しており、以降9世紀前半まで南加賀窯跡群、消費地の須恵器の衰退から見ても、停滞期にあったと言えよう。

9世紀中葉まで、南加賀窯跡群では停滞期にあるが、一定の生産は持続しており、他の窯跡群が拡散する傾向にあるのとは対照的に戸津オオダニ地区に集約してくる。

9世紀後葉になると、生産は戸津オオダニ地区を中心に活発化してゆき、9世紀末から10世紀前半にかけて、拠点的生产が行われる。すなわち、この地区を中心として須恵器窯跡数が増加するとともに、土師器焼成坑の集中築窯が見られる。また馬場川流域では、8世紀中頃の実産が確認されているものの1支群での生産に留まっていたものが、この時期には数基単位で須恵器窯が点在して築かれた。生産品目においても大きな変化が見られる。この頃より陶硯類が量産されるようになり、また平安京山城系の瓦当文様をもつ軒先瓦生産や水煙・九輪セットの生産など、官窯としての性格を帯びるのである。国衙施設・国分寺の移築に伴う国衙権力のテコ入れの結果として、南加賀窯跡群の再興期と呼ぶ事ができる。さらに中央集権が強化する一方で郡衙権力が衰退してゆく時期にあたり、中核窯が国衙経営に集約された結果とも考えられる。

10世紀前半代までの生産活動は活発であったが、中頃には再び戸津オオダニ地区に収束し、急速に生産停止へと向かう。須恵器生産はもとより土師器生産もほぼ収束の状況にあり、遅くとも10世紀後半代には、国府権力の弱体化との深い関連性を示唆するごとく、南加賀窯跡群の古代土器生産は終焉を迎える。



第3図 南加賀窯跡群の地形模式図と分布地区

第2節 ニツ梨豆岡向山窯跡の概要

第1項 2大オオダニとニツ梨豆岡向山支群

ニツ梨豆岡向山は、南加賀窯跡群の2大オオダニである戸津オオダニ（戸津オオダニ地区）とニツ梨オオダニ（ニツ梨オオダニ地区）を分岐する基点となる位置にあたる。戸津オオダニ・ニツ梨オオダニの窯跡分布状況から、幾つもの支群が存在する。ニツ梨豆岡向山に分布する窯跡はニツ梨豆岡向山支群として区分、この周辺に目を向けると、戸津オオダニを挟んだ北側にニツ梨一貫山支群、北東側に、戸津六字ヶ丘支群と戸津支群がある。戸津オオダニ地区に含まれるものである。また、西側の小谷を挟みニツ梨豆岡向山支群、南側の小谷を挟みニツ梨グミノキバラ支群、南西側の谷を挟みニツ梨殿様池支群、以上はニツ梨オオダニ地区に含まれるものである。このように周囲にはひしめくように支群があり、ニツ梨豆岡向山窯跡は、窯跡分布密度の高い区域に存在している。支群がどの地区に含まれるかは、どの谷に面しているかによって区別されているために、ニツ梨豆岡向山は地区として捉えた場合、分断される形となる。今までのところ、西側斜面から南側斜面にあたる区域がニツ梨オオダニ地区として含まれている。

周辺の支群の動向・様相を細かく見てゆくと、戸津オオダニ地区で再び生産が開始され最盛期となる時期、戸津支群、ニツ梨一貫山支群、ニツ梨豆岡向山支群、ニツ梨豆岡向山支群に分布が認められる。この時期、基本的には単独基礎窯であり、同一支群内であっても、ある程度の間隔をおいて須恵器窯が点在する特徴をもつ。ただ、これは南加賀窯跡群全体で言えることであり、この時期の須恵器窯経営の特徴として提示されてきた。8世紀中頃には、ニツ梨一貫山支群で須恵器窯灰原が1カ所確認される以外は、戸津オオダニ地区では分布がなく、後葉を含めても戸津支群とニツ梨一貫山支群だけであるが窯跡は各々5基以上の並列築窯分布で、この2支群への集約されたものと捉えられている。9世紀前葉から中葉にかけても同様で、戸津支群のさらに北側に位置する2支群が加わるのみ、停滞の様相へ向かうものの、戸津オオダニ地区だけは生産が続けられている。9世紀後葉から10世紀前葉にかけての再興期には、戸津オオダニ入り口に集中、ニツ梨一貫山支群、ニツ梨グミノキバラ支群、そしてニツ梨豆岡向山支群も加わっている。

ニツ梨豆岡向山支群は8世紀前半の最盛期、9世紀後葉から10世紀前半の再興期の時期という、南加賀窯跡群の特徴的な様相に裏付けされるように存在する窯跡群と言えるだろう。

第2項 ニツ梨豆岡向山窯跡の調査概要

1. これまでと試掘調査の概要

ニツ梨豆岡向山は、豆岡山の向かい側にあるということで、その名が付けられているという、標高20～43mの、山全体は大小の起伏や小谷を形成しつつ多くの斜面を有し、頂部に平坦地をもつ小高い山である。

窯跡の存在については以前から数基確認されており、昭和58年度の西側斜面の灰原調査実施段階では、南側斜面に10世紀頃の窯跡2基、灰原調査を行った西側斜面で8世紀前半段階の窯跡1基、10世紀前半段階の窯跡2基、合計で5基の窯跡が確認されていた。そして、西側斜面の10世紀前半段階の灰原から須恵器を主体に、軒先瓦を始めとする瓦類が出土することで瓦陶兼業窯として機能する窯であることがわかっていた。

今回の果樹園平地化事業における開発協議書受理後の試掘調査では、南側斜面を除く山全体の窯跡確認調査、灰原分布調査を実施しているわけであるが、前述以外の窯を確認した結果となった。確認されなかった区域を調査対象区外とし、窯跡並びに関連遺構の存在する区域のみ限定し、本調査に向けて地区割り並びに地区名を付けて調査計画をたてている。ここで、この設定した地区名を使用して、以下試掘結果を記述しておく。

試掘調査による埴輪併焼窯の検出

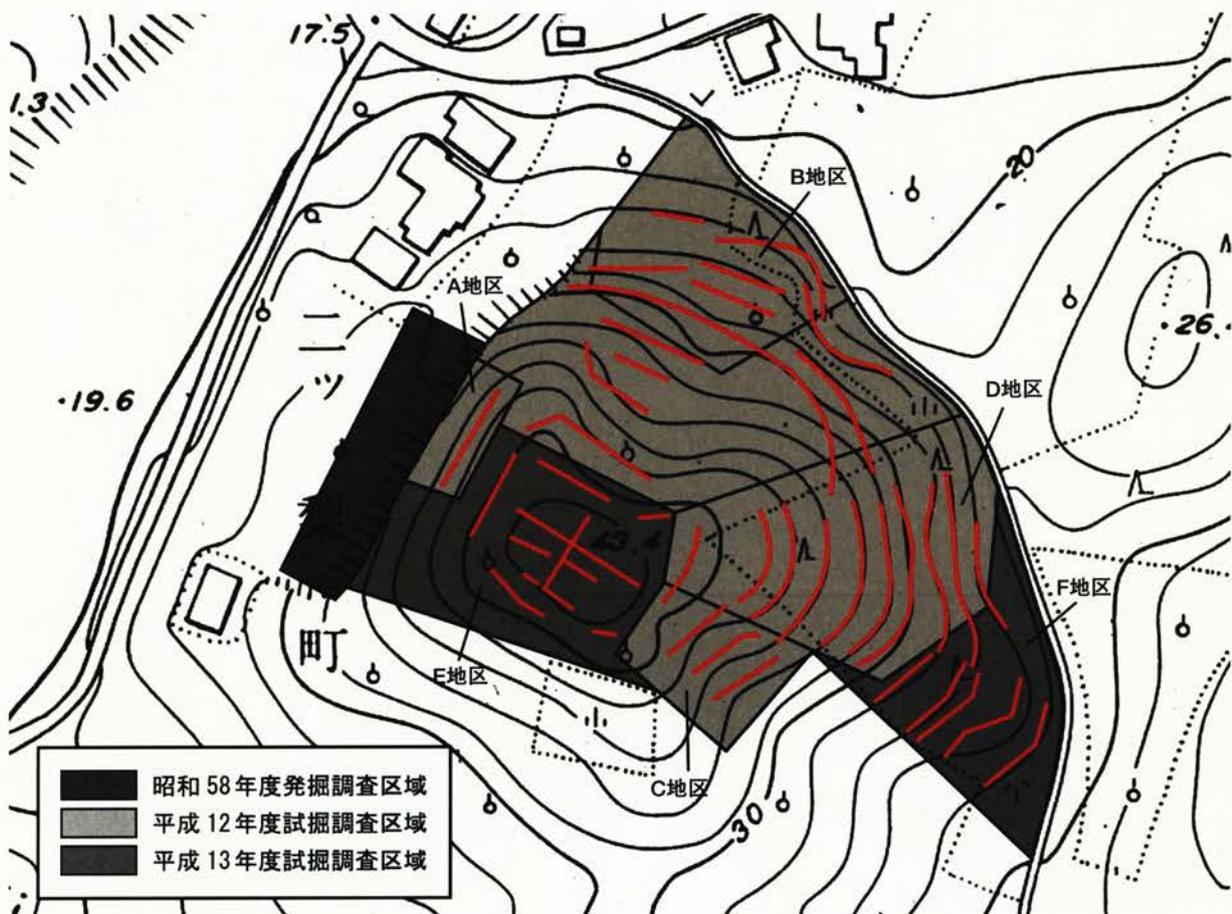
西側斜面をA地区、北側斜面をB地区、本調査中に新たに窯跡を確認した区域をB'地区、東側斜面をD地区、東側斜面からさらに南へ下る区域をE地区、南東側斜面をC地区、山頂部平坦区域をF地区とした。E地区・F地区は工房跡の可能性を考慮したものの、遺構の確認はなく、E地区で遺物箱1ケース程の出土はあったが、F地区からの遺物の出土は稀少であったため、調査対象区外とした。D地区は、地権者の希望で平成14年度に調査対象区外として

取り扱うこととなった区域で、ここで確認された灰原層は厚い部分で1.5mに及び、平面的にも広大な灰原区域を確認している。窯跡は陥没痕で確認している。出土遺物は、須恵器の他、須恵質・土師質埴輪破片を確認している。埴輪併焼窯は、県内ではこれまで二ツ梨殿様池窯で唯一確認されていた。二ツ梨殿様池窯は、南加賀窯跡群大別区域において二ツ梨オオダニ地区に含まれているものである。二ツ梨豆岡向山は、前述したように2大オオダニの基軸であり、山の南西側斜面側半分が二ツ梨オオダニ地区、北東側斜面側半分が戸津オオダニ地区に含まれる。この基準に沿うなら、本確認調査にて戸津オオダニ地区においても埴輪生産を行っていたことが確認されたと言えよう。また、出土する須恵器坏Hは、受け部高の長く立ち上がり直立するタイプ、南加賀窯跡群出現期にあたる6世紀初頭の特徴を持っており、また受け部高が低く内傾する6世紀後半から末期にかけての特徴をもつものもあり、長期にわたり窯操業がなされたものと考えている。

B地区では2時期の遺物、また検出した灰原から瓦の出土が認められ、西側斜面に続き北側斜面でも瓦陶兼業窯が存在していることが確認された。C地区では試掘調査時に1基の窯跡として捉えたが、本調査で同時期の2基の窯の存在が確認されている。

北側斜面に8世紀前半頃と10世紀前半頃の年代の異なる窯跡2基と灰原層、西側斜面に従来より周知されていた3基の窯跡、東側斜面には6世紀代の2基と考えられる窯跡と灰原層、南東側斜面に8世紀前半段階の多量に遺物を含む堆積層と窯体陥没痕を確認した。

これにより山の北側斜面、西側斜面、南側斜面、東側斜面、南東側斜面の、ほぼすべての斜面に総計12基の窯跡が存在していることが判明した。



第4図 二ツ梨豆岡向山地区割り及び試掘坑配置図 (S=1/1,500)

2. 本調査の全体概要

本調査で確認されたそれぞれの斜面では、近代の果樹園造成による切り盛りがなされ、段状に削平を受ける又は果樹園事業に際し、肥料の大投入等の攪乱が至る所に認められる状況であった。検出された窯跡の殆どが窯尻部分に影響を受けていたが、部分的に天井残存、窯内床や焚口燃焼部等はよく保存されており、総じて窯の残存状態は比較的良好であると言える。では地区別に概要を述べる。

A地区（西側斜面）

A地区の西側斜面では、前述しているように灰原部分の調査が以前に行われていることもあり、3基の窯跡の存在が以前から周知されており、本調査で詳細な位置や範囲、規模が確認された区域である。3基の窯跡はいずれも地下掘り抜き式構造を持つ窖窯である。8世紀前半操業の直立煙道緩傾斜型の2号窯、10世紀前半操業の瓦陶兼業窯である1-A号窯、同じく1-B号窯の3基が並列して検出され、2号窯のすぐ右脇に位置する1-A号窯が2号窯の前面施設である前庭部を切る形で構築されている。1-A・1-B号窯の前面施設として焚口前面土坑を検出、1-A号窯は3基の土坑を手前にもち、1-B号窯も1基を有している。これら焚口前面土坑の周囲にピット群を検出。また、後背部施設では、2号窯は持たず、1-A・1-B号窯はそれぞれ有すが、これは土坑として報告している。この他、3基の窯跡を取り囲むように土坑を7基確認、いずれも窯に何らかの形で伴い機能していたと考えられるもので、10世紀前半のものと考えている。この内、最も時期の新しいものとして製炭土坑1基とこれに伴うと考えられる排水溝1条を検出。また、土坑としての落ち込みを持たない遺構として、粘土塊や土器の集中箇所並びに上層に位置する灰原層を検出している。これらは、3基の窯の廃棄後流土堆積層より上位層から検出されたもので、窯に伴わないものである。

以上のように、2時期の窯跡が確認され、特に1-A号窯・1-B号窯は多くの施設の性格と考えられるような遺構を伴っていることがわかった。

遺物においては、2号窯では焼成部から出土する須恵器を中心に、仏器的要素を備える埴や甕の生産、また床面に置台として使用した鴟尾の出土が認められた。1-A号窯・1-B号窯では、やはり須恵器を主体に瓦類、陶硯等の文房具、灰原調査で検出されていない新器種を確認している。

B（B'）地区（北側斜面）

B地区北側斜面では、8世紀前半操業の直立煙道緩傾斜型である8号窯、10世紀前半操業の瓦陶兼業窯である7号窯を検出した。いずれも地下掘り抜き式構造を持つ窖窯である。この内、8号窯は窯の作り替えが行われており、それぞれ別の窯として捉え、8-I号窯、8-II号窯としている。この8号窯は7号窯調査時に焚口を検出できたことにより新たに見つかった窯で、この区域をB'地区としている。第4章遺構ではこの区域をB地区に連続するものとして包括して報告している。これら2基（3基）の窯は並列して検出されており、A地区同様に7号窯が8号窯の前庭部を切る形で構築されている。付属施設として、8号窯は後背部施設を持たず前庭部のみ、7号窯は焚口前面土坑1基を伴い周囲に小ピットを検出している。7号窯に連続して広がる土坑群は硬化面を有し、7号窯の付属施設として機能していたと考えられるもので、これは土坑として報告する。また、北側斜面からは、7号窯の前面土坑のさらに手前部分である灰原中央に盛土による極めて特異とも言えるような人為的テラス、並びにテラスを囲むようにして馬蹄形状の灰原が検出されている。テラス面では柱穴を検出、覆屋の可能性が窺え、またこのテラス自身が7号窯伴う前面施設として機能していたことを認識させられる。土坑は4基検出されている。いずれも10世紀前半の遺物を伴うもので、1基は土師器焼成坑の可能性が否定できず、灰原内で検出された土坑は土器廃棄を目的として掘り込まれたものとして位置付けられる。この他、8号窯、7号窯の廃棄後の埋土上層からA地区と同様、焼成粘土塊を中心とした、落ち込みを持たない区域を検出、粘土だまりとしている。

以上により2時期の窯跡の確認、並びに7号窯は付属施設を伴い、特異とも言える前面施設を有しているものがわかった。

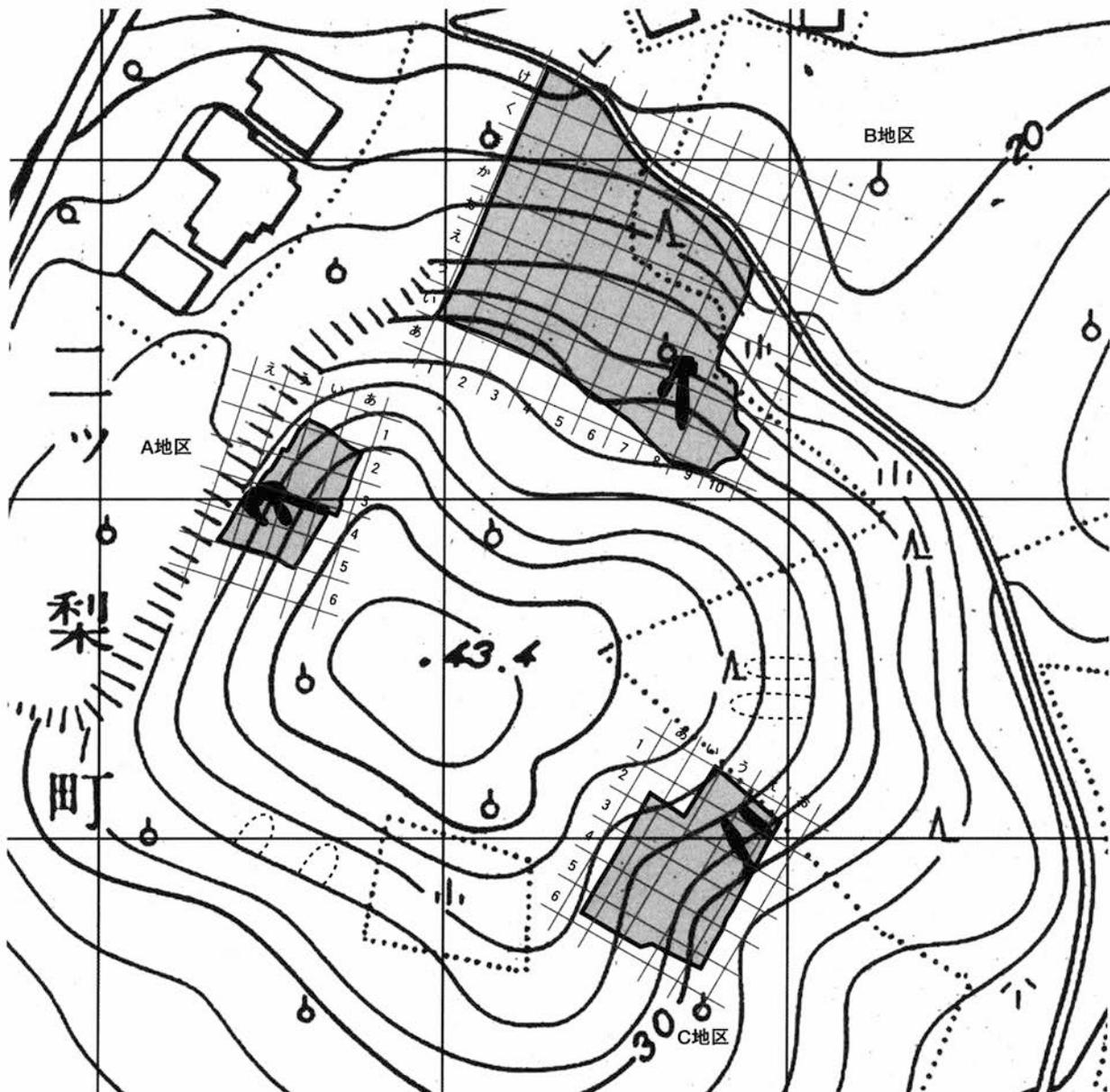
遺物においては、8号窯の床に残された多くの須恵器、埴は1点のみの出土、また置台として使用された鴟尾破片の出土が認められた。7号窯では須恵器を主体に瓦類や陶硯等の文房具類の生産、これまで南加賀窯跡群では出土していない新器種も認められている。

C地区（南東側斜面）

C地区南東側斜面では本調査当初1基の窯跡を想定していたが、想定場所が陥没痕でなく谷部と判断されるという経緯をもち、すぐ脇の斜面に2基の窯跡を確認した。9号窯、10号窯である。8世紀前半操業の直立煙道緩傾斜型の

窯跡で、2基とも地下掘り抜き式構造を持つ窖窯である。検出された窯跡が調査区域外との境に面しており、窯体調査となっている。9号窯は一部調査区外に及ぶものの前庭部を確認、また後背部施設として土坑状の落ち込みを検出している。また、10号窯は焼成部口付近より手前部分が調査区外、よって焼成部だけの調査であったが、排煙口が非常に良好に残存しており、直立煙道の形状が明確に認められている。これら2基の窯跡からの出土遺物は非常に少なく、前述のC地区中央に位置する谷部の流土堆積層から須恵器を主体に多くの遺物を検出している。また、この谷部流土堆積層並びに窯埋土中から土師器がまとも出土しており、非常に良好な資料である。

この2基の窯跡が併存していたどうかは、窯床の出土遺物が非常に少ないために、断言することは難しい。南加賀窯跡群の動向で述べたように、8世紀前半では1斜面に単独基が通常で、8世紀中頃には量産指向から複数基並列築窯が出現してくる。流土堆積層出土須恵器でみると、8世紀中頃に位置づけてもおかしくはない特徴を備えていることから、2基が併存するとするなら、生産形態の変化した過度期のものとして位置づけ可能と思われるものである。

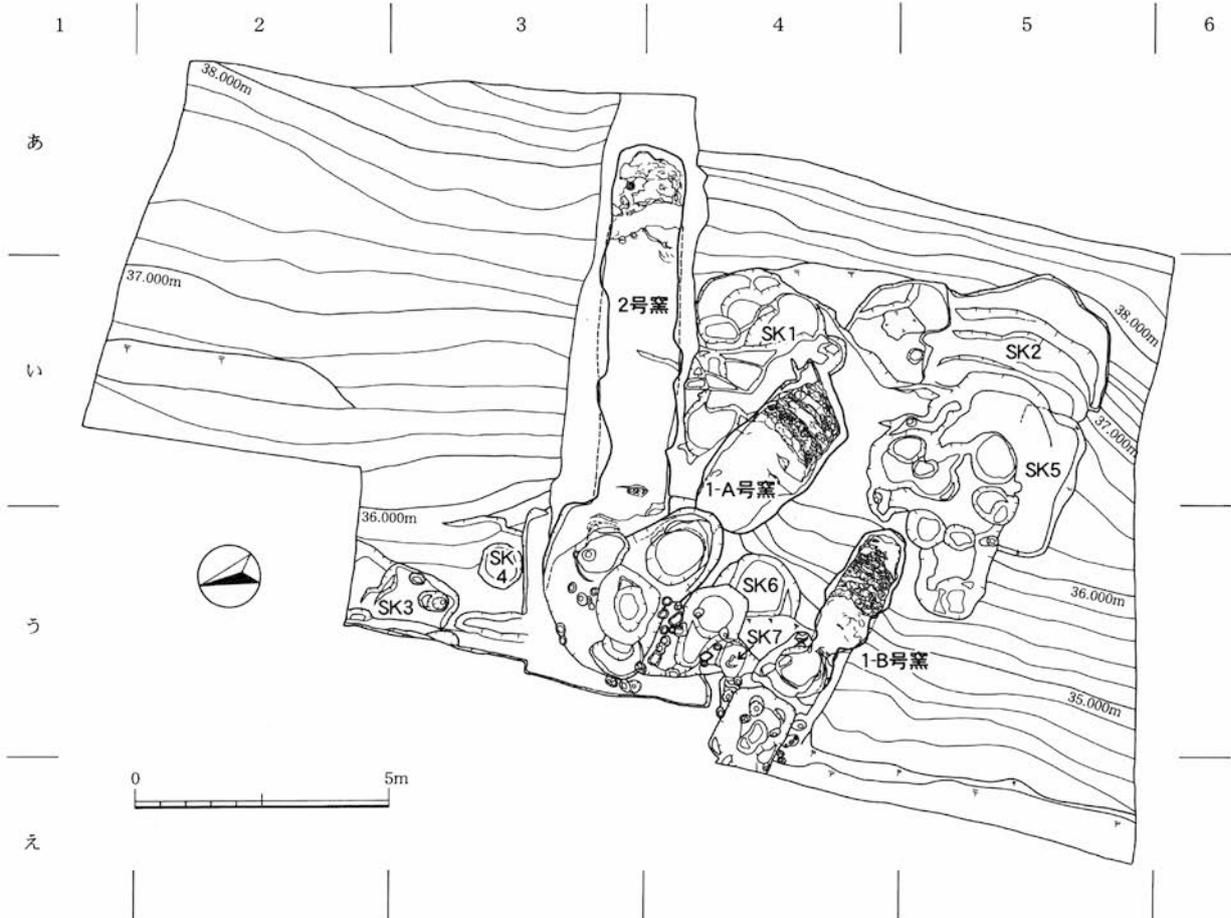


第5図 本調査区グリッド配置図 (S=1/1,000)

第4章 遺構

第1節 A地区の調査

A地区は二ツ梨豆岡向山の西側斜面に位置し、窯跡3基、土坑7基、この他土坑としての落ち込みをもたない粘土塊集中が大きく2箇所、1-A・1-B号窯前面土坑の周囲に広がるピット群、並びに上層灰原を検出している。



第6図 A地区全体図 S=1/150

第1項 2号窯

2号窯は焚口右側と前庭部の大部分が1-A号窯によって切られている。天井は僅かに残存するものの奥壁煙道も含め殆どが崩壊している状態である。ただ、床は良好であり、窯の平面プランは胴の張らない長方形に近い形を呈すものである。

焚口及び燃烧部と焼成部境

焚口は右側が1-A号窯に切られているため不明であるが左側は残存、焚口幅を140cmに推定可能である。焼成部境では若干の絞り込みが見られるものの明確さは比較的薄いものである。ただ、これを境に焼成部が若干開き気味となっている。燃烧部は、ほぼ同じ幅の長方形平面プランを呈し、焼成部境に向かって-5度の角度をもつ。ほぼ水平に近い、非常に緩やかな燃烧部傾斜と言える。焚口から燃烧部は、地山を掘削しているもので、側壁は若干垂直気味

2号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・焼成部：あ2b類	排煙口・煙道：（Ⅲ1(b)類）
----------------------	-------------	-----------------

2号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入）

窯体実効長： 726	最大幅： 162	窯体内最大高：90	焼成部床傾斜：-2度
窯体水平長： 726	焚口幅：推143	煙道長：-	残存：焚口僅か欠け
窯体実長： 754	焼成部境幅：136	窯体床面積：9.66m ²	修復回数：床1，壁1
焼成部長：（水）608	奥壁幅：98	焼成部床面積：8.05m ²	時期：8C1/4
（実）621	煙道径：-	焼成部床面積：1.61m ²	
焼成部長： 118	窯体実効高：422	焼成部床傾斜：19(10~26)度	

に立ち上がるが、上部でやや内湾している。側壁の焼け方は、暗灰色を呈し還元焼成されているが、弱いものである。この側壁の還元は前庭部側へ屈曲する部分にも床を含め続いており、同時期の8号窯、9号窯にも確認されるものと同様のものである。また焼成部床の還元は弱く、焼土や炭化物が混ざり、地山酸化被熱部分が既に見えるところもあり、舟底状ピットプランが確認できる状態である。焚口・焼成部における天井構造に関し、構築材などの痕跡は検出されていないが、埋土の状態から焼成部部分の天井は地山とは考えがたく、側壁の直立からみても仮設天井があったものと思われる。

奥壁及び排煙口と煙道

奥壁から排煙口並びに煙道は完全崩壊しており、奥壁から上は地山土が露出する状態である。上面の地山レベルから推測すれば、煙道は最低でも140cm、最長でも170cmの長さにとらわれる。奥壁は若干の立ち上がりが残存するだけで、その角度等詳細は不明であるが、残存する部分では120度しかない。煙道の傾斜角は不明であるが、本来ならばもっと角度をもって直立に煙道が立ち上がっていたものと考えられる。この窯は、長い煙道をもつ、南加賀で検出される同時期の窯とはほぼ同じタイプであることは間違いないと思われる。

焼成部と修復

天井の残存状況であるが、焚口から奥壁へ320cmの地点より45cmの範囲で残っている。残存天井部分で窯体内の高さは90cmである。断面形状から窯の断面プランは、側壁が内湾する蒲鉾型であったと分かる。平面プランは胴の張らない長方形タイプであり、奥壁も丸みを帯びないものである。床は、ほぼ水平で地山が青灰色に還元焼成するが、焼成部境から奥へ180cmの範囲で両側壁側で、床の剥離に伴い地山土の酸化被熱部分が露出しているのが確認されている。床は、奥壁に向かい10度から最大でも26度の傾斜をもつ。この傾斜角度は、この時期特有の床緩傾斜型タイプである。床には奥壁から水平長190cm、実長205cmに渡り1度の修復が見られる。両側壁から床にかけての全面を、スサと砂の混合する粘土を塗りたくっているが、奥壁際の修復床下層から、横瓶を2つに分割したものを伏せ、床に埋め込む状態で検出している。奥壁が相当のダメージを受けて剥離したのであろう。横瓶を床の補強材として使用し修復したことがわかる。この修復床、壁を除去すると、1次床・1次壁が存在するのだが、床も側壁も地山酸化被熱部分が露出し大きく剥離している。ただ還元床や側壁が部分的に残存するところもあり、これらを剥ぎ取らずにそのままの状態に損傷を補うため全面を一気に修復したと考えられる。この修復のために床の奥壁部分は2次床で段を形成する形となっている。また、1次床にあたる奥壁修復前の床でも非常に低いのだが段形成していたものと考えられる。

側壁は、全体に崩壊が著しいが、奥壁まで一貫して青灰色を呈し良好な状態で炎の引きがあったと考えられる。側壁にも、修復痕が見られる。焚口より425cm地点から奥へ32cmの範囲と、前述の奥壁や床と共に施された部分である。やはりスサ・砂入り粘土で行われている。この他焚口から奥へ100cm地点、160cm地点では側壁際にスサ入り壁が剥落して検出されていることから、部分的に修復があったものと考えられる。

窯体掘削工具痕

地山掘削痕が窯壁に検出できている。焼成部境付近にかけては手前から奥へ向かうものと、奥から手前へ向かうものが入り乱れて掘削方向が確認でき、また窯体の奥では奥側から手前にかけての掘削方向が確認できる。幅10cmが主

2号窯 床下断ち割り 土層註

1層：スサ入り修復粘土。

2層：5BG4/1暗青灰スサ入り粘土。

3層：R4/6赤褐被熱砂。

4層：地山土還元床。

4層：地山土酸化被熱。

5層：暗灰色2.5Y4/2細砂。

床面との隙間に部分的にスサ入り粘土含む。

6層：暗オリーブ褐色砂質土（Hue2.5YR）

還元ブロック、焼土ブロックを多量に含む。

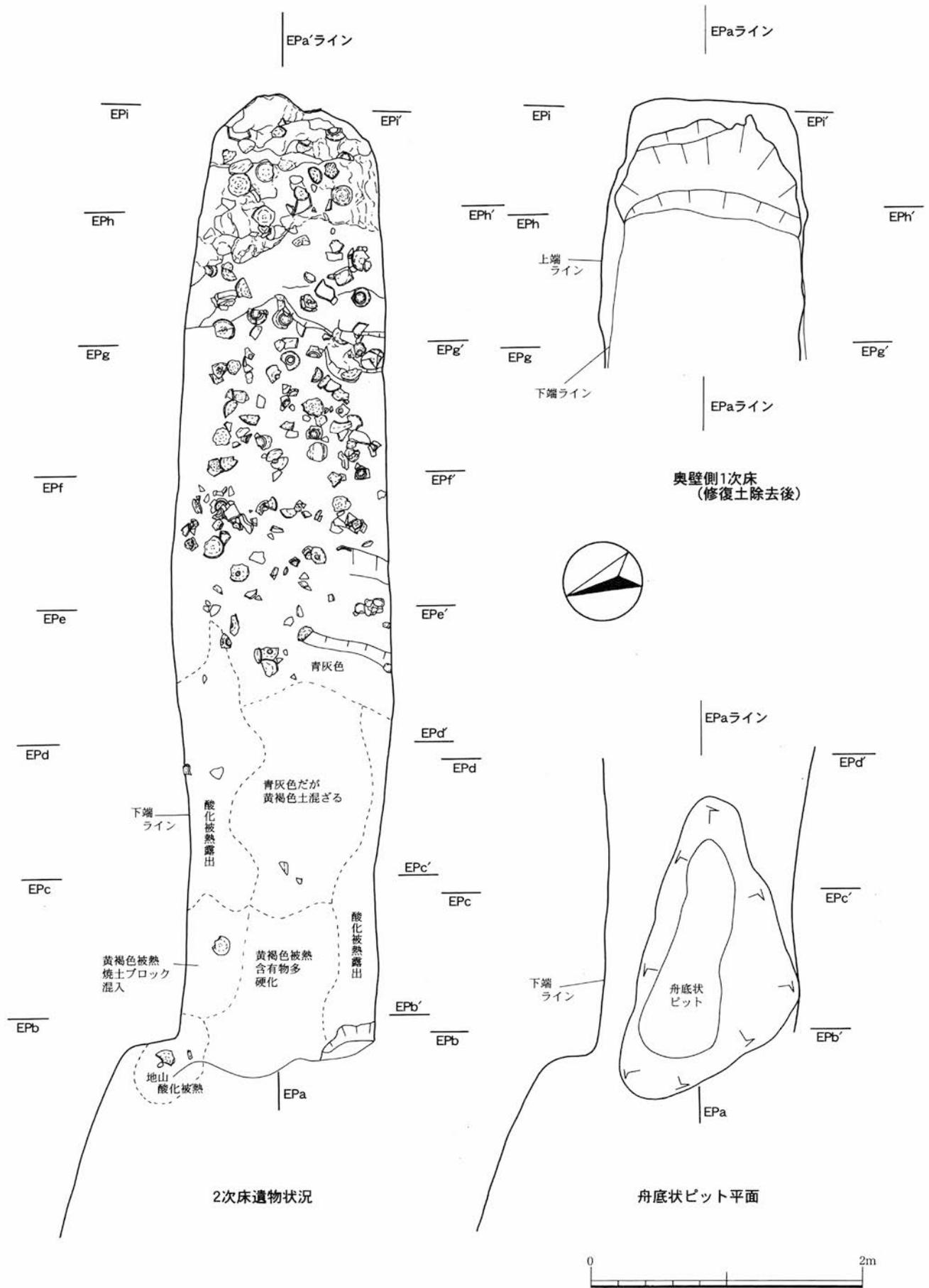
硬い。

7層：赤褐色土（5YR7/6~7/8）ブロック、炭、

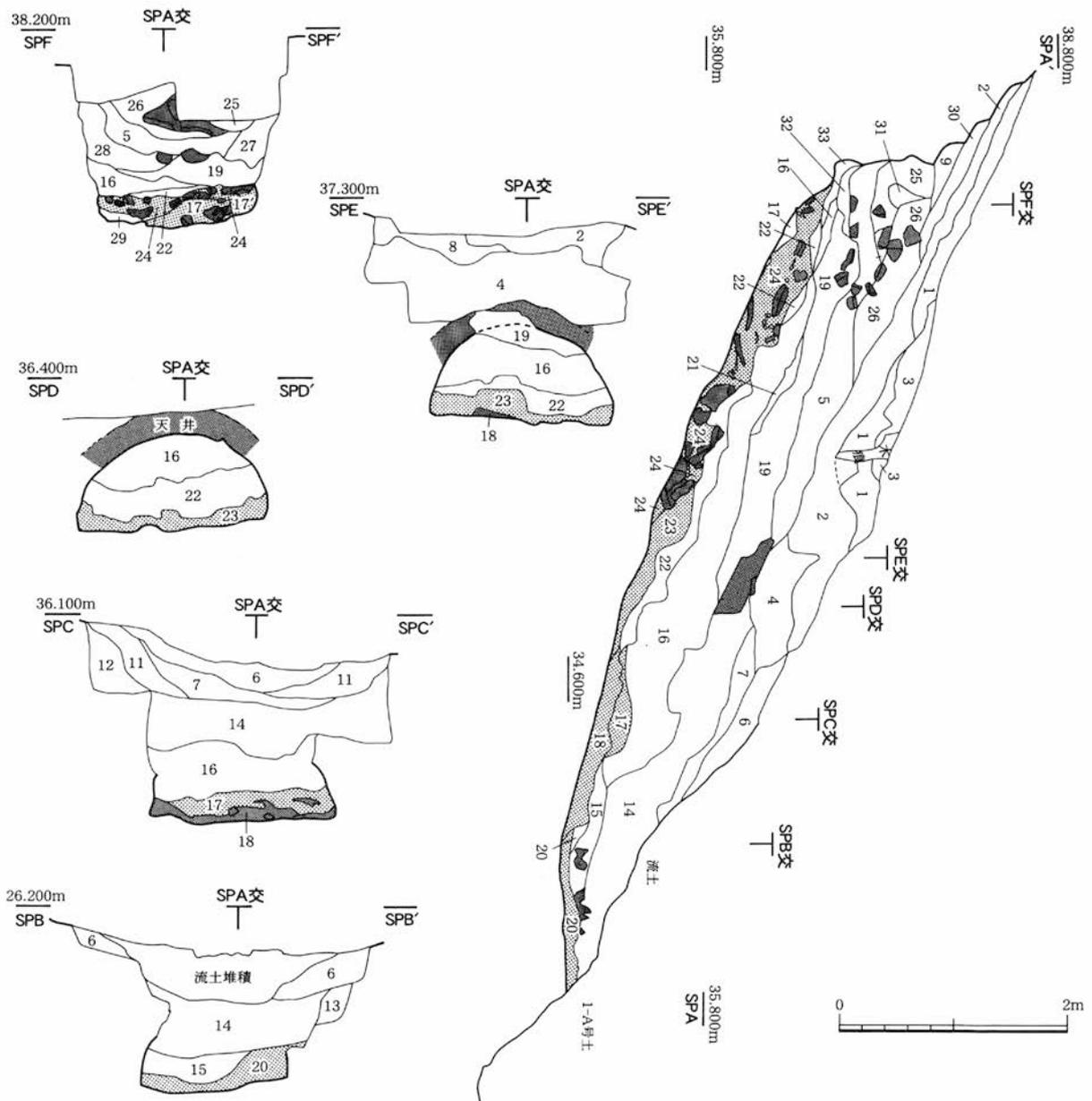
還元ブロック（Φ1.0~2.0）が多量で、隙

間に褐色土（7.5YR3/4）が入る。

若干纏まりあり。



第8図 2号窯床面遺物出土状況図 (S=1/40)



第9図 2号窯 埋土セクション図 (S=1/60)

2号窯 埋土 土層註

- 1層：7.5YR5/6明褐粘砂質土。流土堆積層。
- 2層：10YR4/6褐砂質土(炭ブロック少量含む、やや粘性あり、焼土ブロック粒少量含む)
- 3層：10YR5/4にぶい黄褐粘質土(炭粒、焼土粒少量含む)流土堆積層。
- 4層：10YR4/4褐砂質土(炭粒少量含む、10YR6/6明黄褐砂ブロック含む)地山類。
- 5層：5YR5/6明褐粘砂質土(炭ブロック、焼土ブロック含む)
- 6層：7.5YR5/4にぶい褐粘質土(砂粒含む、炭ブロック粒少量含む)
- 7層：5YR5/4にぶい褐粘砂質土(炭ブロック、焼粒含む、締まり悪い)
- 8層：10YR5/6黄褐粘砂質土(炭粒小ブロック多く含む)北からの流土。
- 9層：7.5YR5/6明褐粘質土(砂粒含む、炭粒少量含む)南側流土。
- 10層：10YR6/4にぶい黄橙砂(締まり悪い、炭ブロック少量含む)
- 11層：7.5YR4/6褐砂質土(やや粘性あり、締まりよい)
- 12層：7.5YR5/6明褐砂質土(焼砂ブロック多く含む、締まりよい)
- 13層：7.5YR5/6明褐砂質土(やや粘性あり、炭ブロック焼土ブロック粒少量含む)地山類。
- 14層：7.5YR5/6明褐粘質土(砂粒含む、炭粒焼土粒少量含む)地山類。
- 15層：7.5YR5/6明褐粘質土(炭粒、焼土粒少量含む)
- 16層：7.5YR5/4にぶい褐砂質土+7.5YR4/6褐粘砂質土。(炭粒、黄褐色砂ブロック少量含む、締まりよい、小さい還元土ブロックを含む)
- 17層：7.5YR5/6明褐砂質土(やや粘性あり、崩落壁、天井ブロック少量含む)天井崩壊に伴う土。
- 18層：10YR6/6明黄褐砂(崩落天井、壁ブロック含む)天井崩落土。
- 19層：7.5YR5/6明褐粘質土(締まりよい、砂粒含む、炭粒焼土粒ブロック少量含む)
- 20層：7.5YR6/6橙砂質土(炭粒少量、焼土粒少量含む、崩落壁残骸含む)天井崩落土。
- 21層：7.5YR4/6褐弱粘質土(炭粒少量、10YR6/6明黄褐砂ブロック含む)地山類。
- 22層：10YR4/6褐砂質土(上記砂ブロック、焼土ブロック含む、炭粒少量)
- 23層：7.5YR5/8明褐砂質土(G~BG・5~6の青灰砂との混層)天井崩落土。
- 24層：7.5YR4/6褐砂質土が崩落天井の隙間に崩入している。天井崩落に伴う地山混在土。
- 25層：10YR5/6黄褐砂(炭粒、焼土粒少量含む)
- 26層：7.5YR5/6明褐砂質土(炭粒、天井ブロック、焼土ブロック含む)天井崩落に伴う地山混在土。
- 27層：10YR5/4にぶい黄褐砂(炭粒、焼土粒少量含む、締まりよい)
- 28層：7.5YR6/6明褐砂(炭粒、焼土粒少量含む、締まりよい)
- 29層：10YR4/3にぶい黄褐砂(炭粒少量、焼土ブロック含む、締まりなし)
- 30層：10YR5/6黄褐砂質土。
- 31層：10YR4/6褐砂(炭粒極少量含む)
- 32層：10YR5/4にぶい黄褐砂(締まりよい、炭粒少量含む)
- 33層：10YR6/6明黄褐砂(締まりよい、炭粒少量含む)

流で、広幅で13cmに及ぶ。長さは最長62cmに及び、ストロークを大きくとって掘削したと考えられる。短いもので20cm、全体の掘削の調整として2次的な掘削が予想される。

床下遺構（舟底状ピット）

舟底状ピットを確認している。深さ6cmと非常に浅いもので、意図的に掘られたというよりは、オキの掻き出し時に床まで削られたといったものであろう。ただ、若干窪んだ床を補うように砂や還元ブロックなどを充填したと思われる、これらの土層は非常に硬くなっている。底面は地山酸化被熱を呈す。

埋土

天井崩壊土が全体の床面に張り付くように検出され、これに伴い地山土崩落土や地山土に類する土砂堆積層が認められる。窯体内での流土堆積も確認されていないので、窯を廃棄した後すぐに天井が一括崩落したものと思われる。なお、天井の崩落に伴って地山土とも混ざりながら堆積したものと思われる。ただ窯中央の残存天井部分上位には地山土が残存、これより奥側の陥没部分に粘性をもつ2次的流土堆積層が確認できている。

前庭部

前庭部の殆どが1-A号窯によって切られているために状況把握は困難と言えるのだが、窯の左前庭部の残存部分では、前庭部は窯に対しほぼ直角に開く形状をもっており、床も水平である。全体のプランは明確に示すことはできないが、開く形状から、おそらく台形状を呈していたと思われる。

遺物出土状況

窯体内床面から出土する須恵器の殆どが坏A・坏Bの食膳具である。床面直上で取り残しと考えられる食膳具の他、安定する台の機能をもつ置台が出土している。これらは、窯体の中央から奥にかけての区域で集中して残存し、同じく坏A、坏Bの蓋・身の食膳具からなる。状態は、逆位にして、口縁を打ち欠いて床に密着させ埋め込ませてあり、逆位面をほぼ水平に保つために施されたと考えられる。この他に、床面から鴟尾片が出土している。やはり置台として使用されており、5点検出した。2号窯で焼成された根拠はないため、何処からか持ち込まれたものと言える。

第2項 1-A号窯

1-A号窯は2号窯の右側に位置する窯跡で、後世の切り盛りにより窯尻部分が削平を受けているものの、窯の全長を残存長で410cm、推定で500m前後の地下式燃焼部掘り抜き式の構造をもつ窯跡である。また、焚口から燃焼部、焼成部口は、燃料投げ込み式と考えられる傾斜燃焼部形態で非常に良好な保存が確認され、更に焼成部口付近の天井残存が確認できている。以下詳細を述べる。

1-A号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃焼部：え類	排煙口・煙道：I2類？
----------------------	-----------	-------------

1-A号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入、水は水平長の略）

窯体実効長：残410	燃焼部長：150	煙道径：-	燃焼部床面積：0.57 m ²
窯体水平長：残410推525	最大幅：160	窯体実効高：280	焼成部床傾斜：50（30～52）度
窯体実長：残492	焚口幅：83	窯体内最大高：100	燃焼部床傾斜：-24度
焼成部長：（水）残340	焼成部口幅：56	煙道長：-	残存：窯尻欠け
推375	焼成部口高：36	窯体床面積：残4.82m ²	修復回数：壁1、焼成部口2
（実）残450	奥壁幅：推93	焼成部床面積：残4.25m ²	時期：10C 2/4

焚口及び燃焼部と焼成部口

焚口から燃焼部が-24度という非常に強い傾斜を伴う傾斜燃焼部形態である。平面プランは、ほぼ円形を呈し燃焼部がややすり鉢状に落ち込む形態で、最も下降した位置が焼成部口となる。しいて言えば土坑状といった方が適切であろうか。この傾斜燃焼部は、地山を掘削したものである。なお、1-A号窯は、焼成部口が完存している。焼成部口は、小さく絞り込まれて丸く穴が開いた状態で検出されており、その大きさは高さ36cm、幅56cmの実に小さなものである。焼成部口上面の焚口側外面には、スサの入らない粘土を充填してあり、2度の修復を確認している。

焚口から燃焼部にかけての焼成具合であるが、落ち込み始めから10cm入った地点より、ややすり鉢状を呈する床全

面が還元する。しかし、焼成部に比べ弱い還元と言える。また、焼成部口を中心として、周囲22cmにかけても還元が確認できる。更に燃焼部上位に施されている修復部分は白色で、生焼け状態であり、その更に上位では橙色から赤褐色へと変化する酸化被熱が確認できる。中心の還元部分から変化する酸化部分が顕著に現れていると言えよう。また、酸化被熱の広がりには焼成部口の上位部分に特に広がりを見せており、焚口燃焼部においてある程度炎が上部へと登っていたことが考えられる。

奥壁及び排煙口と煙道

奥壁及び排煙口と煙道は、近代の削平により全く確認できない状況である。

焼成部

焼成部平面プランは、所謂釣り鐘型で、非常に胴の張るタイプである。

〈段構築床の構造〉

焼成部床面は、焼成部口を転換点として傾斜する。焼成部口付近が最も傾斜が弱く、それでも30度を測り、最も急傾斜を呈す窯尻付近で傾斜角52度を測る。この傾斜面に馬爪型や円柱型の砂を多量に含有する粘土塊を横一列に隙間なく並べ、段を成形している。このような粘土塊は、製品の滑落を防ぐ目的があり、南加賀窯跡群でこれまで粘土塊置台と呼んでいるものである。1-A号窯では、段として意図的に成形したというより、粘土塊置台を並べた結果、平坦面をもって段状になったという印象で、段成形のための平坦面補正は見られない。つまり、粘土塊置台を配列することによって階段状を形成する粘土塊置台構築である。窯尻際から手前に4段残存する。ただ、更に手前にも3段分の設置痕跡があり、削平された窯尻にも設置があったとすれば、7段以上はあったものと考えられる。床は基本的には青灰色を呈すが、焼成部口から胴の張る部分が最も還元が強く、窯尻側の方が若干還元が弱い。粘土塊置台自体は、混和剤が多量に入った実に脆いものである。また、粘土塊置台設置は、地山床をある程度段状に窪ませて粘土塊を安定させている。

〈天井〉

天井は焼成部口から奥へ180cmに渡り残存するが、150cm地点で角度を転換、急に立ち上がる形状となっている。窯尻が削平を受けているため、如何なる構造をもっていたのかは不明であるものの、天井の転換は何を意味するのか。焼成部口が非常に狭いため、窯尻が大きく開口するタイプであった可能性も否定できない。しかしそのような構造をもつタイプの窯が、これまでに南加賀窯跡群内では確認されていないのである。新しい構造をもった窯とも考えられるが、この窯の窯尻が仮設天井であった根拠となる検出もなく、天井が潰れているというような状況でもないため、どう理解すればよいか、今後の課題の一つではないかと考える。

〈側壁と修復〉

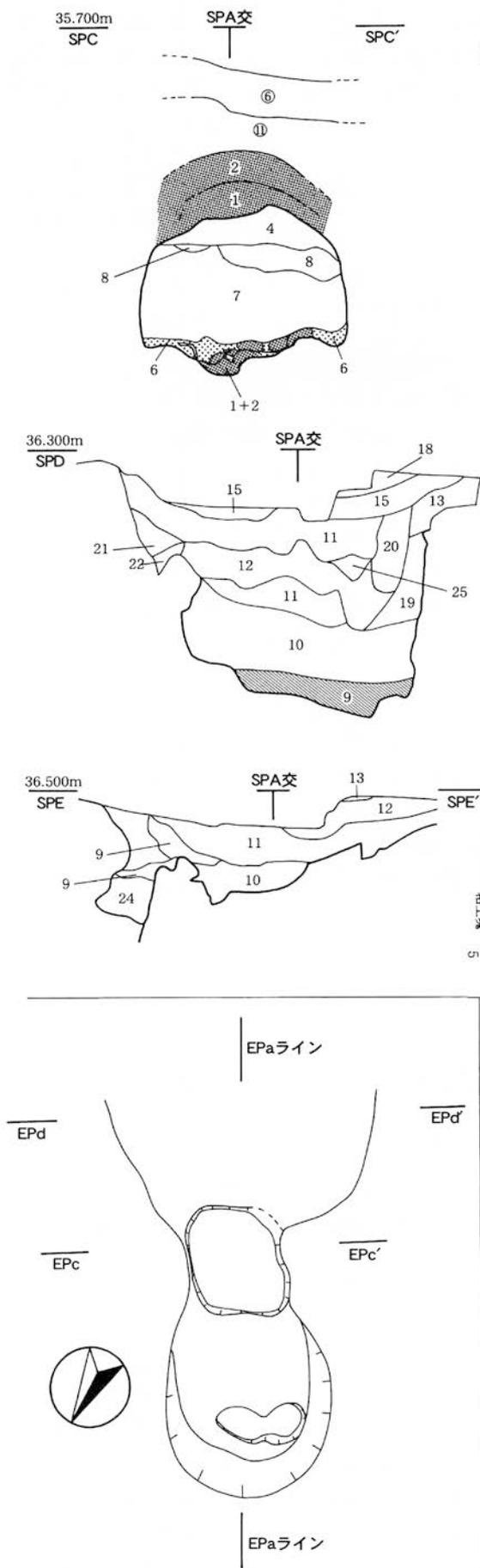
側壁についてだが、両側とも全側面にスサ入り粘土修復が確認されている。ただ、この窯が2基の窯に挟まれた中央に位置しているため、掘削時に側壁が崩れるアクシデントがあり、図化できたのは一部であることを了承頂きたい。修復は厚さ0.5cm程度に塗りつけている。特に前述の角度転換点付近は上位方向へ引き延ばすようにしている。これら側壁の焼成具合は、窯尻まで一貫して濃い青灰色となっており、炎の引きが強かったと考えられる。また、側壁全体が修復されているため工具掘削痕は不明である。

床下遺構（舟底状ピット）

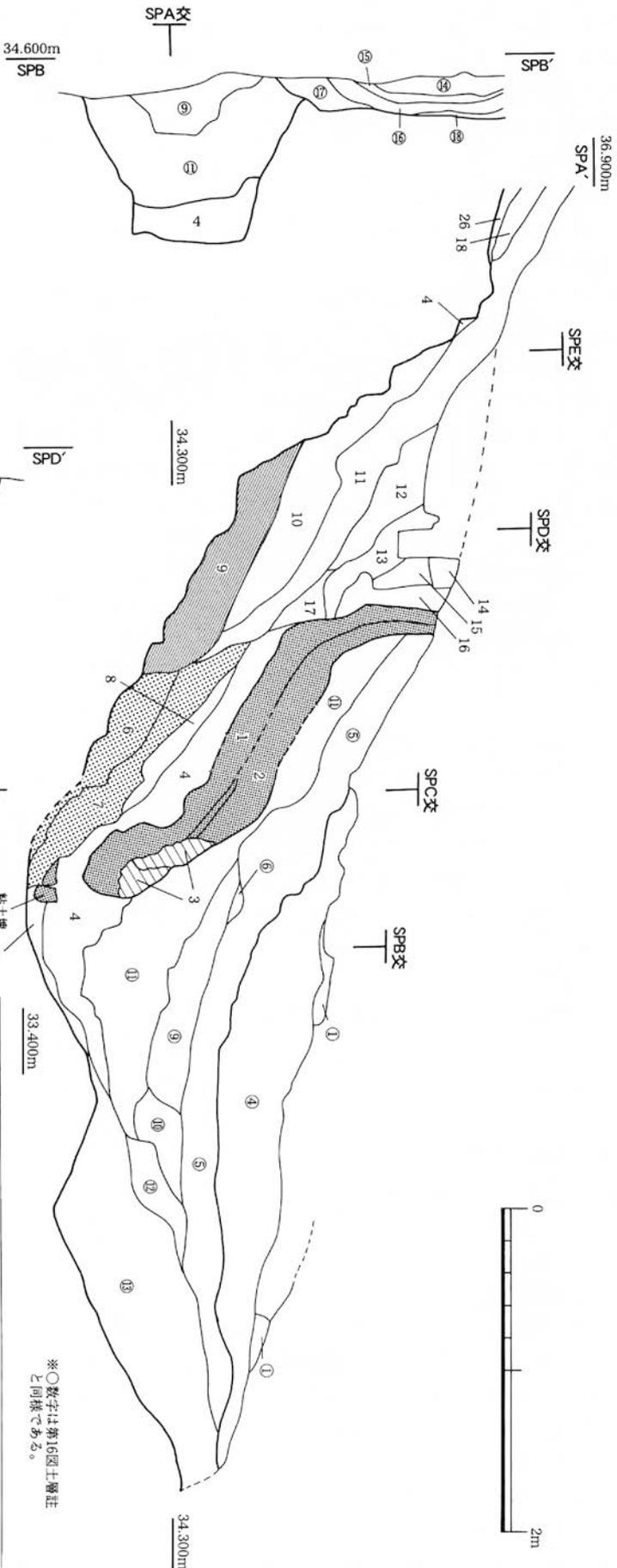
舟底状ピットB類が確認されている。非常に浅いもので、灰、オキなどを掻き出した時に共に床を削り取ったためにできた窪みと表現した方が近いだろう。この窪みの覆土は非常に硬く掘削が困難な程であった。窪んだ部分を粘土などで充填しては常に床として機能していたのだろう。

焚口前面施設

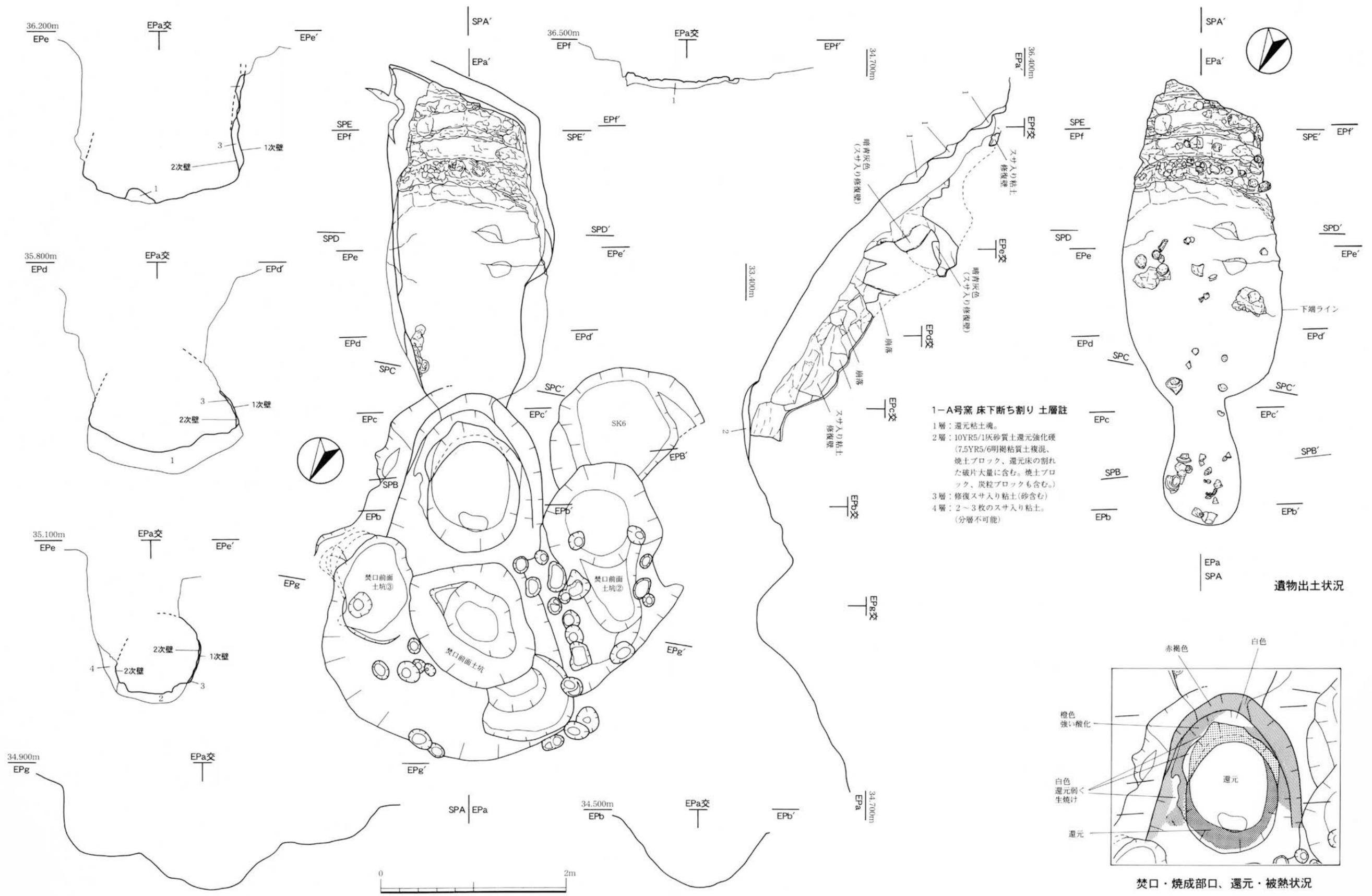
焚口の前面には、焚口を囲むように4つの土坑が検出されている。焚口前面土坑①、②、③と、SK6である。焚口前面土坑①、②、③は、窯燃焼部から掻き出した灰・オキを溜めた土坑である。ほぼ円形プランを呈し、前面土坑①はすり鉢状の断面をもち、前面土坑②は、底面に平坦面をもちながらも壁はオーバーハングして抉れた状態、また、前面土坑③は、テラス面を形成して各々底面に平坦面をもつものである。これらの土坑の上端レベルからはみ出すように灰層が認められ土坑周囲に及んでいる。例えば、前面土坑の左側に位置する2号窯前庭部の平坦面にまで黒色層が広がっている。土坑を掘った直後は土坑内に灰を溜めていたが、次第に灰で満杯になり土坑の輪郭が見えなくらい灰で埋まったものと思われる。これら焚口前面土坑①、②、③のうち、左側に位置する③が、最も早い段階で埋まり①、②に関しては窯の廃棄時まで使用されていたようだと言及調査担当者から聞いている。また、SK6は、前面土坑



第11図 1-A号窯 舟底状ピット (S=1/40)



第10図 1-A号窯 埋土セクション図 (S=1/40)



第12図 1-A号窯平面図・断面図・床面遺物出土状況図 (S=1/40)

1-A号窯 埋土 土層註

1層：地山還元	13層：7.5YR5/6明褐弱粘質土（炭粒少量、焼土ブロック含む）
2層：地山酸化被熱	14層：7.5YR4/4褐弱粘質土（炭粒、焼土ブロック含む）
3層：白色修復粘土	15層：7.5YR5/4にぶい褐弱粘質土（14層より粘性弱い、炭粒少量含む）
4層：7.5YR5/4にぶい褐粘質土（炭ブロック、焼土ブロック含む、遺物多い）	16層：7.5YR5/3にぶい褐粘質土（粘性強い、ボソボソ感あり、炭粒少量含む）
5層：.5YR2/1黒弱粘質土灰層（焼土ブロック含む）	17層：7.5YR4/3褐粘質土（砂粒を多く含むためサラサラ感あり、よく締まる、炭粒少量、焼土ブロック含む）
6層：7.5YR4/4褐粘質土（焼土ブロック大量に含む、カチカチ、基本的に7と差なし） →天井崩壊土（天井は煙道部分）	18層：7.5YR5/6明褐弱粘質土（炭ブロック、焼土ブロック含む）
7層：7.5YR4/4褐粘質土（焼土ブロック（酸化、還元）多量に含む） →天井崩壊土（天井は煙道部分）	19層：7.5YR4/4褐粘質土（砂粒少量、焼土極少量、締まり弱い）
8層：7.5YR6/8橙砂（きめ細かい、炭粒、焼土ブロック少量含む、締まっていない）	20層：7.5YR5/4にぶい褐粘質土（締まり良い、炭粒、ブロック極少量含む）
9層：5YR4/4にぶい赤褐砂質土（砂粒、焼土ブロック多く含む）→天井崩壊に伴う酸化地山の崩落堆積土	21層：7.5YR5/6明褐粘質土（焼土、ブロック含む）
10層：7.5YR4/6褐粘質土（炭粒、焼土ブロック少量含む、しまり悪い）	22層：10YR5/6黄褐砂粘質土（炭粒少量、焼土ブロック多く含む、締まり良い）
11層：7.5YR5/6明褐砂質土（炭粒少量含む、焼土ブロック多く含む）	23層：7.5YR4/4褐弱粘質土（炭粒、焼土粒ブロック少量含む）
12層：7.5YR4/4褐弱粘質土（炭粒、焼土ブロック含む）	24層：10YR4/6褐粘質土（しまり良い、炭粒極少量含む）
	25層：7.5YR4/6褐弱粘質土（砂粒含む、炭粒、焼土少量含む）
	26層：7.5YR5/4にぶい褐弱粘質土（炭粒・焼土ブロック粒含む）

②に切られているもので、全体のプランは不明だが、やはり平坦面をもつ。この平坦面から炭化物層が検出されているが、薄い層であり、灰を溜めたとは考えにくいものである。また、この平坦面の一部で白色粘土の塊を検出している。SK6出土遺物が1-A窯出土のものと同じことから、この窯に伴うものであり、この窯の燃焼部右側に隣接して位置していることから、何らかの作業スペースであった可能性が高いと考えられる。

以上の土坑の周囲で、ピット群が確認されている。ただ、ピット埋土が灰であるために、相対するピットの関係が確認できず、柱穴としての配列も確認できなかった。このような焚口前面施設の周囲に覆屋としての機能をもった柱穴が検出される事例は多いので、覆屋遺構の可能性を否定はできないと思われる。

埋土

窯体内の最も降下する部分に粘土塊置台や遺物の集中があり、この上に天井崩壊堆積層を確認しているが、天井残存部分にあたるため、堆積する天井崩壊土は、窯尻付近のものが落ち込んだものと考えられる。天井残存位置まで認められることで、この地点より窯尻側では、崩壊後大きく開口した状態で陥没したようである。埋土は、若干の地山類も含め流土堆積層となっている。また、燃焼部側にも流土堆積層が認められ、更に上位層でも、2層からなる流土堆積層が認められる。

遺物出土状況

床面における遺物は少ない。粘土塊段が残存している部分で遺物は検出されるが、殆どが琿で、有台の琿が特に多い。底部だけを伏せてあることから、置台として使用したものが中心であり、取り残しの遺物も少ない。ただ、前述しているのだが、焼成部口の最も下降する位置に、内部の構築用粘土塊が崩れて落ち込んだ多量の粘土塊が出土しており、共に遺物も多く検出されている。本来なら粘土塊と同じ位置に載っていたと考えられる遺物が、粘土塊と一緒に落ち込んだものであろう。

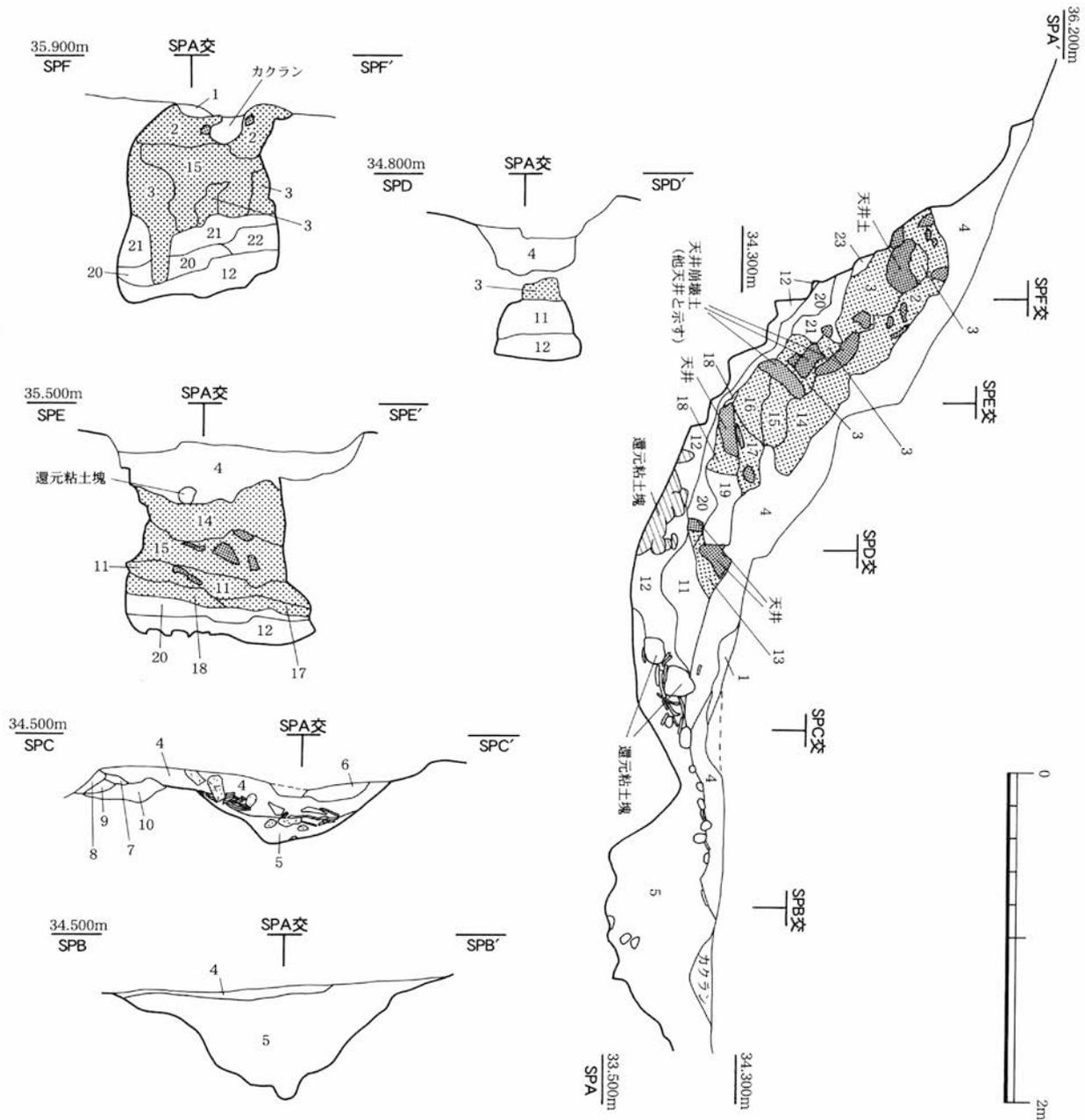
第3項 1-B号窯

1-B号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃焼部：え類	排煙口・煙道：I2類
----------------------	-----------	------------

1-B号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入、水は水平長の略）

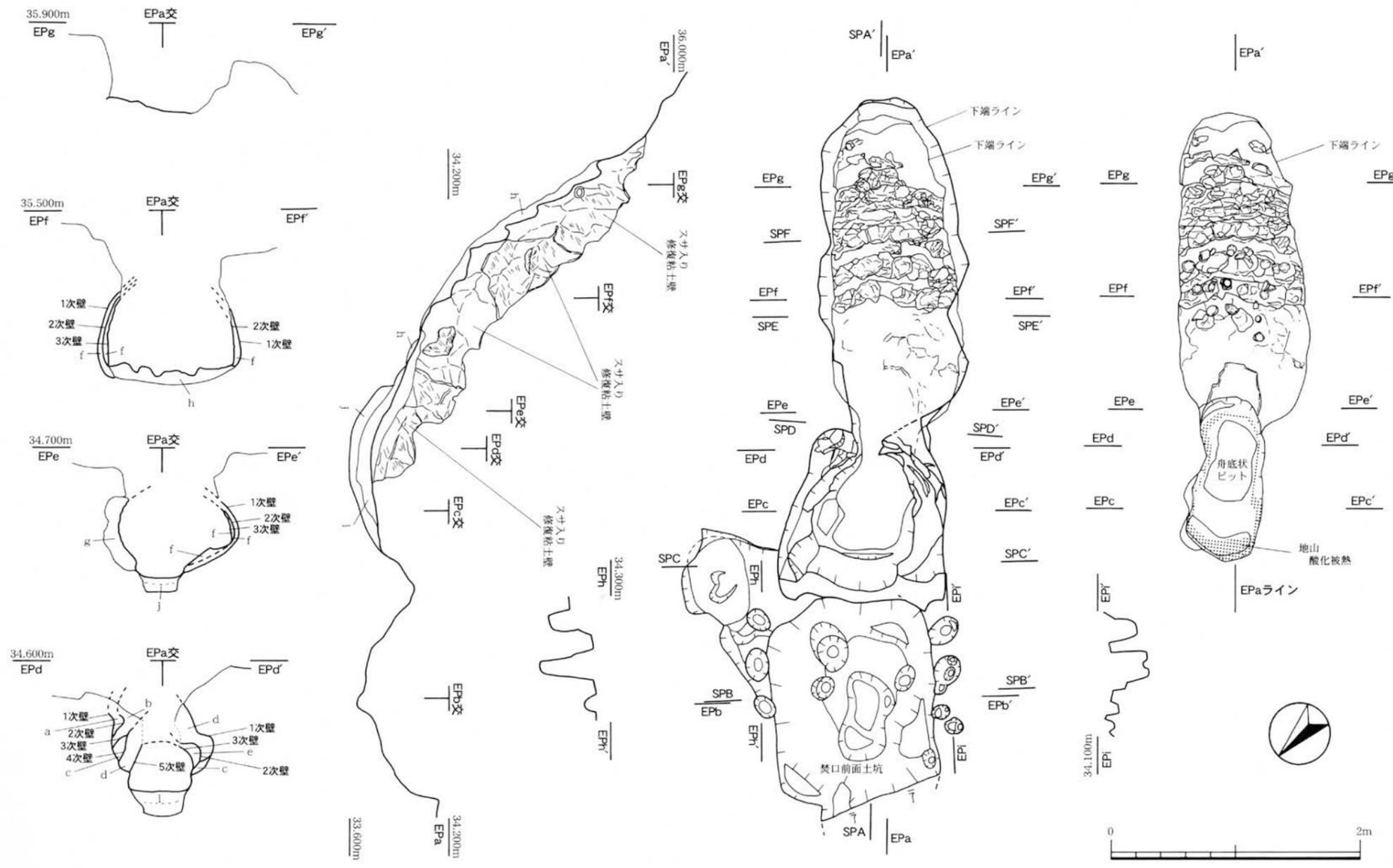
窯体実効長：362	最大幅：98	窯体内最大高：残92	焼成部床傾斜：58（25～60）度
窯体水平長：362	焚口幅：74	煙道長：—	燃焼部床傾斜：-42～-10度
窯体実長：427	焼成部口幅：48	窯体床面積：2.29m ²	残存：略完
焼成部長：（水）286	奥壁幅：65	焼成部床面積：1.87m ²	修復回数：床1，壁5？
（実）370	道径：—	燃焼部床面積：0.42m ²	時期：10C2/4
燃焼部長：115	窯体実効高：237		



1-B号窯埋土土層註

- 1層：7.5YR4/4褐粘質土(炭粒、焼土ブロック含む)→陥没後流土堆積層。
- 2層：5YR4/6赤褐粘質土(炭粒、ブロック少量、焼土ブロック多量に含む)天井下壊に伴う土。
- 3層：5YR5/4に赤褐粘砂質土(手応えなし、天井・壁破片多量に含む)
- 4層：10YR4/3に黄褐砂質土(炭粒、焼土ブロック少量含む)上層→陥没後流土堆積層。
- 5層：10YR1.7/1黒砂質土(灰層、焼土ブロック遺物多く含む)下層。
- 6層：灰原6層土(10YR4/4褐弱粘質土(遺物集中、炭ブロック含む))流土=グリッドセクション④層と同じ。
- 7層：10YR3/2黒褐砂質土(炭ブロック大含む灰層)
- 8層：10YR5/6黄褐砂質土(炭粒極少量含む)
- 9層：10YR4/4褐弱粘質土(炭粒焼土ブロック多く含む)
- 10層：10YR3/3暗褐弱粘質土(炭粒焼土ブロック多く含む、遺物多)
- 11層：7.5YR4/6褐粘質土(炭粒、焼土ブロック少量含む)窯体内流土堆積層。
- 12層：10YR4/2灰黄褐粘質土(炭ブロック少量、焼土ブロック含む)窯体内流土堆積層。
- 13層：10YR4/3に黄褐砂質土(焼土、ブロック5mm大、多量に含む)
- 14層：5YR4/4に赤褐粘質土(炭粒極少量、焼土ブロック多量に含む)天井下壊に伴う土。
- 15層：5YR4/3に赤褐弱粘質土(炭粒少量、焼土ブロック多量に含む、ボンボン感あり)天井下壊土。
- 16層：7.5YR5/3に褐粘質土(炭粒少量、焼土ブロック多量に含む)天井下壊土。
- 17層：7.5YR4/6褐粘質土(粘性やや弱い、炭粒少量、焼土多量、焼土ブロック少量含む)天井下壊土。
- 18層：10YR5/4に黄褐粘質土(炭粒少量、焼土ブロック多量に含む)天井下壊土。
- 19層：7.5YR4/4褐弱粘質土(炭粒少量、砂粒、焼土粒を含む)
- 20層：10YR4/3に黄褐粘質土(やや粘性弱い、炭粒、焼土ブロック小を含む)→窯体内流土層。
- 21層：7.5YR4/3褐弱粘質土(砂粒含む、砂質感あり、粘性ほとんどない、焼土ブロック多量に含む、炭粒ブロック少量含む)
- 22層：7.5YR4/3褐弱粘質土(砂多く含む、焼土、還元ブロック多く含む)
- 23層：7.5YR4/4褐粘質土(焼土ブロック小5mm大以下少量含む)

第13図 1-B号窯埋土セクション図 (S=1/40)



1-B号窯 床下断ち割り 土層註

a層：白色スサ入り修復土。
b層：スサ入り修復土。やや緑がかる青灰色。
c層：アメ状にガチガチ。d層と異なり明確に区別できる。
d層：スサ入り修復土。表面は固いが、ボンボンと塊が崩れ落ちる。
e層：濃い青灰色。アメ状でガチガチ、びくともしない程固い。
f層：スサ入り粘土修復土。青灰色。
g層：スサ入り修復(一度に5回分?)。
h層：粘土塊。
i層：舟底状ピット。黒色弱粘質土。
(灰層で、砂粒少量含み、焼土ブロック多量)締めりなし。
j層：舟底状ピット。10YR3/1黒褐色弱粘質土。
(砂粒、焼土ブロック少量含む下底で地山と混濁)締めりなし。

第14図 1-B号窯 平面図・断面図・遺物出土状況図 (S=1/40)

1-B号窯は、1-A号窯の右側に位置する窯跡である。やはり奥壁が削平を受けていると考えられるが、僅かなものではないかと考えている。水平長362cm、最大幅98cmを測る小型窯である。

焚口及び燃焼部と焼成部口

1-A号窯と同様の構造をもつ焚口・燃焼部である。規模が1-A号窯に比べ小さいことが特徴である。焚口から燃焼部へ-42度の傾斜角を測る、非常に角度の強い傾斜燃焼部形態である。部分的に小さなテラス面をもち、比較的緩やかな下降傾斜に至り平坦面を呈す。そして、最も降下した位置が焼成部口へと繋がる。平面プランは、ほぼ円形である。この傾斜燃焼部は、地山を掘削したものであり、1-A号窯と同様に還元焼成しているが、若干還元が弱いものとなっている。特に燃焼部右の立ち上がり部分や左の上位部分に白色を呈す生焼け状態が確認されている。また、焼成部口は、上面に欠けがあるものの、復元が十分に可能な残存状態である。焼成部口は1-A号窯同様に絞り込まれており、その絞り口の幅が48cm、高さ38cmと非常に小さなものである。

奥壁及び排煙口と煙道

窯尻が近代の削平を受けているものの、被害は比較的少ないようである。奥壁及び排煙口と煙道など残存はしていないのであるが、ただ、現存する傾斜角を保持してそのまま排煙されてゆくような構造のものと考えられる。地山掘り抜き式には違わないため、そのまま煙道が地山傾斜と繋がってゆくと考えるのが妥当であろうと思われる。

焼成部

〈床の状態〉

焼成部は胴の張らないタイプで、水平長286cm、実長でも370cm、幅は最大で98cmの非常に小規模である。床面は、焼成部口から21度の傾斜角をもって立ち上がり、121cm地点を転換点として傾斜角35度、更に170cm地点を転換点として傾斜角60度を測る。非常に強い傾斜をもつ。1-A号窯同様この傾斜床に粘土塊置台を横一列に配列して階段状に構築している。つまり、粘土塊置台構築である。段の残存は、窯尻から手前に6段認められたが、本来は8段ないし9段はあったと予想可能である。1-B号窯では、段平坦面の奥行き幅が狭いことが特徴であるが、下段では比較的奥行き幅が広がっている。上段では小型製品を、下段で貯蔵具等の大型製品を焼成したと考えられる。また、粘土塊置台設置には、地山掘削時に粘土を固定し易いよう地山自身にも有段状の窪みを施している。

床の焼成具合は、焼成部手前側で青灰色の良好な還元を呈し、奥へ進むに従い焼きは弱くあまくなっている。これは、床だけでなく全体に言えることで、1-A号窯と比較しても堅緻さにあまさが認められる。粘土塊置台自体も1-A号窯同様脆いのであるが、すぐに割れたり崩れるような更に脆いものとなっている。

〈天井〉

天井は全く残存しておらず、既に全面に崩落が認められているため、窯体内の高さは不明である。

〈側壁〉

両側壁とも焼成部口が最も青灰色が濃く、奥へ行くに従って淡青灰色を呈す、典型的とも言えるような壁であり、両側壁ほぼ全面に修復跡が認められている。特に、焚口から奥へ210cm地点から30cmに渡り2度の修復跡が確認されている。修復は、スサ入り粘土で2~4cmの厚みで行っている。側壁図化されているのは右側壁だが、E P eライン断面図の左側壁で図化しているように、側壁が大きく抉れるように崩落した痕跡があり、厚さ16cmに及ぶ大規模な修復痕を確認している。しかし、よく観察すると、5層からなっているようで、1.5cm厚の粘土を5回重ねて塗っている。図化に示していないことを了承頂きたい。また、地山掘削が残存している部分では、工具掘削痕は確認されなかった。

焚口から300cm地点右側壁のみに、小穴を確認している。小穴は還元も、酸化被熱もしていない。何の為のものか不明であるのだが、調査担当者によれば、粘土塊置台の設置時に施されたものではないかということである。

修復

側壁の修復については、前述のとおりで、この他焼成部口の修復痕が認められている。焼成部口の絞り込みに伴う修復と言うよりは、絞り込み直しと言う方が適切ではないだろうか。焼成部口を非常に狭く作り込んであるために、おそらく製品の出し入れに伴って焼成部口を一部壊したのと考えられる。これを幾度も補っていると考えられる。E P dライン断面で示したが、無造作で計画性も見られない複雑な修復が右側面側で3回、左側面側で4回確認している。全てスサ入り粘土で施されており、それぞれの焼け方に異なりが認められる。

床下遺構（舟底状ピット）

舟底状ピットが焼成部口で検出されている。深さ20cmのしっかりとした落ち込みをもつもので、底面に平坦面を呈

す。硬化しない黒色灰層で埋まっており、燃焼部の灰が溜まっているといった状況である。焼成部口の著しい絞り込みのため、製品の出し入れを円滑に行うために掘られたものと考えられる。

焚口前面施設

焚口前面施設として、焚口前面土坑が1基隣接して設けられている。1-A号窯、7号窯と同様に灰層で埋まっており、灰溜めとして機能していたと考えられる。非常に不規則なプランと断面を呈しており、計画性無く無造作に掘り窪められた印象である。また、焚口前面左側にも同じ機能をもつと考えられるSK7を確認している。使用順序までは確認できていないが、1-A号窯で出土する坏Aが含まれていないことから、1-B号窯に伴う可能性が推測できる。この他、1-A号窯前面土坑②、SK6は、1-A号窯に伴う土坑として前述しているのだが、これは坏Aが土坑下底から出土していることで判断している。ただ、この土坑の上層灰層からは坏Aが出土していないため、1-B号窯でも使用した可能性がある。

また、1-A号窯と同様にピット群が検出されている。この中で前面土坑の両サイドに対応すると考えられる各々3本からなるピット列が確認されている。3本のうち、窯に近い2本は深くしっかりした掘り込みをもつ。焚口前面土坑の覆屋として機能した柱穴の可能性が考えられる。

埋土

燃焼部には前面土坑からの灰層が流れ込む形で堆積している。ただ、逆に燃焼部の灰をきちんと片づけないで廃棄した結果という可能性もある。焼成部には窯尻からの流土堆積が確認できる。焼成部口の最も深い部分で50cmの厚みをもつ。この堆積層の上面に、天井崩壊度層が確認できる。更に上層には、天井が崩壊し陥没した部分への流土堆積が確認でき、前面土坑から窯尻まで全体に及んでいる。これら埋土の状態から、窯が廃棄された後、長い間天井が崩壊しなかったものと考えている。

遺物出土状況

1-A号窯と同様に床面遺物は少ない。遺物の取り残しも少なく、残存するのは置台として使用された埴の底部である。有台埴、無台埴の底部のみを粘土塊置台の上に逆位にして使用している。1-A号窯では窯尻部分にしか見られなかったが、1-B号窯では窯の中央から下段にかけても置台が出土している。

第4項 その他の遺構

その他の遺構として、土坑7基、製炭土坑1基と排水溝1条、遺構としての掘り込みをもたないが焼成粘土塊すなわち窯床段構築のための粘土塊置台の集中が2箇所、更に検出された3基の窯跡に伴わない上層灰原1箇所が検出されている。それでは、土坑から報告してゆく。

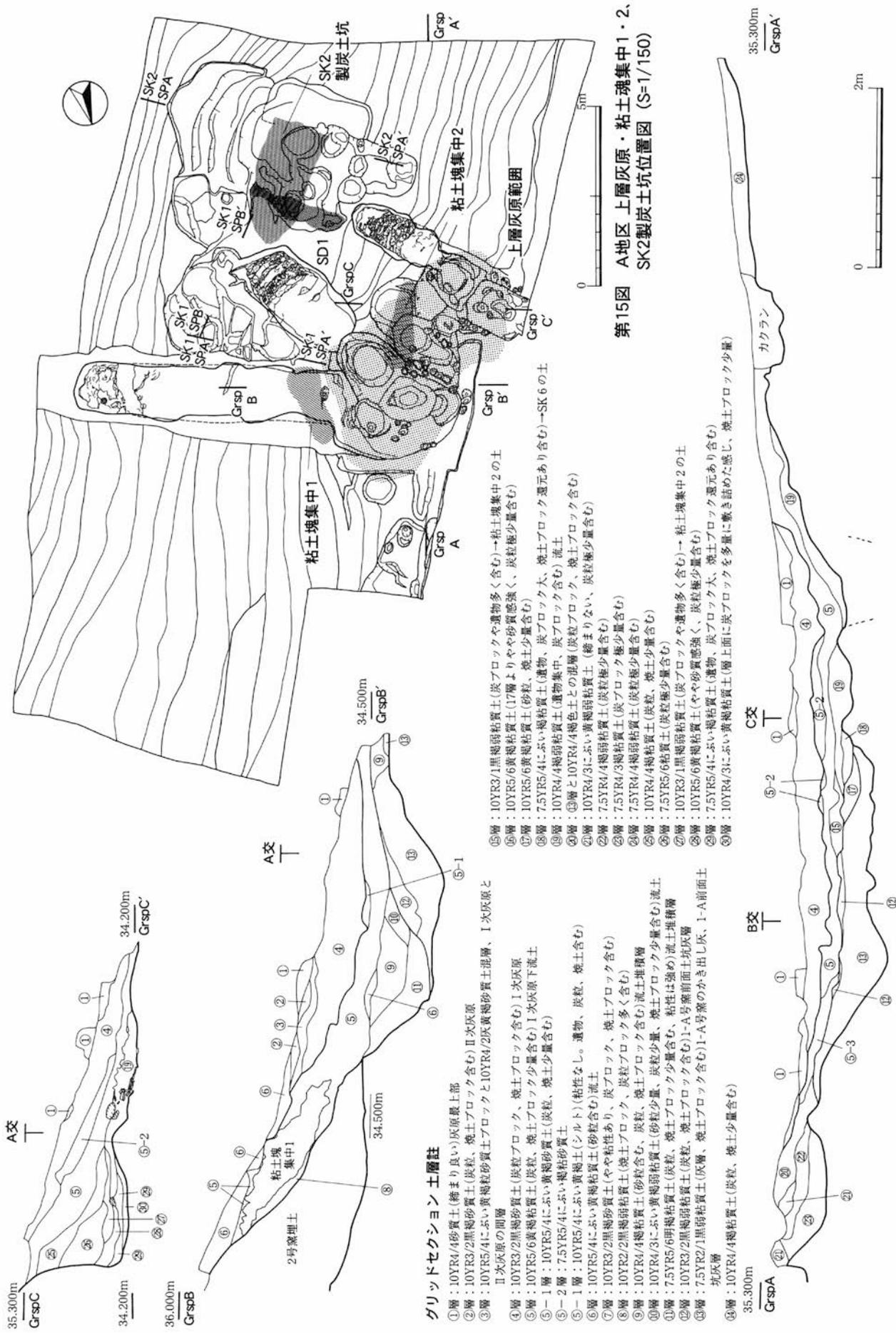
1. 土坑

〈SK1〉

2号窯と1-A号窯に挟まれた土坑で、1-A号窯の窯尻左側に位置する。土坑プランは確認されている部分で半円状、斜面を切り込んで成形されている。底面レベルは1-A号窯の天井より基本的に上位で、窯の傾斜高に添うような形で東側斜面側奥が最も底面レベルが高く、窯中央部に向かってステップ状のテラス面を形成しながら下っている。また、1-A号窯のすぐ脇にあたる区域には通路状の落ち込みが確認されている。SK1から1-A号窯焼成の坏Aが多く出土するため、1-A号窯の後背部施設の可能性がある。ただ、他の遺物が出土していないため断言はできない。また、前述したように、1-A号窯の窯尻が大きく開口する形態をもつものと仮定すると、この土坑の下底レベルと一致しなくなり、どのようにしてこの後背部施設が使用されたのか疑問が残る。ただ、1-A号窯に伴う施設であることは自然であり妥当であろう。覆土での特徴を挙げると、土層セクションAで見られるように、テラス面上位層で土に締まりのある層が確認されており、テラス面を1度成形し直している可能性がある。これ以外にも人為的に埋めたと考えられる箇所もあるのだが判断が難しい。

〈SK2〉

SK2は、平面上ではSK5内に位置するが、標高レベルではこの土坑はSK5よりも上層レベルに位置するものである。斜面を切って平坦面を成形しており、最も下底レベルで、製炭土坑が確認されている。ほぼ長方形プランを



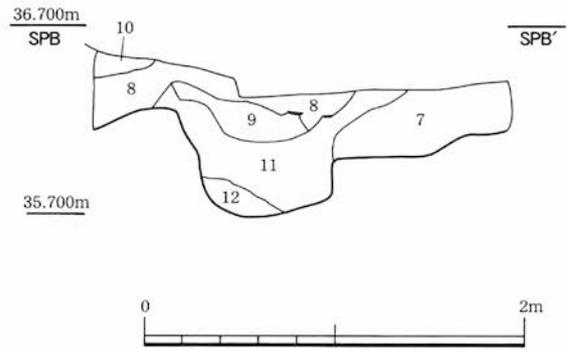
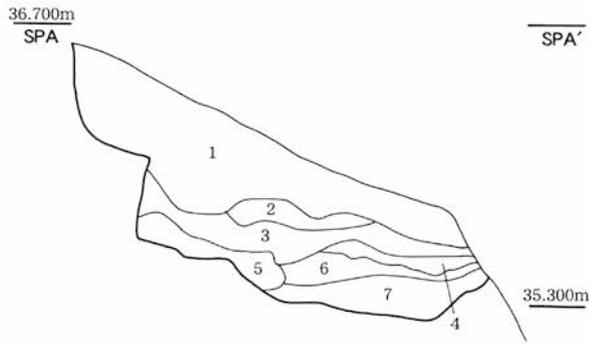
第15図 A地区 上層灰原・粘土塊集中1・2、SK2製炭土坑位置図 (S=1/150)

第16図 A地区グリッドセクション図 (S=1/60)

グリッドセクション 土層註

- ①層：10YR4/4砂質土(粘まり良い)灰原最上部
- ②層：10YR3/2黒褐砂質土(炭粒、焼土ブロック含む)Ⅱ次灰原
- ③層：10YR5/4にふい黄褐砂質土(炭粒、焼土ブロックと10YR4/2灰黄褐砂質土混層、Ⅰ次灰原とⅡ次灰原の間層)
- ④層：10YR3/2黒褐砂質土(炭粒ブロック、焼土ブロック含む)Ⅰ次灰原
- ⑤層：10YR5/6黄褐砂質土(炭粒、焼土ブロック少量含む)Ⅰ次灰原
- ⑤-1層：10YR5/4にふい黄褐砂質土(炭粒、焼土少量含む)
- ⑤-2層：7.5YR5/4にふい黄褐砂質土
- ⑥層：10YR5/4にふい黄褐土(シルト)(粘性なし。運物、炭粒、焼土含む)
- ⑦層：10YR3/2黒褐砂質土(砂粒含む)流土
- ⑧層：10YR2/2黒褐砂質土(焼土ブロック、炭粒ブロック多く含む)
- ⑨層：10YR4/4褐砂質土(砂粒含む、炭粒、焼土ブロック含む)流土堆積層
- ⑩層：10YR4/3にふい黄褐粘質土(砂粒少量、炭粒少量、焼土ブロック少量含む)流土
- ⑪層：7.5YR5/6明褐粘質土(炭粒、焼土ブロック少量含む、粘性は強い)流土堆積層
- ⑫層：10YR3/2黒褐粘質土(炭粒、焼土ブロック含む)Ⅰ-A号層前面上坑灰層
- ⑬層：7.5YR2/1黒粘質土(炭質、焼土ブロック含む)Ⅰ-A号層のかき出し灰、Ⅰ-A前面上坑灰層
- ⑭層：10YR4/4褐粘質土(炭粒、焼土少量含む)

- ⑮層：10YR3/1黒褐粘質土(炭ブロックや運物多く含む)→粘土塊集中2の土
- ⑯層：10YR5/6黄褐粘質土(17層よりやや砂質感強く、炭粒極少量含む)
- ⑰層：10YR5/6黄褐粘質土(砂粒、焼土少量含む)
- ⑱層：7.5YR5/4にふい黄褐粘質土(運物、炭ブロック大、焼土少量含む)
- ⑲層：10YR4/4褐粘質土(運物集中、炭ブロック含む)流土
- ⑳層：⑱層と10YR4/4褐色土との混層(炭粒ブロック、焼土ブロック含む)
- ㉑層：10YR4/3にふい黄褐粘質土(粘まりない、炭粒極少量含む)
- ㉒層：7.5YR4/4褐粘質土(炭粒極少量含む)
- ㉓層：7.5YR4/3褐粘質土(炭ブロック少量含む)
- ㉔層：7.5YR4/4褐粘質土(炭粒極少量含む)
- ㉕層：10YR4/4褐粘質土(炭粒、焼土少量含む)
- ㉖層：7.5YR5/6粘質土(炭粒極少量含む)
- ㉗層：10YR3/1黒褐粘質土(炭ブロックや運物多く含む)→粘土塊集中2の土
- ㉘層：10YR5/6黄褐粘質土(炭ブロック大、炭粒極少量含む)
- ㉙層：7.5YR5/4にふい黄褐粘質土(運物、炭ブロック大、焼土ブロック少量)
- ㉚層：10YR4/3にふい黄褐粘質土(層上に炭ブロックを多量に巻き詰めた感じ、焼土ブロック少量)

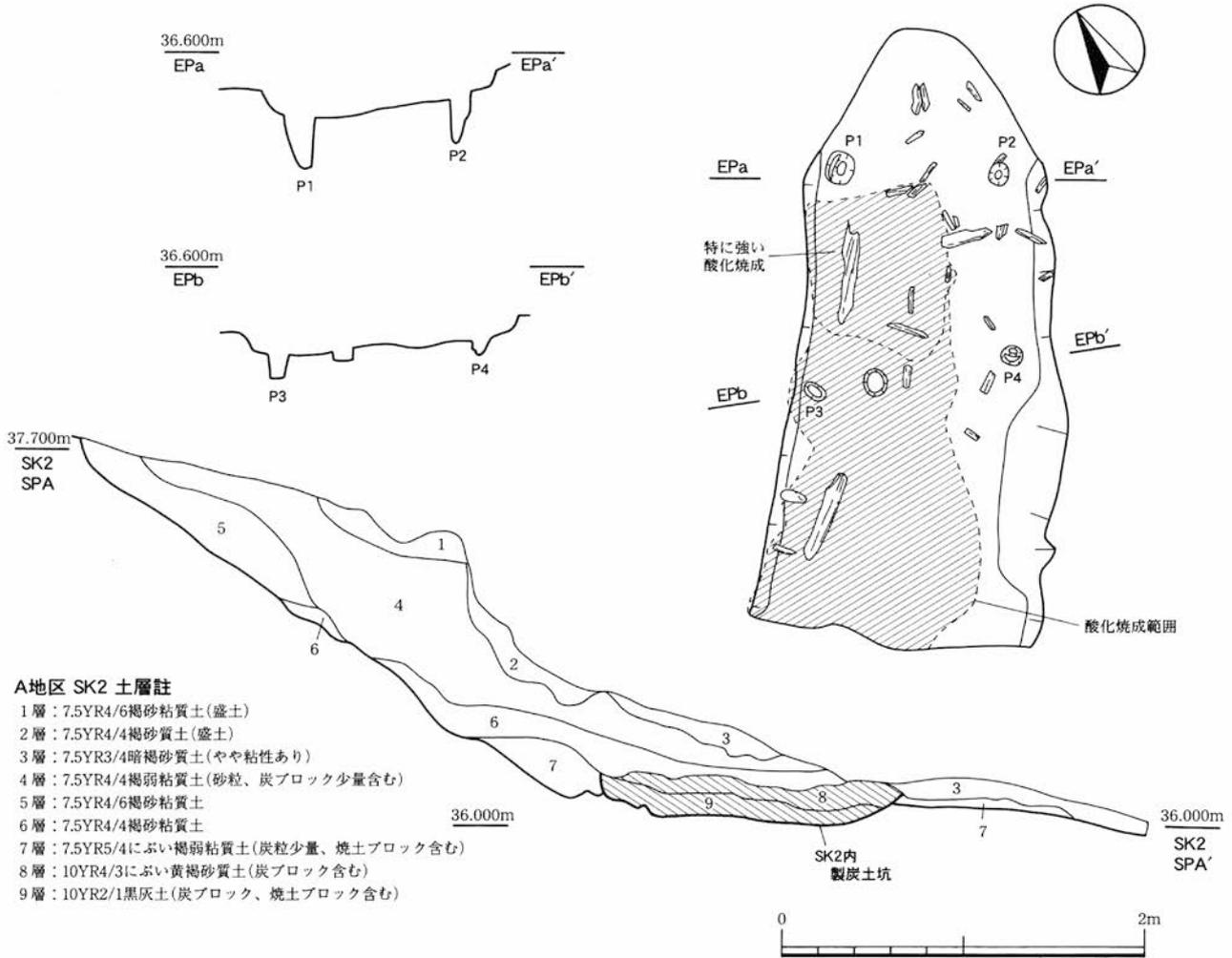


A地区 SKI 土層註

- 1層：7.5YR4/4褐粘質土(硬質化した砂ブロック含む、炭粒極少量含む)
- 2層：7.5YR4/6褐粘質土(締まり悪い、炭ブロック、焼土ブロック少量含む)
- 3層：7.5YR5/4にぶい褐粘質土(焼土ブロック、焼成粘土塊少量含む、炭粒少量含む)
- 4層：5YR4/4赤褐粘質土(焼成粘土塊(たぶん壁の残骸)を多く含む焼土層)
- 5層：7.5YR5/6明褐砂粘質土(炭粘土ブロック含む、炭粒少量含む、締まりよい)
- 6層：7.5YR5/4にぶい褐砂粘質土(5層より締まり悪く砂質感強い)

- 7層：10YR6/6明褐砂粘質土(炭、焼土ブロック少量含む、どちらかという砂質感が強い)
- 8層：7.5YR6/4にぶい黄橙砂質土(炭ブロック、焼土ブロック含む)
- 9層：7.5YR5/6明褐弱粘質土(炭ブロック、焼土ブロック含む)
- 10層：7.5YR5/6明褐砂質土(締まりよい、炭粒、焼土粒極少量含む)
- 11層：7.5YR4/6褐弱粘質土(炭粒少量含む)
- 12層：7.5YR5/6明褐砂粘質土(炭ブロック、焼土ブロック含む、締まりは弱い)

第17図 A地区 SK1セクション図 (S=1/40)



A地区 SK2 土層註

- 1層：7.5YR4/6褐砂粘質土(盛土)
- 2層：7.5YR4/4褐砂質土(盛土)
- 3層：7.5YR3/4暗褐砂質土(やや粘性あり)
- 4層：7.5YR4/4褐弱粘質土(砂粒、炭ブロック少量含む)
- 5層：7.5YR4/6褐砂粘質土
- 6層：7.5YR4/4褐砂粘質土
- 7層：7.5YR5/4にぶい褐弱粘質土(炭粒少量、焼土ブロック含む)
- 8層：10YR4/3にぶい黄橙砂質土(炭ブロック含む)
- 9層：10YR2/1黒灰土(炭ブロック、焼土ブロック含む)

第18図 A地区 SK2セクション図、SK2内製炭土坑平面図・ピットエレベーション図 (S=1/40)

呈しているが、削平により東西側が切られており、壁の立ち上がりは南北側でしか確認されなかった。この壁立ち上がりは、16～20cmを測る。底面では平坦を呈し酸化被熱面と炭層及び炭化材が底面一面で検出されている。この酸化被熱は壁の立ち上がりにまで及ぶ。ただ、この酸化被熱は薄いものである。また、この製炭土坑からの出土遺物は、10世紀のものに限られている。

この土坑内でピット列が検出されている。壁立ち上がり際にそれぞれ2本ずつ計4本で、径が上端で10～16cm、深さ14～30cmを測り、覆土は灰層であった。4本中1本の軸ずれが気になる場所であるが、柱穴の規模から簡単な構造をもつ覆屋のあった可能性が考えられる。

〈SK3〉

調査区の北西側に位置する土坑である。土坑の西側半分は削平されているが、平面プランは長方形と予想できよう。斜面を切って深さ30cm掘り込んでおり、底面に平坦面をもつ。覆土は、肩部崩壊土が立ち上がり際に確認されるものの、これ以外は褐色の弱粘質土(10YR4/4)の1層で、灰の廃棄は確認されていない。遺物は粘土塊置台碎片や破片が多く、8、10世紀の遺物が混在して出土している。1-A号窯、1-B号窯いずれに伴うものかは不明であり、この土坑の性格はわからない。

〈SK4〉

2号窯前庭部の左脇に位置する土坑である。円形プランを呈し、深さは18～22cm、底面に平坦面をもつものである。この土坑からは10世紀の貯蔵具専用焼台が集中して出土している。この焼台は、1-A号窯・1-B号窯に使用されているものである。焼台は焼成が堅緻なもの、通常の色灰色のもの、白色で生焼けのものなど混在しているが、殆どが完形である。並べられて検出されたことから、廃棄目的で掘られたものではなく、焼台の収納用として機能したものではないかと考えられる。なお、この土坑の覆土は炭粒を少々含む褐色の粘砂質土(7.5YR4/4)で、流土層と同類のものである。

〈SK5〉

1-A号窯後背部右側、1-B号窯後背部に位置し、SK2の下位から検出されている土坑である。長径300cmのほぼ円形プランではあるものの、この周囲に不定形な落ち込みを確認している。この土坑の西側が近代の削平により大きく切られており、右側では攪乱を受けているため、全体の平面プランは把握できない状況である。掘り込みは、左側と東の斜面側において明瞭で深さ50～70cmを測っており、底面は基本的に平坦であるものの大小のピット状落ち込みが確認されている。この土坑では4本の柱穴を確認、径20cm、10～26cmと一律でなく小規模なものである。やはり覆屋の可能性が考えられよう。底面からは、砂を含む灰白色の粘土が検出されている。粘土塊置台や修復用として使用するため置いたものであろう。出土遺物は10世紀の遺物が主体的で、1-A号窯に伴う坏Aも定量出土、8世紀の遺物も混在して検出されている。遺構の切り合いもないため、1-A号、1-B号いずれに伴うものか判断が難しいところである。しかし、土坑の位置から1-B号窯の後背部施設と考えるのが妥当ではないかと思われる。坏Aは紛れ込んだものであろう。また、SK5底面からは刀子が検出されており、識字階級層人物の関与が示唆される。

〈SK6〉

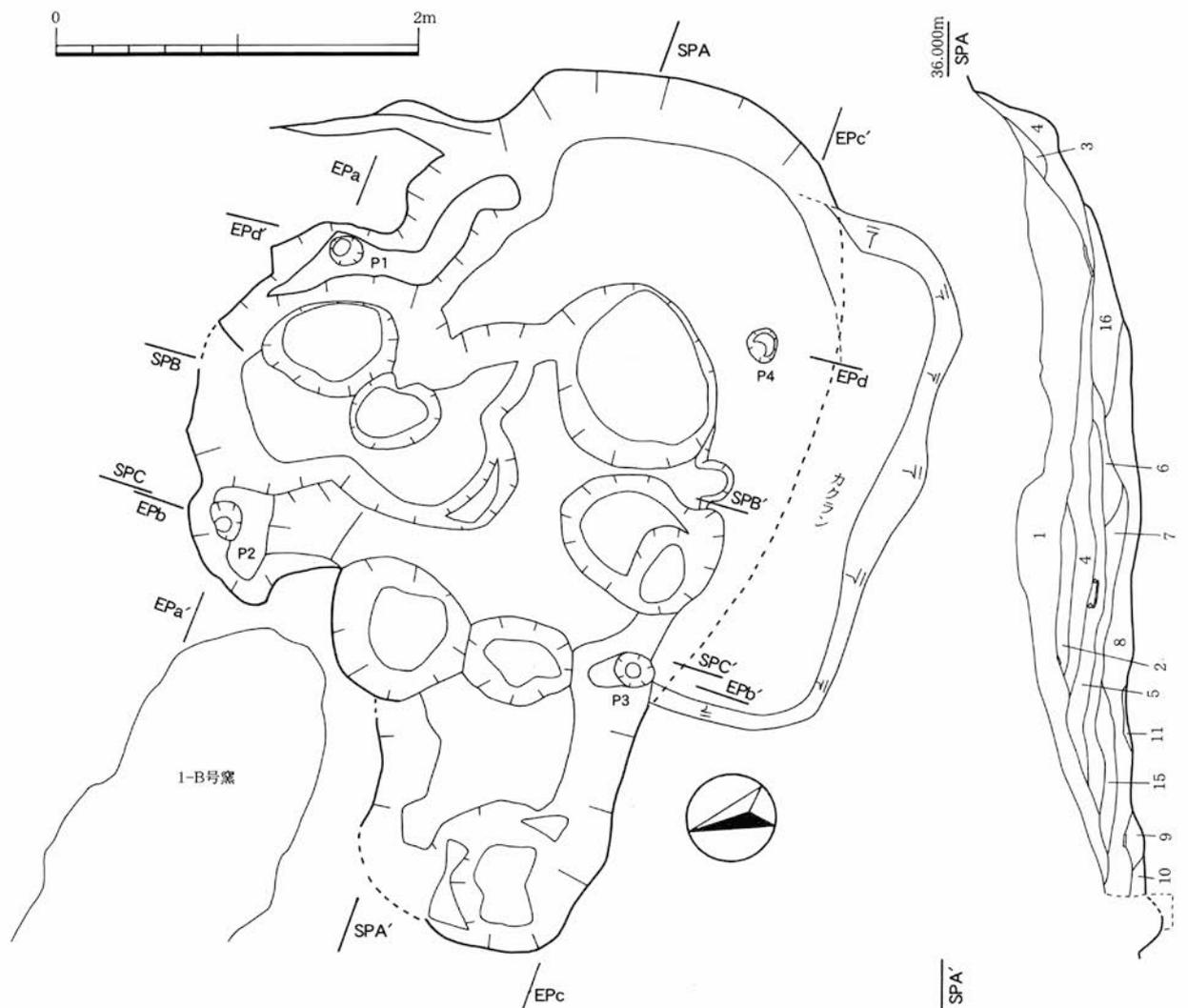
前述した1-A号窯前面土坑②に切られるものの、斜面を削って掘り込まれている土坑である。機能は前述のとおりである。

〈SK7〉

この土坑は前述した1-B号窯前面土坑の左側に隣接して掘り込まれているもので、全体図では円形プランとなっているのだが、検出当時は非常に不定形なプランをもっていて、断面を見てもオーバーハングするなど、無造作に掘ってある印象である。覆土は灰層が主体で、壺を中心とし食膳具破片が多く出土する。

3. 排水溝 SD1

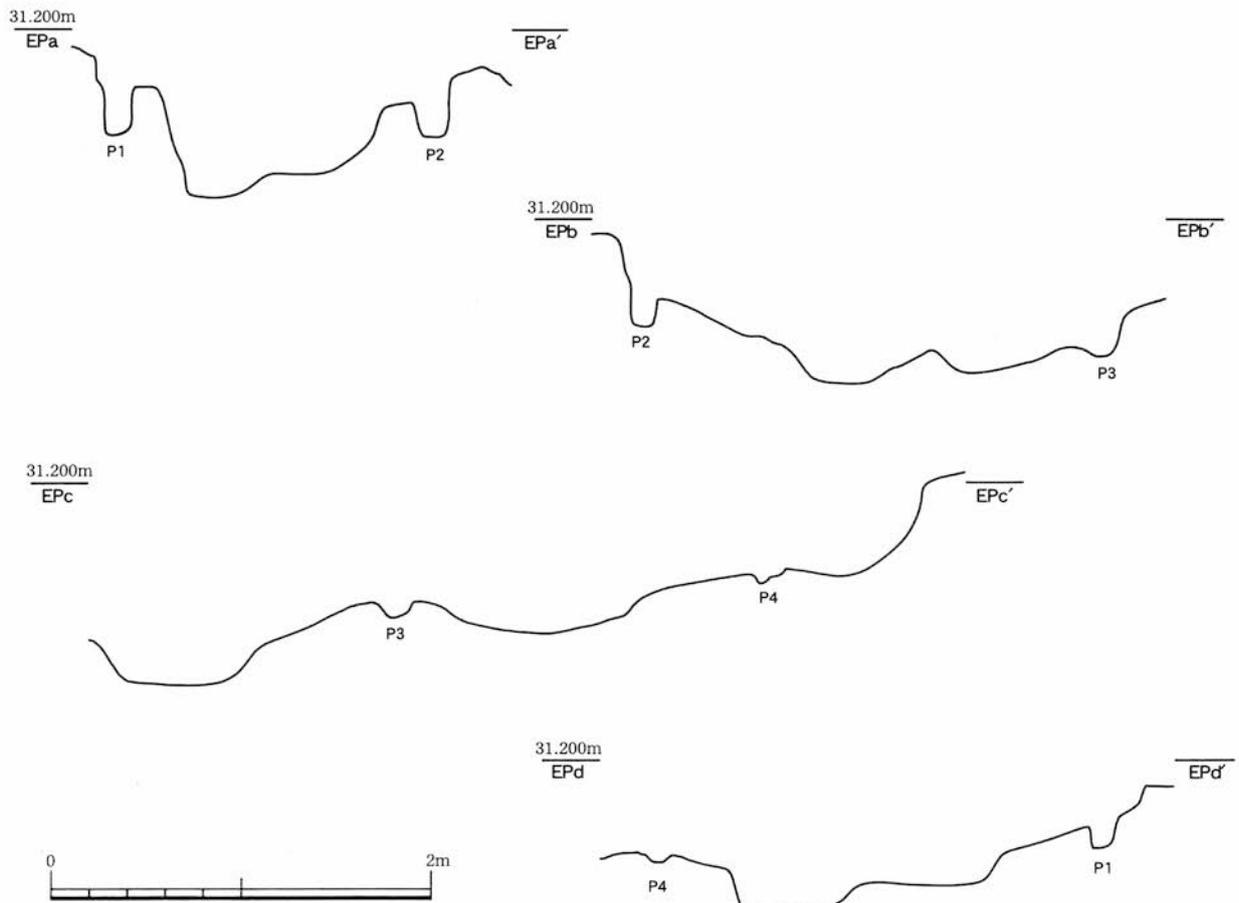
SK2製炭土坑の北側に位置する溝である。長さ300cm、幅26～55cm、深さ35cmを測るが、削平を受けており、全体規模は本来もっと大きかったのではないかと考えられる。この溝は、SK2製炭土坑と標高が同レベルで、他の土坑よりも上層に位置する。調査担当者によると、SK2に関係があった可能性があるということである。SK2の排水施設であった可能性が窺えよう。



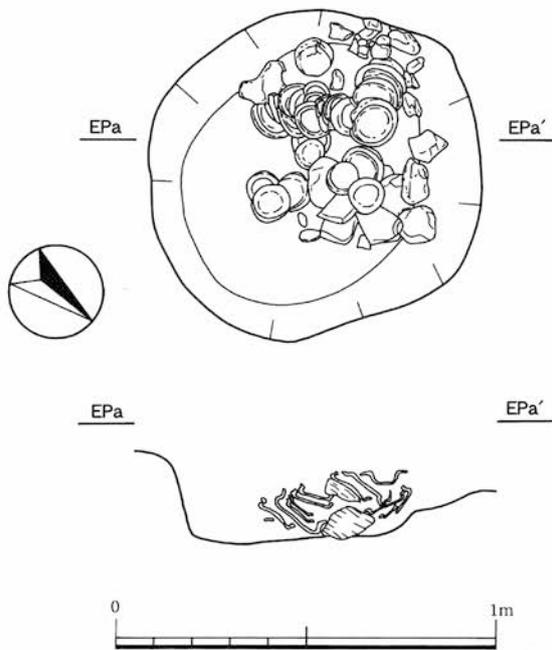
A地区 SK5 土層註

- 1層：10YR4/4褐粘質土（砂粒含む、炭粒ブロック、焼土ブロック少量含む）
- 2層：7.5YR4/4被褐粘質土（炭粒ブロック多く含む、焼土ブロック少量含む）
- 3層：7.5YR4/6被褐粘質土（締まり弱い、炭粒、焼土極少量含む）
- 4層：7.5YR4/6褐粘質土砂粒少量含む、炭粒ブロック少量、焼土ブロック含む）締まりよい
- 5層：7.5YR5/6明褐粘質土（炭粒ブロック少量、焼土ブロックやや多く含む）
- 6層：7.5YR5/6明褐粘質土（5層より粘性強く締まりよい、炭粒、焼土焼土少量含む）
- 7層：7.5YR4/6褐粘質土（締まり非常によい、粘性強い、炭粒少量、焼土ブロックやや多く含む）
- 8層：7.5YR5/4にぶい褐粘質土（粘性強い、炭粒、焼土少量含む）
- 9層：5YR4/6赤褐粘質土（炭粒極少量、焼土ブロック多量に含む）
- 10層：7.5YR4/4褐粘質土（炭粒、焼土極少量含む）
- 11層：7.5Y8/1灰白粘土（左のややサラサラして粒々、粘土塊焼台の土）
- 12層：7.5YR5/2灰褐砂粘質土（締まりよい、炭粒ブロック少量、焼土極少量含む）
- 13層：7.5YR4/4褐粘質土（焼土ブロック、炭粒少量含む）
- 14層：7.5YR4/6褐粘質土（粘性やや弱い、炭粒ブロック少量、焼土ブロック大含む）
- 15層：7.5YR5/4にぶい褐粘質土（焼土ブロック多量に含む、炭粒少量含む）
- 16層：7.5YR5/6明褐粘質土（炭粒、焼土少量含む）
- 17層：7.5YR5/6明褐粘質土（炭粒少量含む）
- 18層：7.5YR4/6褐粘質土（炭粒、焼土少量含む）
- 19層：7.5YR5/4にぶい褐砂粘質土（締まりよい、炭粒極少量含む）地山
- 20層：7.5YR4/6褐粘質土（炭粒、焼土少量含む）18層とはほぼ同じ

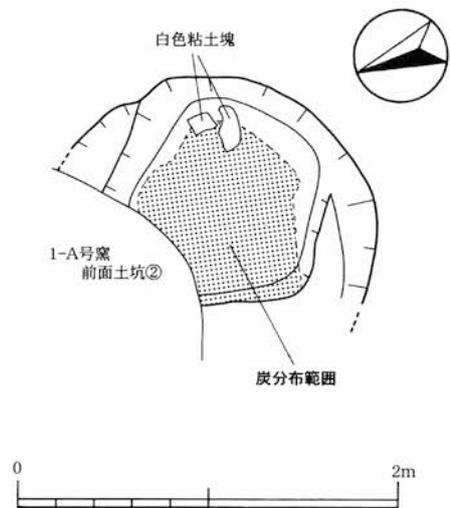
第19図 A地区 SK5平面図・セクション図 (S=1/40)



第20図 A地区 SK5ピットエレベーション図 (S=1/40)



第21図 A地区 SK4平面図・断面図 (S=1/20)



第22図 A地区 SK6平面図 (S=1/40)

4. 粘土塊集中1

2号窯埋土上層で検出されており、土坑のような落ち込みはもたないが、粘土塊置台が多量に検出されたものである。2号窯埋土のグリッド共通土層⑤層に含まれるもので、この層は2号窯陥没後の流土堆積層である。1-A号・1-B号窯の段構築に使用されている粘土塊置台を主体として遺物も含む。遺物は8世紀のものも混在しているが、ほぼ10世紀のものが主体となっている。断面観察で、1-A号窯灰層が埋まった更に上層に位置するため、どの窯に伴うものであるか不明である。

5. 粘土塊集中2

これも落ち込みを確認できないものであるが、多量の粘土塊置台が集中して検出されたものである。SK6と1-A号窯前面土坑2の上層に位置するものである。坏Aが含まれていないことから、1-B号窯で使用した粘土塊置台を、すぐ脇の窪みに集中廃棄した可能性もあるのではないかと考えているが、これだけでは判断は非常に難しい。

6. 上層灰原

調査区で検出している3基の窯の燃焼部から前面土坑までの範囲で、灰原と考えられる層を検出している。この層は、各々の窯天井崩壊に伴って陥没した窪みを中心にして、流土堆積する層よりも更に上位層レベルで確認されているものである。灰と遺物を多量に含む黒褐色土ベースであるが、間層が混入するため、I次・II次と灰層を区分することが可能である。遺物は、10世紀前半、つまり1-A号窯、1-B号窯と同時期のものが出土している。ただ、1-A号窯、1-B号窯の陥没後の堆積流土上層に灰原層が位置するため、これらの窯に伴うとは考えにくく、調査では別の窯跡の存在が窺われ検出にあたったが、どうしても確認することはできなかった。このような状況で灰原と称することが正しいか否か判断が難しいが、灰を多量に含むことからモノバラや土器集中という名称を付けずに、あえて灰原としている。

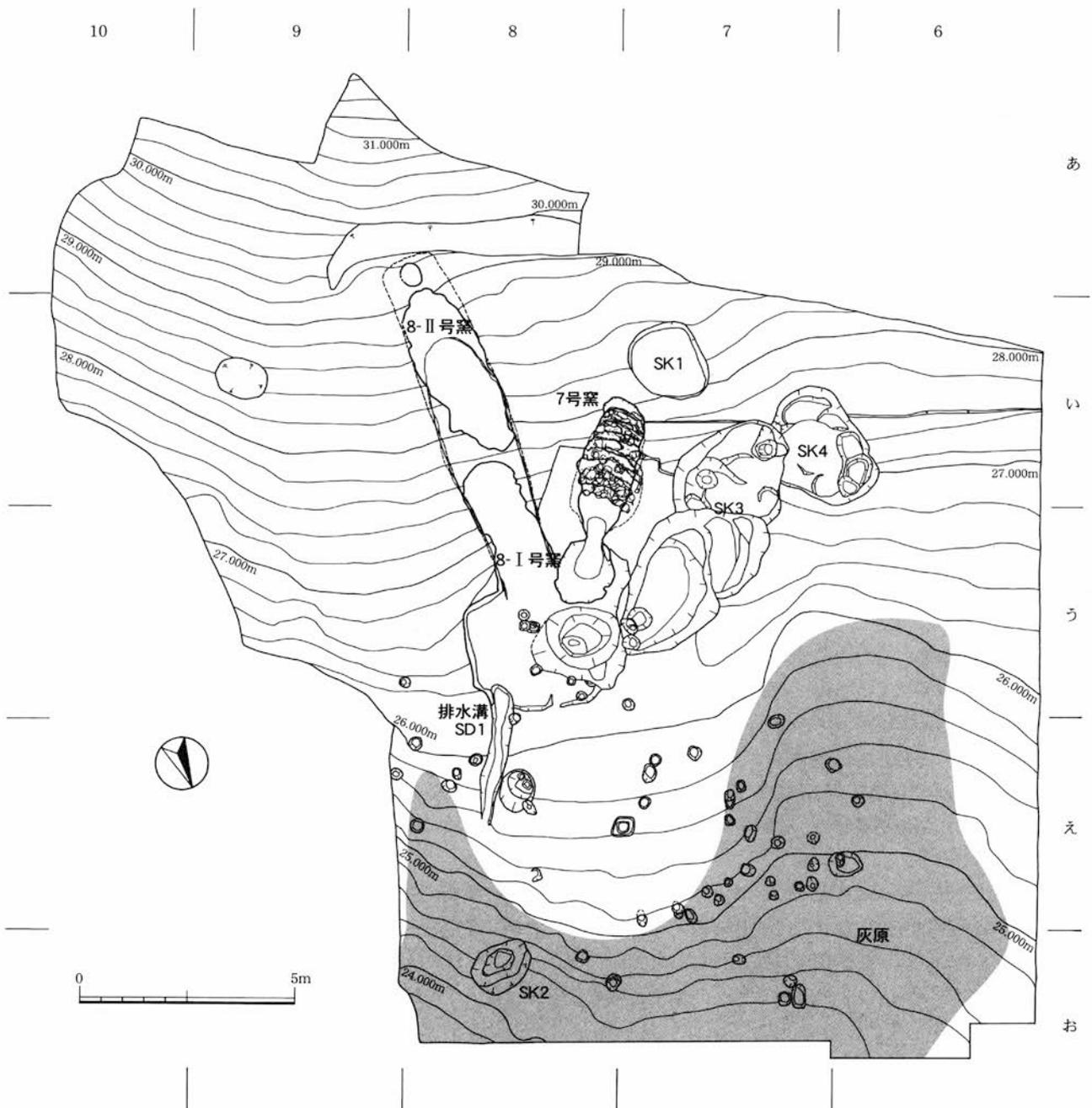
第5項 昭和58年度灰原調査との照合

ここで、触れなければならないのは昭和58年度灰原調査分についてである。昭和58年度調査では、`1号窯灰原、`2号窯灰原、`3号窯灰原、の3箇所の灰原が検出されている。本調査検出の窯体と灰原の照合を試みる。`2号窯灰原、は、8世紀の遺物が主体の灰原で、2号窯と完全一致している。`1号窯灰原、は、出土遺物からみて1-A号窯と一致している。同じく1-B号窯とも一致する。しかし`1号窯灰原、を2分することはできず、遺構名をAとBに分けているのである。さて、3号窯灰原であるが、伴うものがないのである。調査時に、3号窯灰原に伴う窯跡の存在を考慮し検出にあたったのが、確認ができず宙に浮いた存在となった。3号窯灰原の器種構成を見てみると、1-B号窯出土遺物と似ている面もあるが、1-B号窯出土の遺物が稀少なために確定はできず、可能性だけはあると言える。しかし`3号窯灰原、は、貯蔵具の割合が非常に多く、小型窯である1-B号窯で貯蔵具を大量に焼成したとは考えにくいだろうとの望月氏の助言を受けている。更に`3号窯灰原、は、貯蔵具の他多量の粘土塊も多く伴っており、通常の灰原に比べ特異なものであったようである。以上のことから検討すれば、複数の窯の廃棄集中の場であった可能性を考える方が妥当であろう。また、2号窯上層にも同じような粘土塊集中1や、その更に上層に広がる上層灰原が広がっていることについてである。前述では不明と記述しているのだが、`3号窯灰原、の位置や灰原の流れ方向性から検討すると関連を否定することはできないと思われる。このように一連の集中廃棄箇所と位置づけ可能であれば2号窯左側に広がる広いスペースは、製品選別場としての機能をもった空間と位置づけることもできるのではないだろうか。

第2節 B地区(B'地区)の調査

B地区は二ツ梨豆岡向山の北側斜面に位置する。南東側半区域の斜面において、窯跡1基と、これらの窯に付属する形で土坑4基、灰原、人為的な盛土によるテラス面、排水溝1条、ピット群を検出している。また、土坑としての落ち込みをもたない還元粘土塊（置台）や土器の集中箇所を1箇所検出しており、粘土塊だまりと名付けている。また、地区北側区域では削平を確認、北西側半区域では若干の遺物、炭を含む層を確認し炭窯の存在が予想され検出にあたったが、近代の切り盛りによる削平、多くの近代の攪乱を確認した。遺構は検出されていないため、以下の報告はB地区南東側半区域のみとし、北西側については割愛する。

B'地区は、B地区7号窯調査時に別の窯跡焚口を検出したことから、B地区南東側を更に拡張して調査区を設定した区域である。この区域からは、8号窯1基が検出され、これに付随する施設関連遺構や土坑等は確認されていない。以上、B'地区単独として報告せず、B地区に含めた形で報告したいと思う。



第23図 B地区 遺構検出地区全体図 (B地区南東側1/2区域) (S=1/150)

第1項 8号窯

8号窯は地下式焼成部掘り抜き式の窖窯である。燃焼部は半地下式構造をもつ、仮設天井架構式であることが本調査で判明し、後に詳細を述べる。付属施設は、焚口前面に位置する前庭部と排水溝があるが、排水溝についてはその他の遺構で述べることとする。

8-I号窯と8-II号窯について

8号窯は2基の窯跡が重複する。最初に構築された窯跡を8-I号窯、2番目に造り替えられた窯跡を8-II号窯とする。最初の窯(8-I号窯)の奥壁から、次に造られた窯(8-II号窯)の奥壁までの差が、水平長で213cmであった。最初の窯の焚口は不明であるものの、前庭部においても奥側へ更に掘り込まれた痕が検出できていることから、全体に奥側へずらして造り替え、もしくは窯体奥部分を拡張しての造り替えがなされたものと考えられる。また、各々床を1回ずつ修復しており、各々1次床、2次床とする。よって、第一段階として8-I号窯1次床、第二段階として8-I号窯2次床、窯の造り替えを経て、第三段階として8-II号窯1次床、第四段階として8-II号窯2次床の順となる。

1. 8-II号窯

8-II号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃焼部：あ2b類	排煙口・煙道：Ⅲ1(b)類
----------------------	-------------	---------------

8-II号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入）

窯体実効長：856	最大幅：178	窯体内最大高：96	焼成部床傾斜：18(15~24)度
窯体水平長：825	焚口幅：推128	煙道長：残90	燃焼部床傾斜：-10度
窯体実長：860	焼成部口幅：128	窯体床面積：12m ²	残存：焚口僅か欠け
焼成部長：(水)688	奥壁幅：120	焼成部床面積：10.4m ²	修復回数：床1，壁1
(実)718	煙道径：54	燃焼部床面積：1.6m ²	時期：8C1/4
燃焼部長：132	窯体実効高：330		

造り替え後、最終操業段階の窯である。焚口と燃焼部の一部が7号窯によって切られ、僅かに欠けている。

焚口及び燃焼部と焼成部口の構造

焚口は右側が7号窯に切られているため不明であるが、焚口幅を推定することは十分可能で、その幅128cmとなろう。焼成部口も同じ幅をもつため、燃焼部は幅の変わらない長方形の平面プランである。燃焼部の側壁は、両側壁ともほぼ垂直気味に立ち上がり、焼成部に入ると内湾気味を呈するので、その差は非常に分かりやすいと言える。この燃焼部と焼成部口で、今回検出可能であった痕跡について記述する。

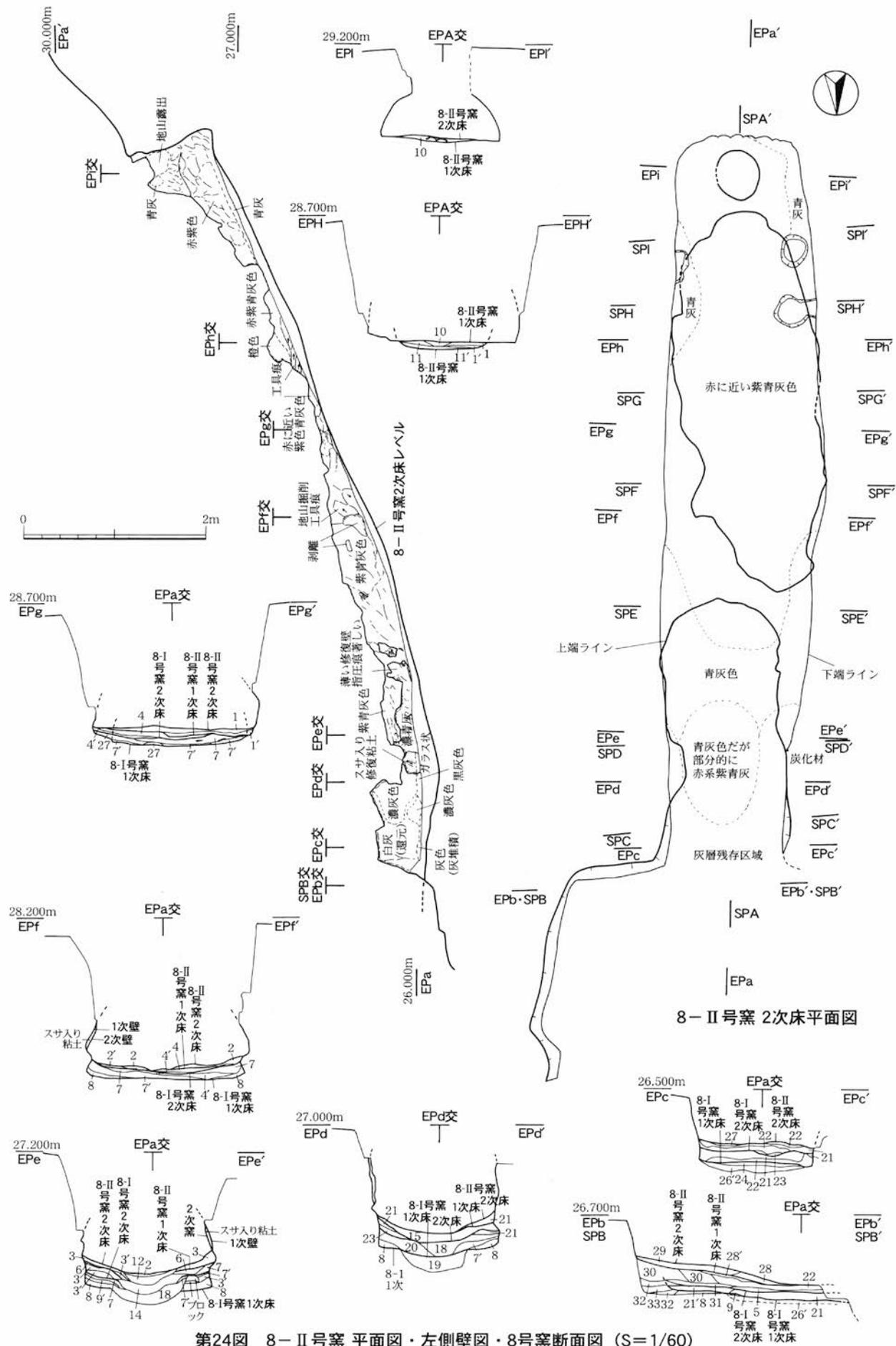
〈構築材〉

焚口から焼成部口までは幅128cm長さ132cmで、ほぼ同じ幅を保ち、焼成部口に向かって傾斜10度下りながら、焼成部口を境に焼成部に入ると幅にやや広がりを見せる。ここで焼成部口の両側壁に構築材を検出している。右側では、検出側壁上位の地山部分で床から上62cmの地点で、地山に横打ち込みの状態で見出す。材は炭化し、径は長径2.5cm、短径1cmあり、これと元は繋がっていたと考えられる炭化材をほぼ同位置25cm下の崩壊土中で検出している。残存径が2.5cm長さ15cmで、切り口を観察すると銀杏型を呈しており、元が径5cmの材を1/4に割って使用しているものと考えられる。左側の構築材は、床から64cm上の地点で検出、炭化している。しかし調査中に窯壁ごと崩壊してしまい、詳細は不明である。

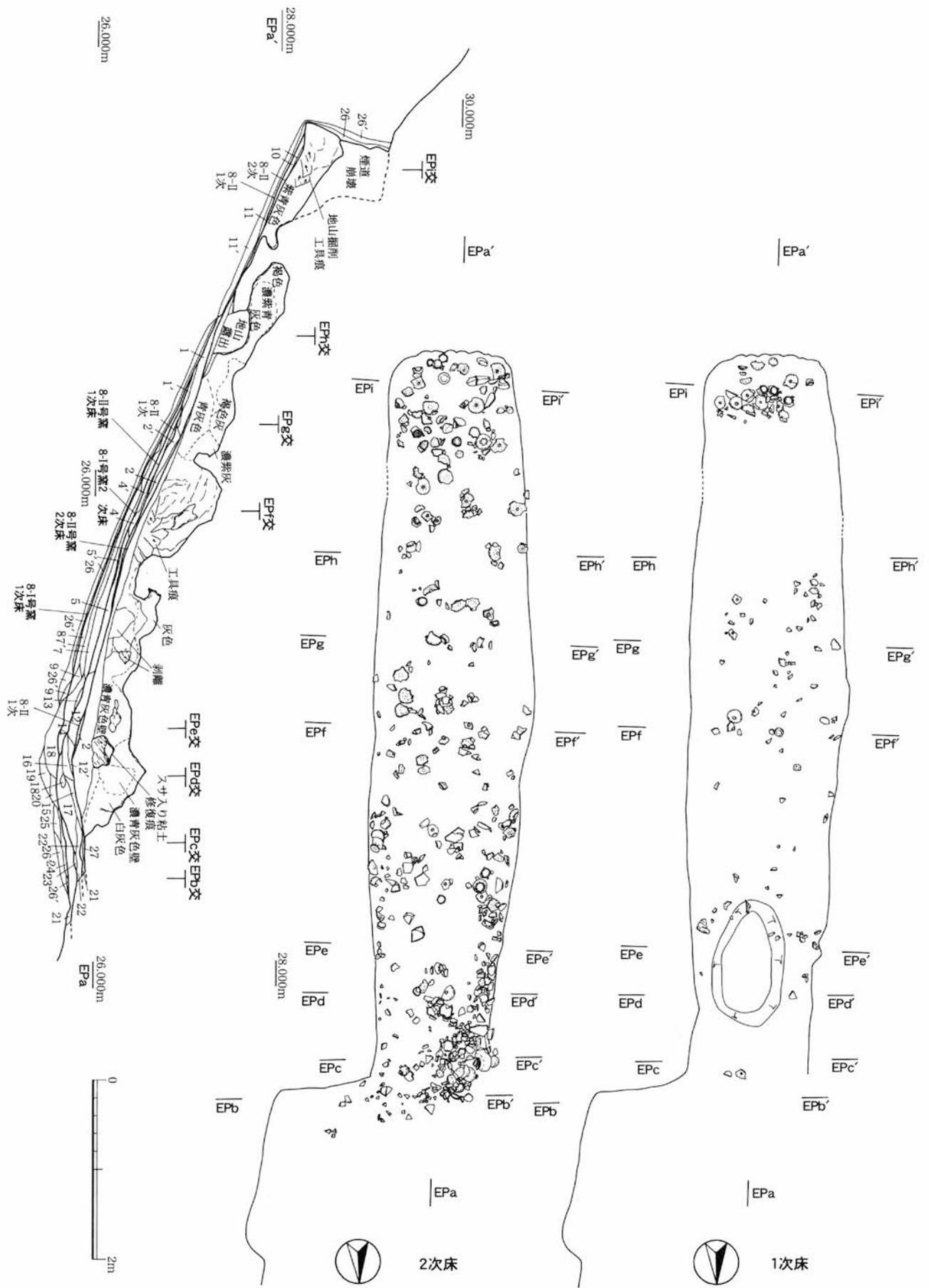
構築材の位置から、焼成部口の高さは60cm程であったと考えられる。構築材が横に打ち込まれていることにより、仮設天井は平坦なものであった可能性は強いと言えようが、地山打ち込みの構築材の検出は、以上の2箇所のみで、これより手前の焚口・燃焼部では検出されていない。また、検出した仮設天井崩壊土の中に構築材の痕跡を検出できなかったのも、どのように骨組みされていたか等不明であり、今後の課題となった。

〈仮設天井架構〉

8号窯は地下焼成部掘り抜き式、須恵器窯構造資料集2の窯構造名称によるA2類にあたる。つまり焚口・燃焼部は仮設天井架構であるが、この部分で埋土掘削時に明らかに地下式で見られるような地山が強く還元する質の天井とは明らか異なる質の層が、まとまって検出できている。範囲は、焚口右付近を一部除去しすぎてしまったが、それで



第24図 8-II号窯 平面図・左側壁図・8号窯断面図 (S=1/60)



第25図 8-II号窯 遺物床面出土状況図・右側壁断面図 (S=1/60)

8-II号窯 床下断面 土層註

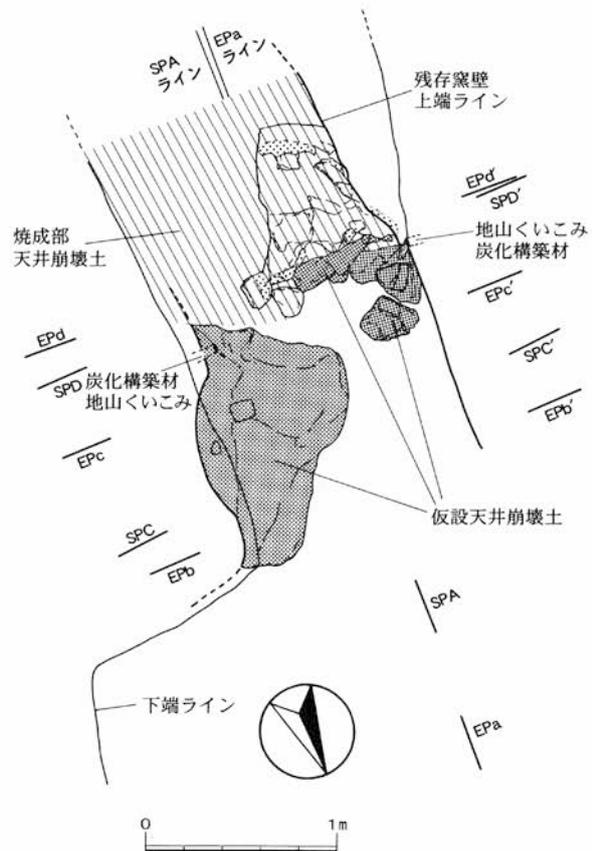
- 1層：極暗褐色土(5YR2/3~2/4)の粒ベース。還元ブロックや灰黄色ブロック(10YR4/2)が混ざる。全体に粒状で手応えのある硬さだが、ザックザック。
8-II号窯2次床
- 1'層：1層被熱。被熱色は褐色に近い赤。
- 2層：極赤褐色土(5YR3/3)粒ベースで、1層と同じものが混ざる。ザラザラ。
8-II号窯2次床
- 2'層：2層被熱。
- 3層：暗オリーブ(5Y4/3~4/4)。ボンボンで締まりに欠ける。8-II号窯2次床
- 3'層：3層が焼けて、にぶい赤褐色土(5Y4/4)に。被熱色は、赤褐色土(5YR4/8)+暗赤褐色(5YR3/6)。
- 4層：黒褐色土(5YR5/1)。砂。8-II号窯1次床
- 4'層：4層被熱。鈍い赤褐色土(5YR4/4)。砂。
- 5層：オリーブ黒(7.5Y3/1)+灰色(7.5Y4/1)。8-II号窯1次床
- 5'層：5層被熱。被熱にむらがあり、赤褐色土と、褐色系。硬い。
- 6層：炭層。暗オリーブ還元砂と若干混在。8-II号窯1次床
- 7層：灰色土(10Y4/1)+オリーブ黒(5Y3/2)+ブロック状のオリーブ黒(7.5Y3/2)。しっかり締まる。たたきしめたような硬さ。8-I号窯2次床
- 7'層：7層被熱。還元ブロック混入。赤褐色土(5Y4/3~4/4)。
- 8層：7層被熱しない。明黄褐色土(7.5YR5/8)、焼土や還元ブロックが入っている。締まりもない。山土。
- 9層：7層と8層の混在層。きれいに被熱でなくて8層ブロック混入。
- 10層：オリーブ灰(10Y4/2)ブロックに暗オリーブ(5Y4/3)+鈍い褐色土(7.5YR4/3)混在。締まっている。炭ブロックや焼土混入。8-II号窯2次床
- 11層：還元がない。(床面をとおしたか?) 8-II号窯1次床
- 12層：オリーブ灰ブロック(10Y4/2)ベースに、暗灰黄色土(2.5Y4/2)混入。これがベースとなっていて、様々な色の還元ブロックが混ざる。締まりあり。ガチガチ。8-II号窯1次床に伴う舟底状ビット
- 12'層：1層と同層。ただ、還元状態弱い。ベースは暗褐色系となる。8-II号窯1次床に伴うもの
- 13層：オリーブ黒(10Y3/1)+暗オリーブ(5Y4/3)ベースで、様々な色の還元ブロックが入る。ガリガリ、ガチガチ。8-I号窯1次床に伴う舟底状ビット
- 14層：暗褐色土(10YR3/2)、赤褐色土ブロック、褐色土(10YR4/4)、灰色土ブロック(10Y5/1~4/1)が粒状やブロック状で混在する。手応えなく締まりない。8-I号窯1次床に伴う舟底状ビット

- 15層：還元ブロック、焼土ブロック、灰、白色土ブロック、地山黄砂状ブロックなどφ0.5~2.0のブロックの隙間に、褐色土(10YR4/6)が入る。締まり極強。
- 16層：これは、15層が若干還元しているような状態で、15層のベースがオリーブ灰褐色になる。
- 17層：この層も基本的に15層と変わらない。しいていえば、ベース土が若干濃い。褐色土(7.5YR4/4~4/6)。炭は多い。舟底状ビット、8-I号窯2次床に伴う?
- 18層：暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)。還元塊小、少し含む。8-I号窯1次床に伴う舟底状ビット
- 19層：褐色土(7.5YR4/6)ベースで、焼土や還元ブロックφ1.0~3.0
8-I号窯1次床に伴う舟底状ビット
- 20層：暗褐色土(7.5YR3/4)ベースで、硬い白色土φ3.0、灰、焼土ブロックが多めに
入る。締まり若干あり。8-I号窯1次床に伴う舟底状ビット
- 21層：灰層。黒褐色土(10YR2/3)+暗褐色土(10YR3/3)炭多量含有。締まり欠け。
- 22層：還元ブロック、焼土ブロックがベースで隙間に明黄褐色土(10YR4/6)が入る。
ガチガチでよく被熱する。
- 23層：被熱層の弱いもの。黒褐色土が被熱し、部分的に赤くなっていて、周りは暗褐色系にやや硬め。
- 24層：明黄褐色土(2.5YR6/6)地山被熱。
- 25層：ベースは地山被熱層。還元ブロック(青、黄や橙も含む)max1.0多量。
どうも床をこの部分だけ作り替えている様子。
- 26層：暗褐色土(10YR3/3)+黒褐色土(10YR2/2~2/3)=5:5
橙土+赤褐色土ブロック多量。黄土ブロック(焼けた物)も。炭含む。遺物も多い。
- 27層：明黄褐色土(10YR7/6)ガチガチ。
- 28層：黒褐色土(10YR2/2)がベース。明褐色土(7.5YR5/6)ブロックφ1.0~2.0、
炭φ1.0、焼土ブロックφ1.0~5.0多く含む。
- 28'層：28層の被熱層。
- 29層：暗褐色土(10YR3/3)と、明褐色土(7.5YR5/6)ブロック砂質が混ざり、
炭(φ0.1~1.0)多量。焼土や還元ブロックも多い。これらが混ざり合ってアワ
オコシ状に。締まりあり。
- 30層：暗褐色土(10YR3/3~3/4)に褐色土ブロック(10YR4/6)φ1.0~2.5が混ざる。
比率 暗:褐=5:5炭などはブロック状で多量、全体にアワオコシ状。還元プロ
ックも入る。
- 30'層：30層と基本的に同層だが、褐色土の割合が大きい。比率 暗:褐=2:8。締まり強。
灰粒大きいφ1.5~5.0。
- 31層：褐色土(10YR4/6)+黄褐色土(10YR5/6)の砂。若干還元ブロックや、炭粒、
焼土が入る。しっかり締まる。人為的に入れて叩き締めた感じがする。
- 32層：褐色土(10YR4/6)若干の還元ブロックや炭粒が入る。締まりややあり。
- 33層：褐色土(10YR4/6)粘性あり+黄褐色砂粒(10YR5/6~5/8)締まりややあり。
若干の還元ブロックや炭粒の微粒含む。

も焚口から焼成部口まで至り、おそらく燃焼部全面に及んでいたと思われる。質は、スサを多く含む砂混入粘土で、内面にあたる焼成面は弱く還元しており、その色調は土色帖で明黄褐色(10YR6/6)、灰白色(7.5YR7/1~7/2)、灰色(7.5YR4/1)であった。最も外面にあたる部分は酸化被熱している。還元面にしろ外面にしろ、総じて非常に脆く被熱も弱いため、繰り返して使用されたような痕跡は薄いと言えよう。仮設天井を含み、燃焼部について不明点が残っている。閉塞方法である。これは窯壁の還元が焚口から手前の前庭部へ曲がった部分にまで広がっているからで、同時期の2号窯や9号窯でも確認されているものだが、閉塞された痕跡が検出できていない。今後の課題となった。

奥壁及び排煙口と煙道

煙道上部が削平を受けており、残存長が90cmに留まっているが、これを除けば完存に近い良好な検出状況である。切り盛り削平であり、本来の標高から推測すれば、煙道長は150cmから170cm程あったものと考えられる。焼け具合はやや淡い青灰色還元状態を呈す。煙道の直径は径28.0cmで下部から上部までほぼ同じ径を保つ。



第26図 8号窯 燃焼部仮設天井崩壊土検出状況図 (S=1/40)

やや大きめの径をもつ煙道であると言えよう。奥壁は内側へ20度傾斜して曲がり、この角度を保って排煙口に続く。所謂、直立煙道型の構造である。

焼成部

天井の残存状況であるが、焚口から奥壁へ300cmの地点より30～100cmの範囲と、奥壁から排煙口を含め86cmに渡って残存し、窯体内天井高は95cm、これ以外は陥没崩壊している。

平面プランはやや胴の張る長胴型で、全長は823cmを測る。奥壁は丸みを帯びず、側壁はやや内傾する。床は、奥壁に向かい15度から最大でも24度の傾斜をもっている。この傾斜角度は、この時期特有の緩傾斜型タイプであるのだが、調査者はふんばってやっと立っていた。床は1度の修復が行われているが、部分的に砂を敷くといったものであり、床の窪んだ部分を修復したのであろう。

床や側壁の焼け方では、非常に強い還元の状態、濃い紫青灰色を呈しており、焼成部の中央から奥にかけては、紫色と焦げ茶色の混ざったような色味（赤紫青灰色）となっていて、特に側壁は硬化を通り越して脆くなっている。置台が取り上げ時に崩れるものもあるといった状況であった。火の廻りが強すぎたせいで見られる現象で、おそらく1200度を超していたのではないかと与語琢磨氏からご指摘を受けている。非常に強い還元雰囲気となった上さらに酸化している。床出土遺物でも酸化を確認しているが、遺物の断面では還元していることから、閉塞後の冷却期間中に酸化雰囲気に陥ったものと考えられる。

〈床の状況（1次床・2次床）〉

床の状況は、2次床は前述のとおり赤紫青灰色を呈し、砂質でざらざらした質感をもつ床である。修復という形で床に砂を敷いたと前述したが、上記のような火の廻りが強すぎたことによる影響も考えられる。ただ、焼成部口から燃焼部にかけてはこの状況は確認できておらず、青灰色を呈する。全床面が本来ならば酸化雰囲気となるはずで、天井の落ち込み土と掘削当初区別できなかったため掘りすぎてしまった懸念も残る。また、1次床は、やや暗めの青灰色を呈すもので、焚口付近では灰層も幾分残存する状況である。

窯体掘削工具痕

地山を掘削して窯体を構築する時にできる掘削痕が側壁の一部に見られる。殆どが手前から奥へ向かって掘り進まれている。奥壁と床の境部分では、ある程度丸みをもつ工具が使用されたようで、1単位の幅13cmの半円形8つからなる工具痕が残存。上から下方向へ掘られた痕跡が認められた。奥壁の上部や煙道については掘削痕を確認することができず、非常にランダムに掘っている印象を受けた。

壁・床の修復

床の修復については前述しているので割愛するが、側壁の修復について記述する。右側壁では焼成部口から奥壁方向へ38cmの幅で、左側壁についても焼成部口から奥壁方向へ25cmの幅で修復痕を確認している。スサ入り粘土を厚く貼り付けている。これ以外は側壁の剥離などもあり確認できていない。

床下遺構（舟底状ピット）

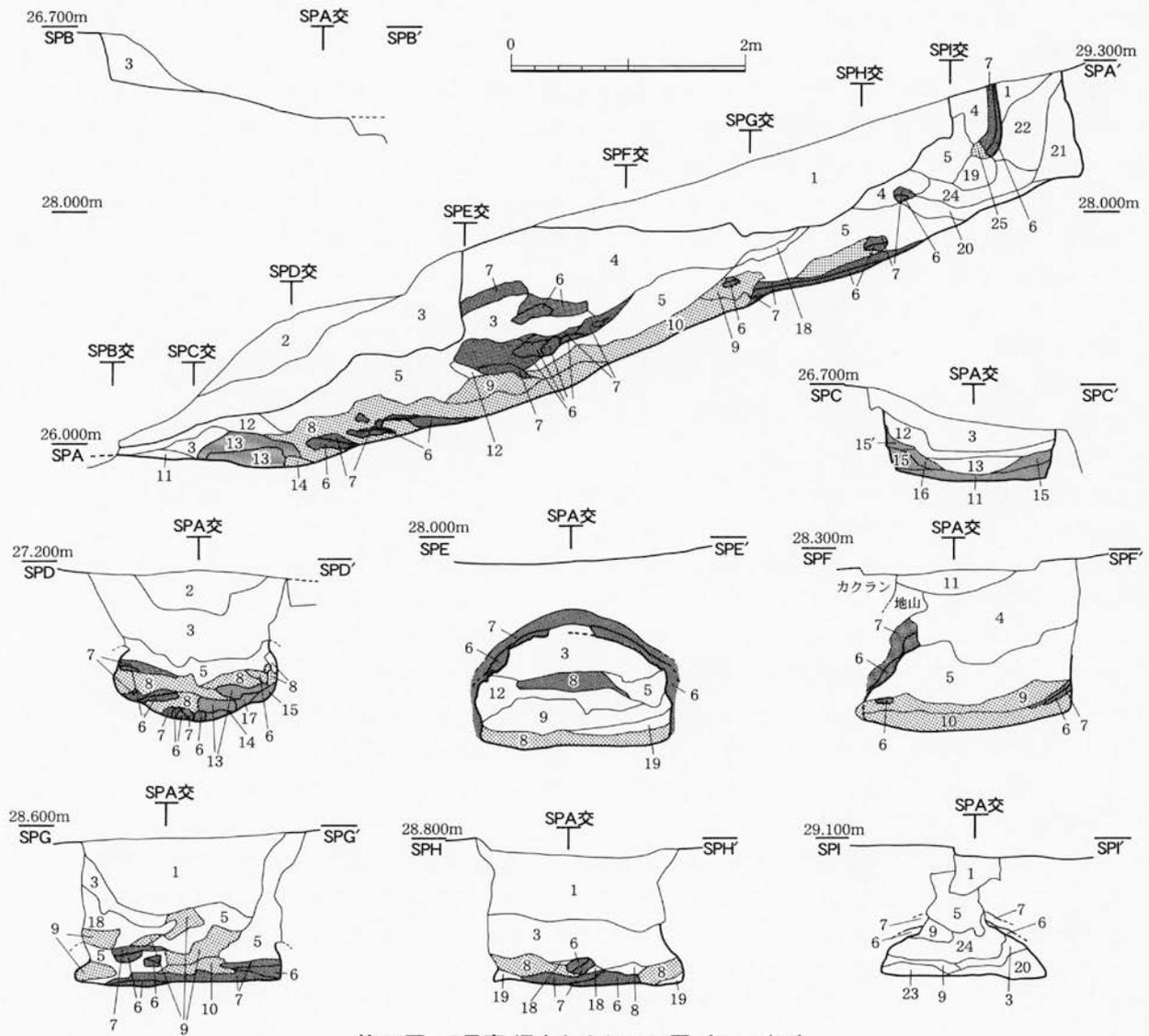
舟底状ピットが確認できるが、8-II号窯2次床下に重複する8-I号窯を含め計4枚分の床の舟底状ピットがほぼ同じ位置にあることから複雑な土層を呈しており、どの床にどの舟底状ピットが伴うのか断定するのは難しい状況である。ただ、8-II号窯2次床に伴うものは位置を焼成部口を中心として楕円形状の深さ10～15cm程度と非常に浅いものだったのではないかと考えている。また、8-II号窯1次床に伴うものも同程度のものと考えている。

埋土

埋土では、床面付近天井崩落土や天井と地山との混在層、この上層に天井崩壊に伴う地山崩落土が認められ、地山土の天井残存内への流れ込み堆積も確認している。窯体のどの部分から崩壊したのかは判断することはできないが、天井は一気に落ち込んだものものと考えている。煙道部では流土堆積が認められ、また燃焼部や焼成部奥壁側でも陥没痕への流土堆積が見られる。窯は埋め戻しされることもなく、そのままの状態で廃棄、自然に天井や地山が崩落したが煙道部分は崩落せず残り、陥没部分に流土が堆積し自然に埋まっていったものと思われる。

前庭部

前庭部の右側については7号窯に切られており不明であるが、左側は、焚口から角度10度で開く形状である。残存部分から全体の平面形を推測すれば、台形に近い略方形であったものと思われる。8-II号窯の前庭部は、8-I号窯の前庭部より奥壁側へ、どの位掘り込まれたかは不明であるものの、ずらして掘り込まれている。ただ8-I号窯床レベルよりも8-II号窯床レベルが高く、窯床が嵩上げされている状態で、これに伴い、前庭部床全体も20～27cm



第27図 8号窯 埋土セクション図 (S=1/60)

8号窯 埋土土層註

- 1層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)+暗褐色土(7.5YR3/4)=6:4 陥没後の堆積土。粘性あり。焼土ブロック還元ブロック少し入る。
- 2層：陥没後の堆積流土。褐色土(7.5Y4/6)で、所々色が濁る。締まりはあり、炭や還元ブロック少し入る。
- 3層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)。陥没後の堆積土。焼土ブロックや弱い還元ブロックΦ2.0~4.0が少し入る。
- 4層：明褐色土(7.5YR5/6~5/8)地山層。
- 5層：褐色土地山層に明褐色土ブロックが混ざる地山層。天井崩壊に伴う地山崩壊土。
- 6層：天井。地山青灰色還元部分。
- 7層：天井。地山酸化被熱部分。
- 8層：褐色土(7.5YR4/6)、明褐色土(2.5YR6/6)の砂ブロック、還元ブロックや焼土ブロック多量が混在。締まりはない。天井崩壊土。
- 9層：8層と同じ天井崩壊土。但し、地山土と赤褐色土が混ざるのがベースで、これに還元ブロックが混在する。柔らかい。
- 10層：天井崩壊土。8層と9層の中間的層。天井ブロックの隙間に地山土や赤褐色焼土が入る。天井ブロックは多量であるが、ブロック自体は小さく固化不能。
- 11層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)と(10YR4/4)の混合。粘りがあり、炭Φ1.0~4.0を少し含む。焼土ブロックは僅かで、締まりがある。
- 12層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)+暗褐色土(7.5YR3/4)=6:4 陥没後の堆積土。粘性あり。焼土ブロック還元ブロック多く入る。3層と似ている。天井並びに架設天井崩壊に伴う堆積土か。
- 13層：スサ入り明黄褐色土(10YR6/6)が還元し、灰白色(7.5YR7/1~7/2)や灰色(7.5YR4/1)となる。還元としては弱いもの。非常にもろい。架設天井崩壊土。

- 14層：架設天井崩壊土と窯体内天井崩壊土が混在する層。
- 15層：褐色土(7.5YR4/6)+明黄褐色土(7.5YR5/6)が弱く還元する。焼土ブロックΦ0.5~1.0が多量に入る。締まりなし。架設天井崩壊土。
- 15'層：15層と同層だが、還元ブロックの隙間に褐色土が混入する。架設天井崩壊土。
- 16層：褐色土(7.5YR4/6)ベース。焼土ブロックΦ0.5~1.5多量。締まりに欠ける。架設天井崩壊土で、天井外側の被熱層。
- 17層：暗褐色土(7.5YR3/4)+褐色土ブロック(7.5YR4/6)、弱く還元するブロック(白色、灰白色でΦ0.5~1.0)が多量。また、弱く被熱するタイプの焼土ブロックが多い。まったく締まりなく、もろく、すぐ崩れる。架設天井崩壊土。
- 18層：4層ベースで、炭が多めに入る。粘性あり。若干の締まりあり。
- 19層：黒褐色土(5YR2/2)+褐色土(7.5YR4/4~4/6)+赤褐色土(5YR4/6~4/8)=5:3:2締まりなく、ざらつき、還元ブロック小(Φ0.5~1.5)多い。
- 20層：褐色土(7.5YR4/4)+暗褐色土(10YR3/4)=7:3。黒褐色ブロック(10YR2/2、Φ0.5~1.0)、焼土ブロック、還元ブロックが多い。締まりはない。天井崩壊後の煙道からの流れ込み土。
- 21層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)ベースで、焼土ブロックΦ1.0~5.0が多く入る。煙道からの流れ込み堆積土。
- 22層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)に被熱の弱い焼土や紫色に近い壁ブロックが多めに入る。締まりは弱く、粘り強。煙道からの流れ込み土。
- 23層：褐色土(7.5YR4/6~10YR4/6)粘り有り。紫色を呈す還元ブロックΦ0.5~1.5が入る。煙道からの流れ込み土。
- 24層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)ベースに暗褐色ブロックや壁ブロックなどの還元ブロックが多めに入る。焼土ブロックは微少。粘りあり。天井崩壊後の煙道からの流れ込み土。

cmの盛土して前庭部床高を調節している。

遺物出土状況

2次床床面からは、取り残しと考えられるものも出土するが、坏A、坏B蓋・身の食膳具を転用した置台が多い。特に焚口から焼成部の右側壁際には甕の破片など貯蔵具の胴部が集中し、灰を伴い、盛り上げられている。その場にまとめて放置したと考えられる。2次床からは置台として使用された鴟尾破片が5点出土している。出土地点は疎らで、統一性もなく何気なく使用したかの印象である。1次床からは、奥壁付近に坏B蓋や坏Aがきちんと並べられ、床に食い込む状態で出土、これ以外では、小破片が中心で遺物は非常に少ないことから、床を修復する前に片づけられたものと考えられる。

2. 8-I号窯

8-I号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃焼部：－	排煙口・煙道：－
----------------------	----------	----------

8-I号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入）

窯体実効長：残窯尻644	最大幅：180	窯体内最大高：残29	燃焼部床傾斜：-8度
窯体水平長：残644	焚口幅：-	煙道長：-	残存：焚口燃焼部欠け
窯体実長：残648	焼成部口幅：120	窯体床面積：残8.1m ²	修復回数：壁1、床1
焼成部長：(水)530	奥壁幅：84	焼成部床面積：6.75m ²	時期：8C1/4
(実)582	煙道径：-	燃焼部床面積：残1.35m ²	
燃焼部長：残114	窯体実効高：170	焼成部床傾斜：18(12~25)度	

8-I号窯は、最初に構築された窯である。この窯の前庭部を奥へ掘削、並びに奥壁部分や側壁と天井を大きく掘り直して、次の窯である8-II号窯を造り替えていることから、残存状況は著しく悪いと言える。ただ、床面の状態は良好で、特に1次床は直ぐに嵩上げが施されたようで遺物の出土も多い。

焚口及び燃焼部について

焚口は8-II号窯によって壊されたと考えられ、位置も状況も不明である。今後の記述で名称に困るので、ここで残存焚口と名付けておく。燃焼部については、残存焚口から1mの範囲で燃焼部と考えられる灰層を確認している。残存状況から、燃焼部は同じ幅の長方形プランであったと思われる。また、残存焚口から114cm地点で側壁がやや開き始め、灰層も途切れるこの部分が焼成部境と考えている。

焼成部

焼成部は胴が張り気味で、奥壁へ向かって丸く窄まり気味となる平面プランをもち、焼成部長が530cmと比較的小さな規模となっている。床傾斜は12~25度で、緩傾斜型と言われるタイプである。

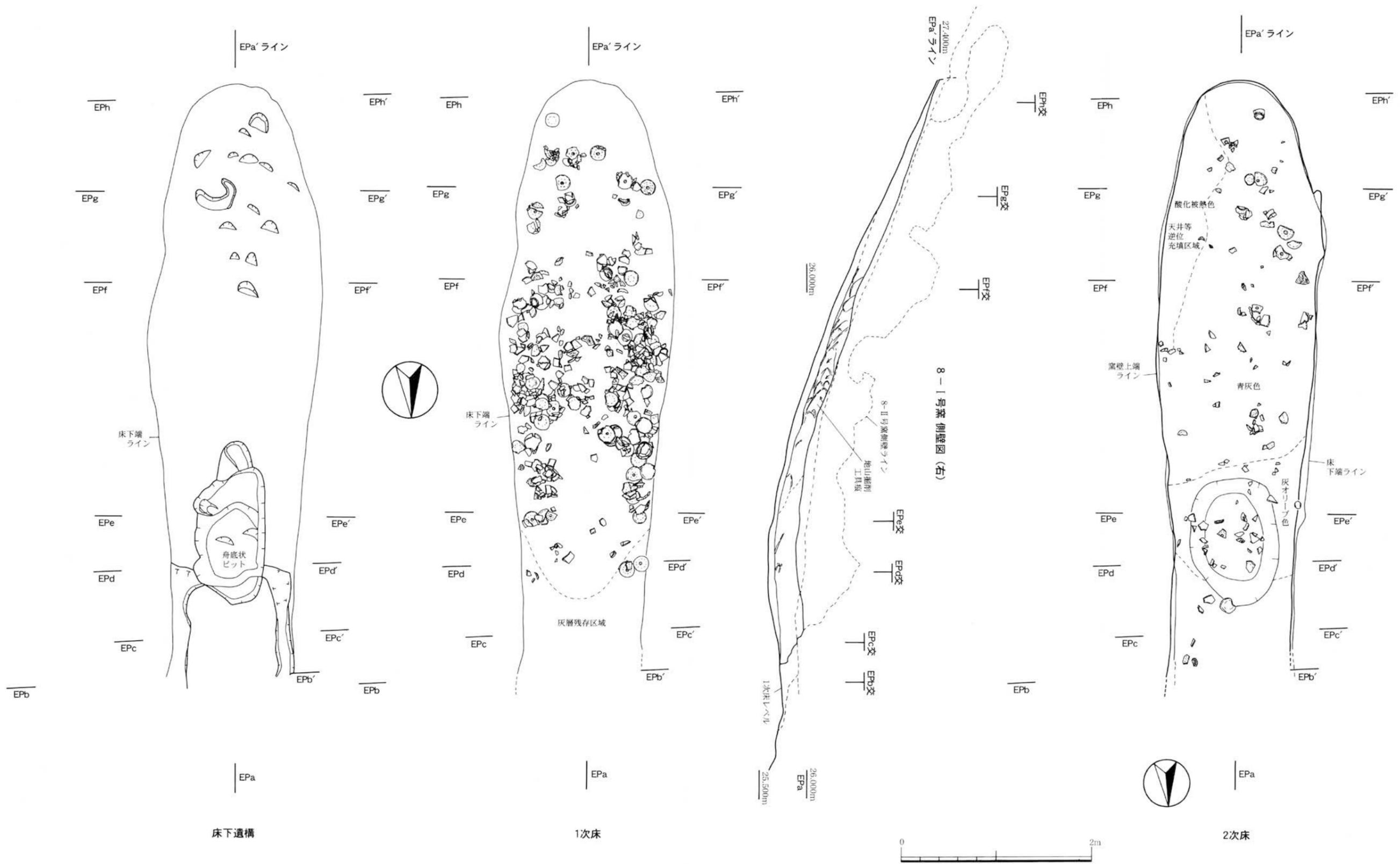
奥壁は僅かに残っているが、8-II号窯掘削により高さ2~5cm程度に留まっている。

側壁は、残存焚口から奥壁へ490cm地点までは8-II号窯側壁と同じ位置をとるが、これより奥は残存高平均20cmで、最大25cm、奥壁近くの側壁転換点では10cm未満を切る状況である。8-II号窯の掘削により8-I号窯の奥壁部分が大きく削り取られたことがわかっていく。残存する側壁は焼成部の中央から奥にかけて青白色、燃焼部付近は白色を呈し半生焼け状態であった。8-I号窯と8-II号窯両者側壁の境は、焼き色も違い、段を持つ等以外と明確で、8-II号窯は、8-I号窯の側壁床から20cm上の部分を更に広げて造られていることがわかった。

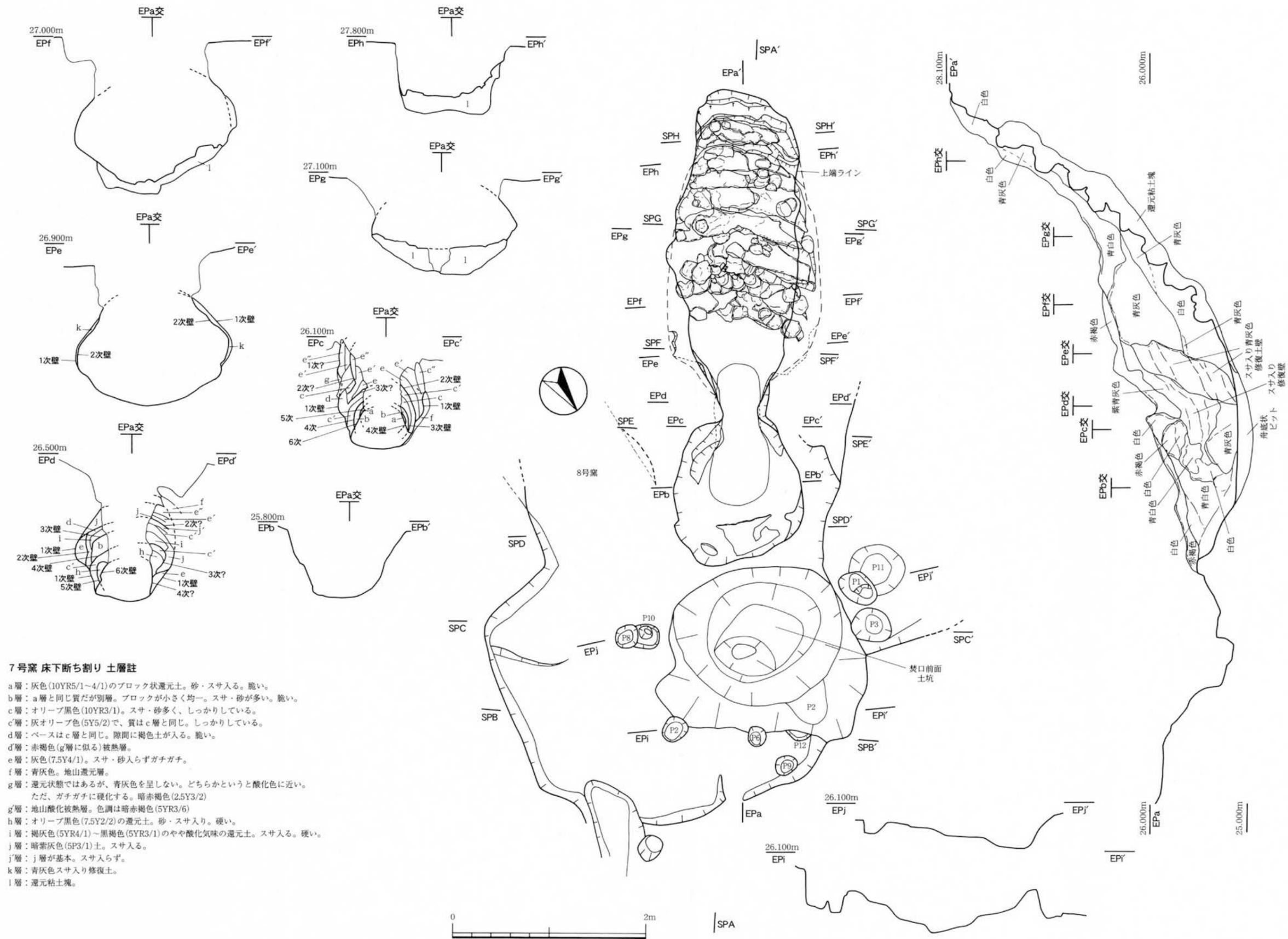
〈床の状況（1次床・2次床）〉

1次床は地山が還元している。しかし、還元は弱く淡い青灰色となっている。つまり半生焼け状態である。

2次床は、1次床の上に、厚い部分では20cm、奥壁へ向かい次第に薄くなって2~3cm程嵩上げて造られた床である。地山土である山土（明黄褐色土7.5YR5/8）を厚く敷いて叩き締めてあり、床面の還元焼成層とその下位層で酸化被熱層が認められ、更に厚い部分では熱の及ばなかった山土がそのまま残存している状況である。2次床構築は、1次床段階で窯内の温度が上がらなかったために、奪われる熱を塞ぐ目的で床の嵩上げをしたものと考えられる。左側壁側の奥壁から230cm幅18~50cmの範囲では、還元部分を下にした状態で窯壁もしくは天井の破片が敷き詰められていた。また、焼け色であるが、手前残存焚口から燃焼部に至る灰層以外は濃い青灰色を呈し、奥へ進むにつれて通常の青灰色となっている。



第28図 8-1号窯 1次・2次床 (S=1/40)



7号窯 床下断ち割り 土層註

- a層：灰色(10YR5/1~4/1)のブロック状還元土。砂・スサ入る。脆い。
- b層：a層と同じ質だが別層。ブロックが小さく均一。スサ・砂が多い。脆い。
- c層：オリーブ黒色(10YR3/1)。スサ・砂多く、しっかりしている。
- c'層：灰オリーブ色(5Y5/2)で、質はc層と同じ。しっかりしている。
- d層：ベースはc層と同じ。隙間に褐色土が入る。脆い。
- d'層：赤褐色(g層に似る)被熱層。
- e層：灰色(7.5Y4/1)。スサ・砂入らずガチガチ。
- f層：青灰色。地山還元層。
- g層：還元状態ではあるが、青灰色を呈しない。どちらかというとな酸化色に近い。
ただ、ガチガチに硬化する。暗赤褐色(2.5Y3/2)
- g'層：地山酸化被熱層。色調は暗赤褐色(5YR3/6)
- h層：オリーブ黒色(7.5Y2/2)の還元土。砂・スサ入り。硬い。
- i層：褐色(5YR4/1)~黒褐色(5YR3/1)のやや酸化気味の還元土。スサ入る。硬い。
- j層：暗紫灰色(5P3/1)土。スサ入る。
- j'層：j層が基本。スサ入らず。
- k層：青灰色スサ入り修復土。
- l層：還元粘土塊。

第29図 7号窯 平面図・断面図 (S=1/40)

窯体掘削工具痕

残存する側壁で僅かではあるが工具痕を検出している。手前から奥へ掘削方向をとるもの、または逆方向をとるものなど混同しており、規則性はみられない。ただ、焚口方面から奥へ向かって掘り進むのが普通ではないかと考えられ、その後に逆方向ないし上部から下部へ斜めに掘削して微調整を施したのではないかと予想される。

壁・床の修復

左側壁で、残存焚口より奥壁方向へ176cm地点から長さ48cm範囲で、スサ入り粘土の修復痕を確認している。また、床の修復は前述のとおりで、1回行われている。

床下遺構

舟底状ピットを確認している。2次床に伴うと考えているものは、床から25cmの深さを測り、ピットプランが楕円形状のものである。1次床のものは、床から20cmの深さをもつ、やや複雑な形状を呈すものである。また、1次床舟底状ピットから両側壁際に浅い溝状のものを検出したが、排水溝としては浅い。よって単なる窪みだったものと考えている。

遺物出土状況

1次床からは坏B蓋や坏Aが多く出土している。生焼け状態の取り残し製品も非常に多いが、置台として使用されているものもある。これらの中では、床に食い込む状態で固定し易い様に一部を打ち欠いて製品が滑落しないよう置台に平坦面をもたせる工夫を施しているものもある。ただこれらの出土遺物は、床嵩上げの土を敷いたためか、滑落のためか、動いている可能性のあるものも含まれている。よってどのように並べられ使用されたのか分からない。2次床からの遺物は非常に少なく、ある程度掃除をしたと考えられる。

第2項 7号窯

7号窯は地下焼成部掘り抜き式である。窯尻が削平を受けているため奥壁並びに排煙口の構造については不明であるが、この他については残存状況が良好と言える。

7号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃烧部：え類	排煙口・煙道：I2類
----------------------	-----------	------------

7号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入）

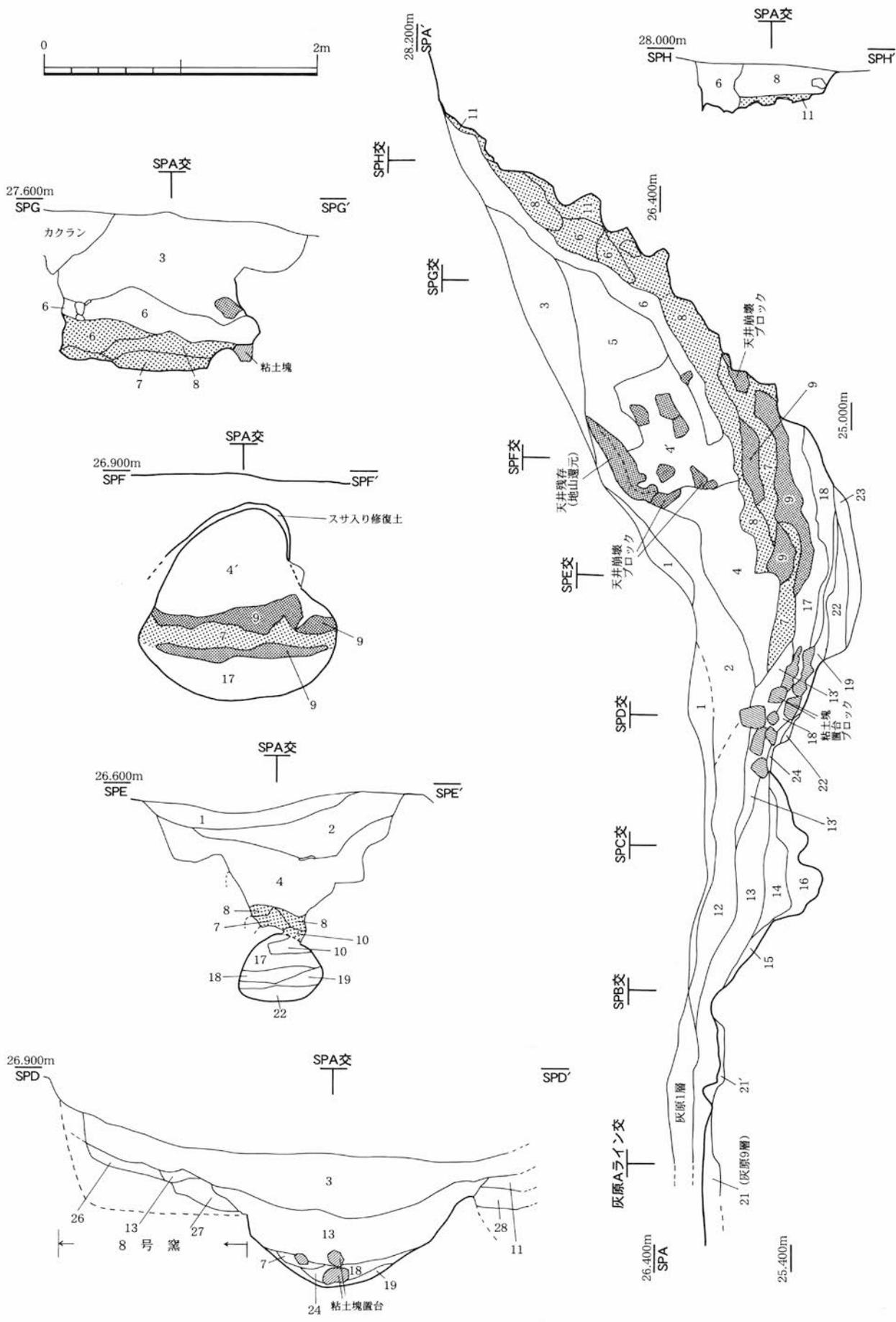
窯体実効長：残480	最大幅：145	窯体内最大高：136	焼成部床傾斜：50（15～60）度
窯体水平長：残480	焚口幅：60	煙道長：—	燃烧部床傾斜：—25～—18度
窯体実長：残504	焼成部口幅：46	窯体床面積：4.17m ²	残存：奥壁欠け
焼成部長：（水）残327 （実）残434	奥壁幅：残95	焼成部床面積：3.75m ²	修復回数：壁1、床4、 焼成部口4
燃烧部長：153	煙道径：—	燃烧部床面積：0.42m ²	時期：10C 2/4
	窯体実効高：295		

焚口と燃烧部

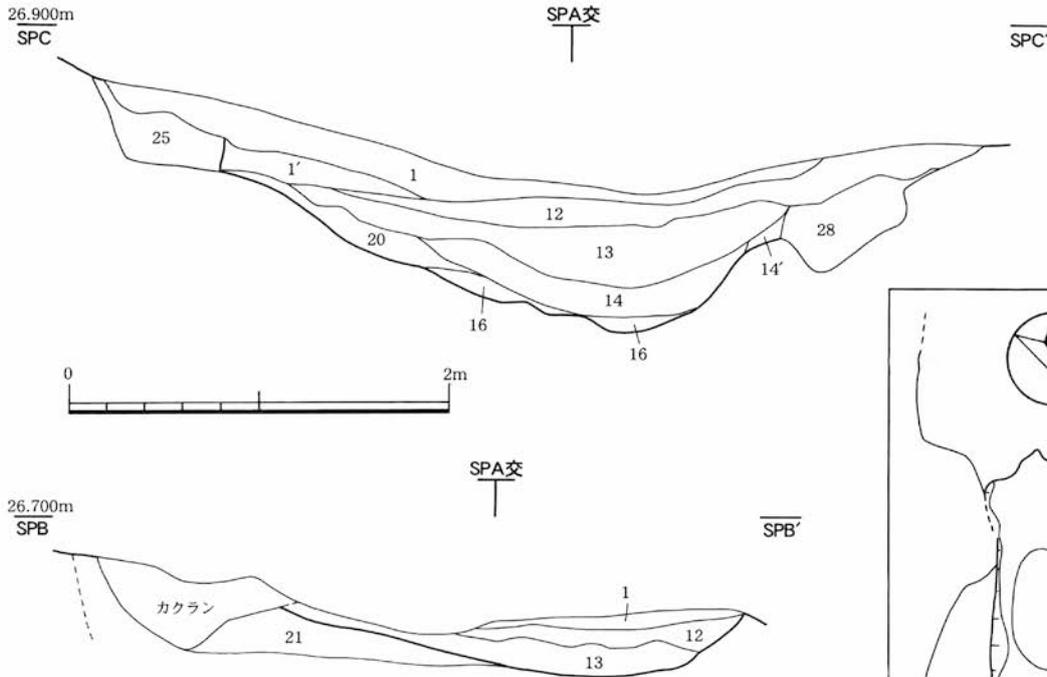
焚口の平面は円形プランで、すり鉢状に焼成部に向かって下がり、傾斜角は落ち込み直後は—25度で焼成部口に近づくに従って—18度を測る。1-A号窯・1-B号窯同様、傾斜燃烧部構造である。この焚口燃烧部は還元焼成されているが、淡い青灰色や白色であり、焼成部に比べれば比較的弱い還元である。ただ弱いとはいえ非常に堅い質をもつ。焚口手前付近では損傷が確認でき、灰の掻き出しによって生じた痕跡と思われる。

焼成部口は1-A号窯同様に焚口から最も下降する地点に位置、非常に明確である。意図的に絞り込まれて横幅52cm高さ44cmを測り、1-A号・1-B号窯同様非常に狭いものとなっている。絞り込みのための粘土の重なりが焚口方向から確認でき、断ち割りから少なくとも4回の絞り込み修復が行われているものと考えられる。断ち割り断面から、スサや砂を多く含む場合とスサを入れずに粘土だけの場合の修復を確認している。

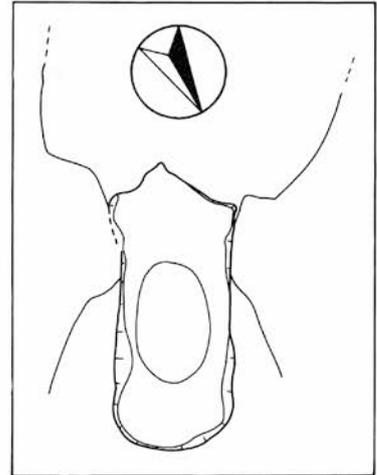
非常に特異な構造をもった焚口燃烧部であるが、南加賀窯跡群の中ではこれまでもこの構造をもつ窯跡は多く検出されている。ただ、この構造について疑問が生じている。焚口燃烧部周辺で、仮設天井架構の構築材や閉塞痕跡が未確認であり、燃烧部は全体に還元していることから窯の閉塞はどのようにしたのか、燃料投げ込み式であることは間違いないと考えられるが、燃料をどのようにして投入したのか、焚口投げ込み式である時の熱の上昇によって困難



第30図 7号窯 埋土セクション図 (S=1/40)



第31図 7号窯埋土セクション図 (S=1/40)



第32図 7号窯舟底状ピット平面図 (S=1/40)

7号窯埋土土層註

- 1層：暗褐色土(10YR3/3)+褐色土(10YR4/4)=6:4。締まり全くなくサラっとした土で、遺物、粘土塊多量に含む。
- 1'層：1層と12層の間層。炭少なく、遺物多量。
- 2層：暗褐色(10YR3/4)砂質土。褐色土(10YR4/4)と混ざる。
暗：褐=5:5。締まりあり。粘土還元塊、炭が多量混入。
- 3層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)+暗褐色土(7.5YR3/4)=9:1。焼土ブロック大含む。ややしまりあり。流れ込み堆積土。
- 4層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)砂質土。焼土ブロック(2.5YR4/6)、還元塊ブロック、炭ブロック小多量に含む。締まりややあり。
- 4'層：黄褐色土(10YR4/4~4/6)+褐色土(10YR4/4)=5:5。わずかに還元塊小(φ0.5程度)ブロック、赤褐ブロック(5YR4/8)微小が入る。締まりあり。
- 5層：明褐色土(7.5YR5/6)粘土質。しまりあり。天井崩壊に伴う地山崩壊土。
- 6層：黄褐色土(7.5YR5/6)。天井崩壊に伴う地山崩壊土。
- 6'層：6層に赤褐色ブロック多量に入る。天井崩壊に伴う地山崩壊土。
- 7層：黄褐色土(7.5YR5/6)に、粘土焼ブロック(赤色、薄い赤色、こげ茶を呈するような、還元塊よりも被熱の弱いブロック)を多く含む。締まりなし。炭含む。天井崩壊に伴う地山・天井混濁層。
- 8層：天井ブロックが集中し、隙間に褐色土(7.5YR4/6)が入る。ブロックは(橙色土7.5YR6/8)が中心。炭含む。締まりなし。天井崩壊に伴う天井・地山混濁層。
- 9層：白色含む修復壁(または修復天井土か?)ブロック集中層。スサ入る。但し、もろい。
- 10層：還元塊ブロック(白色も含む)がメインで、この隙間に、にぶい黄褐色土(10Y4/3R)と褐色土(7.5YR4/6)ブロックが入る。非常にもろく、流水している。
- 11層：赤褐色土(5YR4/6)+暗赤褐色土(5YR3/4)ベース。褐色土(7.5YR4/6)と混ざる。(赤：褐=6:4)締まりはなく。還元ブロック小を含む。
- 12層：黒色土(10YR2/1)+黒褐色土(10YR2/2)=5:5。炭、焼土多量。締まりなし。暗褐ブロック(10YR3/3)少し入る。1層と13層の漸移層的な土。
- 13層：黒色土(10YR2/1)ベース。焼土ブロック、炭、粘土塊、多量に入り、あわおこしの様。しまりなし。灰層。
- 13'層：13層より、土の色がやや薄い(10YR2/2~2/3)。13層より炭が目立つ。基本的には同層。
- 14層：黒色土(10YR2/1~1/1.7)。混入ブロック(焼土、炭、焼土塊)は、13層より若干少なめ。締まりはない。13層と似る。灰層。
- 14'層：黒褐色土(10YR2/2)。褐色土ブロック(7.5YR4/6)と混ざる。(黒：褐=6:4)締まりなく、焼土含む。灰層。
- 15層：14層と明黄褐砂ブロックの混在層。地山との漸移層的な層。粘りはある。
- 16層：黒色土(Hue2.5Y)。褐色土ブロック(10YR4/4)灰黄褐粘土ブロック含むため、14層と比べザラつく。締まりはない。灰層。
- 17層：褐色土(7.5YR4/6)。還元塊ブロック小、白色ブロック小、焼土、少し含む程度。水分多く含みしまりない。突口からの流土堆積層か?
- 18層：褐色土(10YR4/4~4/6)+暗褐色土(10YR3/3)=6:4⇒17層との漸移的な土か? 4層のように混入物あり。締まりややあり。突口からの流土堆積層。
- 19層：暗褐色土(10YR3/3)。褐色ブロック混入。生焼け粘土(白色)、還元塊ブロック多め。焼土ブロックも少し入る。締まりややあり。
- 20層：暗褐色土(10YR3/3)。褐色土ブロック(10YR5/6)、炭や、焼土大(φ1.0以上)が、あわおこし状にブロックで混ざり合う層。粘土還元塊も多量で、この隙間に土が入り込む状態。(暗：混合物=5:5)締まりはややあるが、粘土塊多いため?
- 21層：褐色土(7.5YR4/6)ベース。黒色土ブロック、焼土ブロックと混ざる。焼土ブロック多い。(褐：黒=5:5)まだら状。硬く、締まりあり。炭も多い。灰原に続くテラス成形土。
- 21'層：12層と地山の漸移層的土。21層にも似るが、ブロックが少なく、黒色土多く入る。締まりあり。
- 22層：黒褐色土(10YR2/2~2/3)+暗褐色土(10YR3/3)=5:5。締まりあり。還元ブロックや生焼けブロック少し混ざる。舟底状ピット土層。
- 23層：オリブ褐色土(2.5Y4/3)+灰オリブ色土(5Y5/3)=5:5。要するに、還元塊が粉状になっている。還元塊ブロックも多く含む。締まりがあって、ガリガリな部分もあって、ところどころ固まっている。床として機能していた様子。炭も、焼土も多量。舟底状ピット土層。
- 23'層：23層中に黒褐色土(10YR2/3)が混在し、この土が、焼土、炭、還元塊ブロックの隙間に入っている状態で、まだら状となっている。締まりしっかりある。焼土や炭多量で焼土はブロック状で、固まっている状態。舟底状ピット土層。
- 24層：黒色土(10YR2/2)。焼土ブロック、炭、明黄褐ブロックを多く含む。
- 25層：褐色土の粘土(10YR4/4~4/6)と砂の黄褐色土(10YR5/6)が混ざる。(褐：黄褐=5:5)還元ブロックや焼土も若干混ざる。締まりあり。8号窯埋土。
- 26層：褐色土(10YR4/6)。焼土、炭が少し入る。締まりあり。8号窯埋土。
- 27層：黒色土(10YR2/2)+黒褐色土(10YR3/4)。炭、焼土多く、炭が特に目立つ。締まりややあり。8号窯灰層。
- 28層：暗褐色土(10Y3/3~3/4)と褐色土(7.5YR4/6)が混ざる。(暗：褐=6:4)締まりはない。褐色土はブロック状。還元塊、炭、焼土を含む。SK3覆土。

となるオキの掻き出し作業はどのように行われたか、など不明な点があり、今後の課題と言える。しかしながら、窯跡研究会において、丸太投入説、切断しない丸太投入説、丸太による閉塞の可能性説、板材を使用した閉塞説、オキ掻き出し時の長い棒の使用説を頂いたので、今後のために記述しておく。

焼成部

焼成部は、平面プランが釣り鐘型で、窯尻に向かって次第に窄まってゆく形状をもち、窯壁は焼成部口が非常によく焼けて濃い紫青灰色を呈し、奥壁側へ200cm程まで青灰色を呈す。更に窯尻までは淡い青灰色や白色に近い灰色を呈し、半還元状態となっている。床面は、焼成部口を転換点として立ち上がるが、焼成部口付近で15度の傾斜角を測り、この地点より更に100cm後の地点で傾斜角60度を測る。7号窯は段構築床で、8段で構成されている。段の構築は、粘土塊置台構築で、馬爪型や円柱、土饅頭型の粘土塊を地山床面に横一列に並べたり重ねたりした後、その上に粘土を更に延ばして平坦面を成形している。段の構築時に地山床面を削って粘土を置いた箇所も部分的にみられる。しかし、下方2段は平坦面を再成形せず粘土塊だけで構築された可能性がある。粘土にはスサは入っておらず、通常の南加賀の土質に比べ砂が大量に含まれるものである。粘土塊は、堅緻、通常青灰色、灰色などを呈し、修復により焼きに違いが見られる。天井は平面図に示していないが、焚口から窯尻へ1m96cm地点、焼成部口あたりから奥へ30cmの範囲に残存している。この位置より手前は潰れたような形状を呈し、その他は天井が崩壊していた。

〈段について〉

7号窯焼成部の段は、残存状態が非常に良好であったので観察を記しておく。8段のうち焼成部口から最も近い段を1段目とし、最上段を8段目とする。1段目は大きな馬爪形の粘土を使用、右端には円筒形の粘土を使用している。2段目は、ほぼ馬爪形といえようが、円筒形の粘土を捏ねながら貼り付けたような印象で、1つの粘土単位が1段目と同様に大きい。3段目は丸形ないし円筒形変形（土饅頭形）の塊5つがベースとなっていて、その隙間に粘土がランダムに入っている。円筒径は21cm高さ19cmである。また、修復粘土の厚みは7～8cmもあり、上面である平坦面から側面方向へ延ばしている。4段目は、馬爪形とも円筒形とも言えない形状で厚み10cm程の平たい粘土を幾重にも無造作に重ねて成形、これらの隙間に小さな粘土を詰めている。4段目左端では、径12cm程の貯蔵具専用焼台跡を検出している。これは生の粘土に焼台を押しつけたような痕である。5段目も4段目と似ているが、大きめの土饅頭形も含まれている。5段目左端では置台として使用された有台塊底部跡、右側では焼台跡が検出されている。6段目は主に土饅頭形が多いが、馬爪形、中央で大きな円筒形の混在が見られる。右端には小さめの円筒形を重ねている。また、修復の粘土の厚さは12cmであった。6段目左側の、段内下部にあたる極めて堅緻な粘土塊から置台痕と思われる痕跡が検出されている。7段目は馬爪形がベースとなっており、幾重にも重ねて成形している。修復粘土は10cmの厚みをもつ。8段目は、馬爪形が中心で、綺麗に並べた後、隙間を粘土で充填している。8段目左側の段上に設置された筒形粘土塊では、置台痕が検出されている。

粘土塊で検出される貯蔵具専用焼台痕・食膳具転用の置台痕は、極めて明確なものもあり、生の粘土に押しつけられてできたものと考えられる。貯蔵具専用焼台痕の痕跡が多いのは、4段目まで。少なくともこの段までは確実に貯蔵具を配置していたのではないだろうか。5段6段は置台痕であるのか貯蔵具専用焼台痕であるのか確実に確認はできなかったが、両者とも段の端の方では確認されている。貯蔵具専用焼台設置モードが復元集成（望月1992）されているように、置台と焼台の様々な組み合わせがあったものと考えられる。また、B地区灰原で両者が癒着する粘土塊が出土、確認している。

粘土塊の焼成具合は、5段階に分類できる。ただ、これは調査時に観察したものである。極めて堅緻で表面がガラス状を呈するもの、堅緻で濃い青灰色のもの、青灰色を呈すもの、若干の硬さはあるものの青白灰を呈す半生焼けのもの、柔らかで非常に脆く白灰色を呈す生焼けのものである。窯尻に近い上段位置にも極めて堅緻なタイプも含まれており、長期に渡って崩壊せず使用されたようである。焼成のあまいものが基本的に修復用に使用されたものである。

焼成部の段に使用された粘土の量は現存する焼成された粘土量で0.48 m^3 あり、これに収縮分の1割を加えると0.528 m^3 と考えられる。重量であるが、1段目の重量計が12,210g、2段目が約24,000g、3段目が24,380g、4段目が約24,531g、5段目が21,232g、6段目が12,017g、7段目が17,737g、8段目が11,775gであった。総重量は、147,882gとなった。これに収縮分の1割の重量を加味すれば、162,670gとなる。ただ、写真で見てもわかるように、段の破損が生じている箇所があり、本来はもっと重量が増えると考えられる。7号窯有段構築のために必要な粘土量は、最低でも、0.528 m^3 、162kgの量となる。粘土には砂が多量に混入されている重量であることを付け加えておく。

床・壁修復

焼成部では床の段と壁、天井、焼成部口において修復が確認できる。焼成部口については、前述のとおりである。段の修復では、上記の5段階の焼成具合から、少なくとも灰白色部分は最終操業段階のものであるとわかる。焼成部の焚口側と窯尻側では還元状態に違いがあるので、一概に言い切れないかもしれないが、少なくとも4回の床段の修復が施されていると考えられる。側壁は、焼成部口から奥壁へ向かい70cmの地点で1回スサ入り粘土で修復されている。天井は、焚口から奥へ向かい210cm地点でスサ入りの層を検出しているが、非常に脆く調査時に崩れ落ちてしまい、修復範囲は不明であるものの、天井も修復は確実に行われている。

埋土

窯内、焚口焼成部床にかけて流れ込み堆積層が捉えられ、その後天井が崩壊している。天井並びに窯壁崩壊塊は、窯尻側部分が焼成部口側、つまり手前に落ち込んでいる。また、同じく焼成部口付近で検出している天井窯壁塊では、スサ入りであったり、比較的弱い還元をもつものがあったりと、質の異なるものが混在している状況であって、調査時にはっきりと分層できなかったため、今となっては質の違いについて述べられない。天井残存部分より奥側では、天井崩壊伴う地山崩落土の一部が残存天井内に流れ込んだ状態で、質は地山土に微量・微量の焼土や還元塊を含むものである。陥没の窪みには流土堆積層が確認でき、天井残存部分から手前側では、地山は検出できず、流土堆積層のみとなっている。焚口燃焼部については、段構築の粘土塊、遺物の集中と共に灰層である黒色土を確認している。これは焚口前面土坑から続く土層である。焚口前面土坑は、灰層がそのまま残存、土坑に山のように盛られていたもの灰が、窯の廃棄後、焚口燃焼部に落ち込んだものではないかと予想する。

焚口前面施設

焚口前面土坑が認められる。土坑は円形プランで内部にテラスをもつが、ランダムな掘り込みとなっている。この土坑には灰がぎっしり詰まっておき、灰溜めの機能をもつものと考えられる。また、この土坑の周囲にはピット群が存在する。ピットの土層では灰層と考えられる黒色土の詰まったものもあり、P 1, 11, 4, 10, 6からは10世紀前半の遺物が出土している。覆屋としての機能をもった柱穴であると考えられる。焚口に近い側である前2本は、建て直された可能性をもつ。ピットが灰で埋まっていることから、操業当初は覆屋が存在し、最終的に覆屋は無くなったと判断している。ただ、熱をもつオキを溜める土坑の周囲に、燃え易い柱をもった覆屋が存在したのか、通常ではありえない状況ではないだろうか。理解しがたいものがある。

7号窯は、10世紀に操業された窯で、すぐ左側の8世紀操業の8号窯を切る形で存在する。8号窯には前庭部が伴っており、この前庭部を使用していたと考えられる。セクションBラインでは、埋没していた8号窯前庭部を約50cm内側で切っている。また、後記で詳細を述べるつもりである窯全面に広がるテラス面は、人為的に盛られた土で、この盛土層が焚口前面土坑際や8号窯前庭部範囲内まで続いて成形されている。よって、8世紀前庭部を含め、整備をして再利用したことが窺える。しかしながら、このような8世紀の窯跡のすぐ脇で前庭部を利用しながら10世紀の窯を構築するといった現象や、焚口前面施設に伴う柱穴の検出は、南加賀窯跡群ではよく見られるものと言える。

舟底状ピット

舟底状ピットは、焼成部口を中心として検出されている。床面を割った痕跡で、最も深い地点で、深さ18cmを測る。窯体内部で使用した粘土塊置台破片の多量の投入並びに床として常時機能していたような還元部分をもつ。ただ、分層が非常に困難な層であり、何度か分層を試みた。上層で灰層と混在する層があるものの、更に下層では様々な質をもつ土が混在する層と部分的な還元も伴う。全体的に硬いものである。また、焼成部側で床割り痕が検出されている。1-A・1-B号窯同様で、狭い燃焼部口であるが故、窯入れ窯出しの際、意図的に床を割った、灰掻き出しにより床をも割ってしまった痕と考えられ、舟底状ピットB類と分類できよう。

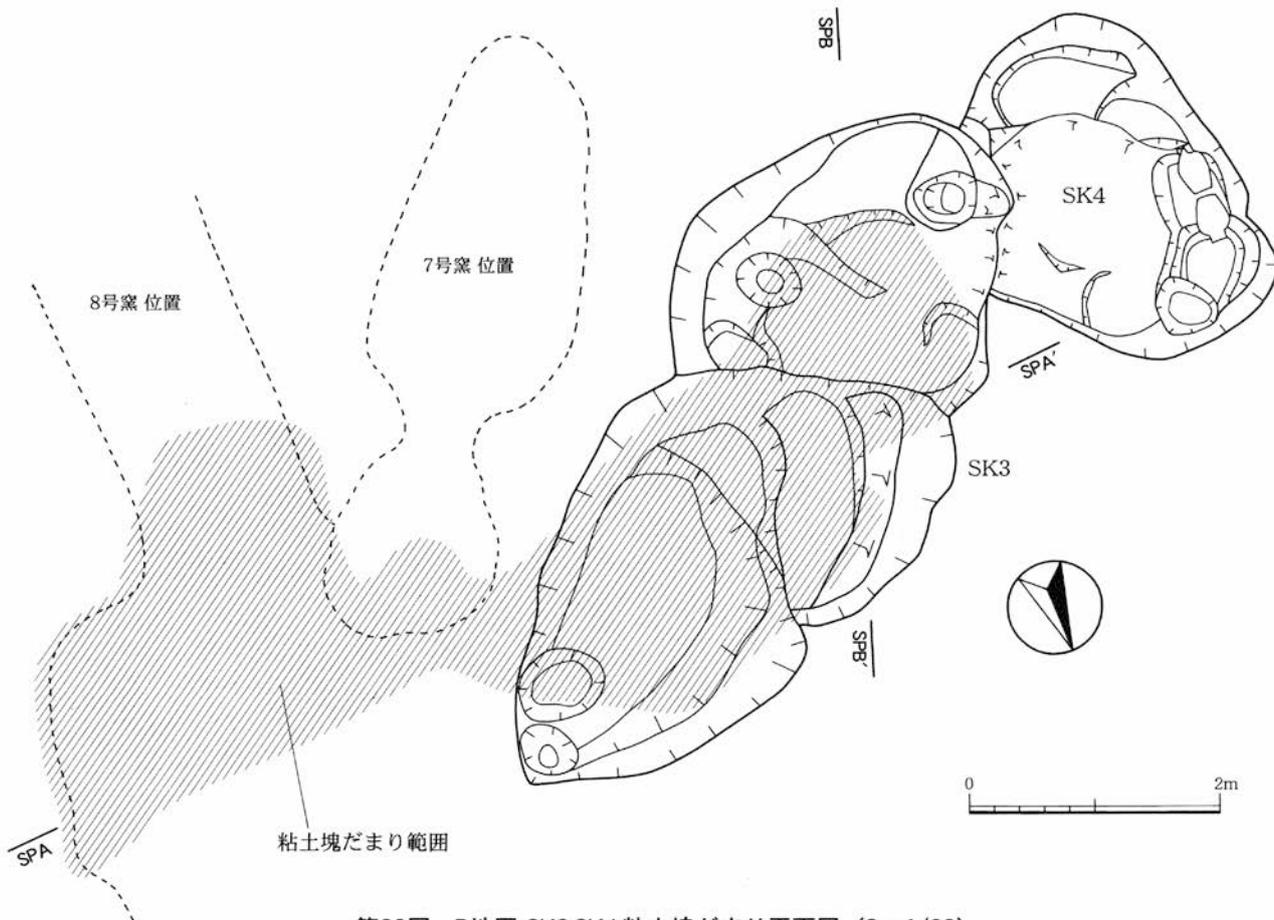
遺物出土状況

焼成部段(床面)からの遺物出土は、非常に少ない。殆どは崩壊した粘土塊と共に焼成部口付近の最も低いレベルから、落ち込むような状態で出土している。段の粘土に食い込んでいるものも僅かに見られるが、修復の際に共に練り込んだのであろう。これ以外には、最も下底部分にあたる焼成部境から、やはり1-A号窯・1-B号窯同様、粘土塊とともに燃焼部に落ち込む状態で検出されている。

第3項 その他の遺構

1. 土坑

B地区では、4基の土坑を検出している。いずれも10世紀前半が主体である出土遺物を伴い、7号窯操作時に機能していた土坑群と考えられる。SK3は前述のとおりで、7号窯焚口前面土坑に連結する形で右側に位置する。またSK4はSK3に続く形をとっている。SK1は、7号窯後背部とSK3の中間に位置し、SK2は灰原の北東側に掘り込まれたものである。



第33図 B地区 SK3,SK4,粘土塊だまり平面図 (S=1/60)

〈SK1〉

7号窯窯尻側に位置する。平面プランは歪んだ円形で、削平や木株の影響を受けており残存状況は悪く、深さは15～25cmである。断面で薄い焼土層を確認しているが酸化焼成痕とまでも言えず、壁面に至っては酸化被熱痕はない。土師器破片が出土していたため、調査時に土師器焼成抗の可能性が考えられた土坑である。しかし、しっかりとした被熱もなく、底面レベルで土師器破片と須恵器破片が混在している状態であったことから、土師器焼成抗と決定できない。ただ、削平が著しく、1/4が攪乱を受けていること、B地区全体から土師器の出土があることを合わせれば、可能性がないとも言い切れないものである。土坑からの出土遺物は、須恵器、土師器とも確認しており、須恵器は10世紀前半の食膳具細片が14点、土師器は食膳具細片で9点の出土であった。出土遺物から、7号窯の後背部施設であった可能性もあろうか。

〈SK2〉

北西側に位置し、灰原内に掘り込まれている。やや楕円状の平面プラン、深さ45cmを呈す。下部に進むにつれてや

や、窄まり気味になって下端に至る。覆土は多量の遺物と締まりをもたない灰である。底面からの立ち上がりや土坑側面も計画的とは思えず、土器廃棄を目的として、灰原の一角に突発的に掘られたものと考えられる。

〈SK3〉

SK3は7号窯の右側に位置するもので、土坑端は7号窯焚口前面土坑に連結している状態である。底面から白色粘土層を検出し、また土坑内を歩いたと考えられるような、踏み固めたか叩き締めたかと考えられるようなよく締まる褐色土層が確認できる。この層より上位層レベルの焚口前面土坑側では、炭の層や、炭・焼土が混在する層を幾層も検出、7号窯からの灰が入り込んでいると考えられる。よく締まる層、締まる層に炭や焼土が混在する層、炭を多く含む層、焼土や炭が白色粘土と混在する層、炭や焼土など全く含まない層など、非常に複雑な分層ができる。この土坑が位置する地山は粘土が採掘できる土質ではなく、総じて7号窯の作業場として機能するような付属施設の性格をもっているものと考えられよう。そして、時々土坑内整備をしたのではないだろうか。遺物は、検出された土坑の中で最も出土が多い。特に硬化する層・整備したと考えられる層より上位層で集中する。作業場として機能し、最終的には土器廃棄をしたのではないかと思われる。

〈SK4〉

SK4は、SK3の奥に続いて存在しており、非計画的に掘られた印象を受ける平面プランと深さをもつ。このSK4底面には、完形の狭口長頸壺（後述するが壺F系と名付けているもの）が2個体底部同士を合わせる形で並べられていた。窯の操業に伴う何らかの祭祀が行われた可能性を予想している。また、この土坑の西側部分で底面よりも一段落ち込んだ浅い小ピット3連穴を確認、底面から白色粘土塊層を検出している。比較的まとまっていて、厚い部分では10cm程、薄い部分では0.3cmであった。これは、壺検出より下のレベルである。窯段構築用の粘土溜めとして使用していた可能性もあろう。覆土は、前述の粘土層を除けば流土堆積であった。

2. 人為的テラスとピット群

窯の北側には灰原が広がるが、灰原の中央とも言える窯から続くすぐ下の斜面部分に、人為的に土が盛られたテラス面成形を検出している。テラス面は2層からなって構築されている。上層（9層）は叩き締めた硬さをもっている。平面プランはほぼ円形で、灰原セクションAラインより上（B地区内では南側）以降では地山と自然にドッキングする形をとっている。このテラスの盛土は、灰原Bラインセクションで40cmと最も厚い。

このテラスの中央で4本のピット、また、テラスを囲むようにピット列が検出されている。中央4本のピットは深さが一定ではないのだが、比較的しっかりした柱穴である。周囲のピット列は6本、いずれもしっかり掘られているものであり、これらは半多角形に並んでいる。ただ、規則性のある多角形でなく、1本分が検出できていないのが気になるところである。テラス内ピットについてははっきりと断定はできないものの、2通りの考え方ができると、望月氏に助言を頂いている。1つは、非常に簡単な覆屋であった可能性。ただ、7号窯焚口前面土坑両横に存在する2本の柱穴を含めれば、焚口前面土坑を含めた前庭部全体の覆屋という位置づけは可能であろうということである。しかし、中央4本を支柱想定した場合、7号窯主軸と合っていない点、屋根の構造についての問題点が残るということである。2つ目は、テラスが地山ではないので、土饅頭形の盛土平坦面を維持するための土囲い、板場を組むための支柱を施した可能性というものである。土囲いを施したのであれば、杭として機能したものであろうし、杭間の不揃い、杭の不揃いも考えられることであろう。

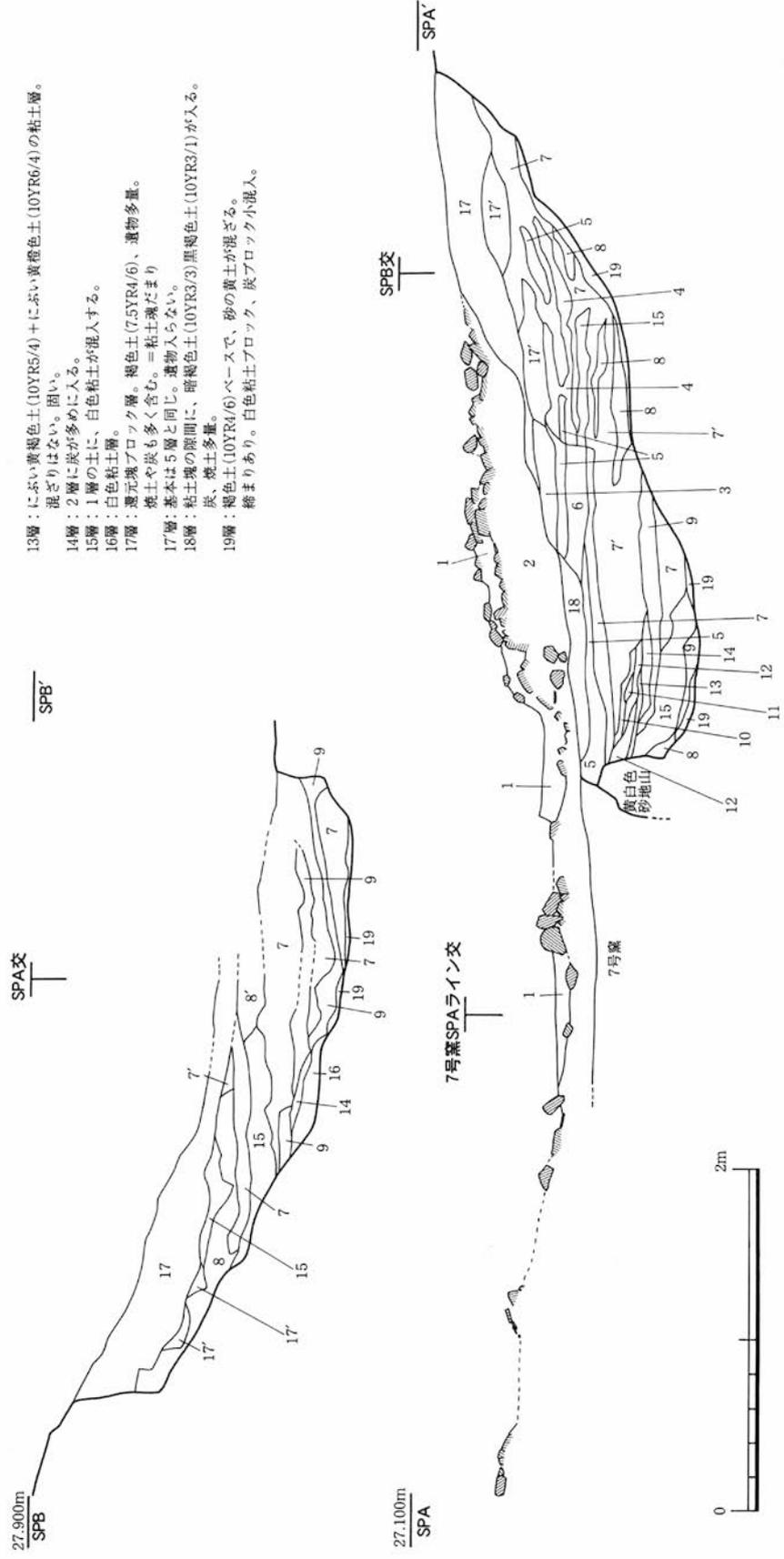
ピットからの出土遺物については、ピットNo2, 5, 6, 9, 10から10世紀前半の遺物を確認している。覆土は、4本支柱はわからないのだが、周囲のピットは全て灰を含む黒褐色土であった。なお、ピットNoは4本支柱の図上で左上より反時計回りにNo1～No4を、周囲は図上左から同じく反時計回りで、No5から順につけている。

テラス出土土器について、テラス層からは8世紀の土器が含まれるものの、テラス層より下位である地山面からの8世紀出土遺物は僅か3点だけである。また、テラスの左側、要するにグリッドえ8A・Dの21層から張り付くような状態で8世紀遺物を検出しているものの、テラスの上層でも8世紀遺物を検出している。テラスは10世紀前半に機能していたことは確実であり、本来テラス層の下位層に位置するはずの8世紀灰原が見あたらないのである。ではテラスはいつ成形されたのか。これについても望月氏に次の助言を頂いている。8世紀前半の8号窯段階で窯掘削土がテラス土として元々あった可能性があるということ、8世紀前庭部前に窯掘削堆積土が平坦面としてあった可能性は高いということである。傾斜面で窯焼き、製品の出し入れ等の作業をするには、作業場が必要であり、掘削土がそのまま作業場として機能したことが考えられる。その後10世紀に、この平坦面を利用して7号窯を造成、やはり窯の

B地区 SK3・粘土塊だまり 埋土 土層註

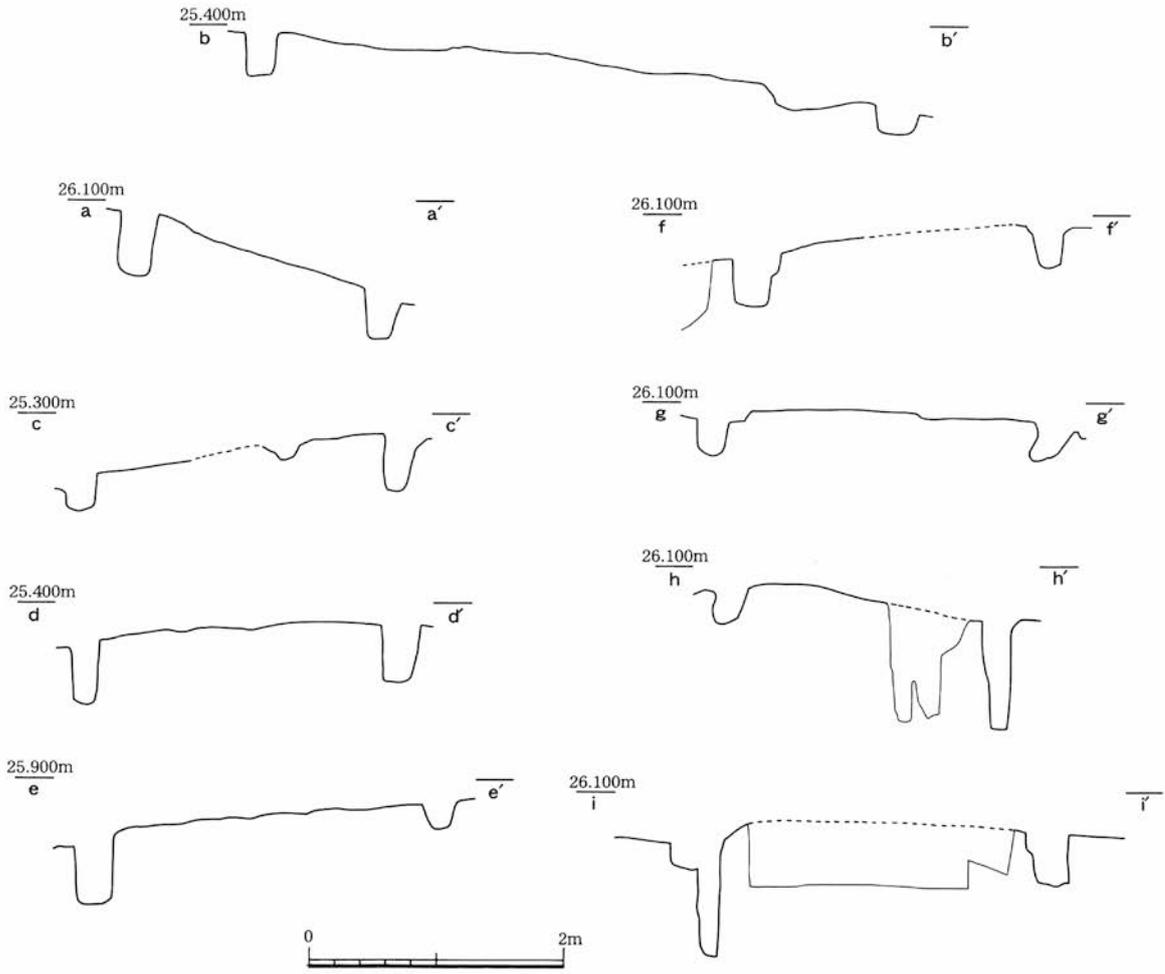
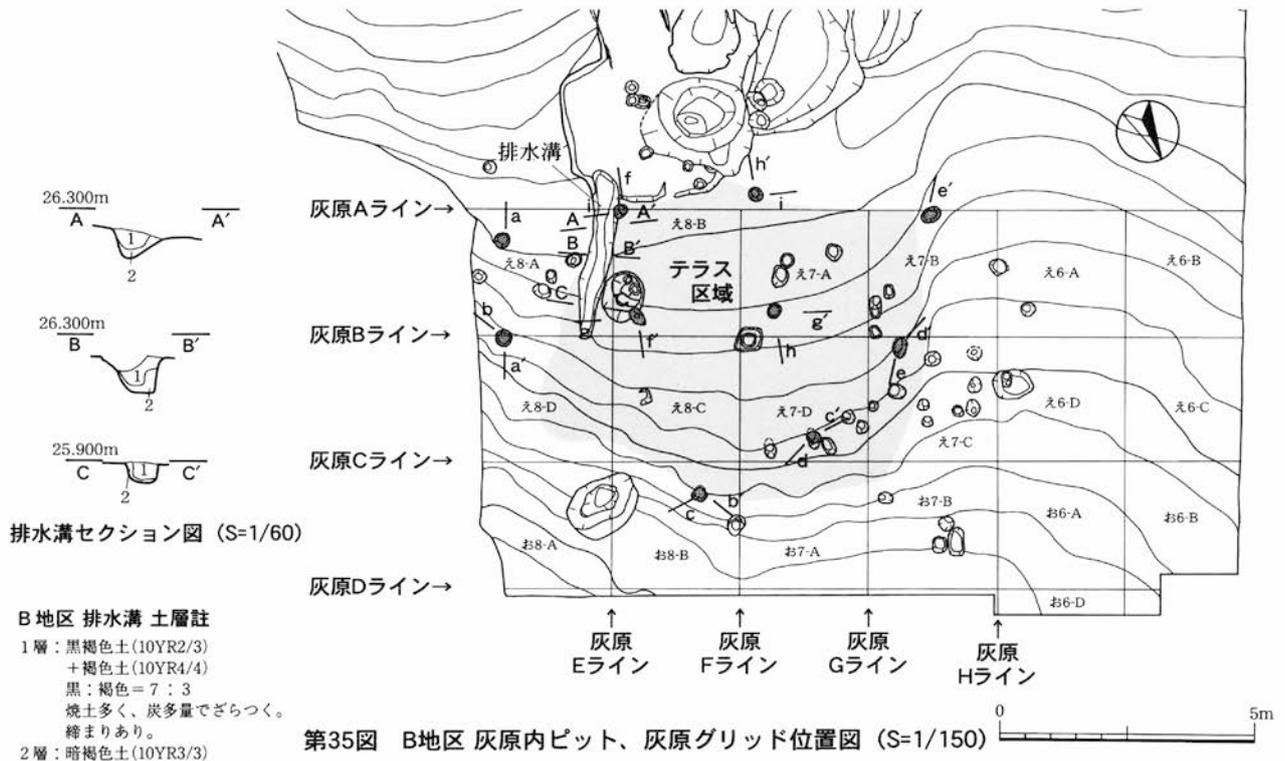
- 1層：粘土質の褐色土(10YR4/4~4/6)ベースで、にぶい黄褐色ブロック(10YR4/3)と混ざる。
(褐：にぶい=9:1)粘りが強い。よく締まる。粘土還元塊多量を含む。=粘土塊だまり
- 2層：暗褐色土(10YR3/3)+褐色土(10YR4/4)= (暗：褐=6:4)
締まりが全くなく、サラツとした土である。=粘土塊だまり
遺物、粘土還元塊を多量に含む。
- 3層：褐色土(7.5YR4/4~4/6)ベース。
暗褐色土(7.5YR3/3)と混ざる。(褐：暗=9:1)粘りあり。流土か？
- 4層：1層と同層ではあるが、褐色土の割合が多く、1層は砂っぽいザラつきがあるのに比べて、やや粘性あり。焼土ブロックや、還元ブロック小粒が入る。
割合(黄：砂：褐=2:2:6)
- 5層：暗褐色土(7.5YR3/4)；褐色土(7.5YR4/6)=5:5
にぶい黄褐色土ブロック、炭が混ざるが、多くはない。粘りあり。

- 6層：黄褐色土(10YR5/6)+褐色土(7.5YR4/6)
白色の粘土ブロック(にぶい黄褐6/4、φ1.0以上)を含む。固くねばりあり。
炭がブロック状。人が埋めてたいた様な成形？
- 7層：褐色土(10YR4/6)ベース。にぶい黄褐色土ブロック(10YR4/3)と混。比=7:3
粘土質。焼土ブロック小わずかに入る。炭大(長max 5cm)入る。炭の方が多い。
また、粘土塊ブロック少し含む。
- 7層：褐色土(7.5YR4/4)混入物ないに等しい。若干炭が入る程度。締まりなし。
- 8層：黄褐色土(10YR5/6)~褐色土(10YR4/6)の粘質土ベースで、隙間に砂質の黄褐(2.5YR5/4)、
褐色土(7.5YR4/4)混ざる形でしっかり締まる。叫き締めたか人が強いような固さ。
- 9層：粘性のある褐色土+明褐色土(7.5YR5/6)粘土ブロック混入。粘りあり。
- 10層：炭と特大粘土塊層。褐色土(10YR4/6)が隙間に入る。
- 11層：黄褐色土(10YR5/6)ブロック(砂)。
- 12層：焼土、炭、還元塊中粒の隙間に、褐色土(10YR4/4~4/6)が入る。

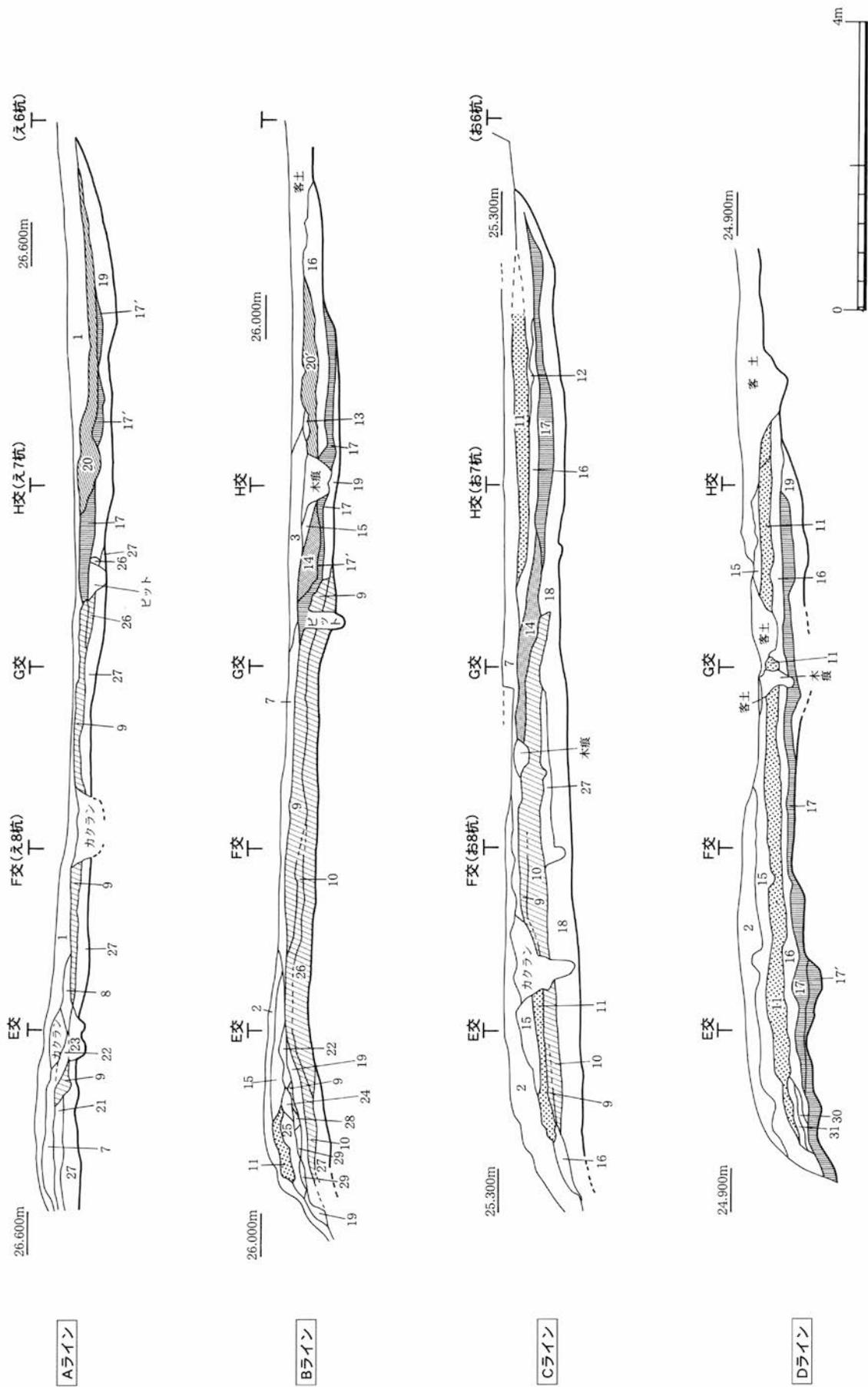


- 13層：にぶい黄褐色土(10YR5/4)+にぶい黄褐色土(10YR6/4)の粘土層。
混ざりはない。固い。
- 14層：2層に炭が多めに入る。
- 15層：1層の土に、白色粘土が混入する。
- 16層：白色粘土層。
- 17層：還元塊ブロック層。褐色土(7.5YR4/6)、遺物多量。
焼土や炭も多く含む。=粘土塊だまり
- 17層：基本は5層と同じ。遺物入らない。
- 18層：粘土塊の隙間に、暗褐色土(10YR3/3)黒褐色土(10YR3/1)が入る。
炭、焼土多量。
- 19層：褐色土(10YR4/6)ベースで、砂の黄土が混ざる。
締まりあり。白色粘土ブロック、炭ブロック小混入。

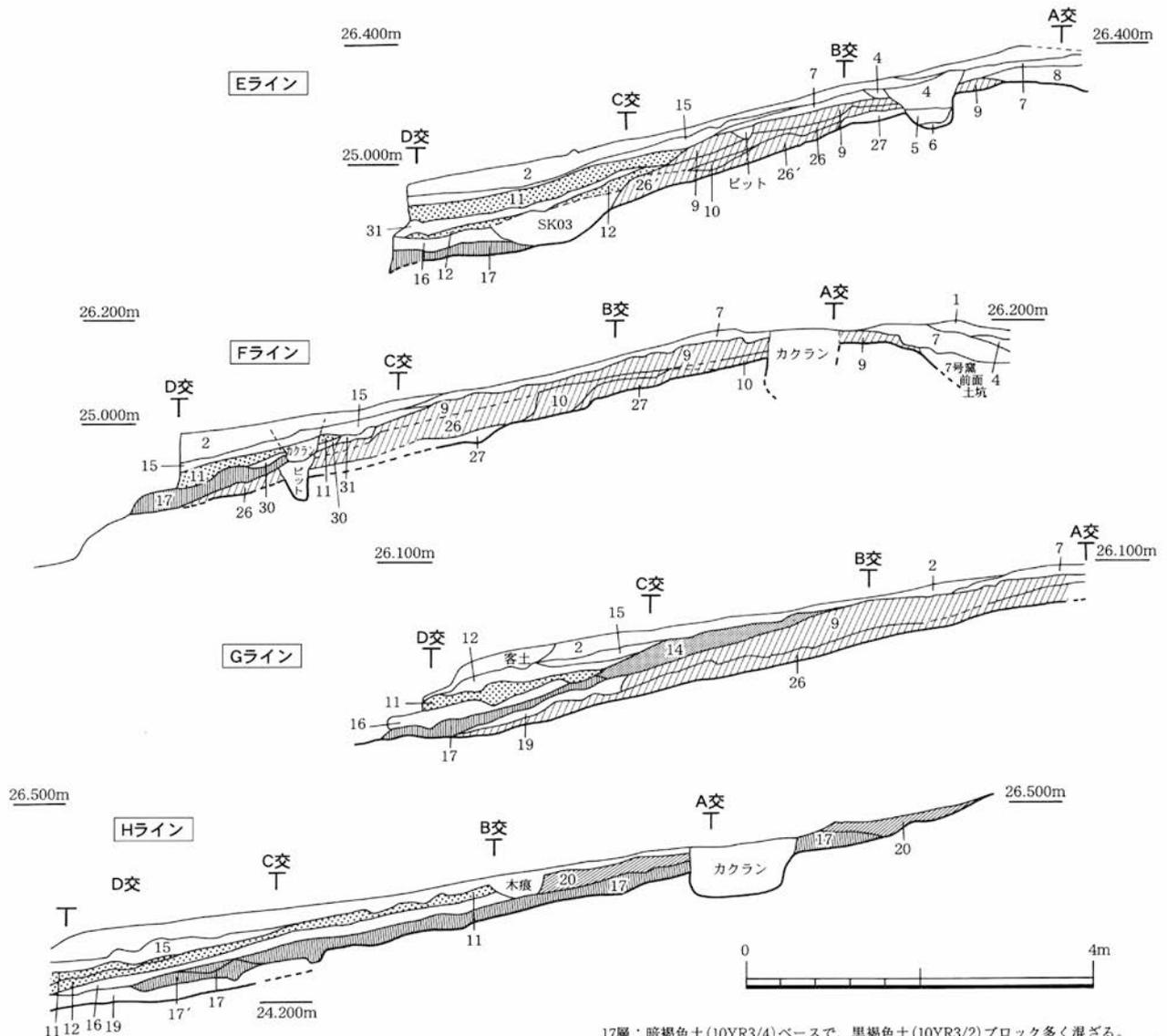
第34図 B地区 SK3,粘土塊だまり,セクション図 (S=1/40)



第36図 B地区 テラス内ピットエレベーション図 (S=1/60)



第37図 B地区 灰原横セクション図 (S=1/80)



B地区 灰原セクション 土層註

- 1層：暗褐色土(10YR3/3~3/4)+褐色土ブロック(10YR4/6、ブロック状)=7:3。焼土ブロック含む。遺物含むが2層より少ない。砂質強。流土。
- 2層：暗褐色土(10YR3/3)+褐色土(10YR4/4)=6:4。遺物混入多い。砂質。基本的に1層と同じだが、遺物が多い。締まり弱。流土。
- 3層：黒褐色土(10YR2/3)+暗褐色土(10YR3/3)=7:3。締まりややあり、焼土、炭含む。砂質。流土か？
- 4層：ビット土層。
- 5層：黒褐色土(10YR2/1)+暗褐色土(10YR3/3)=5:5。焼土、炭、褐色土ブロック多量。締まりはややあり。遺物混入多量。
- 6層：黒褐色土(7.5YR2/3)ベースで、褐色土ブロック(7.5YR4/6)黒色土ブロック(7.5YR2/1)と混ざる。(褐:黒=4:1) 締まりなし。ビット土層。
- 7層：褐色土(7.5YR4/6)ベースで、隙間に暗褐色土(10YR3/3)が入る。やや締まりあり。ビット土層。
- 8層：暗褐色土(10YR3/3)と褐色土(10YR4/6)、7:3で混ざる。焼土、炭化物多い。
- 9層：褐色土(10YR4/4)の粘土ベース。炭化ブロック、還元塊ブロック、焼土ブロックが、まだらに混入。締まりがあり、硬化する。砂質系でザラつく。人為的なテラス成形土。
- 10層：褐色土(10YR4/6)ベース。暗褐色土(10YR3/3)と混ざる。(褐:暗=8:2)炭、焼土ブロック多く含む。締まりあり、粘性あり。表土に近い。明褐色砂ブロック(10YR5/8)を含む。9層と同じで、テラス形成土と考えられる。
- 11層：黒褐色土(10YR2/1)+褐色土(10YR2/2)=5:5。遺物多量で、焼土、炭化物も多量。褐色土ブロックが少し入る。ざらつき、締まりは弱い。Ⅲ次灰層
- 12層：黒褐色土(10YR2/3)ベース。暗褐色土ブロック、焼土ブロック多く含む、締まりなし。
- 13層：11層と同じだが、11層より褐色土ブロック多く入る。
- 14層：黒色土。11層より黒い灰層。Ⅱ次灰層で、部分的。
- 15層：2層と11層の漸移層。遺物が多い。砂質強。
- 16層：暗褐色土(7.5YR3/3)+褐色土(7.5YR4/4)=5:5。11層よりも締まりが弱い。炭や焼土ブロックを多く含む。間層。

- 17層：暗褐色土(10YR3/4)ベースで、黒褐色土(10YR3/2)ブロック多く混ざる。遺物が多く、この層の下端線以上で粘土還元塊ブロックが並んで検出されている。Ⅰ次灰層。
- 17層：17層と同層だが、粘土還元塊が入らない。褐色土ブロック(7.5YR4/4)と混ざる。17層より色が薄い。
- 18層：12層と13層の中間。黒地山と12層の漸移層的な土。
- 19層：褐色土(7.5YR4/4)+明褐色土(7.5YR5/6)、暗褐色土(7.5YR3/3)が、それぞれブロック状に混ざる。(褐:明褐:暗=5:1:4)遺物が若干入る。締まりなし。窓体掘削土可能性あり。
- 20層：暗褐色土(10YR3/3~3/4)ベース。粘土塊中心に、遺物多量含有。明褐色土ブロック大(7.5YR5/8)多めに含む。焼土や炭が入るが少くない。締まりなしで、ボソボソ。最終段階の廃棄層。
- 20層：ベースは20層と同じだが、これに黒色土ブロック、明褐色土ブロックが混ざる。(暗:黒:明褐=5:2:3) 焼土や炭入る。締まりなし。
- 21層：褐色土(7.5YR4/6)+暗褐色土(10YR3/3)=8:2。炭多めに含む。しっかり締まっている状態。8世紀遺物含む。
- 22層：黒褐色土(10YR2/2~2/3)ベース。暗褐色土(10YR3/3)と混=7:3。炭、焼土を多く含む。締まりはない。粘性強。排水溝の一部。
- 23層：暗褐色土(10YR3/4)ベース。砂質の明褐色土ブロック含む。炭や焼土多く、締まりなし。粘り強。炭ブロックは多量でφmax3.0 排水溝覆土。
- 24層：褐色土(10YR3/3)ベース。褐色土ブロックと(10YR4/6)=6:4締まりはない。焼土ブロック小含む。炭φ1.0多い。
- 25層：24層11が混ざる土。ただ遺物は8世紀。
- 26層：明黄褐色土<砂>(10YR6/6)、明褐色土ブロック(7.5YR5/6~5/8)に、ぶい黄褐色土(10YR5/4)が隙間に入る。(明褐砂:明褐ブロック:ぶい黄=4:2:4)炭が入っている。よく締まっている。人為的に作られた盛土？
- 26層：26層と同じだが、比率(明褐砂:明褐土ブロック:ぶい黄=6:1:3)(砂多し)締まりしっかりしている。
- 27層：ぶい黄褐色土(7.5YR5/4)ベースで、黄褐色土ブロック(10YR5/6)が少し入る。地山に近い。
- 28層：黒褐色土(10YR2/3)+暗褐色土(10YR3/4)=6:4。24層と似るが、24層の方が黄色が強い。焼土ブロック少し含む。炭多い。溝か？
- 29層：ベースは褐色土(10YR4/6)のブロックで、隙間に暗褐色土(10YR3/3)。炭、焼土多い。締まりはややあるが、9層のように固くない。9層のテラス土と、この上の層の土との漸移的な層か？
- 30層：黒褐色土(10YR2/2)、褐色土(7.5YR4/4)、黄褐色土(10YR5/6)が、ブロック状で混ざり合う土。ボソボソで、全く手応えない位締まりなし。遺物混入少ない。
- 31層：黄褐色土(10YR5/6)ベースで、隙間に黒褐色土(10YR2/3)が入り込む。(黄:黒=8:2)締まり全くなし。遺物の混入なし。

第38図 B地区 灰原縦セクション図 (S=1/80)

掘削土が出るわけだが、この掘削土が更に堆積した可能性があるということである。要するに、8世紀時代の窯掘削土として盛り上がった廃土上に、10世紀の窯掘削土が被さる。盛り上がった部分を成形し直し作業場をして使用したというものである。

総合的に、確実に10世紀前半の7号窯作業時には窯体外作業スペースとして機能していたと言える。よって、このテラスが作業場として機能した前庭部、つまり7号窯の焚口前面施設と呼べるのではないだろうか。また、窯の前庭部では、すぐ灰原となるのが通常であるのに、このような範囲の広い盛土テラス面をもつようなものは、特異な例と言うことができるだろう。

3. 排水溝

テラス右側、8号窯前庭部に続く形で排水溝が検出されている。この排水溝は、テラスを一部切っているため、性格について理解に苦しんだのだが、いずれにせよ、作業場として機能するテラスの真ん中に排水溝がつくことは不自然であろう。これまで検出されている事例から8号窯の前庭部端につく場合が多い点、排水溝出土遺物が8世紀前半を主体としている点、また、前述のテラス成形過程を総合して考えれば、8号窯に伴うものであると考えるのが妥当であろう。なお、排水溝は、全長330cm幅22～50cm、深さは8号窯に最も近い位置で22cm、最も離れている位置で12cmと次第に浅くなってゆく。

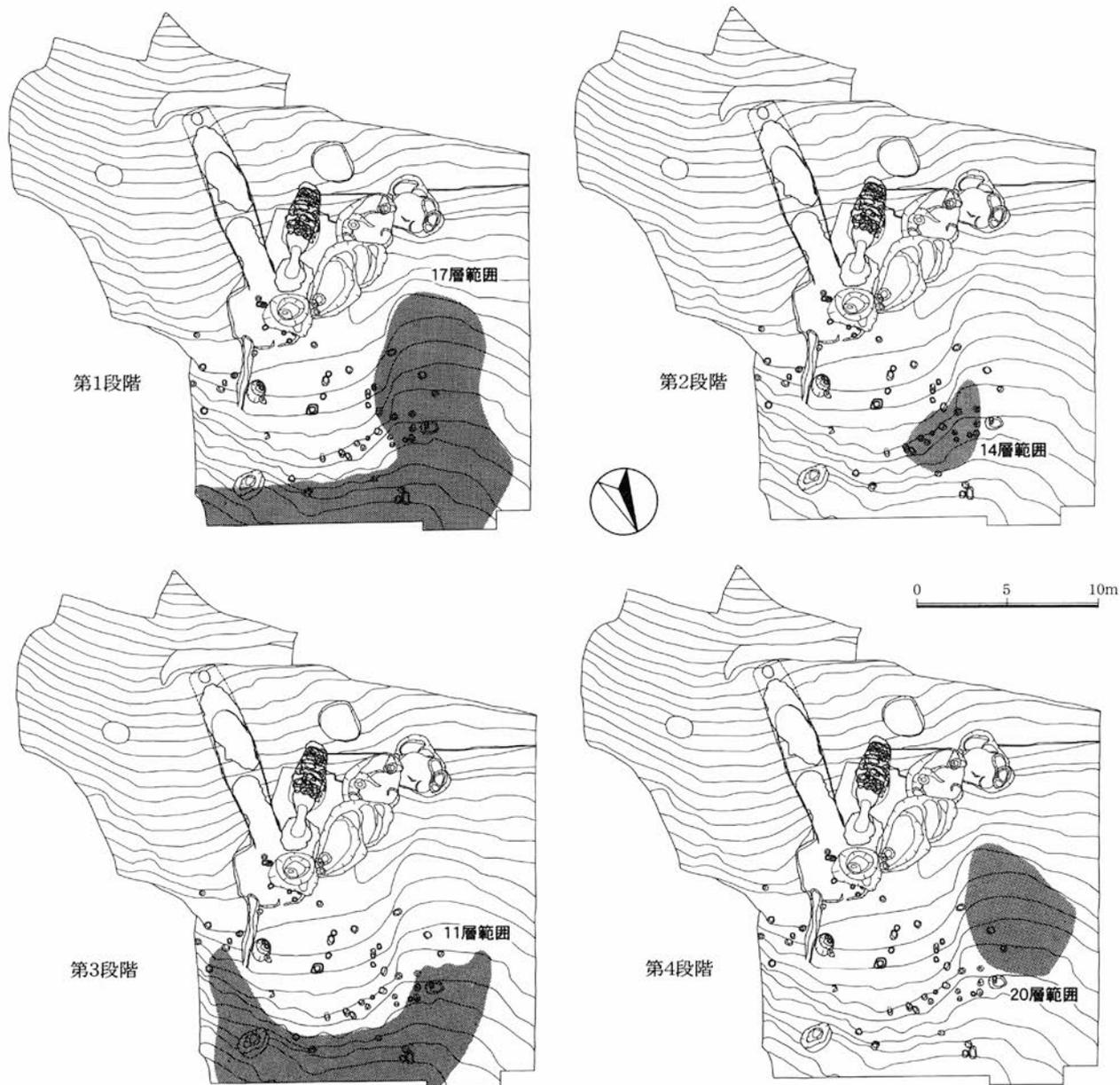
4. 灰原

前述のテラス面を囲う形で馬蹄形状に灰原が検出されている。調査区北側にあたる区域が攪乱と削平を受けているが、本来なら更に傾斜北方向へ灰原は延びていたものと思われる。灰原での土層観察では、テラス成形土である9層のすぐ下位層である17・17'層が確認できる。17層は、灰が多く混在し暗褐色土がベースとなるもので、多量の遺物・粘土塊置台が混入するものである。この上層に確認できるのは14層で、灰そのものが主体となっている土層である。テラス西側の限られた範囲であり、11層より灰を多く含むもので分層した。17層と11層の間には、暗褐色土と褐色土が混在する16層が確認でき、間層と考えられる。14層の上位に確認できるのは11層で、やはり灰が非常多い層である。11層の上層に観察できたのは、20層で、比較的灰が少ないものであるが遺物は多い。以上の4つの層が大きく分層できており、範囲を捉えているが、17層、11層が中心で、部分的に廃棄した区域が14層であったり20層であったのではないかと考えている。また、11層の上層に、1・7・15層の堆積が認められるが、流土である。

灰原からは2時期の遺物が出土しており、遺物の詳細については第5章で述べるが、検出状況を記しておく。8世紀前半に位置づけられるものと、10世紀前半に位置づけられるものである。両者とも灰原の全域から出土するが、10世紀前半の遺物が非常に多く、8世紀前半の遺物は集中箇所が確認できているものの、これ以外は灰原区域に疎らに少量点在する。8世紀前半の遺物の集中は、灰原南東側区域のグリッドえ8-A・Dで目立ち、グリッドえ8-Bでも流土層1・7層で比較的多く確認できる。また、8世紀前半の遺物は、10世紀前半の遺物が主体となる灰原層より下層に位置するということもなく、8世紀遺物を中心とした灰原として位置づけ可能な層は検出されていない。なお、灰原区域のグリッドは、全体のグリッドを中心に1区画を更に4分割し、窯に向かって左側から時計回りに区域グリッド名に付記しA・B・C・Dとしている。

5. 粘土塊だまり

B地区でも、土坑のような掘り込みを伴わない、窯の段に使用された還元粘土塊を主体とする廃棄区域が検出されている。これを粘土塊だまりと名付けている。A地区と同様、別の窯跡の存在を推測し検出にあたっているが、やはり窯跡は見つかっていない。覆土は粘性の強い流土に類するものがベースで、灰の混在が少なく、別の窯の灰層というより雰囲気としてモノバラに近いであろうか。粘土塊だまりは、8号窯前庭部から7号窯焚口前面土坑の一部と焚口付近からSK3までの範囲で、最も上層レベルで広がっている。還元粘土塊が幾重にも重なる状態で検出され、これを取り除くと窯跡や土坑の遺構プランが現れるといった状況であった。7号窯の作業時に廃棄したとは基本として考えにくく、7号窯の廃絶後に廃棄されたものと考えるのが妥当であろう。ただ、7号窯にかかる粘土塊層が割に少ないこと、廃棄プランが8号窯、7号窯、SK3にピッタリとあっていること、7号窯焚口前面土坑や燃焼部にまで広がりを見せないことには疑問が多少残っている。A地区でも粘土塊集中が検出され、焼成製品の選別場空間を伴う土器廃棄場として位置づけしている。B地区の場合も同じような土器選別場として捉えることが可能な広い空間がない



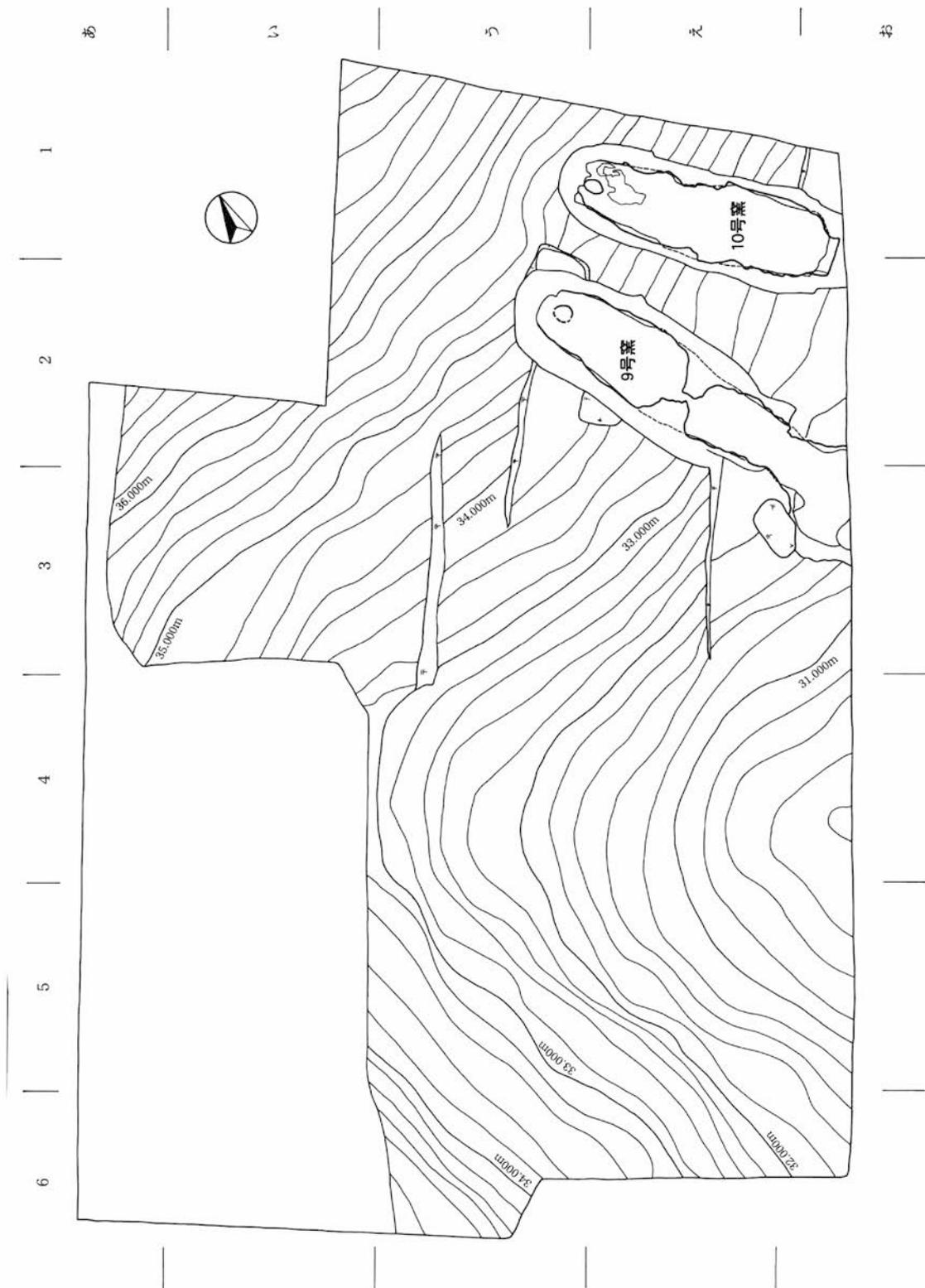
第39図 B地区 灰原層別範囲 (S=1/300)

わけではないが、A地区より斜面傾斜度も高く推測は難しい。何処からもってきたものなのか、不思議な現象である。出土遺物の主体は還元粘土塊であるが、土器も多量に伴っているのが特徴で、遺物が特に集中しているのは2層・17層の上位層であった。

いずれにせよ、この粘土塊だまりは、基本的に7号窯には伴わないものである。何処かにA地区同様選別された空間があり、この場所に選別後の集中廃棄がなされたと考えられるものである。

第3節 C地区の調査

C地区は二ツ梨豆岡向山の南東斜面に位置する区域で、調査区中央から南東にかけて谷部になっている。この谷に面した北側斜面に2基の窯体(9号窯・10号窯)を検出している。よって灰層の検出はないが、中央谷部から、まとまって遺物が出土している。遺物は出土するものの、灰は伴わず、土層からも判断して、谷部への流土堆積層とするのが妥当であり、灰原ではないものとしている。また、谷部流土堆積層を中心にC地区内全域及び窯埋土内から土師器が多く出土している。赤彩土師器を中心に内黒高坏など良好資料で、詳細は第5章の第2節で述べる。これら集中し



第40図 C地区全体図 (S=1/150)

て検出された土師器の出土から、まずは土師器焼成坑やこれに伴う工房跡の可能性が考えられる。残念ながらC地区内から土師器関連の遺構は見つかっていない。しかし、この区域の周囲に存在する可能性は極めて高いと考えられる。

第1項 9号窯

9号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃焼部：あ2b類	排煙口・煙道：Ⅲ1b類
----------------------	-------------	-------------

9号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入）

窯体実効長：780	最大幅：184	窯体内最大高：110	燃焼部床傾斜：-5度
窯体水平長：780	焚口幅：122	煙道長：88(推116)	残存：略完
窯体実長：804	焼成部口幅：118	窯体床面積：12.1m ²	修復回数：壁1、床1
焼成部長：(水)658	奥壁幅：104	焼成部床面積：10.4m ²	時期：8C1/4
(実)700	煙道径：42	燃焼部床面積：1.7m ²	
燃焼部長：122	窯体実効高：273	焼成部床傾斜：20(15~35)度	

焚口及び燃焼部と焼成部口の構造

燃焼部側壁は内傾気味に床に対してほぼ垂直に立ち上がる。焚口から燃焼部にかけての平面プランとしては、中央でややふくらみをみせるものの、焼成部口で122cmを測り、ほぼ長方形に近い形を呈す。焼け方は、手前側では灰色、焼成部口では青灰色を呈し還元する。焼成部口の両方の側壁に、食い込み痕跡が検出されており、焼成部口構築木材の食い込みと窯跡研究会の際教示頂いた。木材痕は、右側壁で床から12cm上起点高さ40cm、左側面では床から15cm上起点で高さ48cmを測り、底部の観察から径が5cm四方である。底部の食い込みが最も顕著さを示す痕跡となっている。長さは、もっとあった可能性がある。この痕跡は、焼成部口側壁に取り付けられた縦枠の一部で、5cm角材を使用したものと考えられる。枠自体は焼け切っている。

焼成部

〈形態と残存状況〉

焼成部は、絞られた焼成部口からハの字に広がり、胴がやや張り気味で、奥壁に近づくにつれ窄まり気味の平面プランをもつ。天井は、焚口から336cm地点から奥壁側へ50~110cmにかけて残存するが、これ以外は崩落している。床面はフラットで、残存する天井から、焼成部の断面形は蒲鉾形であったと考えられる。

〈床の状態〉

後述するが、床は1回の修復をしている。2次床面は主に青灰色で、奥壁に進むに従い青灰色も淡くなってゆく。この床面直上レベルで、炭層が焚口に至るまで全面に広がっている。最も厚い部分で8cm、薄い部分で4cmを測るが、奥壁に近い傾斜の高い部分から落ち込んだ可能性もある。炭層は、細かく砕かれた状態であるが、炭化材の形状を留めているものもある。側壁に黒く炭化するような痕跡は見つかっていないことから、この窯の廃棄後炭窯として再利用した可能性は薄い。この炭層を取り除くと床面があるのだが、遺物は極めて少なく、窯内を綺麗に掃除したと考えられる。この炭層の存在する理由で考えられるのは、窯の空焚きであろうか。空焚き後、窯を廃棄したと考えるのが妥当と思われるが、しかし、炭層上面からの遺物出土はなく、何のために空焚きを行ったか疑問が残る。いずれにせよ、非常に理解に苦しむ痕跡である。

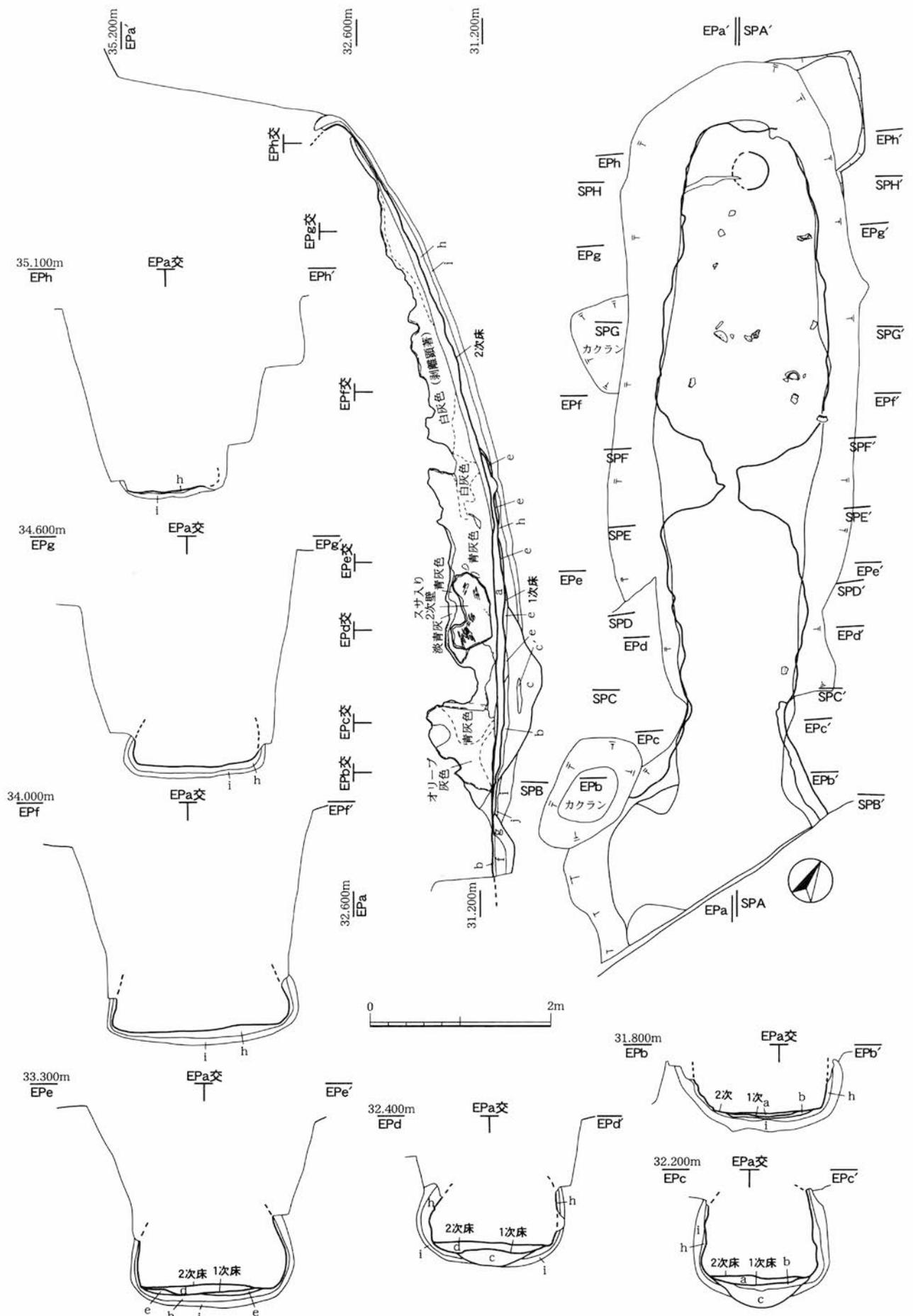
1次床は淡めの青灰色で、地山土が還元するものであるが、この床の上にも炭層を検出している。

〈側壁の状態〉

側壁は、著しく剥離しており、正確な情報を提示できないかもしれないが、基本的には青灰色で、焼成部中央から奥壁にかけて淡い青白色や白色を呈す箇所が見られるものの奥壁付近ではまた青灰色に還元している。色味の薄い部分は剥離の著しい箇所であるため、全体的には青灰色を呈して、火の廻りは良好だったのではないかと考えている。

奥壁及び煙道、排煙口

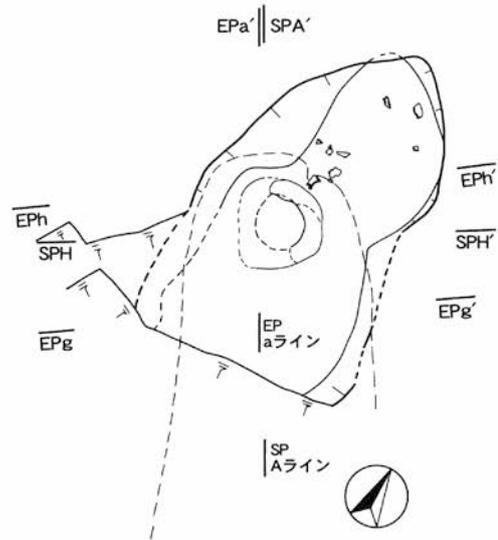
奥壁は、右側壁側が欠損しているのだが、内側に25度内傾して立ち上がりながら、直立する構造である。煙道は、ほぼ崩落しているが、排煙口が半分残存しており、全長は116cmあったものと推定可能である。



第41図 9号窯 平面図・断面図・左側壁図 (S=1/60)

9号窯 床下土層註

- a層：1次床。炭や還元ブロック、橙色ブロック(7.5YR7/4~6/4)、焼土ブロックΦmax 10cmの隙間に砂質の褐色土(10YR4/6~7.5YR4/6)が入る。極めて硬い。
- b層：2次床。にぶい黄褐色土(7.5YR7/3)と炭の混合。締まり極めて強。焼土。
- c層：舟底状ピット。暗オリーブ褐色土(2.5YR3/3)。部分的に灰オリーブ色土(5Y6/2)、オリーブ黒色土(5Y3/2)。炭も含み、ガチガチに固まっている。
- d層：炭を中心に焼土ブロックや地山砂が混在し固まる。基本的に還元はしていない。表面がうっすら還元色化している。締まりはあるが、舟底状ピットやb層のような硬さはない。1次床の続き。
- e層：炭の層。hラインでは若干混ざって2.5Y3/1~2/3。
- f層：明褐色土(7.5YR5/6)ベース。灰白粘土ブロック小(5Y7/2)、明黄褐色土(2.5Y7/6~6/6)、赤褐色土(2.5Y4/6)、炭などあわおこし状に入る。締まり欠ける。
- g層：暗褐色土(7.5YR3/3~3/4)、炭と混ざる。炭はブロックも混在。焼土や地山土のブロックも混在。締まりなし。
- h層：地山還元床。
- i層：地山酸化被熱。
- j層：地山弱く還元。



第42図 9号窯 後背部テラス平面図 (S=1/60)

後背部施設

後背部に土坑を検出している。土坑の半分以上が近代に切られているため、全体のプランは不明であるが、土層断面図の破線で示したレベルが土坑の床レベルである。土坑床面で排煙口が検出されており、遺物も僅かに出土している。土坑は地山土レベルから奥壁より奥側で40cm、右手前で20cmの落ち込みをもっている。

前庭部

前庭部は、調査区外に掛かるため半分以上が欠ける状態で検出されている。左側は120度に開くが、すぐに狭まる形状を呈し、右側は50度に開く。焚口の転換点から手前へ40cm、厚み2cmの地山酸化被熱を確認している。前庭部底面は、フラットな部分が焚口付近に見られるものの、中心に向かってやや落ち込み気味となる。

壁・床の修復

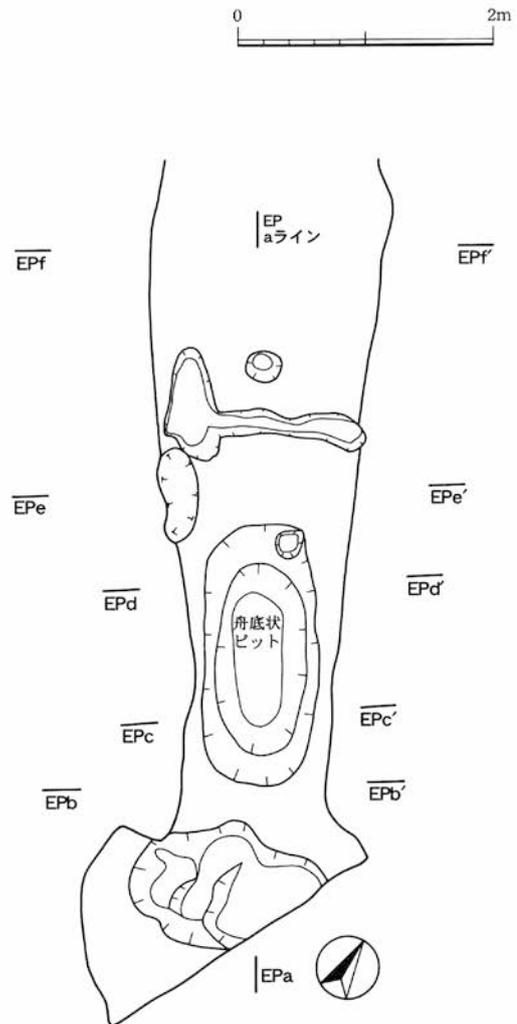
左側壁では、焚口より166cm地点から奥へ88cmの幅でスサ入り粘土の修復痕が認められるが、右側壁では検出されていない。床は、焚口から奥壁方向へ390cmまで修復が確認できる。張替というよりは、床に段や浅い窪みができた部分に土を入れたものと考えられる。

床下遺構(舟底状ピット)

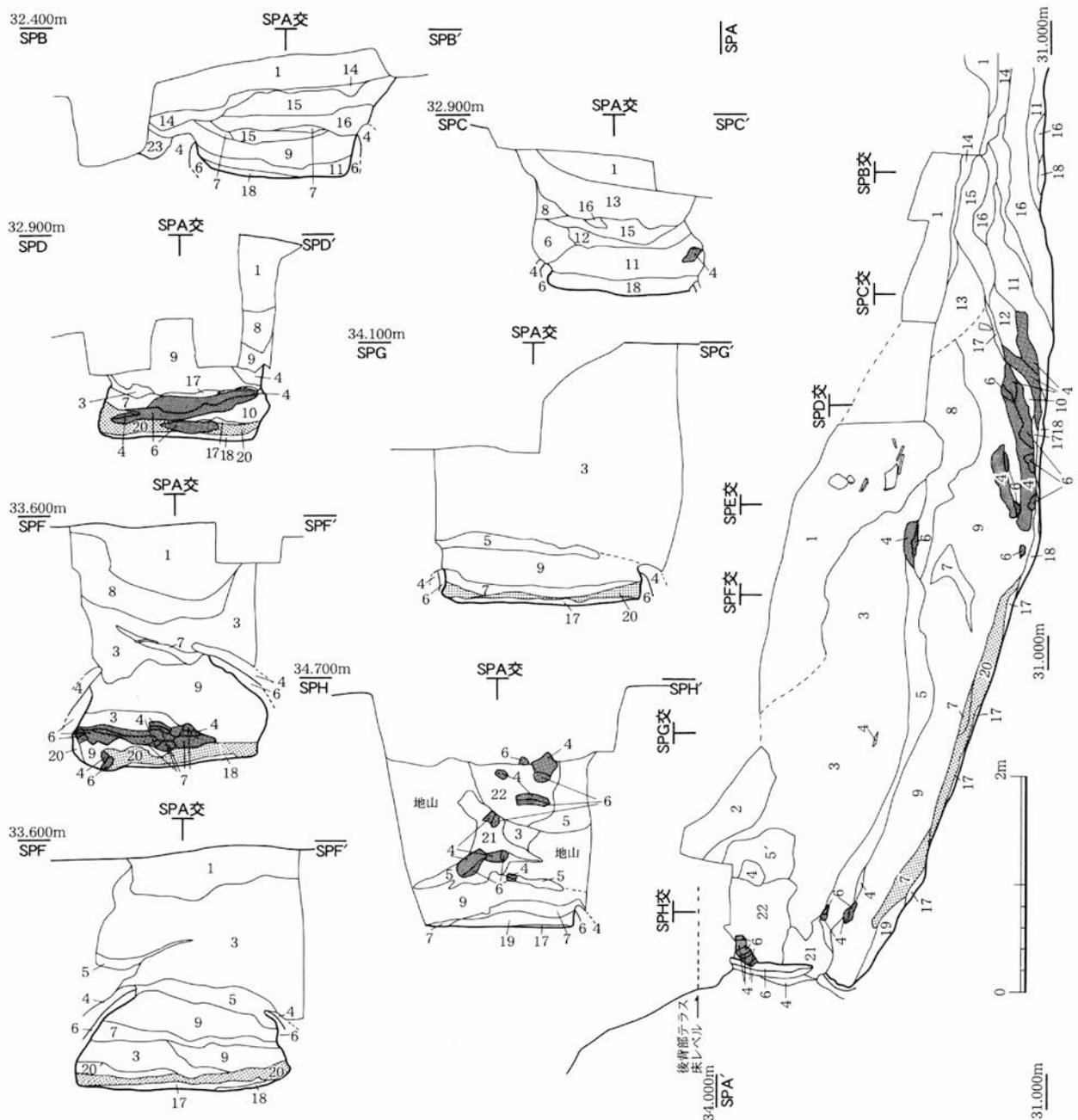
床下遺構として窯体内に舟底状ピットと溝状遺構、前庭部に小土坑を検出している。舟底状ピットは比較的深く、土質は非常に非常に硬く掘削が困難な程であった。全体に還元状態を呈すといったもので、分層が不可能であった。前庭部の小土坑は、還元ブロックを中心として灰層で埋まっている状態であった。

埋土

天井崩壊と共に崩落した地山土を焼成部口から奥の全区域で確認、燃焼部から焚口にかけての陥没に、大甕を主とした集中廃棄、奥壁側床上では煙道からの流土堆積が認められる。最上層では窯体全体に流土堆積が確認されている。



第43図 9号窯 床下遺構平面図 (S=1/60)



C地区 9号窯 埋土土層註

- 1層：褐色土(7.5YR4/4+10YR4/4) 陥没後の堆積土。
遺物を含むが、地山層に近い質をもっている。締まりにかけろ。
- 2層：褐色土(10YR4/4)+暗褐色土(10YR5/3)陥没後の堆積土。
炭ブロック多め。焼土ブロック大含む。締まりあり。
- 3層：褐色土(7.5YR4/6)。天井崩壊に伴って一緒に陥没した地山層。上層は粘性あり、下層は砂地山。
- 4層：地山酸化被熱層。
- 5層：褐色土(7.5YR4/6)ベース。地山砂ブロックが入る。焼土ブロック大混在。
還元ブロックが少し混在。締まりまったくなし。天井崩壊に伴う、地山被熱部分が残存したもの。
- 5'層：5層と同層だが、締まりあり。
- 6層：天井。地山青灰色還元部分。
- 7層：赤褐色土(7.5YR4/4)ベース。ブロック状を呈している部分もある。還元ブロックや土器混入。締まりなし。地山酸化被熱を中心とした天井崩壊土。
- 8層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)+褐色土(7.5YR4/3)=5:5。炭が入り、締まっている。
- 9層：明褐色土(7.5YR5/6~5/8)砂質。まったく締まりなし。炭や焼土ブロック少し混在。天井崩壊に伴う地山崩壊土の一種。
- 10層：褐色土(7.5YR4/6)+暗褐色土(10YR3/3)で濁っている。焼土ブロック、炭が多い。締まりあまりなし。
- 11層：橙色ブロック(7.5YR7/6)、赤褐色ブロックの固い混在土の隙間に橙色ブロック大(Φ10.0)や褐色土(7.5YR4/6)が入る。しっかりしており、固い。焚口から燃焼部にかけての崩壊土。

- 12層：褐色土(7.5YR4/6)に、にぶい黄褐色土(10YR5/4)ブロック入る。しっかり締まっており、炭や焼土ブロック混在。
- 13層：にぶい褐色土(10YR5/4)ベース。褐色土ブロックや炭が多い。遺物多量。粘りが強く、締まっている。埋土土層土坑?。
- 14層：1層と15層の漸移層。焼土や炭が多い。
- 15層：黒色(10YR2/2)炭多量層。遺物多く、締まりはややあり。
- 16層：褐色土(7.5YR5/6)+鈍い黄褐色土(10YR4/3)=6:4 焼土混在。炭多量混在。しっかり締まっていて固く、人為的に埋めてたいたような堅さ。
- 17層：15層より一層濃い炭の層。炭化材塊も含む。
- 18層：暗褐色土(10YR3/3)+褐色土(7.5YR4/6)。炭Φ0.2~2.5多量混在。
- 19層：粘りのある褐色土(7.5YR4/6)に砂ブロック混在。締まりややあり。排煙口からの流れ込み土。
- 20層：赤褐色土(5YR4/6)+還元・酸化天井ブロック。隙間に褐色土砂混入し、締まりはない。天井崩壊土。
- 20'層：20層と地山層の漸移層。天井崩壊に伴う土。
- 21層：地山砂ブロックがベースで、褐色土(7.5YR4/6)混在。焼土ブロック大、還元ブロックが少し混在。締まりまったくなし。煙道崩壊に伴う地山崩壊土か。
- 22層：暗赤褐色土(5YR3/6~4/8)ベースで、褐色土ブロックや還元ブロック、炭多量混在。締まりはない。煙道崩壊土。

第44図 9号窯 埋土セクション図 (S=1/60)

遺物出土状況

遺物は非常に希薄である。窯の廃棄時には窯内部を綺麗に掃除したと考えられ、数十点の出土しかない。出土遺物は置台として使用されたと考えられる坏Bの身、また取り残しと考えられる坏Aが確認できる。

第2項 10号窯

10号窯構造分類

構造名：A2類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・燃焼部：－	排煙口・煙道：Ⅲ1b類
----------------------	----------	-------------

10号窯窯体計測表（単位はcm、cm以外は記入）

窯体実効長：残602	最大幅：200	窯体実効高：残250	焼成部床傾斜：18（14～34）度
窯体水平長：残602	焚口幅：－	窯体内最大高：108	燃焼部床傾斜：－
窯体実長：残752	焼成部口幅：－	煙道長：176	残存：窯体のみ
焼成部長：（水）残588 （実）残620	奥壁幅：残100	窯体床面積：残9m ²	修復回数：なし
燃焼部長：－	煙道径：短32～36 長46	焼成部床面積：残9m ²	時期：8C1/4
		燃焼部床面積：－	

10号窯は、燃焼部及び焼成部の一部が調査区外であったために、焼成部のみの調査となった。焼成部口付近に窯壁修復が多い傾向にあることから踏まえて、調査区域境付近が焼成部口に位置する可能性があるが、焼成部口を示す結果が出ていないために判断は難しい状況である。

焼成部

焼成部床は痛んでいる。奥壁の亀裂や、奥側の床の割れがある。床の割れは、所謂壺据えピットのような性格のものでなく、破損によるものと考えている。床も側壁も地山土が還元した青灰色である。側壁も剥離が著しく、痛んでいる窯といった印象である。最も手前の側壁は濃い青灰色で、修復粘土にはガラス状に溶解する釉付着、剥離のために淡い青白色となっている部分があるものの奥壁近くでは青灰色を呈しており、火の廻りは相当良かったと思われる。天井は、殆どが崩落している。僅かに残存する部分においても潰れた形状を呈す。

奥壁及び煙道、排煙口

奥壁は欠損している。煙道を含め、奥壁側の排煙口から78cmより下の部分は崩落し、地山土が剥き出しの状態である。煙道口は非常に良好で、径が長径44cm、短径30cmの楕円形を呈するプランをもつ。煙道径は長径が46cm、短径が32～36cmの同じく楕円形である。煙道長は176cmと非常に長く、奥壁が欠損しているものの、残存する煙道は、よく還元し青灰色を呈しており、直立煙道の状態が良好に確認できる。

壁・床の修復

両側壁で、調査区境から窯尻方向は44cmの範囲で1回の修復がなされている。基本的にはスサと砂を含む粘土だが、スサの割合が少ない。調査区境からは、3次壁を示すようなものを土層断面で確認しており、またこの付近の埋土からも天井修復もしくは側壁修復用のスサ入り修復の崩壊土を検出している。天井の修復または、2回の側壁修復が行われたかもしれない。床の修復はされていない。

床下遺構（舟底状ピット）

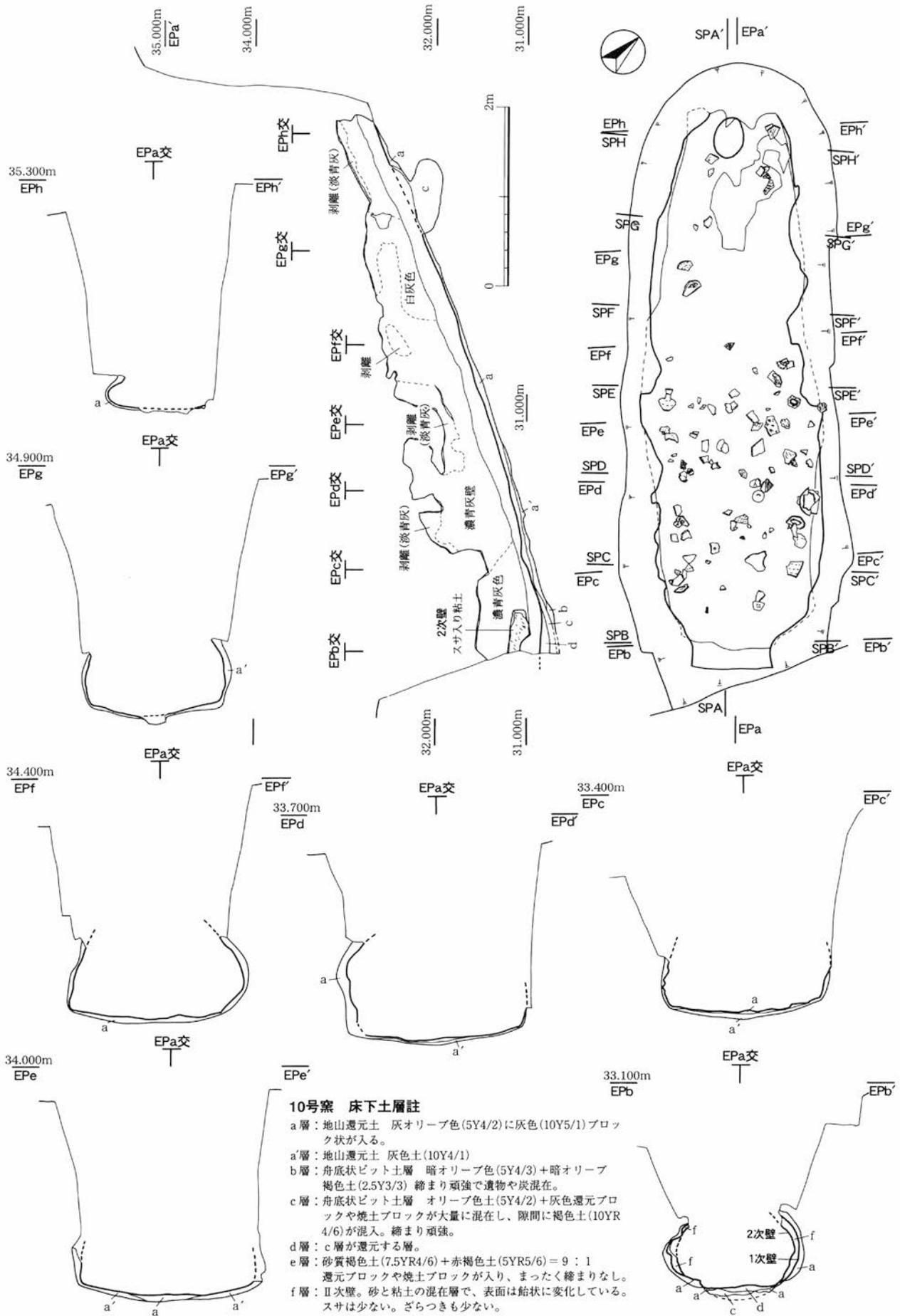
調査区境から奥尻へ向かい48cmの地点から手前にかけて舟底状ピットの土層を確認している。様々な色調を呈す還元ブロックが混在し床と同様硬化するものである。調査区境ということもあり、平面としてのプランを捉えることはできなかった。

埋土

天井が崩壊し、陥没した部分に流土堆積層が認められる。窯体内では、奥壁付近で煙道口から流れ込んだと考えられる堆積層が認められるが、この他は天井崩壊に伴い、地山と共に崩落した痕跡が確認、最上層では陥没後の窪みに流れ込んだと考えられる流土堆積層が認められる。

遺物出土状況

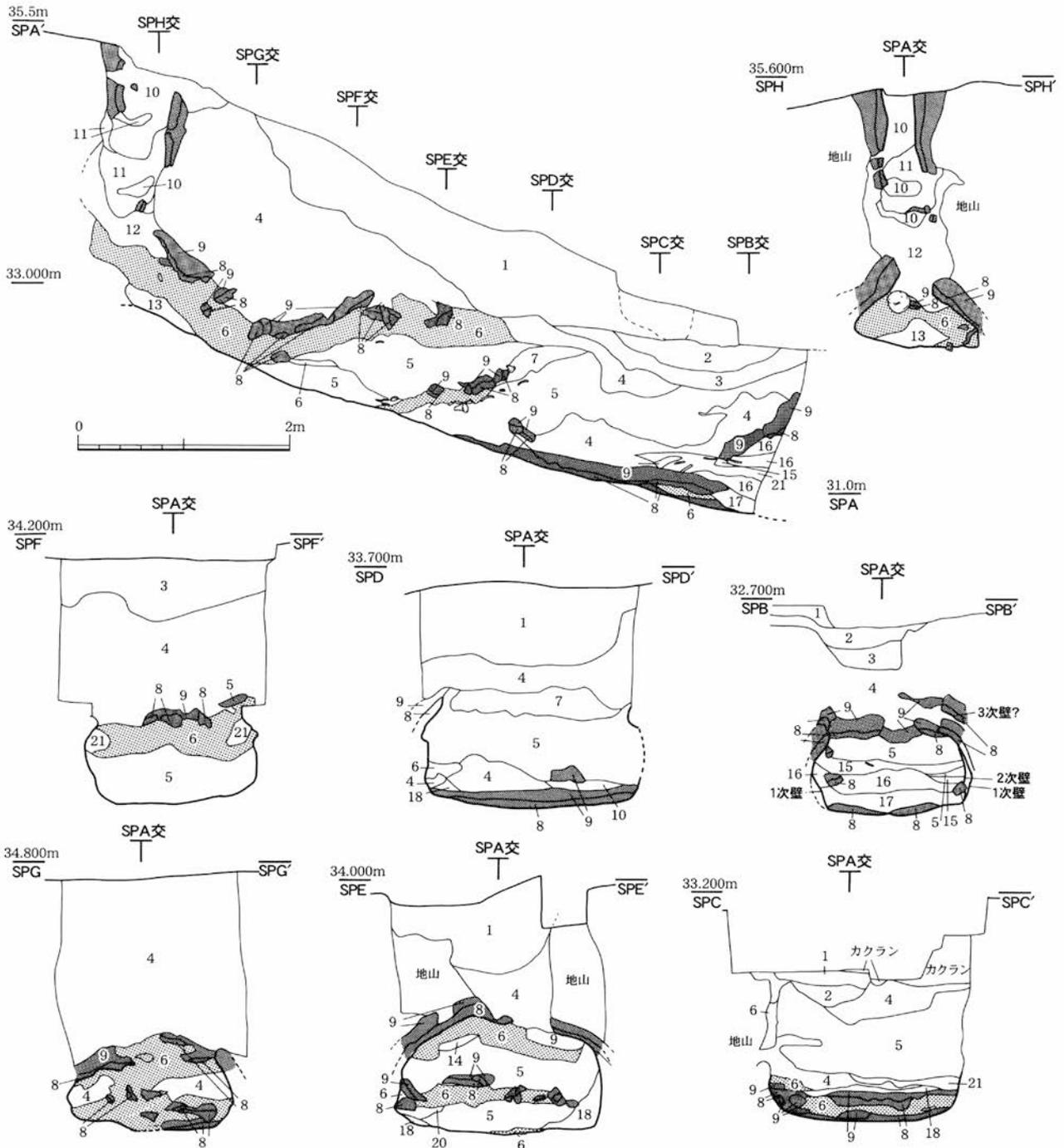
遺物は、取り残しも含め、壺の破片が目立つが、置台として使用されたものが主体である。また、9号窯床出土の坏B身と、10号窯出土の坏B身で接合できているものがあり、これについては第5章の遺物で述べる。



第45図 10号窯 平面図・断面図・左側壁図 (S=1/60)

10号窯埋土 土層註

- 1層：褐色土(7.5YR4/4+10YR4/4)陥没後の堆積土。
焼土や炭の小ブロック、遺物を多く含む。締まりにかけろ。
- 2層：黒褐色土(10YR2/2)陥没後の堆積土。
炭ブロック多量。焼土、褐色土ブロック少々含む。締まりあり。
- 3層：明褐色土(7.5YR5/6)に染み状の黒色土。陥没後の堆積土。
炭、焼土ブロックを含み締まりあり。
- 4層：明褐色土(7.5YR5/6~5/8)。天井崩壊に伴って一緒に陥没した地山層。
砂質で締まりあり。
- 5層：明褐色土(7.5YR4/4)+鈍い黄褐色土(10YR4/3)=4:6の天井崩壊伴う土。
焼土ブロック少々、炭ブロック小多く含む。締まりあり。
- 6層：砂質地山土ベースで、窯体天井(酸化ブロック含む)が多く混在する層。
天井崩壊土。
- 7層：褐色土(10YR4/4)+暗褐色土(10YR3/3)、炭多量、焼土ブロック含む。
天井崩壊に伴う土。
- 8層：天井。青灰色還元部分。
- 9層：天井。地山酸化被熱部分。
- 10層：砂質の褐色土(7.5YR4/6)ベースで、煙道壁崩壊土ブロック含む。
やや締まりあり。煙道の堆積土。
- 11層：暗褐色(7.5YR3/3)ブロックベースで、煙道壁崩壊土ブロック少し含む。
締まりなし。煙道堆積土。
- 12層：明褐色土(7.5YR5/6)に煙道壁ブロック多く含む。煙道崩壊土。締まりあり。
- 13層：褐色土(7.5YR4/6)+にぶい黄褐色土(10YR5/3)=4:6。砂質強。締まりあり。
- 14層：明褐色土(7.5YR4/6~4/8)若干炭や焼土が入る。締まりあり固い。
- 15層：暗褐色土(7.5YR3/3)+炭。大量の焼土ブロック含む。締まりなし。
- 16層：還元ブロック、酸化ブロック、白粘土ブロック多量の隙間に褐色土(7.5YR4/6)が入る。焼成部口付近の天井崩壊土。
- 17層：スサ入り天井崩壊土の隙間に褐色土(7.5YR4/6)や暗褐色土(7.5YR3/3)が入る。
修復天井崩壊土?
- 18層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)+褐色土(7.5YR 4/3)還元塊ブロック(Φ5.0)多い。
締まりはない。
- 19層：褐色土(7.5YR4/6)+暗褐色土(7.5YR3/3)=3:7 焼土ブロックや還元ブロック
大が入る。締まりはない。
- 20層：暗オリーブ灰(2.5GR4/2)、暗褐色土(10YR3/4)、ブロック状褐色土(7.5YR4/6)
が5:3:2の割合で混在。締まりなし。壁や床の還元地山砂と土の混合流土。
- 21層：炭層



第46図 10号窯埋土セクション図 (S=1/60)

第5章 遺物

出土遺物の概要

二ツ梨豆岡向山窯跡の試掘調査において遺構と遺物が検出され地区割りされ、地区名が付けられた区域から基本的に遺物は出土している。E地区は微量であるものの、試掘調査では遺物箱（64cm×41cm×14cm）計7箱であった。調査対象となった区域のA・B・C地区本調査において出土した遺物は、当窯跡において生産された又は使用された須恵器窯関連の遺物主体で、遺物箱総量296箱を数える。瓦の出土はA地区・B地区合わせて遺物箱7箱であった。出土品の地区別概要は以下のとおりである。

A地区（西側斜面）の出土品

A地区からは、須恵器、土師器、瓦、窯道具が出土する。須恵器窯に伴う生産関連遺物がほぼ全体を占めているわけであるが、瓦陶兼業窯に関連する瓦の出土は遺物箱1箱である。須恵器出土遺物を大別すると、食膳具の坏A・坏Bを主体とした2号窯で生産されたもの、またはこの時期に位置づけられる鴟尾の遺物類。そして、食膳具の碗・皿、貯蔵具の横瓶、甕、還元焰焼成された須恵器煮炊具の他、軒平・軒丸・平・丸瓦や陶硯、陶錘、特殊蓋、コップ型の特殊製品を伴う1-A号窯・1-B号窯の瓦陶兼業窯で生産された遺物類の2つに分けることができる。この他、後者に伴う窯道具として、貯蔵具専用焼台や匣鉢、本窯跡からの生産品とは考えがたいが、土師器が破片で遺物箱2箱強、刀子も出土している。この他、窯構築に関係する遺物として、還元焰焼成された粘土塊が多量に出土する。

A地区の本調査は窯体調査を主旨としたものである。昭和58年度にA地区灰原調査が実施されており、この分の発掘調査報告書（小松市教育委員会 1993『二ツ梨豆岡向山窯跡』）が刊行済みである。この中で出土遺物の詳細な分類がなされており、既に8世紀と10世紀の2時期に渡る遺物が出土していることが明らかとなっている。前述の2号窯が8世紀に比定、1-A号窯・1-B号窯が10世紀遺物である。

本調査では、8世紀遺物から灰原調査時に出土していない仏器的要素をもつ碗、碗、また鴟尾が新たに検出され、10世紀遺物では貯蔵具で灰原調査時には出土されていなかった新たな器種が検出されている。

B地区（北側斜面）の出土品

やはりA地区と同様、須恵器、土師器、瓦、窯道具が出土する。須恵器出土遺物を大別すると、食膳具の坏A・坏B・高坏、貯蔵具の小型壺・短頸壺・平瓶・横瓶・甕類、移動式竈の8号窯で生産された8世紀前半操業の須恵器窯に伴う生産関連遺物と、同じく8世紀前半に位置づけられる鴟尾破片の遺物類。もう一方は、食膳具の碗・皿、貯蔵具の鉢・瓶・壺・甕、還元焰焼成された須恵器煮炊具の他、軒平・軒丸・平・丸・熨斗瓦や鬼瓦、陶硯、陶錘、特殊蓋、コップ型の特殊製品、陶錘、A地区では出土していないが用途不明である特殊陶製品の7号窯の瓦陶兼業窯で生産された10世紀前半に位置づけられる遺物類。2時期に大別することができる。A地区同様に10世紀の部類に含まれるもので、窯道具としての貯蔵具専用焼台や匣鉢、窯構築に関係する遺物として、還元焰焼成された粘土塊が大量に出土する。また、同時期と考えられる土師器が遺物箱で5箱強出土している。

C地区（南東側斜面）の出土品

A地区・B地区と同様に須恵器窯に伴う生産関連遺物が全体の74%を占め、土師器が一定量まとまって出土している。須恵器では、食膳具の坏A・坏B・高坏、微量であるが碗・鉢、貯蔵具では小型壺・短頸壺・長頸瓶・平瓶・横瓶・甕類の9号窯・10号窯で生産された8世紀前半に位置づけられる遺物が出土している。土師器は、食膳具の赤彩碗・坏B、内黒高坏等、煮炊具である小型甕、長胴甕、鍋、甑でロクロ成形されたものや、伝統的な技法と言えるようなハケ甕、ハケ鍋が出土している。

出土遺物の焼成の違いについて

これら出土遺物の焼成の違いを記述しておく。8世紀（前半）に位置づけている出土遺物と、10世紀（前半）に位置づけている出土遺物では、窯そのものの構造によるものと考えられる焼成具合の違いが確認できる。前者は堅緻で土そのものにも密度の高さをもつ仕上がりが基本となっており、後者は前者に比べ粗雑な質感で所謂焼きのあまい仕上がりが基本となっている。ただ硯のような特殊製品について良好な質となっている。

胎土について

須恵器、瓦、還元焰焼成及び酸化焰焼成の煮炊具、赤彩等の土師器の胎土について記述しておかなければならない。時期よっての格差はなく、いずれも南加賀窯跡群の戸津オオダニ地区の窯から出土する遺物胎土と同類と考えられる質のものである。胎土の特徴は、素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土、これが基本となっていて、砂を多く含むか含まないかにより分類がなされるのだが、本書の須恵器では砂を適度に含む「通常」と、通常よりも砂を多く含む表面がざらつく質のものを「砂多」の2種類を基本としている。ただ赤彩土師器では、砂が少ない良質な土を使用しており「良」として示している。また、須恵器・土師器の煮炊具は、混和剤と呼べる大粒砂粒を多く混在させる土である。瓦は、混和剤と呼べる大粒砂粒を多量に混在させるが、割合が非常に多く粘土質感が非常に弱いもので、表面はザラザラする。

10世紀須恵器煮炊具について

10世紀の須恵器煮炊具は土師器煮炊具と同様の器形をもつもので、本来は低火度酸化焰焼成品であるものが高火度還元焰焼成されたものである。要するに土師器器種が須恵器として焼成されている。厳密には須恵器器種に含まれるものではないが、どの窯でも一定の含有率をもつため生産器種の中に包括されている。よって、当窯でも須恵器として扱い、器種構成表の中に含めている。

土師器について

土師器についてだが、C地区出土のもの以外は、細片が多く図化するに至っていない。破片から有台・無台の碗・皿の他、煮炊具の長胴甕、鍋、甑を確認している。食膳具では有台碗で高台のもの、皿は小さく底径も4cm程の小型のものが目立ち、煮炊具は須恵器煮炊具と同様に、甕・鍋の口縁端部折り返しの著しいものが目立つ。A地区・B地区の両地区で甕の胴部に煤が付着するものや口縁折り返し付近まで煤が付着するような使用痕跡が認められるものがある。B地区出土の土師器は、第4章遺構における記述しているように、SK1の土師器焼成坑である可能性が捨てきれない。破片とはいえ遺物量も多いので、これらの土師器が関連づけられる可能性はあると言える。C地区出土の土師器については、同章「第2節8世紀の土師器と特殊遺物」で述べるものとする。

時期の名称について

8世紀（前半）遺物と10世紀（前半）遺物と大別していることについては、この後の節報告のために、ここではおまかなものとさせて頂きたい。また、小結にて時期について触れたいと考えている。

第1節 8世紀の須恵器

8世紀の須恵器は、A地区（西側斜面）の2号窯関連、B地区（北側斜面）の8号窯関連、C地区（南東側斜面）の9号窯・10号窯関連の遺物であり、食膳具と貯蔵具が主体となって、特殊なものとして鴟尾が2号窯、8-II号窯2次床から出土する。それぞれの器種構成については地区毎に提示してゆきたい。

器種名について

なお、器種名についてであるが、従来の呼び名を基本とし、北陸古代土器研究会で通常使用される器種名であれば（ ）として表示している。食膳具では内面に指押さへの窪みをもつ器形を坏とし、無台をA、有台をBとしている。坏Aは蓋を伴わず、坏Bはつまみをもった蓋を伴っており、蓋と身として区別している。この他、高坏、数量ではあるが金属器模倣と考えられる仏器的器種である碗が出土している。深みのものを碗、内湾するものを鉢とした。

貯蔵具では、壺類、瓶類、甕類を包括し、基本的に大型容器として設定しているが、小型のものについては小型貯蔵具として分類、器種名前に小型と表示している。甕は大甕、中甕、小甕を区別している。

壺類の名称については壺A（＝狭口球胴短頸壺、薬壺）として蓋を伴うもの、壺D（＝狭口肩張短頸壺、肩衝壺）としている。瓶類の長頸瓶については胴部の肩が張る器形（瓶A）を示し、鉢類の口頸部に括れをもつ鉢を、把手付きを含め鉢Bを示している。同じく鉢B器形の一種であるが鍋の機能をもつ可能性のある器種として、把手付鍋とした。すり鉢は、深み厚底の鉢（鉢F＝つき鉢とも言う）を示す。小型器種を小型鉢としている。瓶類では、胴部肩張り器形のものをも瓶Aと示している。

第1項 A地区出土須恵器

器種構成と器種の概要

A地区から出土する8世紀須恵器は、口縁部計測法によると、食膳具が含有率99%を占め、貯蔵具が甕のみ1%以下となっている。ただ、貯蔵具では、口縁部は出土していないが胴部や底部の出土を確認しており、器種の比率に反映していないと考えられるので、書き留めておくと、壺類の胴部底部破片数13、横瓶胴部破片数8、長頸瓶の底部破片数3が出土している。破片数自体も少ないのであるが、甕の胴部破片数15も含め、壺、甕、横瓶破片は主に窯床から出土し、長頸瓶の台は上層灰原から出土している。ちなみに、器種構成表に表示された甕口縁はSK3から出土する破片1点であり図化には至っていない。

本調査の出土須恵器の殆どが坏Bの蓋・身で、蓋が60%弱と最も多い。坏Aが6%、埴、甕は1%前後の含有率となっている。高坏は、1点のみ窯の床面から出土するが、口縁部自体の残存率が極めて低いことによる結果の数値となっている。これらの数値はA地区西側斜面の2号窯で生産されたものとして、もちろん反映しておらず、昭和58年度灰原調査の器種構成と合計しようと試みたところ、個体識別法で大別構成されており、著者が気づくのが遅かった。灰原調査では、食膳具75%、貯蔵具22%、煮炊具1%である。

また、A地区では2号窯からの出土が53.5%、上層灰原からの出土が以外に多く30%の含有率を占めている。

A地区8世紀須恵器		2号窯床		2号窯埋土		上層灰原		SK		粘土塊だまり		グリッドなど左記以外のその他		A地区窯床以外合計		A地区内8世紀遺物総計	
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率
食膳具	坏A	69	5.2%	7	6.9%	37	4.9%	30	30.9%	3	13.6%	0	0.0%	77	6.8%	146	5.9%
	坏B蓋	777	58.9%	34	33.3%	424	56.5%	67	69.1%	14	63.6%	136	82.4%	675	59.4%	1,452	59.1%
	坏B蓋身	439	33.3%	36	35.3%	289	38.5%	0	0.0%	5	22.7%	29	17.6%	359	31.6%	798	32.5%
	高坏	1	0.1%	0		0		0		0		0		0		1	0.0%
	埴	33	2.5%	0		0		0		0		0		0		33	1.3%
	甕	0		25	24.5%	0		0		0		0		25	2.2%	25	1.0%
	食膳具合計	1,319	100.0%	102	100.0%	750	100.0%	97	89.8%	22	100.0%	165	100.0%	1,136	99.0%	2,455	99.6%
貯蔵具	甕類	0		0		0		11		0		0		11	100.0%	11	100.0%
	貯蔵具合計	0		0		0		11	10.2%	0		0		11	1.0%	11	0.4%
総計 (/36)		1,319	53.5%	102	4.1%	750	30.4%	108	4.4%	22	0.9%	165	6.7%	1,147	46.5%	2,466	

第3表 A地区出土須恵器 器種構成表 (口縁部計測値総計2,466/36)

1. 2号窯

器種構成と概要

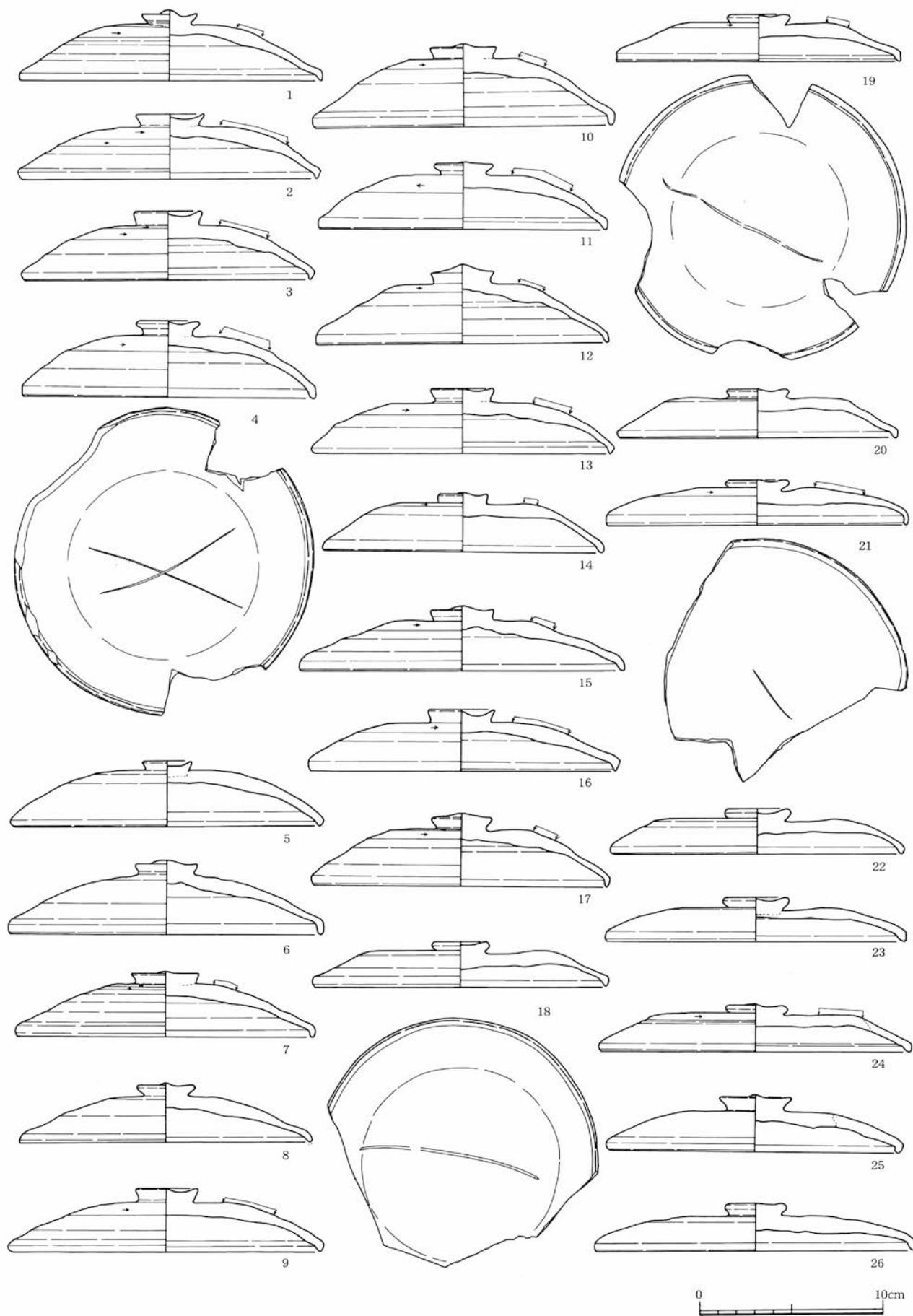
2号窯の床出土のものである。器種構成表で、最も含有率が高いのは、坏B蓋の59%、次いで坏B身の33%、坏Aが5%、埴が3%以下、高坏については1%を切る。貯蔵具は出土していない数値となっているが、これは口縁部が出土していないためで、甕や横瓶破片が出土している。2号窯での出土須恵器は、置台として転用されたものが多く、このため最も多く置台として使用されている坏B蓋が高い数値を示していると思われる。

坏B蓋 (1~30)

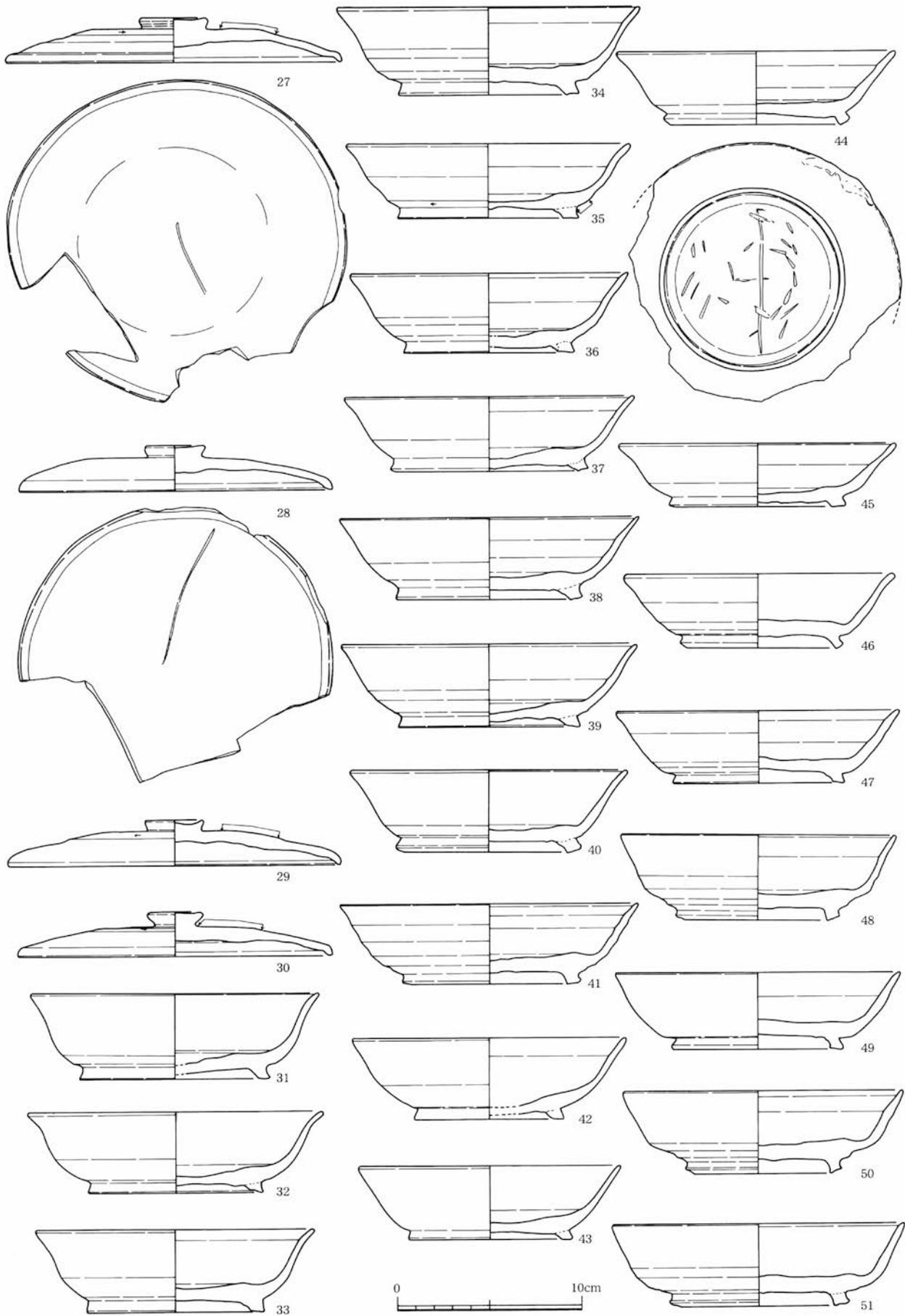
坏Bの法量は、蓋・身ともに「一器種一法量」にまとまるものである。基本として器形は、口縁部を折り返し、扁平つまみの付着するものであるが、詳しく観察すると違いが見られる。

器形では、器高が高く、天井に平坦面をもたないため天井部が狭くなっている所謂山笠状のもの(あ類、1~6)、山笠状であるが天井部に若干平坦面をもつもの(い類、7~11)、天井に平坦面をもって天井部から口縁部へ向かって屈曲を呈す全体がやや扁平のタイプ(う類、12~17)、扁平タイプであるがより器高が低いもの(え類、18~30)がある。同じく扁平タイプで、つまみ接着時に圧力がかかり天井部分が窪みをもつもの(お類、18,21,22,23)がある。

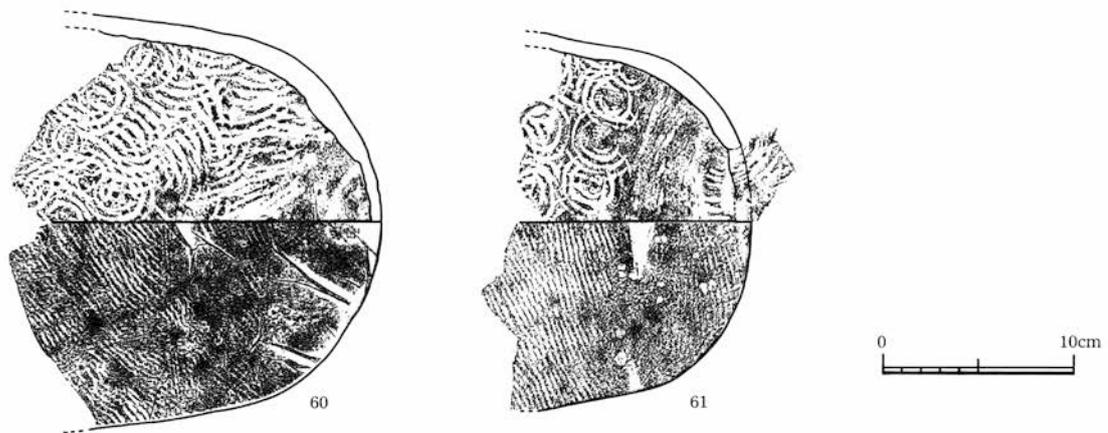
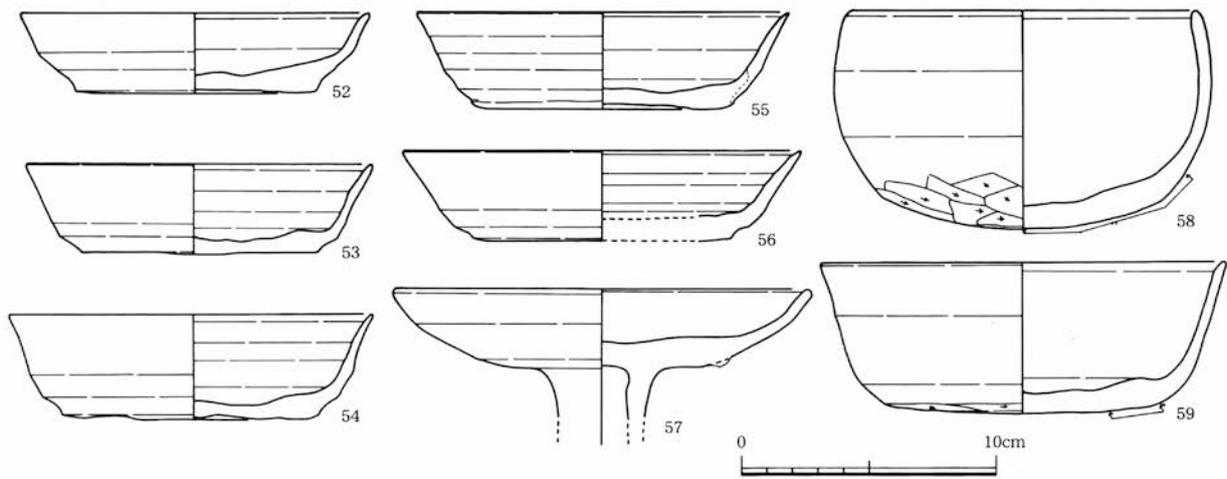
口縁折り返しの形態では、薄く長いもの(①類、21)、厚く長いもの(②類、4,6,10,12,)、断面が逆三角形を呈するもの(③類、1~3,9,11~13,16~18,20,21)、断面が逆三角形を呈すが折れ曲がり明確でないもの(④類、5,22,28)、端



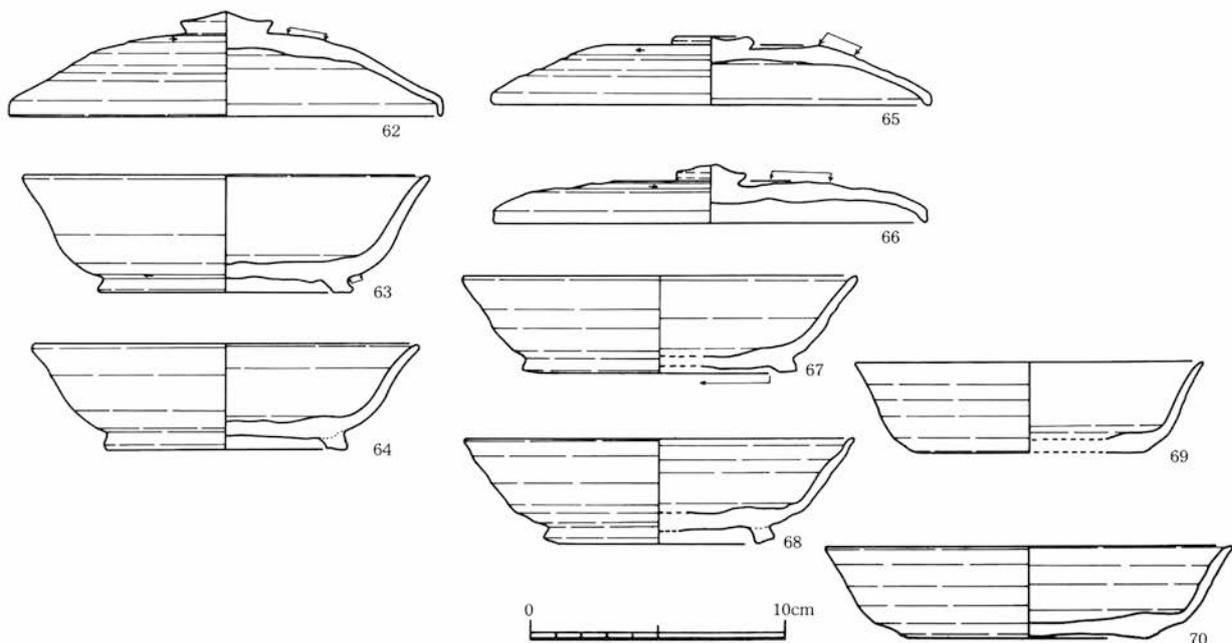
第47図 2号窯床出土須恵器(1) (S=1/3)



第48图 2号窯床出土須惠器(2) (S=1/3)



第49図 2号窯 床出土 須恵器(3) (S=1/3)



第50図 A地区 グリッド・2号窯 埋土 須恵器 (S=1/3) (62~64:埋土, 65.66.69.70:土層灰原, 67~68:グリッド)

部が丸く折り返しが明確でないもの(⑤類、8,29)、折り返し外面に指で押さえ込んだような窪みをもつもの(⑥類、19)があり、この他口縁際に窪みをもって若干かぎ爪状を呈すもの(⑦類、27)もある。

つまみ形態では、全体にぼつたりするタイプ(B類、18,19)、つまみ端部が尖り気味のタイプ(C類、7,10,12,15,16,25,29)、B類とC類の間タイプ(A類)があり、つまみ基部から端部途中で窪みをもつもの(E類、4,26)とつまみ基部が直立を呈すもの(F類、14,15)がある。

ヘラ記号は、「×」「－」の2種類があり「－」では長いもの(18,19,28)と短いもの(21,27)がある。

坏B身(31~51)

坏B身は、ロクロ回転成形後、底部ヘラ切りによる切り離し、高台を付着する一定の方法で成形されている。

器形は平坦な底部から丸みをもって立ち上がり口縁端部で外反気味となるものが(a類)中心であるが、体部が若干開き気味となるもの(b類、44~46)と、若干箱形を呈すものがある(c類、48,50,51)。

台の形態は、ハの字に踏ん張るタイプのものである。この中で、畳付き部がベタで接地するもの(ア類、31,33,35,42,43,45)、ハの字に踏ん張るが外側接地するもの(イ類、32,36,39,47,49)、内側接地するもの(エ類、37,38,40,44,46,48,50,51)がある。

また、台の接着時における調整痕として少量の粘土を使用し、この粘土がはみ出した痕跡がみられるが、高台部付け根内部(④類、32,34,38,40,49)、高台部付け根外部(⑥類、40,41,48,50,51)、畳付き部外面(③類、畳付き部内面31,38,41,44,46,47,48,50,51)、畳付き部内部側(⑩類、41,44,49,50)痕跡がないもの(35,36,39,42,43,45)がある。また、畳付き部が窪むもの(32,34,37,45,47,50,51)があり、工具により明確な線状に窪むものもある。

ヘラ記号は「－」がある。実測可能であった44は、「－」と共にヘラによる傷状の工具痕が見られる。

以上の他、(35)のみ体部底面側でケズリが確認できる。また、底部ヘラ切り後の筋状圧痕が見られるものもある(38)。これは、ヘラによる撫でつけとは違うもので、規則的な一定の間隔・並列となっているものである。ヘラ切り後、一時何処かに台のようなもの上に置いたためにできた痕、もしくは乾燥のためであろうか。また、体部成形は右ロクロ回転、台接着時には左ロクロ回転とロクロ回転方向が異なっているもの(42)がみられる。

坏A(52~56)

基本的に底部が平坦で、体部への境が顕著、立ち上がりに窪みを伴い、口縁端部は粘土を引き延ばすように鋭く尖るようなタイプのもの(⑦類)である。法量は、口径13.5~14.5cmが中心、15cm以上のものもある。この器形は、灰原調査報告の分類でA類にあたるものである。

高坏(57)

高坏は、体部の浅い碗型を呈すものである。

鉢(58)

鉢系の碗と言った方がいいだろうか。口径13.5cm、器高8.6cmを測り、体部が強く内湾する器形で、口縁端部を丸く仕上げ、底部に手持ちケズリを施し丸みをもたせている。器肉は以外と厚いが外面は丁寧に撫でられており、内面底部には工具ナデによるものか滑らかとは言えない粘土がささくれ立った痕が残っている。内外の降灰は見られず、焼成もあまいものとなっている。

碗(59)

口径15.65cm、器高6.05cmの深みのものである。底部から体部立ち上がり丸いが外傾気味に開き、口縁端部で窄まって尖り気味におさめている。右回転ロクロヘラ切りによる切り離しがなされており、底部に手持ちケズリを8回で行っている。内面で若干の降灰が見られるが、焼成度合はあまさが残る。

横瓶(60,61)

両者とも円盤閉塞側で、(61)は円盤部分に同心円文当て具(Db類)痕跡が確認できることから、両面閉塞で成形されたものであろう。両者とも置台として使用されており、(61)は外面に工具のようなもので打ち欠いたと考えられる大小の円形または不定形の剥離が確認できる。

2. 2号窯埋土・上層灰原・グリッド出土遺物(62~70)

図化可能であったものだけを実測している。2号窯で出土するものに属する器形を呈しており、ここでは詳細を述べない。ただ、上層灰原から、坏B身底部にヘラ記号「キ」が1点出土している。

第2項 B地区出土須恵器

器種構成と器種の概要

B地区から出土する8世紀須恵器は、8号窯において生産されたものが主である。窯床面に伴っているものをはじめ、土坑や灰原など至る所から出土している。B地区全体の口縁部計測法による器種組成表を見ると、食膳具の含有率が96.4%と非常に高く、貯蔵具は3.6%である。食膳具の中では、坏B・蓋が6割近くを占め、続いて坏B・身の29%、坏Aは13%である。高坏や埴は1%以下の含有率であり、A地区で出土するような甗は出土していない。高坏は8号窯床の最終操業面でのみ出土している。貯蔵具内での含有率は、甗類が35.2%、壺類が29%、横瓶6%、長頸瓶3.5%、平瓶1%である。

出土地点別では8号窯床出土で57%の含有率、次いで灰原出土が多い。土坑や粘土塊だまりから出土するものは、紛れ込んだような性格のものであろう。比率は、非常に少ないものとなっている。

B地区8世紀須恵器		8号窯床		8号窯埋土		灰原		SK		粘土塊だまり		グリッド等左記以外のその他		B地区窯床以外合計		B地区内8世紀遺物総計	
種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率
食膳具	坏A	1,197	17.5%	69	14.3%	248	5.7%	24	27.0%	0	0.0%	24	6.9%	365	6.9%	1,562	12.9%
	坏B蓋	3,994	58.5%	267	55.5%	2,435	56.2%	40	44.9%	47	95.9%	252	72.2%	3,041	57.4%	7,035	58.0%
	坏B身	1,617	23.7%	145	30.1%	1,648	38.1%	25	28.1%	2	4.1%	73	20.9%	1,893	35.7%	3,510	28.9%
	高坏	23	0.3%	0		0		0		0		0		0		23	0.2%
	埴	2	0.0%	0		0		0		0		0		0		2	0.0%
	食膳具合計	6,833	95.8%	481	95.8%	4,331	98.1%	89	93.7%	49	100.0%	349	89.0%	5,299	97.2%	12,132	96.4%
貯蔵具	壺類	81	26.7%	0		44	52.4%	6	100.0%	0		0		50	32.5%	131	28.7%
	長頸瓶	0		0		16	19.0%	0		0		0		16	10.4%	16	3.5%
	横瓶	17	5.6%	0	0.0%	9	10.7%	0		0		0		9	0.2%	26	5.7%
	平瓶	83	27.4%	4	19.0%	0		0		0		36	83.7%	40	26.0%	123	1.0%
	甗類	122	40.3%	17	81.0%	15	17.9%	0		0		7	16.3%	39	25.3%	161	35.2%
	貯蔵具合計	303	4.2%	21	4.2%	84	1.9%	6	6.3%	0	0.0%	43	11.0%	154	2.8%	457	3.6%
総計 (/36)		7,136	56.7%	502	4.0%	4,415	35.1%	95	0.8%	49	0.4%	392	3.1%	5,453	43.3%	12,589	

第4表 B地区出土須恵器器種組成表（口縁部計測値総計12,589/36）

1. 8号窯床

8-I号窯・8-II号窯と器種構成と概要

8号窯は第4章遺構でも述べたとおり、窯を全体に奥壁側へずらして作り替えられていることから、2基の窯として捉えており、初段階の窯を8-I号窯、次段階の窯を8-II号窯としている。またそれぞれに2枚ずつの床をもっている。よって、8号窯床面出土須恵器は、合計で4段階として報告する。

それぞれ床出土の器種構成を見てゆく。8-I号窯1次床出土遺物が全体の57%を占めているわけであるが、生焼けのものが多く、焼成不良のものを取り残して2次床を成形した結果による数値と考えている。また、8-I号窯1次床、2次床、また8-II号窯1次床の貯蔵具含有率が低いのであるが、口縁部計測値合計の結果であり、貯蔵具を焼成していないというのではない。口縁部が出土していないだけで、大甗、中甗、短頸壺、横瓶の胴部や破片は出土している。ちなみに8-I号窯1次床では器肉の非常に厚い大甗の破片を125点、置台として利用している。これは大甗の破片が多く使われている例であるが、別の床でも、上記の大甗以外の貯蔵具器種の胴部なら1~3点程、大甗破片なら13,14点を置台としている。しかしながら、総じて言えることは、全体の含有率からみても、貯蔵具の焼成率は低かったと考えられる。また、坏Bのもつ含有率は特に高いものである。

各々の床出土食膳具だけで比較してみると、8-I号窯1次床段階（初期段階）では坏Aと坏Bの比率が8:2であるのに対し、8-II号窯2次床段階（最終段階）では坏Aと坏Bの比率が9弱:1強に変化しており、坏Bの量産化が進んだ可能性がある。また、器種を観察してゆくと、8-II号窯2次床段階になると、東海系と考えられている山笠状の坏B蓋が出現、つまみや坏B・身での台、坏Aの器形の別形態の参入したと考えられるような特徴が見え始める。では、床の段階順で、器種別に特徴を述べることにする。

8号窯 床別		8-I号窯1次床		8-I号窯2次床		8-II号窯1次床		8-II号窯2次床		8号窯床出土遺物 合計	
種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率
食膳具	坏A	861	21.0%	85	10.9%	70	14.1%	181	12.4%	1,197	17.5%
	坏B蓋	2,321	56.7%	592	76.2%	345	69.4%	736	50.2%	3,994	58.5%
	坏B身	912	22.3%	98	12.6%	82	16.5%	525	35.8%	1,617	23.7%
	高坏	0		0		0		23	1.6%	23	0.3%
	碗	0		2		0		0		2	0.0%
	食膳具合計	4,094	100.0%	777	99.4%	497	97.3%	1,465	83.8%	6,833	95.8%
貯蔵具	小型壺	0		0		0		81	28.5%	81	26.7%
	横瓶	0		0		0		17	37.8%	17	37.8%
	平瓶	0		0		0		18	6.3%	18	5.9%
	小型平瓶	0		0		0		65	22.9%	65	21.5%
	甕類	0		0		12	85.7%	0		12	4.0%
	中甕	0		5	100.0%	2	14.3%	58	20.4%	65	21.5%
	大甕	0		0		0		45	15.8%	45	14.9%
	貯蔵具合計	0		5	0.6%	14	2.7%	284	16.2%	303	4.2%
合計 (/36)	4,094	57.4%	782	11.0%	511	7.2%	1,749	24.5%	7,136		

第5表 8号窯床別出土須恵器器種組成表（口縁部計測値合計 7,136/36）

(1) 8-I号窯 1次床

坏B・蓋 (71~118)

坏Bの法量は、蓋・身ともに「一器種一法量」にまとまるものである。坏B蓋は、口縁部を折り返し、つまみの付着するものがある。

器形では、A地区で出土するような山笠状のもの（あ類）は見られず、山笠状ではあるが、器高が低めで天井部に若干平坦面をもつもの（い類、71~77）、天井に平坦面をもって天井部から口縁部へ向かって屈曲を呈す全体がやや扁平のタイプ（う類、78~96）、扁平タイプであるがより器高が低いもの（え類、97~108）がある。同じく扁平タイプで、つまみ接着時に圧力がかかり天井部分が窪みをもつもの（お類、109~113）、同じ、お類で器高が低いもの（か類、114~118）が見られる。

口縁折り返しの形態では、A地区で出土するような薄く長いもの（①類）は見られないが、短いものがある（103）。厚く長いもの（②類、90,91）、断面が逆三角形を呈するもの（③類、74,75等）断面が逆三角形を呈すが折れ曲がり明確でないもの（④類、80）、端部が丸く折り返しが明確でないもの（⑤類、108）、折り返し外面に指で押さえ込んだような窪みをもつもの（⑥類、71,90,98,105,112,113,118）があり、口縁際に窪みをもって若干かぎ爪状を呈すもの（⑦類）は見られない。この他に、断面が厚く短く折り返すもの（⑧類）があり、断面逆三角形状と5:5程の割合である。

つまみ形態では、つまみ径が3~3.5cmで、宝珠形状つまみ1種類に限られる。ヘラ記号は、「二」の(45)1点のみである。

この他、(74)(110)には1cm程の範囲で内面の一部分を成形時に修理した痕が見られる。器肉が薄くなったか、穴が開いたかしたために、その部分だけに少量の粘土を補充して撫でているものである。

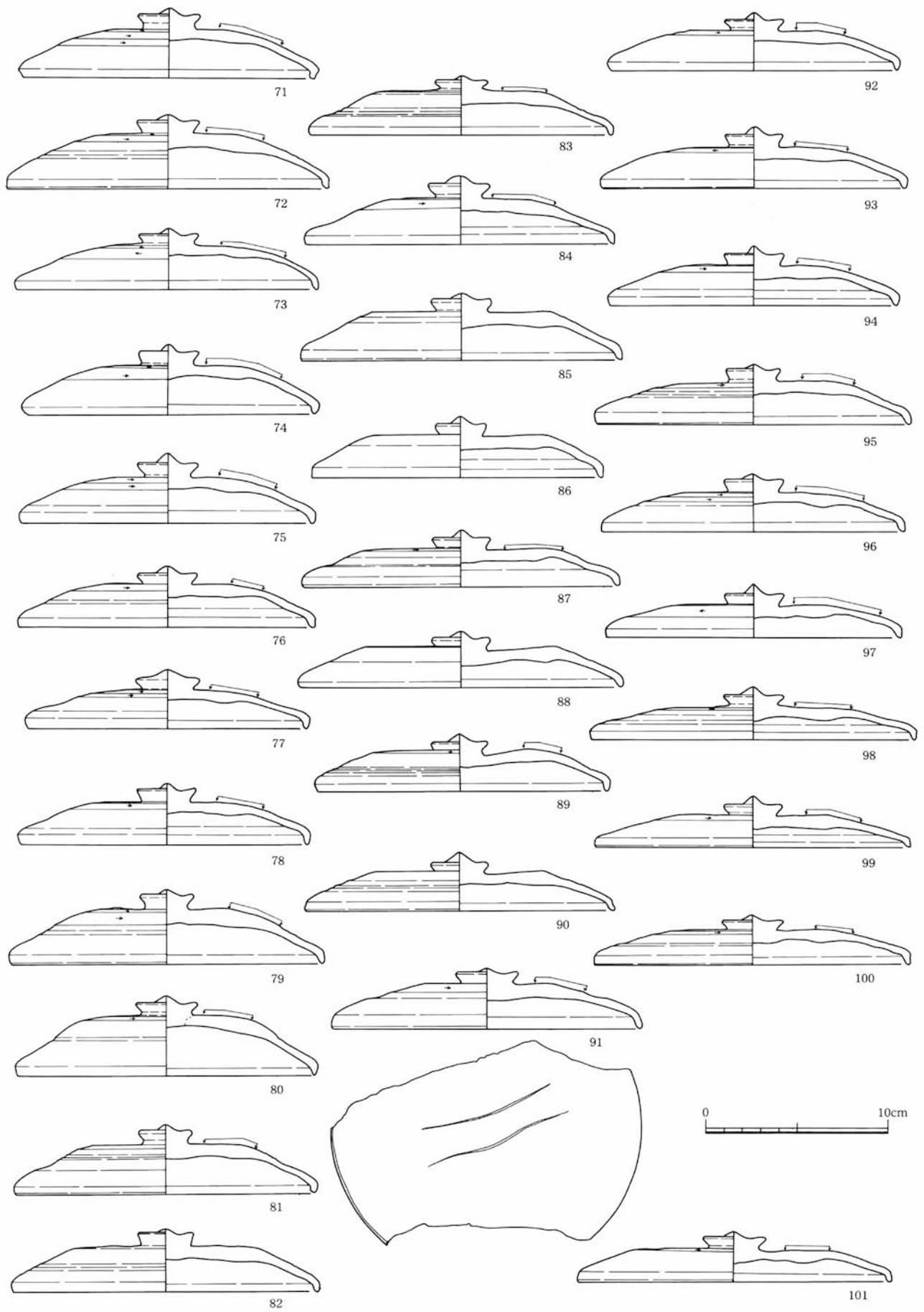
坏B・身 (119~138)

ロクロ回転成形後、ヘラ切りし、高台を付着する一定の方法で成形されている。口径が14.5~16.3cm、器高4.1~5.0cmである。

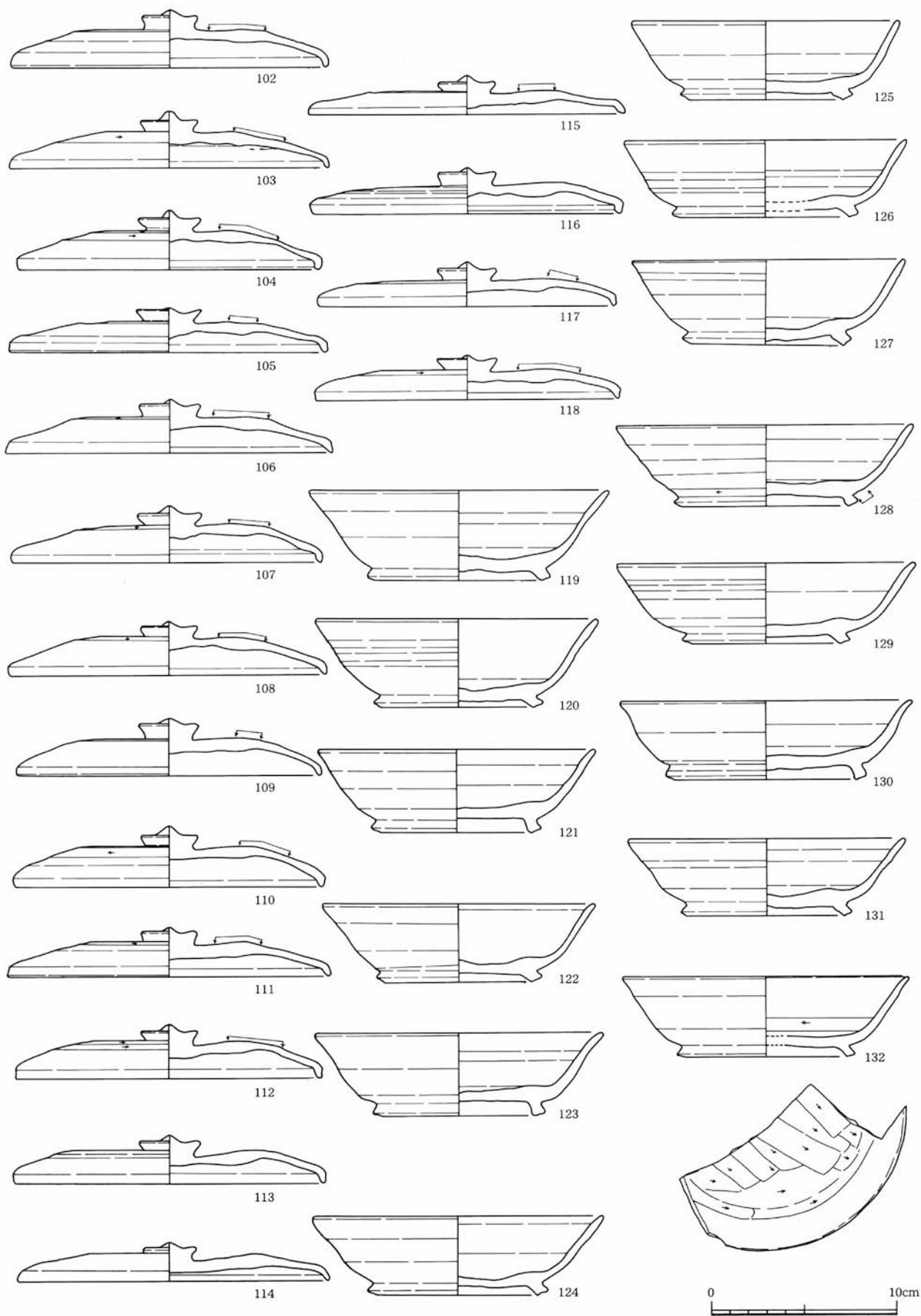
器形は、平坦な底部から丸みをもって立ち上がるものが中心であるが、口縁端部が外反気味となるもの（a類、119,123）、丸みをもつが若干開き気味となるもの（b類）、丸みをもつが若干箱形を呈すもの（c類、135）、底部立ち上がりから外反するもの（d類、137,138）がある。

台の形態は、ハの字に踏ん張るタイプのものである。畳付き部がベタで接地する（ア類）、ハの字に踏ん張るが外側接地するもの（イ類）はなく、内側接地するもの（ウ類）に限られる。また、A地区出土のもので見られたような、台の接着時に少量の粘土を使用した際に、この粘土がはみ出した痕跡は殆どなく、台は丁寧に取り付けられており、台底部には工具ナデが施され窪むものが多い。

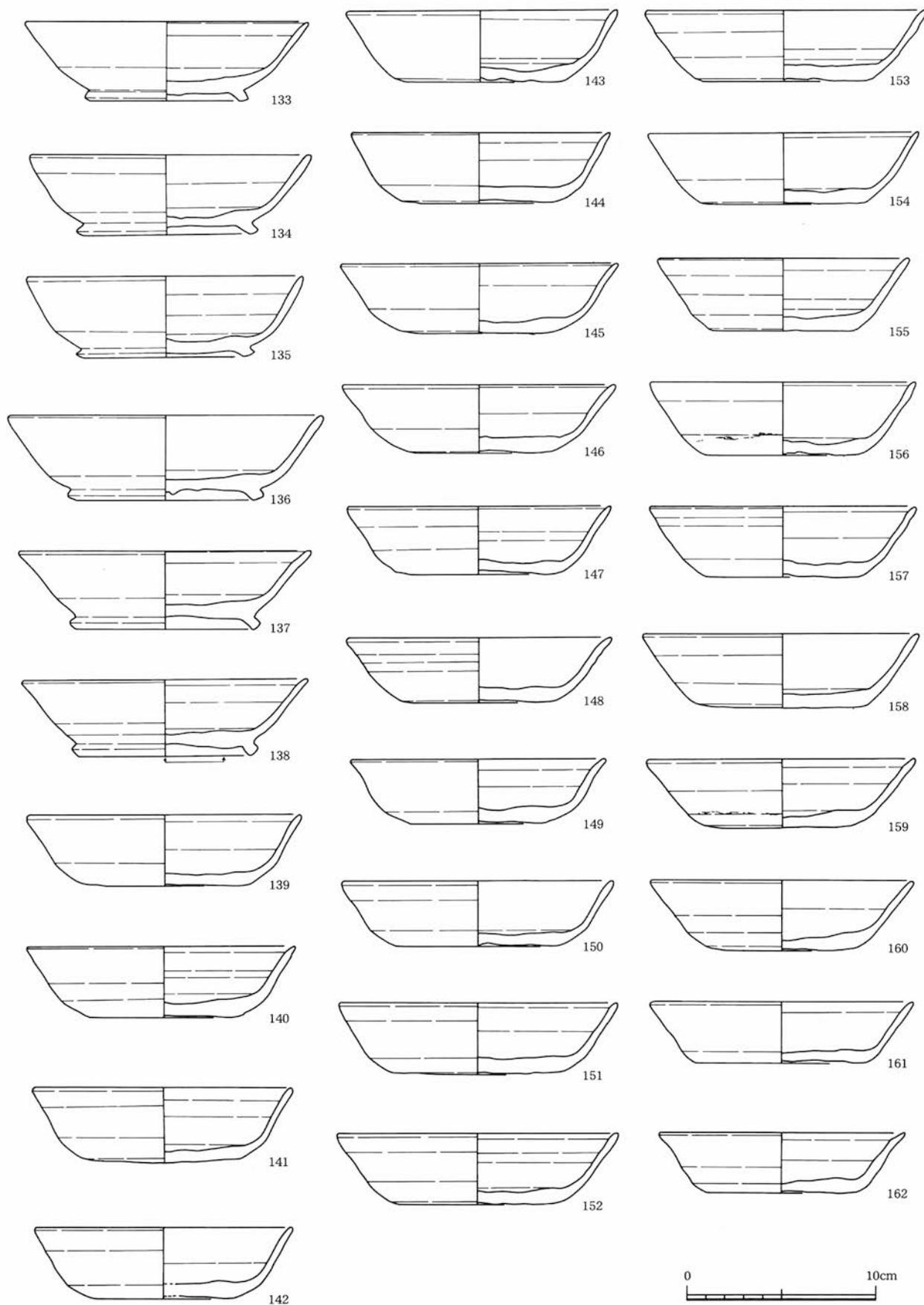
ヘラ記号は「一」「×」が各1点ずつ認められる。



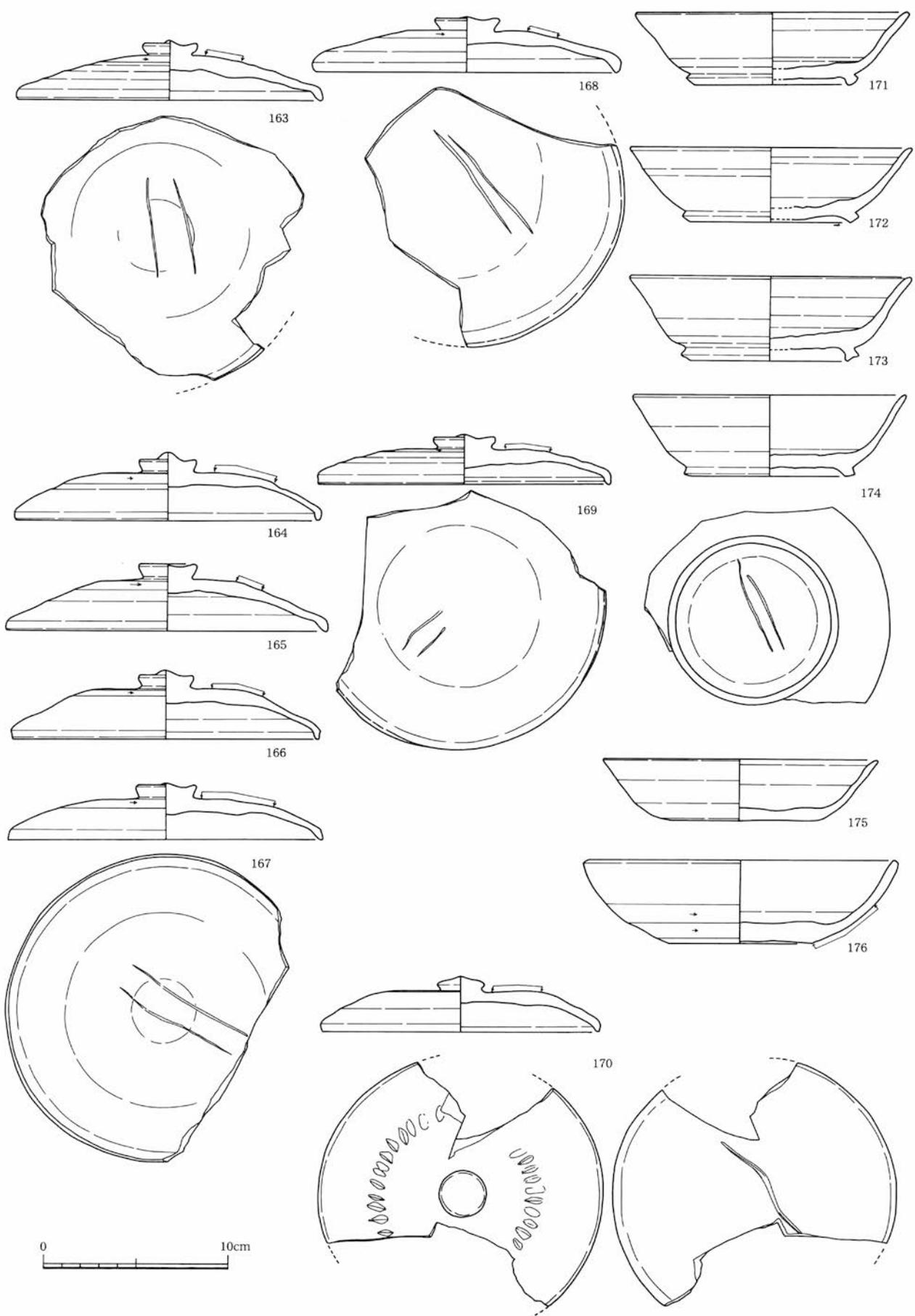
第51图 8-I号窯 1次床 須惠器(1) (S=1/3)



第52図 8-I号窯 1次床 須恵器(2) (S=1/3)



第53图 8-I号窯 1次床 須惠器(3) (S=1/3)



第54图 8-I号窯 2次床 須恵器 (S=1/3)

この他には、(132)は内外面にケズリ調整が施されている。実測図外面にケズリ範囲を記入していないのだが、残存底面にすべてケズリが入っている。このような珍しい調整は、二ツ梨ではこれ1点であった。

坏A (139~162)

A地区で出土するようなタイプではなく、底部から体部にかけて丸みをもって立ち上がるタイプ(④類)であり、体部下半に内傾させるような転換が見られるもののが中心で、転換せず口縁までゆったりと至るものがある。また、底部から丸みをもたずに外傾して立ち上がるものもあり、器高も低い(⑤類、161.162)。

基本的に底部切り離しは、ロクロ回転ヘラ切りであるが、切り離し後工具ナデを施すものが殆どである。ただ、(156,159)は、ヘラ切りのみでその後の調整は一切されていない。

(2) 8-I号窯 2次床

坏B・蓋 (163~170)

坏Bの法量は、蓋・身ともに「一器種一法量」にまとまるものである。坏B蓋は、口縁部を折り返し、つまみの付着するものがある。

器形では、(あ類)は見られず、山笠状ではあるが、器高が低めで天井部に若干平坦面をもつもの(い類、163)、天井に平坦面をもって天井部から口縁部へ向かって屈曲を呈す全体がやや扁平のタイプ(う類、上記以外)、扁平タイプであるが、より器高が低いもの(え類、169)が確認できている。

口縁折り返しの形態では、断面が逆三角形を呈するもの(③類、165~168)が主体であるが、断面が逆三角形を呈すが折れ曲がりがないもの(④類、170)や、断面が厚く短く折り返すもの(⑧類、163,169)、折り返し外面に指で押さえ込んだような窪みをもつもの(⑥類、166)がある。①類②類⑤類⑦類は見られない。

つまみ形態では、宝珠形つまみが中心であるが、扁平化しているものもある。ヘラ記号は、「二」が6個体、「一」が1個体、「×」が2個体に見られる。この他、(170)には、天井にヘラによる傷が1周しており、これは、施紋ではなく天井ケズリの失敗によるものだという指摘を受けており、このような例があるということである。

坏B・身 (171~174)

器形は、a類(173)、b類(171)以外は平坦な底部から丸みをもって立ち上がるものである。台形態は、1次床と同じくハの字に踏ん張るタイプの内側接地するもの(ウ類)に限られる。これも1次床と同じなのであるが、台接着時の粘土はみ出しもなく台は丁寧に付けられて、台底部に工具によるナデが施されるものがある。

坏A (175)

実測可能であったのは1点のみ。底部から丸みをもって立ち上がるタイプであるが、やや開き気味で器高は低い。

碗 (176)

底部から内湾して口縁端部まで至るもので体部下方にケズリ調整が行われている。器肉は厚く、混和剤は多く、表面はざらざらしている。

(3) 8-II号窯 1次床

坏B・蓋 (177~186)

坏Bの法量は、蓋・身ともに「一器種一法量」、前述のとおり坏B蓋は、口縁部を折り返し、つまみの付着するものがある。

器形では、天井に平坦面をもって天井部から口縁部へ向かって屈曲を呈す全体がやや扁平のタイプ(う類)にはほぼ限られるのだが、同じく扁平タイプで、器高が低いもの(え類、183~186)もある。(あ類)(い類)は、見られない。

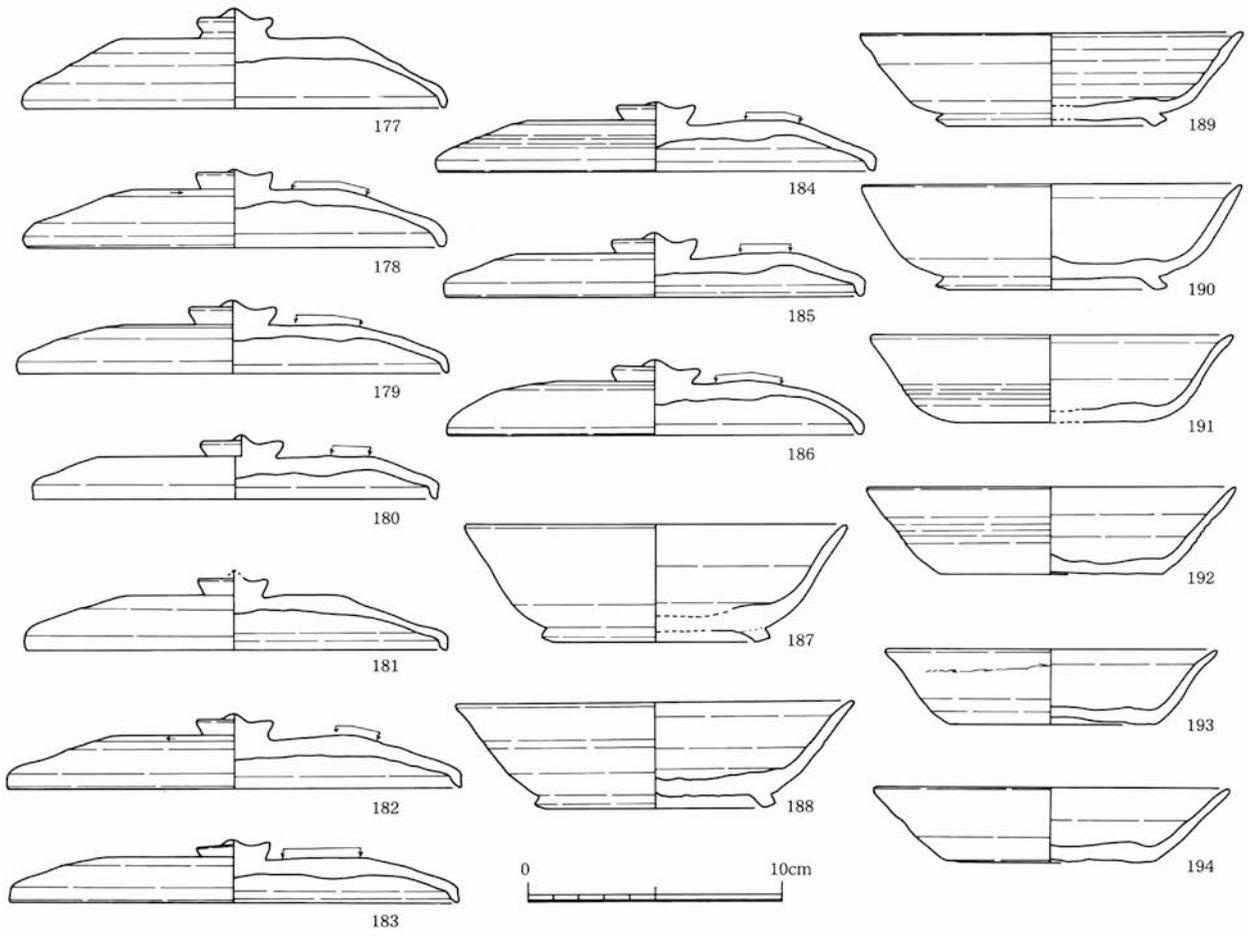
口縁折り返しの形態では、断面が逆三角形を呈するもの(③類)にはほぼまとまっている。断面が逆三角形を呈すが折れ曲がりがないもの(④類、177,178,186)、折り返し外面に指で押さえ込んだような窪みをもつもの(⑥類、180)は確認できるが、①類②類⑤類⑦類⑧類は見られない。

つまみ形態は、宝珠形状つまみが中心である。ヘラ記号は、「一」が2個体ある。

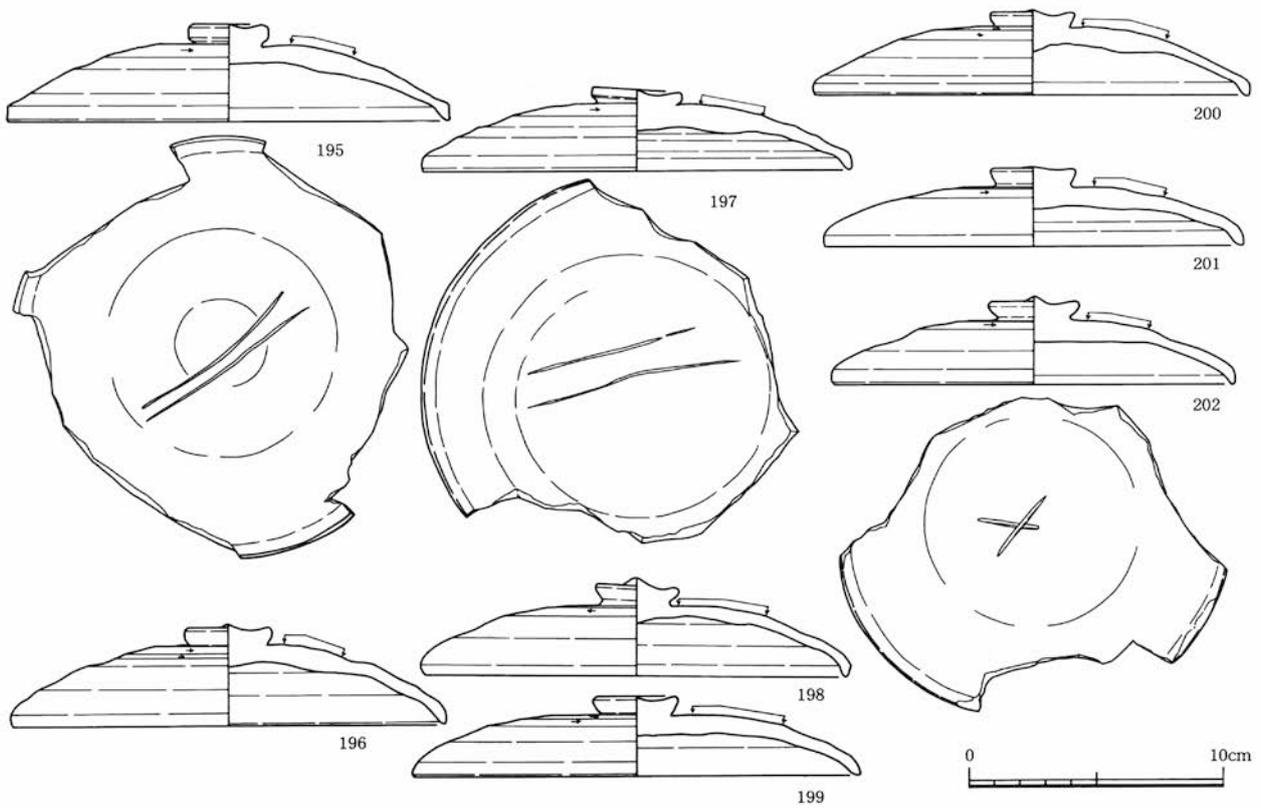
坏B・身 (187~190)

平坦な底部から丸みをもって立ち上がるもののが中心であるが、口縁端部が外反気味となるもの(a類、187)、丸みをもつが若干開き気味となるもの(b類、188,189)、丸みをもつが若干箱形を呈すものがある(c類、190)。

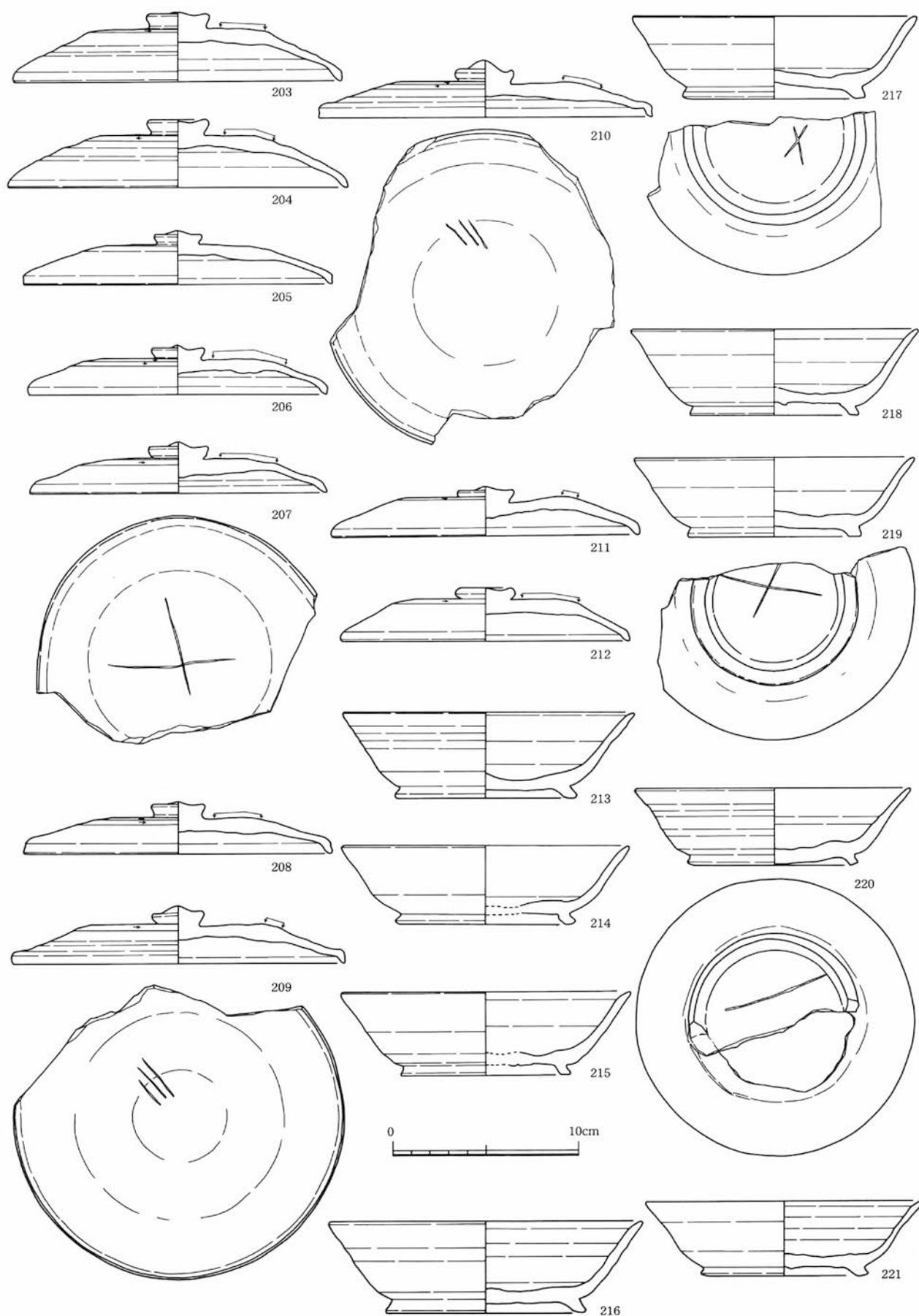
台の形態は、ハの字に踏ん張るタイプで、内側接地するもの(ウ類)に限られる。また前述と同じく、台接着時の粘



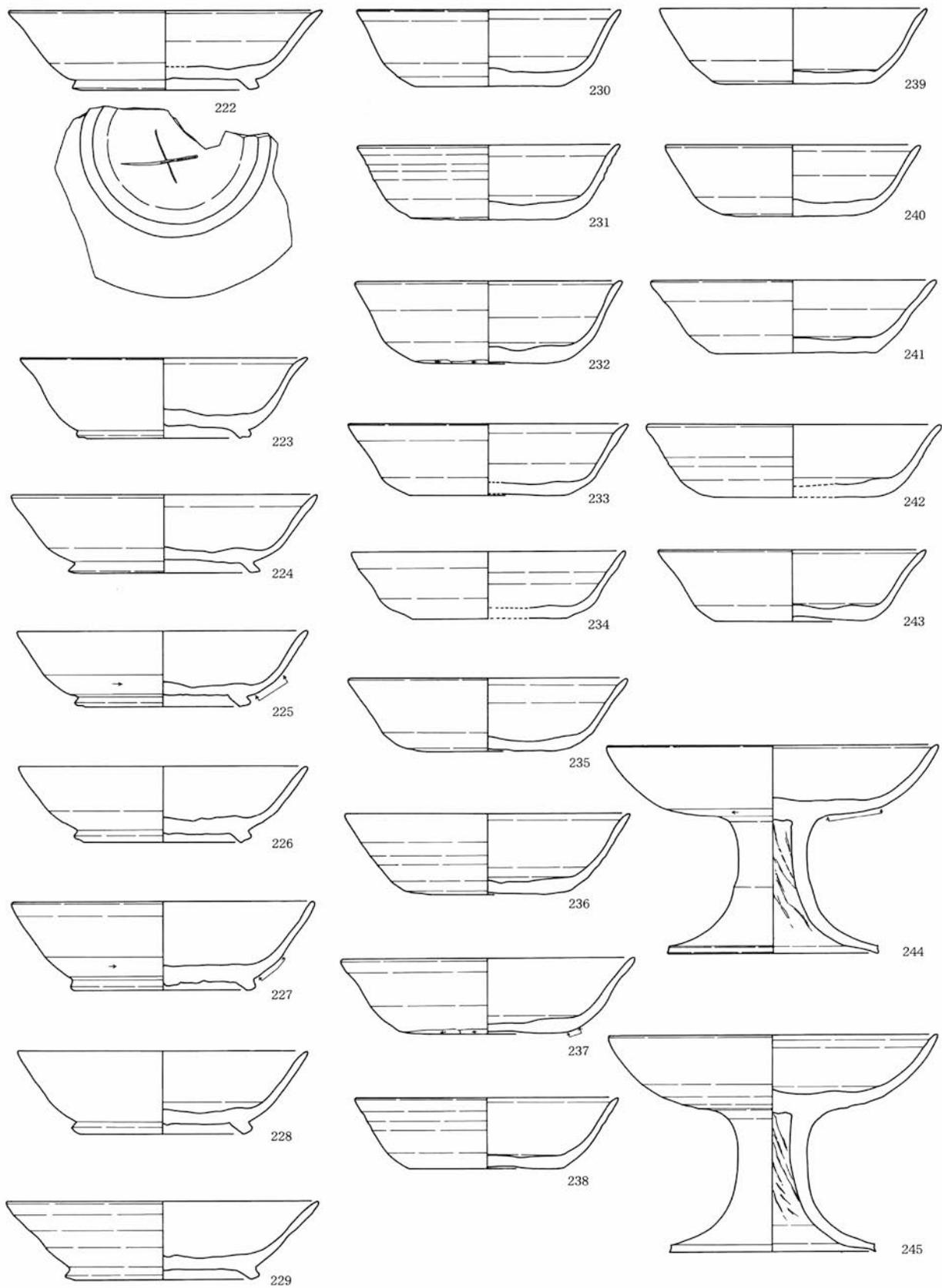
第55图 8-II号窯 1次床 須恵器 (S=1/3)



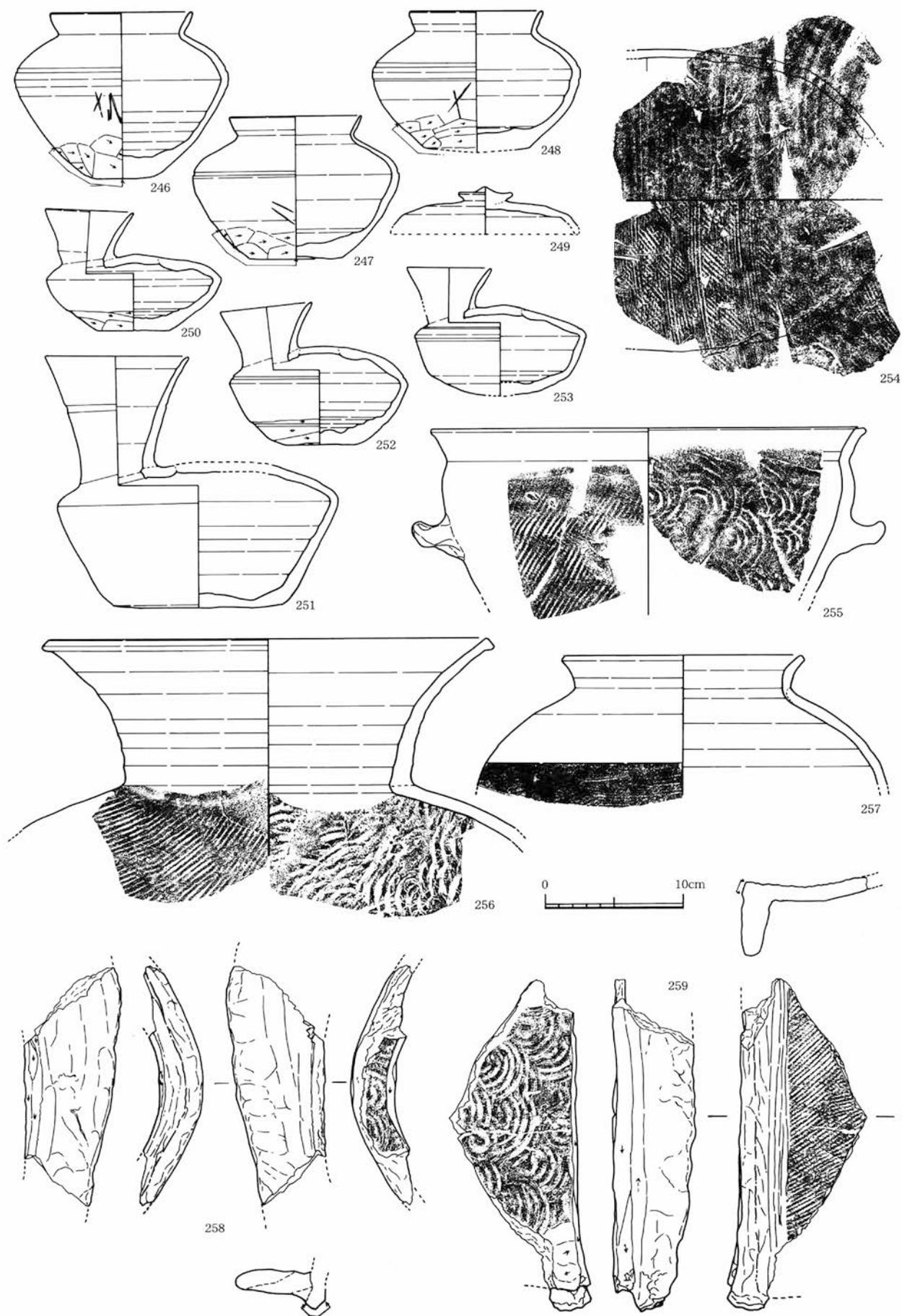
第56图 8-II号窯 2次床 須恵器(1) (S=1/3)



第57图 8-II号窯 2次床 須恵器(2) (S=1/3)



第58図 8-II号窯 2次床 須恵器(3) (S=1/3)



第59图 8-Ⅱ号窑 2次床 須惠器(4) (S=1/4)

土はみ出しもなく、台は丁寧に付けられて、台底部にヘラによるナデ調整が施されているもの(189)がある。

坏A (191~194)

底部から体部にかけて丸みをもって立ち上がるタイプ(㉑類、191)と、底部から丸みをもたずに外傾して立ち上がるもの(㉒類192~194)があり、(193)のような一回り小さな法量となっているものもある。基本的に底部切り離しは、ロクロ回転ヘラ切りであるが、切り離し後工具ナデを施すものが殆どである。しかし、(194)は工具によるナデ調整を行っていない。

(4) 8-II号窯 2次床

坏B・蓋 (195~212)

器形では、器高が高く、天井に平坦面をもたないため天井部が狭くなっている所謂山笠状のもの(あ類、195~197)、山笠状であるが天井部に若干平坦面をもつもの(い類、198~202)、天井に平坦面をもって天井部から口縁部へ向かって屈曲を呈すやや全体が扁平のタイプ(う類、203,204,212)、扁平タイプであるが、器高が低いもの(え類、205~210)がある。同じく扁平タイプで、つまみ接着時に圧力がかかり天井部分が窪みをもつもの(お類、211)がある。

口縁折り返しの形態では、断面が逆三角形を呈するもの(㉓類)が中心で、折れ曲がりが基本的に明確でない(㉔類)が多く、折れ曲がり明確なものは(195,197,208)くらいである。また、口縁際に窪みをもって若干かぎ爪状を呈すもの(㉕類、209,210)が確認できる。折り返し外面に指で押さえ込んだような窪みをもつもの(㉖類、205)は確認できるが、㉑類㉒類㉓類㉔類は見られない。

つまみ形態では、つまみ径が3.5cm程の、つまみ全体がぼつりする(B類、195,196,212等)扁平つまみが多い。3cm以内の小さなつまみは宝珠形状つまみとなっているものもある。

ヘラ記号は様々な種類がある。「一」2個体、「二」7個体、「三」2個体、「×」7個体を確認している。

坏B・身 (213~229)

やはり平坦な底部から丸みをもって立ち上がり口縁が外反気味となるもの(a類)が中心と言えようか。丸みもつが体部が開き気味となるもの(b類、229)、丸みもつが若干箱形を呈すもの(c類)はなく、口縁が外反しないもの(D類、225~228)も一定量出土している。特に、(225,226)は器高が4cm以下となっている。逆に口径が16.6cm、器高が5cmの大きめなもの(216)、また、体部の台際にケズリをもっているものもある。

台の形態は、ハの字に踏ん張るタイプである。ただ、前述したような(ウ類)1通りの台形態ではなく、様々なタイプの台が見受けられる。畳付き部がベタで接地するもの(A類、213,215,217,219)、ハの字に踏ん張るが外側接地するもの(イ類、216,218)がある。この台形態の傾向は2号窯のものと似ている。また、台接着時の痕跡として、基本的に粘土はみ出しもなく丁寧に撫でられて処理されているが、中には体部と台の境がはっきりして粘土を使用していない考えられるもの(225,228)もある。また、ヘラ記号は「×」4個体であった。

坏A (230~243)

底部が平坦で、体部への境が顕著、立ち上がりに窪みを伴い、口縁端部は粘土を引き延ばすように鋭く尖るようなタイプ(㉗類、230~234)が出土している。また、体部への立ち上がりにケズリを伴うものがある(232,237)。

高坏 (244,245)

いずれも坏部が口径16cm台、坏部高が3cm台の浅い堍型を呈する高坏である。坏部底面にはケズリを施すもの(244)もある。脚部は中空で、内面に絞り痕跡が見られる。

小型壺 (246~248)

広口で約860mlから1ℓの容積で、口径が大きく短頸の小型の壺である。底部前面に手持ちケズリ、胴部肩に沈線、また胴部にヘラ記号が付けられている。器肉は薄く、非常に丁寧に作りの印象で、焼成は極めて良好、きっちり焼かれているといった印象であった。内外面降灰の正位焼で、蓋は伴っていない。

壺蓋 (249)

この壺蓋は、口縁端部が欠損しているため全体の器形は不明であるが、推定口径から小型壺よりも大きな壺に付くものであろう。実測図では復元波線を記入してあるが、本来はもっと天井から口縁にかけ屈曲する形となるものと思われる。この壺蓋は、置台として利用されている。

平瓶 (250~251)

通常容積の1.9ℓのもの(251)と、280~430mlの小型容積のもの(250,252,253)の2法量が確認できる。(251)は頸部に

沈線が施されているが、内外面全体に緑となった釉がびっしり張り付いており、詳しい調整痕は不明である。小型品は、3点のみ実測をしているが、個体数では6個体出土している。底面を平坦にもって、胴部は丸く立ち上がり肩を鋭く張る器形で、上面は丸く仕上がっている。肩に沈線をもつものも確認できる。また、実測図で提示していないのだが、底部ケズリをもつものは、全体を削っている。(253)は閉塞用の粘土円盤が中央から5cm横にずれている。また、(253)は口頸部が、切り取り部分よりもずれて接着されている。これら小型品は、「水滴」として使用されるべく(北野1999)焼かれた製品と考えられる。

括れ鉢(鉢B) (255)

口径30cmを測り、口縁が「くの字」に括れて口縁端部がやや外側に突出するが面を有するもので、胴部には外面平行線文タタキ(Ha類)、内面同心円文当て具(Da類)の調整痕が見られる。胴部に把手が付き、鉄鉢とともに仏飯具の一種と考えられている器種(北野1999)である。

甕 (256,257)

(257)は口径17.2cm、口縁は「くの字」に屈曲する中甕、外面には平行線文タタキ(He類)が見られる。(256)は口径31.6cm、口縁端部を若干突出させ面を成形する大甕で、口頸部別作りの可能性があるが、置台として利用されている。破片断面の降灰が著しく、ジョイントの有無が確認できなかった。

カマド (258,259)

移動式のカマド破片。いずれも酸化するが須恵質である。混和剤を多量に混入させた土を使用している。(258)は底部分、焚口際を削ってあるが、底成形の指圧痕が端部に見られる。また、接着周囲に工具ナデがみられる。(259)は焚口基部破片である。基部端面にくり抜いたような凹み、焚口は幅2.5cm、厚み1.8cmの別粘土を突出させるように付着させた後、内面境にケズリ、外面際にも指ナデ及び工具ナデを施している。カマド破片はこの2点のみで接点はないのだが、両者とも胴部は叩き締められており、工具は同じものと考えられる。同一個体の可能性はある。

2. 灰原 (260~310)

灰原出土遺物は、床出土遺物それぞれの特徴を兼ね備えているもので、各々の特徴について詳細は述べないつもりであるが、特筆すべきことのみ記述する。

(310)は、狭口壺で、壺Aよりもなで肩を呈し、底部が欠損するが、長胴化しているものではないかと考えているものである。胴部に沈線はないが、内外面にタタキ、当て具の調整痕がみられる。口縁は内傾気味だが直立するので蓋を伴っていてもおかしくない器形を呈すのだが、内面降灰が確認でき、横倒し焼成されているもので、蓋は伴っていないものと考えられる。壺Bの部類に入ろうか。(308)は横瓶の円盤閉塞部で、どのようにしてついたものであるのか内面にはほぼ円形状の指ナデが1周している。また、(309)は長頸瓶の脚だが、ヘラによる切り込まれた透かしが外面側から5方に付けられている。

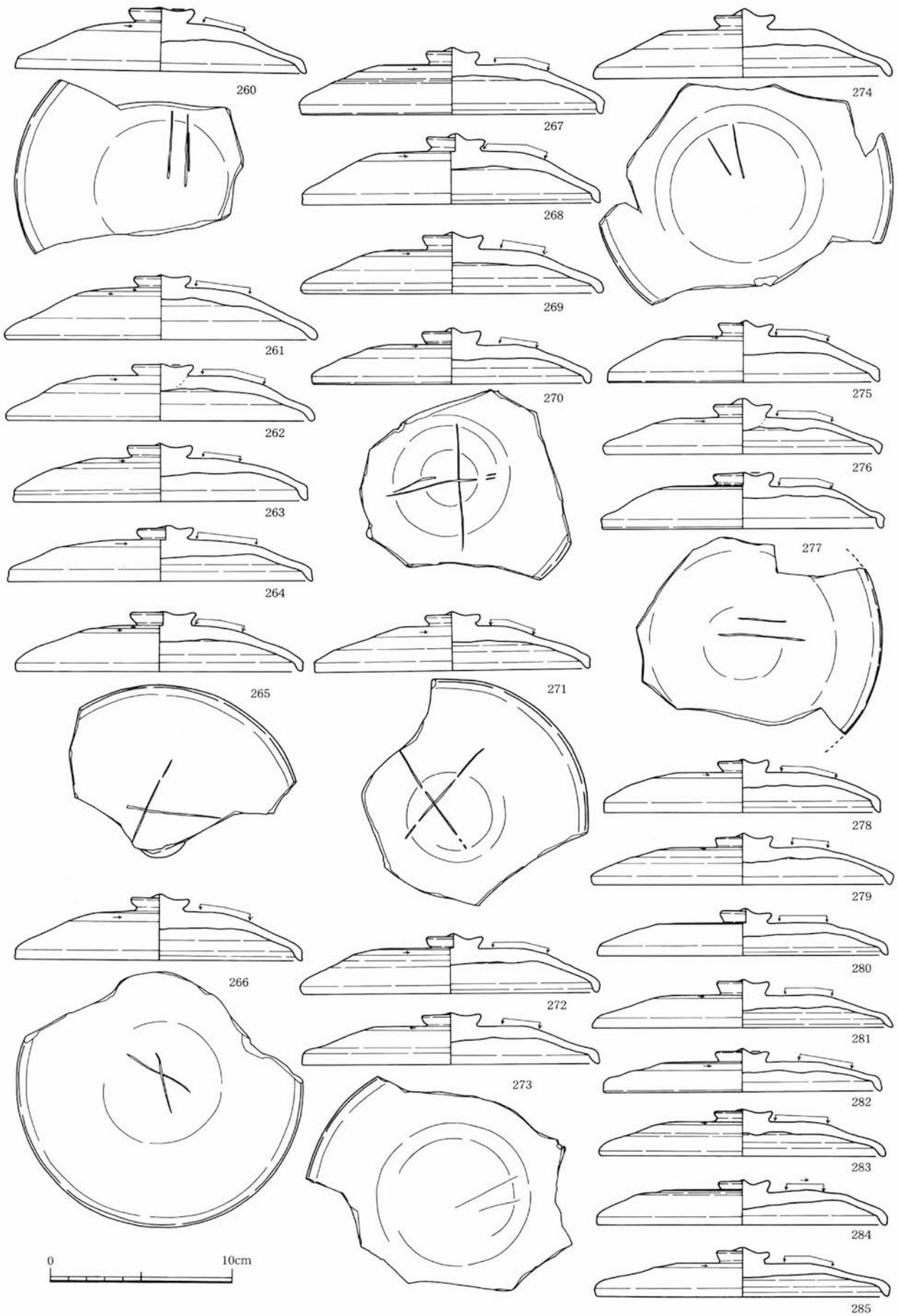
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	器種別	口縁部計測合計	含有率
食膳具	坏A	248	5.7%	貯蔵具	長頸瓶(瓶A)	16	19.0%	肩衝壺(壺A)	5	6.0%
	坏B蓋	2,435	56.2%		横瓶	9	10.7%	中甕	2	2.4%
	坏B身	1,648	38.1%		狭口壺(壺B)	39	46.4%	大甕	13	15.5%
	食膳具計	4,331	98.1%		貯蔵具合計		84	1.9%		
B地区 灰原 口縁部計測値合計 (/ 36)									4,415	

第6表 B地区灰原出土 8世紀須恵器 器種構成表

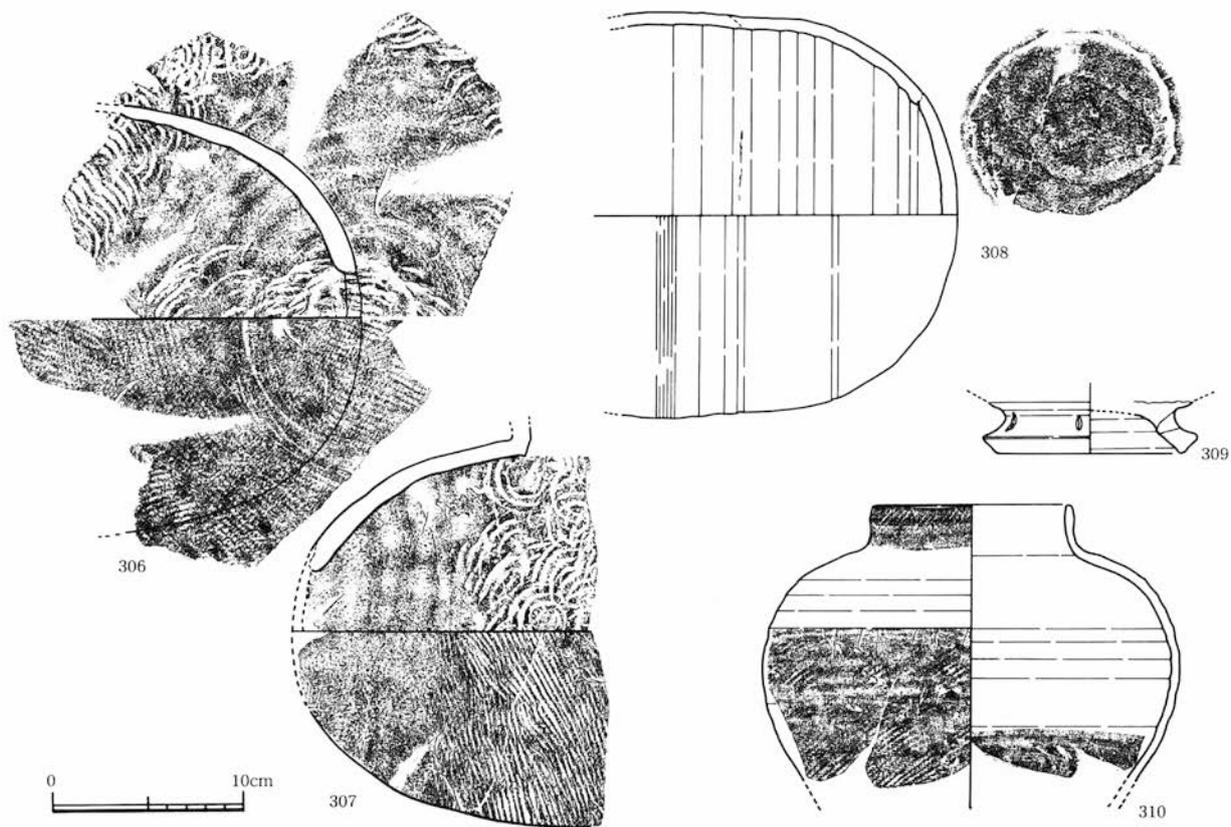
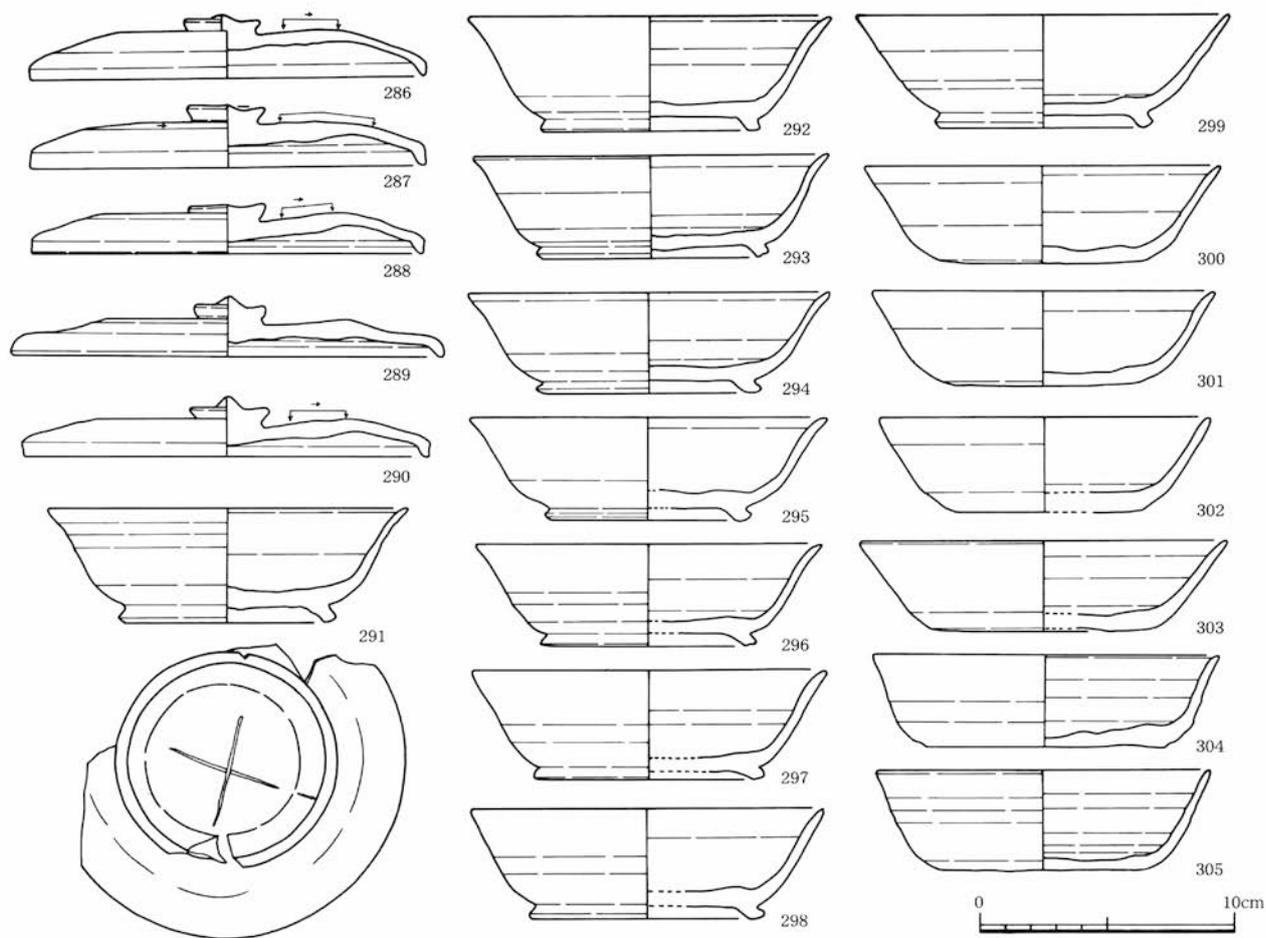
3. その他の出土 (311~314)

床、灰原以外には、土坑、粘土塊だまり、表土等を含むグリッド内、ピットからも8号窯の製品が出土するが、僅かでもあり、ここでは前述していなものだけを取り上げることとする。第62図の(312)は、口縁端部が欠損しているが、台の付着する小型の坏形容器である。内面は降灰しており、蓋を伴っていない可能性がある。器形は箱形で、底部はヘラ切り、台底は工具ナデが見られる。

(313)は、7号窯埋土から出土しているものである。口縁端部の折り返しが無いタイプで、口径が18.2cmもあり、器



第60図 B地区 灰原出土 8世紀須恵器(1) (S=1/3)



第61図 B地区 灰原出土 8世紀須恵器(2) (上段S=1/3, 下段S=1/4)

部はヘラ切り、台底は工具ナデが見られる。

(313)は、7号窯埋土から出土しているものである。口縁端部の折り返しが無いタイプで、口径が18.2cmもあり、器高が3cmと低いものである。他の坏B蓋に比べると特異なので掲載した。またこのような器形はこの1点のみ出土している。

(314)は壺Dで肩衝壺と呼ばれるものである。頸部は短く立ち上がり、口頸部に櫛状工具痕が確認できる。胴部叩き出して丸底に仕上げ、底部境を手持ちケズリしている。胴部内外には当て具、タタキ痕跡が残り、器肉は比較的薄く、焼成は頗る良好で非常に堅緻である。

第3項 C地区出土須恵器

器種構成と概要

C地区から出土する8世紀須恵器は、9号窯・10号窯において生産されたものである。窯床面から出土するものをはじめ、両窯埋土、また、C地区内谷部の流土堆積層を中心とした落ち込み等を伴わない区域、要するに窯の床や埋土以外から出土するもので、グリッド出土と名称付けている。器種構成表の数値は、床出土遺物量が非常に少ないこと、また、調査対象区域が両窯に関連する全域に及んでいないので、正しい器種構成と言えるのか疑問ではあるのだが、本調査における出土須恵器として数値を出している。

C地区全体の口縁部計測法による器種組成表を見ると、食膳具の含有率が67.4%、貯蔵具は32.6%である。南加賀窯跡群の中で、この時期の貯蔵具焼成率は7%~11%程であり、遙かに上回る数値を示している。これも部分的な調査であるが故の結果であろうか。個別では、食膳具の中では坏A、坏Bの比率が2:8、高坏、埴、鉢は1%以下の含有率である。貯蔵具では甕が5割以上、長頸瓶が18.5%、壺類が15%、横瓶、鉢類は、各々7%程である。また、口縁部が出土していないために、器種構成表に含まれていないが、9号窯埋土で平瓶胴部が出土している。ヘラ記号についてだが、C地区で確認できるものは稀少で、遺物観察表備考のとおりである。

C地区8世紀須恵器		9号窯床		10号窯床		9号窯埋土		10号窯埋土		グリッド内		C地区窯以外合計		C地区内8世紀遺物総計	
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率								
食膳具	坏A	23	11.6%	91	26.6%	166	55.0%	24	41.4%	70	7.4%	260	19.9%	374	20.2%
	坏B・蓋	109	55.1%	161	47.1%	83	27.5%	10	17.2%	500	52.7%	593	45.3%	863	46.7%
	坏B・身	61	30.8%	90	26.3%	50	16.6%	24	41.4%	377	39.7%	451	34.5%	602	32.6%
	高坏	0		0		3	1.0%	0		0		3	0.2%	3	0.2%
	埴	5	2.5%	0		0		0		0		0		5	0.3%
	鉢	0		0		0		0		2	0.2%	2	0.2%	2	0.1%
	食膳具合計	198	81.8%	342	86.1%	302	46.4%	58	42.6%	949	72.1%	1,309	62.2%	1,849	67.4%
貯蔵具	壺類	5	11.4%	6	10.9%	64	18.3%	1	1.3%	57	15.5%	122	15.4%	133	14.9%
	長頸瓶(瓶A)	36	81.8%	36	65.5%	0		29	37.2%	64	17.4%	93	11.7%	165	18.5%
	横瓶	0		0		18	5.2%	0		42	11.4%	60	7.6%	60	6.7%
	鉢類	0		0		0		0		55	15.0%	55	6.9%	55	6.2%
	甕類	3	6.8%	13	23.6%	267	76.5%	48	61.5%	149	40.6%	464	58.4%	480	53.8%
	貯蔵具合計	44	18.2%	55	13.9%	349	53.6%	78	57.4%	367	27.9%	794	37.8%	893	32.6%
総計 (/36)		242	8.8%	397	14.5%	651	23.7%	136	5.0%	1,316	48.0%	2,103	76.7%	2,742	

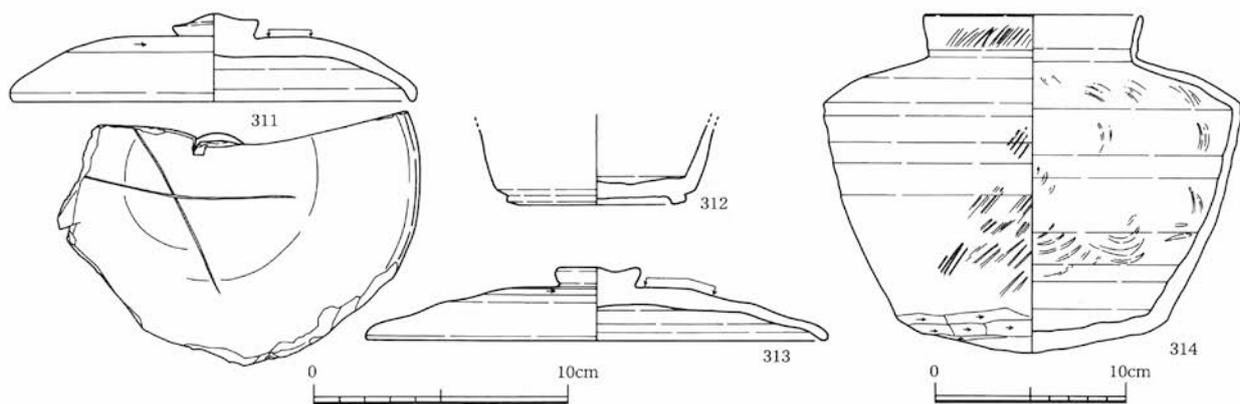
第7表 C地区出土須恵器 器種構成表 (口縁部計測値総計2,742/36)

1. 9号窯床

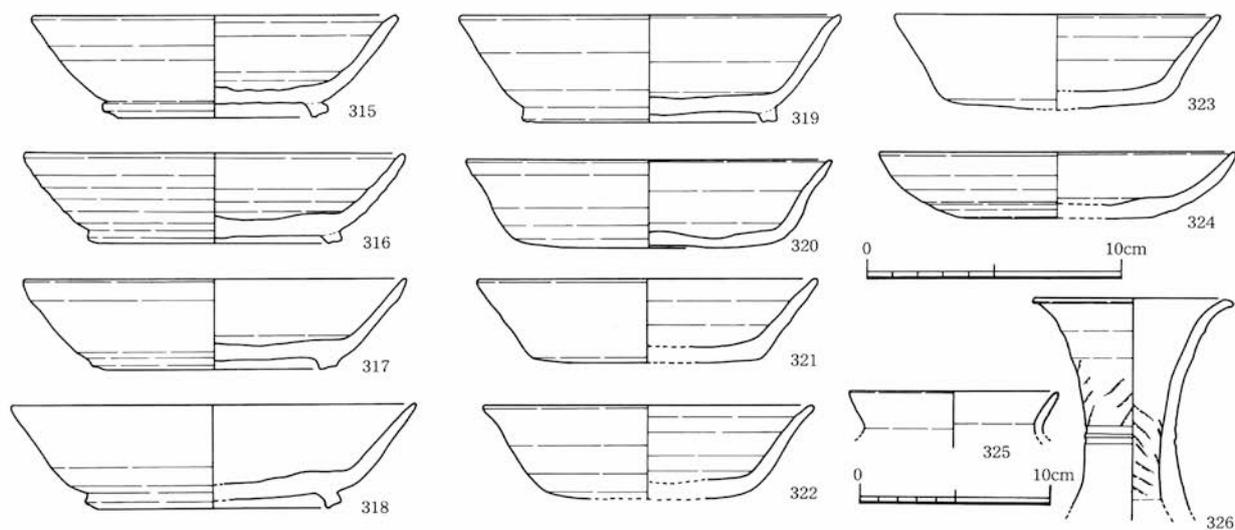
9号窯の床出土遺物は口縁部計測値合計でも242/36と、非常に少ない。食膳具は全体の82%、貯蔵具は18%含有率で、食膳具で坏Aと坏Bの割合は9弱:1強である。埴が出土しているが食膳具全体の3%未満にすぎない。貯蔵具だけをみると長頸瓶が82%を占める。

坏B・身 (315~319)

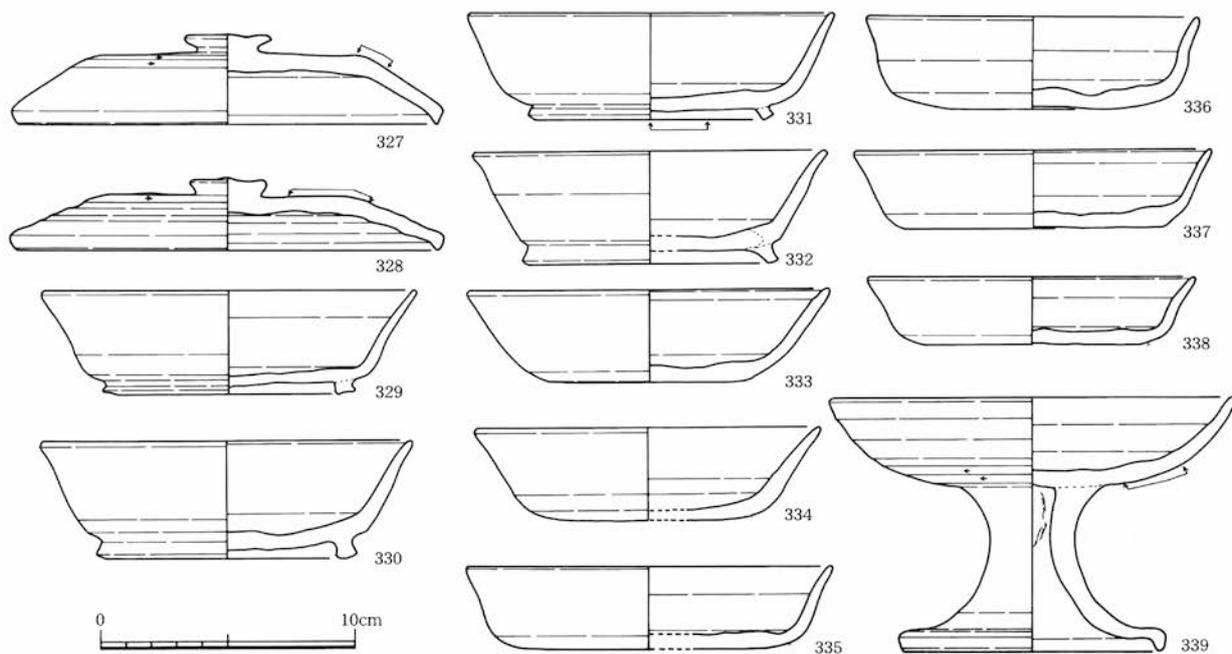
底部ヘラ切りのち短い台を接着、器形は丸みをもつが若干開き気味となるもの(b類)が目立ち、器高も低いもの(316,317)がある。台形態は、短いものがハの字に踏ん張って付けられるが、畳付き部がベタで接地するもの(a類、319)は1点で、後は内側のみ接地するもの(エ類)である。ただ、どの台底にも工具ナデが施されており、窪みが見られる。(318)のような口径16cm程の大きめなものもある。



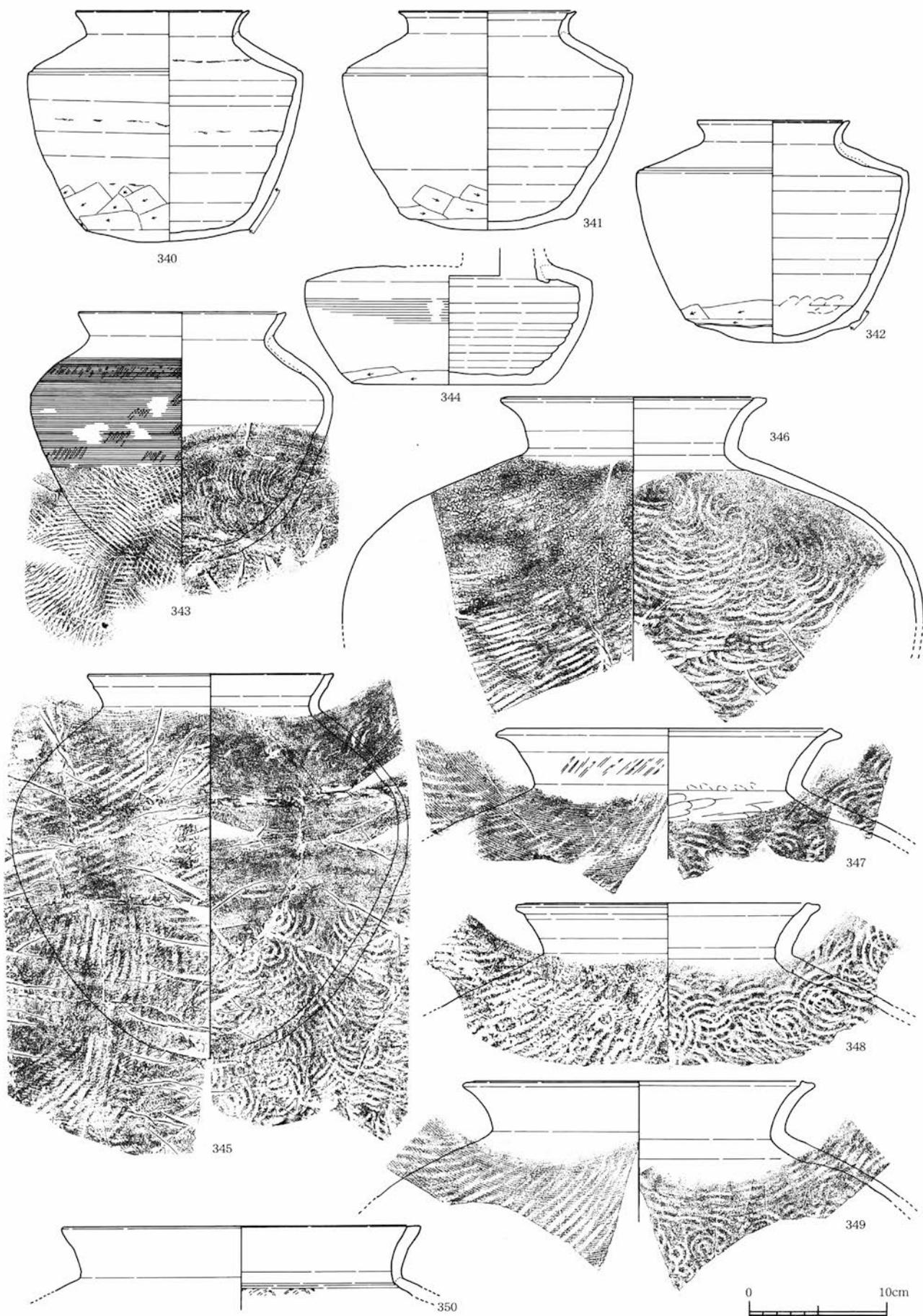
第62图 B地区 SK, 窯埋土出土 須恵器(1) (左S=1/3, 右S=1/4)



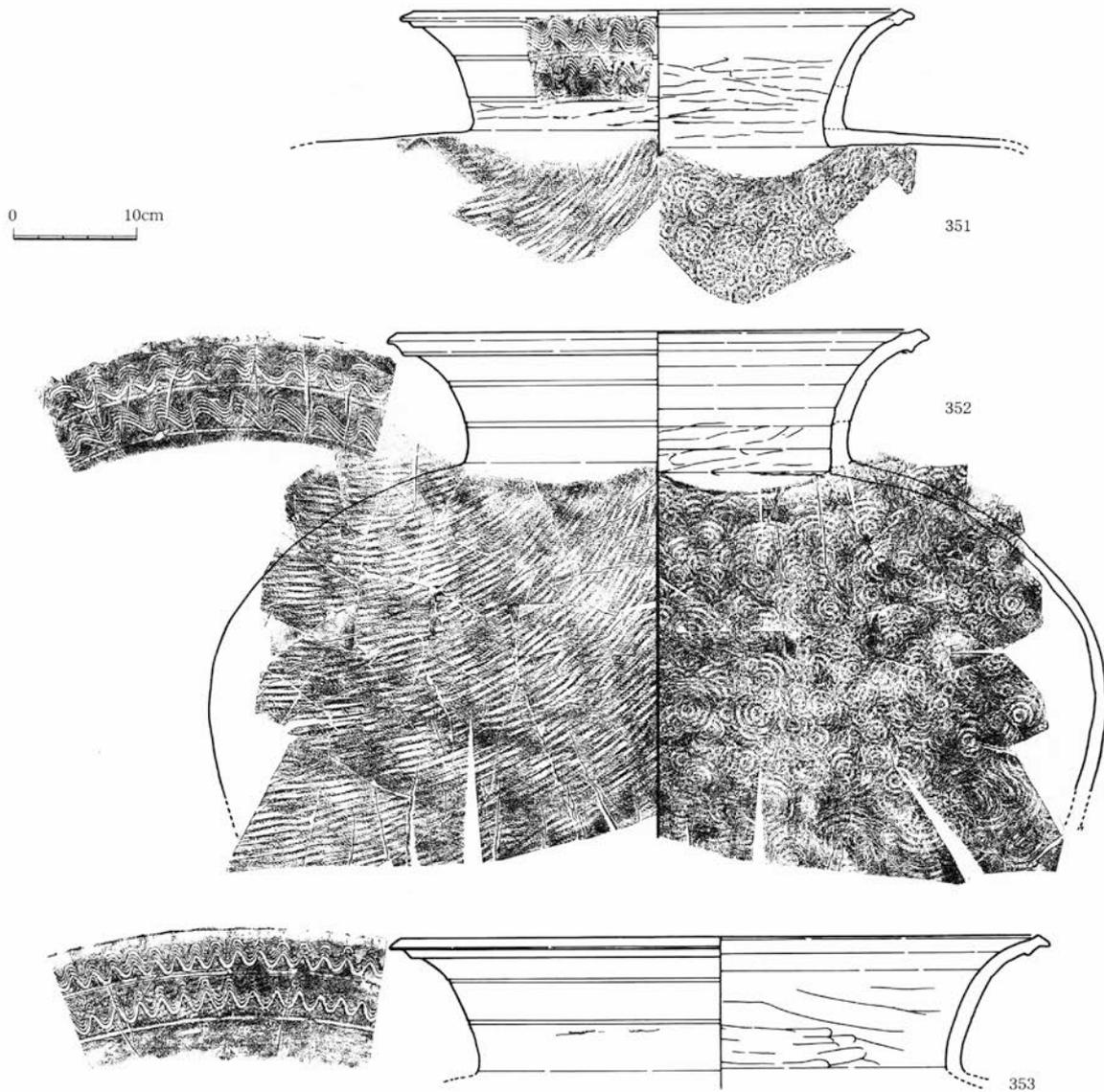
第63图 9号窯 床出土 須恵器(1) (S=1/3, 右下段S=1/4)



第64图 9号窯 埋土出土 須恵器(1) (S=1/3)



第65図 9号窯 埋土出土 須恵器(2) (S=1/4)



第66図 9号窯 埋土出土 須恵器(3) (S=1/6)

坏A (320~323)

体部が丸く立ち上がり口縁端部で外傾するタイプ(320,322)と、体部が外傾して立ち上がるもの(321,323)があり、口径が13cm内の小さなものがある。(320,321)は扁平なものとなっている。

碗 (324)

碗としているが、浅身の高坏の可能性もある。ただ、基部接点が明確でないために碗とした。口径13.9cm、器高2.65cmである。

貯蔵具 (325,326)

小型壺の口頸部破片、長頸瓶の首が出土している。長頸瓶首は沈線をもち、絞り痕跡が内外で確認できる。また、大甕破片が出土するが、器種構成表の計測値はこの大甕のものであり、実測は不可能であった。

2. 10号窯床

10号窯の床出土遺物も非常に少ないもので、口縁部計測値合計は397/36である。全体で食膳具が86%、貯蔵具が14%含有率、食膳具は坏Aと坏Bに限られ、比率は坏Aが26.6%と比較的多くなっている。貯蔵具は長頸瓶が65.5%、次いで甕が24%、壺類は壺蓋のことで、11%となっている。甕は小甕のみ出土している。器種構成表の甕の数値は小甕のみの数値である。

坏B蓋 (354~360)

器形では、山笠状の(あ類)や類山笠状の(い類)はなく、天井に平坦面をもって天井部から口縁部へ向かって屈曲を呈す全体が扁平器種(う類、354~356)が主体であるが、より器高が低いもの(え類、357,358)がある。同じく扁平タイプで、つまみ接着時に圧力がかかり天井部分に窪みをもち、器高が低いもの(お類、359,360)がある。

口縁部折り返しの形態では、断面が逆三角形を呈するもの(③類)が中心、(259,360)は折れ曲がり短く小さなものとなっている。

つまみ形態では、若干宝珠形であるが、(359,360)は平坦つまみで(369)は端部が尖り気味のタイプ(C類)となっている。2号窯や8-II号窯2次床で見られるような、ぽってりタイプはない。

坏B身 (361~365)

器形は、平坦な底部から丸みをもって立ち上がるもの若干開き気味となるもの(b類、361,362)で口縁端部が外反気味となっているもの、これ以外は立ち上がりから丸みをもつが、全体的に器高が低い傾向である。

台の形態は、ハの字に踏ん張り、内側接地するもの(エ類)が主で、畳付き部がベタで接地するもの(ア類)は(364)の1点である。(365)は、2つの破片で接合が可能であったものである。出土地点は10号窯床と9号窯床である。両者とも置台として逆位使用されており、9号窯床で出土しているものは完存率1/2、10号窯から出土しているものは完存率1/4で、9号窯からのものより焼成が堅緻であった。

坏A (366~370)

基本的に底部が平坦で、体部への境が顕著、立ち上がりに窪みを伴い、口縁端部は粘土を引き延ばすように尖るタイプのものであるが、2号窯出土のような尖る口縁端部を呈していない。(370)のような扁平タイプがみられる。

壺蓋 (371~373)

(371,372)は口縁端部が欠けているものであるが、小型壺のものである。

長頸瓶(瓶A) (375)

肩張長頸瓶である。首に沈線が施され、内面に左巻きと考えられる粘土紐痕が残って、絞り痕が見られないもので、底部外面に「一」の小さなヘラ記号、高台は踏ん張って付けられて台底に工具ナデがみられる。

甕 (374)

口径14cm、口頸部が「くの字」で、端部に面、口縁内面側に窪みをもつ小型のものである。器種構成表の計測値は、この小甕のものである。

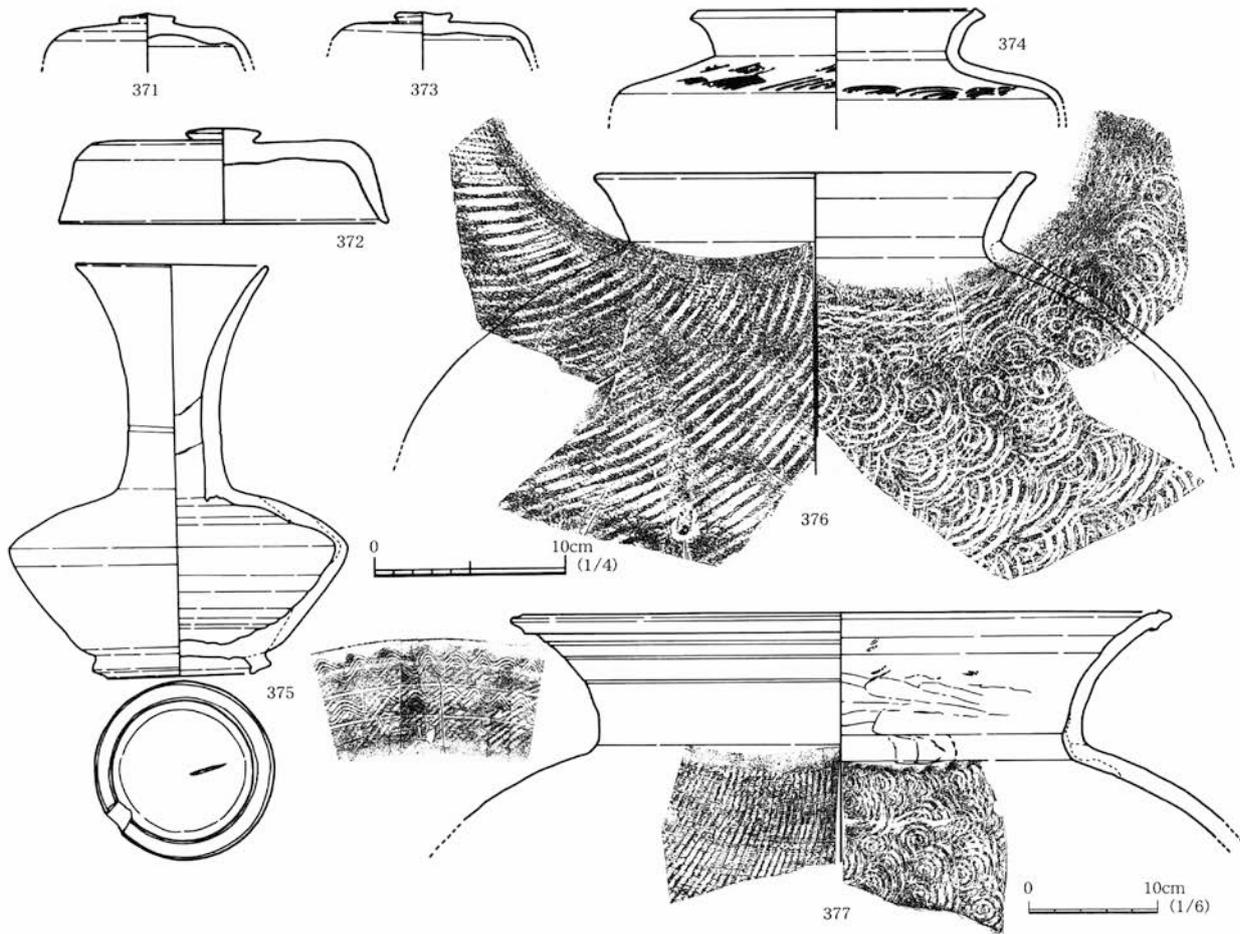
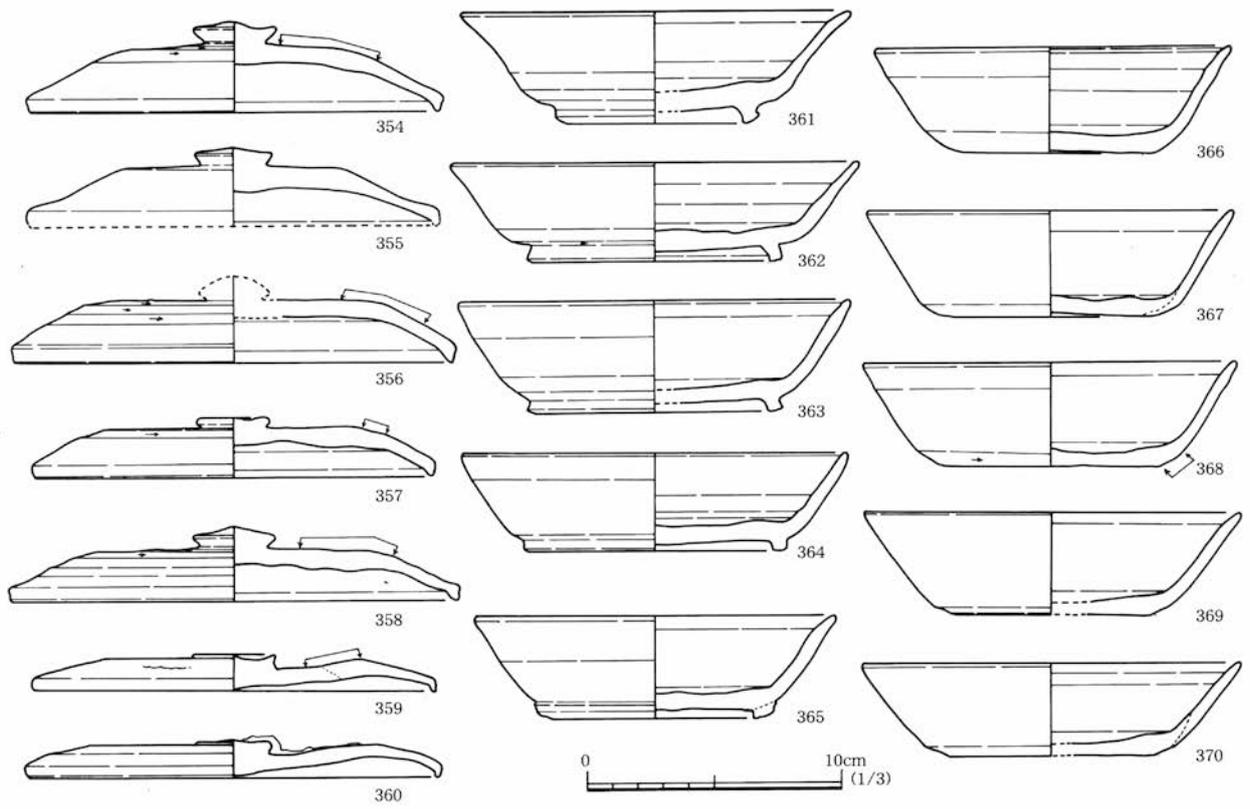
3. 窯埋土

出土器種の概要

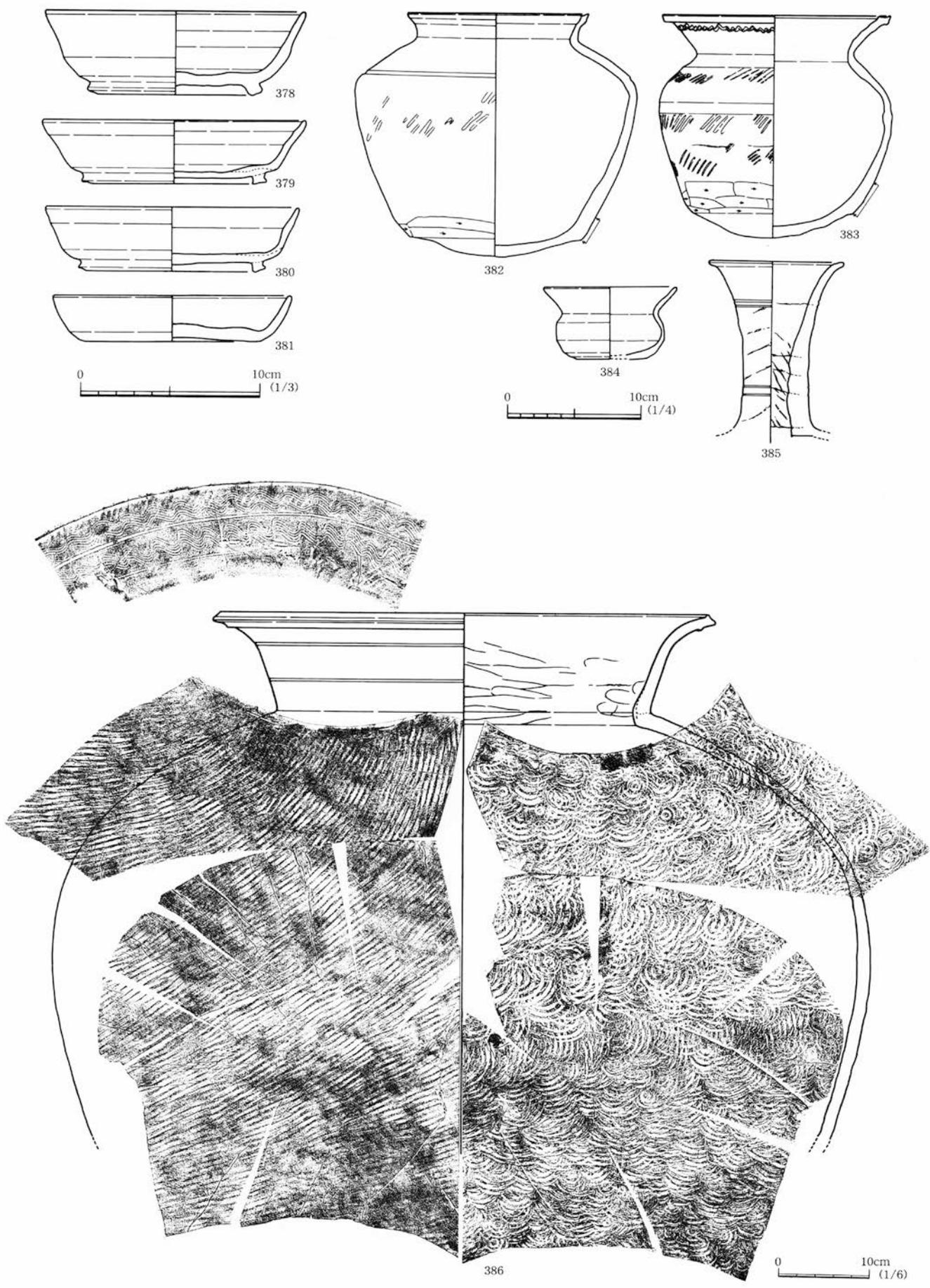
窯埋土は、基本的に流れ込んだ性格であり、グリッド出土遺物として統括すべきところである。含有率を見ると9号窯の埋土に、より多くの遺物が含まれる。これは、9号窯では窯の埋没後の窪み、特に燃焼部の上層で廃棄されたように集中して出土しているため、大甕中甕を中心とした貯蔵具が多い。このような集中廃棄をどの時点で行っているのか、単純に10号窯のものであるのか?が疑問点であり、解消の糸口になればとの考えで、個別に報告するものである。また、埋土から小甕は出土していない。

C地区窯埋土8世紀須恵器		9号窯埋土		10号窯埋土	
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率
食膳具	坏A	166	55.0%	24	41.4%
	坏B・蓋	83	27.5%	10	17.2%
	坏B・身	50	16.6%	24	41.4%
	高坏	3	1.0%	0	
	食膳具合計	302	51.4%	58	40.6%
貯蔵具	肩衝壺(壺D)	64	22.5%	0	0.0%
	小型壺	0		1	1.2%
	壺蓋	0		7	8.2%
	長頸瓶(壺A)	0		29	34.1%
	横瓶	18	6.3%	0	0.0%
	中甕	128	44.9%	19	22.4%
	大甕	75	26.3%	29	34.1%
	貯蔵具合計	285	48.6%	85	59.4%
口縁部計測値合計(/36)		587		143	

第8表 C地区 窯埋土8世紀須恵器 器種構成表
(口縁部計測値合計 730/36)



第67图 10号窯 床出土 須惠器 (376,377 : 10号窯埋土) (上段S=1/3, 中段S=1/4, 下段右S=1/6)



第68图 10号窯 埋土出土 須恵器 (上段左S=1/3, 上段右S=1/4, 下段S=1/6)

(1) 9号窯埋土 (327~353)

坏B蓋は、扁平タイプA類、つまみ形態も扁平、口縁端部形態は断面逆三角形の①類を示すもので、坏身は、口縁端部の反り返りが弱く、やや箱形を呈すもの(C類、331)や体部立ち上がりから丸みを帯びず外傾するタイプ(d類、332)がみられる。坏Aは、㊸㊸類が見られるが、箱形を呈すもの(㊹類、335,336)が確認できる。扁平なものも確認でき、(338)は口径が12.8cmと小振りである。高坏は坏部碗型を呈し、坏底部にケズリを伴うもので脚底部は屈曲し端部は面をもったり尖ったりせずに、丸い仕上がりとなっている。

貯蔵具の肩衝壺(壺D、340~342)は、肩に沈線を伴い底部を削っているもの、平瓶(344)も胴部のみであるが、出土している。口径18cmから25cmの中甕、口径30cm以上の大甕が多く出土する。中甕(345~349)は、「くの字」口縁で端部に面をもち、口縁端部内面に窪みを伴っているものや端面に若干の凹みをもつものがある。大甕では口頸部が長頸で外反、沈線区画に波状文を施して、口縁端部に突出部を有し端部に面を伴うもので、口頸部別作りを確認している。(352)は10号窯埋土と接合可能であったもので、接合破片数の数で9号窯埋土に含めている。中甕と大甕の口縁部計測値は、中甕で合計値128/36、大甕合計値75/36で、中甕が6割を占める。

(2) 10号窯埋土 (376~386)

10号窯埋土から出土するものも総じて少なく、前述と同様に特徴のみ記述する。

坏B蓋が出土は僅かであり、実測不可能な破片であった。坏身は、扁平器形が主で、やや箱形を呈すもの(C類、380)がみられる。坏Aとした(381)は、碗といった方が適切かもしれない。口径13cm、器高2.8cmを測るやや小型、器形は内湾して扁平、特異な出土例と言えようか。

貯蔵具の肩衝壺(壺D)は、2個体実測している(382,383)。両者とも叩き締め痕跡を外面で確認し、底部にケズリを伴っている。両者とも口縁端部内面に窪みをもっており、底部は叩き出して丸く仕上げている。(383)は口頸部に1条波状文が施されている。

甕類は中甕、大甕が出土している。大甕(377,386)は口頸部別作りであるものの、ジョイントや接着用粘土を確認できていない。両者とも口頸部の沈線区画に波状文をもつものである。中甕は、「くの字」口縁で端部に面をもち、口縁端部内面に窪みを伴っているものや端面に若干の凹みをもつものがある。大甕では口頸部が長頸で外反、沈線区画に波状文を施して、口縁端部に突出部を有し端部に面を伴うもので、口頸部別作りを確認している。(386)は9号窯埋土と接合可能であったもので、接合破片数の数で10号窯埋土に含めている。中甕と大甕の口縁部計測値は、中甕で合計値19/36、大甕合計値29/36で、大甕が6割を占める。

2. C地区グリッド

器種構成と器種の概要

グリッド出土遺物はC地区全体の48%と、実はC地区で最も多くの遺物が出土している。流れ込みといえども、9号窯10号窯で焼成されたことは、ほぼ間違いないと考えられ、9号窯10号窯の出土遺物が極めて稀少であることから、ここで報告するものである。

器種構成表を見てみると、食膳具が全体の72%、貯蔵具が28%、貯蔵具の比率が高い。個別で見てゆくと、食膳具では坏Aと坏Bの比率が1弱:9弱、鉢は1点のみ破片で出土。食膳具のこの数値は、坏Bの量産化に繋がるものと位置づけできようか。また貯蔵具では、中甕が25%、長頸瓶が17%、横瓶、壺A、小型鉢が各々12%、この他の器種は5%未満~7%となっており、中甕が目立つ。

種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	器種別	口縁部計測合計	含有率
食膳具	坏A	70	7.4%	貯蔵具	長頸瓶(瓶A)	64	17.4%	すり鉢(鉢F)	12	3.3%
	坏B蓋	500	52.7%		横瓶	42	11.4%	把手付鍋(鉢B)	13	3.5%
	坏B身	377	39.7%		肩衝壺(壺A)	47	12.8%	小甕	17	4.6%
	鉢	2	0.2%		壺蓋	10	2.7%	中甕	93	25.3%
	食膳具計	949	72.1%		小型鉢	43	11.7%	大甕	26	7.1%
C地区グリッド出土 須恵器 口縁部計測値合計 (/ 36)						1,316		貯蔵具合計	367	27.9%

第9表 C地区グリッド出土須恵器器種構成表 (口縁部計測値合計 1,316/36)

坏B蓋 (387~396)

器形は、(い類)や、扁平タイプで器高が低いもの(え類、393,395)があるが、扁平器種(う類)が主体となっている。

口縁部折り返しの形態では、断面が逆三角形を呈するもの(③類)が中心、折れ曲がり明瞭でないもの(④類)が含まれ、口縁端部断面が厚く短く折り返すもの(⑧類)もみられる。(396)は口縁端部の折れ曲がりがないもので、天井部がないため詳しくは述べられないのだが、特異なものである。

つまみは、宝珠形や扁平形のものが付く。

坏B身 (397~414)

器形は、総じて扁平を基本とした(a~d類)いずれのタイプも含まれ、特にb類の体部が丸みをもって立ち上がるが開き気味となる器形が多い。d類の箱形系器形も目立ち、特に(413)のような深みの箱形を呈するものが確認できる。また、(414)のような口径が12cm以下の小型品が出土している。様々なタイプの器形が混在する状態であろう。

台形態は、ハの字の踏ん張るタイプが殆どで、(ア類~エ類)いずれのタイプも確認できる。ただ、(413)には非常に小型の台が付けられている。

坏A (415~417)

所謂壘型を呈すものが2点実測可能であった。(417)は扁平形で口径12.6cmと小さく、体部立ち上がりから外傾し、器肉も薄いものである。

鉢 (418)

1点のみ出土している。口径12.7cm、器高6.7cm、器肉はやや厚めで体部内湾し口縁端部内面に面をもつ。底部は欠損しているが、丸底を呈すと推定され、手持ちケズリされている。

長頸瓶(瓶A) (419~424)

肩張り長頸瓶である。胴部が丸みを帯びるものと、胴部の立ち上がりから外傾が著しく、より肩の張りが鋭いタイプがある。口頸部に沈線をもつものや粘土紐が明瞭に残っているもの、絞り痕跡をもつものがある。(423)は外面にも絞り痕が残る、また胴部の底部立ち上がりにケズリ調整がみられ、シッタ痕跡が確認できる。高台は、いずれもハの字に踏ん張って付けられ、台高の高いものや低いものがある。(419)で1.5ℓ、(423)で1ℓの容積である。

横瓶 (425~429)

横瓶は、(425)で片面閉塞のものが確認できている。底部から粘土を積み上げ、タタキ締め成形後にさらに粘土を積み上げ、円盤閉塞前に内面を指ナデ、ただ粘土紐痕が残存している。いずれの口頸部も端部に面をもち、ロクロ成形された頸部を別作りしていると考えられる。また、(427)のような長い頸部をもつものもある。

小型鉢 (430~435)

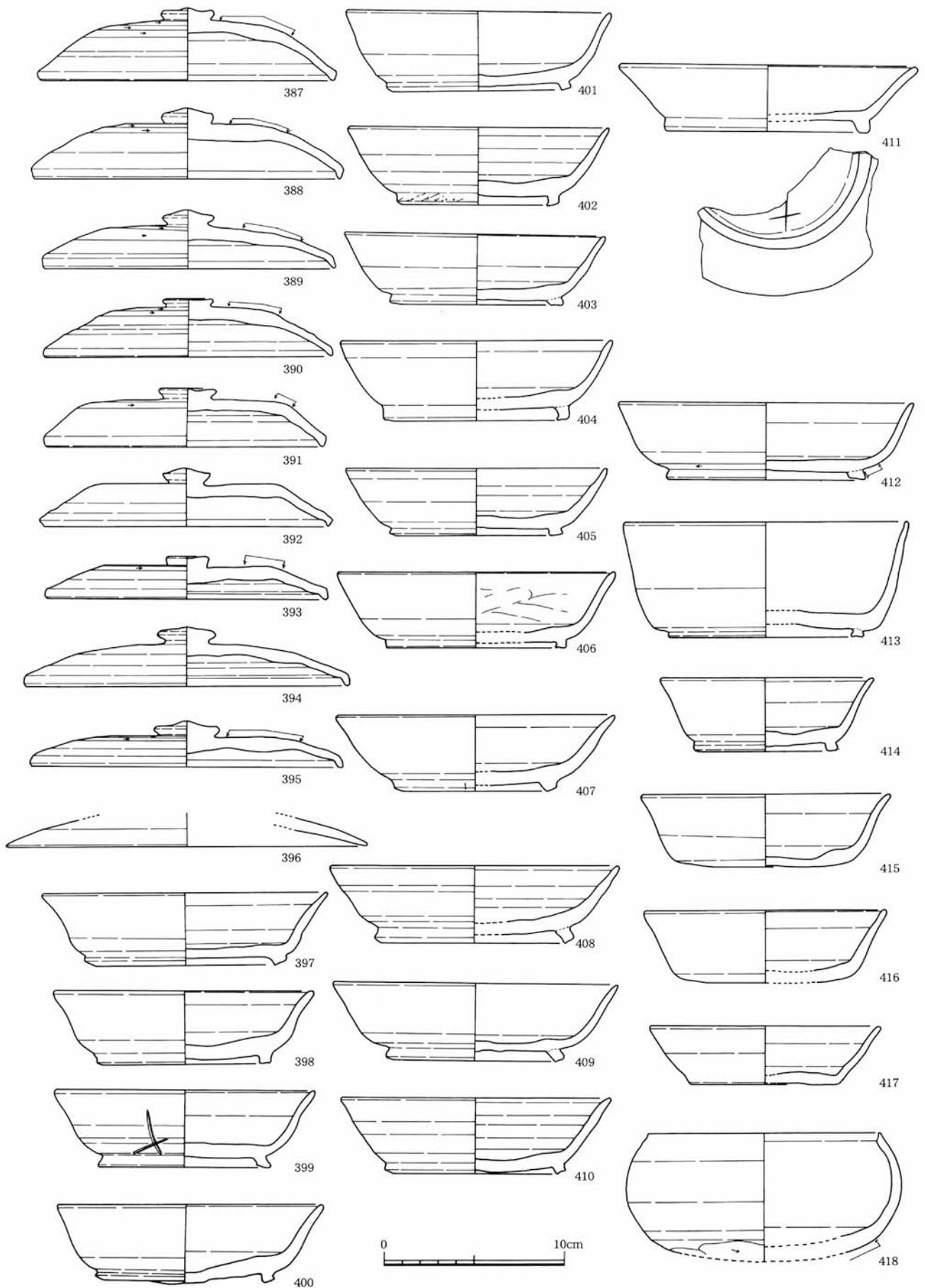
口径が大きく開口して口頸部が外反する小型の鉢と考えられるものが一定量出土している。頸部で窄まり気味となるもの(430)や、所謂灰皿状(431)、胴部破片のみであるのだが、さらに小型のもの(432,435)が出土している。この器種は、灯明皿的な機能をもつものとして想定されているものであるが、C地区から出土するこれらの小鉢は胎土も通常のものが殆どで、堅緻に焼成されているものもある。

壺A・壺蓋 (436~439)

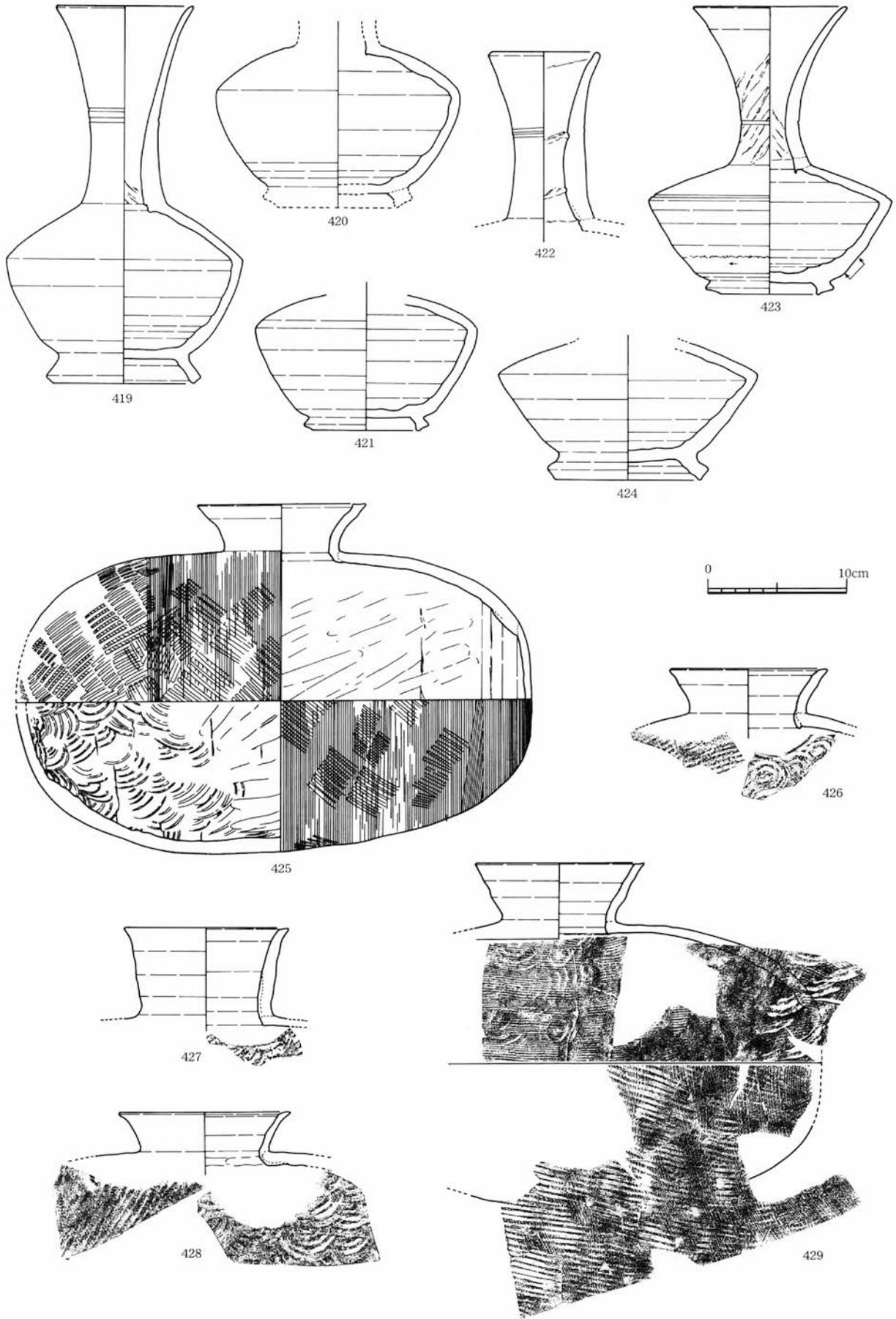
頸部外面・内面とも降灰せず、蓋との重焼痕が頸部に見られる。蓋を伴っているものであるので、壺Aとしている。(437)は口縁部にタタキ痕跡が残りロクロによるナデ調整、(438)は口頸部内面にもカキメ調整、(439)は胴部の叩き締め後、拓本では確認しにくいのであるが、内外にカキメ調整が施され、外面では肩から下にかけて4単位、内面は肩に1単位、肩より下に3単位を行っている。これら壺Aに伴うであろうと考えられるのが(436)の壺蓋で、口縁端部の折り返しと内面を抜かし全体に降灰、ガラス状となっている。

把手付鍋 (440)

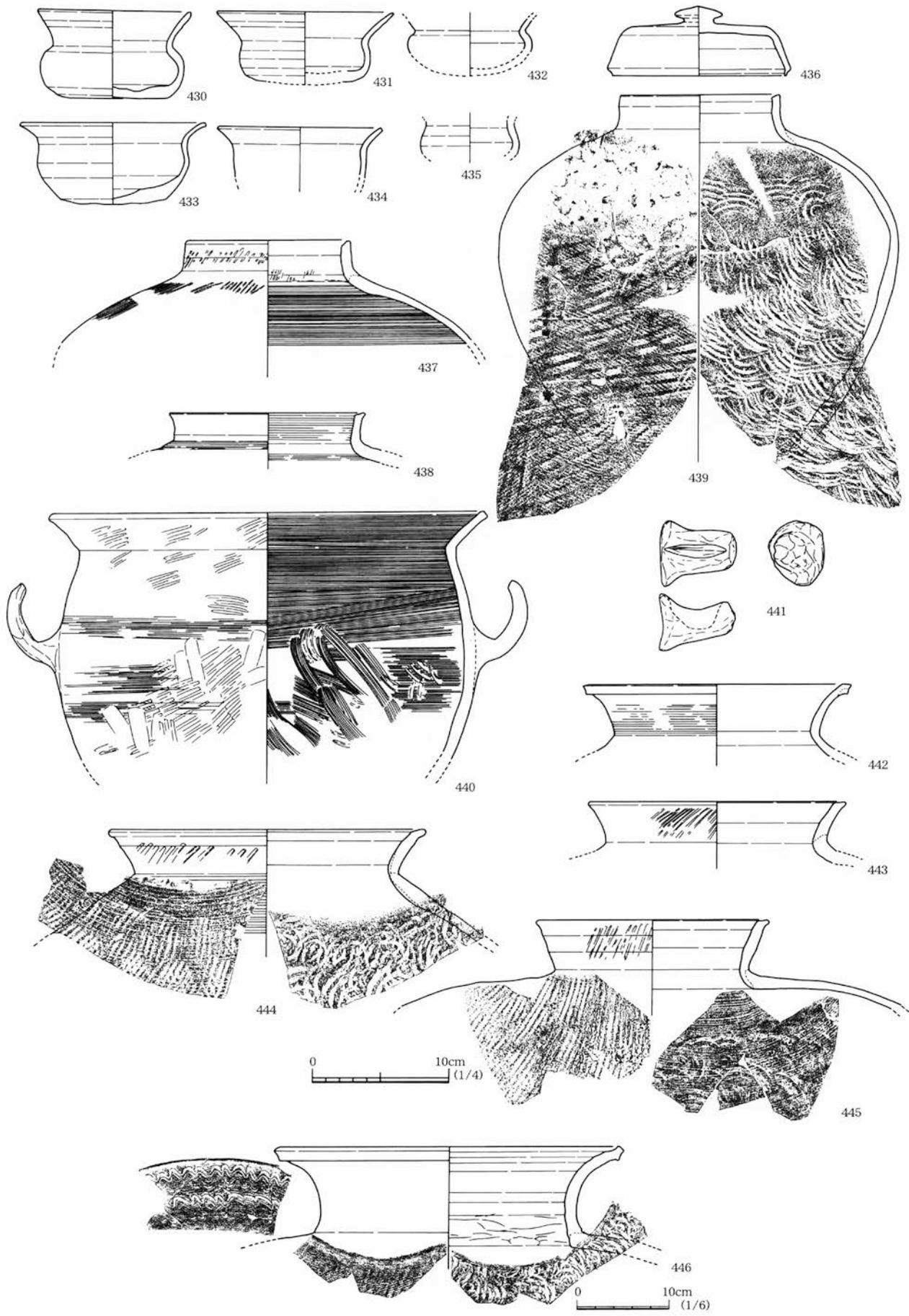
把手付きの鉢B(括れ鉢B)とも浅甕とも考えられる器種である。ロクロ成形で内外カキメ調整後、外面に指ナデ、その後外面平行線文タタキ(Hb類)内面同心円文当て具(Da類)で叩き締めている。外面タタキ痕跡が口頸部にも確認できるので、内面の胴部上位から口頸部にかけて再度カキメ調整を行っている可能性がある。最終段階で胴部内面下位にハケ調整を行っている。なお、把手幅は4.3cmである。



第69図 C地区 グリッド出土 須恵器(1) (S=1/3)



第70図 C地区 グリッド出土 須恵器(2) (S=1/4)



第71図 C区 グリッド出土 須恵器(3) (S=1/3, 下段S=1/6)

把手破片 (441)

この把手破片は上面部にヘラによる切り込みをもっているものである。このような切り込みをもつ把手は、渡来系器種で見られるもの。長さ5.5cm、幅は中央で3.3cm、厚みは中央で2.5cmであった。

甕 (442~446)

中甕は「くの字」口縁で、口縁端部を突出させて、頸部にカキメをもつもの(442)、口頸部にタタキ調整が残るもの(443~445)がある。いずれも口縁端部に面をもつものである。

大甕(446)は、窯埋土で出土するタイプと同様、内面に指ナデ痕跡を伴い口頸部別作りと考えられるものである。ただ、胴部と口頸部とのジョイント粘土痕は確認できていない。口頸部は外反し、端部を突出させて面を形成し、内面端部に凹みを伴う。また外面には2区画沈線内に波状文が施されている。

第4項 出土須恵器時期と二ツ梨豆岡向山8世紀須恵器窯の動向について

以上4基の窯で生産された器種を詳しく観察したわけである。

さて、南加賀窯跡群では、多くの調査が実施されており、窯出土遺物の編年軸・暦年代が望月氏により既に集成されている。そして、時期よっての様相が既に明らかになっている。例えば、田嶋編年Ⅱ₃期(8世紀第1四半期)では、有蓋の坏Aが姿を消し、一器種一法量の確立、食膳具の坏Aと坏Bの含有率の比率が1:9、坏Aが多くて2割程度。田嶋編年Ⅲ期に入ると、勿論古相の要素が完全に消えるわけではないが、宮都器種セット模倣など様相は一変するので、非常に解りやすいと言える。

集成されている窯別編年をみると、8世紀前半・田嶋編年Ⅱ₃期に相当する時期内で、詳しい区分付けがなされているので挙げてみる。Ⅱ₂期の様相を引きずる古段階(那谷桃の木山1号窯1次床)、Ⅱ₂期の様相を払拭し安定したⅡ₃期の様相を呈する中段階(二ツ梨東山2号窯終床、二ツ梨豆岡向山窯跡2号窯、戸津46号窯)、Ⅲ期的な様相を帯び始める新段階(戸津28号窯)としている。前述の設定は、昭和58年度灰原調査における2号窯灰原資料にて行われており、報告書でも暦年代観8世紀第1四半期との位置づけは確実になされている。

以上を念頭において、本調査の出土遺物の特徴をまとめてみると、2号窯では、東海系山笠状坏B蓋の散見、同じ坏B身の口縁端部断面形の逆三角形の定着、坏B身の箱形器種の散見、坏Aでの扁平底部と塊形底部の存在が確認できる。この特徴を基軸にすると、8-Ⅱ号窯2次床出土遺物が同様の特徴をもっていると考えられる。8-I号窯1次床・2次床、8-Ⅱ号窯1次床段階で東海系山笠状坏B蓋が確認できず、8-I号窯1次床段階の坏B蓋では口縁端部形態に古相のものも含まれ、また坏Aもどちらかという古い段階に位置する塊形器形を主としており、典型的な山笠状器形は8-Ⅱ号窯2次床段階に出現している。8号窯で言えば、坏B身の台形態にも変化が見られる。8-I号窯1次床段階から8-Ⅱ号窯1次床段階まで、台の形態は内面設置されるものだけに限定、8-Ⅱ号窯2次床段階になると、台形態は、内面設置するもの、畳付部前面設置するもの、外面設置するものと、様々なものが出現している。8-Ⅱ号窯2次床段階で何らかの参入があったのではないかと予想している。これらの山笠状坏B蓋と多様な台形態を有する坏B身をもつ特徴は、A地区2号窯の坏Bとよく似ていると思われる。また、9号窯10号窯については、床出土遺物が稀少のため非常に判断が難しい。しかし、全体の出土遺物をみると、一器種一法量の概念が崩れかかっていることがわかる。まず、全体に食膳具は扁平化している。そして、坏Bの大型品や小型品の出土、またⅢ期からの様相である器種の箱形化が見られる。しかし、これもⅢ期から出現する盤の生産が確認されず、従来の典型的な器形を呈す坏Bや塊・坏Aも存在しているので、古い様相と新しい様相が混在する過度期的印象を受ける。9号窯・10号窯が同時期操業をなしていたのか、それとも時期差があったのか、両窯床面から出土する坏B身が接合できているものもあり、床の出土遺物が少ないため断言することはできない。

以上を踏まえると、二ツ梨豆岡向山での須恵器窯は、まず北側斜面に構築され、1度窯の作り直しを得て、最終段階で何らかの参入を受け入れつつ、次に東側斜面に移動しているものと考えられる。ただ、連続していたか否かは断言できない。そして最終的に、やはり時間差をもって南東側斜面に至って、新しい要素も取り入れながら操業したものと考えている。また、時期は2号窯、8号窯がⅡ₃期(8世紀第1四半期)で、この中でも8-I号窯1次床では古手の前半段階。また、9号窯・10号窯は、Ⅱ₃期新段階~Ⅲ期古段階(Ⅱ₃期が8世紀第1四半期、Ⅲ期が8世紀第2四半期の暦年代観をもつ)となろう。

第2節 8世紀の土師器と特殊遺物

器種構成と器種の概要

C地区では9号窯、10号窯の埋土、グリッド内から土師器が一定量出土している。口縁部計測法による器種構成を試みたところ、体部胴部破片や底部出土があっても口縁部が出土していないために出土器種に含まれないものとされるため、参考として破片数カウントをしている。C地区全体で口縁部計測値986/36、破片数で1,668点であった。全体的に煮炊具の出土が多く、口縁部計測法で6割を占める。食膳具では、赤彩品の碗をはじめ有台の坏型器種と蓋、無台の坏型器種、坏部内黒で脚部外面を赤彩する高坏が出土、坏蓋では内面に暗文をもつものや稜碗蓋が出土する。その殆どが赤彩及び内黒処理されている。これら高坏以外の食膳具器種は、砂粒の少ない良質の胎土で作られている。煮炊具では、混和剤を多く含有する粘土を使用して製品成形されており、甕、小甕を中心に鍋や、底部破片のみの出土であるが甌も出土している。甕、鍋はロクロ成形、非ロクロ成形が確認されるが、ロクロ成形が主体となっている。

この他、土師器焼成の道具として使用されたと考えられる焼成粘土塊が8個体ではあるが出土している。

また、特殊遺物として、A地区2号窯床とB地区8-II号窯2次床から鴟尾破片が出土している。2号窯から5点、8-II号窯2次床から5点、B地区グリッドから1点の計11点で、いずれも置台として使用されている。

C地区 土師器		9号窯埋土			10号窯埋土			グリッド			合計		
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	破片数	口縁部計測合計	含有率	破片数	口縁部計測合計	含有率	破片数	口縁部計測合計	含有率	破片数合計
食膳具	赤彩坏A	26	17.0%	60	0		0	0		0	26	6.8%	60
	赤彩坏B蓋	100	65.4%	34	11	10.4%	22	24	19.4%	12	135	35.2%	68
	赤彩坏B身	27	17.6%	13	0		0	9	7.3%	56	36	9.4%	69
	赤彩碗	0		0	59	55.7%	53	46	37.1%	43	105	27.4%	96
	碗	0		0	13	12.3%	6	0		0	13	3.4%	6
	稜碗蓋	0		0	0		0	16	12.9%	4	16	4.2%	4
	内黒外赤高坏	0		0	17	16.0%	11	1	0.8%	3	18	4.7%	14
	赤彩高坏	0		2	6	5.7%	3	0		3	6	1.6%	8
	内黒高坏	0		7	0		8	28	22.6%	127	28	7.3%	142
	高坏	0		2	0		0			15	0		17
	食膳具合計	153	45.4%	337	106	27.4%	281	124	47.3%	603	383	38.8%	484
煮炊具	甌	0		4	0		8	0		19	0		31
	ハケ鍋	0		30	0		0	4	2.9%	32	4	0.7%	62
	ロクロ鍋	16	8.7%	88	12	4.3%	22	34	24.6%	80	62	6.3%	190
	ハケ小甕	31	16.8%	5	40	14.2%	13	33	23.9%	31	104	17.2%	49
	ロクロ小甕	98	53.3%	133	31	11.0%	22	7	5.1%	50	136	22.6%	205
	ハケ甕	0		13	0		18	14	10.1%	58	14	2.3%	89
	ロクロ甕	39	21.2%	131	198	70.5%	242	46	33.3%	185	283	46.9%	558
	煮炊具合計	184	54.6%	337	281	72.6%	281	138	52.7%	603	603	61.2%	1,184
	合計 (/36)	337	34.2%	337	387	39.2%	387	262	26.6%	603	986		1,668

第10表 C地区出土 土師器 器種構成表 (口縁部計測値合計 986/36)

第1項 C地区出土 土師器

1. 9号窯埋土

出土器種の検討 (447~461)

坏B器種の蓋は実測可能であった2点とも内外赤彩品である。(447)は、平坦天井部を呈すタイプ、(448)は天井に平坦面をもたない扁平器形で、外面前面にヘラミガキ、内面は丁寧な指ナデのち、暗文が施されている。坏B器種の身(449~452)は、すべて赤彩処理され、様々な法量をもっている。(450)は口径15.7cmの典型的な坏B器形を呈し内外ヘラミガキが施されている。これより一回り小さくやや箱形状のもの(441)や、口径が18cmを測る盤状のもの(451,452)がある。上記の器種は、赤彩剥離の著しく調整痕跡の不明なものもあるのだが、赤彩が明瞭に残存している器種にはすべて、内外ヘラミガキが確認できる。(453)は内黒高坏で、坏部内面が内黒処理とヘラミガキ、脚部内面には絞り痕が見られ、色調は黒色となっている。(454)は窯道具の焼成粘土塊であるが、混和剤を多く含み、手で一握りしたと思われる指圧痕がみられる。

煮炊具類での小甕では、すべてロクロによって成形されていると考えられるもので、(455)は一見非ロクロ成形のハケガメの特徴を備えているのだが、ロクロメやカキメが胴部上半で確認でき、丸底で外面手持ちケズリ、内面底部ハケ調整を施している。(456)は平底底部をもつもので、口縁端部はつまみ上げされている。(458)は長胴甕、「くの字」口縁、器形はやや砲弾形である。実測図では胴部のケズリが叩き出し後の最終段階で行っているように図化されているが、望月氏により、口頸部成形後に全体をカキメ調整、その後叩き出しを行い、胴部中位以下の範囲に縦方向のケズリを施し、その後ケズリを施した部位から底部にかけてもう一度叩き出しを行う、という成形方法についての指摘を受けている。鍋は2点実測可能で、いずれもロクロ成形によるもので、(459)は口縁端部つまみ上げ、(460)は胴部カキメ調整後、縦方向のまばらなハケ調整を行っている。

2. 10号窯埋土

出土器種の検討 (462~477)

食膳具の坏蓋、埴、いずれも内外赤彩されており、9号窯で述べたように(465)以外は赤彩剥離が著しく、ヘラミガキを確認できていないのだが、(465)は内外ヘラミガキ、底部ケズリを確認している。埴は器形が扁平で小型のもの(463)、中型(464)、大型(465)と様々な法量もち、大型品は口径19cmを測る。高坏の(466,467)は内面内黒、脚部外面が赤彩で、坏部が残存する(466)ではヘラミガキを確認できる。(468)は、坏部が浅い埴型を呈し、内面内黒、外面赤彩で、底部ケズリを伴い、内面ミガキがみられる。(469)は、口縁から底部まで復元可能であったもので、坏部は浅い埴型を呈し、外面赤彩、坏部内面は内黒及びヘラミガキ、外面の口縁に内黒のみ出しが見られるもの。また、脚部外面には面取りが施される中実タイプである。このような中実タイプの脚をもつ内黒高坏は、これまで、7世紀後半には出土しなくなる傾向をもっており、今回の出土が、内黒高坏中実タイプの最終段階に位置するものと言えるだろう。

煮炊具類の小甕は、ロクロ成形、口縁端部つまみ上げ、外面底部手持ちケズリ、内面ハケ調整されているもの。長胴甕はやはりすべてロクロ成形の「くの字」口縁、特に底部まで復元できている(472,473,477)の器形は砲弾形、前述したような方法で成形されていると考えられる。(474)は口縁にまでタタキ痕跡が認められる。

3. グリッド埋土

出土器種の検討 (478~495)

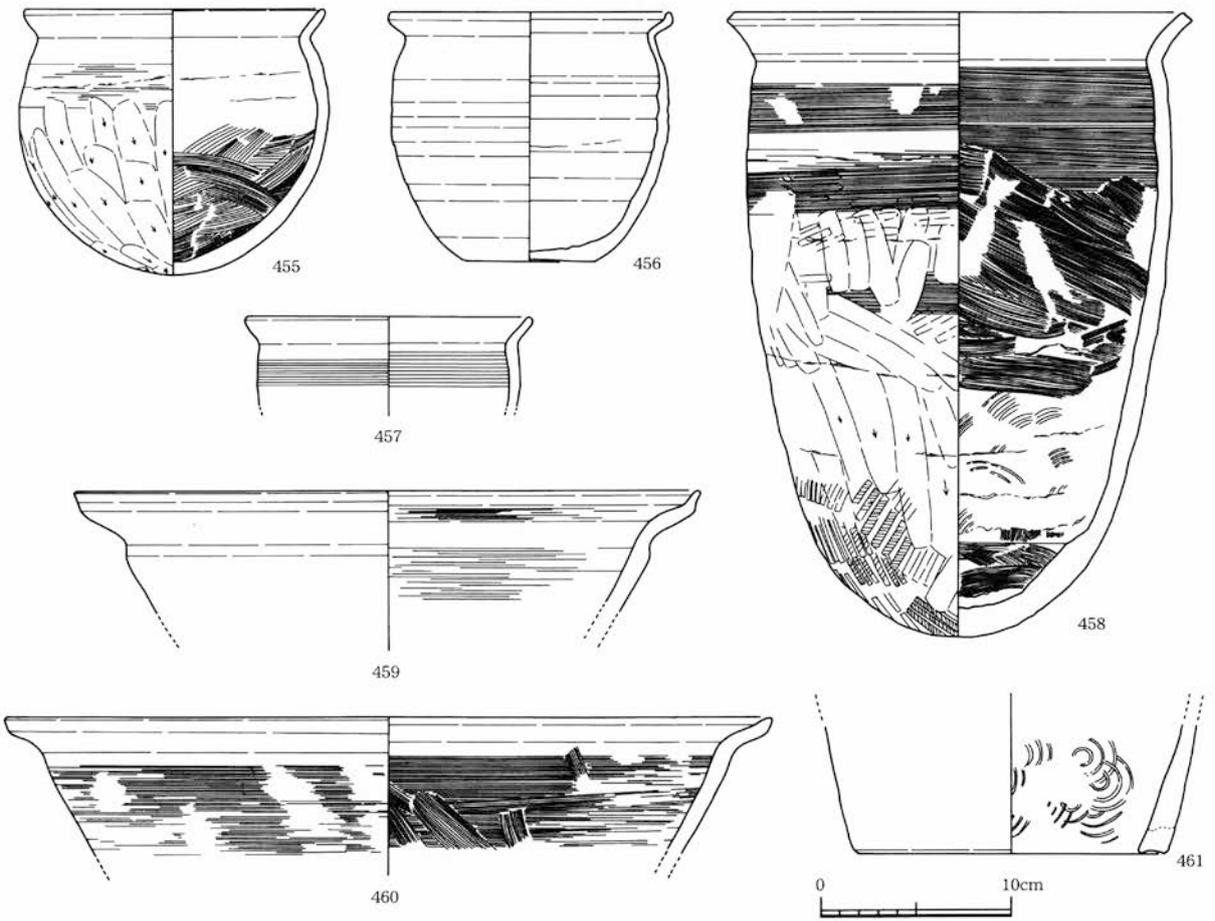
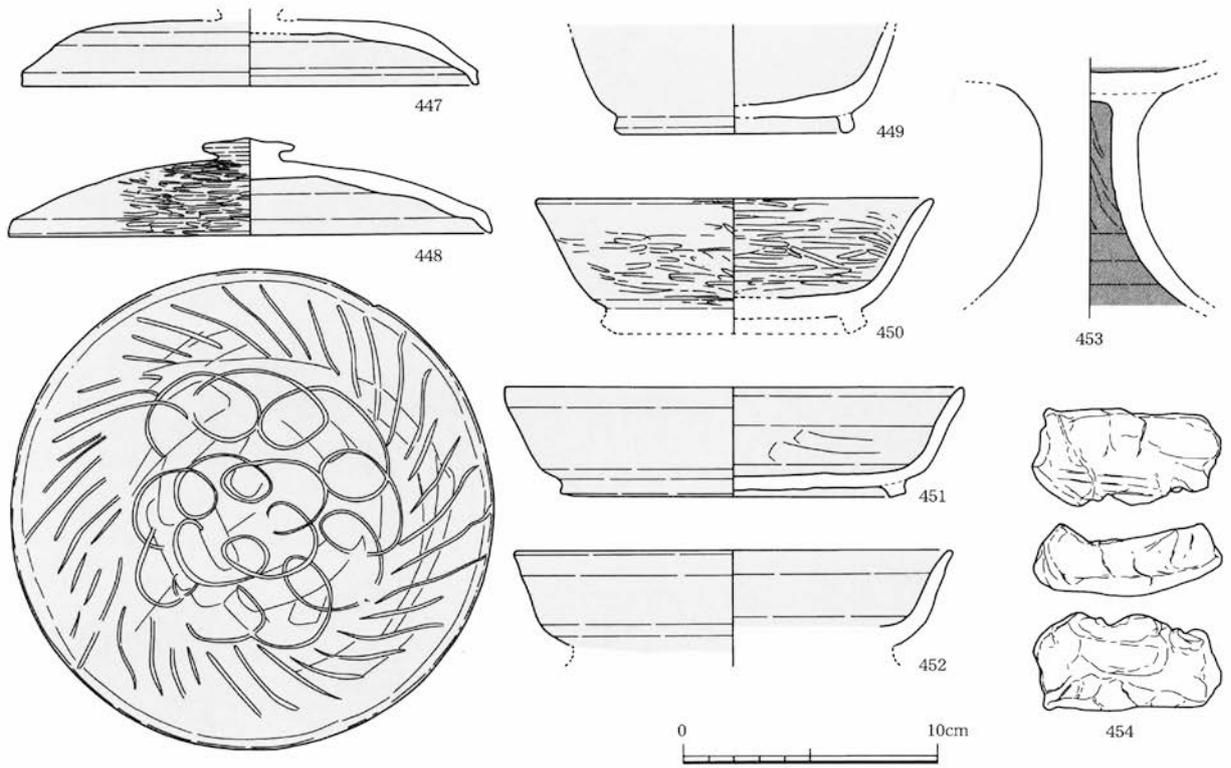
(478)は稜埴の蓋で、口径19.6cm、天井部に突帯が巡って平坦、口縁端部断面が三角形を呈す。内外赤彩及びヘラミガキが内外と天井に至るまで丁寧に施されるものである。(480,481)は坏Bとしているが、口径19cm以上の盤状器形とも考えられる器形で、やはり内外赤彩、剥離が著しいがヘラミガキが確認できる。台は踏ん張るタイプものが付けられている。盤Aが出土していないため、やはり坏Bとするのが妥当と考えている。(482)は赤彩埴で口径12cm、10号窯埋土で出土するものよりも深身のものである。高坏は坏部内面内黒、坏部が残存すれば内面にいずれもヘラミガキが確認でき、脚部の絞り痕跡が外面にもみえるものがある。(487)は坏部接着面に円形状の工具痕が残り、坏部接着時に粘土食い付きがよくなるよう付けられたと考えられる。

煮炊具の小甕は、いずれもロクロ成形によるもので、いずれも口縁端部のつまみ上げをもち、(489)は前述の長胴甕のように最終段階でケズリ調整を行っているのではなく、ケズリ調整後にタタキを行っている過程をもつものであろう。長胴甕はいずれも口縁から胴部にかけての破片であるが、口縁が典型的なハケ甕の「くの字」口縁、口縁端部に面をもたず先端が尖り気味となるものである。(491)は非ロクロ成形、内外に縦方向のハケメが確認できる。(492)は内面上部にカキメ、中程に当て具痕跡を確認している。鍋は、いずれもロクロ成形のものが実測可能で、(495)は内面口縁端部にまでカキメが確認でき、最終段階に底部外面ケズリを行っている。

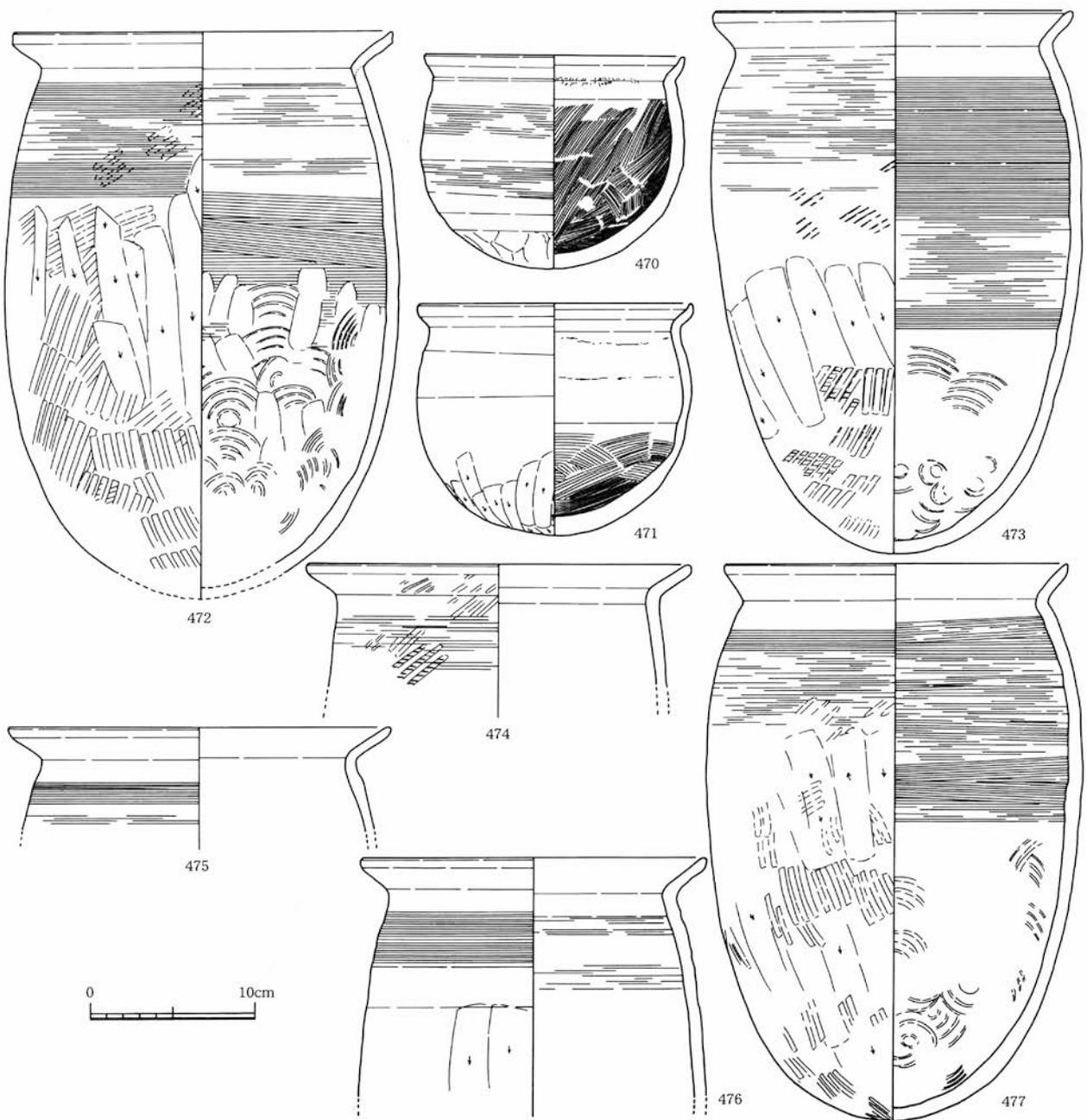
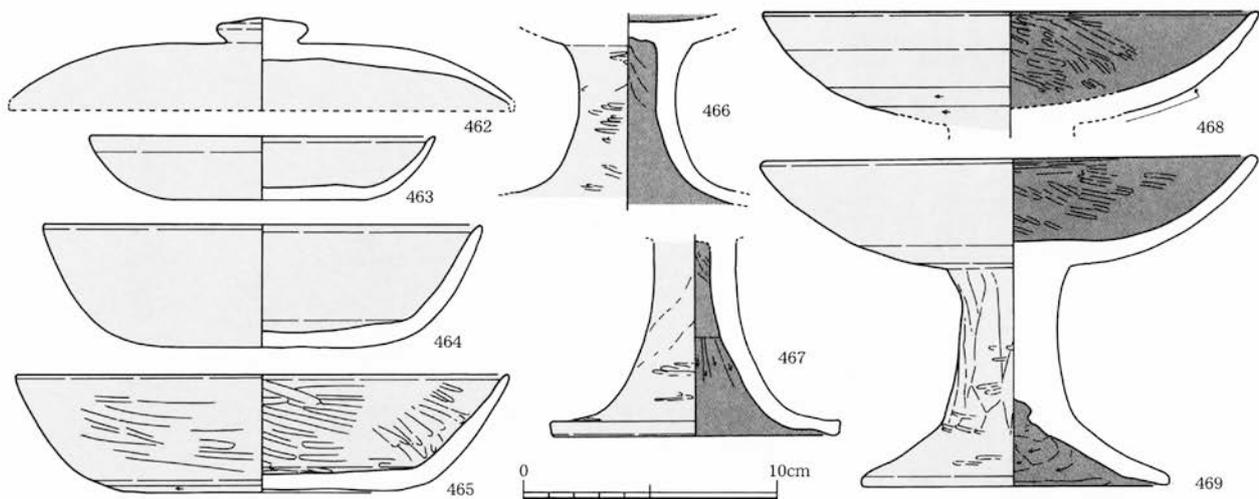
土師器器種ではないのであるが、砥石が出土している(488)。側面いずれも擦り痕が確認できる。グリッド内出土遺物として掲載しておいた。

4. 出土土師器の時期について

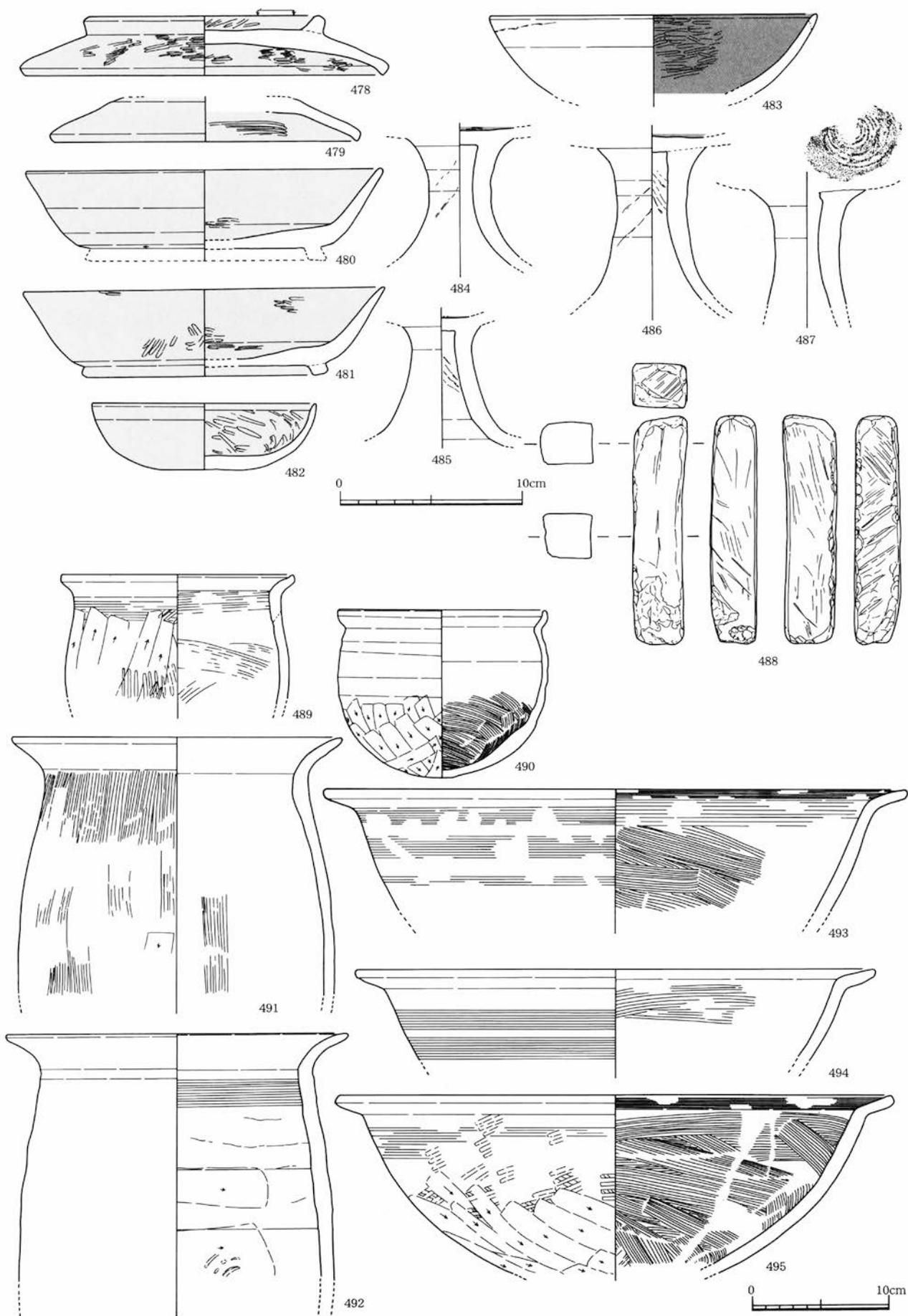
加賀地域の7世紀後半から8世紀にかけての土師器食膳具の特徴を挙げてみる。赤彩品は田嶋編年Ⅱ₃期に定量化を見せる傾向、暗紋土師器はやはりⅡ₃期には一定量みられⅢ期になると衰退をみせる傾向、蓋付器種はⅢ期に多く出土、底部糸切りの平底埴は8世紀中頃に出現する傾向、Ⅱ₃期で底部ケズリが見られることと内外ミガキを施すこと。



第72図 9号窯 埋土出土 土師器 (上段S=1/3, 下段S=1/4)



第73図 10号窯 埋土出土 土師器 (上段S=1/3, 下段S=1/4)



第74図 C地区 グリッド出土 土師器, 砥石 (上段S=1/3, 下段S=1/4)

赤彩碗は、Ⅱ₃期には定形化するが浅身主体、深みのものはⅢ期から出現してくる傾向。古い様相としての内黒碗の消滅とともに内面黒色の高坏は出現するが、Ⅱ₃期では数量みられる程度であること。また、中実の高坏が古くからの器種であること、等であろう。本遺跡から出土する土師器食膳具は、ほぼ赤彩品が主体である。多様法量や多様器種、赤彩品や暗紋、平城の様式を取り入れた技法である高坏脚部の面取り、蓋付き食膳具これらの特徴は宮都的食膳具の特徴そのものであり、Ⅲ期に導入される宮都の形式を模倣したものと考えられる。ただ、古様式である中実の内黒高坏が一定量出土することや、碗では平底でも糸切りは確認できていないこと、宮都食膳具セットに入るような盤が出土していない。よって、宮都様式が導入された最も早い段階と捉えることが可能と考えられ、田嶋編年Ⅱ₃期の後半、もしくはⅢ期の初段階に位置づけられるものと考えている。暦年代観の位置づけは、Ⅱ₃期が8世紀第1四半期、Ⅲ期が8世紀第1四半期～第2四半期に相当する。以上は食膳具からの位置づけ結果である。一方煮炊具を見てみると、9号窯埋土出土の(456)小甕は、ロクロ成形で底部糸切り平底、ロクロヒダは顕著で器肉は薄く、口縁端部が摘み上げられる特徴。(459)の鍋の口縁端部形態も同様である。これらは、時期の新しい特徴が備わっており、Ⅳ期に見られる特徴でもある。よって、C地区出土土師器は、2時期の様相をもつものであると言える。

第2項 鴟尾

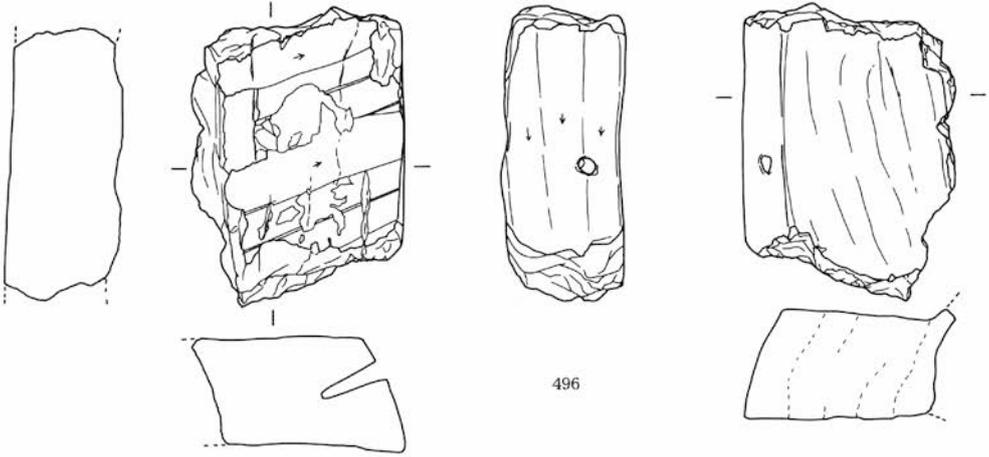
A地区(西側斜面)2号窯と、B地区(北側斜面)8-Ⅱ号窯2次床、B地区内グリッドから鴟尾破片が出土している。窯出土はいずれも床面からであるが、製品としてではなく、置台として使用されているものである。それでは、出土別に詳細を述べてゆく。なお、鴟尾の部位名称や形式名称は、(大脇 潔 1999「鴟尾」『日本の美術1』至文堂)に基づいている。

1. 2号窯床 (496~500)

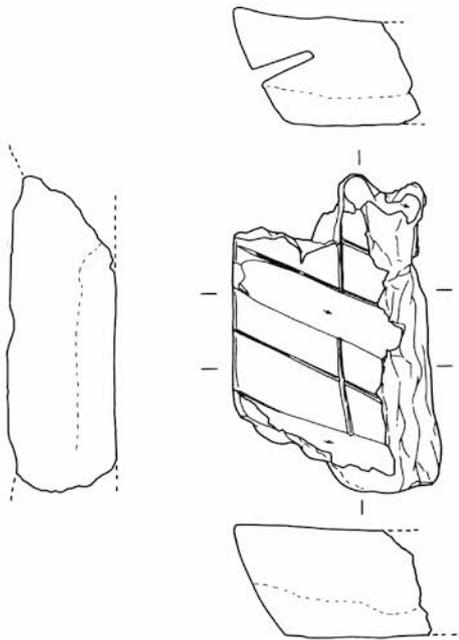
2号窯床面から出土する鴟尾は、5破片(496~500)。いずれも厚さ6cm、(499)以外は、鱗部と考えられる外面側に沈線区画をもち、区画2列おきに断面形が浅い窪みを呈すヘラのような工具によるケズリが施され、鱗部の装飾と考えられる。(496,497)は側端面に孔径1.0cm深さ3.5cmの、拒鵠(キョジャク)と呼ばれている鳥避けを装着するための穿孔を伴っており、鴟尾鱗部の頂部破片と考えられる。側端面にはケズリ調整の確認できるものもあり、また内面側にはナデ調整が行われている。(497)は腹部との接着痕と考えられる痕跡をもっており、鱗部は後付けされたと考えられる。(497)にはケズリ以外の2区画毎に縦方向の線刻を施している。(498)も沈線区画とヘラケズリをもつもので、鱗部と考えられるものであるが、部位は不明である。しかし、腹部との接合痕跡が確認できている。(499)は内面に粘土積み上げ閉塞の粘土はみ出しを顕著にもつものである。鴟尾は基部から粘土積み上げを行って腹部を成形し、頂部先端で絞り込み閉塞する成形方法をとっていることから、腹部の頂部先端破片と考えられるものである。(500)も沈線区画とケズリをもっていることから鱗部と判断できるもので、側端面は丸みを呈すことから、鴟尾の形体が沓掛状に腹部が頂部へ向かって突出するように緩やかに反り返る、転換部の部位にあたるものと考えられる。この破片の内面側には甕が2破片癒着している。以上の鴟尾破片の重量は頂部先端絞り込み破片が800gと軽く、鱗部は各々約1kg、転換部位と考えられる(500)は甕破片が癒着していることもあり、重量は2kgを超えている。また、胎土はいずれも混和剤を非常に多量に含有するもので、ざらざらした砂質の強い質感となっている。

2. 8-Ⅱ号窯2次床 (501~503)、B地区灰原

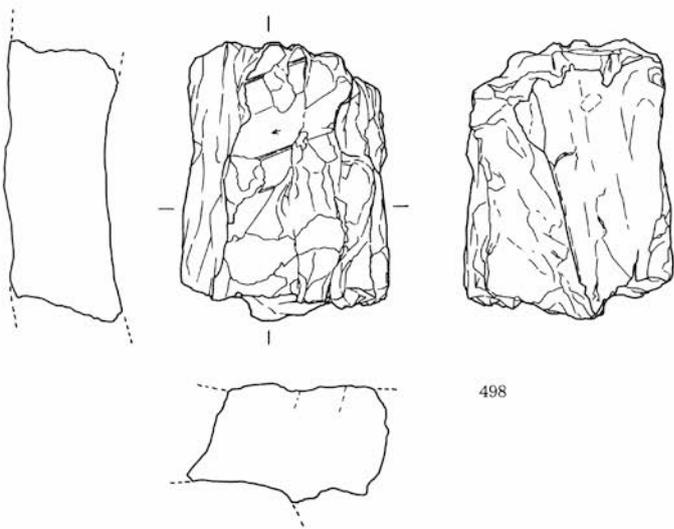
8号窯最終床面から出土する鴟尾(501~503)は、5破片で、このうち3破片が接合可能であった。(501)は厚み6cm、沈線区画とケズリをもつものであり、鱗部の一部と考えられるもので、内面の指ナデは確認できていないが、鱗部の装飾の中で2区画毎に斜め方向にさらに線刻を施している。また、(502)は、厚み4.6cm、底部平坦面を伴い、胴部が外反して立ち上がるもので、基底部と考えられる。(503)は、3破片が接合可能であったもので、内面の凹面は粘土接合痕と考えられるような起伏状となっていて、ナデ調整は簡単に行われているものの、非常に粗い印象のもの。外面の凸面はナデ調整されている。この破片は、腹部もしくは頭部脊稜の張り出し部分の可能性が考えられるもので、厚みは4.8cmである。これら鴟尾破片の重量は、(501)で約1kg、基部破片で930g、(503)で2.2kgであった。また、胎土はいずれも混和剤を非常に多量に含有する。



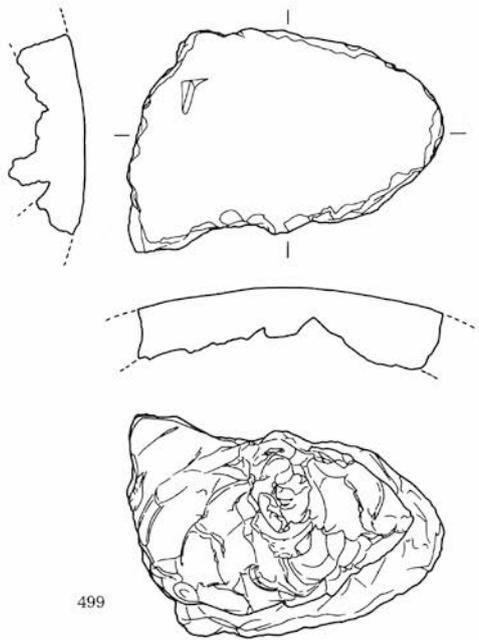
496



497

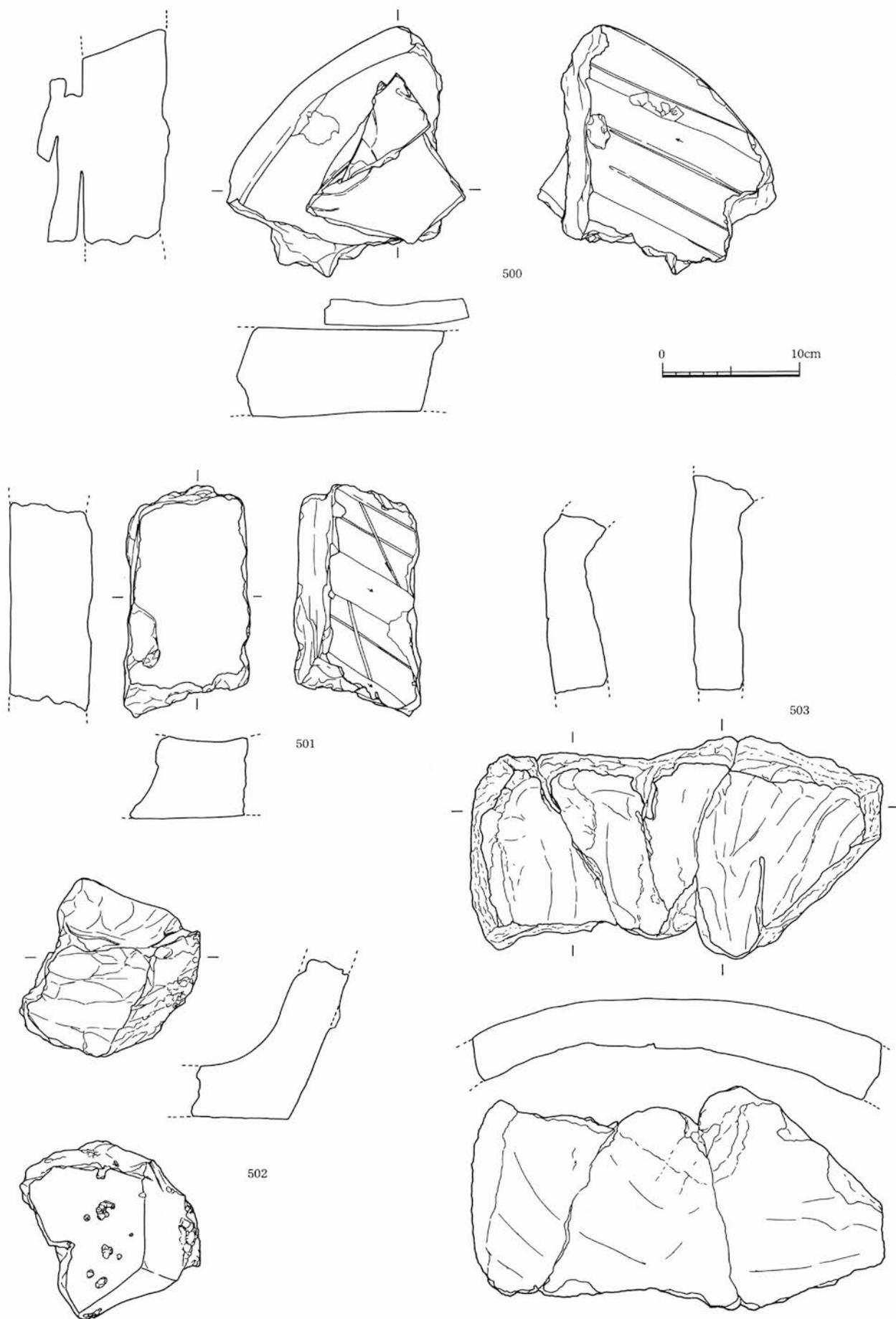


498



499

第75図 鷓尾 (2号窯出土) (S=1/4)



第76图 鸱尾 (500: 2号窟出土, 501~503: 8-II号窟2次床 出土) (S=1/4)

また、図化していないのであるが、B地区う8グリッドから鴟尾破片が1点出土している。厚み5cm、長さ10.5cm、幅6cmで、断面内外面とも前面の降灰が著しく、外面にあたる装飾は確認できないが、内面側には指ナデが確認でき、甕破片が癒着していて、やはり置台として使用されたものである。

3. 出土鴟尾について小結

鴟尾の焼成場所について

鴟尾の焼成に関して、山ノ神窯跡や釜生田辻垣内窯跡、隣県である王子保窯跡群など、須恵器窯から焼成に失敗した鴟尾が出土する例は近年多くあり、鴟尾が須恵器窯で焼成されていることはよく知られている。窯跡だけでなく出土する鴟尾は、高さが通常100~130cm、最も巨大なもので148cm。重さでは、200~300kgだということである。また、鴟尾の厚みは、初期段階で2cm、時代が下るに従い厚さを増す傾向にあり、巨大なものでも4cmである。平均は3cm程であろうか。本窯跡で出土した鴟尾破片は、厚みが基底部や腹部で4~5cm、鱗部で6cmを有し、タタキ締め痕跡はもたず、締まりが若干弱めの土質を呈すもので、厚みも含めこれが焼成失敗の一因とも見受けられる。厚みと高さが比例することはないと言われてはいるものの、平均的な高さ、またはそれ以上の高さを想定することは十分可能であろうと考えられる。

さて、本窯跡から出土した鴟尾破片は冒頭にも述べたのであるが、2号窯で出土するものに甕破片が癒着していることから置台として使用されている。勿論置台使用前は、製品となるべきものである。ここで本窯跡を見てみると、2号窯の焼成部高並びに8-II号窯2次床の焼成部高は、1m未満である。前述の鴟尾高想定を考えれば、出土鴟尾が焼成された可能性が極めて低いものと考えられる。また、本窯跡で焼成されたものならば、2号窯灰原や8号窯灰原からも鴟尾破片が多く出土するはずであるが、まったく出土していないのである。よって、これらは搬入され使用されたものであり、近辺の別の窯で焼成されたと考えざるをえない。

鴟尾の製作人について

鴟尾製作には、相当の月日を費やし、成形においても非常に高度な技術を有することが知られている。成形過程の痕跡である須恵器工人の道具であるタタキや当て具痕跡、須恵器作りと同じ成形方法を示す出土例、また、瓦質・瓦製の出土例があり、須恵器工人、瓦工人の関与が知られている。では、当窯跡から出土する鴟尾は誰が作ったのかということである。7世紀末頃は、全国的に地方寺院建立が造営される時期、北加賀の能美窯跡群では瓦生産及び寺院供給を前提とした新器種を導入する窯場として知られる。しかし、南加賀窯跡群では瓦生産は黒瀬瓦窯で確認されるのみ、寺院に供給するような仏器的器種や特殊遺物の出土が比較すれば稀少である。また、本窯跡から出土した鴟尾は置台に使用されているため本来の焼成具合を判断するのは難しいものの、基本的に堅緻な須恵質を呈す。従って瓦工人関与よりも須恵器工人関与の可能性が高いと考えられる。勿論、鴟尾工人の関与も否定できない。特殊で高度な技術を要する熟練の鴟尾工人の存在なしでは成立しないと思われる。2号窯から出土する鴟尾2点に拒鵠のための穿孔をもつものがある。拒鵠は、7・8世紀の古代寺院から出土した鴟尾に幾つか見られるが、唐・渤海・百済・新羅などにも類例があるという。ただ、現時点ではその系譜を追うことはできないので、今後の課題としたい。

鴟尾の時期について

本窯跡から出土する鴟尾は、突帯貼り付けや連珠紋をもつような縦帯や鱗部の段ケズリ出しがなく、沈線区画内にヘラケズリのみといった簡略化された紋様をもっている。沈線紋鴟尾と呼ばれるものである。7世紀中葉以降装飾の簡略化が進む傾向、7世紀末期には連珠紋を竹管で表現する例や、8世紀前葉の高丘3号窯出土鴟尾では、鱗部の段を沈線で表現する例がある。簡略化をさらに徹底した形が無紋鴟尾であるが、7世紀後半から8世紀前半にかけての例が多いという。出土した須恵器の時期から、2号窯、8-II号窯2次床ともⅡ₃期(暦年代観8世紀第1四半期)に相当、置台利用を考慮に入れば、総じて鴟尾の時期は、Ⅱ₃期の古手と設定するのが妥当であろうと考えている。

供給先について

北陸から出土する鴟尾は、福井県の王子保窯跡群、瓦谷2号窯の2例と、新潟県鳴滝山廃寺からの1例、合計3例のみであり、石川県内からは出土していない。何処へ供給したのか。江沼盆地への供給の可能性が高いと思われるが、鴟尾の出土がないために不明で、これは今後の調査に委ねるものである。

第3節 10世紀の須恵器

10世紀に位置づけられる遺物は、A地区とB地区で確認されている。A地区では、1-A号窯、1-B号窯、これらに付随する焚口前面土坑や灰層、SK1～7の土坑群、上層灰原、粘土塊集中1・2、ピット、上記以外のA地区内の殆どの区域から出土している。B地区では、7号窯と焚口前面土坑及び灰層、灰原、SK1～4の土坑群、粘土塊だまり、同じくB地区グリッド内から出土している。

器種の名称について

ここで器種名について説明しておくが、食膳具は北陸古代土器研究会で通常引用しているものに準じている。底部ヘラ切りで内面見込みを明瞭にもつ器種を坏、底部糸切りで内面見込みの明瞭でないものを碗・皿としている。碗、皿では身の深さにより区別している。また、無台をA、有台をBと分類している。

貯蔵具の名称は、基本的に従来呼び名になっている。しかし、(北野博司 1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『第8号北陸古代土器研究 つぼとかめ』北陸古代土器研究会)に基づいて分類もしており、統一性を保つためにも、これらの名称を()にて提示している。ただ、新資料と言えるような器種も出土しており、これについては別名を付けて、()表示をしていない。壺類の名称については次のものがある。壺A(=狭口球胴短頸壺、薬壺) = 有蓋。壺B(=狭口短頸壺)。壺C(=狭口長胴短頸壺)。壺D(=狭口肩張短頸壺、肩衝壺)。壺E(=広口肩張短頸壺)。壺F(=広口肩丸短頸壺、広口壺)。Aが狭口球胴型、B～Dが狭口長胴、E・Fが広口壺を指し、狭口は口頸部が直行型で蓋を被せるのに適した形を示す。この内、二ツ梨豆岡向山窯で出土するのは壺A、壺F系統である。そして、これら以外の特徴をもつものが出土しており、(望月精司 1999「越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具」『第8号北陸古代土器研究 つぼとかめ』北陸古代土器研究会)を参照、望月氏の助言を受けて、呼び名に困ったので続きのアルファベットを付けた。蓋を伴わず口頸部が長めのものを壺G、蓋を伴わず口頸部が短めのものを「壺H」とした。蓋を伴うものとして「壺A」とした。また、「壺F系」としているものは、狭口長胴で口頸部が非常に長い特徴をもつもので、壺F系統と捉え名付けたが、もっと適切な器種名にする方がよいかもしい。昭和58年度A地区灰原調査報告の中では平底無蓋短頸壺と名付けられているものである。

瓶類。長頸瓶については肩丸長頸瓶(瓶B)を示し、双耳瓶は二耳の長胴瓶(瓶D)を示す。また、鉢については、広口鉢は、頸部に括れをもつ鉢(鉢B=括れ鉢とも言う)、平鉢は基本的に碗形鉢(鉢C)を示すが、皿状の器形で大型のものも一部含み区別していない。これについては遺構毎の出土器種説明の中でその折々触れている。すり鉢は、深み厚底の鉢(鉢F=つき鉢とも言う)を示す。また、これまでに出土例なく、鉢の一種と考えられる深みで甕にも似た器形をもつものを甕形深鉢としている。

甕類は、底部を丸底に叩き出す器形を口頸部の長さや口の広狭にかかわらず、甕とした。底部が平底のものを平底甕としている。

第1項 A地区出土 須恵器

器種組成と各器種の概要

A地区出土遺物については、この区域西側にあたる灰原調査分が小松市教育委員会より既に報告されて概要が明らかとなっている(1993「二ツ梨豆岡向山古窯跡」)。これを踏まえて報告しなければならないところであるが、今回の調査で初めて確認された器種もあつたり、準じられなかった部分もあり統一性に欠くことお許しいだきたい。貯蔵具について、1993年度(昭和58年度灰原調査)報告では、すり鉢(鉢F)、平鉢(鉢C)、広口鉢(鉢B)が調理具として分けられて構成されているが、本報告では貯蔵具に含めている。

出土器種を大別すると食膳具、貯蔵具の他、煮炊具がある。食膳具は碗・皿のA・B、坏Aで、A地区全体の含有率は79.4%、貯蔵具は、鉢類、甕形深鉢、壺類、瓶類、甕類でA地区全体含有率が19.7%、煮炊具として鍋、長胴甕、甕があり、A地区全体での含有率は0.9%である。出土地点別では、1-A号窯関係から出土したものが44.5%、次いで上層灰原から30.4%と含有率の上位を占める。

器種組成表には含めていないものを記述しておく。以上の器種の他に特殊器種として風字硯(個体数3)、円面硯(個体数1)、コップ形(個体数20)、特殊蓋(個体数17)、また、陶錘(個体数8)、紡錘車(個体数1)、刀子(個

A地区10世紀 須恵器	1-A号窯関係 全体		1-B号窯関係 全体		A地区SK全体		上層灰原		粘土塊たまり		A地区窯関係 以外合計		A地区10世紀 遺物総計		昭和58年調査 1号窯跡灰原		昭和58年調査 3号窯跡灰原		昭和58年調査 灰原合計		昭和58年調査、 平成14年調査の 1-A・B窯関係 のみのA地区 区合計			
	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率	口縁部計 割合計	含有率
食膳具	2,033	37.6%	104	19.7%	643	43.8%	1,280	34.6%	277	26.9%	2,200	35.5%	4,337	35.7%	565	43.3%	950	39.3%	1,515	40.7%	5,852	36.9%	3,333	38.3%
埴B(有台皿)	2,976	55.0%	378	71.6%	542	36.9%	2,124	57.4%	611	62.2%	3,307	53.3%	6,661	54.9%	499	38.2%	1,236	51.1%	1,735	46.6%	8,396	52.9%	4,395	50.5%
埴A	108	2.0%	0		88	6.0%	80	2.2%	53	5.1%	221	3.6%	329	2.7%	83	6.4%	0	0.0%	83	2.2%	412	2.6%	279	3.2%
皿A(無台皿)	73	1.3%	10	1.9%	61	4.2%	134	3.6%	10	1.0%	205	3.3%	288	2.4%	138	10.6%	175	7.2%	313	8.4%	601	3.8%	282	3.2%
皿B(有台皿)	222	4.1%	36	6.8%	135	9.2%	85	2.3%	50	4.8%	270	4.4%	528	4.3%	21	1.6%	58	2.4%	79	2.1%	607	3.8%	414	4.8%
食膳具合計	5,412	84.3%	528	56.1%	1,469	89.7%	3,703	73.8%	1,031	80.9%	6,203	78.2%	12,143	79.4%	1,306	47.7%	2,419	49.6%	3,725	48.9%	15,868	69.3%	8,703	74.2%
貯蔵具	24	2.4%	2	0.5%	9	6.1%	171	13.5%	0		180	11.1%	206	6.8%	7	0.5%	31	1.4%	38	1.1%	244	3.7%	42	1.5%
平鉢(鉢C)	421	42.8%	111	26.8%	83	56.5%	480	37.8%	68	33.5%	631	38.9%	1,163	38.5%	240	18.1%	364	15.9%	604	16.7%	1,767	26.7%	855	29.8%
広口鉢(鉢B)	0		0		0	0.5%	6	0.5%	5	2.5%	11	0.7%	11	0.4%	12	0.9%	0	0.0%	12	0.3%	23	0.3%	12	0.4%
すり鉢(鉢F)	0		0		0		0		0		0		0		0		0	0.0%	0		66	1.0%	47	1.6%
甕形深鉢	0		47	11.4%	0		12	0.9%	7	3.4%	19	1.2%	66	2.2%	0	0.0%	0	0.0%	0		0		0	
壺類	250	25.4%	85	20.5%	3	2.0%	128	10.1%	40	19.7%	171	10.5%	506	16.8%	141	10.7%	206	9.0%	347	9.6%	853	12.9%	479	16.7%
長頸瓶	22	2.2%	58	14.0%	0		28	2.2%	22	10.8%	50	3.1%	130	4.3%	21	1.6%	186	8.1%	207	5.7%	337	5.1%	45	1.6%
双耳瓶(瓶D)	189	19.2%	25	6.0%	40	27.2%	329	25.9%	53	26.1%	422	26.0%	636	21.1%	707	53.4%	1,282	56.1%	1,989	55.1%	2,625	39.6%	1,017	35.5%
小瓶類	5	0.5%	0		0		2	0.2%	0		2	0.1%	7	0.2%	10	0.8%	57	2.5%	67	1.9%	74	1.1%	15	0.4%
平底壺	32	3.3%	43	10.4%	0		29	2.3%	8	3.9%	37	2.3%	112	3.7%							112	1.7%	75	2.6%
壺	41	4.2%	43	10.4%	12	8.2%	86	6.8%	0		98	6.0%	182	6.0%	185	14.0%	160	7.0%	345	9.6%	527	8.0%	281	9.8%
貯蔵具合計	984	15.3%	414	43.9%	147	9.0%	1,271	25.3%	203	15.9%	1,621	20.4%	3,019	19.7%	1,323	48.3%	2,286	46.8%	3,609	47.4%	6,628	28.9%	2,868	24.4%
鍋	3		0		0		0		0		0		3	2.3%	8	7.2%	7	4.0%	15	0.2%	18	4.3%	11	6.9%
煮炊具	24	88.9%	0		22	1.3%	41	100.0%	41	100.0%	104	100.0%	128	97.7%	99	89.2%	168	96.0%	267	93.4%	395	94.7%	145	90.6%
瓶	0		0		0		0		0		0		0		4	3.6%	0		4	1.4%	4	1.0%	4	2.5%
煮炊具合計	27	0.4%	0	0.0%	22	1.3%	41	0.8%	41	3.2%	104	1.3%	131	0.9%	111	4.1%	175	3.6%	286	3.8%	417	1.8%	160	1.4%
総計(/36)	6,423	42.0%	942	6.2%	1,638	10.7%	5,015	32.8%	1,275	8.3%	7,928	51.8%	15,293		2,740	36.0%	4,880	64.0%	7,620		22,913		11,731	

代1表 A地区出土須恵器 器種構成表

体数1)が出土している。個体数の多いコップ形と特殊蓋の内訳は、コップ形では、1-A号窯の床面から1個体、埋土から1個体、焚口前面土坑・灰層から7個体、1-B号窯の埋土から3個体、上層灰原から6個体、これら以外のグリッド区域から2個体で、合計20個体。土坑群や粘土塊だまりからは出土していない。また、特殊蓋では1-A号窯からは出土しておらず、1-B号窯の床から1個体、埋土から3個体、焚口前面土坑・灰層から10個体、これら以外のグリッド区域から2個体、粘土塊だまりから1個体の合計17個体である。

本調査の出土須恵器における含有率は前頁掲載の器種構成表のとおりであるのだが、ただ、これらの数値は純粋なものではないと言える。A地区という全体の区域、西側斜面の窯の生産器種・含有率をより純粋な数値に近づけるため、ここで、昭和58年度調査の含有率データを合計し、総数値を出してみる。昭和58年度調査の灰原では食膳具と貯蔵具が約半数の割合であったものが、本調査分を総合すると食膳具が69.3%、貯蔵具が28.9%、煮炊具が1.8%となった。この数値はA地区全体のものと言えるが、昭和58年度調査の3号窯灰原、や今回の検出している上層灰原、粘土塊集中を1-A号窯1-B号窯に伴わないものとして扱くと、除外した合計数値は以下のとおりになる。食膳具が74.2%、貯蔵具が24.4%、煮炊具が1.4%である。いずれの数値をみても食膳具が主体的と言えよう。

1-A号窯、1-B号窯の器種組成についてだが、1-B号窯は食膳具が半数を超えるものの、貯蔵具が44%と高い数値を示している。ただ、第4章遺構で1-B号窯の規模や構造を述べたように、この窯において貯蔵具を大量に焼成できたとは考えにくく、出土遺物も少なすぎるということもあって、正確な器種組成を提示するのは難しいと言える。一方1-A号窯は、食膳具の含有率が84.3%、貯蔵具が15.3%、煮炊具が0.4%となっており、やはり食膳具が主体となっていたと考えられる。

1. 1-A号窯

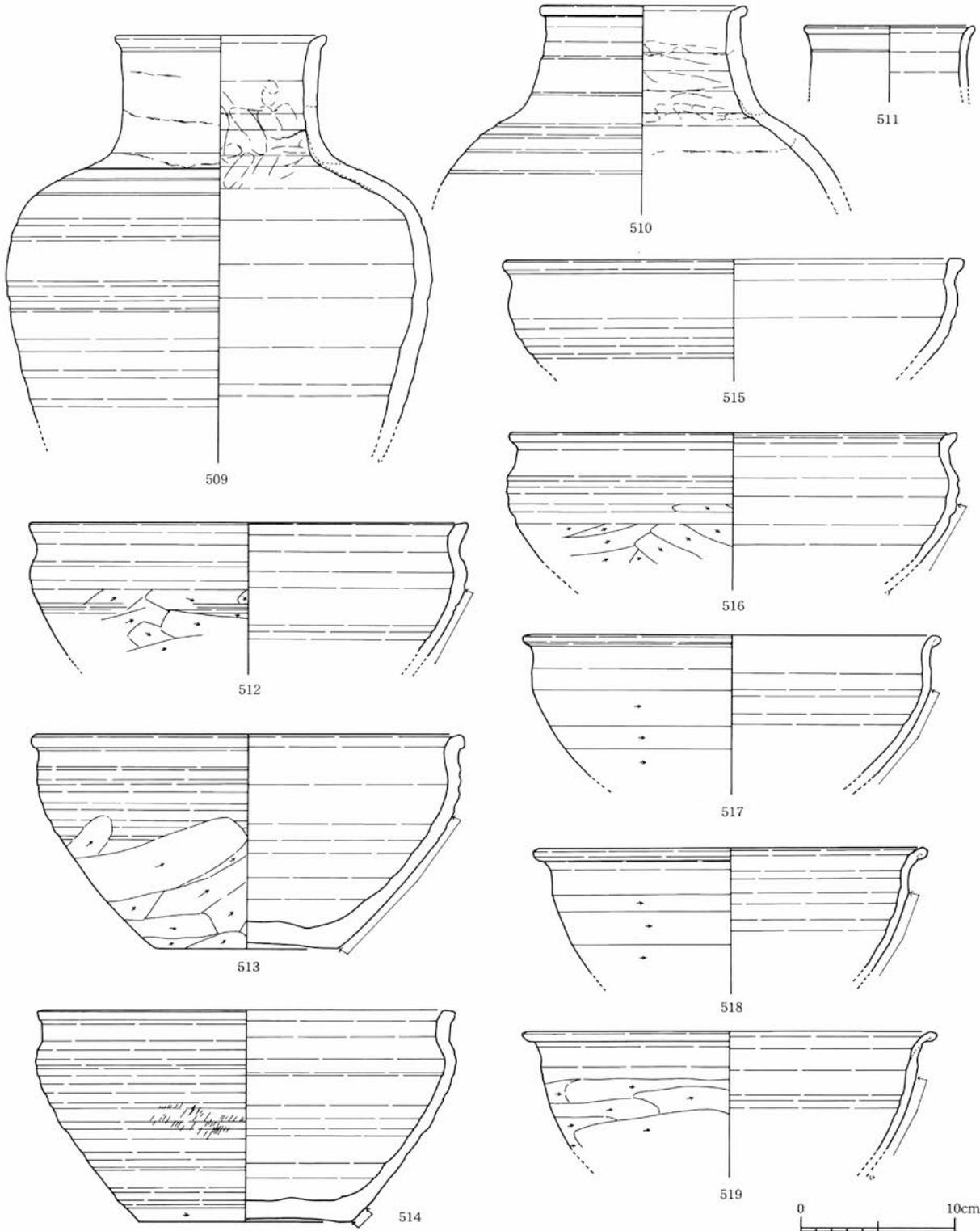
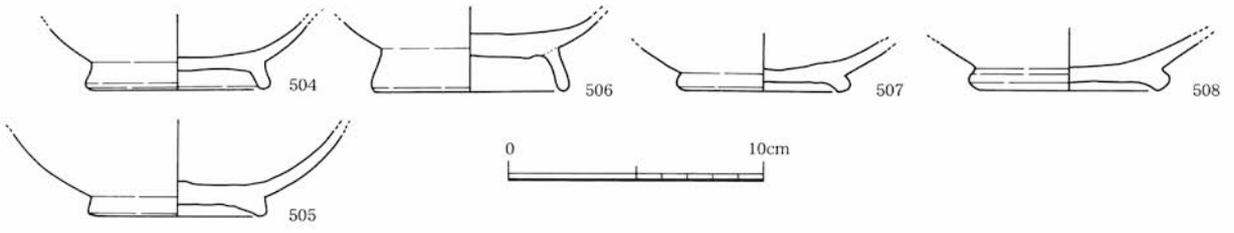
器種組成と概要

1-A号窯に関係するものとしては、床出土、焚口前面土坑②、③と前庭部灰層、これにSK7が含まれると考えているが土坑出土として述べることにする。また、1-A号窯の埋土から出土する遺物は本来別に扱うべき性格のものであるのだが、ここでは1-A号窯関係のものとして扱っている。

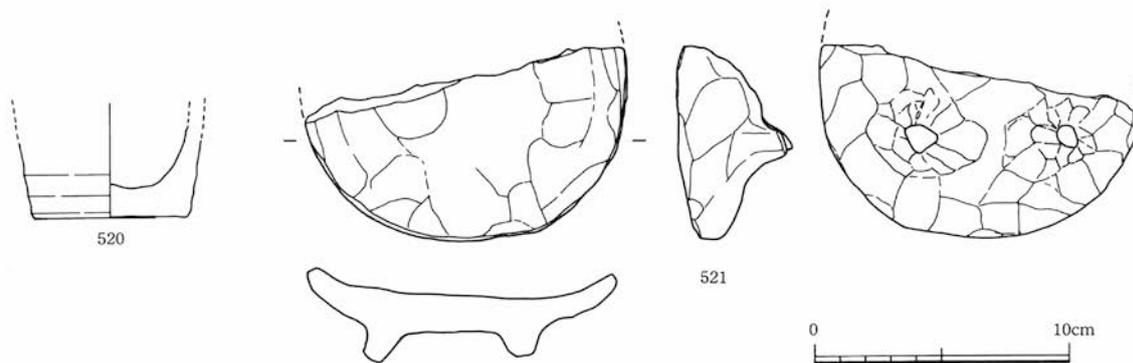
床出土遺物は非常に少なく、全体の3.2%にすぎない。この内殆どが貯蔵具であり、広口鉢と壺類が半分ずつとなっている。圧倒的に出土が多いのは焚口前面土坑や前庭部灰層で、出土全体の含有率は92%である。この内食膳具が中心で88.1%、壺B(有台壺)が55%と半分以上になっている。貯蔵具では、広口鉢、次いで双耳瓶と壺類が多い。煮炊

1-A号窯関係		床		埋土		前面土坑・灰層		1-A号窯全体	
種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 総計	占有率%
食膳具	壺A(無台壺)	1	10.0%	92	46.0%	1,940	37.3%	2,033	37.6%
	壺B(有台壺)	9	90.0%	83	41.5%	2,884	55.4%	2,976	55.0%
	杯A	0		16	8.0%	92	1.8%	108	2.0%
	皿A(無台皿)	0		0		73	1.4%	73	1.3%
	皿B(有台皿)	0		9	4.5%	213	4.1%	222	4.1%
	食膳具合計	10	4.9%	200	63.9%	5,202	88.1%	5,412	84.3%
貯蔵具	平鉢(鉢C)	0		0		24	3.5%	24	2.4%
	広口鉢(鉢B)	97	50.0%	43	38.1%	281	41.5%	421	42.8%
	壺F系	94	48.5%	13	11.5%	89	13.1%	196	19.9%
	無蓋壺	0		4	3.5%	11	1.6%	15	1.5%
	小型壺	3	1.5%	0		36	5.3%	39	4.0%
	長頸瓶(瓶B)	0		11	9.7%	11	1.6%	22	2.2%
	双耳瓶(瓶D)	0		25	22.1%	164	24.2%	189	19.2%
	小瓶	0		0		5	0.7%	5	0.5%
	平底甕	0		17	15.0%	15	2.2%	32	3.3%
	甕	0		0		41	6.1%	41	4.2%
貯蔵具合計	194	95.1%	113	36.1%	677	11.5%	984	15.3%	
煮炊具	鍋	0		0		3	11.1%	3	11.1%
	長胴甕	0		0		24	88.9%	24	88.9%
	煮炊具合計	0		0		27	0.5%	27	0.4%
合計(／36)		204	3.2%	313	4.9%	5,906	92.0%	6,423	

第12表 1-A号窯関係出土須恵器器種組成表(口縁部計測値合計 6,243/36)



第77图 1-A号窯 床出土 須恵器 (上段S=1/3, 下段S=1/4)



第78図 1-A号窯 床出土 特殊遺物 (S=1/3)

具は含有率が0.4%にすぎないが、その殆どは長胴甕である。これらの含有率は全体的な比較にも当てはまる。この他に、特殊器種として窯の床面からコップ形、風字硯、埋土からはコップ形、焚口前面土坑と前庭部灰層からはコップ形、特殊蓋、陶錘、紡錘車が出土している。

それでは、出土地点別に器種の特徴を述べてゆく。

(1) 1-A号窯 床出土

堦B (有台堦) (504~508)

底部破片が出土するのみで、台の高いタイプや台接着時に内面側のみ撫でつけるタイプが見られる。

壺F系 (509~511)

壺Fとは言い切れない器形であるが、類するものと考えている。狭口長頸で、頸部境が不明瞭、口縁から肩まで緩やかに屈曲するものである。口縁端部を丸く仕上げるもの(511)と面をもつもの(509,510)が認められる。頸部内面に頸部接着の付け足し粘土が認められ、口頸部後付けがされていると考えられる。この壺は、昭和58年度灰原調査で報告されている3号灰原出土の平底無蓋短頸壺と同類のものである。

広口鉢 (鉢B) (512~519)

括れ鉢と呼ばれるものである。器肉が厚めで口縁端部に面をもつもの、同じタイプであるが胴がやや張り気味のもの。もう1つは、前述タイプに比べ器肉が薄めで、口縁端部では粘土を外面側に巻き込んで丸く仕上げているものである。これらの鉢は頸部が短く、括れも弱いものとなっている。

コップ形 (520)

底径が6.0cmで、器肉は厚く、立ち上がりが直立気味の、非常に小型のコップ形である。外面には糸切り痕が認められる。

風字硯 (521)

硯尻の破片である。硯面、硯背面ともヘラ面取りが施され、側面は削られている。2本の脚が認められるが、脚囲に粘土のつまみ上げ、脚底は削られている。破片割れ口に釉溜まりが認められ、焼成中に割れたものと思われる。

(2) 1-A号窯焚口前面土坑 出土

堦A (無台堦) (522~541)

基本として、糸切り痕を残し、立ち上がりから体部にかけ緩やかに口縁端部まで至る器形が中心である。それでも様々なタイプが認められ、以下のようにタイプ別できる。また、底部立ち上がりにケズリを伴うものも定量認められ、ケズリを伴うものだけにヘラ記号が施されているものがある。ヘラ記号は底部外面で「-」である。

器形では、底部から口縁端部まで一貫して内湾するタイプ(531,536,541)。底部から口縁端部まで一貫して内湾するが口縁端部がやや外反するタイプ(528,529)。底部から口縁端部まで体部外傾するタイプ(538~540)。底部からやや外反気味に立ち上がるが内湾して口縁端部まで緩やかに至るタイプ(522~530)。この中には端部付近で僅かな屈曲を呈す(523,526)ものがある。また、底部に段をもつタイプ(532~534)。これは糸切り段階において生じるものと考えられ、このようなタイプは総じて底部器肉が厚い。

堿B（有台堿）（543～557）

法量は、通常のもの、大型のものがある。通常で口径13.0～14.0cmと、大型で16.0cm前後(551,556,557)の2法量に分類できる。両法量で底部立ち上がりにケズリを伴うものが一定量認められる。

基本として糸切りによる底部切り離し後、台を少量の粘土で接着させているが、接点周辺に指ナデの痕跡が残っている。粘土がはみ出しとして段状に残っているものが多いが、粘土はみ出しが残らないもの(546,557)もみられる。また、底面全体を撫でているもの、台の底部に工具ナデを伴うもの、台の側底面全体を工具で撫でているもの(554)もある。

器形では底部立ち上がりから口縁端部まで外傾するもの(543,553～555)、やや内湾気味で口縁端部までなだらかに至るもの(544～546)、内湾し口縁端部で更に内傾を呈すもの(556)がある。

坏A（558～561）

器形はやや丸みをもった底部から指押さえをもって体部へ立ち上がり、器肉はやや厚めで、底部は小型を呈す。底部は回転ヘラ切りによって切り離されている。堿・皿が瓷器系器種であるのに対し、この器種は須恵器系器種であるが、南加賀窯跡群の系譜以外の器形(望月1993)とされているものである。

皿A（無台皿）（562）

口径11.0cm器高2.6cm、底径4.8cmを測るもので、器肉は非常に薄い小型のものである。

皿B（有台皿）（563～567）

皿Bは、しっかりと踏ん張る台をもつもので、内湾して立ち上がるタイプと、若干内湾しつつも外傾し口縁端部で更に反り返り、端部がぼつりとした丸みを呈すタイプとに分類できる。

コップ形（568,569）

口径9.0cm、器高7.5を測る。底部は糸切りの切り離しがなされている。

円盤形土製品・陶錘（570,571）

用途不明の土製品(570)である。厚さ1.4cm、中央に穿孔があり、糸は1.1cmを測る。還元に至っておらず、土師質である。焼成失敗の可能性もあると考え記載している。紡錘車であろうか。陶錘(571)は長さ7.5cm、巾2.8cm、孔径0.9cmを測る管状土錘である。片側面に釉が付着、もう片面は生焼け状態である。

小型壺（572）

平底の小甕とも考えられる器形をもつもので、底部立ち上がりから内湾して緩やかに頸部に至り、若干外傾するものの直立気味の口頸部を伴い、口縁端部には面をもつものである。器肉は底部は厚めだが、基本的に薄く、胴部には8本の沈線区画に、カキメが施され、底部からの立ち上がりにケズリを伴う。底部切り離しは糸切りで、その後の調整は施されていない。全体的に非常に丁寧な作りをしている。このような器種は、これまでの南加賀窯跡群にはない特異な器種である。

壺F系（573,574）

頸部境がしっかりするタイプで口頸部が長いことが特徴である。口頸部は内傾気味に立ち上がり口縁端部が外反し端部に面をもつもの(573)と、そのまま窄まる口縁端部をもつもの(574)である。

広口鉢（鉢C）（575～582）

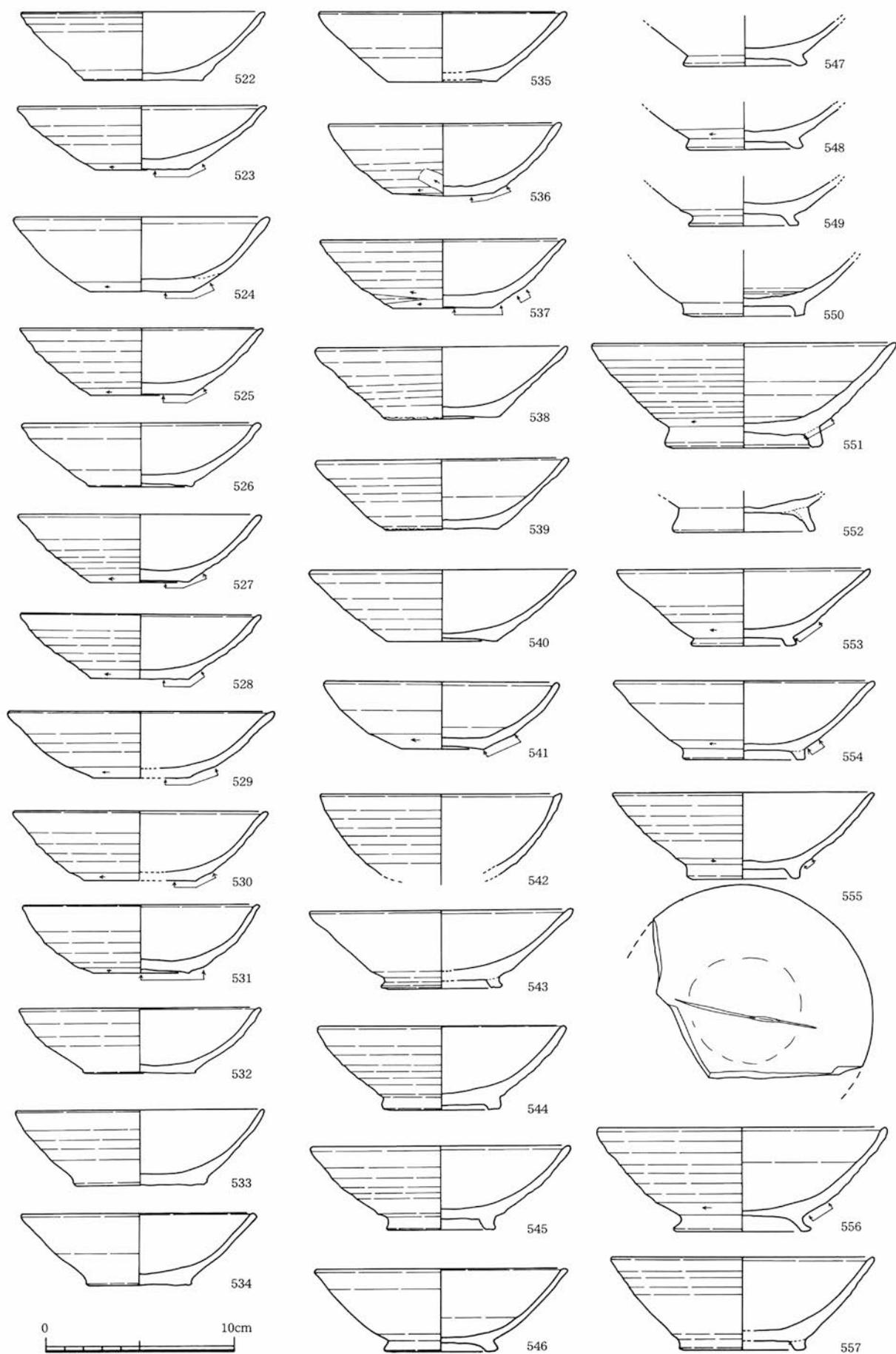
広口鉢は口径14.0cm前後の小型のもの、20.0cm前後の中型、28.0cm前後の大型のものがある。器形は、頸部が明瞭で口頸部が直立に立ち上がり、端部に面を呈すもの(575,576)、同じ口頸部をもつが端部が外側に突出するもの(578)、器肉が厚く頸部境の明瞭さに欠け、口縁端部で外反し端部に面をもつもの(579～581)、頸部がなく胴が張り気味で口縁端部は外側に突出するもの(582)がある。

甑形深鉢（583）

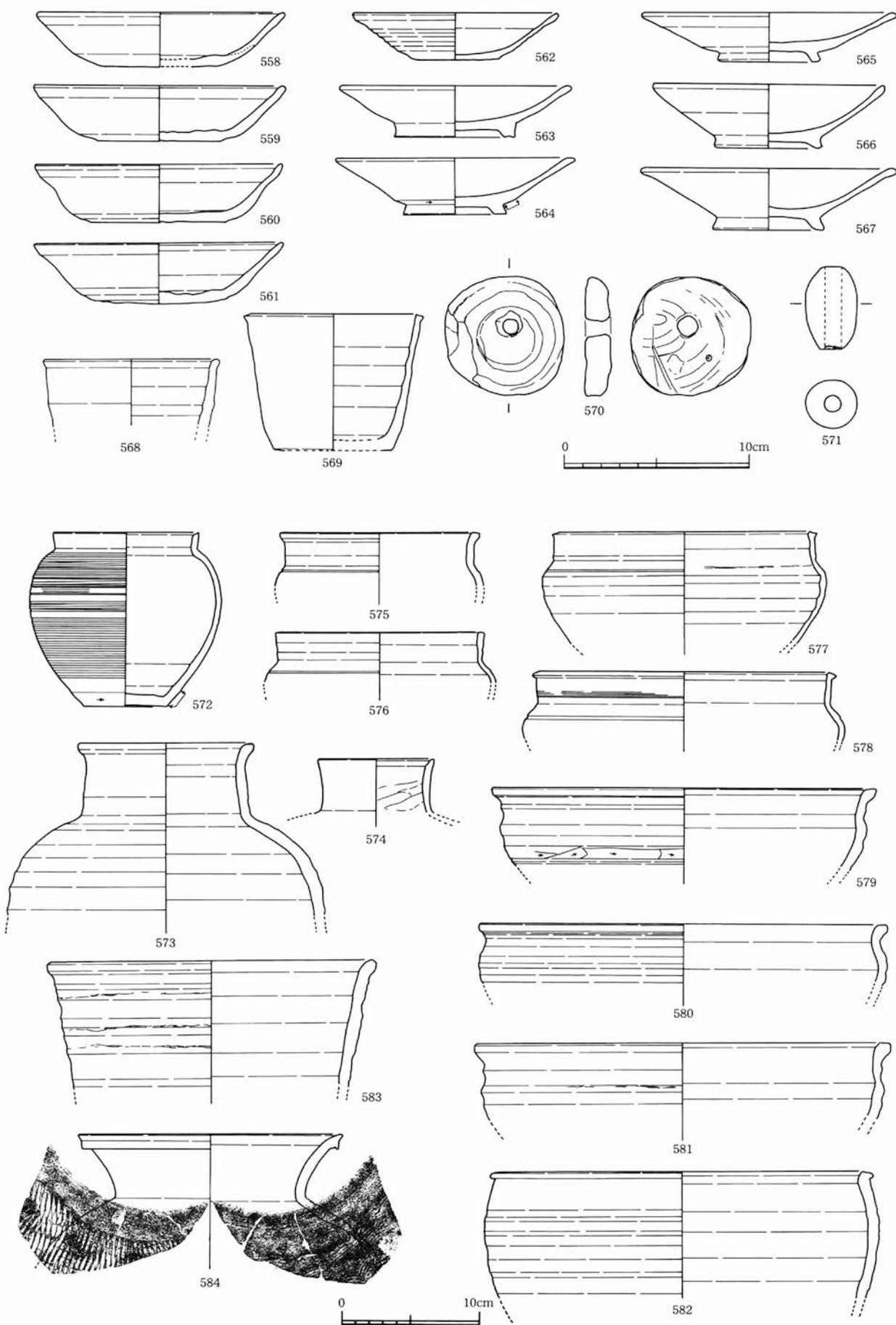
胴部に粘土紐が残り、ヒダ状の表面を呈し、口縁端部は外反して丸く仕上げるものである。別の区域から底部まで復元可能であったものが確認されている。この器種は、甑とも深鉢とも言い難く、昭和58年度灰原調査時には検出されていない初めて確認された例である。

甕（584）

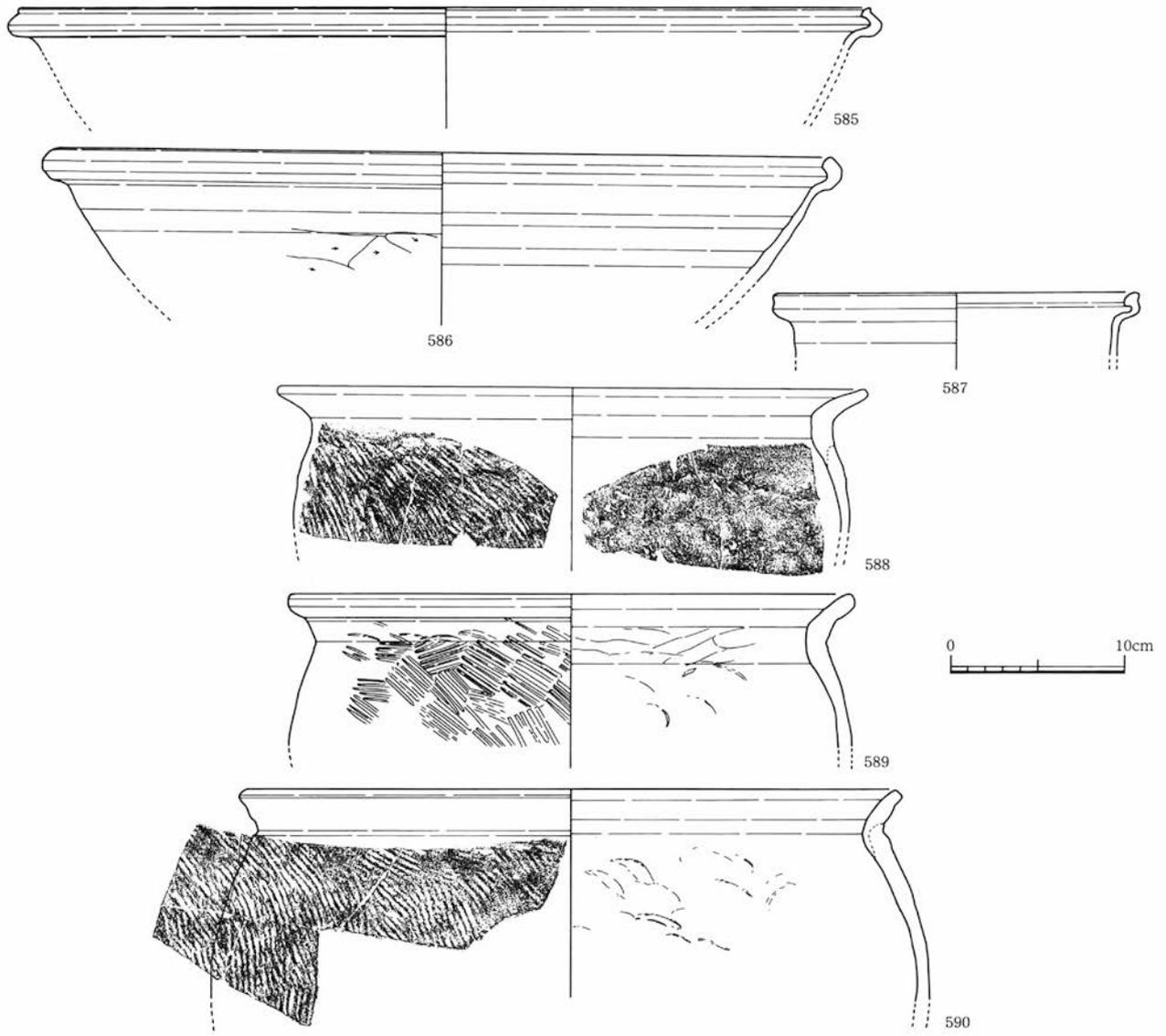
口頸部が長く外反し、端部で下に突出して外側に面をもつもので、昭和58年灰原調査での報告では甕Ⅱ類のC類に分類されている器種(1993望月)である。外面は平行線文タタキ(Ha類)、内面は同心円文当て具(SD類)が認められる。



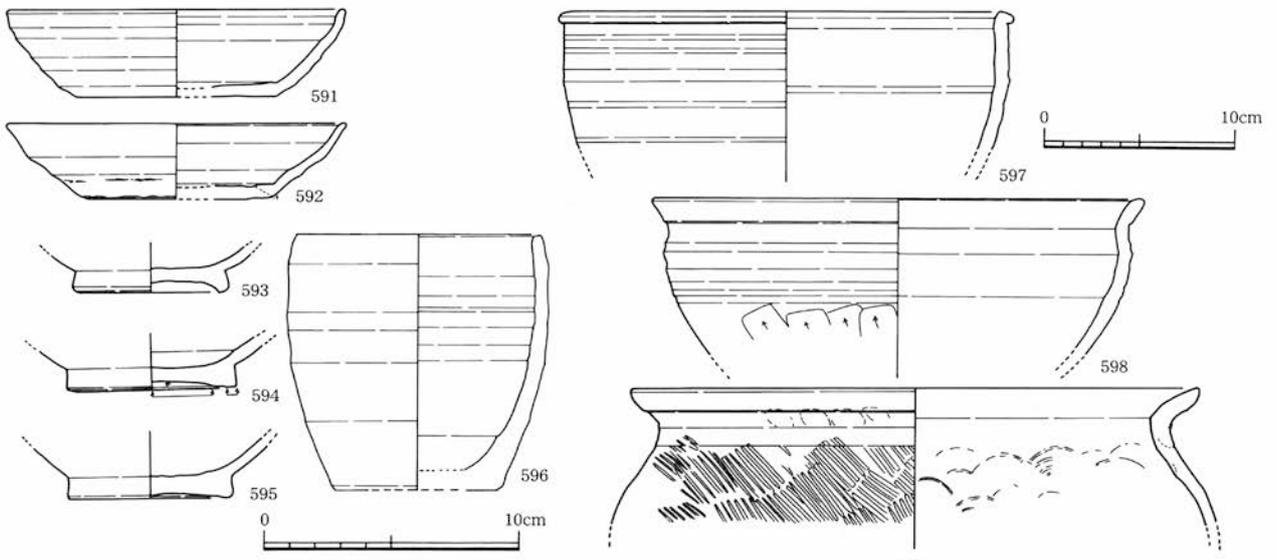
第79图 1-A号窯 焚口前面土坑・灰層出土 須惠器(1) (S=1/3)



第80图 1-A号窯 焚口前面土坑·灰層出土 須惠器(2) (上段S=1/3, 下段S=1/4)



第81图 1-A号窯 焚口前面土坑・灰層出土 須恵器(3) (S=1/4)



第82图 1-A号窯 埋土出土 須恵器 (左S=1/3, 右S=1/4)

鍋 (585,586)

口縁端部が外屈する鍋で、ロクロ成形外面胴部にケズリを伴っている(586)。器肉は薄い。

長胴甕 (587)

実測可能であったのはこの1点である。口縁端部が外屈し折り返しが直立するタイプである。

平底甕 (588～590)

口径が30cm以上のものである (588～590)。昭和58年度灰原調査報告の分類、甕Ⅱ類B-2類(1993望月)に属するものである。口縁が「くの字」に屈曲し、端面に至ると窄まり、やや面を呈すものである。口頸部後作り成形を確認している(588,590)。

(3) 1-A号窯埋土 出土 (591～600)

床面出土や焚口前面土坑、灰層で図化できなかった器種のみ掲載している。

坏A(591)では口縁端部が若干内湾するタイプのもので器高が高いものである。(592)は体部がロクロヒダによって屈曲し、胴部に粘土紐痕跡を残すものである。坏Bでは、底部破片であるが台接着時に粘土を多く用いたようで、これが底面全体に及んでいるために、ベタ高台状を呈すタイプ<④類>が認められる。(594)は底部にケズリを施したために窪みができており、(595)はナデ調整のみでベタ高台化しているものである。(596)のコップ形は、胴が張り気味で全体に内湾し、口縁端部に若干の面をもつものである。

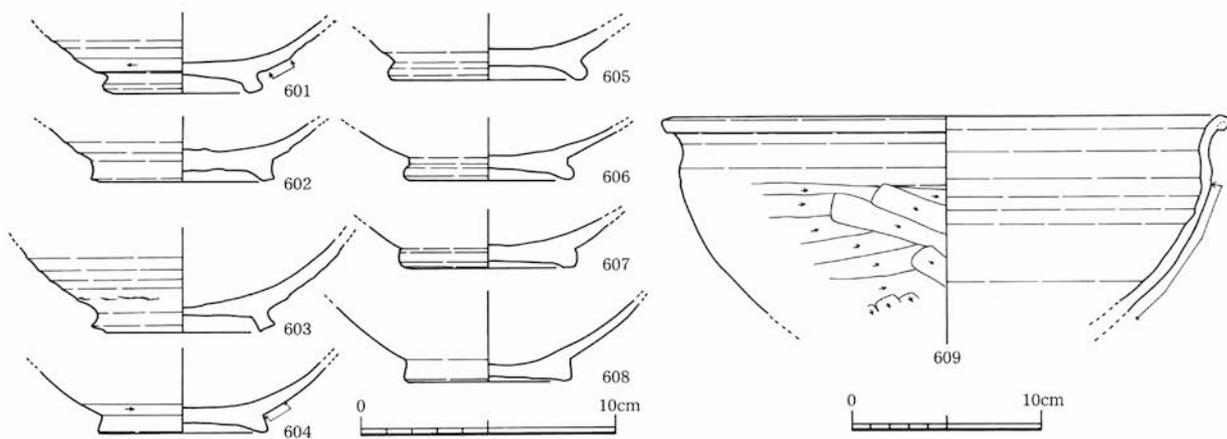
2. 1-B号窯

器種組成と概要

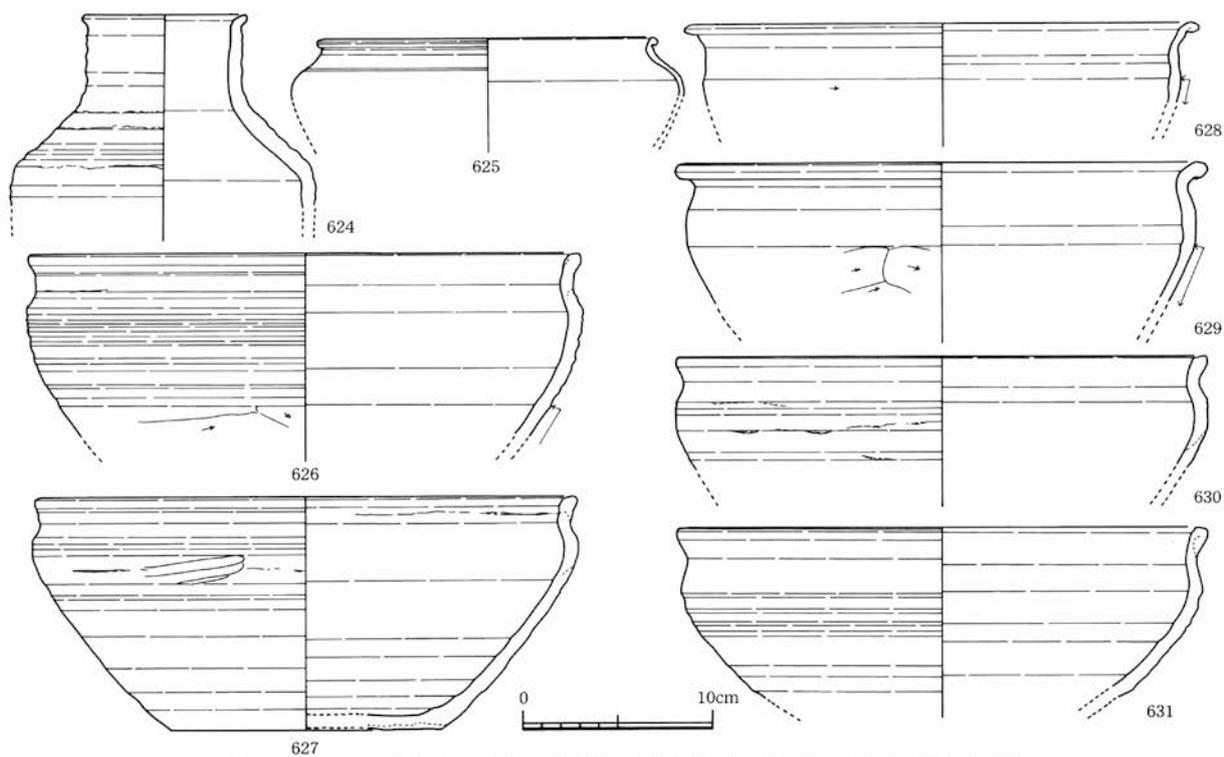
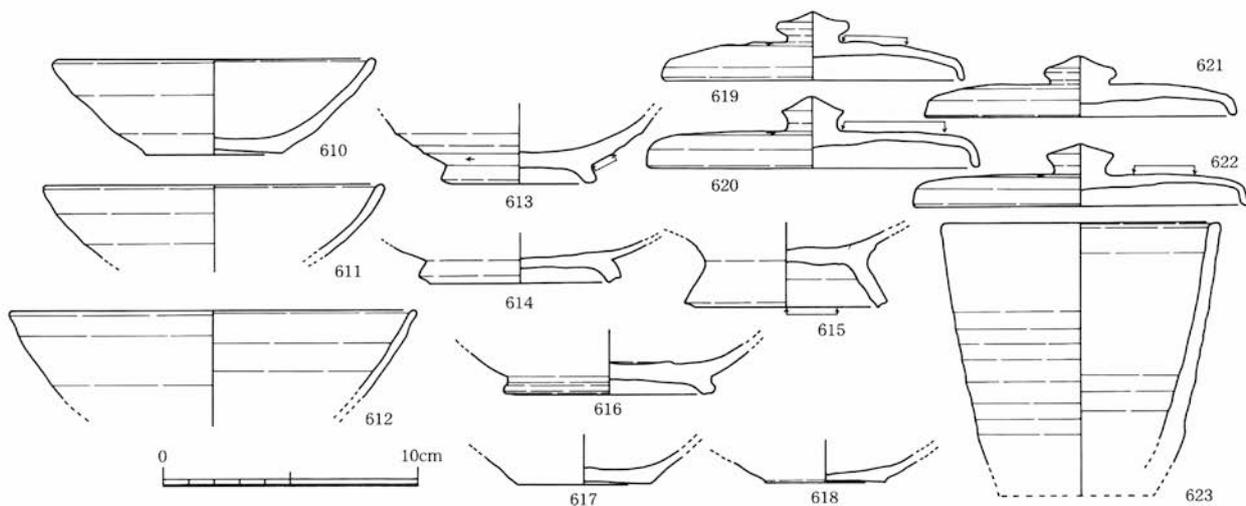
1-B号窯関係としては、床出土、焚口前面土坑と前庭部灰層である。また、1-A号窯と同様に1-B号窯の埋土から出土する遺物は本来別に扱うべき性格のものであるのだが、ここでは1-B号窯関係のものとして扱っている。1-B号窯出土遺物は口縁部計測合計値で942/36、1-A号窯の口縁部計測値6,423/36に比べれば2割強しかなく、いかに出土遺物が少ないことがおわかりと思う。よって、1-B号窯としての器種組成をまとめることは、非常に難しい。ただ、今回の調査の結果としての出土器種ということで報告してゆきたいと思う。床出土遺物は非常に少なく、全体の7.2%にすぎない。この内殆どが食膳具であり、坏Bが含有率80%を占める。貯蔵具は床全体で19.1%含有率、殆どが広口鉢である。やはり出土が最も多いのは焚口前面土坑や前庭部灰層で、出土全体の含有率は75.8%である。ただ、食膳具が全体の60%、このうち坏Bが70%を占める。貯蔵具は40%と多く、平底甕、双耳瓶、甕類が主体的である。下記に示した器種組成表に提示された器種以外の出土遺物としては、床面からコップ形・床・埋土・焚口前面土坑及び前庭部灰層から特殊蓋、埋土から陶錘が出土している。特殊蓋は1-A号窯関係から出土しておらず、1-B号窯関係でのみ出土している。それでは、個別に器種の特徴を述べてゆく。

1-B号窯関係		床		埋土		焚口前面土坑・灰層		1-B号窯全体	
種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 総計	占有率%
食膳具	坏A (無台坏)	6	10.9%	5	10.2%	93	21.9%	104	19.7%
	坏B (有台坏)	44	80.0%	34	69.4%	300	70.8%	378	71.6%
	皿A (無台皿)	5	9.1%	5	10.2%	0		10	1.9%
	皿B (有台皿)	0		5	10.2%	31	7.3%	36	6.8%
	食膳具合計	55	80.9%	49	30.6%	424	59.4%	528	56.1%
貯蔵具	平鉢 (鉢C)	0		0		2	0.7%	2	0.5%
	広口鉢 (鉢B)	11	84.6%	11	9.9%	89	30.7%	111	26.8%
	瓶形深鉢	0		23	20.7%	24	8.3%	47	11.4%
	壺A	0		0	0.0%	5	1.7%	5	1.2%
	壺F系			68	42.5%	12	1.7%	80	8.5%
	長頸瓶 (瓶B)	0		2	1.8%	56	7.8%	58	14.0%
	双耳瓶 (瓶D)	0		0		25	8.6%	25	6.0%
	平底甕	0		7	6.3%	36	12.4%	43	10.4%
	甕	2	15.4%	0		41	14.1%	43	10.4%
貯蔵具合計	13	19.1%	111	69.4%	290	40.6%	414	43.9%	
合計 (／36)		68	7.2%	160	17.0%	714	75.8%	942	

第13表 1-B号窯関係出土須恵器 器種構成表 (口縁部計測値合計942/36)



第83图 1-B号窯 床出土 須惠器 (左S=1/3, 右S=1/4)



第84图 1-B号窯 焚口前面土坑出土 須惠器(1) (上段S=1/3, 下段S=1/4)

(1) 1-B号窯床 出土 (601~609)

図化できたものは少ない。埴B (有台埴) では、底部破片のみ復元可能であった。台がはっきりして面をしっかりと成形するタイプ〈①-a類〉(601~603)、台接着時の指ナデにより内側のみ明瞭さに欠けるタイプ〈②類〉(604, 605)、ベタ高台に近い形状を呈するタイプ〈④類〉(606~608)が見られる。この④類は中世でよく見られるベタ高台を意識しているようなものであるが、高台としては薄く、径も広い。広口鉢(鉢C)(609)は、口径26.6cmの大型に属するもので、肩の張りが弱く、口縁端部で外側に粘土を巻き込み突出させて成形している。胴部にはケズリが施されている。

(2) 1-B号窯焚口前面土坑 出土

埴B (有台埴) (613~616)

やはり底部破片のみの図化である。台のしっかり付くタイプで台高が高いタイプ〈①-c類〉(615)、台がしっかり付き径の大きなタイプ〈①-b類〉(616)がある。

皿A (無台皿) (617,618)

破片しか出土していないが、底径が非常に小さく、器高が薄いもので、望月氏によると南加賀窯跡群の須恵器最終末期(田嶋編年Ⅶi)と言われているものに近いものだという事である。

特殊蓋 (619~622)

コップ形の蓋の可能性があるとされる蓋である。1-B号窯の焚口前面土坑から定量出土しているものである。径は12.0cm~13.0cmで宝珠形のつまみが付く。ただ、望月氏の教示によるとこのような宝珠形自体が、この時期にないものであり、コップ型の蓋としては口径も大きすぎる、特異なものと言える。器肉は非常に薄く、天井にケズリを伴うものと、ケズリを伴ったであろうがその後ナデ調整を施してあるものがある。焚口前面土坑並びに灰層からは10個体の特殊蓋が出土している。

壺F系 (624)

口径部が長く直立に立ち上がり、頸部転換点が明瞭でないタイプである。口縁端部が外側に若干突出して面を成形し、ロクロヒダによつての器面の凹凸、粘土紐痕も顕著に見られ、雑な印象である。

広口鉢(鉢C) (625~631)

(625)は、器肉が非常に薄く、口縁端部が外側に突出し肩の張るタイプのものである。これ以外は大型の部類に属するものである。(628)は、大型品だが器肉が薄く口縁端部で粘土を外側に巻き込みながら口縁成形している。(629)は口縁で屈曲し端部が突出する。この他は端部に面をもつタイプであるが、(631)は粘土を外側に折り込んで口縁端部成形を行っている。

平底甕 (632,633)

実測可能であったのは2点。口頸部が「くの字」に曲がり端部が若干外側に突出して丸く形成しているものである。底部は平底に形成されるもので、昭和58年度灰原調査報告の甕Ⅱ類B-2類(1993望月)に相応する。(632)では外面平行線文タタキ(He類)、内面の上面に同心円文当て具(Da類)後すり消している。胴部成形はしっかり施されているのに対し、口頸部は内外とも粗雑さが目立つ。

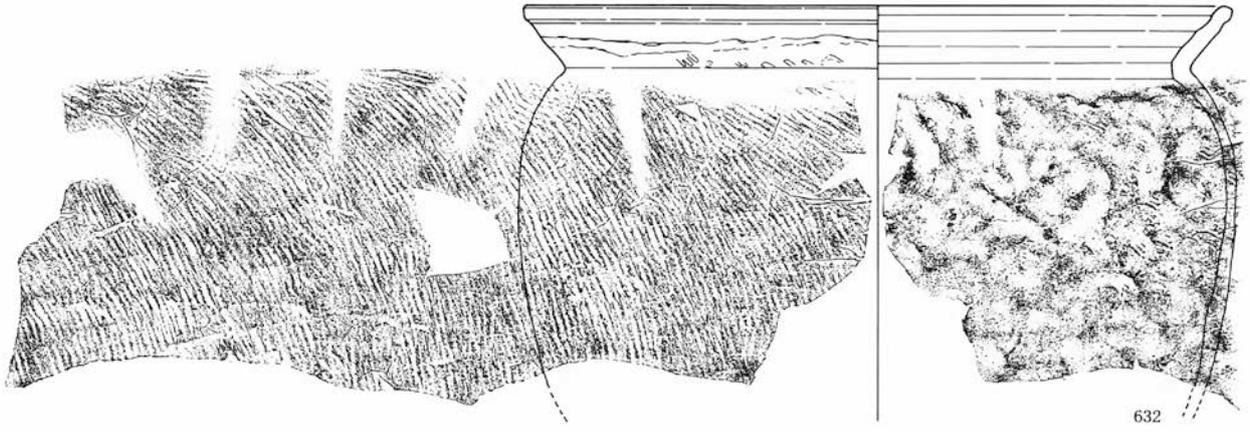
甕形深鉢 (634,635)

底部平底で緩やかに外傾して立ち上がりそのまま頸部転換点で外反して口縁端部をやや突出させる器形である。(634)は、胴部外面に8条の粘土紐痕、成形後に叩き締めを行うが、外面平行線文タタキ(He類)、内面同心円文当て具(SD類)下半はランダムな指押さえ又は指ナデを行っている。口縁端部は内面に粘土巻き込みで成形している。

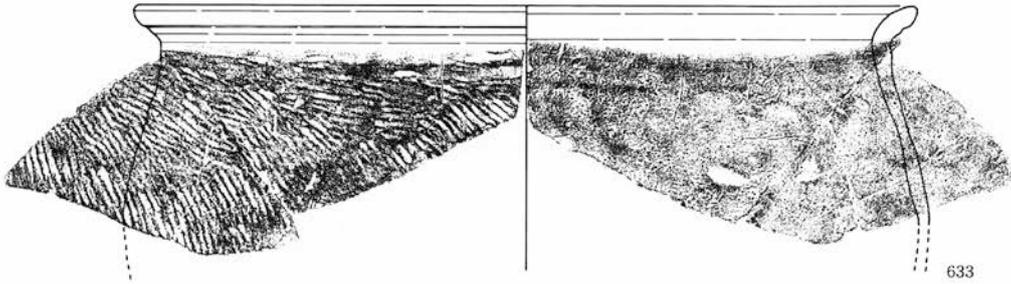
(635)の叩き締めは、外面平行線文タタキ(He類)のち底部立ち上りを全周指押さえ、内面同心円文当て具(Da類)のちナデ消されている。底部は内側に2cmの範囲で工具による粘土押さえがある。底部外面には径10.0cm程の焼台痕と火ダスキ痕が確認でき、焼台を使用して正位で焼成されている。1-A号窯の焚口前面土坑出土のもの同様に、南加賀窯跡群の中ではこれまで見つからないタイプ、新器種である。

(3) 1-B号窯埋土 出土 (636~652)

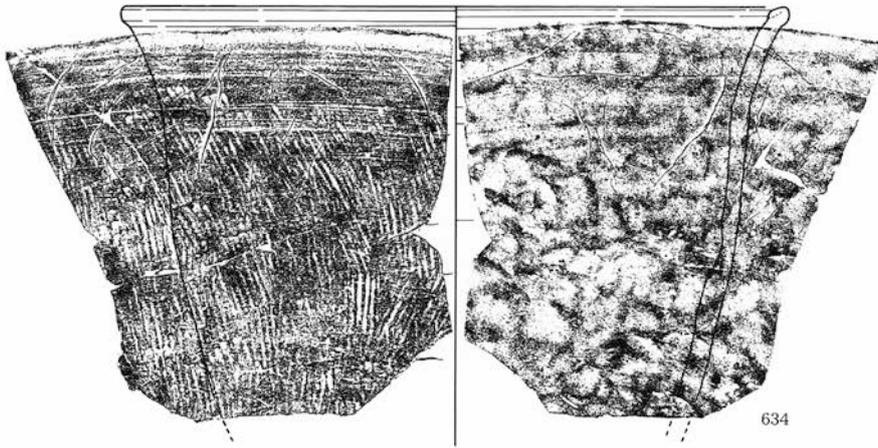
埴B (有台埴) では、台接着時の指ナデにより内側のみ明瞭さに欠けるタイプ〈②類〉(638)、ベタ高台状を呈すタイプ〈④類〉(639)のタイプが見られる。また、(640)は、埴の可能性もあるが、口縁端部が肥沃し、他の埴類と違



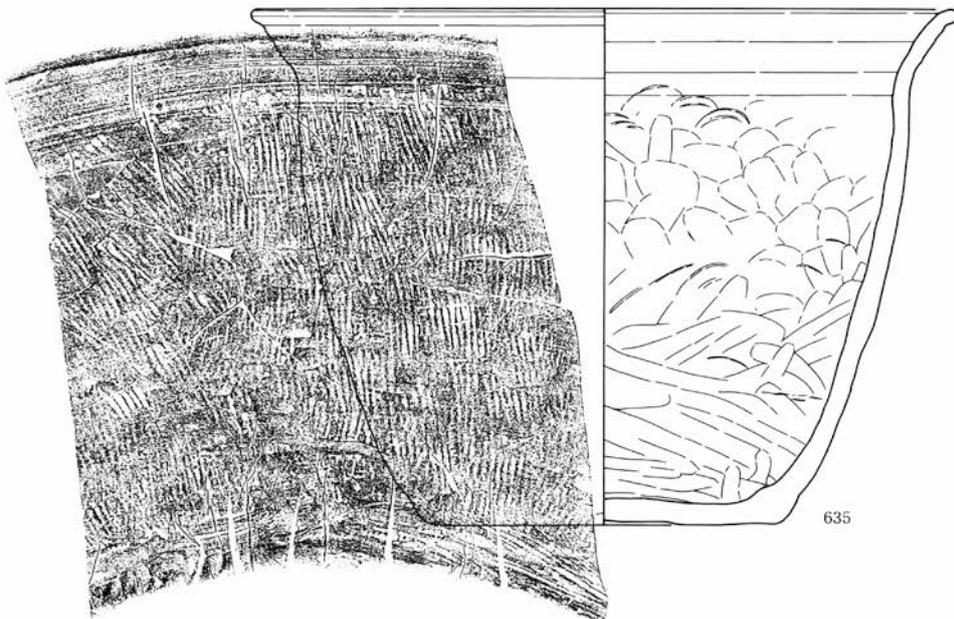
632



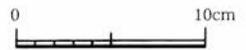
633



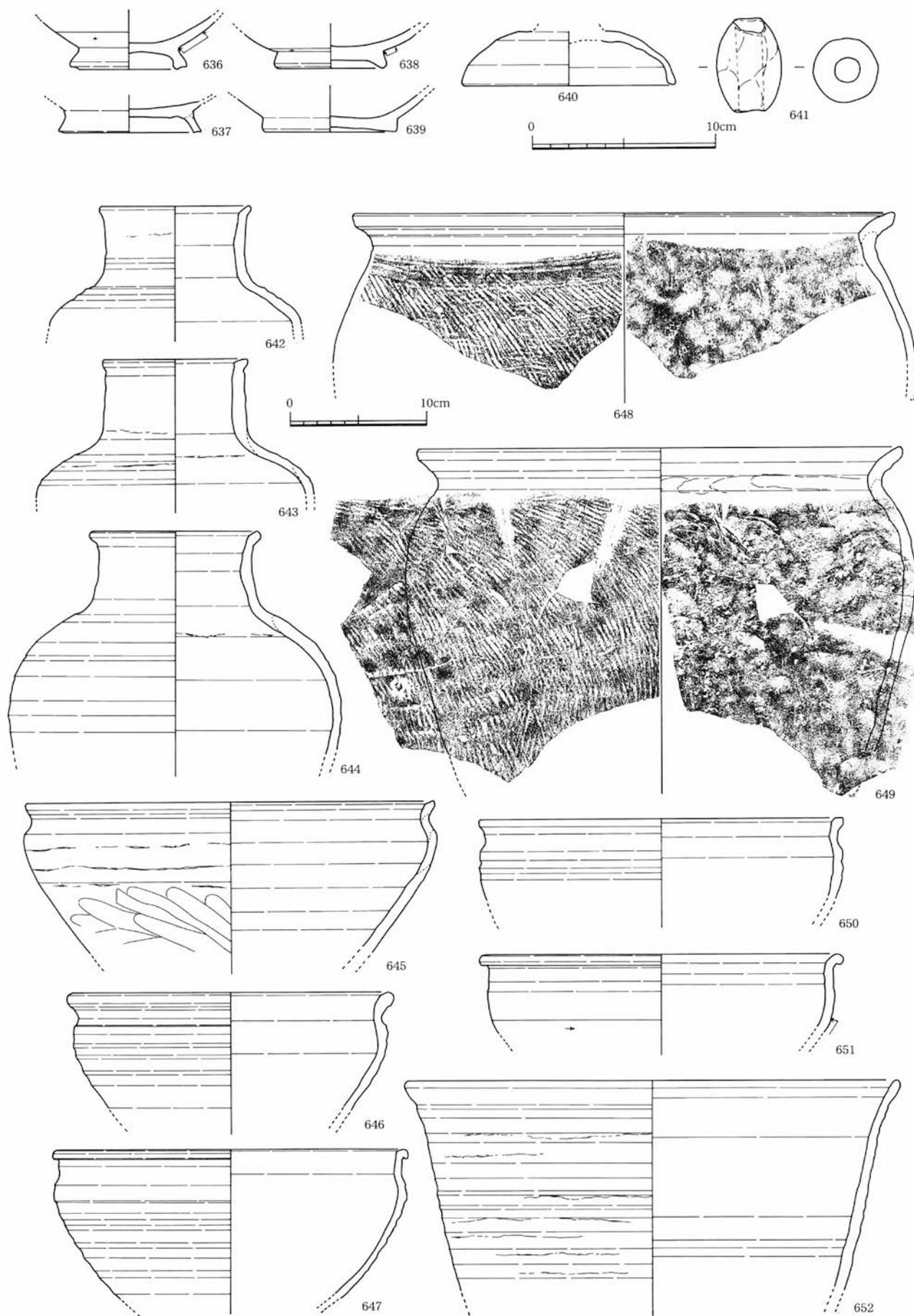
634



635



第85図 1-B号窯 焚口前面土坑出土 須恵器(2) (S=1/4)



第86图 1-B号窯 埋土出土遺物 須恵器 (上段S=1/3, 下段S=1/4)

いがみられたことから、特殊蓋としている。ただ、上層からの出土でもあり、実際のところ不明である。(641)の陶鍾は、管状陶鍾で、縦に粘土繋ぎ痕と粘土を握った痕跡が見られる。

(648,649)の甑形深鉢では、口頸部後付けと考えられる痕跡を確認している。(649)では頸部内面に指ナデがみられ、胴部乾燥後、頸部接着時に付けられた調整ではないかと考えている。叩き締めでは両者とも外面に平行線文タタキ(He類)が見られる。内面は(648)は当て具痕跡は刷り消されているが、(649)では外面平行線文タタキ(He類)、内面の上面に同心円文当て具(Da類)のち刷り消し、下半で工具ナデが認められる。(652)の甑形深鉢は、口縁の屈曲が僅かで、口径35.6cmを測る大型のものである。ロクロヒダが著しく粘土紐痕が全体に認められるが、叩き占めは行っていない。非常に雑な作りをしている。

3. 土坑出土

器種組成と概要

A地区では7基の土坑が検出されているが、それぞれの土坑出土遺物は器種構成表のとおりである。比較してみると、SK5で全体の32%、SK6で39%と含有率が高い。また、SK4は焼台が中心に出土するもので、須恵器の含有率が非常に少ない。ただ、口縁部が1点であるがために算出された数値であり、塚Bの底部が1点、塚Aの底部が5点出土している。

大別して食膳具、貯蔵具、煮炊具のうち、食膳具がSK1、SK5～7で92～96%、SK2で86.5%を占め主体となっている。SK3では、食膳具が48%、貯蔵具が38%で貯蔵具では広口鉢が多い。煮炊具は含有率が全体の1.4%に過ぎず、長胴甕に限られている。特殊なものとして、SK5底面から刀子1個体、SK7から特殊蓋2個体が出土している。以下詳細について、器形などは基本的に1-A号窯、1-B号窯関連で述べたとおりであるので、特筆すべきことだけを述べる。

A地区SK		SK1		SK2		SK3		SK4		SK5		SK6		SK7		A地区SK全体	
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測総計	占有率%
食膳具	塚A(無台塚)	0		30	46.9%	73	100.0%	12	100.0%	288	58.2%	208	35.4%	32	16.3%	631	43.3%
	塚B(有台塚)	0		13	20.3%	0		0		125	25.3%	337	57.3%	67	34.2%	542	37.2%
	坏A	41	100.0%	0		0		0		20	4.0%	27	4.6%	0		88	6.0%
	皿A(無台塚)	0		7	10.9%	0		0		22	4.4%	0		32	16.3%	61	4.2%
	皿B(有台塚)	0		14	21.9%	0		0		40	8.1%	16	2.7%	65	33.2%	135	9.3%
	食膳具合計	41	93.2%	64	86.5%	73	48.3%	12	100.0%	495	96.3%	588	92.5%	196	94.7%	1,457	89.6%
貯蔵具	平鉢(鉢C)	0		0		9	15.5%	0		0		0		0		9	6.1%
	広口鉢(鉢B)	0		3	30.0%	43	74.1%	0		16	84.2%	14	29.2%	7	77.8%	83	56.5%
	壺類	3	100.0%	0		0		0		0		0		0		3	2.0%
	双耳瓶(瓶D)	0		1	10.0%	0	0.0%	0		3	15.8%	34	70.8%	2	22.2%	40	27.2%
	甕類	0		6	60.0%	6	10.3%	0		0		0		0		12	8.2%
	貯蔵具合計	3	6.8%	10	13.5%	58	38.4%	0		19	3.7%	48	7.5%	9	4.3%	147	9.0%
煮炊具	長胴甕	0		0		20		0		0		0		2		22	100.0%
	煮炊具合計	0		0		20	13.2%	0		0		0		2	1.0%	22	1.4%
合計(／36)		44	2.7%	74	4.6%	151	9.3%	12	0.7%	514	31.6%	636	39.1%	207	12.7%	1,626	

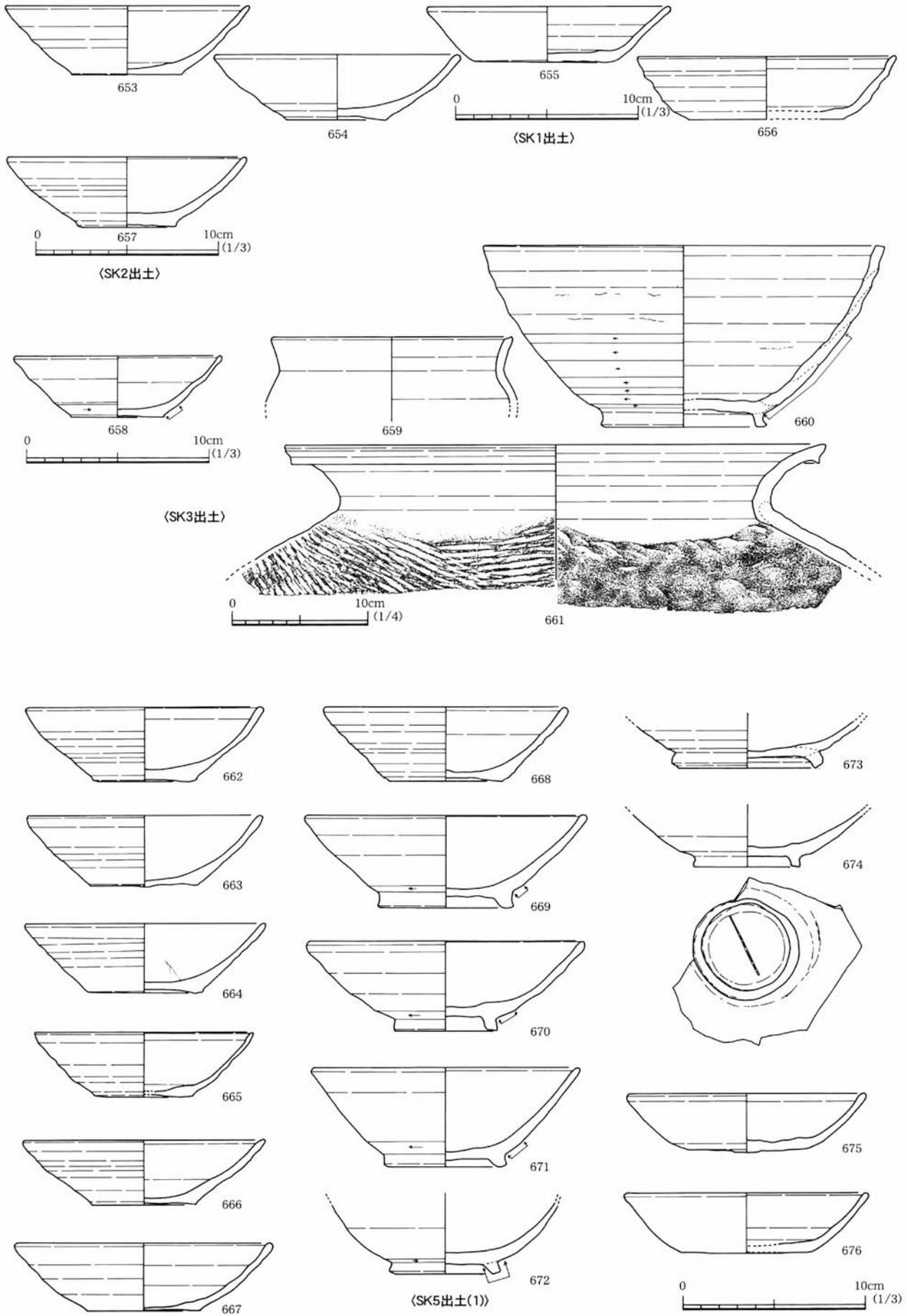
第14表 A地区SK出土須恵器器種構成表(口縁部計測値合計 1,626/36)

坏A

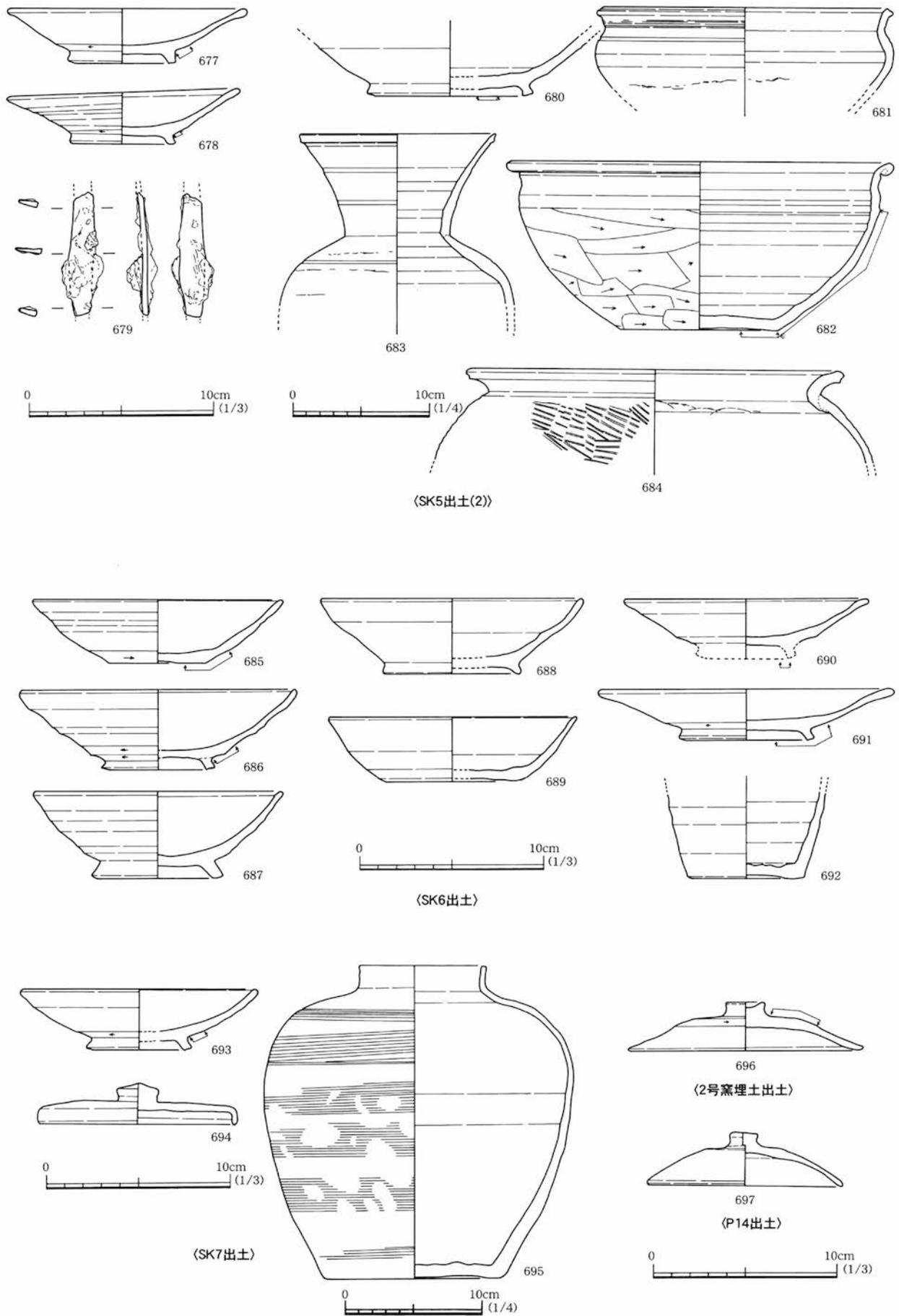
SK1出土の坏A(656)は、ロクロヒダが顕著で、これによるものと考えられる内面側にやや屈曲点をもつものである。

塚A(無台塚)

SK3出土の塚A(658)は器肉も薄く、口径11.3cm、器高3.4cm、底径5.0cmの小さなものである。底部にケズリを伴い、体部がやや外側に屈曲する。また、SK5出土の(667)は、口径が13.7cm、底径が6.2cmとやや大きめ、SK5出土のものは底径が6cmを超えるものが多い。



第87图 A地区 SK出土 須恵器 (S=1/4, 中段右S=1/4)



第88図 A地区 SK・その他出土 須恵器・鉄製品 (S=1/3, 上段右・下段中央S=1/4)

碗B (有台碗)

碗Bでは底部のみの実測であるが、SK 5 出土(672)が特異であろうか。底部立ち上がりから大きく内湾するタイプのものである。底部にケズリ調整が見られるが、台接着前に施した痕跡が確認できる。

皿B (有台皿)

皿Bの口径は13.0cm前後のもの(SK 5 出土677,678、SK 6 出土690、SK 7 出土693)と、口径16.0cmの大きなもの(SK 5 出土691)の、2法量が認められる。立ち上がりに段を有し、反り気味で体部成形して口縁端部が肥沃するタイプである。しかし、(693)は碗形を呈していて、通常の碗に比べ器高が低いため皿としているが碗の可能性もある。碗と皿の中間的な器形と言える。

壺G (695)

SK 7 出土の(695)は、壺Bに類似するかのようであるが、通常の短頸壺に比べ口径が狭く頸部が長いもので違いが見られるために壺Gとしている。昭和58年度灰原調査報告での平底無蓋短頸壺A類と同様のものと考えている。蓋は伴っていない。肩に1条沈線、胴部に2条沈線、カキメ調整が施され、底部立ち上がり部分ではナデ調整が見られる。口頸部は直立に立ち上がり、口縁端部にヘラで整えられた面をもつ。焼成痕として底部外面に径11.2cmを測る焼台痕、火ダスキ痕が確認できる。

平鉢 (鉢C)

SK 3 出土の(610)は、底部まで復元できた平鉢である。5本の粘土紐を使用し、胴部を内湾させて口縁端部は面を成形するもので、踏ん張るタイプの台が付く。胴部のロクロヒダは顕著で、粘土紐痕が残り、胴部下半はロクロによるケズリ調整を行っている。焼成痕としては、外面口縁のみに重焼痕、内面中央はくすんだ色味となっていて、同器種による重焼で焼成されていると思われる。

特殊蓋

SK 7 より出土する。器肉が薄く、口縁がしっかりと屈曲するタイプのものである。1-B号窯焚口前面土坑出土のものとは比べ、口縁部の形に若干違いがあり、少々小ぶりである。土坑出土ではないのだが、特殊蓋の別タイプがA地区内で確認されているため、ここで補足として記述しておく。(696)は2号窯埋土の上層出土のもので、口径12.4cmで天井にケズリをもちボタン状のつまみが付いて中央がクレーター状に窪むものである。(697)はA地区ピットで出土したものである。器肉は薄く、天井部に糸切り痕が僅かに残る。

刀子 (679)

SK 5 底面から出土するもので、切先が欠損する刀身部である。残存刀身長6.35cm、厚みは背側で0.25cm、元巾1.3cmを測り、重量は12.24gである。

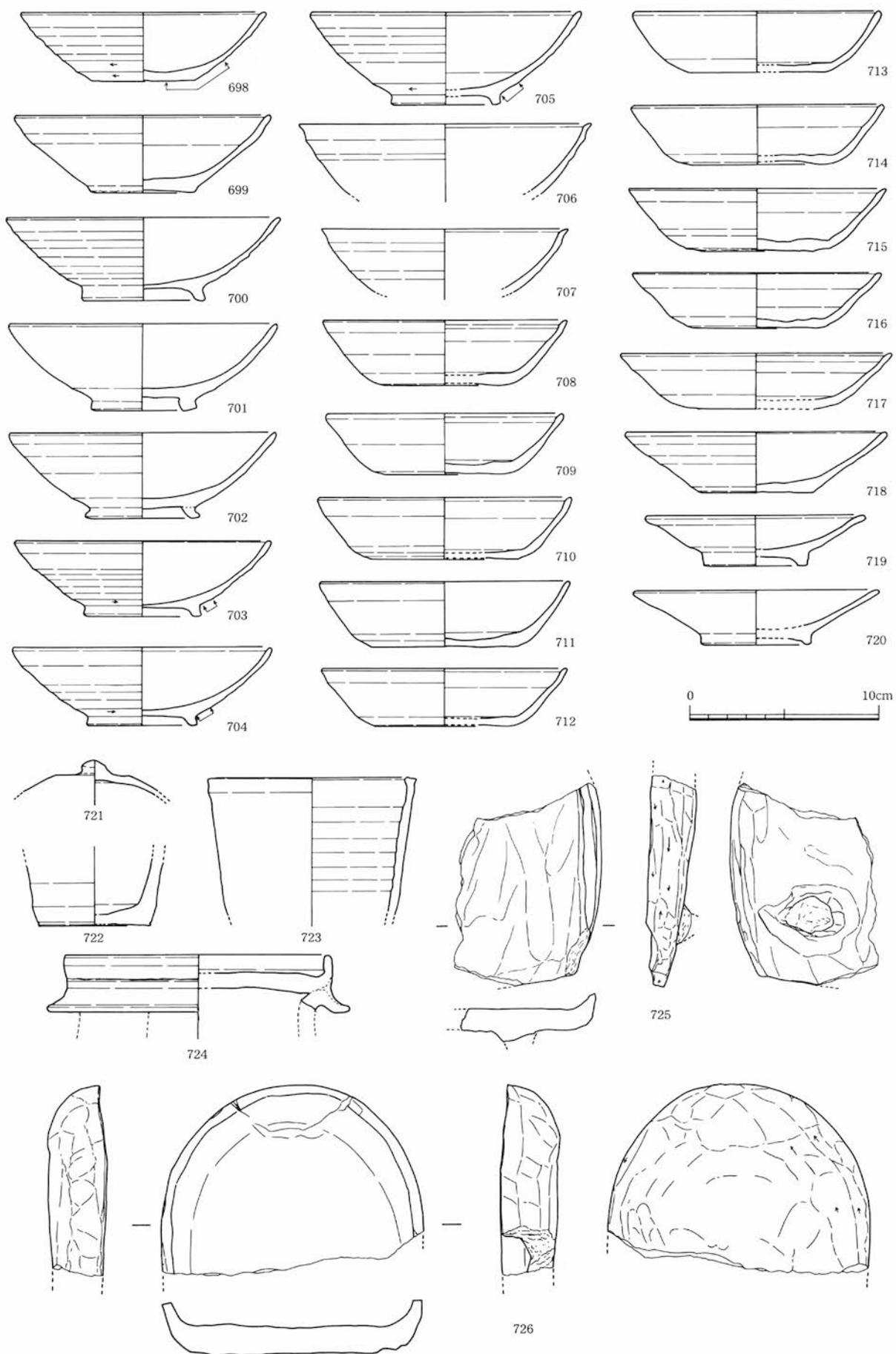
4. 上層灰原出土

概要と器種の検討 (698~743)

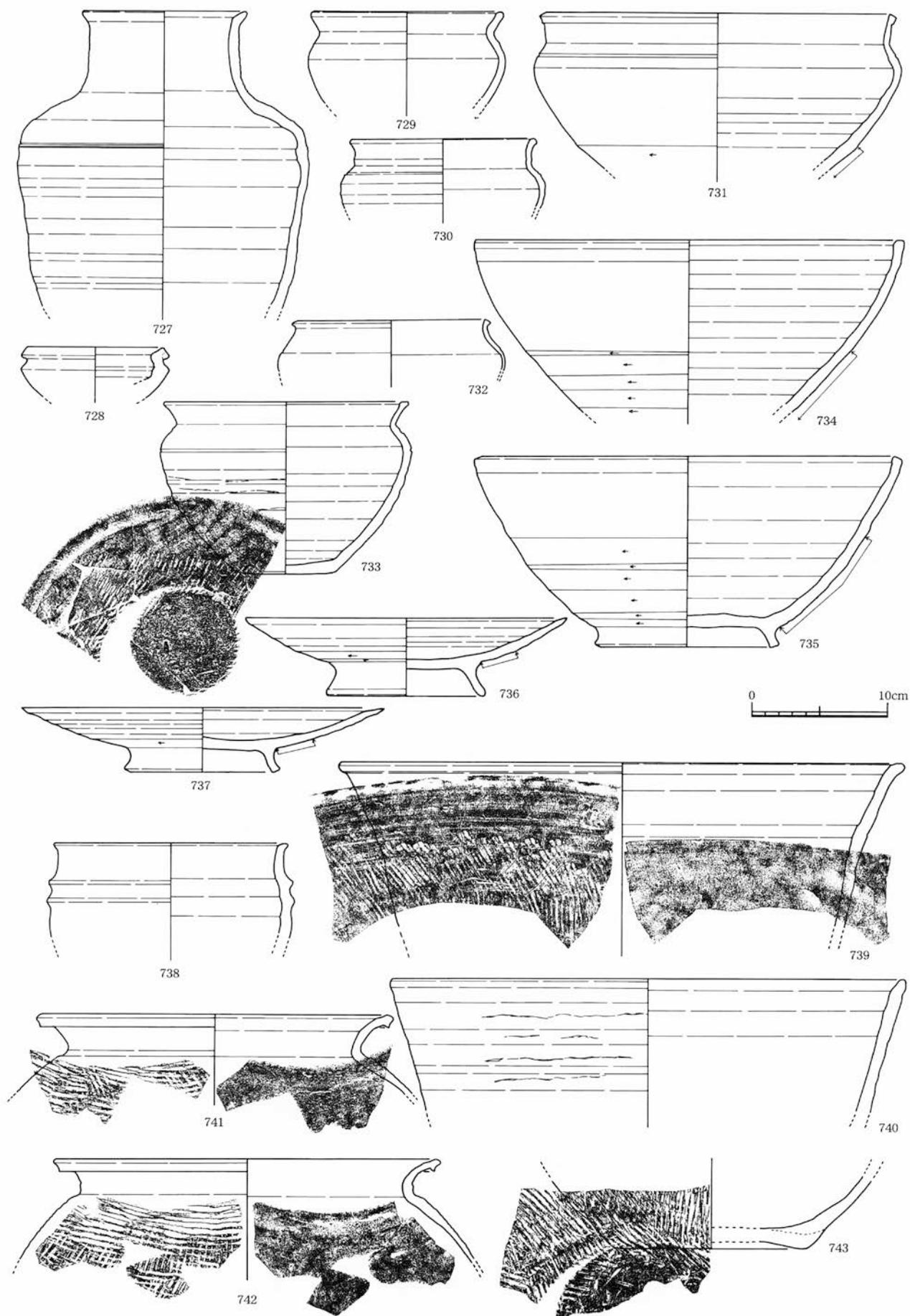
記述されていない器形や特筆すべきことだけを述べる。坏A器形は、(718)のような口縁端部まで内湾するものである。特殊器種として、(721)の特殊蓋は口縁が欠けているのだが、つまみが突起状で面をもたないタイプのもの。(724)は円面硯破片で、昭和58年度灰原調査でも確認されている。直径13.9cmを測り、脚部が付くもので、3方透かしをもつ。胎土は砂を多く含んでおり、焼成痕としては硯面は降灰せず、側面に降灰を確認。口縁端部には剥離痕が見られる。風子硯は2個体出土している。(725)は硯尻部破片で、低い脚が付着し、脚接着粘土の色調が明らかに違い後付けされている。側縁、側面はケズリ、硯面部、硯背部とも丁寧なナデ調整がみられ、硯背部は台接着後に撫でて

種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	器種別	口縁部計測 合計	含有率
食膳具	碗A (無台碗)	1,280	34.6%	貯蔵具	平鉢 (鉢C)	171	13.5%	小型壺	27	2.1%
	碗B (有台碗)	2,124	57.4%		広口鉢 (鉢B)	480	37.8%	長頸瓶 (瓶B)	28	2.2%
	坏A	80	2.2%		すり鉢 (鉢F)	6	0.5%	双耳瓶 (瓶D)	329	25.9%
	皿A (無台皿)	134	3.6%		甌形深鉢	12	0.9%	小瓶類	2	0.2%
	皿B (無台皿)	85	2.3%		壺F系	12	0.9%	平底甕	29	2.3%
	食膳具合計	3,703	73.8%		壺G	7	0.6%	甕	86	6.8%
煮炊具	長胴甕	41	100.0%		壺H	109	8.6%	貯蔵具合計	1,271	25.3%
	煮炊具合計	41	0.8%		A地区上層灰原 口縁部計測値合計(／36)			5,015		

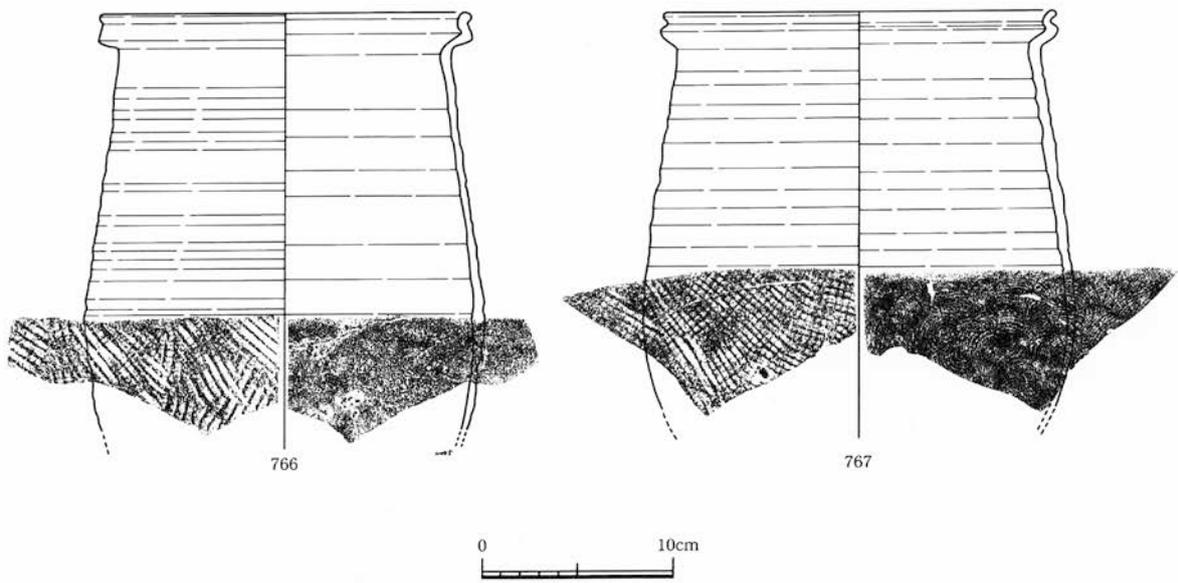
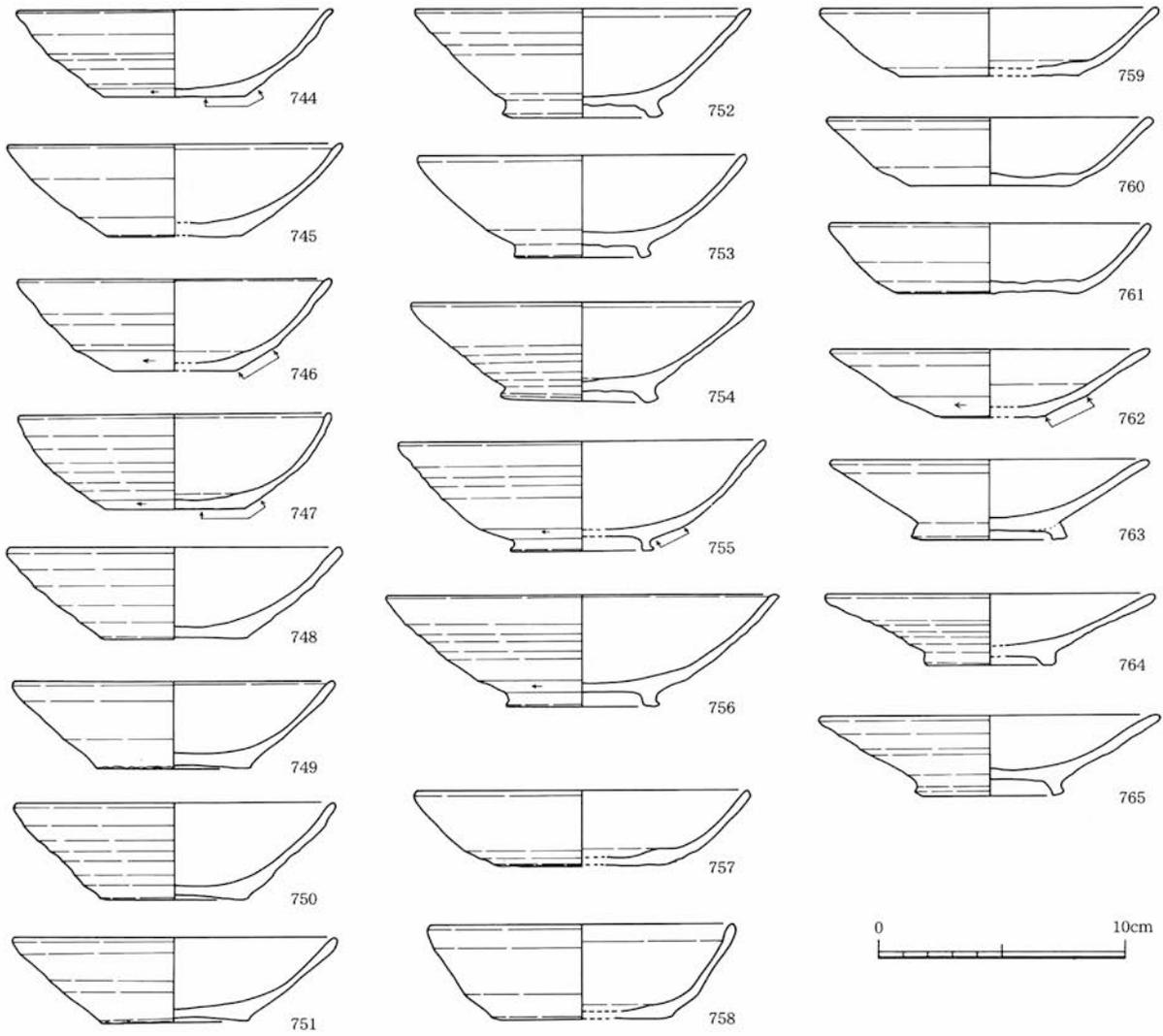
第15表 A地区上層灰原出土須恵器器種構成表 (口縁部計測値合計 5,015/36)



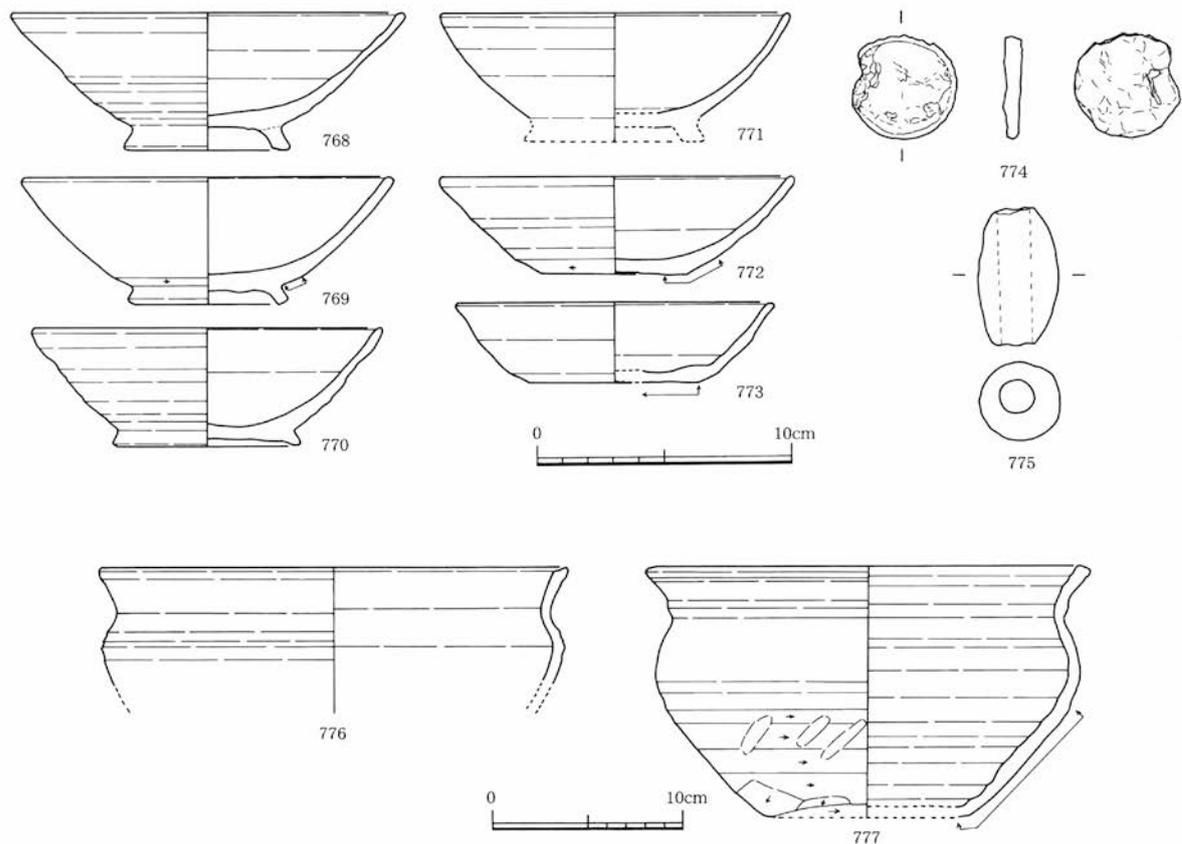
第89図 A地区 上層灰原出土 須恵器・特殊遺物(1) (S=1/3)



第90図 A地区 上層灰原出土 須恵器(2) (S=1/4)



第91图 A地区粘土塊集中1出土須惠器(上段S=1/3, 下段S=1/4)



第92図 A地区 粘土塊集中2 出土遺物 須恵器（上段S=1/3, 下段S=1/4）

いる。硯面部のみ降灰がみられ、正位焼成している。(726)は前頭部破片で、側縁、側面、研背部ともヘラによる丁寧な面取りが施されている。こちらは両面、断面とも降灰が見られ、どのような状態で焼成されたのか不明であり、おそらく焼成中に焼き損じたのであろう。(731)は用途不明品。口径10.0cm、残存高は3.7cmを測り、器肉1.0cmと食膳具としては厚すぎるものである。底部形態は不明、口縁端部は外側に粘土を巻き付けて突出させ、面を成形している。内面が半生焼け状態であり、逆位で焼成されている。(734,735)は、平鉢としているが、別名碗形鉢（鉢C）である。器形は胴部内湾し、口縁端部に面を施し、踏ん張るようにしっかりとした台が付く。胴部下半はロクロ回転によるケズリ調整がなされている。焼成痕は、内外の口縁のみ重焼痕が見られる。(736,737)は、平鉢として貯蔵具に含めているが、大型食膳具の可能性もある。大型の皿としたほうがよいだろうか。高い台が付き、立ち上がりが急に外傾、口縁端部を尖らせて成形している。体部立ち上がりにケズりを伴う。内面底部には重焼痕が見られ、この平鉢（大皿）の台径と一致、同器種による正位重焼で焼成されている。(738)は、すり鉢で、胴部上位に2本の隆帯が見られるものである。(743)は、平底甕の底部破片で、平行線文タタキ(Ha類)調整が底部まで続くものである。

5. 粘土塊集中1・2 出土遺物 (744~777)

特筆すべきものは、長胴甕である。A地区から出土する長胴甕破片で、図化可能であるのは口縁が多いのだが、粘土塊集中から、唯一胴部まで復元できたものである。粘土塊集中1出土の(766,767)とも胴部は張り気味で、ロクロヒダが目立ち、下半を叩き出している。昭和58年度調査分で、底部復元されたものがあり、底部は丸底で、砲弾状を呈す器形のものである。

第2項 B地区出土須恵器

器種組成と概要

B地区出土器種を大別すると食膳具、貯蔵具の他、煮炊具がある。食膳具は碗・皿のA・B、坏Aで、B地区全体の含有率は53.2%、貯蔵具は、鉢類、甑形深鉢、壺類、瓶類、甕類でB地区全体含有率が44.1%、煮炊具として鍋、長胴甕、甑があり、B地区全体での含有率は2.6%である。この内7号窯関係から出土したものが20.6%、灰原出土ものは全体の54.2%を占め最も含有率が高い。食膳具は碗Bが58.3%の含有率、碗Aが37.2%、坏A、皿A・Bは3%を切る器種構成となっている。また、B地区全体で食膳具が5割以上を占めるものの、A地区に比べれば貯蔵具の割合が多い。貯蔵具では特に双耳瓶が貯蔵具全体の5割弱とA地区での比率を大きく上回るものとなっている。この双耳瓶が主体の48.3%含有率、次に広口鉢が29.1%を占め、壺類が15%、甕は平底甕を合わせても4%未満、平鉢や小瓶が2%、すり鉢、甑形深鉢、長頸瓶は1%を切るといった器種構成となっている。

器種組成表には含めていないものを記述しておく。特殊器種としてコップ形（個体数11）、特殊蓋（個体数10）、風字硯（個体数10）、また、陶錘（個体数31）、特殊陶製品（個体数12）、小型特殊品（個体数1）が出土している。

B地区10世紀須恵器		7号窯関係全体		B区SK全体		灰原		粘土塊だまり		その他		B地区窯関係以外合計		B地区10世紀遺物総計	
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率								
食膳具	碗A（無台碗）	1,172	43.8%	401	21.8%	852	28.1%	997	59.2%	81	42.9%	2,331	34.6%	3,503	37.2%
	碗B（有台碗）	1,473	55.1%	1,415	76.9%	1,879	62.0%	615	36.5%	108	57.1%	4,017	59.6%	5,490	58.3%
	坏A	0		6	0.3%	43	1.4%	20	1.2%	0		69	1.0%	69	0.7%
	皿A（無台皿）	29	1.1%	2	0.1%	178	5.9%	43	2.6%	0		223	3.3%	252	2.7%
	皿B（無台皿）	0		16	0.9%	80	2.6%	9	0.5%	0		105	1.6%	105	1.1%
	食膳具合計	2,674	73.2%	1,840	89.3%	3,032	31.6%	1,684	78.8%	189	74.4%	6,745	48.0%	9,419	53.2%
貯蔵具	平鉢（鉢C）	10	1.1%	8	3.7%	122	2.0%	5	1.1%	1	1.5%	136	2.0%	146	1.9%
	広口鉢（鉢B）	356	37.6%	25	11.6%	1,755	28.7%	120	26.5%	13	20.0%	1,913	27.9%	2,269	29.1%
	すり鉢（鉢F）	0		4	1.9%	31	0.5%	0		0		35	0.5%	35	0.4%
	甑形深鉢	10	1.1%	2	0.9%	18	0.3%	5	1.1%	0		25	0.4%	35	0.4%
	壺類	193	20.4%	58	26.9%	775	12.7%	60	13.2%	20	30.8%	913	13.3%	1,106	14.2%
	長頸瓶（瓶B）	0		0		31	0.5%	0	0.0%	0		31	0.5%	31	0.4%
	双耳瓶（瓶D）	340	35.9%	98	45.4%	3,072	50.2%	227	50.1%	31	47.7%	3,428	50.0%	3,768	48.3%
	小瓶類	6	0.6%	0		134	2.2%	6	1.3%	0		140	2.0%	146	1.9%
	平底甕	0		8	3.7%	19	0.3%	17	3.8%	0		44	22.7%	44	0.6%
	甕	32	3.4%	13	6.0%	168	2.7%	13	2.9%	0		194	2.8%	226	2.9%
	貯蔵具合計	947	25.9%	216	10.5%	6,125	63.9%	453	21.2%	65	25.6%	6,859	48.9%	7,806	44.1%
	煮炊具	鍋	2	6.7%	0		8	1.9%	0		0		8	1.7%	10
長胴甕		28	93.3%	4	0.2%	406	94.0%	0		0		410	86.0%	438	94.0%
甑		0		0		18	0.2%	0		0		18	3.8%	18	3.9%
	煮炊具合計	30	0.8%	4	0.2%	432	4.5%	0	0.0%	41	16.1%	477	3.4%	466	2.6%
総計（／36）		3,651	20.6%	2,060	11.6%	9,589	54.2%	2,137	12.1%	254	1.4%	14,040	79.4%	17,691	

第16表 B地区 出土須恵器 器種構成表（口縁部計測値総計 17,691/36）

1. 7号窯

器種組成と各器種の概要

7号窯に関するものとしては、床出土、焚口前面土坑や前庭部灰層、埋土である。埋土については、ここでも7号窯関係のものとして扱っている。これら7号窯関係の器種組成表を個別に見てゆくと、床出土の須恵器は非常に少なく、全体の2.4%にすぎない。焚口前面土坑や前庭部灰層出土須恵器が全体の69.2%、埋土からのものは全体の28.4%である。床出土では碗A・Bがほぼ占めており、貯蔵具は広口鉢に限られている。焚口前面土坑・前庭部灰層では、食膳具が71.5%含有率、食膳具全体での碗Bが最も高い数値を示す。貯蔵具は双耳瓶、次いで広口鉢が主体で、甕、平鉢、甑形深鉢が4%以内、小瓶は1%以下となっている。煮炊具では、長胴甕が主体で、鍋が6.7%のとどまった。また、器種構成表に含めていない特殊製品は、7号窯前庭部からコップ形3個体と特殊蓋3個体、埋土からコップ形2個体が出土している。

(1) 7号窯床出土（778～782）

床の遺物は少なく、図化可能なものは広口鉢だけである。いずれも口径28.0cm前後のもので、口縁の「くの字」屈曲と肩の張りが弱い。口縁端部に面をもつものと、もたないものがあり、胴部下半にケズリ調整を伴う。(780)は唯一底部まで復元できたものであるが、底部外面に径8.4cmを測る円形の窪みを伴っている。この痕は粘土乾燥後には付かない窪みであり、成形時の台の痕と考えられる。これ以外に焼成痕として焼台痕と火ダスキ痕がみられる。

7号窯関係		床		埋土		前面土坑・灰層		7号窯関係全体	
種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	含有率	口縁部計測 合計	占有率
食膳具	碗A（無台碗）	15	55.6%	487	58.0%	670	37.1%	1,172	43.8%
	碗B（有台碗）	10	37.0%	348	41.5%	1,115	61.7%	1,473	55.1%
	皿A（無台皿）	2	7.4%	4	0.5%	23	1.3%	29	1.1%
	食膳具合計	27	31.0%	839	80.9%	1,808	71.5%	2,674	73.2%
貯蔵具	平鉢（鉢C）	0		0		10	1.5%	10	1.1%
	広口鉢（鉢B）	60	100.0%	75	37.9%	221	32.1%	356	37.6%
	甔形深鉢	0		0		10	1.5%	10	1.1%
	壺A	0		31	15.7%	0		31	3.3%
	壺F系	0		10	5.1%	139	20.2%	149	15.7%
	壺G	0		0		11	1.6%	11	1.2%
	小型壺	0		0		2	0.3%	2	0.2%
	双耳瓶（瓶D）	0		60	30.3%	280	40.6%	340	35.9%
	小瓶	0		6	3.0%	0		6	0.6%
	甕	0		16		16	2.3%	32	3.4%
	貯蔵具合計	60	69.0%	198	19.1%	689	27.3%	947	25.9%
	煮炊具	鍋	0		0		2	6.7%	2
長胴甕		0		0		28	93.3%	28	93.3%
煮炊具合計		0		0		30	1.2%	30	0.8%
合計（／36）		87	2.4%	1,037	28.4%	2,527	69.2%	3,651	

第17表 7号窯 跡出土須恵器 器種構成表（口縁部計測値合計 3,651/36）

（2）7号窯焚口前面土坑・前庭部灰層出土

碗A（無台碗）（783～789）

やはり、基本的に糸切り痕を残し、立ち上がりから体部にかけて内湾しながら緩やかに口縁端部まで至る器形が中心である。それでも細部を観察すると様々なタイプが認められ、以下のようなタイプが認められる。

器形では、器高が低めのもの（783,789）が認められる。底部から口縁端部まで内湾するものの外傾気味のタイプ（783,784）や、器肉が比較的厚く底部から口縁端部までの内湾傾斜が高いタイプ（787,788）。また、底部に段をもつもの（787～789）がある。A地区でも触れているが、糸切り底部切り離し段階で生じるものと考えられ、底部器肉も厚いものとなっている。

碗B（有台碗）（790～794）

2種類の法量がみられる。口径14.0～15.0cm前後のもの。もう一方は、口縁が欠如するもの予測は可能で、前者より大型となるものである。基本として糸切りによる底部切り離し後、台を少量の粘土で接着させているが、内面側に指ナデが施されることで明瞭さに欠けるタイプの〈②類〉である。器形は底部立ち上がりから口縁端部まで内湾するものである。体部半ばで若干内傾するもの（790,793）もみられる。

皿A（無台皿）（795）

実測可能であったのは1点である（795）。口径13.9cm、器高3.25cm、底径5.8cmを測るもので、糸切りによる底部切り離し後、ナデ調整を施さず、底部端面のみ工具で粘土押さえを行っている。

コップ形（796,797）

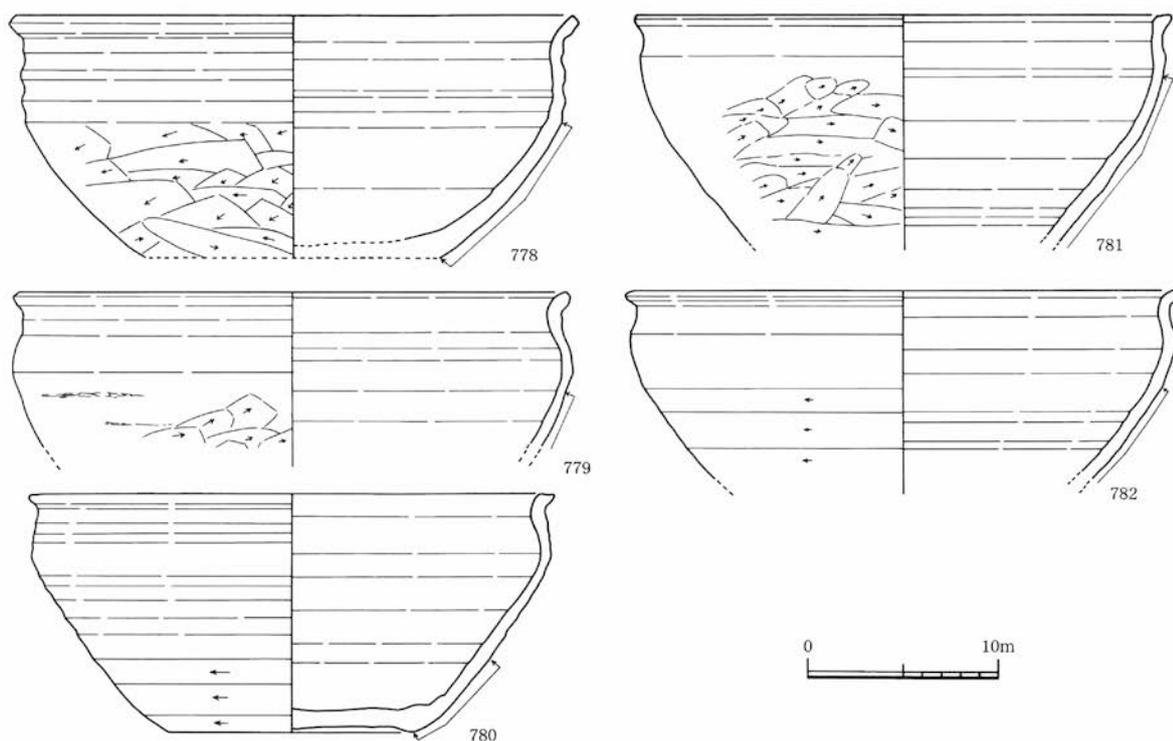
口径が（797）9.2cm、（796）9.8cmを測り、端部は外側に突出させて面をもつものである。

特殊陶製品（798～800）

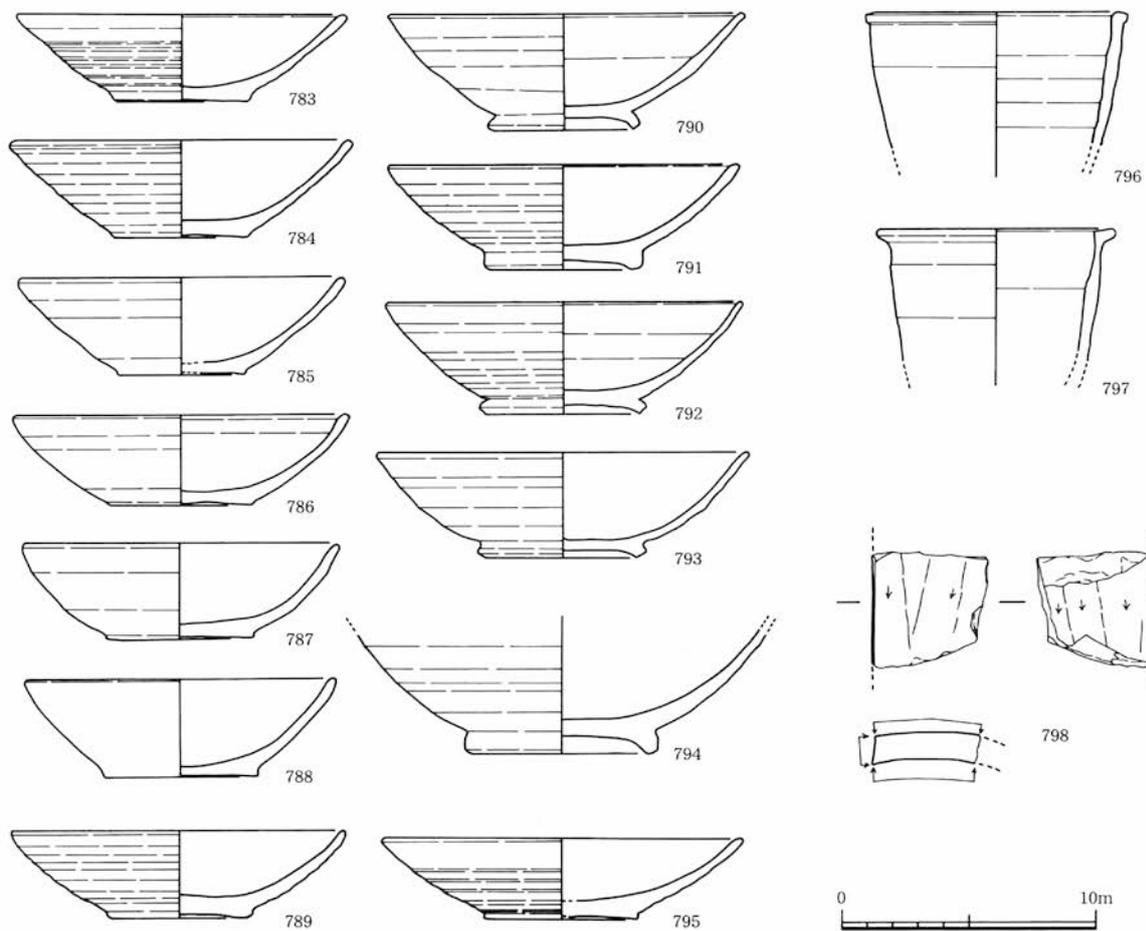
側面側に屈曲をもたない平坦な形状のもので、用途はわからないため、特殊陶製品としている。厚さ1cm程度で、側面、凹面、凸面ともすべてにケズリが施されている。（829）は凹面に降灰がみられる。

壺F系（801～804）

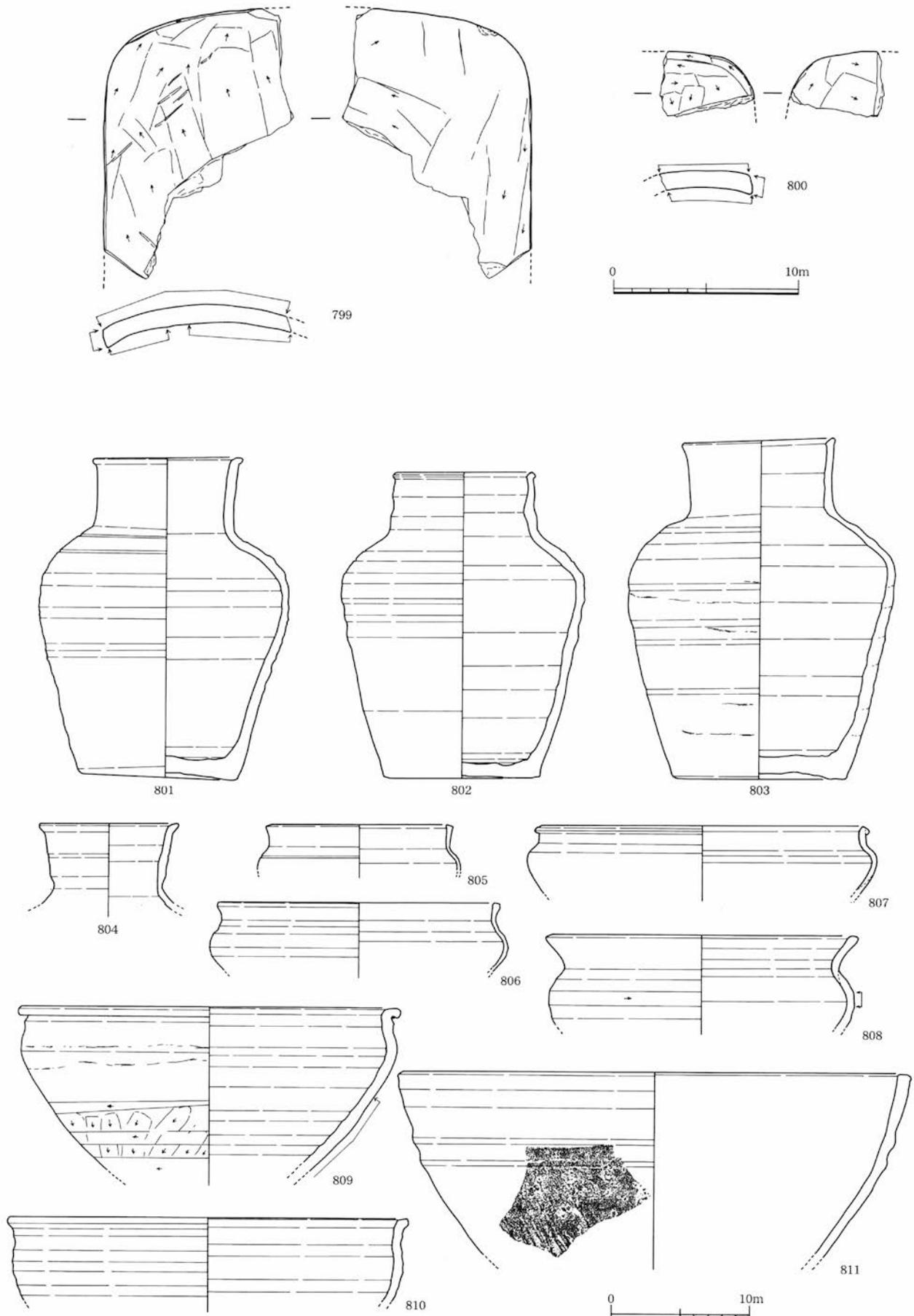
狭口で口頸部が長い壺F系の法量は2種類確認されているのだが、焚口前面土坑・灰層からは、小型品（801～803）が出土している。（802）で2.7ℓ、（803）で3.6ℓの容積である。口頸部はほぼ直立に立ち上がり、端部外面を突出させて面をもちつつも丸くおさめている。基本的には器肉は厚く、粘土紐痕が残るなど胴部調整に注意を払わず成形され



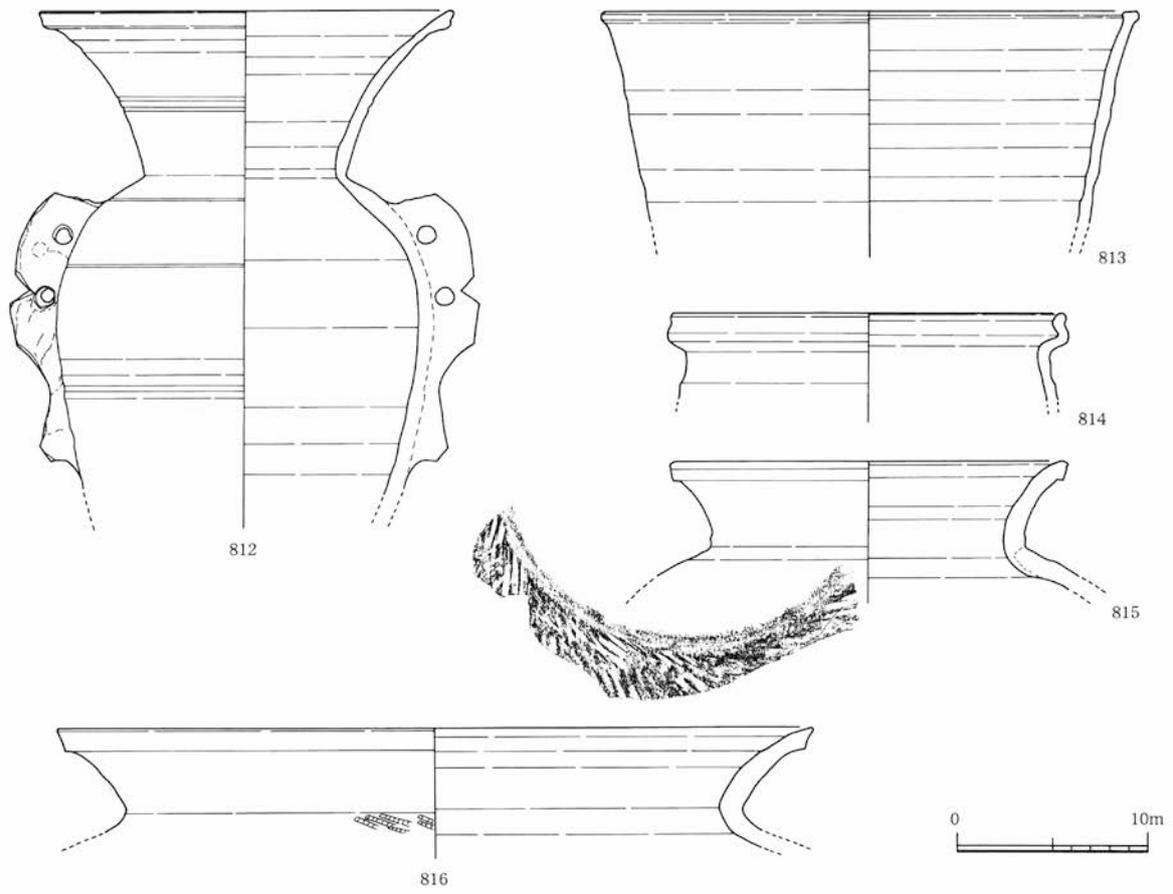
第93図 7号窯 床出土 須恵器 (S=1/4)



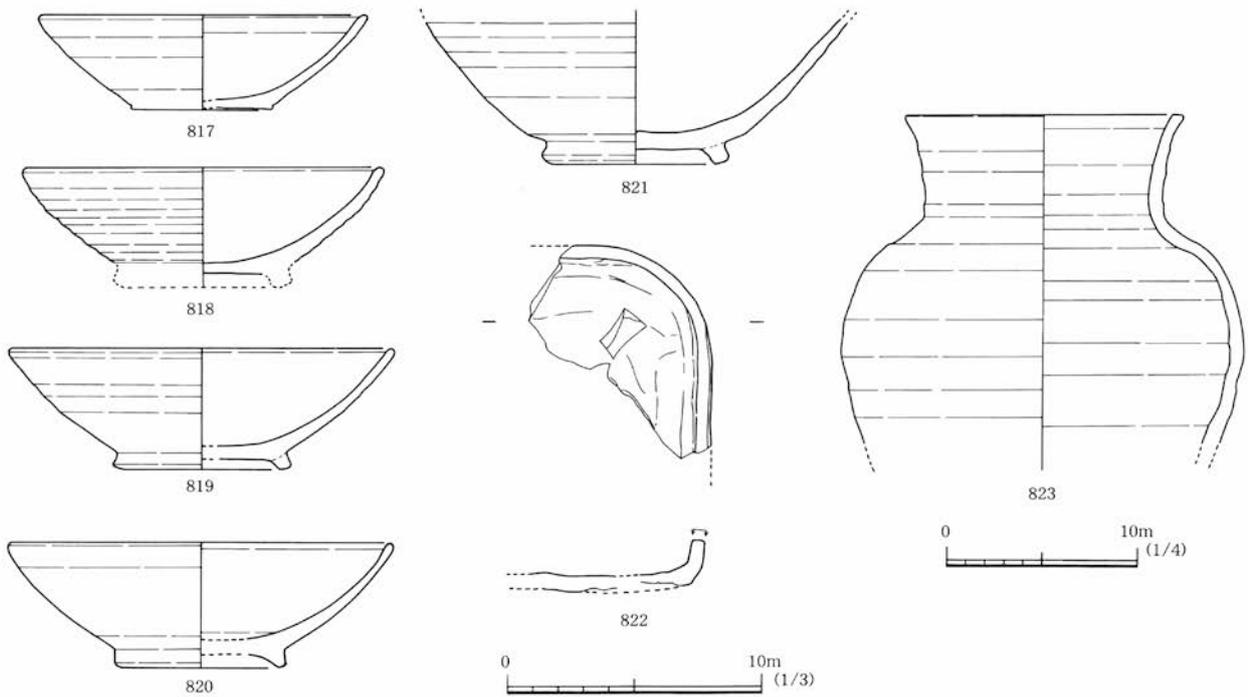
第94図 7号窯 焚口前面土坑・前庭部灰層出土 須恵器(1) (S=1/3)



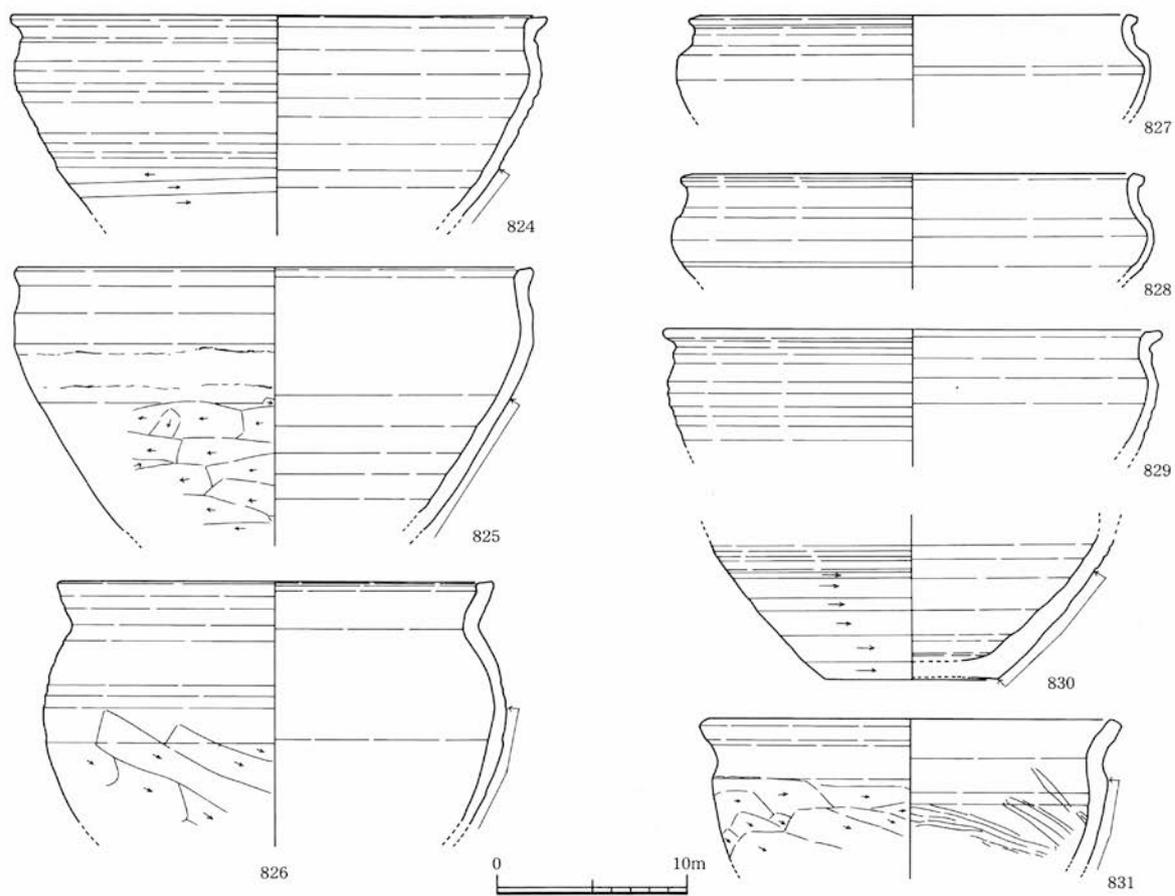
第95図 7号窯 焚口前面土坑・前庭部灰層出土 須恵器(2) (上段：S=1/3, 下段：S=1/4)



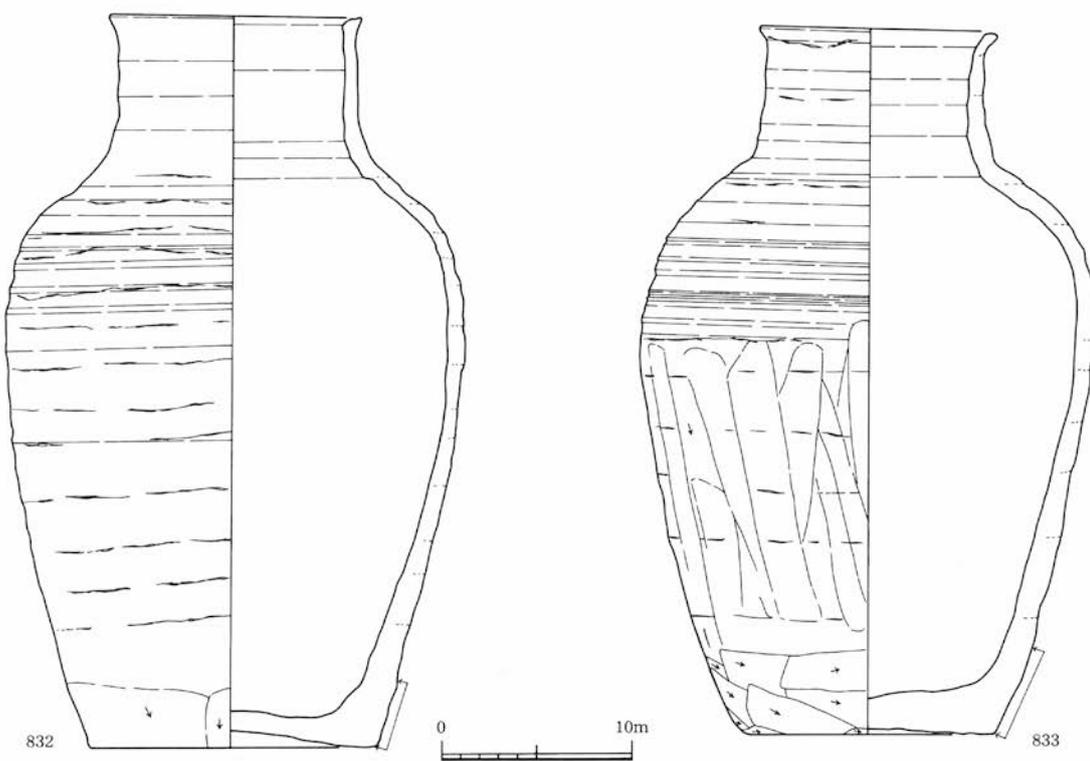
第96図 7号窯 焚口前面土坑・前庭部灰層出土 須恵器(3) (S=1/4)



第97図 7号窯 埋土出土 須恵器(1) (左：S=1/3, 右：S=1/4)



第98図 7号窯 埋土出土 須恵器(2) (S=1/4)



第99図 B地区 SK4出土 須恵器 (S=1/4)

たような、非常に粗雑な作りとなっている。

広口鉢（鉢B）（805～810）

様々なタイプが出土する。口頸部が直立して器肉が非常に薄いもの〈あ類〉（805,806）。頸部境は比較的明瞭であるが、口縁に向かって内傾し端部は外側に巻き込む方法で成形して突出しているもの〈い類〉（807）。以上のものは器肉が非常に薄く、以下のものは器肉が厚くなっている。（808）は口頸部が「くの字」で胴が張る〈か類〉、（809）は頸部「くの字」が殆どない程短く端部に面をもち突出させ、胴部下半にケズリを伴う〈う類〉。そして、やはり頸部が見られず胴も張らず口縁端部を外側面に突出させているもの〈え類〉（810）がある。

平鉢（鉢C）（811）

碗形鉢とも言われるものである。口径36.8cmを測り、内湾形で器肉は厚く、口縁端部に面、胴部上位に2本の隆帯がみられる。胴部下半はタタキが確認できる。

甑（813）

深鉢の可能性もあるが、この時期のものには沈線が入るとの望月氏の指摘を受け、甑としている。口径26.6cmを測り、がっちりとした丁寧に作ってある。

（3）7号窯埋土

出土器種の検討（817～831）

7号窯埋土から出土する遺物は、総じて少ないのであるが、前述の焚口前面土坑・灰層を補う形で簡略して述べる。碗Bは、ここでも2法量が認められる。焚口前面土坑の出土では台タイプ②のみであったが、台がしっかりして明瞭なタイプ〈①-a類〉が出土する。風字硯（822）前頸部破片が出土している。硯背面が剥離により欠如している。側縁にはヘラによる面取りが施されている。内面は残存部分すべてに、指ナデ調整がなされている。また、壺F系としている（823）は、口頸部が長く外反する器形で、直立していないのが特徴である。

2. 土坑

各器種組成と概要

4基の土坑中、出土の最も多いものはSK2、SK1は稀少である。SK2、3、4では食膳具が主体であり、特に碗Bの含有率は高いものとなっている。SK3で唯一坏Aが含まれるが僅かである。貯蔵具については、SK2で双耳瓶37.3%と小型壺32.3%で主体を占め、これ以外の器種で10%以下である。また、SK3の主体は双耳瓶、SK4の主体は広口鉢であるが、これら土坑の中で唯一甑形深鉢が含まれる。全体的に碗Bの含有率が圧倒的と言えようか。

B地区 SK		SK 1		SK 2		SK 3		SK 4		B地区SK全体	
種別	器種別	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測合計	含有率	口縁部計測総計	占有率%
食膳具	碗A（無台碗）	16	48.5%	156	18.2%	202	24.0%	27	24.5%	401	21.8%
	碗B（有台碗）	17	51.5%	697	81.3%	618	73.6%	83	75.5%	1,415	76.9%
	坏A	0		0		6	0.7%	0		6	0.3%
	皿A（無台皿）	0		2	0.2%	0		0		2	0.1%
	皿B（有台皿）	0		2	0.2%	14	1.7%	0		16	0.9%
	食膳具合計		33	100.0%	857	84.0%	840	94.9%	110	90.2%	1,840
貯蔵具	平鉢（鉢C）	0		8	5.0%	0		0		8	3.7%
	広口鉢（鉢B）	0		12	7.5%	5	11.6%	8	66.7%	25	11.6%
	すり鉢（鉢F）	0		4	2.5%	0		0		4	1.9%
	甑形深鉢	0		0		0		2	16.7%	2	0.9%
	壺F系	0		1	0.6%	0		0		1	0.5%
	壺H	0		5	3.1%	0		0		5	2.3%
	小型壺	0		52	32.3%	0		0		52	24.1%
	双耳瓶（鉢D）	0		60	37.3%	36	83.7%	2	16.7%	98	45.4%
	平底甕	0		8	5.0%	0		0		8	3.7%
	甕	0		11	6.8%	2	4.7%	0		13	6.0%
	貯蔵具合計		0	0.0%	161	15.8%	43	4.9%	12	9.8%	216
煮炊具	長胴甕	0		2	100.0%	2	100.0%	0		4	100.0%
	貯蔵具合計	0	0.0%	2	0.2%	2	0.2%	0		4	0.2%
合計（／36）		33	1.6%	1020	49.5%	885	43.0%	122	5.9%	2,060	

第18表 B地区SK出土須恵器器種構成表（口縁部計測値合計 2,080/36）

器種構成表に含まれていないもので、SK3から陶鍾が7個体出土している。

特筆すべきものとして、SK4出土の壺F系がある。ほぼ完形の良好な状態で、狭口で口頸部が非常に長く、肩の張らない長胴壺の大型品である。蓋は伴っていない。口頸部はほぼ直立に立ち上がり、口縁端部で若干外傾して端部に面を成形している。胴部は、不規則なロクロヒダもさながら粘土紐痕が顕著に見られ、底部立ち上がりにケズリを伴うが、基本的に粗い作りである。(833)は、胴部に縦方向の工具ナデがみられ、底部中央に径6.6cm円形の窪み、つまり形成台痕が確認できる。底部立ち上がりのケズリは全周せず、部分的でランダムである。(832)の頸部内面には頸部後付け作りと考えられる粘土の盛り上がりが見られ、胴部中央に火ダスキ痕が確認できる。

3. 灰原

器種組成と概要

B地区灰原出土の器種構成であるが、大別して食膳具が31%、貯蔵具が63.9%、貯蔵具が4.5%、この内貯蔵具では壺Bが主体で含有率61.2%、次に壺A28.7%、皿Aが6%、皿Bや坏Aは3%以下である。貯蔵具では双耳瓶が主体となっており含有率5割を超す。次いで広口鉢、その他の器種は5%を下るが、すり鉢、甑形深鉢、壺A、壺H、長頸瓶、平底鉢は1%を切る含有率となっている。煮炊具は圧倒的に長胴甕が高い含有率をもつ。特殊器種として、コップ形7個体、特殊蓋6個体、風字硯4個体、陶鍾18個体、特殊小型品1個体、特殊陶製品6個体が出土している。

種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	種別	器種別	口縁部計測 合計	含有率	器種別	口縁部計測 合計	含有率
食膳具	壺A (無台壺)	852	28.7%	貯蔵具	平鉢 (鉢C)	122	2.0%	小型壺	110	1.8%
	壺B (有台壺)	1,819	61.2%		広口鉢 (鉢B)	1,755	28.7%	長頸瓶 (瓶B)	31	0.5%
	坏A	43	1.4%		すり鉢 (鉢F)	31	0.5%	双耳瓶 (瓶D)	3,072	50.2%
	皿A (無台皿)	178	6.0%		甑形深鉢	18	0.3%	小瓶類	134	2.2%
	皿B (無台皿)	80	2.7%		壺A	10	0.2%	平底甕	19	0.3%
	食膳具合計	2,972	31.0%		壺F系	291	4.8%	甕	168	2.7%
煮炊具	鍋	8	1.8%	壺G	269	4.4%	貯蔵具合計	6,125	63.9%	
	長胴甕	408	94.0%	壺H	24	0.4%				
	甑	18	4.1%	B地区灰原 口縁部計測値合計 (／36)			9,589			
	煮炊具合計	434	4.5%							

第19表 B地区 灰原出土須恵器 器種構成表 (口縁部計測値合計 9,589/36)

壺A (無台壺) (834~848)

底部には糸切り痕を残し、立ち上がりから体部にかけて緩やかに口縁端部まで至る器形で、細部観察により様々な違いが確認できる。

器形では、底部から口縁端部まで一貫して内湾するが口縁端部がやや外反するもの(839)、底部から口縁端部までやや体部外傾するもの(835)、これら以外は内湾気味の体部を緩やかにもつタイプで、この中には器高が低いもの(845,846)も存在し、皿Aとして扱うべきかもしれない。また、壺Aに含めている(839)は、底端部にひも状の粘土が全周し、内側を撫でて紐を押さえるだけ形状をもち、これを台として取り扱うなら皿Bの可能性はある。このようなタイプは1点だけであり、特異な例とも言える。また、底部から口縁端部まで著しく内湾するもの(847,848)がある。

底部では、糸切りに失敗し、糸切り痕が体部立ち上がりに残存する(838,843)がある。これは器形からみても同じ工人によるものと考えにくいので、このような例もあったのだなという印象であった。糸切り後、底端部粘土を工具で押さえているもの(840,841,846)がある。また、糸切り後に何か台の様なものの上に一時置いたと考えられるような、縦に離れて並行する凹み線を有する形成台痕をもつもの(836,837)がみられる。

以上のような特徴の他に、焼成に関して半数以上のものに重焼痕が見られる。外面台から内側の除き外面全体と、内面口縁から体部にかけて降灰し、時には内面中央に円形の重焼を有するものをⅠ類とする。内外面の口縁端部から体部にかけて降灰するが、内外面の底部には降灰が見られないものをⅡ類とする。外面口縁から体部にかけて降灰するが、下半と底部は降灰が見られず、内面は全体に降灰を伴うものをⅢ類とする。壺Aで確認できたのは、Ⅱ類が殆どで、Ⅰ類は(843)の1点のみ、Ⅲ類は確認できなかった。実測可能であったものだけのなかでの観察であるので、Ⅲ類の存在も可能性は高く、筒状に重ねて焼成された痕跡が窺える。

堿B（有台堿）（849～888）

法量は、口径が13.0～14.0cmのもの、15.0～16.0cm前後のもの（869,877～882）、17.0cm前後またはこれ以上のもの（883,884）の3法量がある。体部成形後、底部を糸切りにより切り離し、台を接着するもので、台付着には少量の粘土を台の内外面に用いて接着ナデ調整を行っている。台の接着後に台底面を工具によるナデを施すもの（849～853,855～858,866,871,883,884）、台底面を削っているものもある。（857）は台底のケズリに失敗している例で、左右のバランスを欠いてしまっている。また、台底に、調整による工具痕と思われる一方方向で並列する浅い筋状若しくはやや深め筋状の痕がみられるもの（863,864,869）がある。底部立ち上がりにケズりを伴うものが一定量認められ、内面にもケズリを行うもの（851）や台接着後に底部外面を削るもの（874）も認められる。

器形では、体部立ち上がりから緩やかに内湾するもの（A類）、体部が外傾するもの（B類）、体部内湾が極めて顕著で、口縁で更に内湾を呈するもの（C類）、の大きく3つに分けることができるが、それぞれの分類の中で法量の違いが見られる。A類では、体部から口縁まで緩やかに内湾するもの（849～852,883）を基本として、体部中央で若干屈曲を呈し更に内湾傾向に至るもの（853～855,859,868,884）、口縁端部付近で内面側により内傾を呈すもの（861～863,866）、体部がやや開き気味で器高が低めのもの（867～869）がある。B類の（870～873）では、口縁端部まで外傾がそのまま至るもの（870,871）と、口縁端部で内側にやや内傾するもの（872,873）がある。C類は（875～878）で、器肉は薄く、底部糸切り、高台が高く台先端が基本的に丸いことが特徴である。ロクロヒダを意識的にヘラで成形するものもあり、高台径も広いものと狭いものがある。焼成も堅緻で、焼き色は若干紫がかる青灰色を呈し他の堿Bと質が違っている。

台のタイプでは、台がはっきりして面をしっかりと成形するタイプ〈①-a類〉（後述の遺物番号以外のもの）と、台がはっきりして長いタイプ〈①-c類〉（前述の器形C類）、台接着時の指ナデにより内側のみ明瞭さに欠けるタイプ〈②類〉（850,854,858～860,864,870～872）がみられる。

特殊なものとして、（887）が挙げられる。口径が19.4cmを測るもので、平鉢としては器肉が薄いため、堿として取り扱った。口縁端部が直立気味に屈曲、底部が欠損して堿A・Bの分類ができないが、内面は全面降灰している。体部外面に非常に丁寧なロクロヒダをもち、意図的にヘラで付けられたかのようであり、質ともに器形C類に似る。また、（888）は口縁端部に面をもつ器肉の薄い器種であるが、やはり堿の一種として扱った。

細部の観察で、以上のような違い、特徴もっているが、底部の欠損するものを除き殆どのものにおいて重焼痕が見られる。外面台から内側の除き外面全体と、内面口縁から体部にかけて降灰し、時には内面中央に円形の重焼を有するものをⅠ類とする。内外面の口縁端部から体部にかけて降灰するが、内外面の底部には降灰が見られないものをⅡ類とする。外面口縁から体部にかけて降灰するが、下半と底部は降灰が見られず、内面は全体に降灰を伴うものをⅢ類とする。確認できたもので、Ⅱ類が圧倒的に多く、Ⅰ類・Ⅲ類は少ない。Ⅲ類は（854）の1点しか見られなかった。筒状に重ねて焼成された痕跡が窺えた。

坏A（889）

実測できているのは1点である。灰原での坏Aの含有率は0.4%、食器全体の中でも1.4%と低い。B地区全体においても1%を切る含有率となっており、比較すれば灰原出土の坏Aが最も高い数値となっている。器肉は薄く、内面立ち上がりに指押さえをもち、体部は外傾、ロクロヒダ顕著で、口縁端部を丸く仕上げている。

皿A（無台皿）（890～893）

口径11.5cmのもの（890,892）と口径12.3cmのもの（891）がある。体部が外反し器高が低いタイプ（890,891）と、体部が外傾し器高の高いもの（892）がある。底部は糸切りされるが、（891,892）は糸切りの失敗と考えられる糸痕が底部から体部への立ち上がりでみられる。

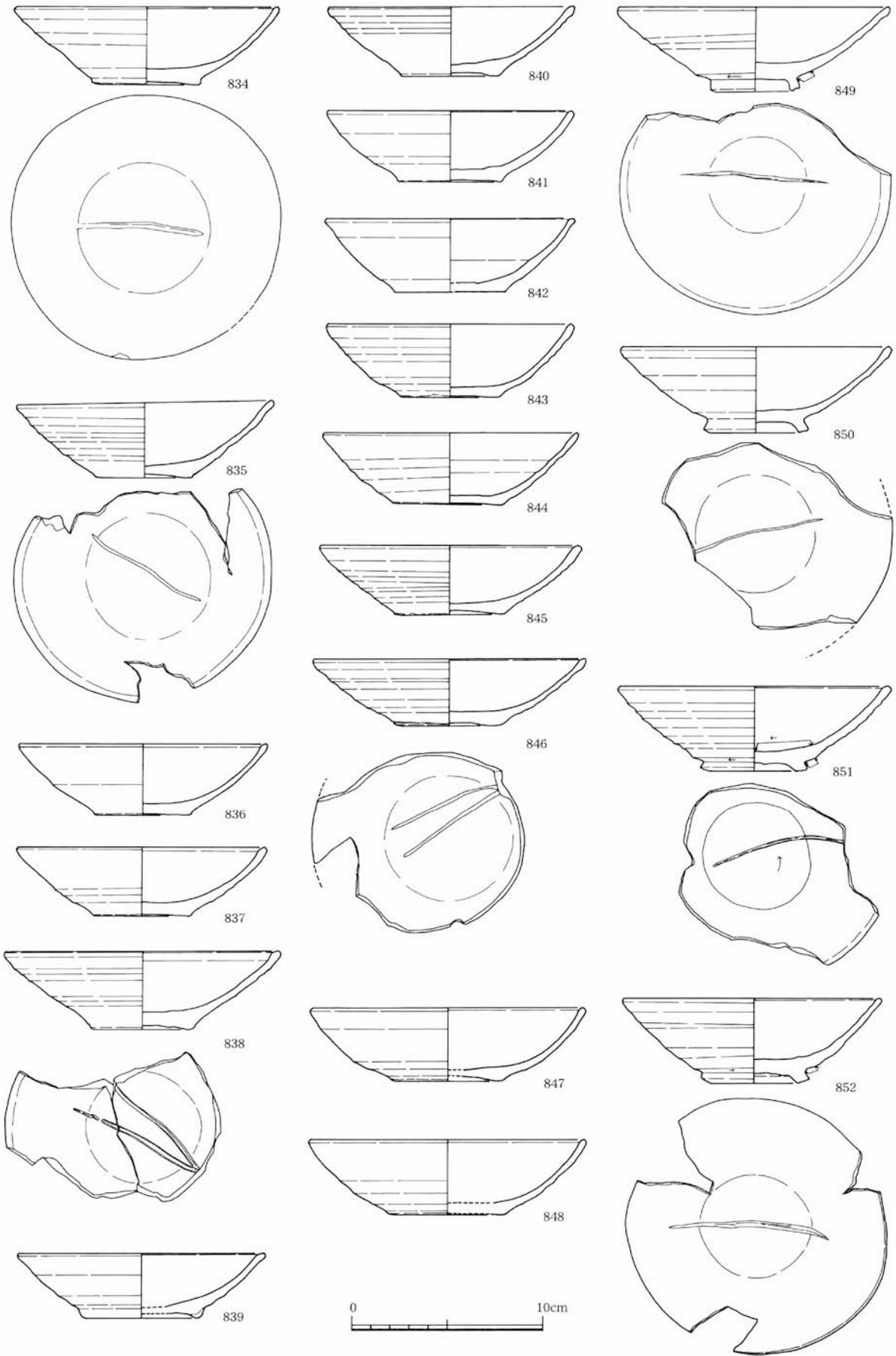
皿B（有台皿）（894～897）

口径12.0～13.0cm前後のものが主体で、（897）は口径が14.0cmである。立ち上がりから内湾気味に立ち上がって口縁端部で反りが見られるタイプ（893,894,896）と、立ち上がりから口縁端部まで外傾するタイプ（895,897）があり、台はしっかり付いて、前述の〈①-a類〉類が主だが、（896）のように台内面側のナデにより面がなくなりややボツリした台が付くタイプ〈③類〉もみられる。

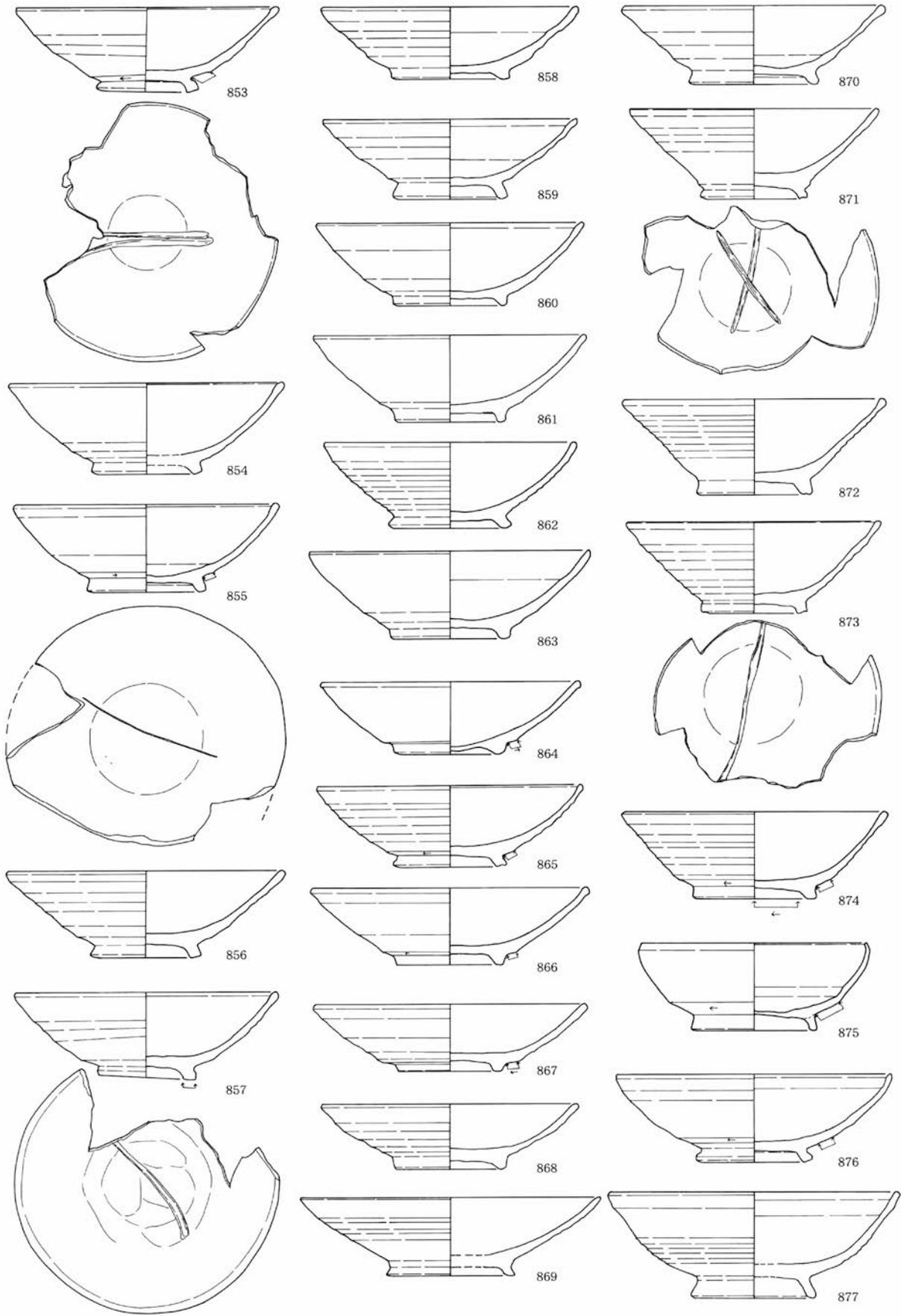
特殊小型品（899）

口径が6.5cmのかなり小型のものが1点確認されている。用途は不明であるが、特異な器種である。

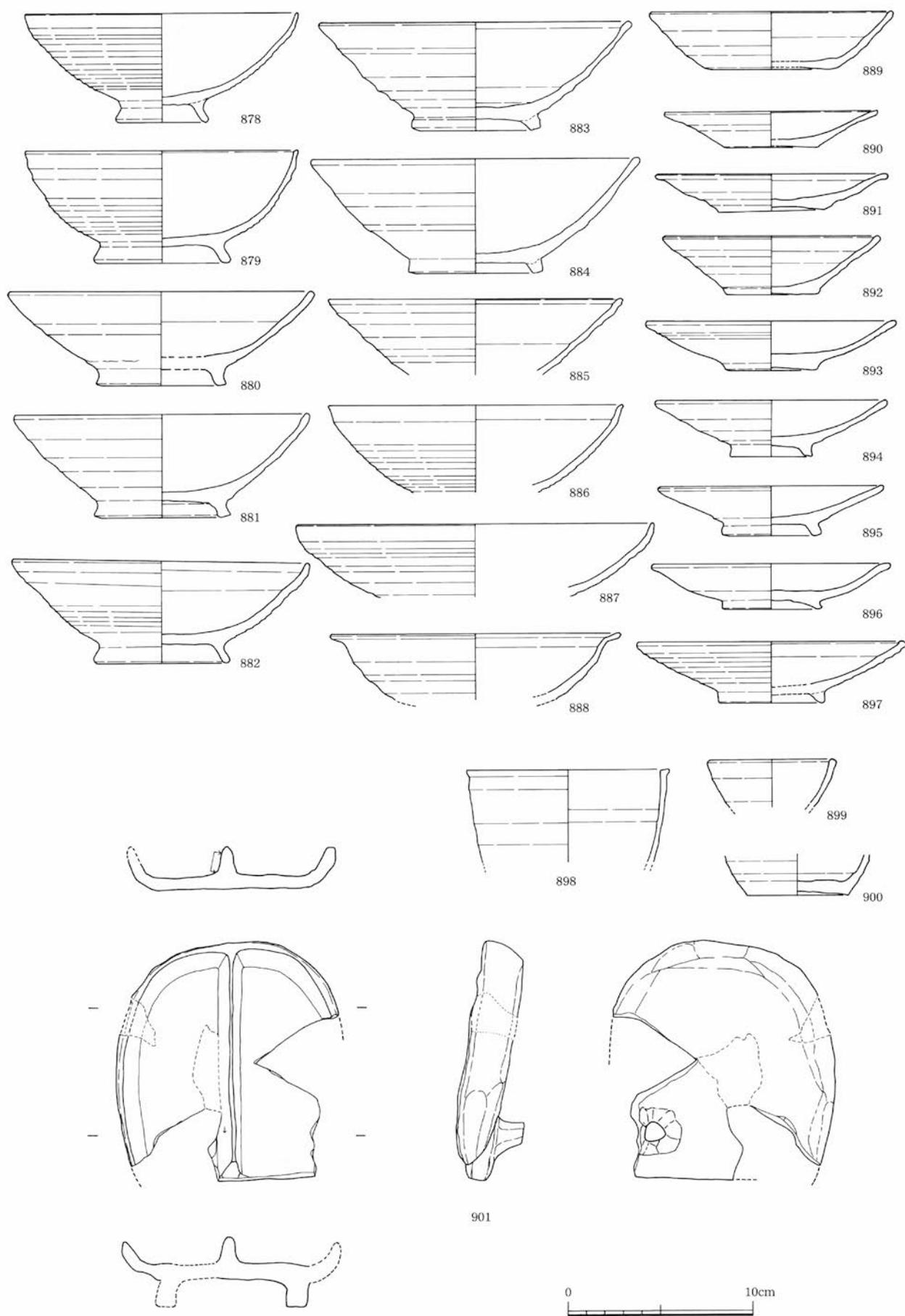
コップ形（898,900）



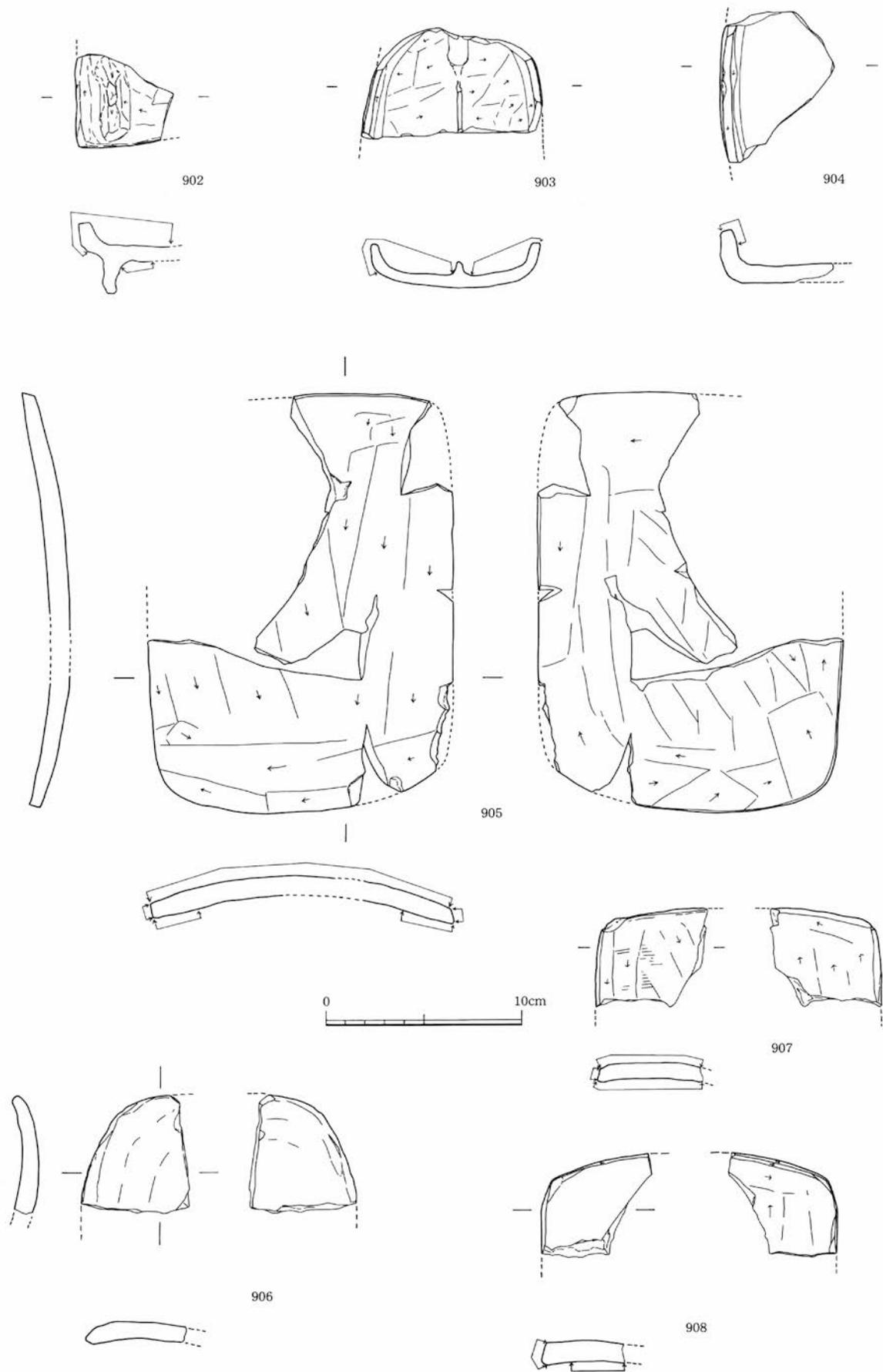
第100图 B地区 灰原出土 須惠器(1) (S=1/3)



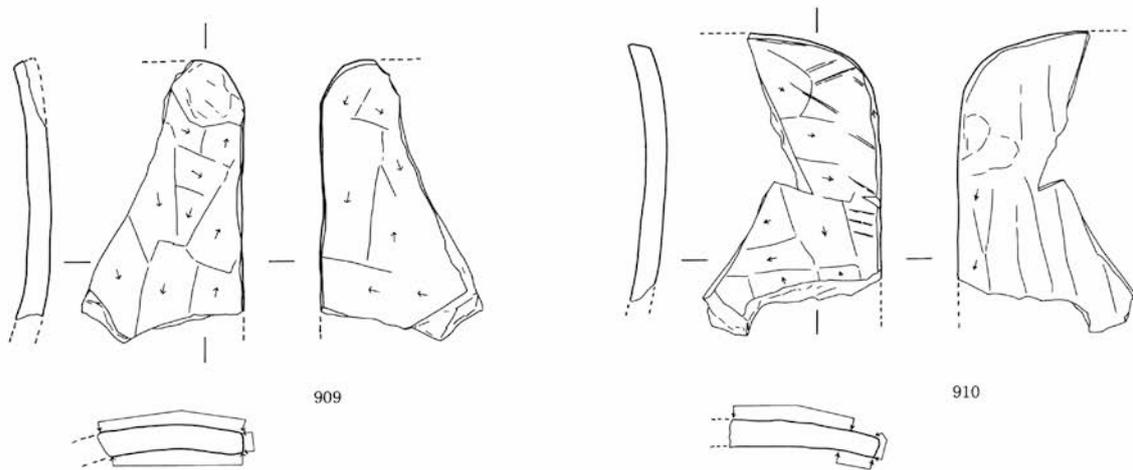
第101图 B地区 灰原出土 須惠器(2) (S=1/3)



第102図 B地区 灰原出土 須恵器・特殊品(3) (S=1/3)

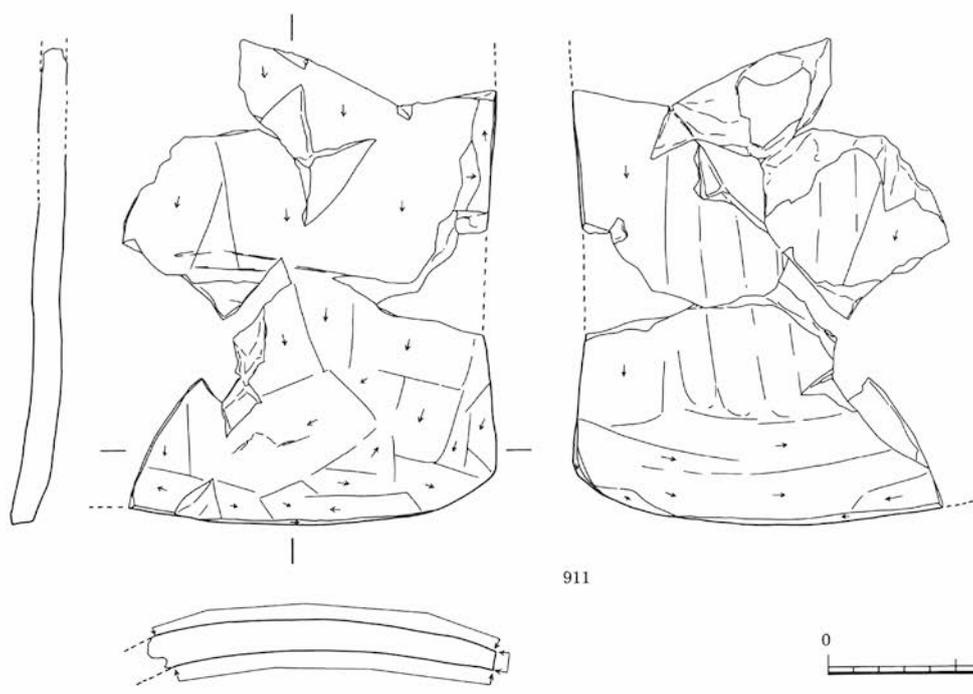


第103図 B地区 灰原出土 須恵器・特殊品(4) (S=1/3)



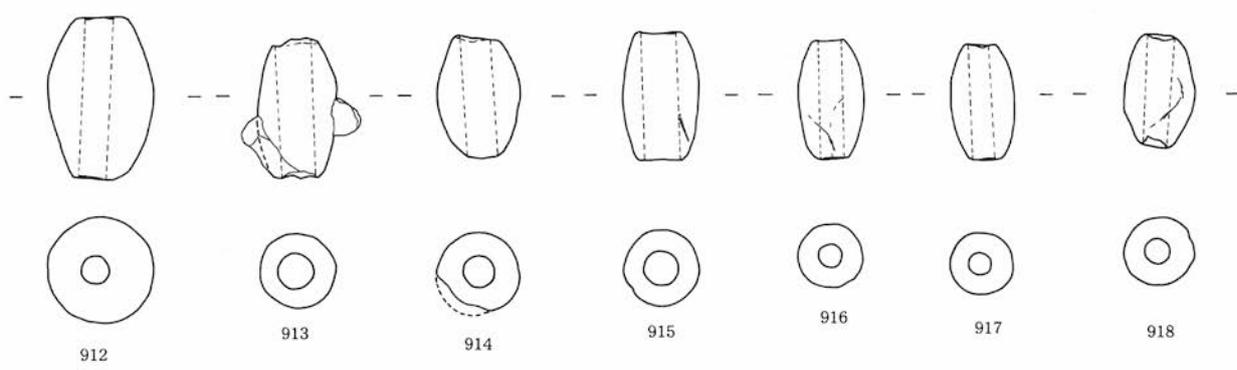
909

910



911

0 10cm



912

913

914

915

916

917

918

第104図 B地区 灰原出土 須恵質特殊品・陶鍾(5) (S=1/3)

器肉は薄く、口縁端部に面、口縁外面側に窪みをもちながら端部外面を僅かに突出させる口縁をもつものである(898)。(900)はコップ形の底部と考えられる破片であるが、糸切りによる切り離しがなされている。

風字硯 (901~904)

風字硯は4点である。(901,903)は、一般的に二面硯と呼ばれる、硯面内縦中央に一本の突帯を設けて硯面を左右に2分した形態のものである。(901)は側縁、側面に面取りが施され、硯面部、硯背部とも丁寧に撫でられている。硯面部にガラス状の釉が付着しており、正位で焼成されている。(903)は、前者に比べ器肉は薄く、小型の前頭部である。側縁、硯面部にケズリ調整がみられ、側面の側縁側外面に釉溜まりが付着していることから、逆位で焼かれたと考えられる。(902,904)は硯尻部破片であるが、(902)は側面から見ると半楕円状、硯側部からみると長方形の脚が付いている。

特殊陶製品 (905~911)

7号窯埋土で出土するものと同じ側面側に屈曲をもたない平坦な形状のもので、瓦や硯の可能性も考えたが、規格・形状に大きな違いがあるため、用途不明の特殊陶製品として捉えている。厚さ1cm程度で、側面、凹面、凸面ともにケズリが施され、反るように作られている。(905)では凹面中央の調整はナデ、凸面に降灰が見られるもので、巾15.5cm、長さ21.7cmである。(911)は全体を復元できていないのだが、(905)と同じようなものになる可能性があり、同じように凹面中央にナデ調整が施されている。ただ、凸凹両面が降灰しており、立てるか斜めの状態で焼成されたものと思われる。(906)はケズリ調整がなく、端部も丸みを帯びているため、風字硯の可能性をもつ。また、(909)では凸面の端に剥離痕があって脚が付いていた痕跡とも考えられる。これも風字硯かもしれない。これら以外のものは破片であるが、(909,910)の凹面のみにも降灰が見られる。

陶錘 (912~918)

管状土錘である(912~918)。中央に縦の粘土痕が確認できるもの(916,918)があり、棒状のものに巻き付けて成形したと考えられる。(912)のような大型のものも存在する。

壺類 (919~926)

蓋を伴うものとして壺A(919)、蓋を伴わず口頸部が長めのものを壺G(920,921)、蓋を伴わず口頸部が短めのものを壺H(922~925)とした。(919)は、口頸部は直立し、端部に面をもつもので、頸部下外面のみ降灰がみられる壺である。従来の壺Aと口頸部高に差違があるが、蓋を伴うことから系譜の延長上と考え、壺Aとした。(920,921)は、口頸部が長めで直立するもの(920)と外反するもの(921)で、肩や口頸部に沈線を伴い、口頸部が降灰する。(921)は胴が張る器形となっており、胴の半分が半生状態でこの内底部付近が生焼け、斜倒焼きで焼成された可能性がある。(922~925)は、口頸部が短いもので、(922,924,925)は口縁が「くの字」で端部を丸く仕上げる作りとなっている。(923)は口頸部が非常に短く、蓋を伴ってもおかしくない器形であるのだが、口縁端部まで釉が付着することから壺Hとしている。ただ、破片断面にも釉が付着しているので、焼成中に壊れたとも考えられ、本来は蓋を伴っていた可能性もある。(926)は、底部糸切りで、頸部器肉が極めて薄いものである。口縁部が欠損するため器種を判断しかねるが、小瓶の可能性もある。内面は降灰せず、全面が光沢のある黒色となっている。鉄分の多い粘土を内面に塗布した可能性があるが、ハケ痕跡も見られないため何とも言えない。この他の壺類や瓶類でも内面が黒色を呈すものが若干見られ、光沢を伴うものと、マットなものがあった。

すり鉢 (鉢F) (927,928)

厚底鉢とも言われるもので、口縁端部に面をもち、器肉が厚く、胴部上位に2本の隆帯がみられる。

平鉢 (鉢C) (929~933)

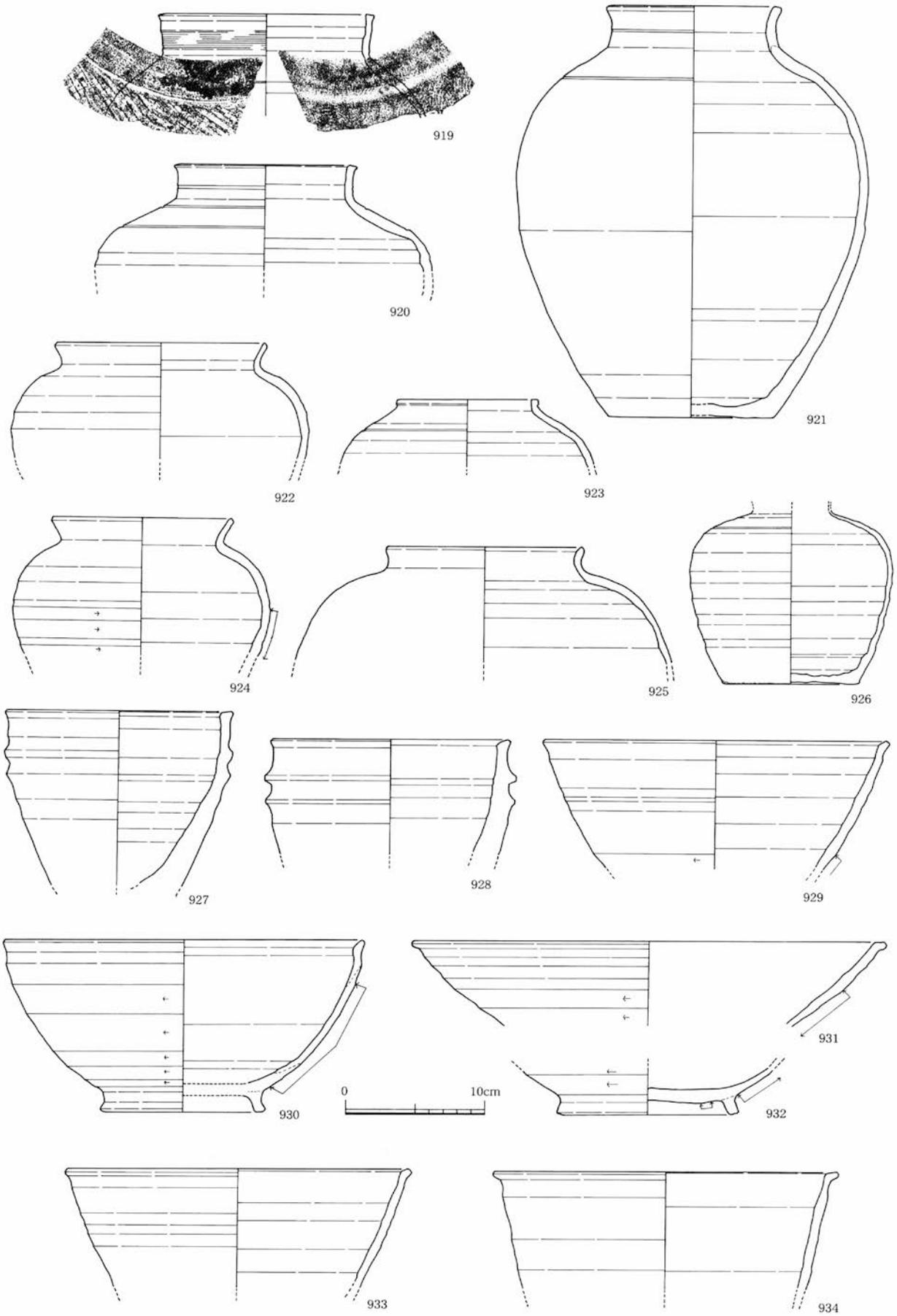
A地区出土のものと同様に若干違いの見られるタイプと言える。碗形タイプ(930)、胴部が強く外傾して口縁が広がる皿形タイプで口径39.0cmを測るもの(931)、基本として碗形だが胴部外傾気味のもの(929,933)がある。(930,931)は胴部にケズリ調整が施されている。以上の平鉢は有台で、踏ん張ってしっかりした方形状の台が接着する。(932)のように底面に削りが施されるものもある。台底にも工具ナデを施している。

深鉢 (934)

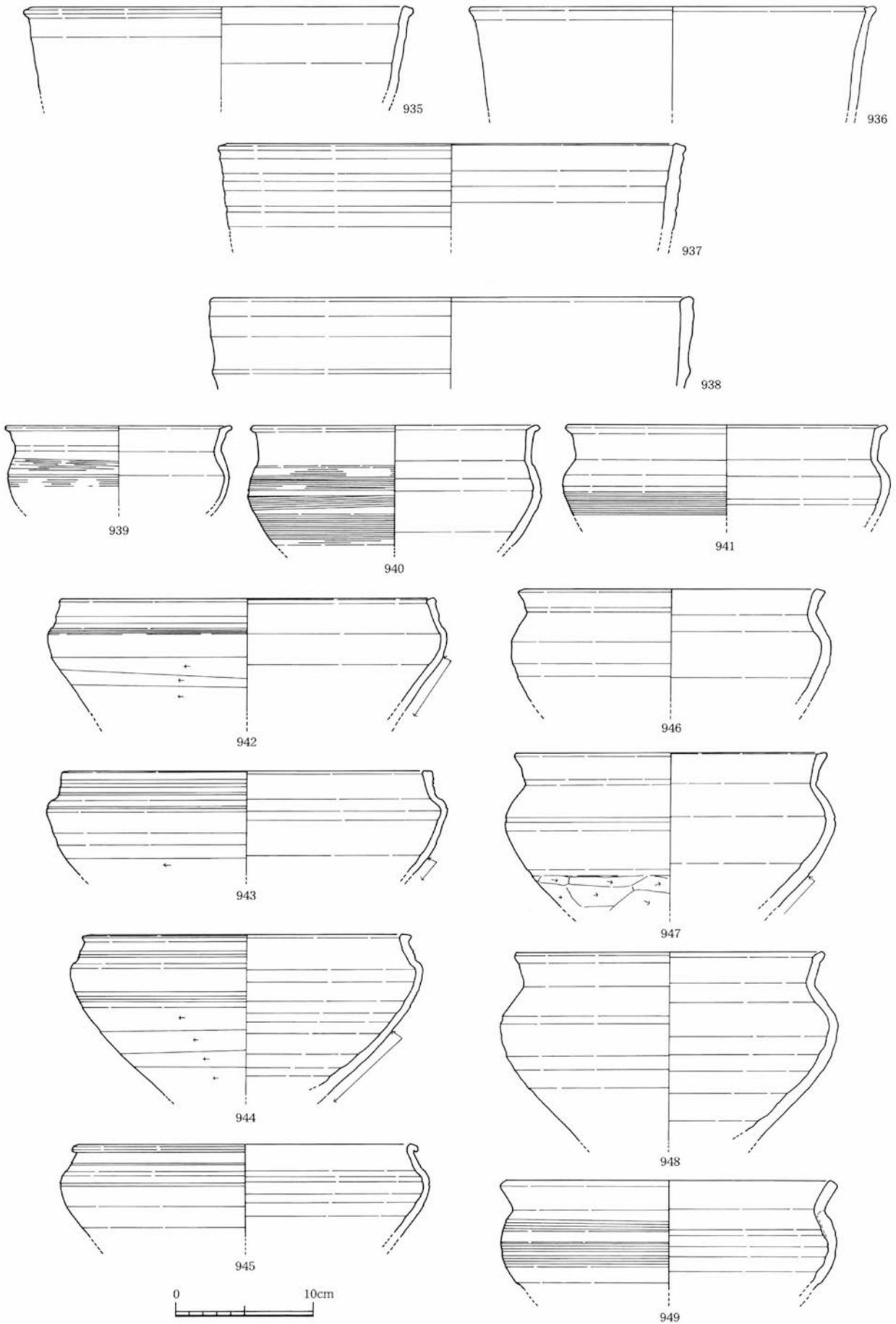
(934)は、器肉口縁端部の作りから平鉢(鉢C)によく似ているのだが、胴部が立ち気味であったので、深鉢とした。甌の可能性もあるだろうか。

甌 (935~938)

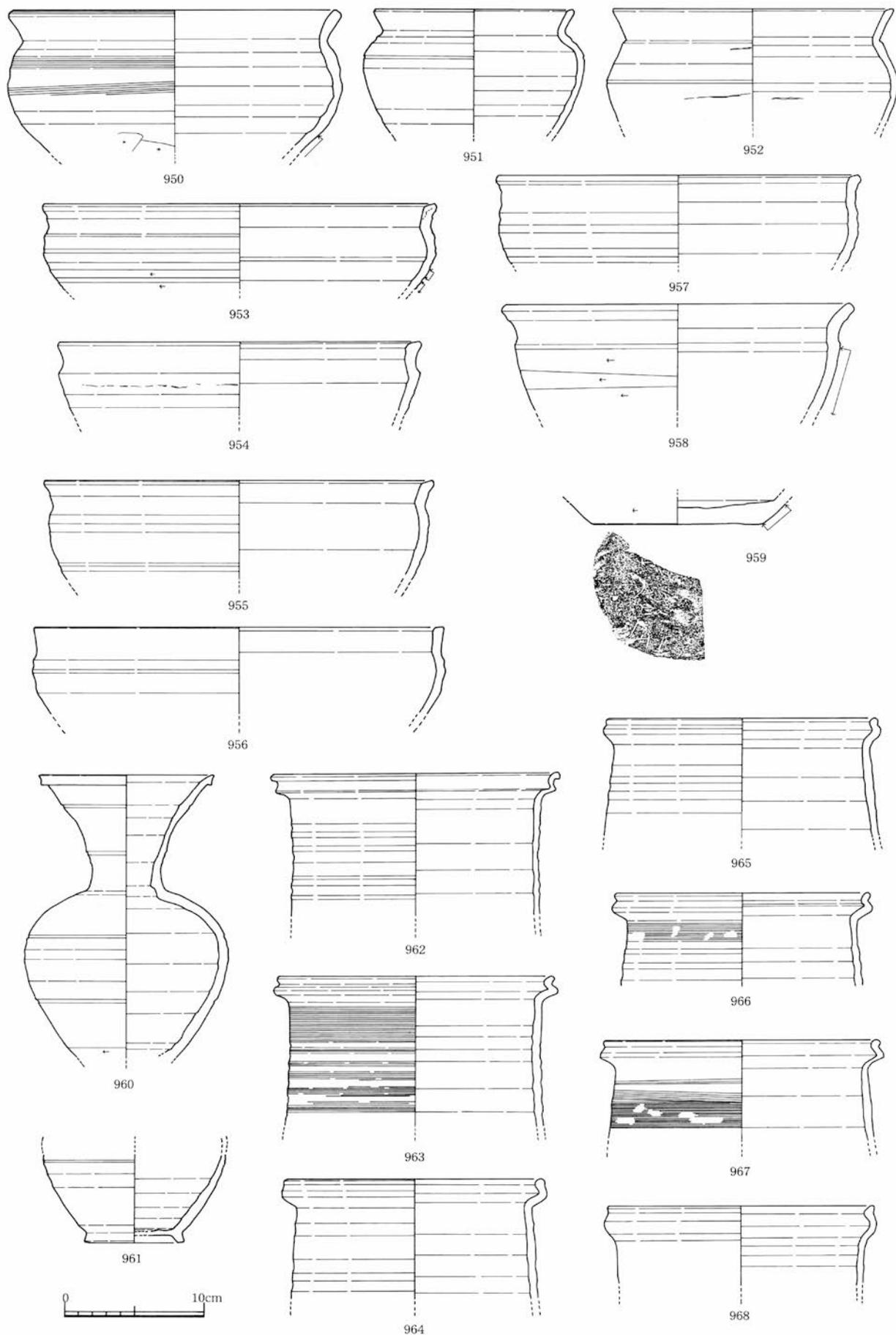
(935,936)は、口縁端部に面をもち、胴部が直立する気味で口縁端部でやや外反気味を呈す甌破片である。(936)は



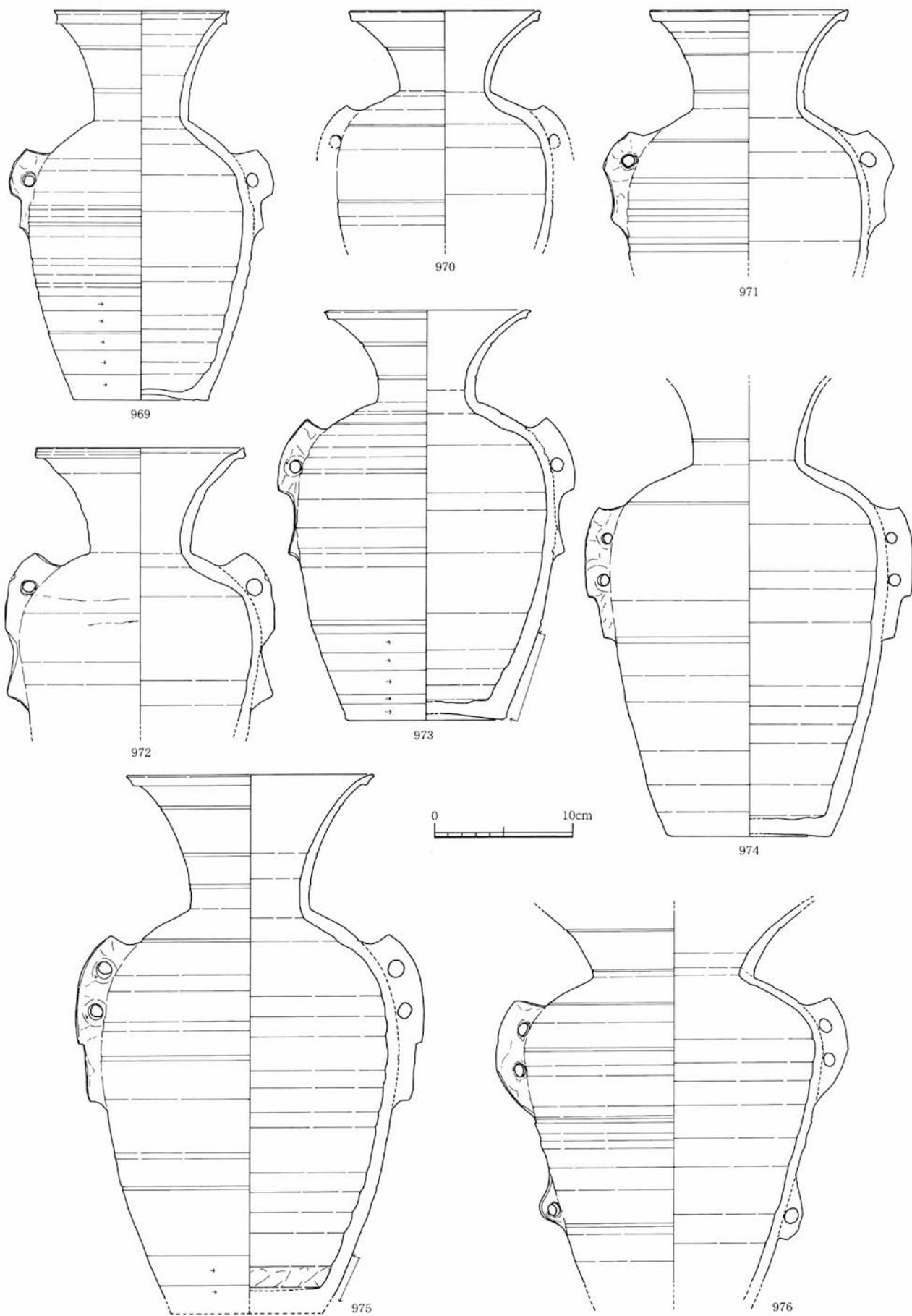
第105図 B地区 灰原出土 須恵器(6) (S=1/4)



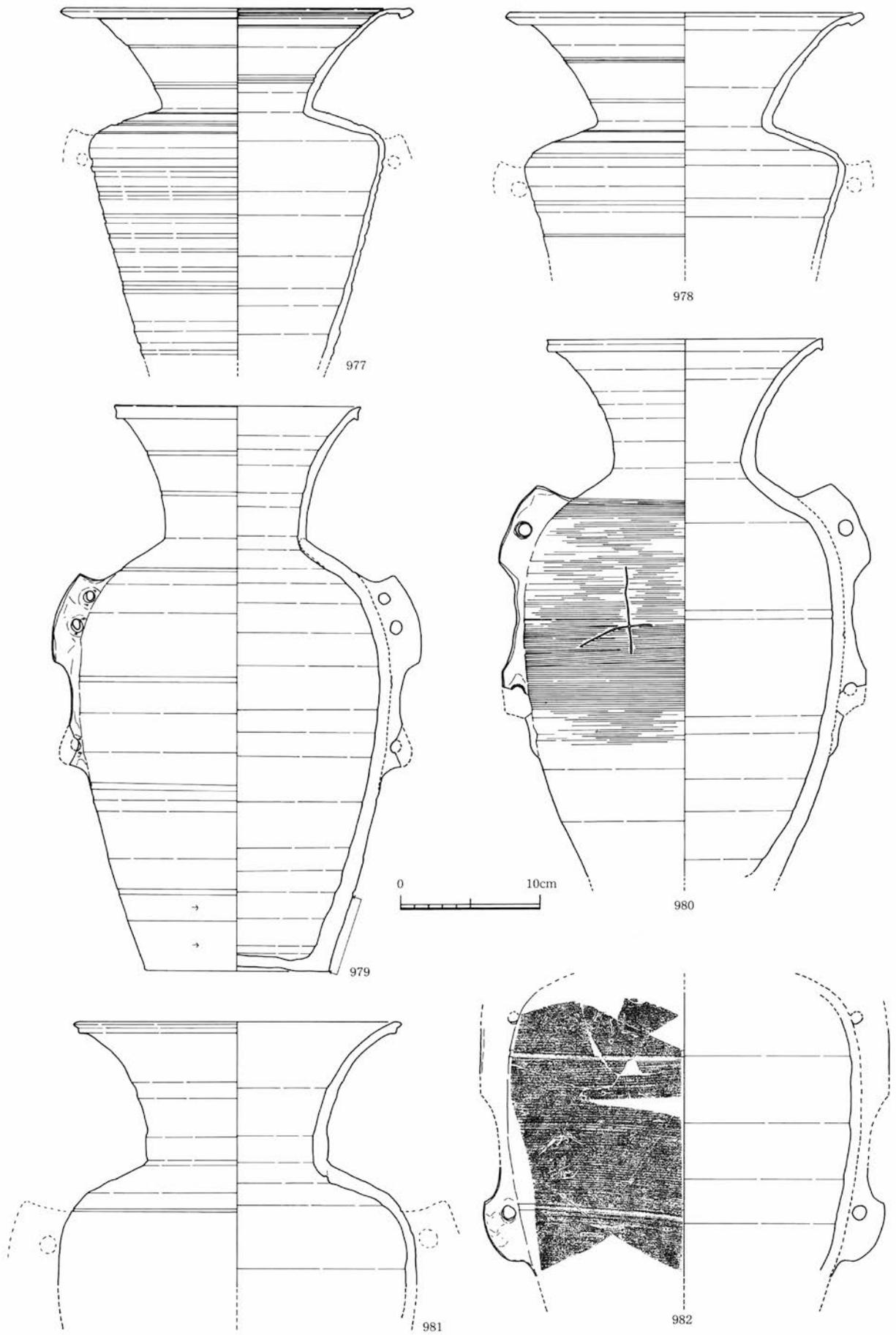
第106図 B地区 灰原出土 須恵器(7) (S=1/4)



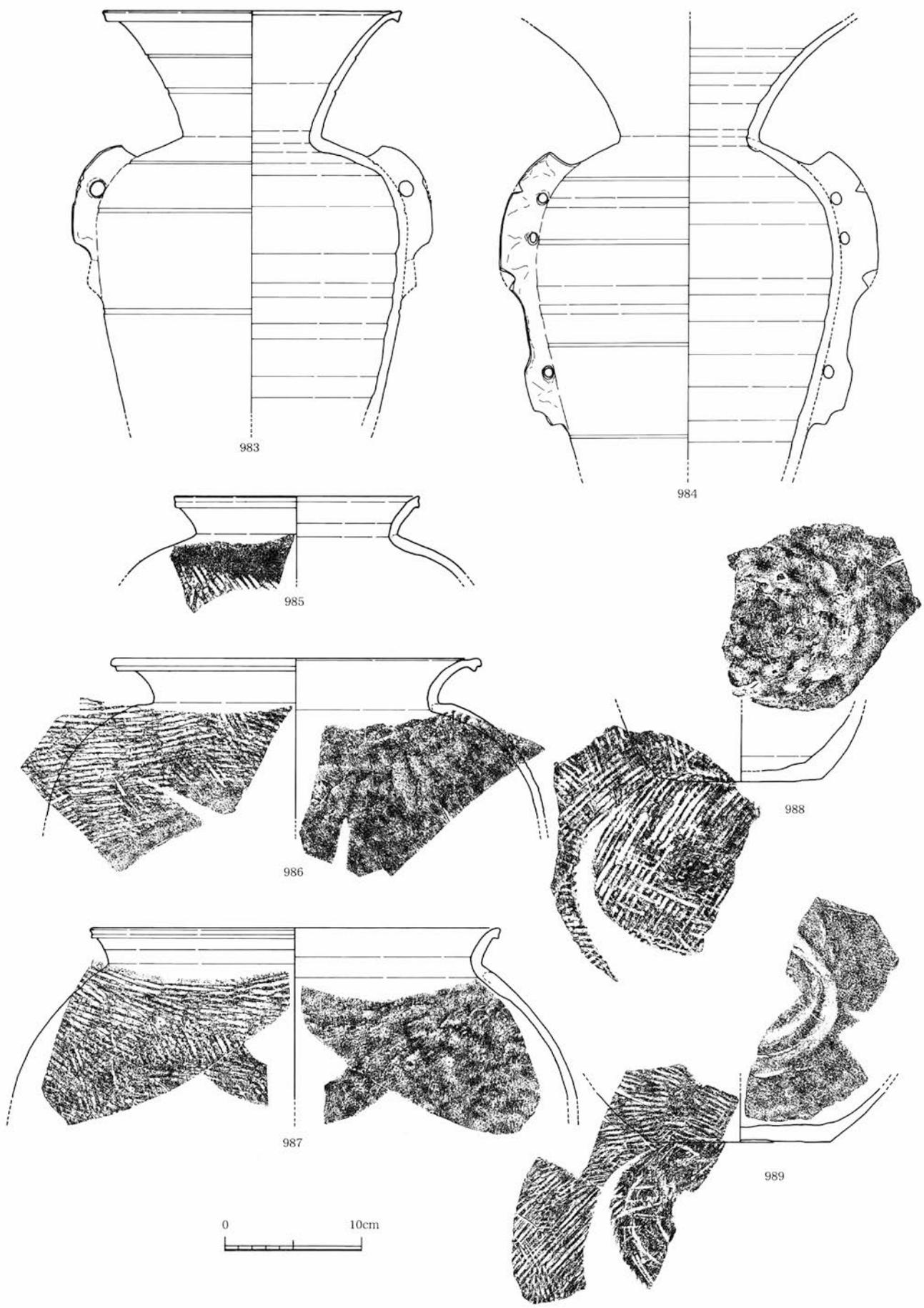
第107图 B地区 灰原出土 須恵器(8) (S=1/4)



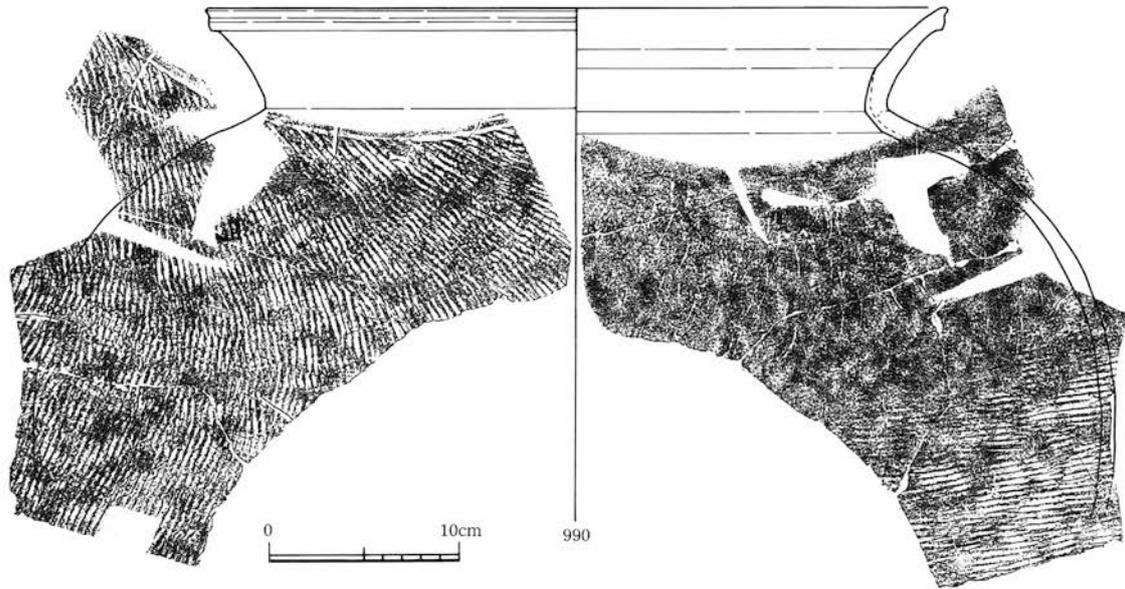
第108图 B地区 灰原出土 須惠器(9) (S=1/4)



第109図 B地区 灰原出土 須恵器(10) (S=1/4)



第110図 B地区 灰原出土 須恵器(11) (S=1/4)



第111図 B地区 灰原出土 須恵器(12) (S=1/4)

器肉が薄い。(937,938)は、口径が大きく、器肉は厚く、胴が直立して外面に規則的で沈線状のロクロヒダを呈し、口縁端部に面をもつ。

広口鉢 (鉢B) (939~959)

様々なタイプのものがみられる。(939~941)はくあ類の口頸部が直立するタイプで器肉が非常に薄いものに属するものであるが、7号窯埋土出土のものとの違いは、口縁端部がやや外反気味で口縁端部に突出部をもつことである。くい類の、器肉が薄く頸部境は比較的明瞭であるが、口縁に向かって内傾し端部は外側に巻き込む方法で突出するもの(942~945)、また口縁端部の突出をもたないもの(942,945)もある。これらは口縁端部に面をもっているが、特に(942)は胴部の張りから不明瞭な頸部を経て内湾しそのまま口縁に至っている。くえ類では、(956,957)が該当する。う類と同じタイプではあるが、端部突出をもたないもので、肩の張りも弱いものである。くお類は、(958)が該当する。器肉の非常に厚いもので、口頸部が「くの字」を呈して外傾し、胴部肩より下にケズリを伴うものである。但し、7号窯埋土で出土したものと違い、内面には工具による乱雑なナデ調整がみられない。くか類の口頸部が「くの字」で胴が張るタイプは、該当するものがない。くき類の口頸部が「くの字」を呈して、肩の張る器形である。口縁端部は面を西経、胴部下半にケズリ調整を行うものもある。(951)のみ口径14.0cmの小ぶりなものとなっている。以上のものは図化しているのだが、この他に、図化していないもので、くう類の口頸部「くの字」が殆どないに等しい程短く、端部を突出させて面もたせているタイプで、胴部下半にケズリを伴うものが出土している。

また、底部破片で、外面にヘラ書き「□丸右閉」が出土している。

長胴甕 (962~968)

口縁端部は外屈した上に折り返す形態で、折り返しが直立するタイプと折り返しが外反するタイプがある。折り返しが直立するタイプはしいて言えば(962)であろうか。ただ、端部で外反している。折り返しが外反するタイプは、(963,966,967)である。また、折り返しが直立も外反せず、口縁が内傾するだけのもがある(964)、同じく折り返しが内傾するが端部外面のみ突出しているもの(965,968)もある。この器種も本来ならば土師器器種であるものが還元焰焼成されているのである。胎土は土師器器種と違いはなく同じ様な混和剤を多く含むもので、焼成度合いが非常に堅緻、器肉は非常に薄い。

長頸瓶 (瓶B) (960,961)

(960)は、肩が丸く、頸部転換点から大きく外反して口縁端部が突出して外側に面を作るものである。口頸部と胴部にそれぞれ2条の沈線をもつ。(961)のように台が付くものである。

双耳瓶 (瓶D) (969~984)

法量は小型(969~973)、中型(974~980)、大型は(981~984)の3法量がある。口頸部の形態では、外反して口縁端部を突出させて面を成形するものが主体であるが、中には口縁端部に面を成形するものの端部が少し屈曲して内面に凹みをもつもの(972)や、口頸部が強く外傾して、口縁端部に面をもたないもの(977,978)もある。

胴部の形態では、底部が直立気味に外傾して立ち上がり、緩やかに内湾しながら頸部に至る器形が中心である。中には肩がひどく張るタイプ(976~978)がある。底部まで復元できているものが少ないのだが、胴部下や底部境を削るものや、逆に削らないもの(974)もみられる。また、胴部外面に、ヘラ記号「+」(680)や、ヘラ書き「全提」をもつもの(982)がある。(982)は沈線上位に、上下2箇所を残存破片から確認している。

耳の形態は、様々な種類がある。上に1穴のみ穿孔で下のかえりが短いもの(969,973)、上に1穴穿孔で下のかえりが長いもの(972,973)、上に1穴で、長い下のかえりにも1穴穿孔するもの(980)。上に2穴の穿孔で、かえりが長いもの(975)。同じく上が2穴で、下のかえりに1穴穿孔するもの(979,984)。同じく上が2穴で、下のかえりに1穴穿孔するもので、上と下の間隔が広いもの(979,984)。同じく上が2穴で離れて下に1穴穿孔するもの(976)。以上のよ様な耳の違いがみられる。(983)は図化に復元破線を入れてあるのだが、本来はもっと長い耳を有するものであろうと思われる。ご容赦願いたい。耳は接着後、胴部接点部分、耳端面をヘラで削られ、穿孔周囲を円形に削っているものもある。

甕 (985~990)

平底甕は底部が平底を呈し、口頸部が「くの字」に強く外反、口縁端部外面を突出させて面を作るタイプで、胴部は上半しか復元できていないが、肩から丸みを帯びて胴が張るものと、口頸部の外反が弱めで頸部以下で肩を呈して胴が張るタイプがある。全体を叩き締められ、底部外面まで及ぶ。また、底部が復元できていないため形態が不明であるのだが、口径32.8cmを測る大型の甕がある。

4. 粘土塊だまり出土

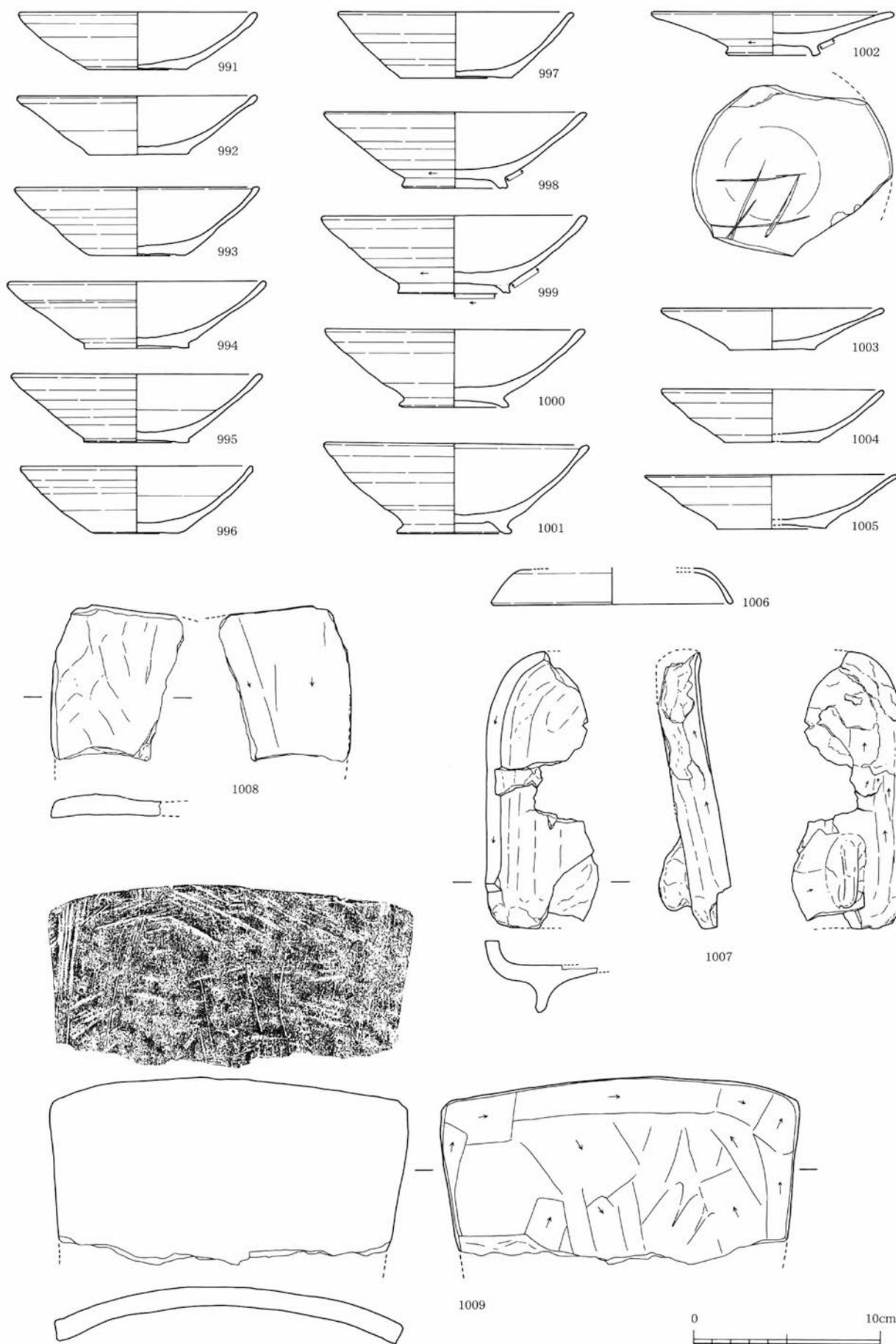
粘土塊だまりからは、還元焼成粘土塊が集中して出土するものの、粘土塊以外の出土品もあり、B地区全体で12%含有率をもつ。遺構としては、7号窯に関係しない性格のものであるが、出土品をみても、埴A・Bを中心に食膳具が79%含有率、貯蔵具が21%でやはり双耳瓶が多い。器形等、全般として前述の出土遺物を網羅しており、大差はないと思われるので、この他、前述していない器種と特殊遺物特について記述しておく。

特殊遺物(1006)は体部に屈曲部分をもっており、蓋ではないかと考えられるものである。ただ、内面側が降灰している。(1008,1009)は、灰原でも出土している特殊陶製品である。(1008)は、凸面が撫でられており、底面にはケズリが施されるものである。瓦の可能性もあると考えているのだが、瓦としては器肉も薄く、瓦としての痕跡もないため、特殊陶製品としている。(1009)は、7号窯埋土や灰原でも出土しているものと同じ側面側に屈曲をもたない平坦な形状のもので、巾は19.2cmである。凸面には棒状工具で叩かれたような痕跡、中央部分は図化していないのだが巾2cmの縦方向のケズリが施される。凹面はほぼ全体が削られたり指ナデがみられる。端面も切り取られるかの如く削られている。やはり瓦や硯の可能性も考えたが、規格・形状に大きな違いがあるため、用途不明の特殊陶製品として捉えている。

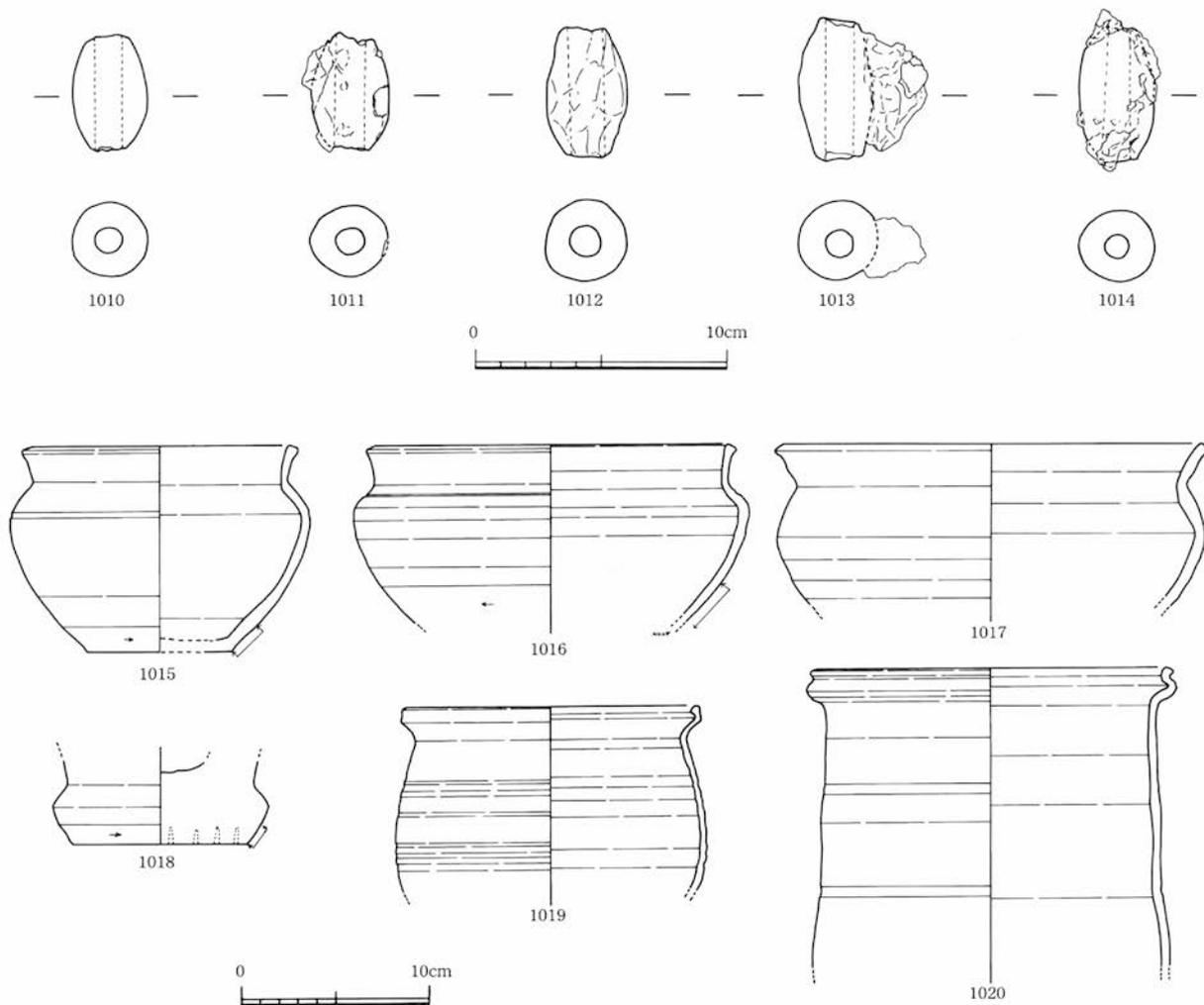
土師器器種である小型甕(1091)が出土している。器肉は薄く、口縁が外反しつつ端部を内面側に折り返す形状を呈す。

第3項 出土須恵器の時期について

時期については、何度も記述するのだが昭和58年度A地区灰原調査分の報告書の中で検討されており、1-A・1-B号窯出土須恵器が、“1号灰原”に相当することがわかっている。田嶋編年のVI₃期にあたり、暦年代は10世紀第1四半期~第2四半期である。また、7号窯についても同時期であろうと著者は考えた。ただ、詳細について判断し兼ねる部分もあり、正確に位置づけたく、望月氏に出土品を見てもらい、教示を頂いた。これによれば、1-A号窯出土遺物はVI₃期の古段階ということである。1-B号窯はVI₃期の新段階ということである。埴Bのベタ高台や皿Aの終末期に相当するような定形小型化と器肉の薄さが挙げられ、総じてVI₃期の新段階に位置するであろうということである。また、7号窯もVI₃期の新段階ということであり、全く様相を異にする性格をもつものと判断された。そして3基の窯には連続性がないものとされた。1-A号窯、7号窯では瓦の生産も行っており、軒先瓦の筈により、その相違が確認されている。この詳細については、第4節の10世紀の瓦をご覧いただければと思う。



第112図 B地区 粘土塊だまり出土 須恵器・特殊品(1) (S=1/3)



第113図 B地区 粘土塊だまり出土 陶錘・須恵器(2) (上段S=1/3, 下段S=1/4)

参考文献 (第4章遺構、第5章第1・2章)

- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会
 石川県埋蔵文化財センター 1997 『篠原遺跡』
 上原真人 1997 『歴史発掘11 瓦を読む』講談社
 大脇 潔 1999 「鷗尾」『日本の美術1』至文堂
 窯跡研究会 1999 「須恵器窯構造資料集1 - 出現器～8世紀中頃を中心にして-」
 窯跡研究会 2004 「須恵器窯構造資料集2 - 8世紀中頃～12世紀を中心にして-」
 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『つばとこめ 第8回北陸古代土器研究』北陸古代土器研究会
 京都大学文学部考古学研究室 1982 『丹波周山窯址』
 小松市教育委員会 1991 「戸津古窯跡群Ⅰ」
 小松市教育委員会 1991 「那谷桃の木古窯跡」
 小松市教育委員会 1992 「戸津古窯跡群Ⅱ」
 小松市教育委員会 1993 「戸津古窯跡群Ⅲ」
 小松市教育委員会 1993 「ニッ梨豆岡向山古窯跡」
 小松市教育委員会 1999 「林タカヤマ窯跡」
 小松市教育委員会 2002 「ニッ梨一貫山窯跡」
 小松市教育委員会 2004 「八里向山遺跡群」
 武生市教育委員会 1995 「王子保窯跡群Ⅶ」
 北陸古代土器研究会 2001 「つばとこめのつくり方 北陸古代土器研究第9号」
 望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究会第2号』北陸古代土器研究会
 望月精司 1994 「南加賀窯跡群における8世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究会第4号』北陸古代土器研究会
 望月精司 1995 「加賀地域における7世紀後半の須恵器・土師器生産」『北陸古代土器研究会第4号』北陸古代土器研究会
 望月精司 1999 「越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具」『つばとこめ 第8回北陸古代土器研究』北陸古代土器研究会
 望月精司 2003 「9・10世紀における北陸の須恵器窯構造」『第9回須恵器窯構造検討会北陸例会資料』
 余詠琢磨 2004 「古代窯業技術論」『須恵器窯の技術と系譜2』窯跡研究会

第4節 10世紀の瓦

10世紀の須恵器窯が存在するA地区、B地区いずれでも瓦が定量出土しており、瓦生産を行っていたことが伺われる。10世紀の瓦生産は越中以西の北陸では南加賀窯跡群以外では確認されておらず、9世紀中頃以降の加賀立国や国分寺転用が生産の契機となっていると予想される。南加賀窯跡群では当窯以外に、戸津窯と上荒屋ホウジョウヤマ窯で生産を確認しているが、両窯とも9世紀後半に生産の中心があり、10世紀の瓦生産は当窯が中心であった可能性を持つ。ただし、当窯の瓦と併行時期にある加賀市高尾廃寺で出土する瓦群を生産した窯が南加賀窯跡群内に存在しているはずであり、製作技法の精緻さから言えば、高尾系の方が主軸となる窯であったといえよう。以下に、各地区の瓦について述べるが、最終項では戸津窯の瓦群の評価も含め、考察することとする。

第1項 A地区出土瓦

今回の調査において出土した瓦は破片総数で57点、重量で11.2kg、遺物箱数換算で2箱程度と少ないが、平成5年に報告した昭和58年度調査のA区灰原の瓦を含めると、破片数で186点、箱数換算で7箱出土していることになる。平成5年度報告段階ではA区出土瓦を3号窯で焼成されたものと理解したが、3号窯灰原は今回の調査結果により、斜面に存在する2基の須恵器窯(1-A号窯と1-B号窯)、そして両窯とは別に製品選別廃棄したような専用焼台・粘土塊置台を多量含む須恵器群とが混在したものであることが理解された。瓦もそのような複数の窯の製品である可能性はあるが、比較的まとまった様相を示しているため、単一窯の製品と考えるのが穏当と判断した。ただ、瓦自体は単一層にのみまとまる出土状態ではなく、広く窯の埋土や灰原上層等に分布しており、窯の帰属を決定付ける床や前庭部下層からも出土していないなど窯を特定する根拠資料に欠けるのが現状である。ただ、1-A号窯の前庭部灰層からの流れを追うことが可能な灰原下層(え4B灰原8層・う3C灰原7層)から1-A号窯期の須恵器食膳具を伴いながら数点出土しており、当瓦群を1-A号窯製品と判断するに至った。1-A号窯は平成5年報告では1号窯灰原としたものであり、今回の報告で窯の帰属を変更するとともに、瓦の位置づけを修正することとなるが、出土する瓦当文様の範傷から見て、3号窯の時期に帰属するよりも、1号窯の時期に置くことで前後関係の矛盾が解消され、編年上の違和感もなくなると理解している。

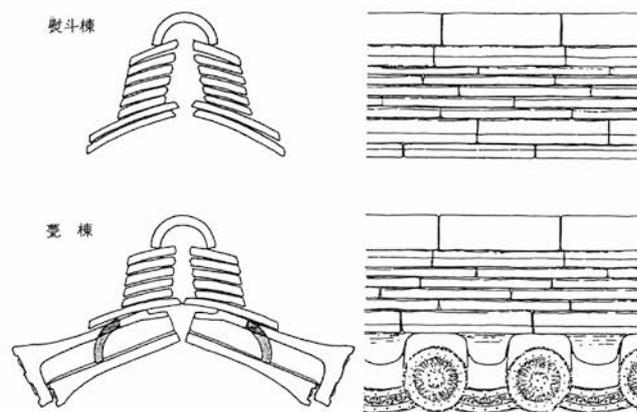
1. 瓦の種類と数量

A地区からは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬘斗瓦が出土している。鬘斗瓦は平瓦と破片での識別が不可能であり、併せて数値化した。今回の報告分に昭和58年度調査分を合わせ、数量構成を提示すると以下の表のとおりとなる(偶数は瓦がもつ4つの隅に対する残存隅数を示したもので、生産個数を示すのに有効とされている)。

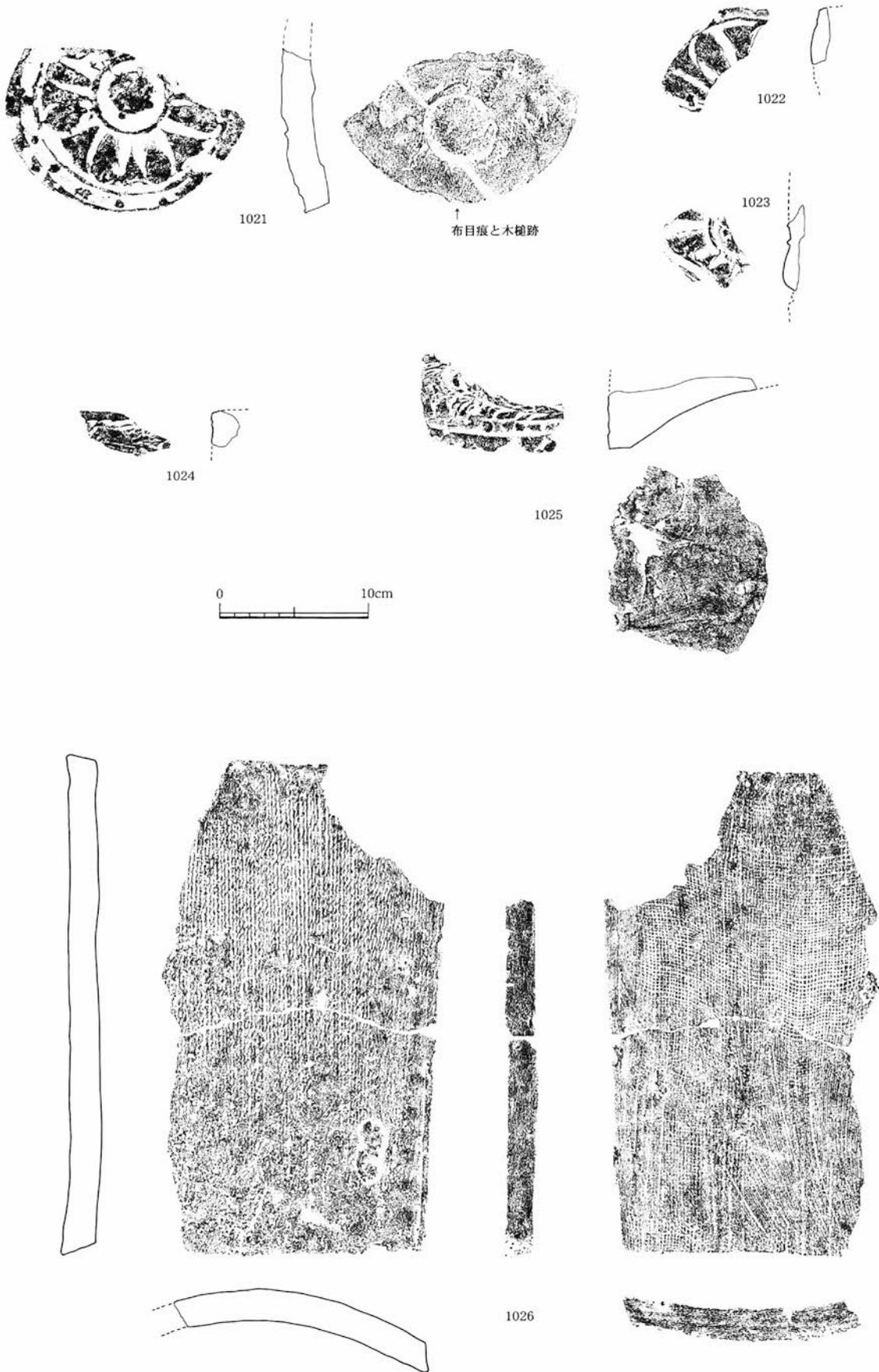
種類 計測法	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦(鬘斗含む)	合計
破片数(%)	5 (2.7%)	18 (9.7%)	5 (2.7%)	158 (84.9%)	186
隅数(%)	7/4 (10.8%)	3/4 (4.6%)	4/4 (6.2%)	51/4 (78.5%)	65/4

第20表 A地区 出土瓦種別構成表(昭和58年度調査分含む)

平瓦が8割の圧倒的多数を占め、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦は5~10%とほぼ近似した数量となる。平瓦が多いのは、鬘斗瓦を含んでいることにある。鬘斗瓦は成形の最終段階で平瓦を縦に半裁して成形するものが多く、破片では基本的に識別が困難なものである。加えて、平瓦として焼成した後に縦に割って鬘斗瓦として使用するものもあり、この時期の平瓦平面形状が台形からやや方形気味になっていることも、当期の瓦の使用方法を反映しているものと理解する。つまり、平瓦の突出した多さは鬘斗瓦の多用した瓦葺き建物に起因するものであり、平安時代前期に出現する新たな瓦葺き



第114図 鬘斗棟と葺棟(上原1997転載)



第115図 A地区 出土瓦 (S=1/4)

法に基づく可能性がある。本来、寺院等に葺かれる総瓦葺きは平瓦、丸瓦を主体構成とする屋根全体を葺くものであるが、平安時代前期の宮内建物や高級貴族の邸宅などに檜皮葺きで棟だけを瓦で葺く方法が採られている。図示したように、棟のみを瓦で葺くものであり、鬘斗瓦だけを積んだ「鬘斗棟」と軒先瓦をその下段に詰め込んだ「葺棟」とがあったと考えられる（上原1997）。後者の葺き方は軒先瓦を見せる葺き方という点で、より上級の建物に葺かれる方法と考えられ、当窯の軒先瓦率を勘案すれば、「葺棟」に使われた瓦群であった可能性があろう。当窯の瓦の出土量や補修瓦としての使用の可能性など、生産地の構成割合が必ずしも瓦の葺き方を規定するものではないといえるが、鬘斗瓦の量が多いことは確実であり、新たな瓦葺き方法導入が生産に反映されたものと理解しておきたい。

なお、瓦の胎土特徴としては、通常の須恵器よりも細かな砂粒を多く含み、小石や大粒砂粒は目立たない。瓦種別に関係なく、同様の胎土特徴をもち意識的に瓦胎土を須恵器とは別に調製している可能性が高い。焼成についても、瓦の場合、通常は須恵器よりもやや焼きが甘く還元焼成されるのであるが、当窯では焼き歪みや降灰する堅緻焼成が過半数を占める状況にある。通常の焼きは32%と少なく、酸化生焼けが17%、灰白色生焼けが5%で構成される。窯内の置台転用されたものも定量含んでいたのであろうが、置台として使用したとは思えないものも堅緻、降灰しているものが定量存在しており、意識的に降灰焼成した可能性もある。

2. 各種瓦の検討

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は筒部と瓦当部を供土で成形する「横置き一本造り技法」によるもので、1021の瓦当表面には布目が一部残る。この布目を切るようにして円形の窪みが確認されるが、これは瓦範へ瓦当面を押し込むための木槌痕と見られる。瓦当文様は1021～1023とも全て複弁四葉蓮華文で、同範と判断されるものである。瓦当面の文様起伏が極めて浅いもので、瓦範自体の彫りが浅いこともあるが、瓦当面の整形痕が残っているなど、瓦範への押し付けが極めて弱いことにその主要因がある。瓦当面から瓦範がずれて押されているなど、極めて雑な作りをしており、瓦当文様も外区の珠文や圏線が途切れたり、中房内が隆起して蓮子自体不明瞭となるなど、表現が極めて雑となる。弁区内の複弁の間がやや離れ、間弁が入ったような、一見八葉化した文様を構成しており、複弁四葉蓮華文の中でも極めて退化した段階のものといえる（軒丸Ⅱ類とする）。昭和58年度調査分でも以上述べた軒丸瓦と同範製品が1点出土しているが、これとはタイプの異なるつくりの丁寧な複弁四葉蓮華文が出土している（①）。戸津窯で主体的に出土するタイプで、戸津窯製品と同範のものである。南加賀窯跡群への複弁四葉蓮華文軒丸瓦導入段階のものであり、これを軒丸Ⅰ類として、軒丸Ⅱ類とは区別する。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は瓦当面の左側部分のみの出土ではあるが、昭和58年度調査で出土した形態の崩れた均整唐草文（④～⑥）と同範のものである。外区を分ける界線は右側部分以外途切れており、珠文の間隔、大きさも不揃いで、粗い作りとなる。内区の唐草文様は樹枝状を呈すものの、枝や波状文様は極めて太く、とくに左側の表現は陰刻したような文様表現となる。全体的に極めて粗雑な表現であり、中心飾りも不明瞭で、瓦当面の形状と瓦範が一致せず、瓦範が瓦



第116図 昭和58年度調査の軒先瓦 瓦当部 (S=1/4)

当面からはみ出してしまいうものも多い。作りや瓦当文様、瓦に対する意識など軒丸Ⅱ類と共通するものがあり、これとセットをなす軒平瓦と位置づけできよう(軒平Ⅱ類)。当軒平瓦は顎部の剥離するものが多く、接着が不完全であることを示す。顎から凸面には粗いケズリ調整を施し、凸面に布目が一部かぶる部分もある。当地区では主体をなす瓦当文様だが、昭和58年度調査分では1点のみ、文様表現が流麗で端正な作りを持つ均整唐草文が出土している(③)。戸津窯で主体的に出土するもので、軒丸Ⅰ類とセットをなす。飛雲状の中心飾りから左右に展開する樹枝状の表現の細かな唐草文で(軒平Ⅰ類)、凸面には布を被せて平瓦部を成形した際の布目が顕著に残る。

以上の軒先瓦について、Ⅰ類は①と③の1点ずつであり、主体はⅡ類となる。Ⅰ類の焼成を行った可能性は全くないとはいえないが、他の平瓦や丸瓦の作りがⅡ類に共通すること、Ⅱ類の降灰を受け、焼成堅緻である特徴に対し、Ⅰ類は生焼けと焼成良好品であることなどを考え合わせると、同じ焼成段階のものとは思われにくく、A地区1号窯以外で生産されたものと考えるのが妥当だろう。当窯が戸津窯と近接しているとは言え、混在したとは考えがたいが、Ⅱ類文様の瓦がⅠ類文様を模倣した可能性を考えると、瓦当文様モデルとして戸津窯から持ち込まれた可能性は否定できないであろう。

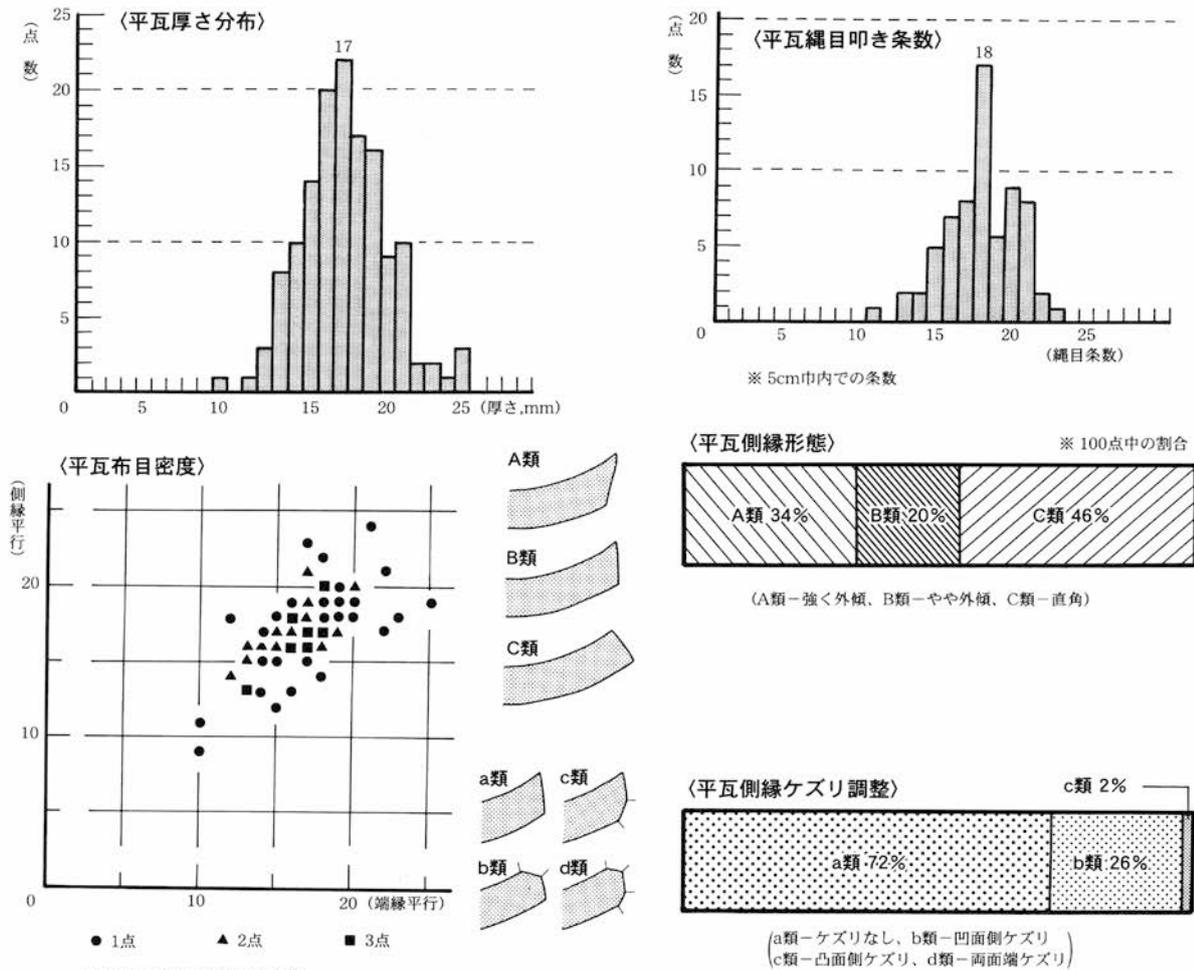
(3) 丸瓦

丸瓦は今回の調査で破片が1点のみ出土しただけであり、昭和58年度調査でも出土量は少ない。平瓦に比べて薄く、布目は比較的細かい。狭端部は玉縁状有段形態のもののみである。

(4) 平瓦・熨斗瓦

平瓦は昭和58年度調査分も含め、全て一枚造りによるものである。今回の調査で出土したものは多くが破片で、図示したものは1026のみであるが、以下に昭和59年度調査分の成果を含め、A地区1号窯の平瓦(熨斗瓦)様相をまとめる。

形状は広端長と狭端長の差のあまりない方形に近い形状のものが主で、幅23~25cm、長34cm程度のものが基本的な



第117図 A地区 出土平瓦 計測データ (昭和58年度調査分を含む)

きさであったようである。厚さは13~25mmとややばらつくが、16~20mmに主体をおき、全体的に小型の感がある。凹凸両面に撚りの太い糸切り痕を明瞭に残すものが目立ち、全般的に凸面叩き成形が弱い傾向にある。凸面叩きは今回調査部分では全て縄目叩きであるが、昭和58年度調査では全体の5%に平行線文叩きが確認できる。縄目叩きは羽子板状の叩き板に縦に撚り糸を巻いたものと予想され、縄目条線が側縁に平行するように叩かれている。縄目の撚りの向きはLRが8割、RLが2割で構成される。後者の撚りの縄目粒は前者よりも明らかに大きく、撚り糸が太い特徴をもつが、条線間隔では前者がやや撚り糸の間隔を粗めにもつため、撚り糸種による縄目条数は明確に分けられない。全体傾向としては分布図に示したとおり、5cm幅で縄目条数15~21に分布し、18条に中心がある。平行線文叩きは、条線の中に木目の確認できないHe類叩きのみで、縄目叩き同様、側縁に対し平行線文の条線が平行する向きを持って叩かれている。He類叩き具は木目に対し平行に条線を刻んだ叩き具と予想しており、木取りの関係から叩き具の柄が伸びる主軸に沿って平行線を刻み込んだものといえる。つまり、縄目叩きとは撚り糸を巻きつけて条線を刻むか、平行線を彫り込んで条線を刻むかの違いであった可能性を持つが、叩き具形状は縄目叩きに対し、平行線文叩きの1回の叩き具痕の長さは異なっており、縄目叩き具は細長い形状であったのに対し、平行線文叩き具は須恵器甕成形に使用されるものに似たものであったと予想される。ただ、平行線文も側縁に平行して叩く意識は強く、それは縄目叩きに準じた叩き方であったろう。なお、凹面布目の布目密度、側縁形状と整形方法については図示したとおりであるので、参照されたい。詳細についてはB地区瓦のところで比較検討する。

第2項 B地区出土瓦

B地区から出土した瓦は破片総数で302点、重量で74.28kg、遺物箱数換算で10箱程度出土している。A地区の総計よりも多く出土しており、7号窯において定量の瓦生産が行われていたことを示す。この時期の窯構造については、遺構で述べた様に、焼成部急傾斜床面に粘土塊置台を整然と配置し、段状を形成する窯構造であるが、とくに7号窯については、操業の最終段階で、各粘土塊の上にさらに粘土を被覆して横に棚状に連ね、有段式の床面構造に改良してある。つまり、瓦窯の有段構造を意識したものと評価され、最終床面での操業段階では瓦生産に重点を置いていた可能性がある。焼成部床面や焚口・前底部土坑内に遺存するものはないが、操業の後半に当たる第3段階の灰層（お6・お7Gr-11層）を主体として、第4段階の灰層（え6Gr-20層）からも瓦が定量出土しており、窯の床構造改良と符合する。ただ、操業の第1段階とする17層からも鬼瓦を中心に定量の瓦が出土しており、後半の操業段階を中心として、操業初期段階から全般的に瓦生産を行っていたものと予想される。

1. 瓦の種類と数量

B地区からは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬘斗瓦、鬼瓦が出土している。鬘斗瓦は平瓦と破片での識別が不可能であるため、併せて数値化した。以下に種別数量を示したが、鬼瓦を除けば、平瓦が75%、軒丸瓦6%、軒平瓦10%、丸瓦9%の割合となり、A地区出土瓦の数量値に近似した様相を持つ。その要因については前項で述べたとおりであり、鬘斗瓦を多用する瓦葺き方法に基づく可能性が高い。

なお、瓦の胎土特徴としては、A地区同様、通常の須恵器よりも細かな砂粒を多く含み、小石や大粒砂粒は目立たない特徴が見られる。意識的に瓦胎土を須恵器とは別に調製していたのだろう。焼成については、A地区と異なり、堅緻焼成は20%を占めるだけで、通常はやや焼きの甘い還元焰焼成が66%を占める。灰白色生焼けが12%、酸化生焼けが2%という割合で、とくに鬼瓦に限っては、焼成堅緻に表面に降灰する程度に焼き上げている。自然釉がうっす

種類 計測法	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦(鬘斗含む)	鬼瓦	合計
重量kg(%)	3.31 (4.5%)	8.96 (12.1%)	4.78 (6.4%)	44.03 (59.3%)	13.2 (17.8%)	74.28
破片数(%)	12 (4.0%)	24 (7.9%)	12 (4.0%)	249 (82.4%)	5 (1.7%)	302
偶数(%)	6/4 (5.9%)	8/4 (7.9%)	15/4 (14.8%)	67/4 (66.3%)	5/5 (5.0%)	101/4

第21表 B地区 出土瓦種別数量

ら掛かるような光沢のある焼きを求めたものなのだろうか。鬼瓦は5個体以上確認しているが、いずれも同様の焼成具合であり、同時期に焼成されたものだろう。

2. 各種瓦の検討

(1) 軒丸瓦

当地区では軒丸瓦を4個体確認している。いずれも瓦当部の破片のため、全体的な様相を捉えることはできないが、1027については瓦当文様構成や範傷の位置などからA地区の1021と同範の退化した複弁四葉蓮華文（軒丸Ⅱ類）であることが確認される（239ページ）。ただ、当地区のものは花卉の輪郭線が2重になっており、A地区の瓦範を彫り直した可能性も考えられる。他の軒丸瓦（1028・1031）についても1027の花卉輪郭の2重線箇所が確認でき、同範と推察する。1029・1030については、同範を確認できないが、同様の複弁四葉蓮華文と思われ、同範の可能性が極めて高い。軒丸瓦はいずれも瓦範の押し込みが極端に弱く、瓦当面に薄っすらと花卉の輪郭線が確認されるだけのもので、瓦当文様を刻み込もうという意識が低い。なお、広端側の凸面に粘土被覆をしている丸瓦が出土しているが、これは軒丸瓦の筒部の可能性が高いものである（1048）。玉縁式のもので、凸面は粗いヘラケズリを全面に施す。凹面は筒部中央のみ布目残り、側縁近くはナデ調整されている。このナデ調整は玉縁部にも及んでおり、凹面の糸切り痕がないことと剥離接合面等から判断して、たたら成形による粘土板を使用したのではなく、帯粘土の塊を成形台貼り合わせて成形したものと予想する。布目の残らない両側縁部や玉縁部は付け足した部分なのだろう。他の丸瓦には見られない成形方法である。

(2) 軒平瓦

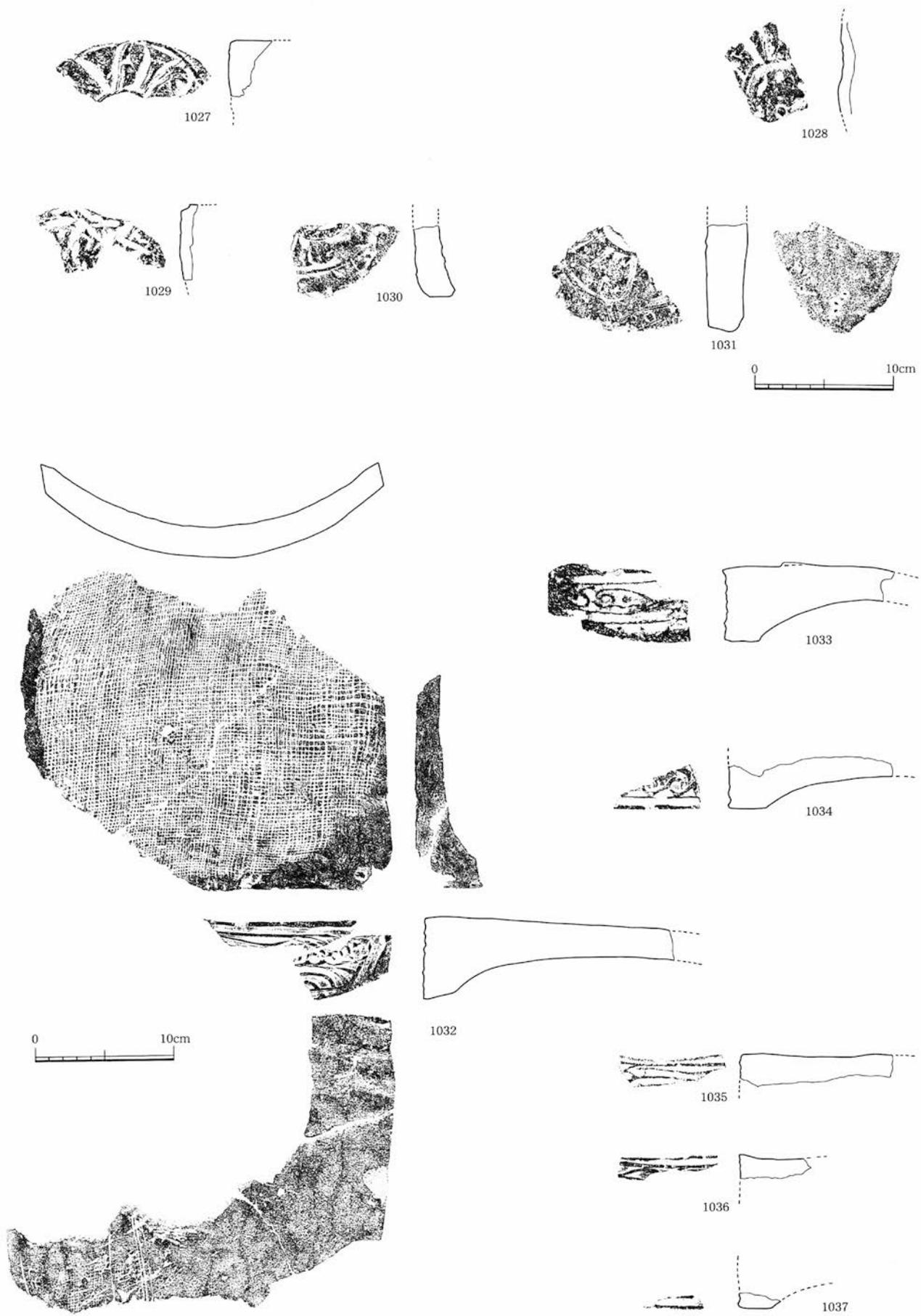
軒平瓦は破片も含め、瓦当面を確認できるものは13点あり、全てを図示した。瓦当文様は2種あり、1044のヘラ描き斜格子目文を刻むものと唐草文軒平瓦とがある。ヘラ描き斜格子目文は瓦当面に平行線文叩きで整形した後、比較的鋭利な工具で瓦当面を区画し、その中に乱雑な斜格子目文を刻むものである。唐草文軒平瓦（1032～1043）は全て同種文様を持つもので、同範瓦と判断する（軒平Ⅲ類）。中心飾りをもたない唐草文で、左右の表現は対称形となるが、中心付近は右に偏って唐草文が展開しており、偏向唐草文と呼べるものである。外区を分ける界線は左右対称形にしっかりと区画されるが、外区に珠文はなく、内区にのみ文様表現がある。A地区の軒平Ⅱ類に比べて線の描写が流麗なもので、枝葉の表現など丁寧かつ洗練された作りをしている。唐草末端は蕨手状に巻き込み、その描写を円形文にするなどやや簡略化した部分もあるが、軒平Ⅰ類に対する軒平Ⅱ類の模倣構成の流れとは異なる、新たな瓦範の導入を感じさせる。平瓦部の整形方法は凸面を全体的に粗くヘラケズリするものだが、狭端部側から凹面の布を凸面へと被せて押し付ける凸面布目成形方法のもので、1032にはその布目痕が一部残っている。なお、1057については軒平瓦の狭端部破片と考えられる。

(3) 丸瓦

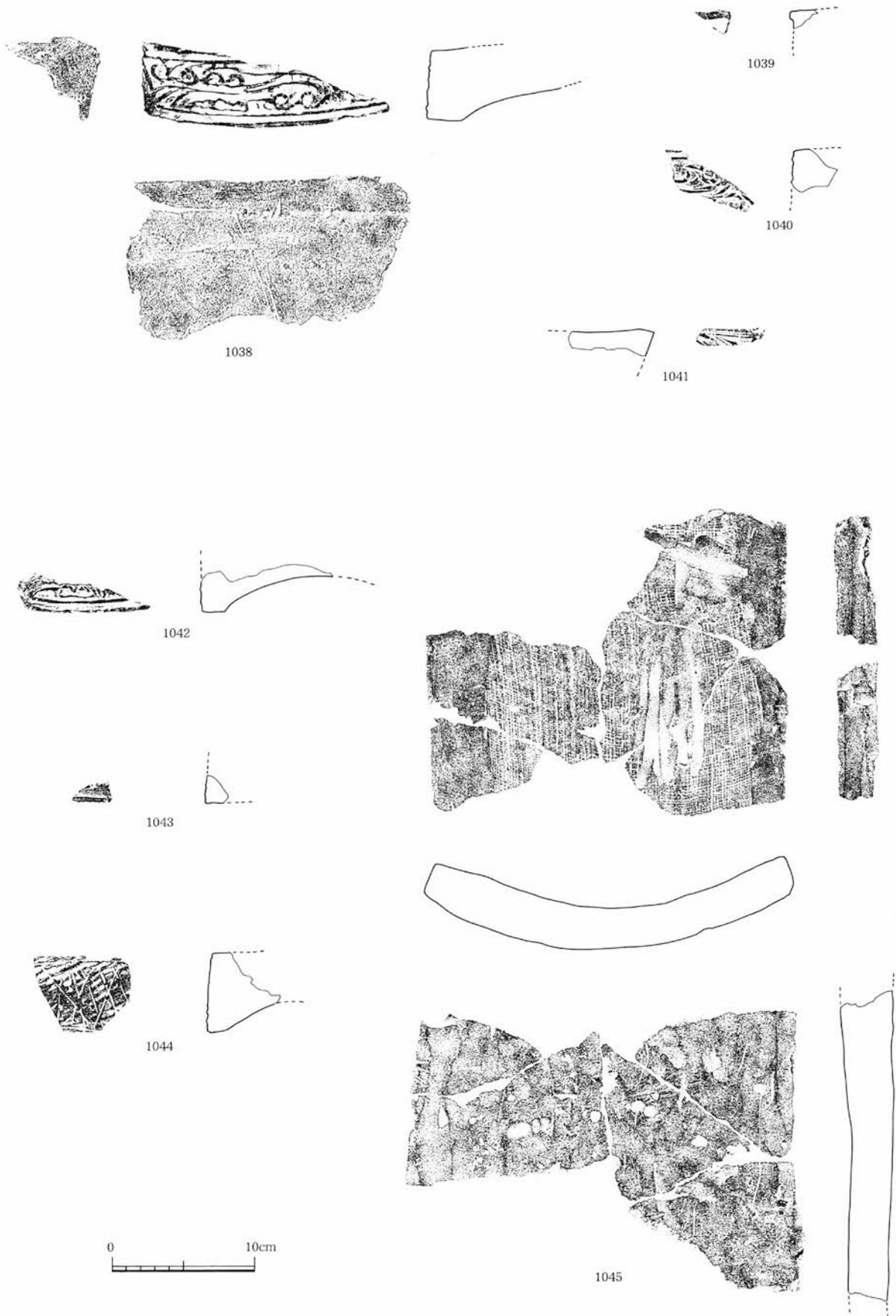
丸瓦は1096の完形に近いものがあるが、出土量は少ない。全て玉縁式の有段構造をもつが、凹面に布目を残すものと布目を残さないものがあり、成形方法が異なる。前者の布目を残すものは凹面に糸切り痕を残し、布目が全体に及ぶもので、通常の丸瓦成形が行われたものと予想される。布目は玉縁部へと連続しており、成形台自体が有段形態となっていたものである（1046・1049・1050）。凸面は縦方向の粗いヘラケズリ調整やナデ調整で、軒丸瓦筒部と共通するが、先述したように成形方法は大きく異なる。平瓦に比べて、相対的に若干薄く作られるが、凹面の布目に違いはない。以上の布目瓦に対し、凹面布目のない1051・1052が確認される。内外面にロクロ成形痕を残すもので、大きさに違いは感じられないが、布目瓦と比べると明らかに薄手である。有段式の円筒形土製品を成形した後に半截するもので、外面全体にはロクロケズリ、内面の側縁近くには縦方向の手持ちケズリなどが見られる。

(4) 平瓦・熨斗瓦

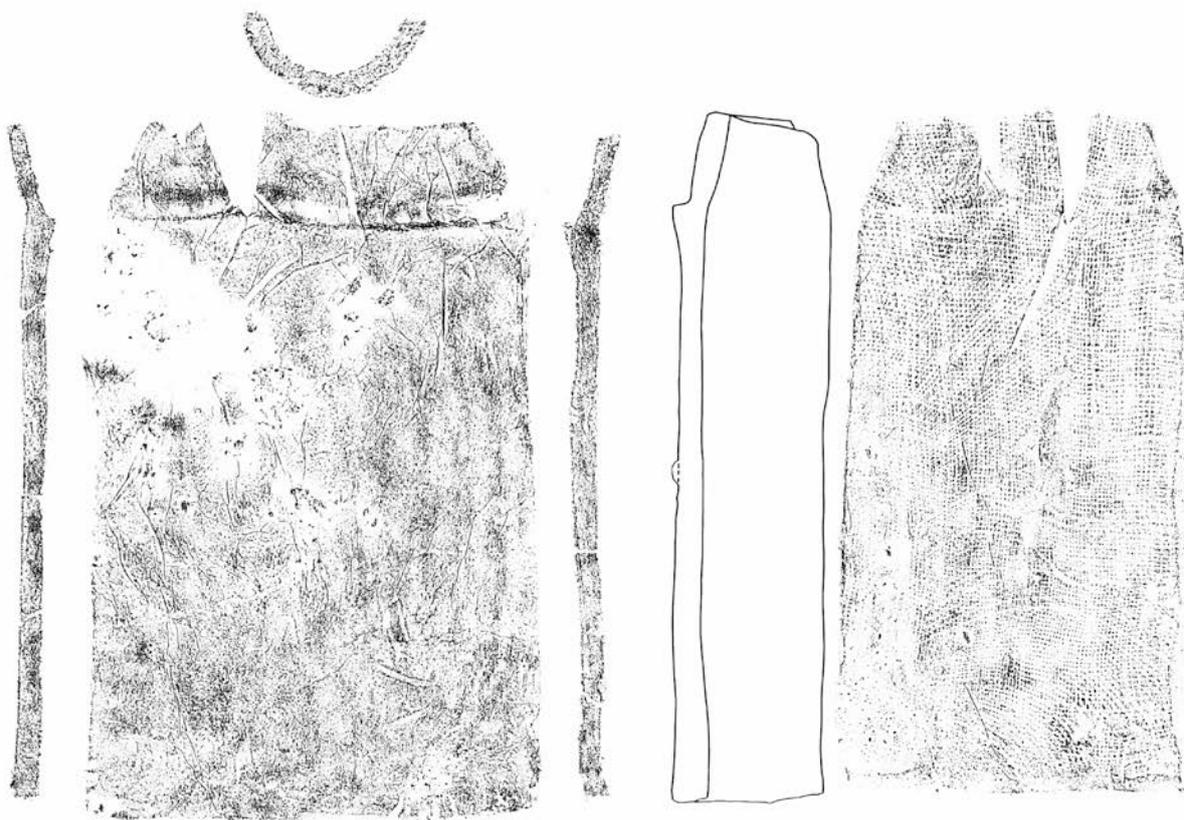
平瓦、熨斗瓦ともに全て一枚作りである。平瓦の全形を把握できるものは1053・1054のみで、前者は広端25.4cm、狭端24.3cm、全長35cm、後者は広端26cm、狭端22cm、全長37.6cmを測る。前者は凸面縄目叩きで、大きさにA地区で確認される縄目叩きの平瓦（幅23～25cm、長34cm程度）に近い。後者は凸面平行線文叩きで、台形に近い平面形を呈し、やや細長い特徴を持つ。凸面叩きの種類は確認できた185点中、縄目叩きが91%、平行線文叩き（全て木目直交のHa類）が9%であり、1053・1055の平行線文叩き瓦には一部縄目叩き（LR撚り）が重複している。重複関係を見ると、縄目叩き後に平行線文叩きを施しており、縄目叩きが平行線文叩きの施されていないところに残っていることから見て、瓦全面に縄目叩きを施し、その後平行線文叩きで再度整形している可能性を持つ。平行線文叩きはA



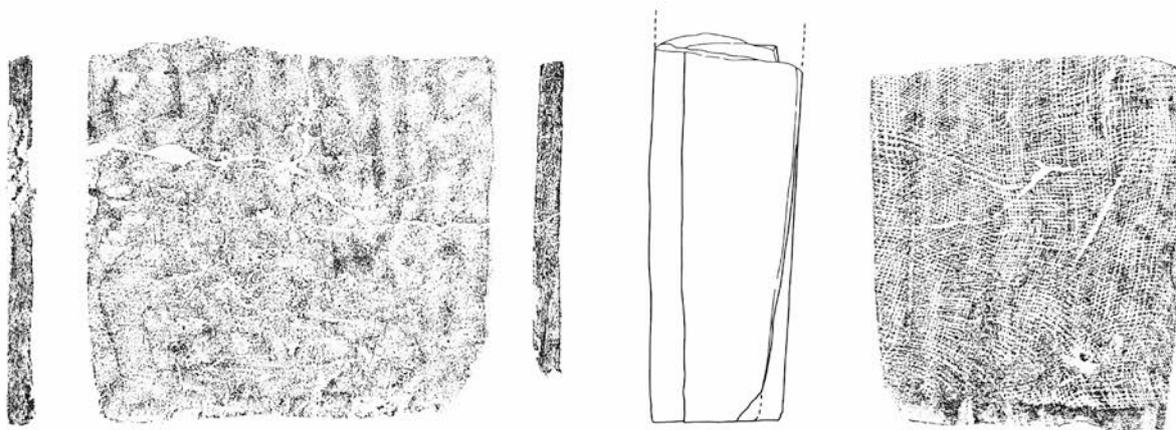
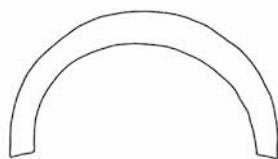
第118图 B地区 出土瓦(1) (S=1/4)



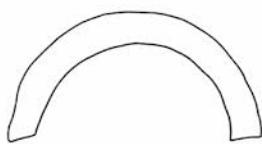
第119图 B地区 出土瓦(2) (S=1/4)



1046



1047

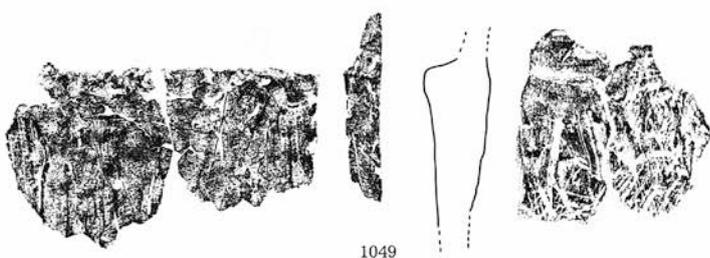
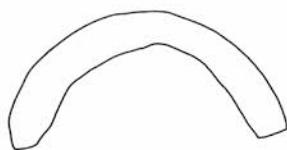


第120图 B地区 出土瓦(3) (S=1/4)



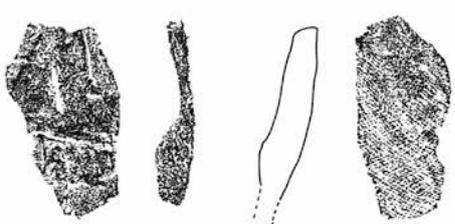
1048

0 10cm



1049

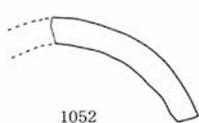
0 10cm



1050

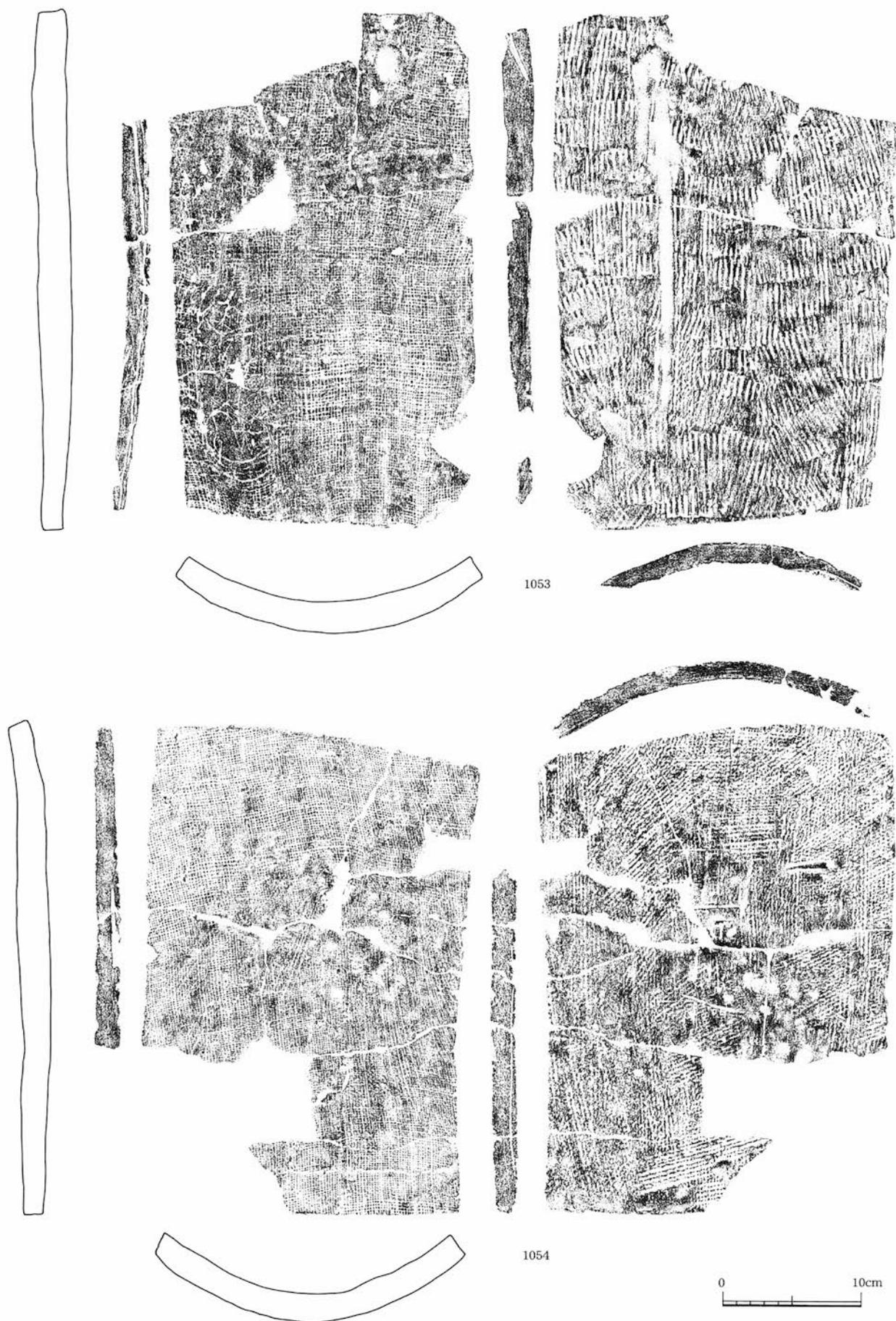


1051

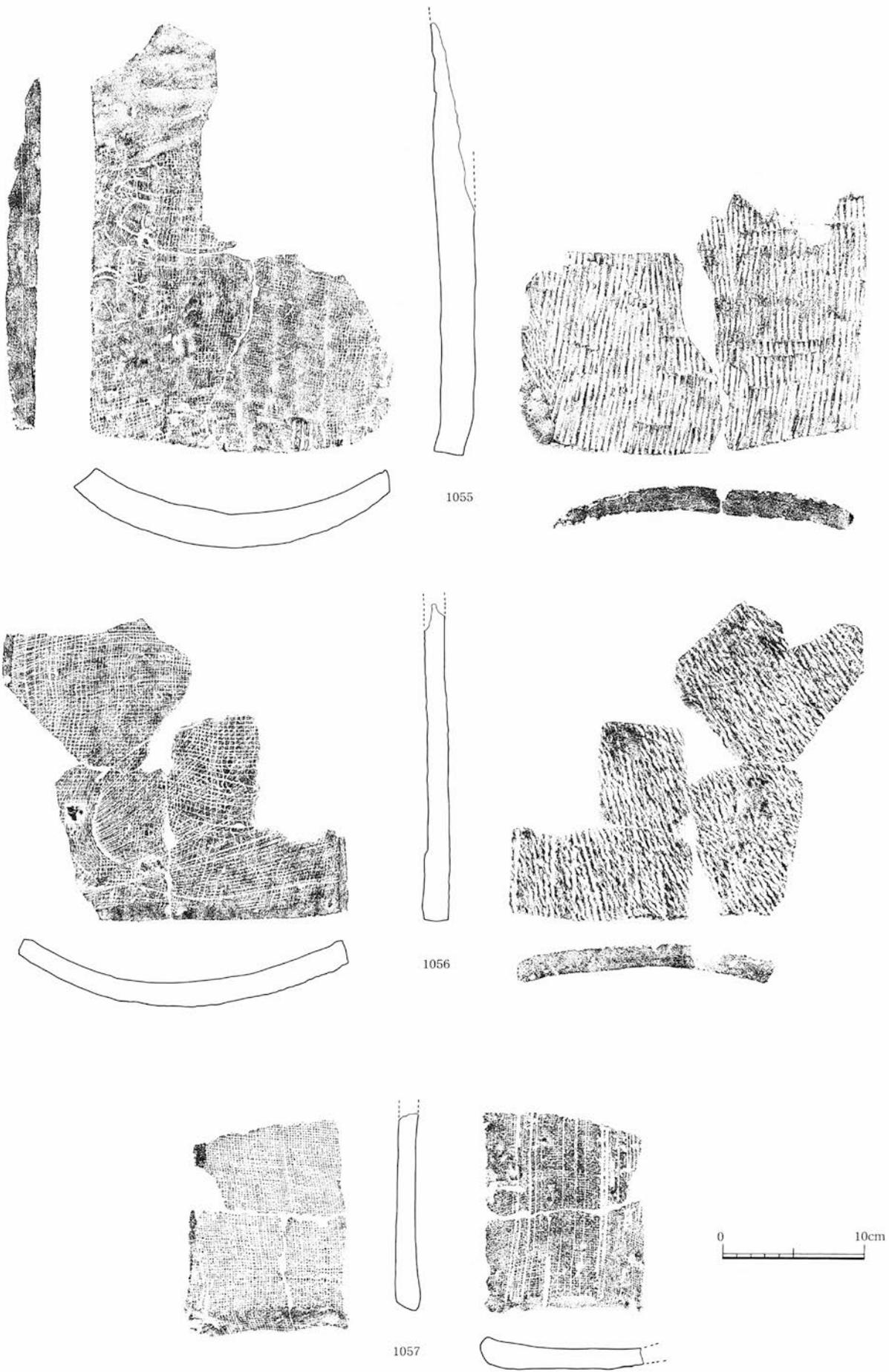


1052

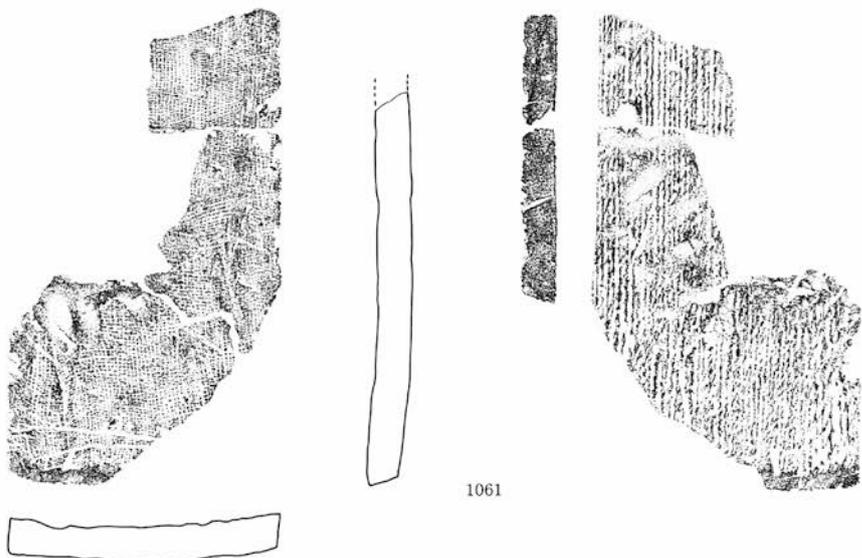
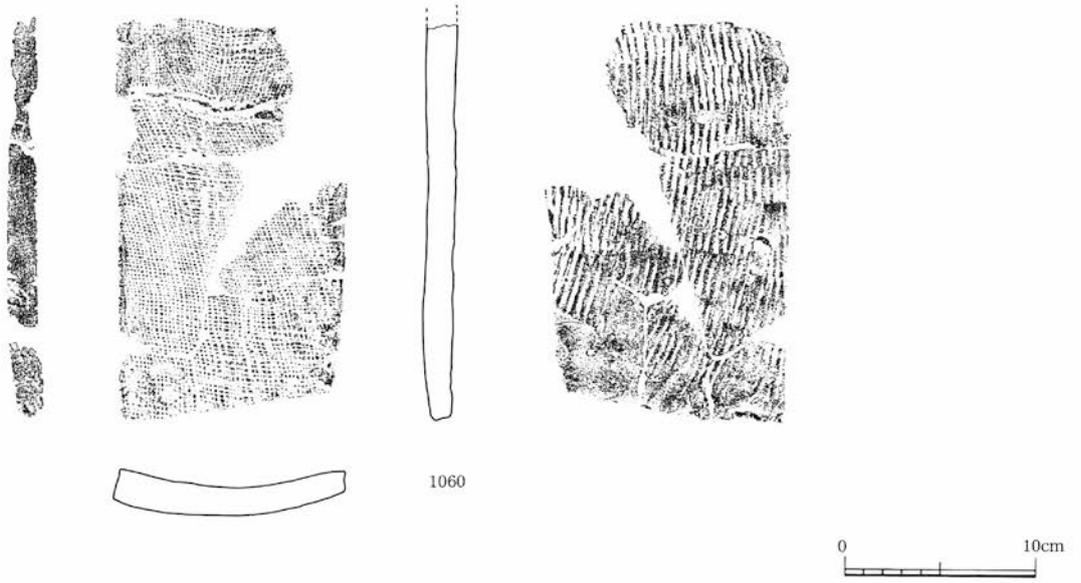
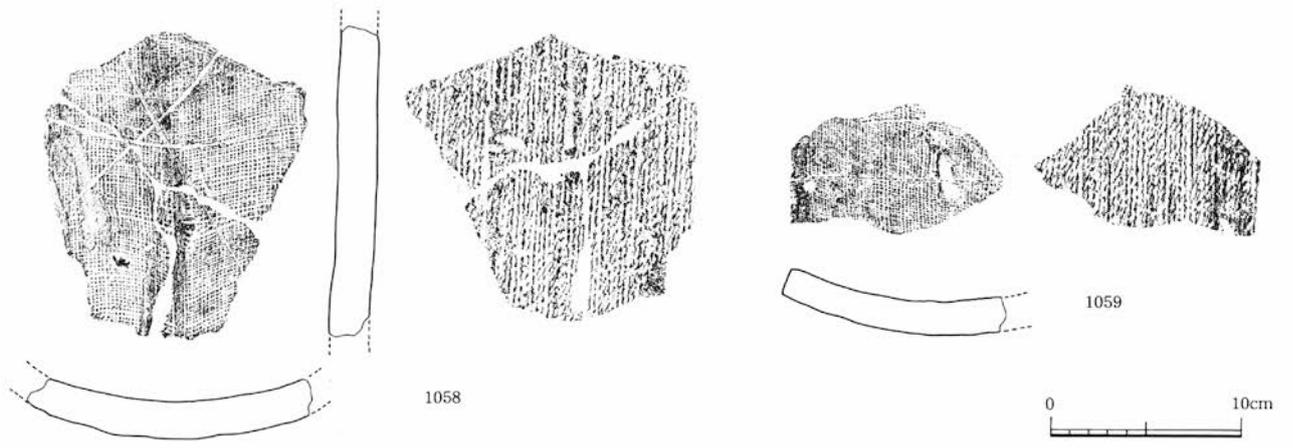
第121图 B地区 出土瓦(4) (S=1/4)



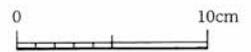
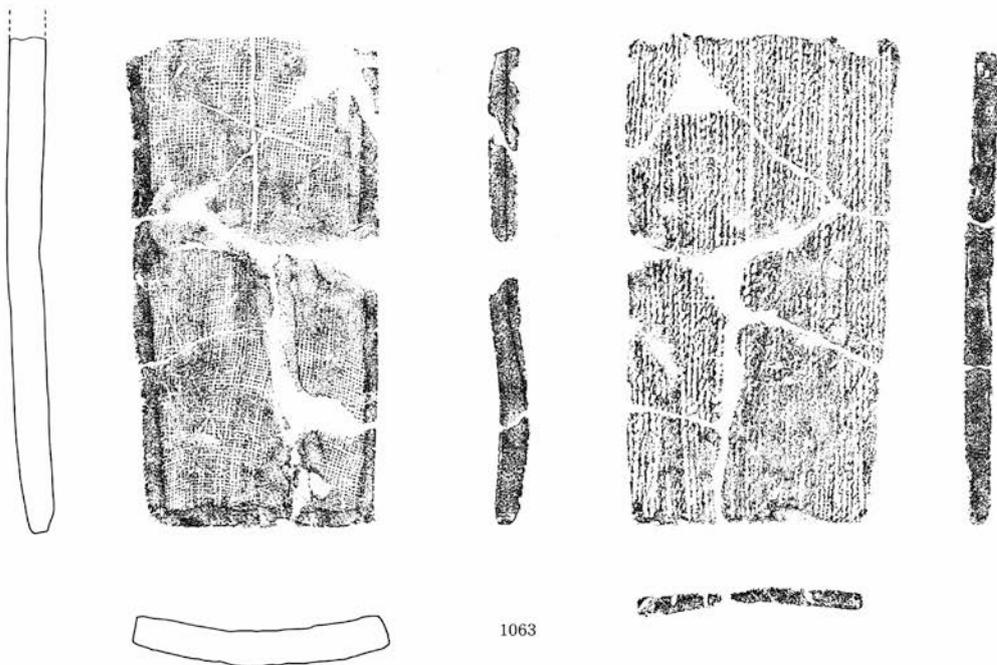
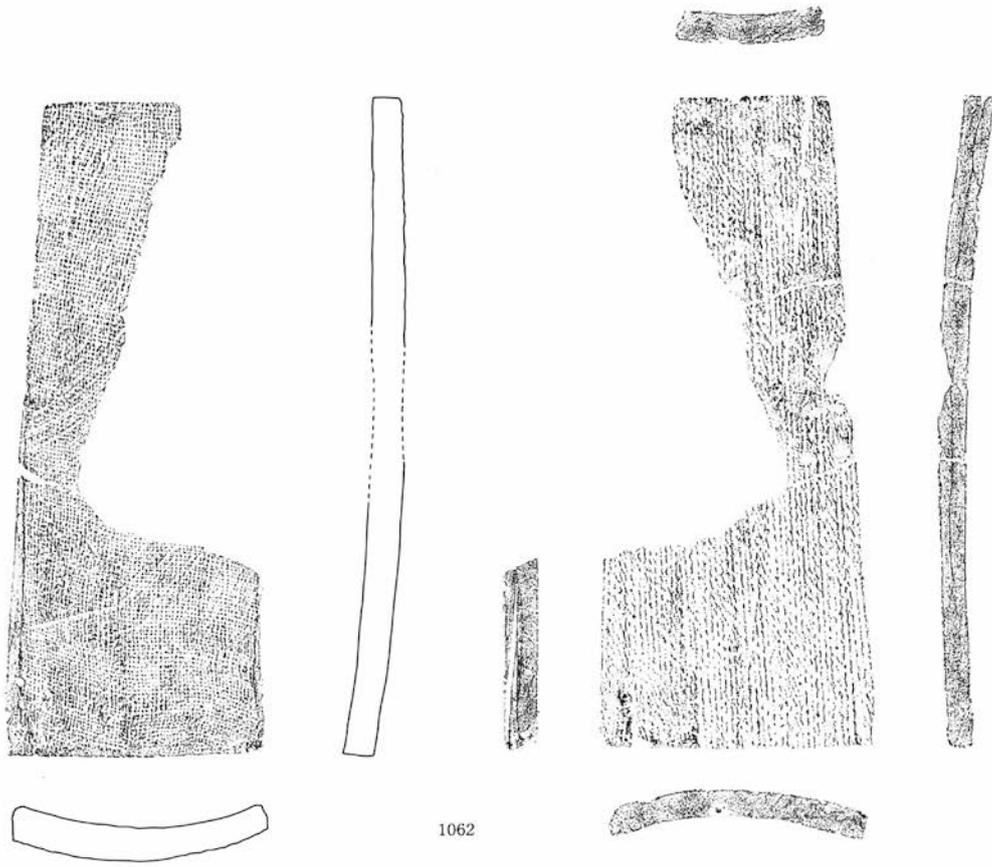
第122图 B地区 出土瓦(5) (S=1/4)



第123图 B地区 出土瓦(6) (S=1/4)

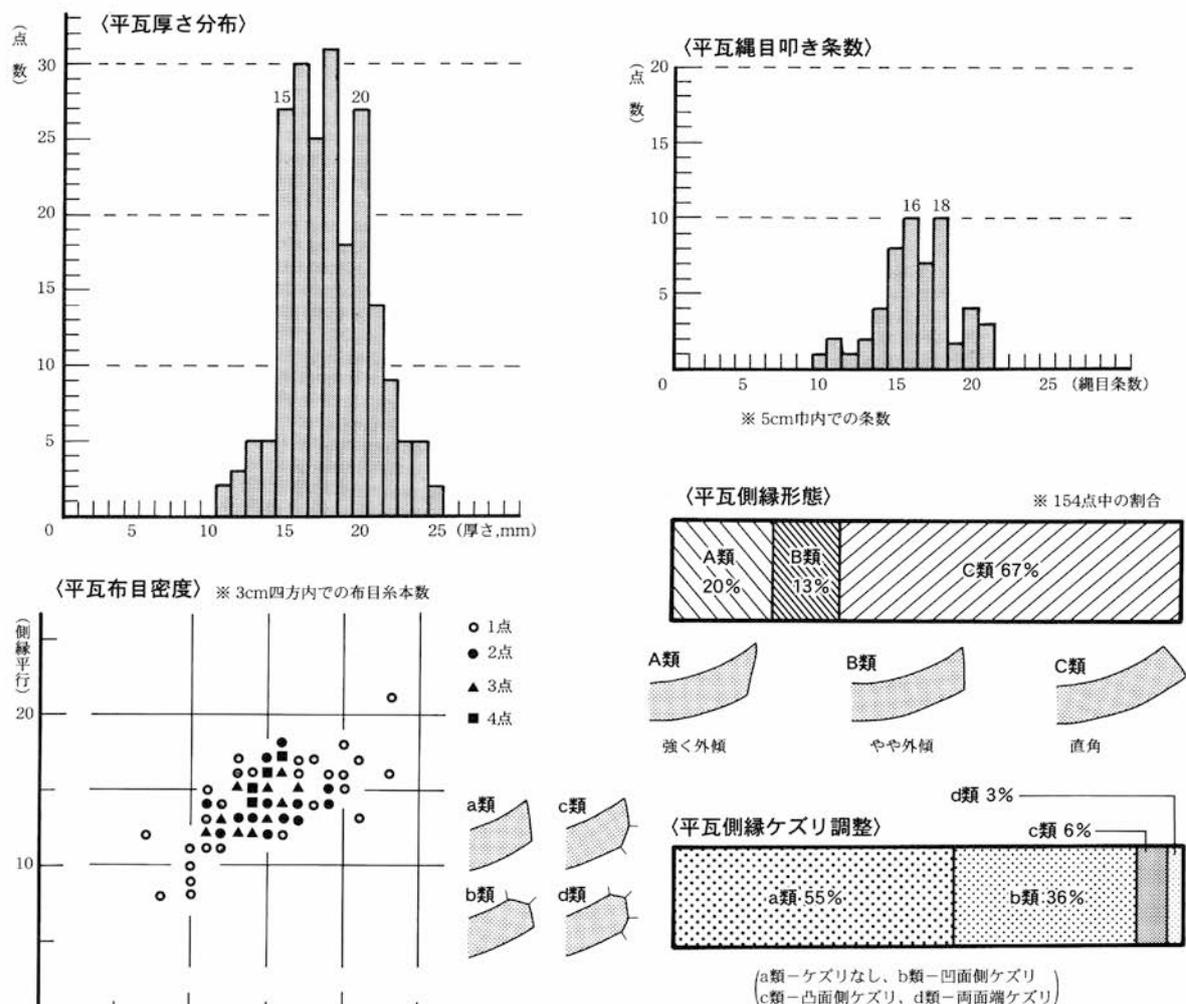


第124图 B地区 出土瓦(7) (S=1/4)



第125图 B地区 出土瓦(8) (S=1/4)

地区で見られた側縁に平行して整然と叩く方法とは異なり、やや斜めないしは叩き締め円弧状を呈している。A地区の平行線文が木目と条線とが平行するHe類叩きであるのに対し、B地区のものが木目直交のHa類であることに要因がある。つまり、He類叩きが叩き板の主軸に平行に条線を彫る叩き板であるのに対し、Ha類叩きは叩き板の主軸に条線を横に彫るものであり、He類が端面側から叩いていたとすれば、Ha類は側縁側から叩いていたことになるわけである。つまり、瓦と工人の位置が異なっていたものであり、それが円弧状の叩きを生んだものと理解する。当平行線文叩き瓦は、縄目叩き瓦に糸切り痕が確認される率が高いのに対し、糸切り痕を確認できるものは15点中1点のみであり、たたらによる粘土板を用いる方法ではなく、粘土塊または粘土帯状のものを成形台上で板状に成形した可能性がある。このため、平行線文叩き瓦には、厚さの差異が見られるものが多いことや、内面の布圧着が弱く、指ナデ痕の凹凸を残すなどの特徴が見られるもの(1055)と理解した。平行線文叩き瓦の凹面布目は部分的に伸びて解れたりしており、作りは縄目叩きに比べて雑といえる。これに対し、縄目叩き瓦は糸切り痕を残すものが大半で、内外面に残すものも定量存在する。凹面布目がきれいに全面に伸びるものが多く、厚さも比較的均質で、平行線文叩き瓦とは様相を異にする。多くは縄目叩きが側縁に沿って整然と叩かれるが、1054のような斜めや端縁に沿う方向の叩きが重複するものがあり(量的には縄目叩き瓦中1~2割程度)、やや特異である。側縁平行に縄目叩きが施された後に、斜め方向または端縁平行の縄目叩きがほぼ全面に施されており、一見、格子状をなす。これは縄目叩きの後にHa類平行線文叩きを施す1053・1055と工具の違いはあれ、同様の叩き方をしているものであり、当地区瓦の成形方法を考える上で注目される。当資料の縄目はいずれもLRの撚りで、当地区では主体を占める縄目撚り方向である。縄目の撚りを確認できた133点中、75%がLR、25%がRLであり、A地区の率に近い。A地区でも指摘したことが、LRの撚り粒が総体的に細かい特徴をもつものに対し、RLの撚りは太い特徴があり(1056)、単一の工具である可能性



第126図 B地区 出土平瓦 計測データ

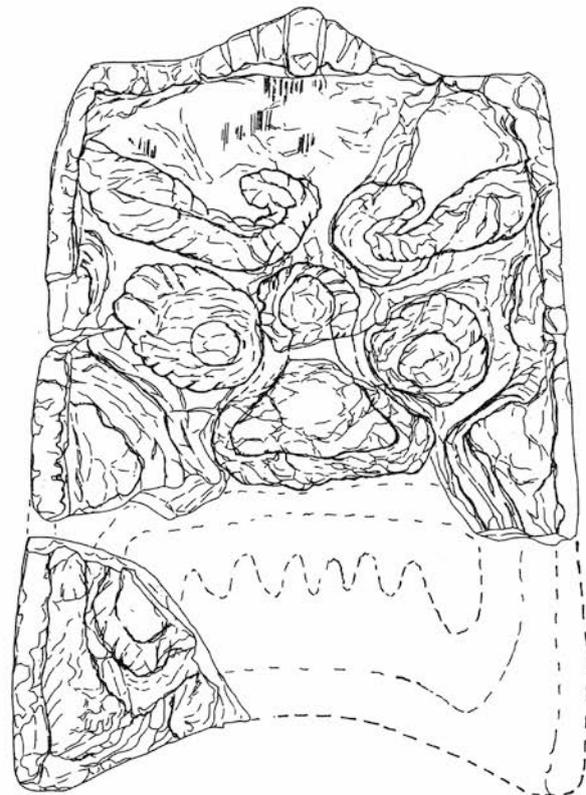
が高い（ただし、1062の鬚斗瓦のみはR L 然りだが、然りの比較的細いものである）。A地区から同一工具が継続して使われた可能性はないとしても、系統的に同工人組織が使っていた可能性はあろう。R Lの然りをもつ縄目叩き瓦は、1062以外は総体的につくりが雑で、凹面布目の解れや厚さの不均質さなど、平行線文叩き瓦にやや似た様相がある。なお、1058の凹面にはヘラ記号「×」が、1059の凹面にはかなり生の状態の直線が2本引かれている。

鬚斗瓦についても、凸面縄目叩き（1061～1063）と平行線文叩き（1060）とが存在することや布目、厚さ、糸切り有無などの平瓦で見られた特徴などを考えれば、ほぼ平瓦と同様の成形方法かつ複数の成形方法が存在したものと理解される。鬚斗瓦は平瓦として成形した後に、縦に半裁し、側面、端面整形したものであり、基本的には平瓦成形手順を踏んだものであることが理解される。

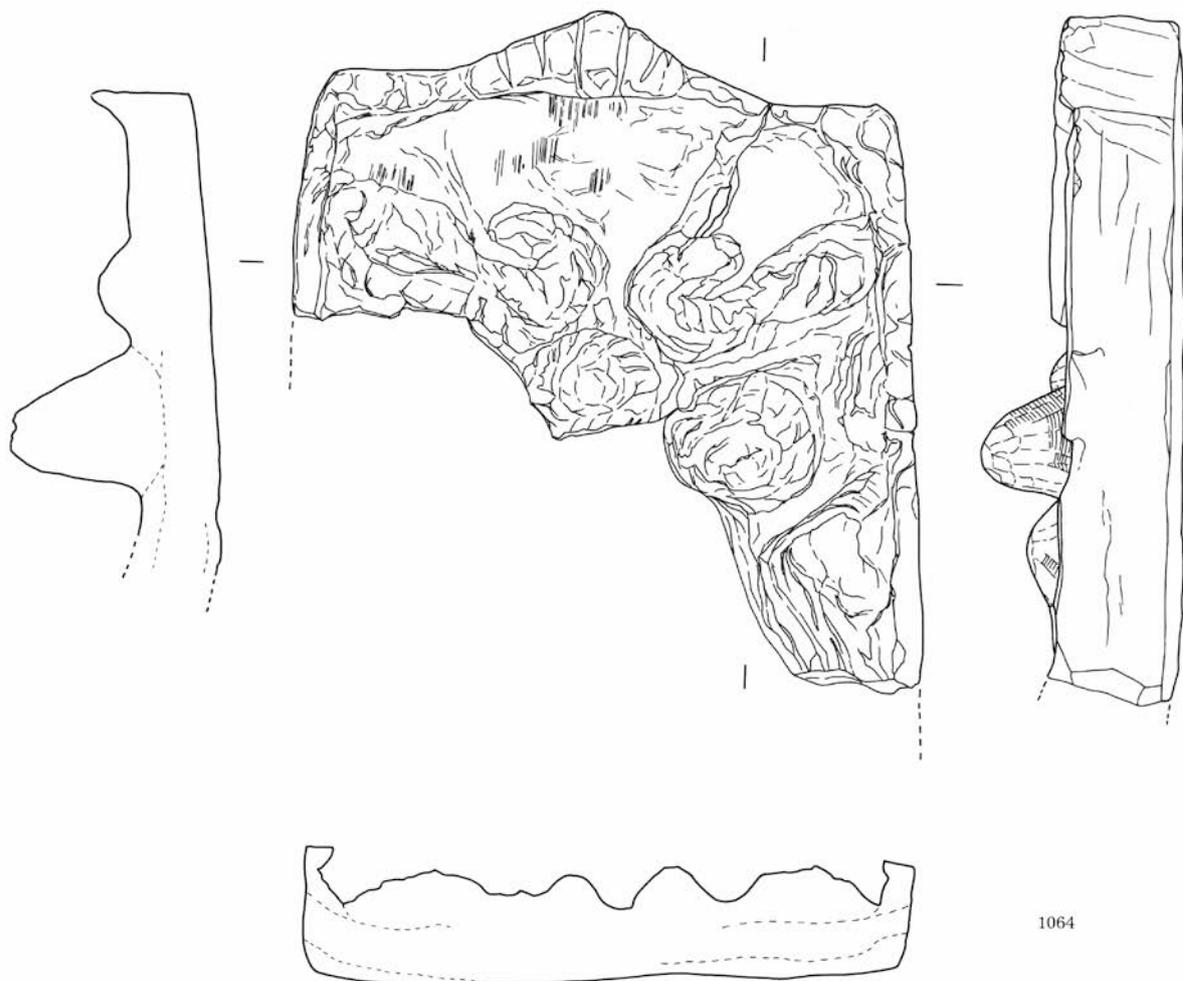
以上、平瓦、鬚斗瓦について述べたが、A地区出土平瓦データと当地区のデータを最後に比較検討しておきたい。第126図で示すように、A地区よりも凹面布目密度が粗くなっていることと、縄目叩き条線の数が減っていることが指摘できる。布目は伸びて間隔が粗くなっているものもあるが、分布域が側縁平行、端縁平行ともに3cm角での本数が2～3本減っており、布の質が低下している状況を看取できる。縄目叩きについては5cm幅で20本を超えるものは減り、縄の太いものが目立つようになる。また、平瓦厚分布についても、A地区で17cmに中心を持っていたものが15～20cmの中であらう存在しており、上述したような均質な厚さの粘土板を使用する成形方法が採られなくなってきたことが要因であったと理解される。なお、側縁形態については面が直角をなすC類が増加し、側縁整形では側縁の端部を削るものが増加する。

（5）鬼瓦

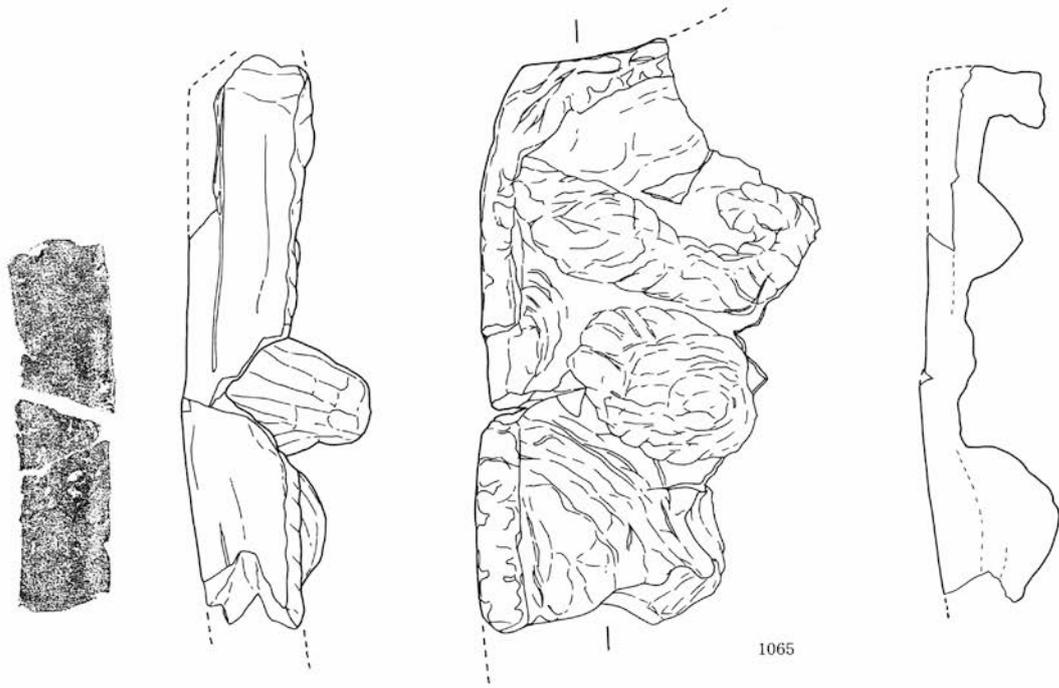
鬼瓦は図示した以外にも10点ほど破片が出土しており、1064・1065の部位の重複から確実に複数個体の出土がある。ただ、両者は同範の鬼面文鬼瓦であり、焼成の状態も降灰、堅緻と特徴が共通している。全形を復元できたものはないが、各部位を組み合わせれば、高さ52cm、幅38cm程度のかかなり大型の鬼瓦が復元できる。鬼面の復元は、1064と1065で鬼面頂部から眉、目、頬を、1064の中央盛り上がりから1067の部位で鼻を、1066の部位で鬼面の下端と口、牙を当てはめ、推定復元したものが以下の図である。鼻から下の部位がないため、唇の表現や下顎、下歯表現が省略されているかは不明であるが、下端中央の削り込みは残存部位から推察してさほど大きくはなく（1068も下端部破片であるが、1066とは下端中央の削り込み形状が異なる）、下顎まで表現されていた可能性を持つ。外形は頭頂部が尖る角張った台形状で、縦に長い形状が特徴的である。外縁部は高い周堤が巡るだけだが、頭頂部のみは切込みが入る。鬼面全体の表現が高く盛り上がるもので、とくに目と鼻、頬は盛り上がり強い。眉は太く捻りが入る表現で、目は飛び出る感じ、鼻は大きく胡座をかき、頬が盛り上げる。上唇は鼻の下端ラインまで達していないところから見て、上唇の吊り上らない表現であろうが、牙は太くむき出す。目や頬、唇の表現などはやや温和な感じを見せるが、太い眉と飛び出した目で威圧感を表現している。全体的には眉の形状や唇表現などは新しい様相と見られるが、10世紀の鬼面文鬼瓦の資料は乏しく、比較できる対象に欠ける。特に、外形の頭頂部が角張る形状は、国内では極めて少なく、愛知県名古屋白山社の鬼瓦に類似形態があるが、全体的に台形状の角張る形状の鬼瓦は統一新羅時代の朝鮮半島出土のものに近い。慶州にある雁鴨池遺跡（統一新羅時代）からは、当地区出土のものと同外形特徴や高い周堤を巡らす点など近似したものが出土しており、技術系譜を考える上で貴重な資料といえる。なお、加賀市高尾廃寺でも鬼瓦の目の部分が出土しており、木目の様子や目の形状などから当資料と



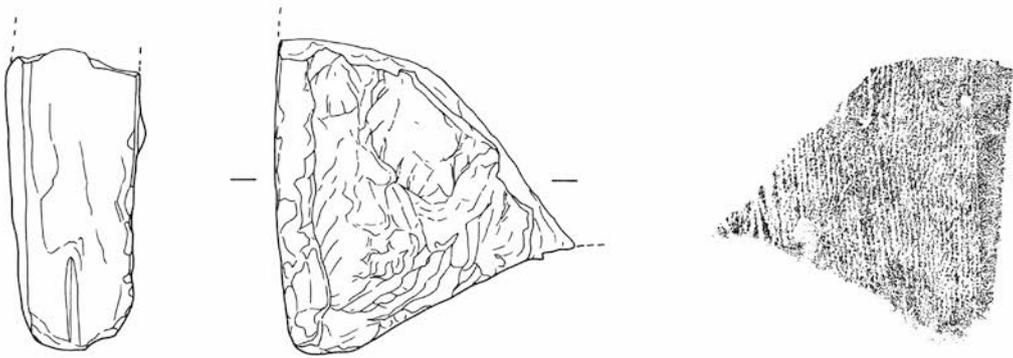
第127図 鬼面文瓦 復元図 (S=1/5)



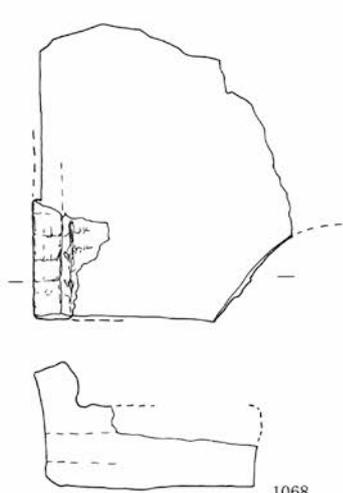
第128图 B地区 出土瓦(9) (S=1/4)



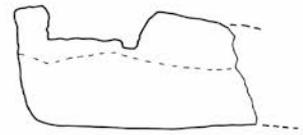
1065



1066



1068



0 10cm



1067

第129图 B地区 出土瓦(10) (S=1/4)

同範の可能性が高いものである。

以上が形状、文様等の特徴であるが、次に成形技法について述べておきたい。まず、型作りが否かであるが、鬼面の全体とくに盛り上がった部位には木目が残っており、木製の範型を使用したものと理解される。範型からはずした後、この時期は新たにヘラ描き装飾を施すことがあるが、当資料ではそのような痕跡はなく、型作りのみと判断してよい。目や鼻など特に盛り上がりの強い部分が剥離しており、範型のそのような深く彫り込んだ部分に粘土塊を最初に十分に押し込んでから、粘土を範型に押し込んだものと考えられる。突出部以外の粘土は粘土塊状のものを押し込んだ可能性を持つ1064と板状粘土を押し込んだものと思われる1065・1068とがあり、後者では薄い板状粘土が2～3枚重ねて貼り合わせていることが剥離状態からうかがわれる。厚さや裏面の状況もそれぞれで異なり、周堤の高さは同じだが、1064と1068は厚さ4cmと厚いのに対し、1065は厚さ2～3cmと薄く軽量である。裏面の整形はいずれも平坦であるが、1064はLR撚りの縄目叩きを側縁に平行して施しており、型の中で粘土を圧着させ、叩き締めたものと理解される。叩き後、側縁端のみはケズリを施し、裏面中央のやや左側に棒状工具で突いた痕跡が2列縦に入っている。1065と1068の裏面はなで痕跡や一部ケズリが見られるもので、裏面からの叩き締めは確認できない。事前に叩き締められた粘土板を使用することで、上から貼り合わせる程度でよかったのだろう。以上、成形痕跡や厚さ、鬼面文部位重複から少なくとも3個体は存在していたものであり、1066は1064と同様の裏面叩き締め、厚さなどから同一個体の可能性が高い。

第3項 南加賀窯跡群の平安期軒先瓦に関する編年的考察

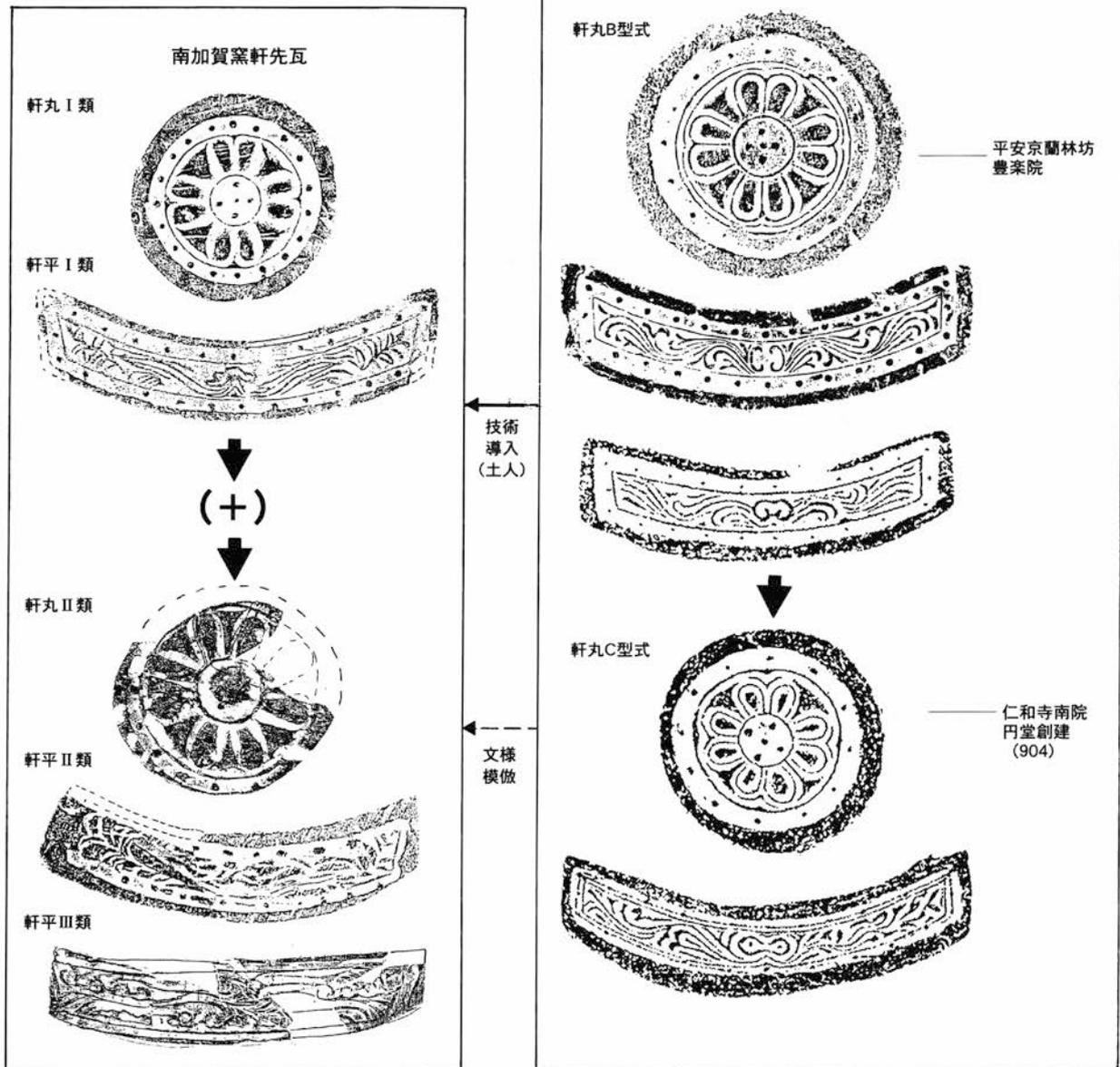
南加賀窯跡群では今回報告の二ツ梨豆岡向山窯の他に、戸津窯、上荒屋ホウジョウヤマ窯（以下、上荒屋窯とする）で瓦生産が確認されている。上荒屋窯については表採で確認したのみであり、詳細は不明だが、軒先瓦の出土はないと聞く。共存する須恵器は田嶋編年VI₂期を主体として、VI₃期まで一部入る程度と見られ、瓦生産はVI₂期に行われていた可能性が高い（なお、ここで述べる須恵器編年観については、望月1992論文をもとに1997年の北陸古代土器研究会シンポジウム成果に基づき修正したものである。VI₁期は短期であるのに対し、VI₂期とVI₃期は各期の中で古中新の3段階設定が可能で、VII₁期にはほぼ須恵器生産は終焉し例外的に食膳具生産が残存する程度と理解している）。これに対し、戸津窯出土の瓦は古くからその存在が確認され、国分寺供給瓦の可能性が指摘されていた（吉岡1976）。その後、戸津窯は昭和56～59年度に発掘調査され、軒丸瓦で1型式、軒平瓦で2型式の資料を得ることができた。また、同時期に調査した二ツ梨豆岡向山窯においても軒先瓦が確認され、その成果もとに、筆者は戸津窯出土のものを中心として、軒先瓦編年と暦年代観について考察したことがある（望月1991）。さらに、1993年には二ツ梨豆岡向山窯のA地区灰原の報告において、瓦の分析及び軒平瓦の範傷分析などを行い、先の編年案を補足した（望月1993）。今回、二ツ梨豆岡向山窯A地区の須恵器窯調査を行ったこととB地区においてさらに新しい瓦焼成窯が確認されたことにより、従来の瓦編年と暦年代観に修正を加える必要性が生じることとなった。また、戸津窯出土の瓦群評価について、以前考察した際に疑問点としてあげていた軒先瓦の生産窯そして加賀国分寺との関連の中で、新たな評価を下す必要性を感じ（望月2004a）、今回、南加賀窯跡群の平安期軒先瓦について、編年と暦年代観を再考することとした。

1. 戸津窯出土瓦の検討

(1) 戸津窯出土瓦の型式と編年的位置づけ

戸津窯からは軒丸瓦で1型式、軒平瓦で2型式の瓦当文様が確認されている。軒丸瓦は複弁四葉蓮華文を瓦当面にもつ作りのよいもので、平安宮等で出土する複弁四葉蓮華文軒丸瓦と高い近似性を持つ。成形技法についても、当瓦当文様導入時に出現する「横置き一本造り技法」を忠実に踏襲しており、平安宮等へ供給する平安中期中央官衙系瓦屋工人を南加賀窯へ招来し、直接生産に携わった可能性が高い。当軒丸瓦（軒丸I類とする）に対応する軒平I類は飛雲状中心飾から左右に唐草文の展開する均整唐草文で、界線区画と珠文の配置、唐草文の展開など、平安宮等で複弁四葉蓮華文軒丸瓦とセットをなす対向C字形中心飾均整唐草文軒平瓦に対応するものと理解される。複弁四葉蓮華文軒丸瓦及び対向C字形均整唐草文軒平瓦のセットは、平安京では9世紀中頃から10世紀前葉の間において葺かれた瓦とされており、その中で文様形態の変遷が見られる。図示したものがその変遷図であるが、複弁四葉蓮華文の花弁輪郭突線が複弁の輪郭のみ巡っていたもの（A型式）が花卉中央に分岐線の入るもの（B型式）へ変化し、輪郭さ

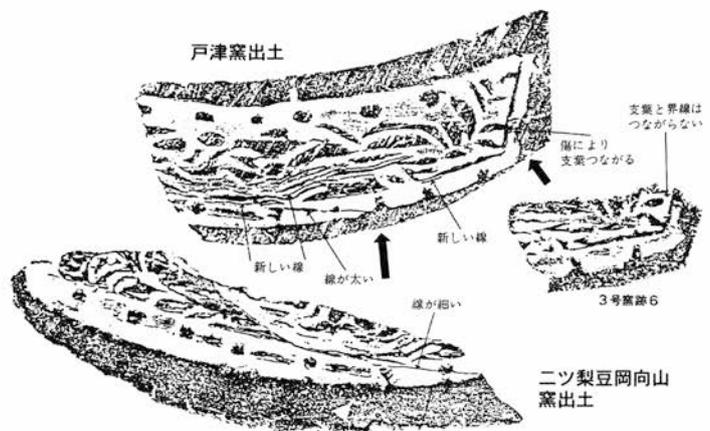
れた花卉が分離し、複弁から単弁化する傾向にあるもの（C型式）へと変化する文様変遷が見られる。A型式からB型式に変化する段階に花卉輪郭の外側にもう一重の突線が巡るものが出現しているが、当型式間の様相と捉えられるもので、概ね3型式変遷と見て妥当である。これに対応する対向C字形中心飾均整唐草文は、大きなC字で唐草文の展開が強いA型式対応から、C字の形が崩れ、唐草の巻き込みが弱まり、波状文的な流れとなるB型式対応へ変化する。その後、対向C字形中心飾は連結して眼鏡状の中心飾へ変化し、唐草表現は太く末端で枝葉状の表現となる（C型式対応）。なお、B型式の派生形として対向C字形の上部が接して雲形状を呈する中心飾のタイプがあり、唐草の展開もより弱いものと



第130図 平安時代中期の南加賀窯軒先瓦と平安宮複弁四葉蓮華文系軒先瓦の変遷比較
 (平安宮軒先瓦変遷図作成に際し、上原真人氏の指導のもとに植山茂1999、木村捷三郎1984論文を参考とした)

なるなどB型式とC型式の過渡的な形態を呈すものがある。平安宮等での当軒先瓦セットの暦年代観はA型式を葺く淳和院及び壇林寺がそれぞれ天長年間（824～833）、承和年間（834～837）に創建されていることから、初源を9世紀第2四半期に置くとされている。また、貞観寺創建瓦としても使用され、貞観寺創建の年代とされる862年頃、9世紀第3四半期までをその下限と見る。B型式は平安京内裏蘭林坊、豊楽院に葺かれるものの、年代根拠はなく、C型式の瓦を葺く仁和寺南院円堂跡の創建年代が延喜4年（904年）であることから、9世紀第3四半期から第4四半期頃と見るのが妥当である。C型式の幅は下っても10世紀前葉頃であり、中頃には後述する複弁、単弁八葉系の蓮華文軒丸瓦へ展開してゆく。この変遷の中で、戸津窯の軒先瓦I型式を比較すると、軒丸瓦の復弁輪郭突線がないことや軒平瓦の中心飾の相違点、末端の枝葉表現など、文様表現が完全に一致するものではなく、特に輪郭突線で変遷を表現する軒丸瓦の場合はどこに位置づけるのが妥当なのか、判断基準に欠ける。ただ、花卉や間弁のバランスや中房の大きさなどから考えて、C型式へは下らないものと評価している。軒平瓦については中心飾の対向C字形の変化過程、唐草の展開、波状文表現、末端の枝葉表現から見て、A型式に位置づけられるものではなく、消去法で言えば、B型式に併行関係を求めるのが最も蓋然性が高い。つまり、戸津窯軒先瓦I類は中央官衙系複弁四葉蓮華文軒先瓦B型式と併行関係にあると評価し、暦年代観を9世紀後葉頃に位置づける。当瓦群の生産は加賀国分寺を定額寺である勝興寺から転用した承和8年（841年）以降に行われたものと評価しており、9世紀末には下らない時期と見るのが妥当と判断したい。

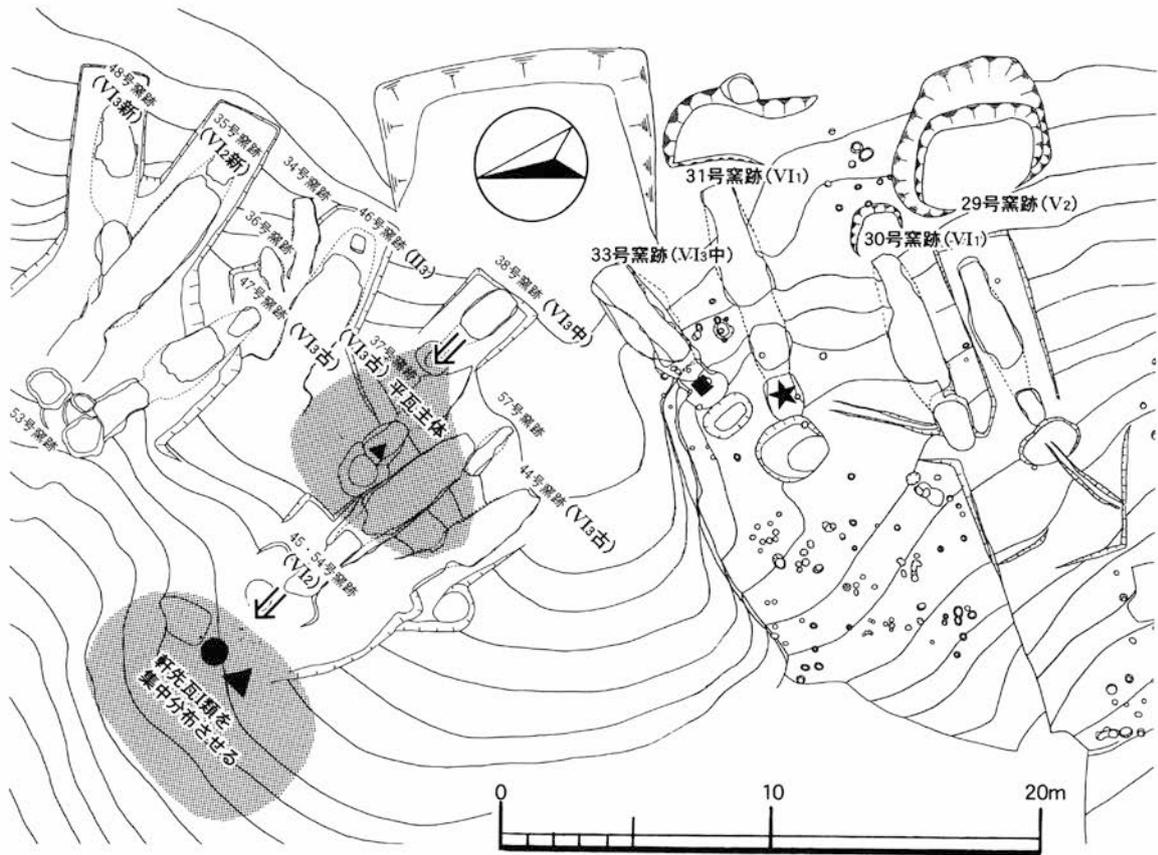
戸津窯では、以上の軒先瓦I類が大半を占めるが、1点のみ他の型式の軒平瓦が出土している。二ツ梨豆岡向山窯（以下、二ツ梨窯とする）のA地区で主体的に生産される軒平瓦II類であり、同範であることが確認されている。右図のとおり、戸津窯のものは二ツ梨窯のものよりも範傷が増えており（唐草文の右側末端の枝葉が右脇区界線に接触している点と外区下側の珠文部分にある線が太くなったり、傷のような新たな線が増えている）、軒平II類生産においては二ツ梨A地区1-A号窯で生産された後、同範瓦を戸津窯で生産したこととなる。当瓦当文様については後で詳述するが、軒先瓦I類とは明らかに後出するものであり、少なくとも2時期瓦生産が行われていたこととなる。なお、これに伴う軒丸瓦は戸津窯では確認されておらず、軒丸瓦I類とセットをなすとは考えていない。



第131図 軒平II類瓦の瓦当文様比較 (S=1/3)

(2) 瓦生産窯の検討と須恵器編年との併行関係

これまで述べた軒先瓦を戸津窯ではどの窯で生産していたのであろうか。以前、考察した際には軒先瓦I類を戸津37号窯で生産したものと理解した（望月1991）。しかし、その考察においても述べたことだが、戸津37号窯の焼部床面や焚口から出土する軒平瓦I類は、自然釉が厚く付着する焼き歪みを持つもので、置台等に転用した可能性が高いものであった。当窯の前庭部灰層中からは瓦の出土はなく、遺構の調査状況から戸津37号窯を生産窯とする根拠に欠けていた。当窯を瓦生産窯としたことの要因は、他に窯体床面や前庭部から軒先瓦I類を出土する窯がなかったことと、他窯で唯一軒先瓦I類を出土する二ツ梨窯A地区で生産窯と想定した窯の時期がVI₃期であったことにある。戸津37号窯の時期もVI₃期であり、軒平I類から軒平II類へは連続的な生産と理解した。しかし、今回、二ツ梨窯のA地区調査報告と再整理を行った結果、その根拠も希薄となり、軒先瓦I類の生産窯を再検討する必要性が生じた。今一度、軒先瓦I類出土地点の検証を行えば、窯以外では図示したように、VI₂期に位置づけられる戸津45・54号窯前庭部下方の灰原で集中分布しており、戸津37号窯と当灰原の位置関係が離れすぎていることを考慮すれば、戸津45・54号窯を生産窯とするのが自然である。軒先瓦の出土はないが、当窯の窯体内中層から平瓦が数点出土していることもその可能性を示唆する。先に検討したように、軒先瓦I類の生産に際しては平安宮等中央官衙系瓦屋工人を招来し、生産に当たった可能性が高く、加賀国分寺の堂舎整備の一環で行われた国衙主導の事業であったと理解される。戸津45・54号窯に先行するVI₁期の戸津31号窯では塔の頂部を飾る大型の陶製相輪セットを焼成しており（小松市1983）、国分寺整備の一環事業として、軒先瓦生産に先立って行われた可能性がある。つまり、戸津31号窯の陶製相輪生産と



第132図 戸津窯跡分布と瓦出土地点 (S=1/400)
 (●-軒丸瓦I類、▲-軒平瓦I類、■-軒平瓦II類、★-陶製相輪)

軒先瓦I類生産は、連続的に行われた可能性があり、VI₂期の古段階に位置づけている戸津54号窯と中段階の戸津45号窯のいずれかで生産された可能性は高いだろう。戸津31号窯の立地する斜面では4基の須恵器窯が並列築窯され、最も北側に位置する戸津43号窯（当窯の同主軸上に戸津39号窯-VI₂期新、さらにその上に戸津33号窯-VI₃期中の2基が改造窯として乗る）がVI₂期古段階に位置づけられる。この窯で瓦生産を行った痕跡は確認できていないが、戸津43号窯の北側に位置する同期の窯が戸津45・54号窯であり、戸津31号窯からの継続的な操業の中で瓦生産が行われたことが予想されるのである。当窯の遺物整理が行われていない状況で確定的なことは述べにくいだが、戸津37号窯を軒先瓦I類の生産窯と推察した1991年論考の内容は改めておくことが必要であろう。軒先瓦I類生産については、VI₁期に生産が行われた陶製相輪の以後、VI₂期の中で生産が行われたことはほぼ間違いがなく、そのなかでも比較的古段階の戸津54号窯か、中段階の戸津45号窯で生産されたものと判断する。VI₂期新段階の戸津35号窯においては瓦生産を予測させるものではなく、戸津窯ではVI₂期中段階をもって瓦生産は途絶えたと見るのが妥当だろう。

再度、戸津窯で瓦生産が開始されるのは、二ツ梨窯A地区で軒先瓦II類の生産を行ったVI₃期古段階以後のことで、VI₃期中段階に位置づけられる戸津38号窯が該当しよう。当窯では焚口、前庭部やそこから伸びる灰原中に定量の瓦が含まれており、瓦生産を行っていることが確実視される。また、最近、戸津33号窯の窯体内において今回図示したものと別だが、軒平瓦II類が出土していることを確認した。出土量は少なく、対応する軒丸瓦の出土もないが、二ツ梨窯A地区1-A号窯と同様の軒丸II類瓦を生産していた可能性は高いと考える。

2. 二ツ梨窯出土瓦の検討

(1) A地区出土瓦の特徴と編年的位置づけ

これまでの報告で述べたように、A地区から出土する軒先瓦は軒平II類と軒丸II類の瓦群が主体的で、軒平I類と軒丸I類は各1点のみ出土するに止まる。II類瓦との焼成状態の違いや時代的に符合しないことから考えて、A地区で生産された可能性は低いと判断した。二ツ梨窯の軒先I類瓦は戸津窯と同範かつ、範傷などの増加や範の彫り直しなども確認はできず、戸津窯生産瓦とはほぼ同時期のものと見られる。二ツ梨窯A地区の須恵器窯は報告で述べたよう

に、8世紀の窯を除いては、全てⅥ₃期の窯であり、軒先瓦Ⅱ類生産は其中でも古く位置づけできる1-A号窯と判断される。つまり、軒先Ⅰ類瓦を戸津窯で生産していた段階の窯は存在せず、当瓦は混入品か何らかの目的で持ち込まれたものと理解せざるをえない。

A地区窯で主体的な生産を行う軒先Ⅱ類瓦は、軒丸瓦、軒平瓦ともにⅠ類瓦の文様構成と同系統にあるもので、とくに軒平瓦の唐草文表現（末端の枝葉表現や波状文となる表現など）は類似性が高い。しかし、中心飾の表現は見られず、中央部分は太い波状文で流すだけの偏向唐草文表現となり、外区との界線区画も途切れ、珠文も大きく乱雑なものとなるなど、Ⅰ類の精緻な均整唐草文表現は喪失している。第130図に示した平安宮等中央官衙系軒丸瓦C型式に対応する眼鏡状中心飾の唐草文軒平瓦に、枝葉の太い表現などは類似しており、Ⅰ類文様をそのまま乱雑にした可能性もあるが、同時期の平安宮系瓦当文様変化を意識した文様表現であった可能性を持つ。これとセットをなす軒丸Ⅱ類を見ると、軒丸Ⅰ類の単なる乱雑な表現にとどまらず、複弁の間が開き、その中間弁状に撥形表現が入り込んでいる表現が看取でき、平安宮等中央官衙系複弁四葉蓮華文の最終形態である軒丸C型式の影響を受けていると判断される。成形技法は軒丸瓦、軒平瓦ともにⅠ類瓦と同じ技法上にある。ただ、瓦当面整形、調整についてはかなり粗雑なものとなっており、瓦範の圧着の仕方、瓦当面の文様としての表現の仕方など、瓦当文様に対する意識がかなり低下している。それは瓦範彫刻表現の乱雑さに如実に出ているものであり、軒先Ⅱ類瓦は極めて瓦当文様に対する意識が低下した段階の瓦生産であったと評価される。ただ、軒先瓦Ⅰ類の系統を維持すること、その源流である平安宮系瓦当文様変遷の流れを意識している点は重要であり、国分寺へ供給するための瓦生産であったことを物語るだろう。

当軒先瓦Ⅱ類段階は平安宮系瓦と併行関係を示すだけの資料とは言い難いが、複弁四葉蓮華文の複弁の間が開いてゆく段階という意味で、軒丸C型式以降と判断し、10世紀初頭を初源とする瓦当文様と位置づける。ただ、仁和寺南院円堂跡に伴うC型式よりもかなり形が崩れており、10世紀前半の幅の中で考えるべきものと理解したい。瓦範としては初源瓦範である二ツ梨窯A地区1-A号窯段階のⅥ₃期古段階から範傷が増えた瓦範段階の戸津33・38号窯段階のⅥ₃期中段階までの2型式にわたるものと理解している。なお、当段階と軒先Ⅰ類との併存は、技術の断絶という意味で、基本的に考えていない。当軒先瓦は軒先Ⅰ類を瓦当文様のモデルとしながら、平安宮系C型式の瓦当文様を意識して製作されたものであり、在地工人達の手によるものと理解する。軒先瓦Ⅰ類の生産に携わった平安宮等中央官衙系瓦屋工人の技術はⅠ類生産後に途絶え、Ⅱ類瓦へは継承されなかったとみたい。在地工人達は在地に継続した平瓦・丸瓦製作技法をもとに、軒先Ⅰ類の瓦当文様と当時の平安宮等中央官衙の瓦当文様を参考として、創意工夫して製作したものと評価する。軒先Ⅰ類瓦から瓦範の彫刻や瓦当面整形など瓦当面を構成する部分においては技術断絶があったものとみたい。その時間差は長いものとは言いがたいが、10世紀前半の幅の中で考えられるものと理解する。

（2）B地区出土瓦の特徴と編年的位置づけ

報告で述べたように、B地区7号窯でまとまった瓦生産を行っており、焼成部床の有段構造改造や大型の鬼瓦生産など瓦生産に重きを置いた操業を行っている。当窯では軒丸瓦はA地区と同範のⅡ類瓦であるが、軒平瓦については新たな文様構成を持つⅢ類で占められ、A地区とは様相を異にする生産が行われている。軒丸瓦Ⅱ類についてはA地区1-A号窯と同範だが、花卉の線が2重となっているところから見て、瓦範を彫り直している可能性を持つ。須恵器窯の時期が軒平瓦Ⅱ類の新範を使用した戸津33・38号窯より後出のⅥ₃期新段階に位置づけられるものであり、南加賀窯跡群の須恵器生産終焉期の瓦生産と位置づけられる。当窯生産の鬼瓦は、同時期の瓦葺寺院である高尾廃寺の鬼瓦と同範である可能性が高く、高尾廃寺式軒先瓦生産と併行期のものと理解している。これまでの軒平瓦は、Ⅰ類の対向C字形中心飾均整唐草文軒平瓦系統から、その派生形態といえるⅡ類へという文様変遷の流れが看取でき、軒丸瓦のⅠ類からⅡ類と同様の退化様相を示す点で、複弁四葉蓮華文軒先瓦セットの流れの中に位置づけられるものであった。しかし、軒平瓦Ⅲ類文様については、上記と系統的な繋がりを見出すことはできず、別の文様系統にある瓦範と位置づけられる。外区との区画界線は全周し、内区の唐草表現は細く流麗な描写をもつ。唐草の末端が所々で蕨手状に巻き込み、その部分が円形文となっている。中心飾はなく、波状文が左から右へと流れる表現で、偏向唐草文的な表現となる。当文様系譜を直接辿れる平安宮等の資料はないが、以下で述べる高尾廃寺式軒先瓦の文様比較の可能な10世紀中頃から後半の中心飾を持たない唐草文瓦に文様系統がつながる可能性をもつ。以下に高尾廃寺式軒先瓦の検討を通し、位置づけを補足したい。

3. 高尾廃寺式軒先瓦の検討

高尾廃寺式軒先瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦と偏向唐草文軒平瓦のセットで構成される。軒丸瓦は横置き一本造り技

法によるもので、外区にしっかりとして珠文を配し、中房内は5+1の蓮子構成を持つ。花卉は間弁をもたない幅広花卉を八葉配するもので、花卉端中央がややくびれた形状を呈す。複弁八葉の名残のようにも見受けられるものであり、複弁八葉系の花卉が単弁化したものと位置づける。花卉の凹凸をしっかりとつ精緻な作りのもので、布の質も良く、良品として作られている。軒平瓦は界線区画が全周するが、外区の珠文は下側のみ配され、全周しない。内区の文様は唐草が端部で強く巻き込むような表現のもので、唐草文が左右に展開するものの、中心飾は不明瞭で、偏向唐草文的な表現をする。凹面の布目が狭端面側から凸面に巻き込んで押し付けられる成形痕跡を残し、南加賀窯軒平瓦Ⅰ類から続く凸面布目押圧成形技法を踏襲している。

当瓦群の瓦当文様の精緻な作り及び新規文様構成導入の様相から、生産には新たな工人参画があったものと予想させる。複弁四葉蓮華文軒丸瓦が終焉した後は、平安宮等中央官衙系軒先瓦においても、かなり形態の崩れた文様構成となり、多様な在り方を示す。このため、地方窯の瓦当文様との編年上の併行関係を追う事は困難であるが、類似するものを挙げれば、複弁四葉蓮華文が終焉した後に出現する複弁八葉蓮華文系統が該当する。当瓦当文様は複弁八葉蓮華文に撥形弁間文を4単位配する10世紀前半の文様を初源とし、弁間文の欠落、そして複弁の単弁化という文様変遷を辿る。単弁化する段階に複弁の名残のような花卉形態をもつものがあり、高尾廃寺式の軒丸瓦はそれと類似する。単弁化する段階の軒平瓦は四葉の花文様中心飾をもつ唐草文で、末端の巻き込みが強く、唐草の太い表現など高尾廃寺式と類似性を持つ。この単弁化した段階の軒先瓦は10世紀後半に位置づけられるものだが、その中では比較的古相に位置づけられるものであり、軒丸瓦の複弁の名残などを考慮すれば、10世紀中頃のものモデルとしていた可能性を持つ。高尾廃寺式と南加賀窯軒先瓦Ⅲ類との併行関係などを考慮すれば、当該段階を10世紀中頃から第3四半期と位置づけるのが妥当と考える。

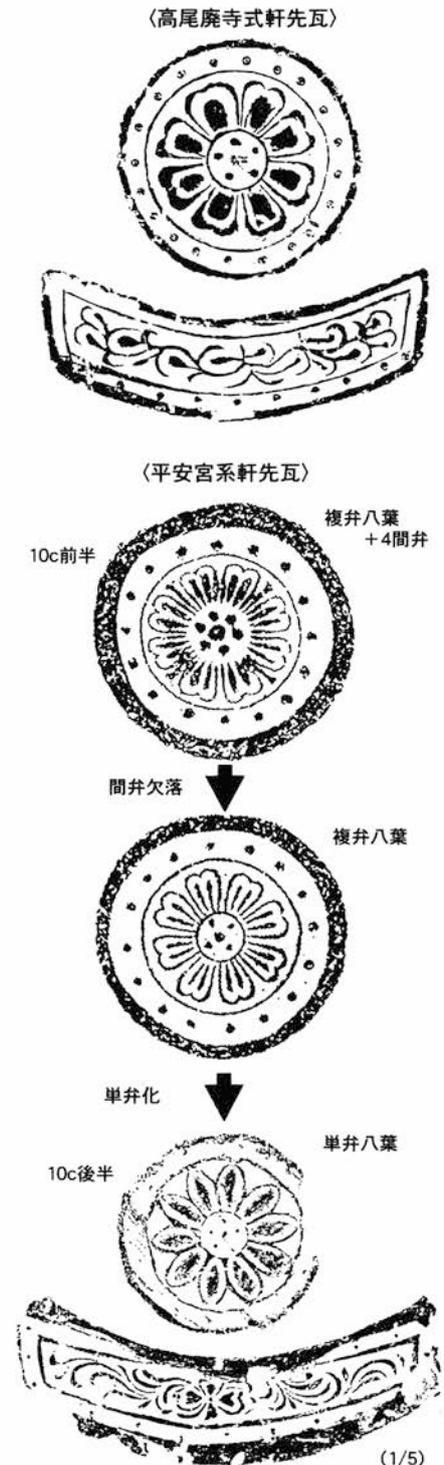
この時期に、鬼瓦生産などを含む新たな瓦生産の挺入れがあった背景としては、高尾廃寺建立ということよりも、この時期に行われた加賀国分寺の大規模堂舎修復工事が主要因と予想される。『政治要略』に記載される天慶5年(942)の記事には、加賀国司源中明に出された勘解由使勘判抄があり、それを見ると国分寺の仏像や堂舎が破損したままとなっていたにもかかわらず、その修理を行っていなかったことが問題とされ、国司の任期満了に伴う交代が適わなかったとされている。その後の記事で、天曆元年(947)には新たな国司補任が確認でき、国分寺修復工事は早急事業として実施され、完了したことを物語る。おそらく、当瓦生産は国分寺堂舎修復工事を契機としたものであり、高尾廃寺への瓦葺きもその一環で行われた可能性が高いといえよう。

4. まとめ

以上、南加賀窯跡群における平安期の瓦生産と編年観、平安宮等中央官衙系軒先瓦との併行関係について述べてきたが、最後に、軒先瓦文様類型の変遷に基づき、南加賀窯瓦生産を中央官衙系瓦屋工人の参画した忠実模倣のⅠ期、Ⅰ期工人系譜が途絶え、在地工人による瓦生産が行われるⅡ期、複弁四葉蓮華文系終焉後の新規瓦当文様導入のⅢ期に分け、暦年代観整理と瓦生産の性格について述べ、まとめたい。

瓦生産Ⅰ期

平安期の南加賀窯跡群の瓦生産開始期であり、その生産には中央官衙系瓦屋工人招来が予想される。複弁四葉蓮華文軒丸瓦と対向C字形均整



第133図 高尾廃寺式瓦の系譜

唐草文軒平瓦をセットとする平安宮式瓦を忠実に再現したものであり、文様対比等から平安宮等中央官衛系複弁四葉蓮華文B型式に併行するものと理解される。中央の暦年代観から当期は9世紀後葉段階（末葉までは含まない）に位置づけられ、生産窯と目される戸津54号窯または45号窯の共伴須恵器からVI₂期の古段階または中段階に比定される（窯の位置関係や陶製相輪生産からの連続性を考慮すれば、VI₂期古段階の可能性が高い）。年代的に見て、承和8年（841）に定額寺である勝興寺を加賀国分寺へ転用することを発端とした寺院整備事業に伴うものと評価でき、これに先行するVI₁期の戸津31号窯における陶製相輪セット生産が当整備事業の最初のものであったと言えよう。VI₁期の暦年代観については、形式的な幅の短さから、9世紀第3四半期でも中頃に近い時期と考えており、陶製相輪生産から継続的に瓦生産へ移行したものと理解する。瓦生産の行われるVI₂期古段階を9世紀後葉、中段階を9世紀第4四半期、新段階は次に述べる瓦生産Ⅱ期の時期から見て、10世紀初頭に食い込むもの理解したい。

当瓦生産は中央官衛系瓦屋工人を直接生産に参画させるなど、国衛勢力が生産に介入したものと評価でき、国分寺整備はもとより、能美への国府設置が大きな要因であったと理解する（望月2004b）。南加賀窯跡群の須恵器生産は、VI₁期からVI₂期に生産を大きく拡大し、窯場を新規に開拓してゆくが、その新規窯場である馬場川流域の上荒屋窯でも瓦生産がこの時期に行われており、窯場拡大において瓦生産が大きな意味を持っていたことを伺わせる。それまで郡経営のもと管理されていた須恵器生産を、国衛主導の下、工人組織を含めた窯場再編が大規模に行われたものであり、当期以降、須恵器生産の終焉する10世紀中頃まで南加賀窯は再び最盛期を迎える。

瓦生産Ⅱ期

中央官衛系工人の参画のもと開始された南加賀窯の瓦生産はVI₂期の遅くとも中段階にはその生産を終え、一定の断絶期の後、在地工人による瓦生産が開始される。二ツ梨窯1-A号窯におけるVI₃期古段階、戸津33・38号窯のVI₃期中段階で、瓦の成形技法は横置き一本造りや凸面布目押圧成形技法などI期生産技術を踏襲するものの、瓦当文様形成については極めて稚拙な技術であり、軒先瓦生産の意図が明確に認められない。瓦当文様構成を中央官衛系のものに対比することは困難であるが、そのモデルとされる複弁四葉蓮華文の文様構成から見て、複弁四葉蓮華文系の終焉形態に近いものであり、当瓦生産の初源は10世紀初頭を遡らない時期のものとしている。2時間間生産されたものであり、VI₃期古段階は10世紀初頭を含まない前葉段階に、VI₃期中段階は10世紀第2四半期に位置づけておく。

当瓦生産はI期と異なり、軒先瓦生産よりも平瓦生産に重点を置いたものであり、国分寺などの堂舎修復や付属建物に葺くためのものであったと予想される。軒先瓦文様のあまりにも粗雑な作りから見て、中心的な建物の屋根を飾るものとは思えず、応急処置的なものであった可能性が高い。当期の須恵器生産は安定期を迎えた段階であり、徐々にではあるが、土師器生産への移行が見られる須恵器生産の終焉が見え始める時期のものである。

瓦生産Ⅲ期

軒平瓦Ⅲ類及び軒丸瓦Ⅱ類（彫り直し瓦範?）、高尾廃寺式瓦の生産段階である。生産時期はⅡ期に連続するものの、瓦当文様系統はI期の中央官衛系複弁四葉蓮華文系統からの流れから逸脱するもので、特に鬼瓦生産や高尾廃寺式瓦の生産など、中央官衛系瓦屋または先進地域の瓦屋から新規に瓦工人を招来し、生産に従事させたものと見られる。平安宮系の瓦当文様と対比すれば、10世紀後半代でも中頃に近い段階のものに類似し、『政治要略』に記載される天慶5年（942）の加賀国司に出された勘解由使勘判抄にある国分寺堂舎破損に基づけば、堂舎修復工事に基づく瓦生産と見なし、10世紀中頃を初源とし、第3四半期までの暦年代観をあてることが妥当と判断する。当瓦生産を行う二ツ梨窯B地区7号窯の須恵器から、当期はVI₃期新段階に位置づけられ、高尾廃寺の共伴須恵器なども含め、VI₃期新段階から須恵器生産終焉期（加賀市耳聞山遺跡土器だまり資料から南加賀窯終焉期をVII₁期にまで下げられる可能性がある）までとする。

当瓦生産の契機については、先に述べた国分寺堂舎の修復工事が主要因と予想され、その一連の事業として高尾廃寺への瓦葺きも行われたものだろう。瓦工人には中央官衛系瓦屋からの可能性を持つが、鬼瓦の形態など朝鮮半島も含めた先進技術保有地域からの可能性もあり、国を挙げての国分寺整備事業とはやや質の異なるものであったと理解したい。国司が堂舎修復を指揮したものであり、国衛が関連するものであったとは思われるが、高尾廃寺に葺く瓦の生産などを見ると、もともとの須恵器生産経営管理者である江沼郡領層が関わった可能性は高いと判断する。須恵器生産が衰退、終焉する中で行われた瓦生産であり、最後まで甕窯構造の瓦陶兼業で行われる点が注目される。

以上、南加賀窯跡群の瓦生産を3期に分けて、暦年代観も含め考察した。特に、暦年代観については、2004年に筆者が発表した編年と暦年代観を若干修正するものとなった（望月2004a、2004b）。まとめれば、VI₁期は9世紀中頃から第3四半期、VI₂期は9世紀後葉から10世紀初頭、VI₃期は10世紀前葉から中頃、VII₁期は10世紀第3四半期になる

う。さらに、IV₂期新は8世紀末葉から9世紀初頭、V₁期は9世紀第1四半期、V₂期は9世紀第2四半期に位置づけられものと理解する。編年案と暦年代の詳細については再考の機会を持ちたいと考える。

なお、本論作成において、田嶋明人氏、上原真人氏、木立雅朗氏より多くのご教示を受けた。特に、上原氏の南加賀窯瓦群への評価が、筆者の編年的位置づけの基軸をなすものであるが、氏の指導をややゆがめて解釈した部分もあろうかと思われる。ご容赦願いたい。

参考引用文献

- 上原真人 1997 『瓦を読む』歴史発掘11 講談社
上原真人 2004 「瓦からみた北陸の古代寺院の様相」『フォーラム 奈良時代の富山を探る』富山市教育委員会
植山 茂 1999 「平安時代中期の官瓦窯について」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』
木村捷三郎 1984 「出土瓦の考察」『大谷中・高等学校構内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会
小松市教育委員会 1983 『戸津』
小松市教育委員会 1985 『戸津—第4・5次発掘調査概要報告書—』
小松市教育委員会 1993 『二ツ梨豆岡向山古窯跡』
田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会
田嶋明人 1997 「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム 北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
平安博物館 1977 『平安京古瓦図録』雄山閣出版
北陸古瓦研究会 1987 『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』桂書房
望月精司 1991 「戸津古窯跡群出土の軒先瓦と暦年代観」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会
望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究会』第2号 北陸古代土器研究会
望月精司 1993 「10世紀の瓦」『二ツ梨豆岡向山古窯跡』小松市教育委員会
望月精司 2004a 「9～10世紀における南加賀窯跡群の須恵器・土師器・瓦」金沢大学考古学研究室検討会資料
望月精司 2004b 「立国当初の加賀国府・国分寺—小松市国府地区の調査成果と国分寺瓦から—」『第8回まいぶん講座フォーラム 加賀国府を考える—小松に国府はあったのか—』小松市教育委員会埋蔵文化財調査室
山本忠尚 1998 『鬼瓦』日本の美術第391号 至文堂
吉岡康暢 1976 「平安前期の地方政治と国分寺—加賀国分寺をめぐる諸問題—」『金沢大学日本海域研究所報告第8号』

第5節 10世紀の窯道具

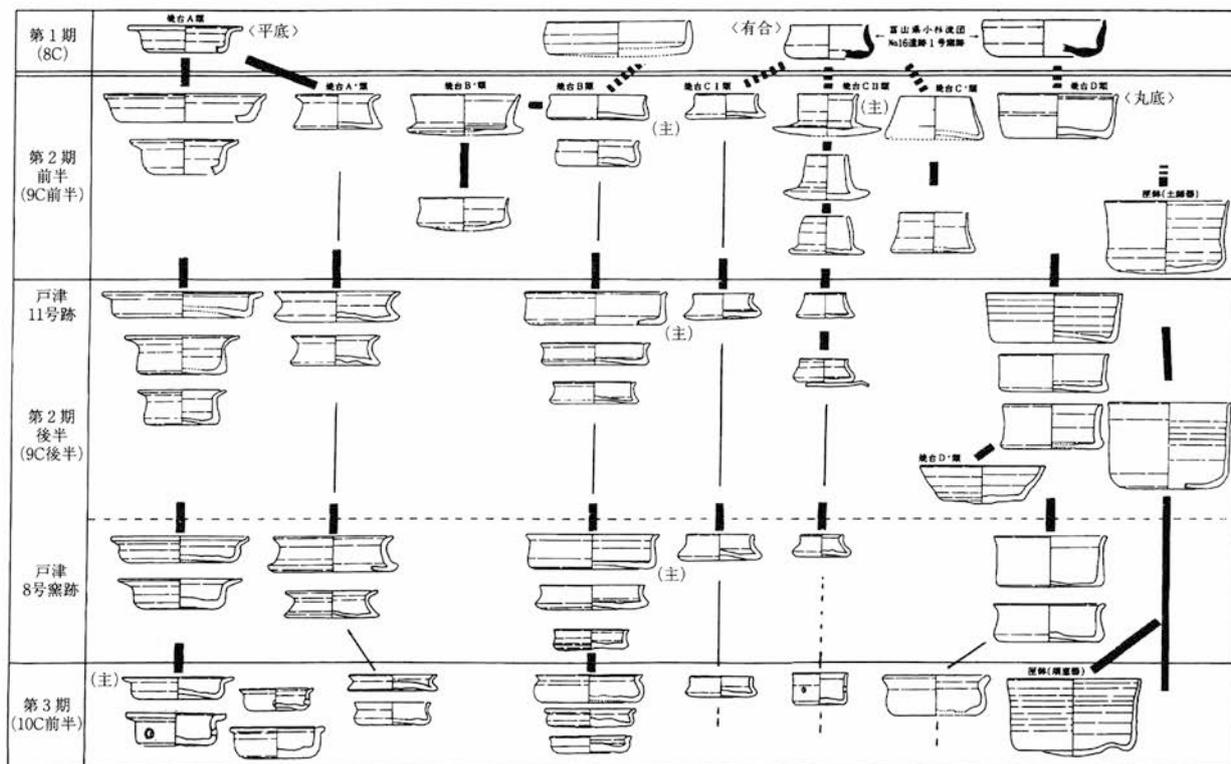
窯道具として、A地区・B地区から貯蔵具専用焼台や匣鉢が出土している。貯蔵具専用焼台は、底部から立ち上がり、胴部が丸くなっているもの、外反気味に立ち上がるもの、直立気味に立ち上がるものと様々で、A地区灰原調査報告では、坏型焼台と呼ばれているものである。器肉は全体的に厚いが、底部を非常に薄く作るものもあり、切り離しは回転ヘラ切りが主だが、糸切りにて切り離しを行うものもある。胎土は、殆どのものが砂を多量に含む粘土を使用し、表面はざらざらして質の悪さを感じさせるものとなっている。南加賀窯跡群では、貯蔵具製品の癒着を防止するために用いるものとして、この時期の生産に使用されないことはなく、多く出土するものである。勿論粘土塊置台との密接な関係があり、これらは、「窯道具と粘土塊の関係」「焼台分類及び使用形態」「粘土塊焼台の形態」として、窯道具の分類や変遷と粘土塊との設置模式図（望月精司1993「第4節 10世紀の窯道具」『二ツ梨豆岡向山窯跡』1992「第5節まとめ 2焼台の変遷」『戸津古窯跡群Ⅱ』）が既に復元されている。また、焼台・匣鉢は出現期（8世紀第2四半期から後半）から10世紀までの変遷が、昭和58年度A地区灰原調査で検討されたものを含め集成（望月精司2003「9・10世紀における北陸の須恵器窯構造」『第9回須恵器窯跡構造検討会（北陸例会）資料』窯跡研究会）されている。よって、本窯跡で出土する窯道具では、上記の窯道具変遷に基づいて分類を試みている。

南加賀窯跡群でこの時期出土する焼台の9世紀後半から10世紀前半における変化では、9世紀後半までの貯蔵具専用焼台の法量や種類の規則性の中で存在する様相に対し、10世紀では1つの類型における器形上の規則性が失われて行くことが特徴とされている。本窯跡の窯道具を観察すると、この様相に基本的に準じているものと思われたことから、第1分類である体部器形基準でのみ分類を行った。2次分類、細分は行っておらず、A地区灰原調査報告書に準じられなかったことをお詫びしたい。よって、報告は簡易に留めたくご容赦願いたい。また、二ツ梨の本窯跡が南加賀窯跡群の中でも特殊な様相をもつ可能性、窯ごとに焼台の様相が異なることも掲げられており、これについては出土地区ごとに、個体識別法で提示することによって異なる様相をつかめればと考えた。ただ、この計測については、破片数の絶対的多数、またこれにより徹底的に接合を行い続けられない時間的な制限も加わり、結果として、口縁部破片数カウントに近いものとなってしまっていると考えられる。また、A地区は削平も含め、灰原調査が実施された、既に限られた区域。B地区も本来さらに灰原が広がるはずの北側区域が大きく削平されたり調査区外にあたる等、要するに両地区で得られた計測値は純粋数値ではないものである。これに甘んじるわけではないつもりだが、掲載する比較表で示すデータは、おおよその出土の割合くらいに留めておくレベルのものであることをことわっておかなければならない。

また、焼台の他の窯道具として匣鉢が出土している。A地区では1-A号窯床1個体、焚口前面土坑から8個体、SK1で1個体、SK3で2個体、SK5で2個体、SK7で1個体出土、1-B号窯関連からは出土していない。これ以外に、上層灰原やグリッド内から7個体、粘土塊集中2から4個体出土している。B地区では、7号窯焚口前面土坑から10個体、埋土から1個体、B地区グリッド内から1個体、灰原から10個体、粘土塊だまりから12個体出土している。南加賀窯跡群では、土師器焼成坑が出現してくる時期に須恵器窯でも見られる窯道具で、土師器焼成坑が盛んに築窯される時期には、須恵質のものが多く出土している傾向にある。使用法については、灰釉陶器焼成で使用される匣鉢の出土例を見れば推測は可能であろうが、未だ明確な使用法は確認されていない状況となっている。

焼台の器形分類について

器形は、大別して、A類型の「底径<口径」を基準として、逆L字状に口縁部が長く外屈するもの、所謂灰皿状のものをA①類（焼台変遷図左から1番目）、口縁部の外屈が短いものをA②類（焼台変遷図左から2番目）、体部に屈曲をもつものをA③類（焼台編成図左から3番目）としている。B類型は、「底径≒口径」を基準として、体部内湾を呈す器形をB①類（焼台変遷図左から4番目上段）、器高が低く体部が直立気味に立ち上がる器形をB②類（焼台変遷図左から4番目の中段・下段）、体部に明確な屈曲をもって口縁が外傾する器形でA③類と非常に似ているが「底径≒口径」関係が守られているものをB③類（焼台変遷図には掲載されていない）、C類型は「底径>口径」を基準とするもの（焼台変遷図左から5番目）、D類型は体部が直立するものをD①類（焼台変遷図左から5番目）、または開き気味となるものをD②類（焼台変遷図左から6番目）とした。



第134図 南加賀窯跡群 貯蔵具専用焼台変遷図 (S=1/10) (望月2003を転載)

分類による対比の試み

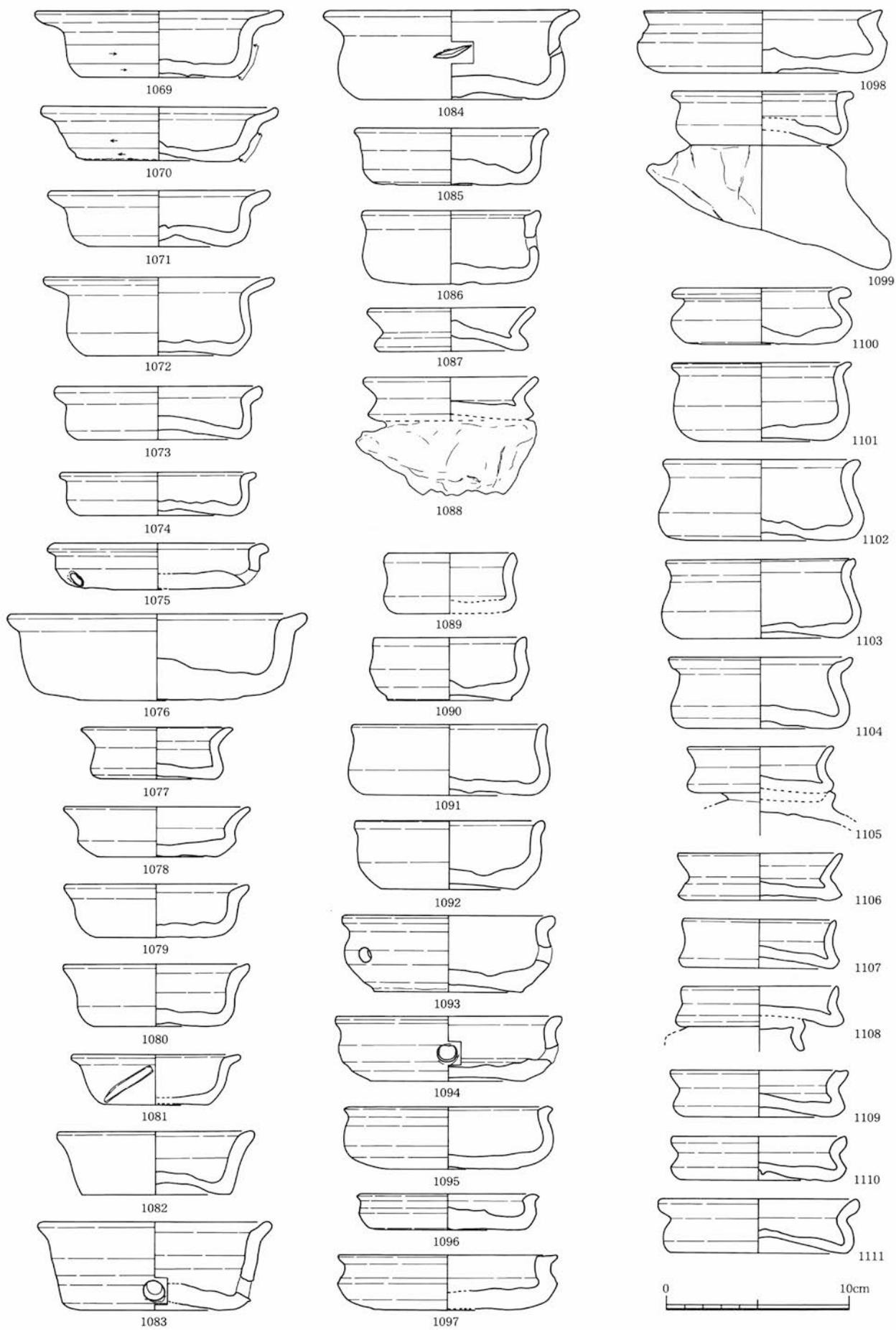
出土地別に類型の対比を試みた。ただ、A③類とB③類は区分して別合計としているが両者が非常によく似ており、同一器形とみなしてよいのだろうと考え、これはA区灰原調査報告時のA'類型と相対すると考えられる。よって以下のA'の数値は、両者を合計しているものである。1-A号窯関連は、A類型が23.9%、A'類型が21.3%、B類型は47.8%、C類型が1.8%、D類型が5.1%となった。1-B号窯関連では、A類型が29.7%、A'類型が19.5%、B類型は47.5%、C類型が1.7%、D類型が1.7%となった。7号窯関連では、A類型が40.5%、A'類型が1.0%、B類型は53.5%、C類型が3.8%、D類型が1.2%となった。

A地区の1-A号窯、1-B号窯の数値を比較すると、全体的に1-A号窯の方が焼台の数は多く7割を占める。1-B号窯よりも貯蔵具専用焼台が必要な状況であったのだろう。また、1-B窯の方がA類型が5%ほど多く、逆に1-A号窯の方はD類型が若干多くなっている。焼台は、貯蔵具の器種により使い分けがなされることがあり、その影響があった可能性がある。

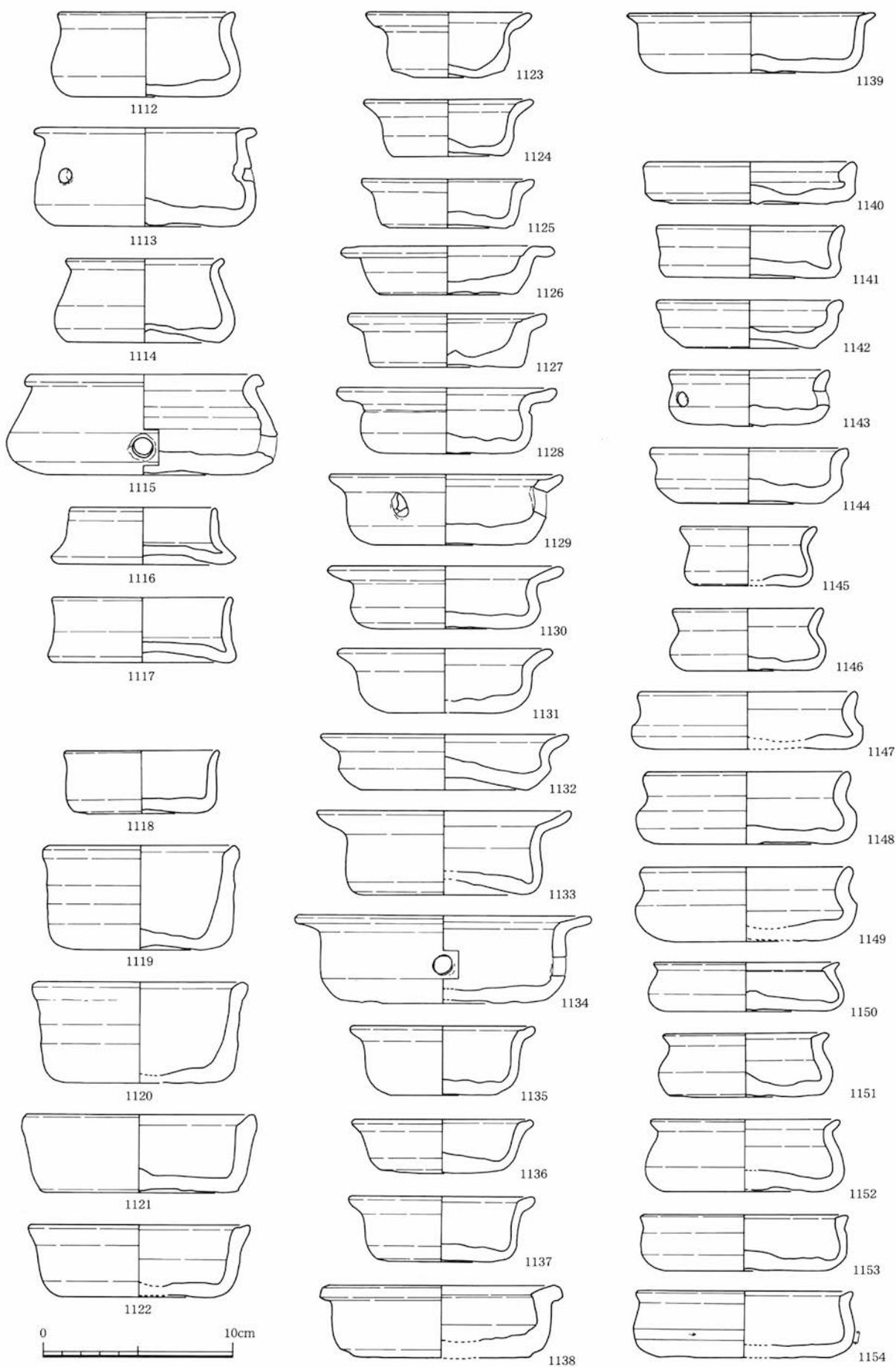
B地区の窯関連以外として灰原や土坑等その他の遺構のものを総計してみると、A類型が総個体数で43.8%、A'類型が総個体数33で0.9%、この内A②類は出土していない。B類型は総個体数417で47.4%、C類型が総個体数199で4.9%、D類型が総個体数120で3.0%となっている。7号窯関連の数値と比べれば少々違いがみられるものの、総じてB地区全体では、A類型4割、B類型5割強の割合で使用されていることがわかる。A地区の窯関連と、B地区の7号窯と比較してみれば、7号窯ではA類型が非常に多く、A'類が極端に少ないことが特徴的と言える。特にA③型の胴部に屈曲点を明確にもって口縁端部が広がる底径<口径が基本の器形は全く出土していない。その代わりと言えるかどうかかわからないが、A類ではかなり小型のタイプが一定量見られ、B類では様々な器形が確認できる。A地区出土のものは、まだ比較的法量や口径などある程度は規則がみられ、まとまりがあるのに対し、B地区出土のB類型は法量、体部形態、口縁端部、詳細をみれば切りのないくらい多様化している。まさに1つの類型における器形上の規則性が失われていると言え、南加賀窯跡群の中でも特異な内容を有すると言えよう。

出土地点		A①	A②	A③	B①	B②	B③	C	D
1-A号窯 関連	床	—	—	—	19	1	—	—	—
	覆土	1	2	4	8	2	6	1	—
	焚口全面土坑・灰層	22	40	11	92	8	37	4	14
	A③B③類以外合計	65		15	130		43	5	14
	含有率	23.9%		5.5%	47.8%		15.8%	1.8%	5.1%
	大別個体数合計	80			173			5	14
	合計	272							
	含有率	29.4%			63.6%			1.8%	5.1%
1-B号窯 関連	床	—	19	2	4	5	1	—	—
	覆土	1	3	—	8	1	1	—	—
	焚口全面土坑・灰層	6	6	2	36	2	17	2	2
	A③B③類以外合計	35		4	56		19	2	2
	含有率	29.7%		3.4%	47.5%		16.1%	1.7%	1.7%
	大別個体数合計	39			75			2	2
	合計	118							
	含有率	33.1%			63.6%			1.7%	1.7%
A地区 窯関連 以外	SK1	—	—	—	—	—	—	—	—
	SK2	—	—	—	—	—	—	—	—
	SK3	—	—	—	5	—	—	—	—
	SK4	—	—	—	4	1	16	2	—
	SK5	—	2	—	3	—	—	1	—
	SK6	4	5	1	3	—	4	—	3
	SK7	—	3	—	4	—	4	2	—
	グリッドピット等	14	5	10	6	1	17	11	6
	粘土塊集中1	—	3	2	1	2	11	5	2
	粘土塊集中2	3	7	2	7	—	5	2	—
	上層灰原	49	67	16	121	17	65	11	15
	窯関連以外合計	70	92	31	154	21	122	34	26
	A③B③類以外合計	35		4	56		19	2	2
	含有率	7.1%		0.8%	11.3%		3.8%	0.4%	0.4%
大別個体数合計	193			297			2	2	
合計	494								
	含有率	39.1%			60.1%			0.4%	0.4%
大別個体数総計		312			643			9	18
A地区含有率		35.3%			72.7%			1.0%	2.0%
A地区総計		884							
B地区 7号窯 関連	床	—	3	—	—	—	—	—	—
	覆土	6	6	—	22	1	—	1	2
	全面土坑・灰層	47	50	—	135	10	4	15	3
	A③B③類以外合計	169		0	223		4	16	5
	含有率	40.5%		0.0%	53.5%		1.0%	3.8%	1.2%
	大別個体数合計	184			168			16	5
	合計	417							
	含有率	44.1%			40.3%			3.8%	1.2%
B地区 窯関連 以外	B地区灰原	337	246	—	810	73	19	116	57
	SK1	—	—	—	—	—	—	—	—
	SK2	3	13	—	24	1	1	—	—
	SK3	2	2	—	1	1	—	—	—
	SK4	1	1	—	1	—	—	1	—
	グリッドピット等	12	4	—	10	2	—	5	5
	粘土塊だまり	21	37	—	67	7	7	17	10
	A③B③類以外合計	679		0	996		26	139	72
	含有率	35.5%		0.0%	52.1%		1.4%	7.3%	3.8%
	大別個体数合計	679			1,022			139	72
合計	1,912								
	含有率	35.5%			53.5%			7.3%	3.8%
大別個体数合計		863			1,190			155	77
B地区含有率		37.1%			51.1%			6.7%	3.3%
B地区総計		2,329							

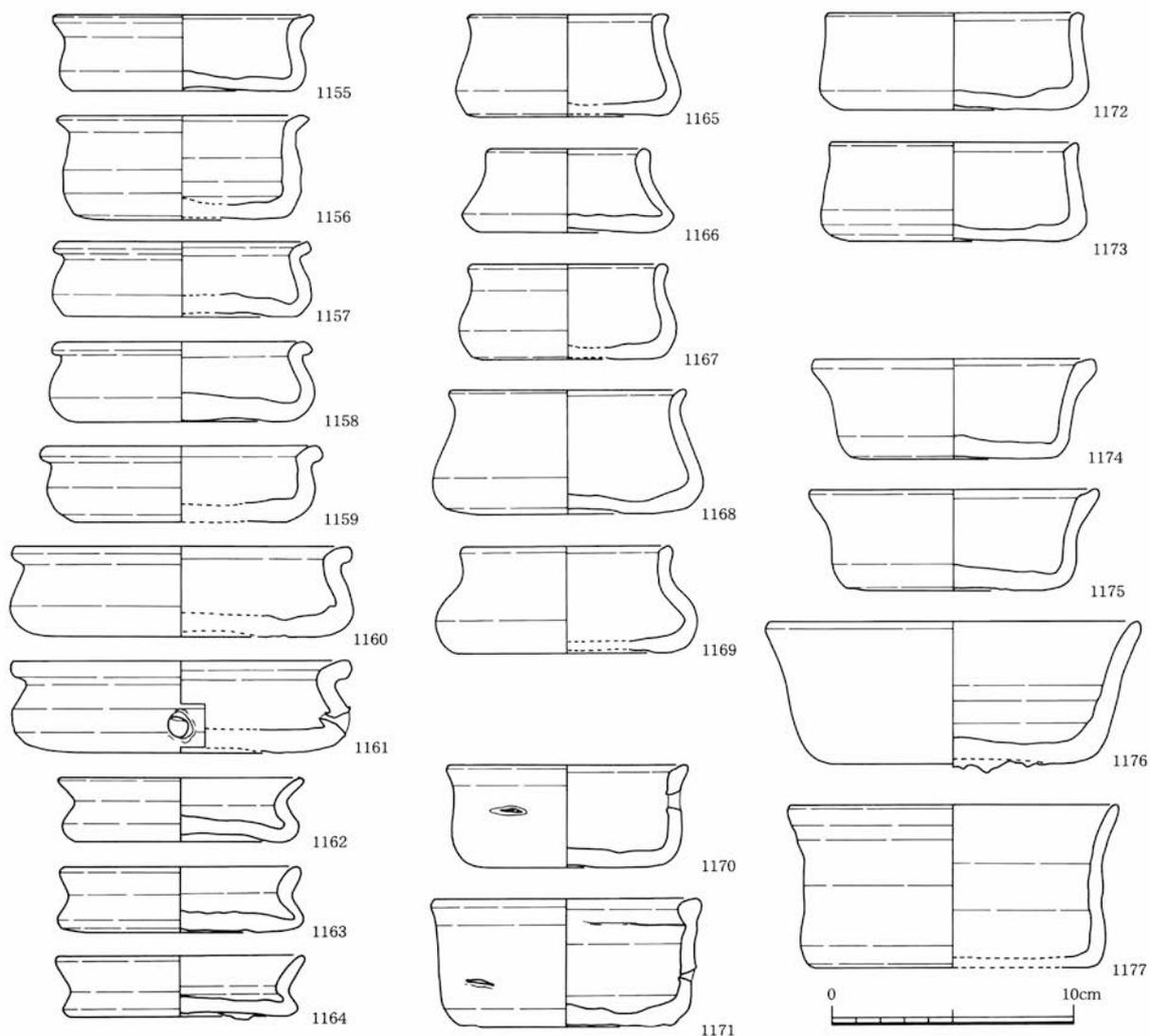
第22表 焼台類型対比表



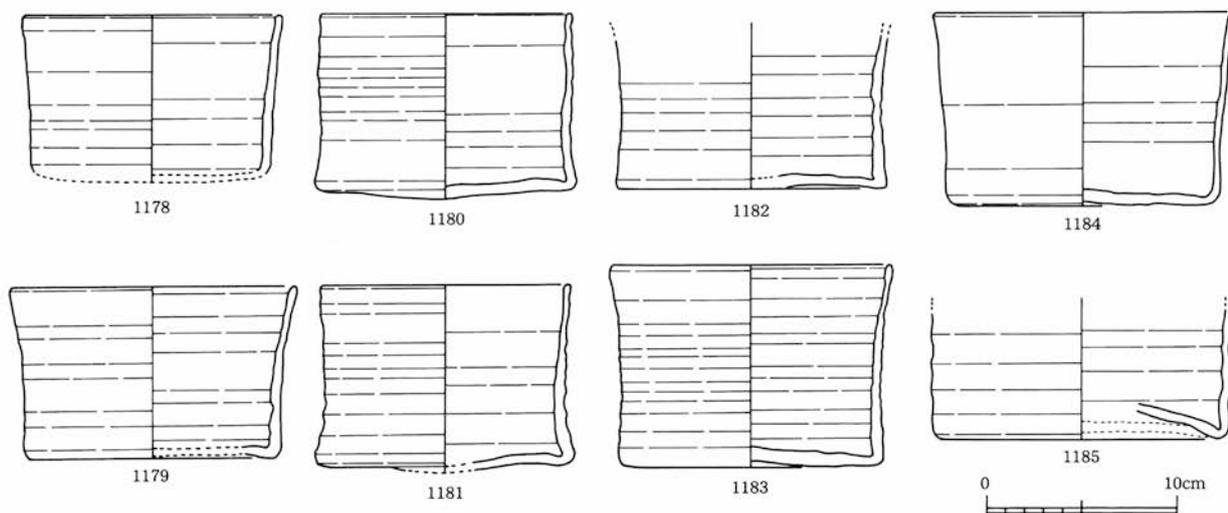
第135图 烧台(1) (A地区出土) (S=1/3)



第136图 烧台(2) (1112~1122 : A地区出土, 1123~1154 : B地区出土) (S=1/3)



第137図 焼台(3) (B地区出土) (S=1/3)



第138図 匣鉢 (1178 : A地区出土, 1180~1185 : B地区出土) (S=1/4)

遺物観察表 (8世紀遺物)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	口部 形状	備考
47	1	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.2 高3.93 つまみ径3.0 つまみ高0.8	良好	青灰	通常	完形	製品	—	右	重焼II b類?
	2	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.8 高3.6 つまみ径3.7 つまみ高0.6	堅緻	青灰	通常	7/8	製品	—	右	正位焼
	3	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.4 高3.8 つまみ径3.7 つまみ高0.75	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台	—	右	正位焼 内面中央2本指ナデ
	4	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.7 高4.2 つまみ径3.45 つまみ高0.8	堅緻	暗青灰	通常	7/8	置台	正逆?	右	ヘラ記号「X」 歪み 重焼I類
	5	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.5 高3.6 つまみ径2.7 つまみ高0.5	堅緻	青灰	通常	3/8	置台	逆位	—	
	6	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.7 高4.1 つまみ径3.3 つまみ高0.7	堅緻	青灰	通常	7/8	置台	正逆?	右	
	7	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.0 高3.6 つまみ径3.7 つまみ高0.7	半生	青灰・青白	通常	1/2	製品	—	右	正位焼 重焼I類 内面中央3本指ナデ
	8	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.0 高3.25 つまみ径3.1 つまみ高0.7	堅緻	黒灰	砂多	1/2	置台	正逆?	—	内外全面打ち欠き
	9	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.7 高3.6 つまみ径3.35 つまみ高0.8	良好 酸化	青灰	通常	7/8	置台	—	右	正位焼
	10	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.0 高5.08 つまみ径3.4 つまみ高0.85	良	外:青灰白 内:灰白	通常	1/2	製品	—	右	正位焼 内面中央1本指ナデ
	11	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.0 高3.55 つまみ径3.15 つまみ高0.7	極堅緻	暗灰	砂多	7/8	置台	—	—	重焼II b類?
	12	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.7 高4.9 つまみ径3.4 つまみ高1.6	堅緻	暗青灰	通常	1/2	置台	正位	右	正位焼
	13	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.0 高3.6 つまみ径3.4 つまみ高0.8	半生	外:灰 内:灰白	通常	5/8	製品	—	—	正位焼
	14	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.0 高3.3 つまみ径2.75 つまみ高0.6	堅緻	青灰	通常	略完形	置台	正逆?	右	天井部ヘラ切り残存
	15	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□17.4 高3.6 つまみ径3.3 つまみ高0.9	堅緻	暗青灰	砂多	7/8	置台	逆位	—	重焼II b類?
	16	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.5 高3.45 つまみ径3.6 つまみ高0.75	堅緻	外:暗灰 内:青灰	砂多	3/4	置台	逆位	右	正位焼 内面置台痕(径14.4cm) 重焼I類
	17	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.9 高4.05 つまみ径3.22 つまみ高0.85	良好	褐灰	通常	3/8	製品	—	右	正位焼 内面中央タテ指ナデ 重焼I類
	18	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.9 高2.5 つまみ径3.1 つまみ高0.6	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台	逆位	—	内面に置台痕(径12.0cm) 外面に砂付着 ヘラ記号「-」 内面黒灰色
	19	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.4 高2.60 つまみ径3.45 つまみ高0.6	堅緻	青灰	通常	7/8	置台	正位?	右	正位焼 ヘラ記号「-」 重焼I類
	20	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□14.8 高2.85 つまみ径3.3 つまみ高0.6	堅緻	黒灰	砂多	3/4	置台	正逆	右	内外面に置台痕(径外:14.8cm 内: 20.6cm)
	21	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.2 高2.5 つまみ径3.5 つまみ高0.65	堅緻	黒灰	通常	1/2	置台	正位	—	内面中央3本指ナデ ヘラ記号「-」
	22	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.6 高2.6 つまみ径3.65 つまみ高0.7	極堅緻	暗青灰	砂多	7/8	置台	正位	—	歪み
	23	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.1 高2.45 つまみ径3.6 つまみ高0.58	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台	逆位	右	天井部ケズリ左回転 ヘラ記号「-」 重焼I類
	24	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.65 高2.65 つまみ径3.35 つまみ高0.5	堅緻	暗青灰	砂多	3/4	置台	正位?	右	内面中央2本指ナデ
	25	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□15.5 高3.15 つまみ径3.9 つまみ高0.9	堅緻	黒灰	砂多	3/8	置台	逆位	—	
	26	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□17.2 高2.65 つまみ径3.2 つまみ高0.7	堅緻	暗青灰	通常	7/8	置台	逆位	—	
48	27	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□17.9 高2.45 つまみ径3.7 つまみ高0.6	堅緻	灰	砂多	7/8	置台	正位?	右	正位焼 歪み 内面中央3本指ナデ ヘラ記号「-」
	28	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.65 高2.5 つまみ径3.25 つまみ高0.6	堅緻	黒灰	通常	3/4	置台	正位	—	外面全体打ち欠き ヘラ記号「-」
	29	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□17.15 高2.57 つまみ径3.15 つまみ高0.6	堅緻	灰	通常	略完形	置台	正逆	左	正位焼 内面中央1本指ナデ
	30	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯床	□16.6 高2.45 つまみ径3.0 つまみ高0.7	堅緻	黒灰	砂多	1/2	置台	正逆	—	内面の置台痕明確(径11.4cm)
	31	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.3 高4.7 台10.2 台高0.65	堅緻	外:褐灰 内:灰褐	通常	1/2	置台	逆位	右	18と同一個体
	32	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.8 高4.45 台9.3 台高0.58	生焼	外:淡灰 内:白	通常	1/2	製品	—	右	正位焼
	33	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.7 高4.58 台9.5 台高0.68	堅緻	暗紫青灰	砂多	1/2	置台	逆位	—	
	34	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□16.3 高4.85 台9.7 台高0.7	堅緻	外:黒暗灰 内:暗灰	通常	3/4	置台	逆位	—	正位焼
	35	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.6 高4.0 台9.6 台高0.7	堅緻	暗青灰	砂多	3/4	置台	逆位?	—	内面中央指ナデ
	36	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.9 高4.4 台9.2 台高0.7	堅緻	青灰白	通常	3/8	置台	逆位	右	正位焼 内面中央タテ指ナデ
	37	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.6 高4.1 台10.5 台高0.75	堅緻	暗青灰	通常	3/8	置台	逆位	—	
	38	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□16.1 高4.5 台9.5 台高0.75	良好	青灰	砂多	1/2	置台	逆位	—	正位焼 一部を置台に使用
	39	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.8 高4.59 台9.8 台高0.65	半生	外:灰 内:白灰	通常	1/2	製品	—	右	正位焼
	40	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.8 高4.52 台10.0 台高0.8	堅緻	暗青灰	砂多	3/8	置台	逆位	—	ヘラ記号「-」
	41	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.8 高4.5 台9.6 台高0.5	堅緻	暗青灰	砂多	略完形	置台	—	右	口欠け
	42	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.6 高4.49 台8.0 台高0.65	堅緻	褐灰	砂多	1/4	置台	逆位	右	
	43	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.1 高4.05 台9.8 台高0.52	堅緻	暗灰	砂多	1/4	置台	逆位	—	
	44	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.8 高4.15 台10.0 台高0.6	良好	青灰	通常	3/4	置台	逆位	—	底部外面ヘラ工具痕 ヘラ記号「-」
	45	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.7 高3.48 台9.6 台高0.35	堅緻	青灰白	通常	1/2	置台	逆位?	—	
	46	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.4 高4.05 台8.85 台高0.7	堅緻	暗青灰	通常	7/8	置台	逆位	—	外面底部に置台痕(径13.0cm)
47	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.0 高4.1 台9.3 台高0.45	堅緻	暗青灰	砂多	3/4	置台	逆位	右		
48	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□14.75 高4.71 台9.2 台高0.5	堅緻	外:暗褐灰 内:暗青灰	砂多	3/4	置台	逆位	右	底部内面右回転口クロ指ナデ	
49	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.3 高4.20 台9.1 台高0.7	極堅緻	暗青灰	砂多	4/5	置台	逆位	右	歪み	
50	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.4 高4.55 台9.4 台高0.7	堅緻	暗青灰	砂多	6/7	置台	逆位	右		
51	須恵器	坏B・身	A区	2号窯床	□15.6 高4.55 台9.7 台高0.7	堅緻	青灰白	通常	1/2	置台	逆位	右	底部内面1本指ナデ	
49	52	須恵器	坏A	A区	2号窯床	□13.5 高3.2	堅緻	黒灰	通常	1/4	置台	逆位	右	
	53	須恵器	坏A	A区	2号窯床	□13.8 高3.6	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	左	正位焼
	54	須恵器	坏A	A区	2号窯床	□14.3 高4.2	堅緻	暗灰	通常	7/8	置台	逆位	左	正位焼 底部成形台痕 内面2本指ナデ

遺物観察表 (第49図～52図)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	充存	性格	使用面	口部の 形状	備考
49	55	須恵器	坏A	A区	2号窯床	□14.5 高3.9	堅緻	褐灰	通常	1/4	置台	逆位	—	
	56	須恵器	坏A	A区	2号窯床	□15.4 高3.6	堅緻	黒灰	通常	1/8	置台	逆位	—	
	57	須恵器	高坏	A区	2号窯床	□16.2 残高5.2 坏高3.2	堅緻	黒灰	通常	坏部 3/8	置台	逆位	—	坏部内面中央2本指ナデ
	58	須恵器	碗	A区	2号窯床	□13.5 高8.6	良	青灰白	通常	3/4	製品	—	—	底部手持ちケズリ
	59	須恵器	埴	A区	2号窯床	□15.65 高6.05	良	青灰白	砂多	7/8	製品	—	右	正位焼? 底部外面8回で円形状にケズリ 中央へラ切り(右回転)
	60	須恵器	横瓶	A区	2号窯床	胴15.2	堅緻	暗青灰	砂多	1/6?	置台	正位	—	外:タタキHb類 内:当て具Hb類
61	須恵器	横瓶	A区	2号窯床	胴11.0	堅緻	暗青灰	砂多	閉塞部 1/4	置台	正逆	—	外:タタキHa類 内:当て具Db類 外面打ち欠き	
50	62	須恵器	坏B・蓋	A区	2号窯埋土	□16.7 高4.2 つまみ径3.6 つまみ高0.9	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	正位焼 内面中央1本指ナデ
	63	須恵器	坏B・身	A区	2号窯埋土	□15.8 高4.65 台10.0 台高0.55	半生	灰白	通常	1/2	製品	—	—	45と同一個体
	64	須恵器	坏B・身	A区	2号窯埋土	□14.9 高4.25 台9.5 台高0.7	良好	青灰	通常	1/2	置台	逆位	右	正位焼 ロクロ台痕
	65	須恵器	坏B・蓋	A区	上層灰原	□17.0 高2.7 つまみ径3.2 つまみ高0.5	良 酸化	褐灰	砂多	1/4	置台?	—	左	内面中央1本指ナデ
	66	須恵器	坏B・蓋	A区	上層灰原	□16.8 高2.35 つまみ径2.8 つまみ高0.9	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	正位焼 内面中央3本指ナデ へラ記号「一」?
	67	須恵器	坏B・身	A区	グリッド	□15.4 高3.9 台10.7 台高0.3	堅緻	暗灰	砂多	1/4	置台	逆位	左	外面体部打ち欠き
	68	須恵器	坏B・身	A区	グリッド	□15.2 高4.2 台9.0 台高0.7	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右	正位焼 へラ切り→台→ナデ→成形台痕
	69	須恵器	坏A	A区	上層灰原	□13.5 高3.6 底9.2	良	青灰	通常	1/8	製品	—	—	
	70	須恵器	坏A	A区	上層灰原	□15.9 高3.65 底9.4	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右	逆位焼?
	71	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.9 高3.8 つまみ径3.4 つまみ高1.2	生焼	白	通常	1/2	製品	—	右	
72	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.4 高4.15 つまみ径3.4 つまみ高1.0	半生	白灰	通常	7/8	製品	—	左	天井に成形台痕(直線)	
73	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.3 高3.4 つまみ径3.2 つまみ高1.1	半生	灰白	通常	7/8	製品	—	左	重焼I類	
74	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.6 高3.9 つまみ径3.25 つまみ高1.15	生焼	白	通常	完形	製品	—	右	内面修復痕	
75	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.7 高3.9 つまみ径3.3 つまみ高1.4	生焼	白	通常	1/4	製品	—	右		
76	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.9 高3.3 つまみ径3.1 つまみ高1.05	半生	白	通常	略完形	製品	—	右	内面ナデ中央はねあげ 重焼IIa? IIb?	
77	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.2 高3.3 つまみ径3.5 つまみ高1.15	良好	青灰	通常	5/8	製品	—	右	重焼I類	
78	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.5 高3.4 つまみ径3.2 つまみ高1.0	良好	青灰	砂多	完形	製品?	—	右	重焼I類	
79	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.0 高4.5 つまみ径2.9 つまみ高1.2	生焼	白	通常	7/8	製品	—	右	天井乾成形台痕	
80	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.2 高4.5 つまみ径3.4 つまみ高1.1	生焼	白	通常	1/2	製品	—	右		
81	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.2 高3.9 つまみ径3.0 つまみ高1.15	堅緻	暗灰	砂多	7/8	置台	—	右	重焼I類	
82	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.4 高3.5 つまみ径3.0 つまみ高0.95	生焼	白	通常	5/8	製品	—	右	重焼I類 内面中央1本指ナデ	
83	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.3 高3.3 つまみ径2.9 つまみ高0.75	良好	青灰	通常	3/4	製品	—	右		
84	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.8 高3.3 つまみ径3.3 つまみ高1.3	生焼	白灰	通常	3/4	製品	—	右		
85	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.8 高3.7 つまみ径3.26 つまみ高0.05	生焼	白	通常	1/2	製品	—	右		
86	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.7 高3.4 つまみ径2.75 つまみ高1.1	良好	青灰	通常	完形	製品	—	右		
87	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.0 高3.15 つまみ径3.2 つまみ高1.1	半生	白灰	通常	1/2	製品	—	右	重焼I類?	
88	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.4 高3.2 つまみ径3.2 つまみ高1.1	半生	白	通常	1/2	製品	—	右	天井成形台痕(直線)	
89	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.75 高3.25 つまみ径3.05 つまみ高1.3	堅緻	青灰	通常	完形	製品	—	右		
90	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.7 高3.2 つまみ径3.1 つまみ高1.2	堅緻	黒灰	通常	3/8	置台	逆位	左?		
91	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.7 高3.35 つまみ径3.4 つまみ高0.9	酸化	暗茶灰	砂多	5/8	製品	—	右	内面へラ記号「二」	
92	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.5 高3.25 つまみ径3.3 つまみ高1.0	良	青灰	砂多	3/4	製品	—	右	重焼I類	
93	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.4 高3.42 つまみ径3.24 つまみ高1.1	生焼	黄白	通常	1/2	製品	—	右		
94	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.6 高3.35 つまみ径3.1 つまみ高1.1	生焼	白	通常	3/8	製品	—	—		
95	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.0 高3.35 つまみ径3.0 つまみ高1.0	良	灰	通常	7/8	製品	—	右	重焼I類? 内面ナデ中央ではね上げ	
96	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.4 高3.2 つまみ径3.2 つまみ高1.05	生焼	白	通常	3/4	製品	—	右		
97	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.9 高3.0 つまみ径3.25 つまみ高1.11	生焼	白	通常	略完形	製品	—	右		
98	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.2 高2.95 つまみ径3.3 つまみ高1.0	生焼	白	通常	3/4	製品	—	—		
99	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.2 高2.85 つまみ径3.2 つまみ高1.1	生焼	白灰	通常	1/4	製品	—	右	天井へラ切り残存 重み	
100	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.0 高2.75 つまみ径3.35 つまみ高0.85	生焼	白灰	通常	1/2	製品	—	右		
101	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.95 高2.85 つまみ径3.45 つまみ高1.0	半生	灰	通常	5/8	製品	—	右		
52	102	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.8 高3.15 つまみ径3.0 つまみ高1.1	良	青灰	通常	5/8	製品	—	左	重焼I類
	103	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.2 高3.1 つまみ径3.0 つまみ高1.2	生焼	白灰	通常	1/4	製品	—	右	重焼I類 中央ランダム指ナデ
	104	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.0 高3.3 つまみ径3.4 つまみ高1.2	良	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	
	105	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.8 高2.45 つまみ径3.5 つまみ高0.9	生焼	白	通常	5/8	製品	—	右	
	106	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.4 高2.95 つまみ径3.3 つまみ高0.95	生焼	白	通常	3/8	製品	—	右	
	107	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.4 高3.1 つまみ径3.4 つまみ高1.1	半生	灰	通常	3/4	製品	—	右	重焼I類
	108	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.8 高3.0 つまみ径3.15 つまみ高1.0	生焼	白	通常	完形	製品	—	右	
	109	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.1 高3.15 つまみ径3.3 つまみ高1.25	堅緻	青灰	通常	7/8	製品	—	右	
	110	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.4 高3.3 つまみ径3.0 つまみ高1.3	生焼	白	通常	3/4	製品	—	左	内面修復痕(径1.5cm)
	111	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□17.2 高2.75 つまみ径3.0 つまみ高1.05	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右	
	112	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.2 高2.95 つまみ径3.0 つまみ高1.2	生焼	白	通常	完形	製品	—	右	内面修復痕(径1.5cm)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	方位	備考	
52	113	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.5 高2.65 つまみ径3.2 つまみ高1.25	生焼	白	通常	略完形	製品	—	右		
	114	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.5 高1.2 つまみ径2.85 つまみ高1.05	堅緻	暗青灰	通常	略完形	置台	正逆	右	内外使用(外面3度・内面1度)	
	115	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.8 高2.15 つまみ径3.1 つまみ高1.1	堅緻	灰	砂多	略完形	置台	逆位	右	内面工具ナデ	
	116	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.35 高2.55 つまみ径3.1 つまみ高1.05	生焼	白	通常	7/8	製品	—	右	天井成形台痕(直線)	
	117	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□15.8 高2.45 つまみ径3.15 つまみ高1.15	良好	青灰	砂多	完形	製品	—	右		
	118	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 1次床	□16.2 高2.42 つまみ径3.2 つまみ高1.05	生焼	灰白	通常	3/4	製品	—	右		
	119	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.8 高4.9 台9.8 台高0.65	半生	褐灰	通常	3/4	製品	—	—		
	120	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.0 高4.85 台9.1 台高0.7	半生	白	砂多	完形	製品	—	右	成形台痕	
	121	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.8 高4.55 台9.1 台高0.7	堅緻	淡黄青灰	通常	1/2	製品	—	右	内面底部十字の指ナデ	
	122	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.5 高4.38 台8.85 台高0.67	生焼	白	通常	略完形	製品	—	右		
	123	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.3 高4.55 台9.2 台高0.7	堅緻	暗灰	通常	1/4	置台	—	—	外面置台痕3回 底部ヘラ切り残存	
	124	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.4 高4.3 台9.7 台高0.65	生焼	白灰	砂多	3/4	製品	—	右		
	125	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.3 高4.35 台9.2 台高0.6	生焼	白	通常	略完形	製品	—	右		
	126	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.0 高4.2 底10.0 台高0.6	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	—		
	127	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.4 高4.75 つまみ径9.0 つまみ高0.8	生焼	白灰	通常	略完形	製品	—	右		
	128	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.45 高4.7 台9.9 台高0.55	堅緻	紫青灰	通常	3/4	置台	—	右?	内面底部3本指ナデ ヘラ記号「X」?	
	129	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.9 高4.4 台9.0 台高0.55	生焼	黄褐灰	砂多	3/4	製品	—	右		
	130	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□16.7 高4.35 台12.1 台高0.85	堅緻	青灰	通常	1/6	置台	—	—	外面大小の打ち欠き	
	131	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.65 高4.2 台9.1 台高0.75	半生酸化	褐灰	通常	3/4	製品	—	右		
	132	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.3 高4.4 台9.6 台高0.65	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右	台底部工具ナデ	
	53	133	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.82 高4.25 台8.6 台高0.6	良	暗青灰	砂多	5/8	置台	逆位	右	
		134	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.7 高4.4 台9.5 台高0.7	生焼	白	通常	完形	製品	—	右	
		135	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.45 高4.37 台9.4 台高0.6	生焼	白	通常	3/4	製品	—	右	
		136	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□16.3 高4.55 台9.3 台高0.55	半生	褐灰	通常	5/8	製品	—	—	外面黒斑
		137	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□15.3 高4.2 台10.0 台高0.65	良好	暗青灰	砂多	1/4	置台	逆位	右	ヘラ記号「一」 底部全体打ち欠き
		138	須恵器	坏B・身	B区	8-1号窯 1次床	□14.9 高4.1 台9.8 台高0.69	堅緻	紫青灰	通常	1/4	置台	逆位	右	内面打ち欠き(径0.5~0.8cm)
		139	須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.2 高3.85 底9.0	生焼	白	通常	完形	製品	—	右	
		140	須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.9 高3.8 底8.1	生焼	白・黒	通常	7/8	製品	—	右	内面黒斑
141		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.5 高4.1 底8.4	良	灰	通常	略完形	製品	—	右		
142		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.4 高3.8 底7.0	堅緻	青灰	砂多	1/4	置台	逆位	—	内面修復痕(径1.5cm)	
143		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.4 高3.8 底9.0	生焼	白	砂多	略完形	製品	—	右	ヘラ切り→タテ2本成形台痕	
144		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.3 高3.9 底8.0	生焼	白	砂多	完形	製品	—	右		
145		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.5 高3.75 底8.0	良好	灰	通常	1/2	製品	—	右		
146		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.2 高3.65 底7.4	良	灰	砂多	7/8	製品	—	右	内面中央小さな1本指ナデ 成形台痕	
147		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.75 高3.65 底9.2	良	灰	砂多	完形	製品	—	右	並列3本の成形台痕	
148		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.8 高3.5 底8.2	良	青灰	砂多	完形	製品	—	右		
149		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.3 高3.48 底7.0	良	暗灰	砂多	1/2	置台	逆位	右		
150		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.2 高3.6 底8.6	生焼	白灰	砂多	完形	製品	—	右		
151		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.6 高3.85 底9.0	生焼	白灰	通常	完形	製品	—	右	中央に短い指ハライ	
152		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.5 高3.8 底9.0	良	灰	砂多	完形	製品	—	右		
153		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.7 高3.8 底9.2	生焼	白灰	砂多	3/4	製品	—	右	底部外面ヘラ切り→並列3本成形台痕	
154		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.05 高3.8 底8.8	生焼	白	通常	完形	製品	—	右		
155		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.0 高3.9 底7.9	堅緻	青灰	通常	3/4	置台	逆位	—	内面底1本指ナデ ヘラ切り→工具ナデ→成形台痕	
156		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.9 高3.9 底8.0	生焼	白	砂多	3/4	製品	—	右		
157		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.8 高3.8 底8.4	生焼	白灰	通常	3/8	製品	—	右		
158		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□14.4 高3.95 底8.9	良	灰	砂多	完形	製品	—	右	外面底部四角形の置台痕 底部外面並列2本成形台痕 中央に指ナデハライ	
159		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.7 高3.7 底7.0	半生	灰	通常	1/2	製品	—	右	内面中央指ナデ	
160		須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.7 高3.75 底5.8	堅緻	青灰	通常	5/8	置台	逆位	右		
161	須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.7 高3.29 底8.8	堅緻	青灰	通常	1/2	置台	逆位	—	外面打ち欠き		
162	須恵器	坏A	B区	8-1号窯 1次床	□13.0 高3.25 底8.0	良	暗黒灰	通常	1/4	置台	逆位	—			
54	163	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□16.4 高3.25 つまみ径3.0 つまみ高0.8	良	灰白	通常	1/2	置台?	—	右	内面幅広2本ナデ ヘラ記号「二」	
	164	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□16.2 高3.75 つまみ径3.1 つまみ高1.1	生焼	白灰	通常	1/4	製品	—	右		
	165	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□17.2 高4.05 つまみ径3.2 つまみ高0.85	良	灰褐	通常	1/4	製品	—	右		
	166	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□16.3 高3.8 つまみ径3.0 つまみ高1.0	良	灰内:白灰	通常	3/8	製品	—	右		
	167	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□16.7 高3.1 つまみ径3.3 つまみ高0.8	良好	青灰(酸化)	砂多	7/8	置台	正逆?	右	ヘラ記号「二」 重焼II a・b?	
	168	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□16.1 高3.05 つまみ径3.5 つまみ高0.9	堅緻酸化	黒灰	通常	1/2	置台	正位?	左	内面ヘラ記号「二」	
	169	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□15.6 高2.7 つまみ径3.35 つまみ高0.9	良好	青灰	砂多	5/8	製品	—	右	重焼I類 ヘラ記号「二」	
	170	須恵器	坏B・蓋	B区	8-1号窯 2次床	□14.9 高3.05 つまみ径2.5 つまみ高0.9	良	淡青灰	通常	1/2	製品	—	右	重焼II a類 天井内面ヘラ記号「一」	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	方位	備考
54	171	須恵器	坏B・身	B区	8-I号窯 2次床	□14.5 高4.0 台9.2 台高0.6	堅緻酸化	暗青灰	通常	1/3	置台	—	右	
	172	須恵器	坏B・身	B区	8-I号窯 2次床	□15.0 高4.1 台9.5 台高0.6	良好	灰	通常	1/4	置台	—	右	
	173	須恵器	坏B・身	B区	8-I号窯 2次床	□15.0 高4.65 台9.6 台高0.7	堅緻	暗青灰	通常	1/4	置台	逆位	右	外面打ち欠き
	174	須恵器	坏B・身	B区	8-I号窯 2次床	□14.6 高4.5 台9.2 台高0.5	良好酸化	青灰	砂多	1/2	置台	逆位	右	ヘラ記号「二」
	175	須恵器	坏A	B区	8-I号窯 2次床	□14.8 高3.4 底9.0	良好酸化	茶褐灰	砂多	1/4	製品	—	右	
	176	須恵器	埴	B区	8-I号窯 2次床	□16.4 高4.6 底7.7	半生	灰	砂多	3/8	製品	—	右	底部ヘラ切り→工具ナデ
55	177	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□16.4 高4.0 つまみ径3.0 つまみ高1.2	生焼	白	砂多	1/2	製品	—	右	天井ナデ→並列2本成形台痕
	178	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□16.2 高3.12 つまみ径3.0 つまみ高0.85	良好酸化	褐灰	通常	3/8	置台	逆位	左	
	179	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□16.8 高2.9 つまみ径3.4 つまみ高1.0	生焼	白	砂多	3/8	製品	—	右	
	180	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□15.7 高2.6 つまみ径3.3 つまみ高0.9	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台?	—	右	
	181	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□16.6 高2.9 つまみ径2.8 つまみ高0.8	良好	青灰	砂多	3/4	製品	—	右	
	182	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□17.6 高3.0 つまみ径3.0 つまみ高1.0	生焼酸化	褐灰	通常	1/2	製品	—	左	右
	183	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□17.4 高2.5 つまみ径2.8 つまみ高0.8	堅緻酸化	暗黒灰	通常	3/8	置台	逆位	右	
	184	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□17.0 高2.8 つまみ径3.1 つまみ高0.9	生焼	白	砂多	1/2	製品	—	右	
	185	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□16.2 高2.6 つまみ径3.3 つまみ高1.1	酸化	暗茶褐色	通常	1/4	置台	置台?	右?	
	186	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 1次床	□16.0 高3.0 つまみ径3.4 つまみ高1.0	生焼	白	砂多	3/8	製品	—	右	
	187	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 1次床	□14.9 高4.7 台9.0 台高0.6	酸化	暗茶褐色	通常	1/6	製品	—	右	
	188	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 1次床	□15.4 高4.2 台9.4 台高0.55	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	—	内面中央ナデハラライ
	189	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 1次床	□14.9 高3.7 台9.0 台高0.5	生焼	白	通常	1/6	製品	—	右	台底部工具ナデ
	56	190	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 1次床	□14.8 高4.2 台9.0 台高0.5	生焼	白	砂多	3/8	製品	—	右
191		須恵器	坏A	B区	8-II号窯 1次床	□14.1 高3.5 底9.0	良	灰	砂多	1/4	製品	—	右	
192		須恵器	坏A	B区	8-II号窯 1次床	□14.5 高3.5 底8.6	良好酸化	複雑	砂多	1/2	置台?	—	—	
193		須恵器	坏A	B区	8-II号窯 1次床	□12.9 高3.0 底8.0	堅緻	青灰	通常	1/2	製品	—	—	
194		須恵器	坏A	B区	8-II号窯 1次床	□13.9 高3.0 底8.2	半生酸化	褐灰	通常	1/2	製品	—	右	ヘラ切り残存→成形台痕 内面小さく指ハラライ
195		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□17.1 高3.9 つまみ径3.1 つまみ高0.9	良好酸化	暗茶褐色	砂多	3/4	置台	正位	右	ヘラ記号「二」
196		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□17.0 高4.05 つまみ径3.5 つまみ高0.85	酸化	茶褐	通常	略完形	製品	—	右	内面中央短い指ハラライ
197		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.6 高3.3 つまみ径3.5 つまみ高0.7	酸化	暗茶褐色	砂多	1/2	製品?	—	右	ヘラ記号「二」
198		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.4 高3.9 つまみ径3.2 つまみ高1.1	生焼	白	砂多	1/2	製品	—	左	
199		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□17.4 高3.2 つまみ径3.3 つまみ高0.8	良好酸化	褐灰・茶褐	砂多	1/2	置台	逆位	右	
200		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.8 高3.4 つまみ径3.3 つまみ高0.7	良好	青灰	通常	3/4	製品	—	右	重焼1類
201		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.2 高3.15 つまみ径3.3 つまみ高0.8	酸化	茶褐灰	砂多	3/8	置台?	—	—	ヘラ記号「一」 置台正位使用2回?
202		須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□15.5 つまみ径3.6 つまみ高0.9 残高3.5	良	暗灰	砂多	3/8	置台	逆位	右	ヘラ記号「X」
57		203	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□17.4 高3.8 つまみ径3.4 つまみ高0.9	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右
	204	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□18.1 高3.7 つまみ径3.4 つまみ高0.9	酸化	表:茶褐 断:青灰	砂多	3/4	製品	—	左	
	205	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.4 高2.95 つまみ径2.5 つまみ高0.75	酸化	茶褐	通常	3/8	置台?	正位?	右	
	206	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□15.9 高2.7 つまみ径2.8 つまみ高0.8	堅緻	暗黒灰	通常	5/8	置台	正位	右	
	207	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□15.8 高2.8 つまみ径3.15 つまみ高0.95	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台	—	右	内面ヘラ記号「+」
	208	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.3 高2.85 つまみ径2.9 つまみ高0.95	堅緻	暗青灰	通常	3/8	製品	—	右	重焼1類?
	209	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□17.7 高3.15 つまみ径2.75 つまみ高1.1	堅緻酸化	暗灰	通常	7/8	置台	正位	右?	最終逆位使用 ヘラ記号「三」
	210	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□17.8 高3.1 つまみ径3.1 つまみ高1.3	酸化	暗茶褐	砂多	3/4	置台?	正位?	右	ヘラ記号「三」
	211	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□16.4 高2.8 つまみ径3.0 つまみ高0.85	堅緻	暗灰	砂多	3/4	置台	正位	右	
	212	須恵器	坏B・蓋	B区	8-II号窯 2次床	□15.4 高2.8 つまみ径3.3 つまみ高0.7	堅緻酸化	褐青灰	砂多	1/2	製品	—	右	内面中央ナデ (巾2本分程)
	213	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.5 高4.7 台9.8 台高0.65	良好酸化	青灰	通常	略完形	製品	—	右	外面酸化で暗茶褐色
	214	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.2 高4.3 台9.6 台高0.55	半生酸化	茶褐・淡灰	砂多	1/4	製品	—	右	台接着内側面工具ナデ
	215	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.4 高4.55 台9.1 台高0.55	堅緻酸化	暗灰	砂多	1/4	置台	逆位?	—	外面酸化で暗茶褐色
	58	216	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□16.6 高5.0 台10.7 台高0.8	生焼	白	通常	3/4	製品	—	右
217		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.0 高4.5 台9.2 台高0.65	酸化	茶灰	砂多	3/8	置台	逆位	右?	ヘラ記号「X」
218		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.2 高4.7 台9.0 台高0.5	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台	逆位	右	粘土入れずに台接着 やや酸化気味
219		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□14.9 高4.35 台9.3 台高0.5	半生酸化	淡青灰	砂多	1/2	製品	—	右	ヘラ記号「X」 外面酸化 (外:暗茶褐色、内:淡青灰)
220		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□14.6 高4.2 台9.1 台高0.6	良好酸化	褐	通常	略完形	製品	—	右	ヘラ記号「一」
221		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□14.7 高4.05 台9.0 台高0.5	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台	正位	—	体部外面打ち欠き 台底部工具ナデ
222		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.8 高4.1 台9.5 台高0.5	酸化	茶褐灰	通常	3/8	置台?	—	右	ヘラ記号「X」
223		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□14.5 高4.15 台8.8 台高0.4	良	暗灰褐	砂多	1/2	置台	—	右	
224		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□15.2 高4.05 台9.8 台高0.6	良	外:青灰 内:酸化	砂多	1/2	置台	—	右?	ヘラ切り→成形台痕
225		須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯 2次床	□14.6 高3.9 台9.0 台高0.5	半生酸化	青灰・褐	砂多	3/8	製品	—	右	粘土入れずに台接着

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考		
58	226	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯	2次床	□14.6 高3.95 台9.0 台高0.65	半生酸化	褐白灰	通常	1/2	置台?	—	—	
	227	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯	2次床	□15.2 高4.6 台9.4 台高0.55	堅緻	茶褐灰	通常	1/2	置台	—	右 台接着内面工具ナデ	
	228	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯	2次床	□14.6 高4.3 台9.2 台高0.65	半生酸化	白灰	通常	1/2	製品	—	右 粘土入れずに台接着	
	229	須恵器	坏B・身	B区	8-II号窯	2次床	□15.9 高4.1 台9.8 台高0.65	半生酸化	褐灰	通常	1/4	製品	—	右 表面は暗茶褐色	
	230	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.2 高4.0 底7.4	堅緻	暗茶褐灰	砂多	3/4	置台	—	右 やや酸化	
	231	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.4 高3.9 底8.0	堅緻	暗灰	砂多	3/4	置台	—	右	
	232	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.6 高4.3 底7.8	堅緻酸化	暗茶褐灰	砂多	3/8	製品?	—	右	
	233	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□14.2 高3.7 底8.0	半生酸化	白灰	通常	1/6	製品	—	右	
	234	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.8 高3.5 底7.8	良好酸化	暗灰・茶褐	砂多	3/8	製品?	—	右	
	235	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□14.0 高3.8 底8.3	良好	青灰	砂多	1/2	製品	—	右 ヘラ切り→ナデ→成形台痕	
	236	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□14.3 高4.2 底8.4	半生酸化	褐灰	砂多	1/2	製品	—	右	
	237	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□14.9 高3.9 底9.2	良好	青灰	砂多	3/8	置台	逆位	右	
	238	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.2 高3.7 底8.0	良好	灰	砂多	7/8	置台	逆位	右 ヘラ切り→工具ナデ→一部ケズリ	
	239	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.5 高3.9 底8.2	酸化	茶褐	砂多	1/2	製品?	—	右	
	240	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.0 高3.7 底7.7	堅緻	暗茶褐灰	砂多	1/2	置台	逆位	右	
	241	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□14.4 高3.8 底8.6	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	
	242	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□15.0 高3.8 底9.0	生焼	白灰	砂多	1/6	製品	—	—	
	243	須恵器	坏A	B区	8-II号窯	2次床	□13.7 高3.7 底8.2	堅緻	白青黒灰	砂多	3/8	置台	逆位	—	一部酸化
	244	須恵器	高坏	B区	8-II号窯	2次床	□16.7 高10.8 坏高3.7 基5.4 脚高7.1 底10.8	良好酸化	茶褐	砂多	7/8	製品	—	右	
	245	須恵器	高坏	B区	8-II号窯	2次床	□16.6 高11.2 坏高3.85 基6.4 脚高7.35 底10.5	良好酸化	茶褐	砂多	坏部1/2 脚完形	製品	—	右 ロクロ回転(坏部:右 脚部:—)	
	59	246	須恵器	小型壺	B区	8-II号窯	2次床	□10.2 高12.2 頸9.1 頸高1.6 胴15.4 底5.6	堅緻	灰	通常	略完形	製品	—	左 斜倒焼 ヘラ記号「×」 底部外面手持ちケズリ 1.059g
		247	須恵器	小型壺	B区	8-II号窯	2次床	□9.5 高10.45 頸8.4 頸高1.4 胴15.0 底6.5	堅緻	灰	通常	5/8	製品	—	—
		248	須恵器	小型壺	B区	8-II号窯	2次床	□9.5 高10.1 頸8.8 頸高1.6 胴15.0 底7.4	堅緻	灰	通常	3/4	製品	—	左 正位焼 底部外面手持ちケズリ 胴部ヘラ記号「二」 0.965g
		249	須恵器	壺・蓋	B区	8-II号窯	2次床	つまみ径3.9 つまみ高1.05 残高2.8	堅緻	暗灰	砂多	1/5	置台	—	—
250		須恵器	平瓶 小型	B区	8-II号窯	2次床	□6.3 高9.0 頸4.0 頸高4.0 胴12.6 底5.1	良好	灰	通常	3/5	製品	—	—	
251		須恵器	平瓶	B区	8-II号窯	2次床	□10.2 高18.45 頸5.4 底12.0 胴20.2	良	淡青灰	砂多	□4/5 底4/5	製品	—	右 円盤閉塞(閉塞径推3.5cm)→風船技法→ヘラで穴開け→口頸部接着 正位焼 1.941g	
252		須恵器	平瓶 小型	B区	8-II号窯	2次床	□6.5 高10.5 頸4.2 頸高4.8 胴12.8 底5.0	良好	灰	通常	1/2	製品	—	—	
253		須恵器	平瓶 小型	B区	8-II号窯	2次床	□6.0 高9.3 頸3.8 頸高4.1 胴12.4	良好	灰	砂多	1/2	製品	—	—	
254		須恵器	横瓶	B区	8-II号窯	2次床	残高17.3 胴22.2	堅緻	灰	砂多	1/8	製品	—	—	
255		須恵器	括れ鉢(鉢B)	B区	8-II号窯	2次床	□30.8 頸29.2 頸高2.1 胴30.0 残高12.1	良	暗灰	砂多	□1/6	置台?	—	—	
60	256	須恵器	大甕	B区	8-II号窯	2次床	□31.6 頸21.0 頸高10.8 残高14.9	堅緻	黒灰	砂多	□1/5	置台	正逆	—	5破片中4点置台使用 口頸部別作り外:タタキHb類 内:当て具Dc類
	257	須恵器	中甕	B区	8-II号窯	2次床	□17.2 頸15.6 頸高2.35 残高9.5	堅緻	青灰	砂多	□1/3	製品	—	—	
	258	須恵器 陶製品	カマド	B区	8-II号窯	2次床	厚1.5	良	暗褐灰	砂多	—	製品	—	—	内:当て具Dc類 カマド底部
	259	須恵器 陶製品	カマド	B区	8-II号窯	2次床	厚1.0 最厚1.8	半生酸化	褐灰・暗褐灰	砂多	—	製品	—	—	外:タタキHe類 内:当て具Dc類 カマド口基部
	260	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.0 高3.6 つまみ径3.6 つまみ高0.9	生焼	白	通常	1/4	製品	—	—	ヘラ記号「二」
	261	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□17.0 高3.6 つまみ径3.1 つまみ高0.7	堅緻酸化	青灰	通常	1/2	製品	—	右	重焼I類
	262	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.6 高3.2 つまみ径3.4 つまみ高0.7	半生	灰	通常	1/4	製品	—	右	
	263	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.0 高3.3 つまみ径3.6 つまみ高0.8	生焼	白	砂多	7/8	製品	—	右	
	264	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.8 高3.1 つまみ径3.1 つまみ高0.8	良	暗灰	砂多	1/2	製品	—	右	
	265	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□15.6 高3.4 つまみ径3.6 つまみ高0.8	良好	青灰	砂多	1/4	置台	正位	右	ヘラ記号「×」
266	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□15.8 高3.7 つまみ径3.2 つまみ高1.0	生焼	白	砂多	7/8	製品	—	右	ヘラ記号「×」	
267	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.4 高3.8 つまみ径2.9 つまみ高1.0	良好	青灰	通常	3/8	製品	—	右?		
268	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.2 高4.0 つまみ径3.2 つまみ高1.0	生焼	白	砂多	1/4	製品	—	—		
269	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.3 高3.5 つまみ径3.3 つまみ高1.0	生焼	白	通常	1/2	製品	—	—		
270	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□15.0 高3.1 つまみ径3.3 つまみ高0.9	堅緻	暗灰	砂多	3/8	製品	—	右	ヘラ記号「×」	
271	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□14.8 高3.3 つまみ径3.0 つまみ高0.8	堅緻	灰	砂多	1/2	製品	—	—	ヘラ記号「×」	
272	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.0 高3.3 つまみ径3.1 つまみ高0.8	生焼	白灰	通常	1/2	製品	—	右	重焼I類	
273	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.2 高2.9 つまみ径3.3 つまみ高0.7	良好	青灰	砂多	3/8	置台?	逆位?	右	ヘラ記号「二」	
274	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□16.2 高3.9 つまみ径3.4 つまみ高1.2	良	灰	砂多	1/2	製品	—	右	天井ヘラ切り→ナデ	
275	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□14.8 高3.4 つまみ径3.0 つまみ高0.9	良好	青灰	通常	略完形	製品	—	右	重焼I類	
276	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□15.0 高3.1 つまみ径3.2 つまみ高1.1	堅緻	紫青灰	砂多	1/6	製品	—	右		
277	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原		□15.3 高3.15 つまみ径3.3 つまみ高0.8	堅緻	青灰	砂多	1/2	製品	—	右	ヘラ記号「二」 重焼IIa類	

遺物観察表 (第60図~64図)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	リブ 跡	備考
60	278	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.0 高3.0 つまみ径2.9 つまみ高0.7	堅緻	青灰	通常	3/8	製品	—	右	重焼IIa類
	279	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□16.2 高2.9 つまみ径3.1 つまみ高0.8	堅緻	青灰	通常	1/2	製品	—	右	
	280	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.8 高2.7 つまみ径2.8 つまみ高0.9	堅緻	灰	砂多	3/8	置台	—	—	
	281	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□16.35 高2.7 つまみ径2.9 つまみ高0.9	良	青灰	通常	1/2	製品	—	右	天井ヘラ切り残存
	282	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.1 高2.45 つまみ径2.95 つまみ高0.8	堅緻	暗灰	砂多	1/3	製品	—	右	
	283	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.8 高2.6 つまみ径3.2 つまみ高0.7	堅緻	紫青灰	砂多	1/6	置台?	—	右	重焼I類?
	284	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.7 高2.5 つまみ径2.8 つまみ高0.7	良好	青灰	砂多	3/4	製品	—	右	
	285	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□16.0 高2.8 つまみ径2.9 つまみ高0.9	堅緻	青灰	通常	3/8	製品	—	右	
	286	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.4 高2.6 つまみ径3.0 つまみ高0.8	堅緻	青灰	砂多	3/8	製品	—	—	
	287	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.4 高2.5 つまみ径3.1 つまみ高0.8	堅緻	青灰	通常	3/8	製品	—	—	重焼I類
61	288	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.2 高2.0 つまみ径3.0 つまみ高0.7	堅緻	青灰	砂多	1/2	製品	—	右?	
	289	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□16.8 高2.4 つまみ径2.8 つまみ高1.1	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	—	
	290	須恵器	坏B・蓋	B区	灰原	□15.6 高2.4 つまみ径3.1 つまみ高1.3	良好	青灰	通常	7/8	製品	—	右	重焼I類
	291	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□14.0 高4.55 台径8.5 台高0.7	良好	灰	砂多	5/8	製品	—	右	ヘラ記号「X」
	292	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□14.2 高4.5 台径8.6 台高0.5	堅緻	灰	砂多	1/4	製品	—	右	
	293	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□13.8 高4.1 台径9.0 台高0.5	堅緻	青灰	砂多	1/2	製品	—	—	
	294	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□14.2 高4.0 台径8.8 台高0.5	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	左	
	295	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□14.1 高4.1 台径8.0 台高0.5	堅緻	青灰	通常	1/5	製品	—	—	
	296	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□13.6 高4.1 台径8.5 台高0.5	堅緻	紫青灰	砂多	1/4	製品	—	右	
	297	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□13.8 高4.4 台径9.0 台高0.5	堅緻	青灰	砂多	1/6	製品	—	右	
	298	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□13.8 高4.4 台径9.2 台高0.6	堅緻	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	台底部工具ナデ
	299	須恵器	坏B・身	B区	灰原	□14.6 高4.5 台径8.6 台高0.6	堅緻	青灰	通常	1/4	製品	—	右	
	300	須恵器	坏A	B区	灰原	□13.9 高3.9 底7.9	良	淡青灰	通常	1/2	製品?	—	右	
	301	須恵器	坏A	B区	灰原	□13.4 高3.8 底8.0	半生	青灰白	砂多	1/2	製品	—	右	
	302	須恵器	坏A	B区	灰原	□13.0 高3.8 底6.8	堅緻	灰	砂多	1/6	置台	—	右	
	303	須恵器	坏A	B区	灰原	□14.3 高3.6 底9.0	堅緻	灰	砂多	1/4	置台	—	右	
	304	須恵器	坏A	B区	灰原	□13.6 高3.7 底9.4	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右	底部外面指ナデ→工具ナデ
	305	須恵器	坏A	B区	灰原	□13.1 高4.0 底8.2	良好	灰	砂多	1/4	製品	—	右	
	306	須恵器	横瓶	B区	灰原	胴23.2	良好	灰	砂多	1/5?	製品	—	右	
	307	須恵器	横瓶	B区	灰原	残高21.5 胴20.4	良好	青灰	砂多	1/5	製品	—	—	外:タタキHb類→カキメ 内:当て具Dc類
308	須恵器	横瓶	B区	灰原	胴21.4 残高17.5	良	灰	砂多	1/5?	製品	—	—	円盤内面指ナデ	
309	須恵器	長頸瓶(瓶A)	B区	灰原	底9.9 残高2.7 台高2.3	堅緻	青灰	砂多	台3/4	製品	—	—		
310	須恵器	狭口壺 (壺B?)	B区	灰原	□9.9 残高14.6 頸10.9 頸高2.1 胴21.8	良好	青灰	砂多	1/3	製品	—	—	横割し焼 外:タタキHb類 内:当て 具Da類?→ナデ消し フタ伴わず	
62	311	須恵器	坏B・蓋	B区	7号窯埋土	□15.6 高3.5 つまみ径3.4 つまみ高1.0	良	灰	砂多	3/8	置台	正位	左	ヘラ記号「X」
	312	須恵器	坏B・身	B区	グリッド	残高3.0 台7.0 台高0.35	良好	灰	通常	底2/1	製品	—	—	正位焼 フタなし 底部ヘラ切り残存 台底部工具ナデ 小型
	313	須恵器	坏B・蓋	B区	7号窯埋土	□18.2 高2.9 つまみ径3.4 つまみ高0.8	堅緻	灰	砂多	1/2	製品	—	右	
	314	須恵器	平衡壺(壺D)	B区	SK3・4	□11.3 高18.0 頸10.8 頸高2.3 胴21.8	堅緻	青灰	通常	1/2	製品	—	—	正位焼 内:当て具Dc類? 3.467g
63	315	須恵器	坏B・身	C区	9号窯床	□14.2 高4.05 台8.8 台高0.65	堅緻	黒灰	通常	3/8	置台	—	—	
	316	須恵器	坏B・身	C区	9号窯床	□14.8 高3.6 台9.5 台高0.5	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台	正位?	—	内面中央3~4本指ナデ
	317	須恵器	坏B・身	C区	9号窯床	□14.9 高3.6 台9.6 台高0.45	堅緻	暗灰	通常	1/2	置台	逆位	—	底部外面置台痕(径6.7cm)
	318	須恵器	坏B・身	C区	9号窯床	□15.9 高4.1 台10.1 台高0.6	堅緻	暗黒灰	通常	1/4	置台	逆位	右	
	319	須恵器	坏B・身	C区	9号窯床	□14.8 高4.25 台10.0 台高0.6	堅緻	暗灰	砂多	1/8	置台	逆位	右	底部中央1本指ナデ 底部外面置台痕
	320	須恵器	坏A	C区	9号窯床	□14.2 高3.72	半生	青灰白	通常	7/8	製品	—	右	正位焼 底部外面ワラ痕
	321	須恵器	坏A	C区	9号窯床	□13.2 高3.32 底9.0	良好	青灰	通常	1/8	製品	—	右	
	322	須恵器	坏A	C区	9号窯床	□12.9 残高3.7 底8.0	良	青灰	砂多	1/8	製品	—	右	
	323	須恵器	坏A	C区	9号窯床	□12.6 残高3.7 底8.6	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右	正位焼
	324	須恵器	壺	C区	9号窯床	□13.9 高2.65 底7.6	良好	青灰	通常	1/8	製品	—	右	正位焼 壺型
	325	須恵器	小型壺	C区	9号窯床	□10.8	生焼	白	通常	□1/6	製品	—	—	
	326	須恵器	長頸瓶	C区	9号窯床	□10.1 頸4.6 頸高11.2	良好	黒灰	砂多	預完形	製品	—	—	正位焼
	327	須恵器	坏B・蓋	C区	9号窯埋土	□16.3 高3.6 つまみ径3.4 つまみ高0.75	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	—	正位焼 重焼I類
	64	328	須恵器	坏B・蓋	C区	9号窯埋土	□16.3 高2.9 つまみ径3.0 つまみ高0.7	良好	青灰	砂多	7/8	製品	—	—
329		須恵器	坏B・身	C区	9号窯埋土	□14.5 高4.15 台9.9 台高0.55	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右	正位焼 底部内面中央1本指ナデ1本 底部外面中央工具痕
330		須恵器	坏B・身	C区	9号窯埋土	□14.8 高4.68 台10.25 台高0.65	半生	灰	通常	1/2	製品	—	右	正位焼? 底部内面中央1本指ナデ1本 底部外面中央工具痕
331		須恵器	坏B・身	C区	9号窯埋土	□14.2 高4.25 台9.6 台高0.6	堅緻	灰	通常	1/4	製品	—	右	底部外面右回転ケズリ
332		須恵器	坏B・身	C区	9号窯埋土	□13.7 高4.45 台10.0 台高0.75	堅緻	暗青灰	砂多	1/8	製品	—	—	正位焼
333		須恵器	坏A	C区	9号窯埋土	□14.2 高3.72 底7.9	良好	青灰	通常	3/4	置台	逆位	右	正位焼 置台逆位2回使用
334		須恵器	坏A	C区	9号窯埋土	□13.3 高3.7	半生	青灰白	通常	1/2	製品	—	—	正位焼
335		須恵器	坏A	C区	9号窯埋土	□14.1 高3.3	良好	青灰	通常	3/8	製品	—	—	正位焼 底部外面中央工具痕

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	口部 径	備考	
64	336	須恵器	坏A	C区	9号窯埋土	□12.8 高3.7 底7.8	良好	青灰	通常	略完形	製品	—	右	正位焼 底部外面火ダスキ痕 底部外面中央工具痕	
	337	須恵器	坏A	C区	9号窯埋土	□13.95 高3.2 底10.4	良好	灰	砂多	7/8	製品	—	右	正位焼 底部外面置台痕 内面中央短い1本指ナデ	
	338	須恵器	坏A	C区	9号窯埋土	□12.8 高2.65	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	正位焼 内面中央1本指ナデ? 底部中央工具痕	
	339	須恵器	高坏	C区	9号窯埋土	□15.7 高10.1 基5.6 脚10.1 坏高3.5	良好	青灰	砂多	坏1/8 脚3/4	製品	—	—	内面中央指ナデ	
65	340	須恵器	肩衝壺(壺D)	C区	9号窯埋土	□12.4 高16.9 頸11.2 胴19.8 底11.8 頸高1.75	良好	青灰	通常	略完形	製品	—	右?	正位焼 底部置台痕 2.463g	
	341	須恵器	肩衝壺(壺D)	C区	9号窯埋土	□12.7 高16.1 頸11.65 胴21.0 底11.2 頸高1.65	良好	青灰	通常	4/5	製品	—	右	2.728g	
	342	須恵器	肩衝壺(壺D)	C区	9号窯埋土	□10.9 高16.3 頸10.1 胴19.65 底12.5 頸高1.7	良好	青灰	通常	2/3	製品	—	左	正位焼 2.514g	
	343	須恵器	小甕	C区	9号窯埋土	□14.9 残高18.05 頸13.2 胴21.8 頸高1.75	堅緻	青灰	通常	4/5	製品	—	—	逆位焼 歪み 口縁部後付け 外: タタキHb類 内: 当て具Da類 3.448g(推)	
	344	須恵器	平瓶	C区	9号窯埋土	残高9.25 胴20.8 底13.8	堅緻	灰	通常	1/2	製品	—	—	正位焼 底部置台痕 首欠け	
	345	須恵器	中甕	C区	9号窯埋土	□17.7 残高27.6 頸15.6 胴28.6 頸高2.4	生焼	黄褐	通常	2/3	製品	—	左	歪み 外: タタキHb類一肩カキメ 内: カキメ→当て具Da類 9.497g	
	346	須恵器	中甕	C区	9号窯埋土	□18.3 残高16.65 頸15.2 胴42.0 頸高3.75	堅緻	青灰	通常	□1/2 肩1/4	製品	—	—	正位焼 外: タタキHb類 内: 当て具Da類	
	347	須恵器	中甕	C区	9号窯埋土	□23.3 残高8.3 頸19.3 頸高4.25	半生	褐灰	砂多	口完形	製品	—	—	逆位焼 内: 当て具Da類	
	348	須恵器	中甕	C区	9号窯埋土	□20.4 残高8.2 頸18.0 頸高3.7	堅緻	紫青灰	通常	□1/6	製品	—	右	正位焼 外: タタキHb類 内: 当て具Da類	
	349	須恵器	中甕	C区	9号窯埋土	□23.8 残高8.5 頸21.2 頸高3.7	半生	褐灰	砂多	□3/4	製品	—	—	正位焼 内: 当て具Da類	
	350	須恵器	中甕	C区	9号窯埋土	□25.8 残高4.6 頸23.3 頸高3.65	良好	青灰	砂多	□1/3	製品	—	—	逆位焼 内面頸部燻タタキ 内: 当て具Da類	
66	351	須恵器	大甕	C区	9号窯埋土	□39.3 残高10.8 頸31.0 頸高9.9	堅緻	青灰	砂多	□1/3	製品	—	—	逆位焼 口頸部別作り 外: タタキHb類 内: 当て具Db類	
	352	須恵器	大甕	C区	9号窯埋土	□43.0 残高38.5 頸32.0 胴73.6 頸高10.9	良好	暗青灰	砂多	□1/5	製品	—	—	逆位焼 口頸部別作り 外: タタキHb類 内: 当て具Db類	
	353	須恵器	大甕	C区	9号窯埋土	□51.8 残高11.4 頸39.6 頸高11.1	良好	青灰	砂多	□1/5	製品	—	—	正位焼 口頸部別作り	
67	354	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□15.8 高3.6 つまみ径3.2 つまみ高0.85	良好	青灰	通常	3/8	製品	—	右	正位焼 内面中央3本指ナデ 重焼1類	
	355	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□16.2 残高3.05 つまみ径3.0 つまみ高0.7	堅緻	外: 黒 内: 灰	通常	1/4強	置台	正位	—	—	
	356	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□17.0 残高2.5	堅緻	灰	通常	1/4	置台	正位	—	つまみ欠け	
	357	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□15.5 高2.35 つまみ径2.9 つまみ高0.4	堅緻	外: 黒暗灰 内: 暗灰	通常	1/4	置台	—	—	—	重焼1類?
	358	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□17.3 高2.95 つまみ径3.1 つまみ高0.8	良好	外: 暗灰 内: 灰	砂多	3/4	置台	正逆	右	—	正位焼
	359	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□15.7 高1.45 つまみ径3.2 つまみ高0.55	良好	暗青灰	通常	1/3	置台	正逆	右?	—	正位焼? 重焼1類
	360	須恵器	坏B・蓋	C区	10号窯床	□16.0 高1.6 つまみ径2.9 つまみ高0.6	堅緻	暗灰	通常	1/2	置台	正位	—	—	—
	361	須恵器	坏B・身	C区	10号窯床	□15.2 高4.45 台8.9 台高0.55	堅緻	暗灰	通常	1/4	置台	逆位	—	—	正位焼
	362	須恵器	坏B・身	C区	10号窯床	□15.8 高3.95 台10.0 台高0.65	堅緻	暗灰	通常	1/2弱	置台	逆位	—	—	—
	363	須恵器	坏B・身	C区	10号窯床	□15.2 高4.45 台10.0 台高0.5	良好	青灰	砂多	1/4	置台	逆位	右	—	底部外面中央に櫛状の工具痕 底部内面指ナデ
	364	須恵器	坏B・身	C区	10号窯床	□15.0 高3.9 台10.3 台高0.45	堅緻	暗灰	通常	3/4	置台	逆位	左	—	底部外面右回転ヘラ切り→中央から工具 痕→工具ナデ
	365	須恵器	坏B・身	C区	9号・10号窯床	□14.0 高4.1 台9.5 台高0.7	堅緻	黒灰(9号) 暗灰(10号)	通常	3/4	置台	正位	右	—	9号窯出土: 底部中央工具痕 1本指ナ デ
	366	須恵器	坏A	C区	10号窯床	□13.5 高4.12 底8.1	堅緻	外: 暗灰 内: 青灰	通常	7/8	置台	逆位	右	—	内面中央2本指ナデ
	367	須恵器	坏A	C区	10号窯床	□14.2 高4.25 底7.7	堅緻	暗灰	通常	1/4	置台	正位	—	—	底部外面指ナデ
	368	須恵器	坏A	C区	10号窯床	□14.6 高4.25 底8.7	半生	灰	通常	7/8	製品	—	右	—	正位焼
	369	須恵器	坏A	C区	10号窯床	□14.7 高4.1 底7.5	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右	—	正位焼
	370	須恵器	坏A	C区	10号窯床	□15.5 高3.7 底8.6	良好	青灰	通常	1/4弱	製品	—	右	—	正位焼
	371	須恵器	小型壺・蓋	C区	10号窯床	残高2.55 つまみ径3.0 つまみ高0.55	堅緻	暗灰	通常	1/4弱	置台	—	—	—	—
	372	須恵器	壺・蓋	C区	10号窯床	□17.0 高5.1 つまみ径3.9 つまみ高0.8	堅緻	黒灰	砂多	1/4	置台	—	右	—	内面全体に小さな打ち欠き
373	須恵器	小型壺・蓋	C区	10号窯床	つまみ径2.95 つまみ高0.7	堅緻	暗灰	通常	1/3	置台?	—	—	—	つまみ中央よりズレ	
374	須恵器	小甕	C区	10号窯床	□13.9 残高5.3 頸12.7 頸高2.45	良好	暗灰	砂多	肩上1/3	置台	—	—	—	—	
375	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	10号窯床	□10.0 高22.1 頸5.8 頸高12.1 胴17.75 台9.3 台高1.3	堅緻	青灰	通常	略完形	製品	—	左	—	正位焼 底部外面ヘラ記号「一」 1.177g	
376	須恵器	中甕	C区	10号窯埋土	□22.2 残高14.8 頸19.3 頸高3.6	良好	青灰	砂多	1/10	製品	—	—	—	横倒焼 胴部成形→口頸部付けてナデ→ タタキ→カキメ 外: タタキHe類 内: 当て具Da類 口頸部後付け	
377	須恵器	大甕	C区	10号窯埋土	□51.9 残高18.0 頸38.0 頸高10.4	良好	灰・青灰	砂多	頸部上 1/5	製品	—	—	—	正位焼? 外: タタキHb類 内: 当て 具Da類 口頸部別作り	
378	須恵器	坏B・身	C区	10号窯埋土	□14.45 高4.8 台10.3 台高0.7	生焼	白	通常	略完形	製品	—	右	—	底部左回転ヘラ切り→中央に工具痕	
379	須恵器	坏B・身	C区	10号窯埋土	□14.5 高3.62 台10.3 台高0.6	良好	灰	通常	1/2	製品	—	右	—	正位焼 底部内面3本指ナデ	
380	須恵器	坏B・身	C区	10号窯埋土	□14.0 高3.65 台10.4 台高0.65	堅緻	外: 暗灰 内: 灰	通常	3/8	製品	—	右	—	正位焼 底部外面成形台痕	
381	須恵器	坏A	C区	10号窯埋土	□13.0 高2.75 底10.0	良好	青灰	通常	7/8	製品	—	右	—	正位焼 内面中央1本指ナデ 外面2本 指ナデ 器持ち上げ痕(内外各1本)	
382	須恵器	肩衝壺(壺D)	C区	10号窯埋土	□13.4 高18.3 頸12.0 胴21.0 底12.7 頸高2.0	堅緻	青灰	砂多	完形	製品	—	—	—	正位焼 胴部外面タタキ→クロ指ナデ 底部付近ケズリ 胴部3カ所黒斑 3.328g	
383	須恵器	肩衝壺(壺D)	C区	10号窯埋土	□16.9 高16.8 頸11.6 胴17.4 底12.0 頸高2.9	堅緻	暗青灰	砂多	略完形	製品	—	—	—	正位焼 胴部外面タタキ→クロ指ナデ 底部ヘラ切り 胴部火ダスキ痕 2.283g	

遺物観察表 (第68図～71図)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	量号	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考	
68	384	須恵器	小型壺	C区	10号窯埋土	□9.7 残高5.6 頸7.2 胴8.1 頸高2.1	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	正位焼 頸部内面工具痕	
	385	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	10号窯埋土	□10.1 残高11.7 頸4.85	堅緻	黒灰	砂多	類完形	製品	—	正位焼 左回転方向のシボリ	
	386	須恵器	大甕	C区	10号窯埋土	□54.4 残高60.0 頸41.6 胴136.4 頸高11.3	良好	青灰	砂多	1/3	製品	—	逆位焼 口頸部別作り 外:タタキHb類 内:当て具Da類	
69	387	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□16.0 高4.1 つまみ径2.9 つまみ高0.7	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 重焼I類	
	388	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□16.8 高4.0 つまみ径2.8 つまみ高0.9	良好	やや暗青灰	通常	1/2	置台	正位	右 内面中央2本指ナデ	
	389	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□15.9 高3.3 つまみ径2.7 つまみ高0.8	堅緻	青灰(白)	通常	7/8	製品	—	右 正位焼	
	390	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□15.8 高3.3 つまみ径2.7 つまみ高0.45	良好	白青灰	通常	3/4	製品	—	— 正位焼 内面中央4本指ナデ	
	391	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□15.2 高3.45 つまみ径3.2 つまみ高0.6	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 内面中央3本指ナデ	
	392	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□15.7 高3.3 つまみ径2.6 つまみ高0.9	良好	青灰	砂多	1/2強	製品	—	— 正位焼? 重焼IIa類	
	393	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□15.3 高2.4 つまみ径2.4 つまみ高0.55	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 重焼I類	
	394	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□17.8 高3.35 つまみ径3.2 つまみ高0.9	良好	灰	砂多	1/2	製品	—	— 正位焼 内面ランダムな工具痕 重焼I類	
	395	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□17.0 高2.62 つまみ径3.6 つまみ高0.85	堅緻	青灰	通常	3/4	製品	—	右 正位焼 内面中央ランダムな指ナデ 重焼I類	
	396	須恵器	坏B・蓋	C区	グリッド	□19.8 残高1.6	良好	青灰	砂多	1/10	製品	—	右 折り返しのないタイプ	
	397	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□15.5 高4.11 台11.15 台高0.6	堅緻	青灰	砂多	略完形	製品	—	右 正位焼? 甕み 内面底部1本指ナデ	
	398	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.3 高4.2 台9.6 台高0.65	良	青灰	砂多	3/4	製品	—	左 正位焼	
	399	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.2 高4.35 台9.5 台高0.68	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台	正逆	右 内面中央多方向指ナデ 台成形台痕 外面ヘラ記号「X」	
	400	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.5 高4.5 台9.9 台高0.55	良好	青灰	砂多	略完形	製品	—	右 正位焼 内面中央1本指ナデ	
	401	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.5 高4.65 台10.2 台高0.5	生焼	白灰	通常	略完形	製品	—	右	
	402	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.2 高4.4 台9.0 台高0.7	堅緻	青灰	通常	1/4	製品	—	右 正位焼?	
	403	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.3 高4.05 台9.7 台高0.55	堅緻	青灰	通常	略完形	製品	—	右 ヘラ記号「—」	
	404	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.9 高4.5 台10.3 台高0.9	堅緻	青灰白	通常	1/8	製品	—	右 外面立ち上がりスレ 口縁内面重焼痕 (別器種との重焼?)	
	405	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.4 高3.78 台9.6 台高0.4	良好	青灰	砂多	3/8	製品	—	右 正位焼? 台底部工具ナデ	
	406	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□15.3 高4.25 台10.0 台高0.45	良好	青灰	通常	1/8	製品	—	右 正位焼 内面全体指ナデ	
	407	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□15.2 高4.3 台9.0 台高0.65	良	暗灰	通常	1/2	置台	正逆	—	
	408	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□15.6 高4.35 台11.0 台高0.85	堅緻	暗灰	砂多	1/4	製品	—	右 正位焼 底部火ダスキ痕	
	409	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□15.7 高4.35 台9.8 台高0.68	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台	正逆?	—	全体打ち欠き (1単位径0.5~1.5cm)
	410	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□14.8 高4.25 台10.0 台高0.6	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	右 底部ヘラ切り 中央1本ナデつけ 底部成形台痕	
	411	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□16.2 高3.75 台11.4 台高0.75	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右 正位焼 ヘラ記号「X」	
	412	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□16.2 高4.35 台11.0 台高0.55	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 内面中央1本指ナデ 底部外面成形台痕	
	413	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□15.6 高6.5 台10.8 台高0.3	良好	青灰	砂多	1/8	製品	—	— 正位焼?	
	414	須恵器	坏B・身	C区	グリッド	□11.65 高4.2 台7.9 台高0.6	堅緻	青灰	通常	1/2	製品	—	— 正位焼 外面口縁端部のみ重焼痕、別器 種との組合せ? 小型	
	415	須恵器	坏A	C区	グリッド	□13.6 高4.1 底10.0	良	青灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 底部外面成形台痕	
	416	須恵器	坏A	C区	グリッド	□13.2 残高4.05	半生	青灰白	通常	1/5	製品	—	右 正位焼	
	417	須恵器	坏A	C区	グリッド	□12.6 高3.3 底7.9	堅緻	青灰	通常	1/4	製品	—	右 正位焼 底部外面成形台痕 ヘラ記号「—」	
	418	須恵器	鉢	C区	グリッド	□12.7 残高6.7	堅緻	青灰	砂多	3/8	製品	—	— 正位焼	
70	419	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	グリッド	□9.6 高27.3 頸6.1 頸高14.2 胴16.8 台11.0 台高2.2	堅緻	青灰	砂多	1/3	製品	—	右 正位焼 台端部打ち欠き 1.459φ	
	420	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	グリッド	残高11.1 胴17.5	良	灰	砂多	胴1/2	製品	—	— 正位焼 首欠け	
	421	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	グリッド	残高9.8 胴15.8 台9.0 台高0.95	堅緻	白青灰	通常	胴1/2弱	製品	—	右 正位焼 台底部成形台痕 首欠け	
	422	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	グリッド	□7.4 残高12.8 頸6.3 頸高12.05	良好	青灰	砂多	頸部 略完形	製品	—	— 正位焼 別付け用粘土付着 首のみ	
	423	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	グリッド	□11.0 高21.05 頸4.1 頸高11.5 胴17.4 台9.2 台高0.9	堅緻	青灰	通常	略完形	製品	—	右 正位焼 底部下半シツク痕 台底部成形台痕 1.038φ	
	424	須恵器	長頸瓶(瓶A)	C区	グリッド	残高9.25 胴16.5 台11.5 台高1.25	堅緻	青灰(白)	通常	胴3/4	製品	—	— 正位焼 台底部成形台痕 首欠け	
	425	須恵器	横瓶	C区	グリッド	□11.9 高25.2 頸8.3 頸高3.4 胴36.8	良	青灰	砂多	略完形	製品	—	— 横倒焼 8.571φ 外:タタキHb類 内:当て具Da類	
	426	須恵器	横瓶	C区	グリッド	□11.1 残高4.65 頸8.3 頸高3.2	堅緻	灰	砂多	口1/6	製品	—	— 正位焼? 外:タタキHb類 内:当て具Dc類	
	427	須恵器	横瓶	C区	グリッド	□11.5 残高7.0 頸9.6 頸高6.25	良	青灰	砂多	口1/4	製品	—	— 正位焼? 内:当て具Da類	
	428	須恵器	横瓶	C区	グリッド	□12.0 残高3.9 頸9.4 頸高2.9	堅緻	灰	砂多	口1/4	製品	—	— 正位焼 内:当て具Da類	
429	須恵器	横瓶	C区	グリッド	□11.8 高24.8 頸8.0 頸高4.0	良	青灰	通常	1/3	製品	—	— 横倒焼 外:タタキHa類 内:当て具Da類		
71	430	須恵器	小型鉢	C区	グリッド	□10.8 高6.5 頸8.7 頸高2.7 胴10.4 底8.2	堅緻	青灰	通常	略完形	製品	—	— 正位焼 底部外面成形台痕 ヘラ記号「—」	
	431	須恵器	小型鉢	C区	グリッド	□12.6 残高5.1 頸8.2 頸高2.2 胴9.5 底7.0	堅緻	青灰(白)	通常	1/3	製品	—	— 正位焼	
	432	須恵器	小型鉢	C区	グリッド	残高2.75 頸8.0 胴9.1	良好	青灰	通常	胴1/4	製品	—	— かなりの小型品	
	433	須恵器	小型鉢	C区	グリッド	□13.35 高6.0 頸10.8 頸高1.6 胴11.0 底7.6	堅緻	青灰(白)	砂多	1/3	製品	—	右 正位焼	
	434	須恵器	小型鉢	C区	グリッド	□11.7 残高3.7 頸9.7 頸高1.5	良好	青灰	通常	口1/4弱	製品	—	左 逆位焼?	
	435	須恵器	小型鉢	C区	グリッド	残高2.5 胴7.2	良	青灰	通常	胴1/2	製品	—	右 正位焼 かなりの小型品	
436	須恵器	壺・蓋	C区	グリッド	□12.4 高5.1 つまみ径3.3 つまみ高1.2	良好	青灰	砂多	4/5	製品	—	右 正位焼 内面中央ランダムな指ナデ		

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考
71	437	須恵器	壺A	C区	グリッド	口11.6 残高7.7 頸12.5 頸高2.25	堅緻	灰	砂多	口3/4	製品	-	頸部に蓋との重焼痕 頸部内面縦方向工 具ナデ 外:タタキHa類 蓋のつくタイ プ
	438	須恵器	壺A	C区	グリッド	口13.9 残高2.7 頸13.6 頸高2.1	良	暗灰	砂多	口1/12	製品	-	正位焼? 蓋のつくタイプ?
	439	須恵器	壺A	C区	グリッド	口11.4 残高25.05 頸12.0 頸高2.5 胴29.0	良好	青灰	砂多	1/3~ 1/4	製品	-	正位焼 口頸部接着→ロクロ指ナデ 頸部に蓋設置痕 外:タタキHb類 内:当て具Da類 蓋のつくタイプ
	440	須恵器	取手付鉢	C区	グリッド	口31.2 残高18.2 頸27.4 頸高2.75 胴30.2	生焼	白	通常	1/4	製品	-	外:タタキHb類 内:当て具Da類
	441	須恵器	朝鮮系把手	C区	グリッド	-	生焼	白灰	通常	把手 のみ	製品	-	切り込み入り
	442	須恵器	中甕	C区	グリッド	口18.2 残高5.35 頸14.8 頸高3.75	良好	灰	砂多	口1/12	製品	-	正位焼
	443	須恵器	中甕	C区	グリッド	口18.4 残高3.6 頸16.0 頸高2.95	堅緻	青灰	通常	口1/12	製品	-	正位焼
	444	須恵器	中甕	C区	グリッド	口22.5 残高8.3 頸19.1 頸高3.25	良好	青灰	砂多	口3/4	製品	-	横倒焼 頸部後付け 外:タタキHc類? 内:当て具Da類
445	須恵器	中甕?	C区	グリッド	口16.5 残高6.6 頸14.0 頸高3.65	良好	灰	砂多	口1/8	製品	-	左? 正位焼 内:当て具Da類	
446	須恵器	大甕	C区	グリッド	口36.8 残高10.0 頸27.8 頸高9.4	良	青灰	砂多	口1/3	製品	-	右 横倒焼 頸部別作り 外:タタキHb類 内:当て具Db類	
72	447	土師器	赤彩坏B・蓋	C区	9号窯埋土	口17.8 残高2.62	良好	赤:う 土:て	良	1/4	製品	-	
	448	土師器	赤彩坏B・蓋	C区	9号窯埋土	口18.9 高3.9 つまみ径3.55 つまみ高0.9	良	赤:う 土:へ	良	略完形	製品	-	右 外:ケズリ→ミガキ 内:ナデ→暗紋
	449	土師器	赤彩坏B・身	C区	9号窯埋土	残高4.06 台8.8 台高0.7	良	赤:い 土:ま	良	底1/2	製品	-	
	450	土師器	赤彩坏B・身	C区	9号窯埋土	口15.7 残高4.3	良	赤:く 土:へ	良	1/2 台欠	製品	-	
	451	土師器	赤彩坏B・身	C区	9号窯埋土	口18.0 高4.35 台13.6 台高0.7	良	赤:め 土:ひ	良	1/2	製品	-	内面指ナデ痕
	452	土師器	赤彩坏B・身	C区	9号窯埋土	口17.0 残高3.8	良	赤:か 土:へ	良	口1/8	製品	-	
	453	土師器	内黒高坏	C区	9号窯埋土	残高9.4 基6.0	良	黒:土 土:す	通常	脚部 完形	製品	-	坏部ミガキ
	454	土師器	粘土塊	C区	9号窯埋土	長7.4 巾3.85 厚2.4	良	は	砂多	完形	-	-	
	455	土師器	小甕	C区	9号窯埋土	口15.5 高14.2 頸14.15 頸高1.5 胴16.1	良	つ	砂多	略完形	製品	-	左 外面手持ちケズリ 1.7210
	456	土師器	小甕	C区	9号窯埋土	口14.4 高13.22 頸12.9 頸高1.3 胴14.4 底7.0	粗	て	砂多	3/4	製品	-	左 底部平底糸切り 1.4310
	457	土師器	小甕	C区	9号窯埋土	口14.6 残高4.8 頸13.4 頸高1.5	良	ひ	砂多	口1/8	製品	-	
458	土師器	長胴甕	C区	9号窯埋土	口23.4 高33.0 頸21.2 頸高2.6 胴22.2	良好	ふ	砂多	1/2	製品	-	外:タタキHb類 内:当て具Da類 7.9830	
459	土師器	鍋	C区	9号窯埋土	口32.4 残高6.4 頸27.4 頸高2.8	不良	外:へ 内:す	砂多	口1/8	製品	-		
460	土師器	鍋	C区	9号窯埋土	口39.7 残高7.35 頸36.1 頸高1.85	良	ひ	砂多	口1/6	製品	-	左	
461	土師器	甌	C区	9号窯埋土	残高6.75 底15.8	半生	外:て 内:き	砂多	底1/8	製品	-	内:当て具Da類	
73	462	土師器	赤彩坏B・蓋	C区	10号窯埋土	残高3.4 つまみ径3.5 つまみ高1.05	良	土:み	良	1/2弱	製品	-	右 口欠け
	463	土師器	赤彩塊	C区	10号窯埋土	口13.4 高2.65 底8.9	良	赤:あ 土:ま	良	略完形	製品	-	底部外面黒斑
	464	土師器	赤彩塊	C区	10号窯埋土	口16.9 高4.9 底8.8	良	赤:そ 土:へ	良	1/2	製品	-	
	465	土師器	赤彩塊	C区	10号窯埋土	口19.2 高4.7 底10.5	良	赤:あ 土:お	良	7/8	製品	-	
	466	土師器	内黒高坏	C区	10号窯埋土	残高7.0 基5.0	良	赤:い 土:と	通常	脚部 完形	製品	-	坏部ミガキ
	467	土師器	内黒高坏	C区	10号窯埋土	残高7.3 基3.2 底11.0	良	赤:う 土:と	通常	脚部1/2	製品	-	
	468	土師器	内黒高坏	C区	10号窯埋土	口19.2 残高4.1	良	赤:め 土:と	通常	坏部1/5	製品	-	
	469	土師器	外赤内黒高坏	C区	10号窯埋土	口18.8 高13.15 基5.0 坏高4.4 脚高8.7 底12.0	良	赤:む 黒:も 土:ひ	通常	4/5	製品	-	内黒外面口縁にはみ出し
	470	土師器	小甕	C区	10号窯埋土	口15.4 高13.15 頸14.55 頸高1.4 胴15.75	良	へ	砂多	略完形	製品	-	左 底部円形黒斑・火色 1.4770
	471	土師器	小甕	C区	10号窯埋土	口16.25 高14.3 頸15.25 頸高1.4 胴16.6	良	と	砂多	略完形	製品	-	右 1.9130
	472	土師器	長胴甕	C区	10号窯埋土	口22.8 高33.1 頸19.5 頸高2.2 胴23.8	良	と	砂多	1/3	製品	-	右 外:タタキHb類 内:当て具Da類 胴部中央楕円火色 10.3480(推)
473	土師器	長胴甕	C区	10号窯埋土	口21.5 高33.3 頸19.2 頸高2.3 胴22.4	良	は	砂多	略完形	製品	-	左 外:タタキHb類 内:当て具Da類 8.8660	
474	土師器	ロクロ甕	C区	10号窯埋土	口22.4 残高7.7 頸17.7 頸高1.4	良	表:え 土:と	砂多	口1/8	製品	-	右 外:タタキHb類	
475	土師器	ロクロ甕	C区	10号窯埋土	口23.0 残高6.3 頸19.0 頸高2.0	良	表:ち 内:て	砂多	口1/8	製品	-	左	
476	土師器	ロクロ甕	C区	10号窯埋土	口20.6 残高14.65 頸17.8 頸高1.9 胴21.0	良	て・は	砂多	口1/4	製品	-		
477	土師器	長胴甕	C区	10号窯埋土	口20.6 高34.15 頸18.5 頸高2.25 胴22.8	良	は	砂多	略完形	製品	-	左 内:当て具Da類 8.7730	
74	478	土師器	赤彩稜塊・蓋	C区	グリッド	口19.6 高3.3	良好	赤:い 土:と	良	3/4	製品	-	
	479	土師器	赤彩坏B・蓋	C区	グリッド	口16.5 残高2.35	良好	赤:い 土:け	良	口1/5	製品	-	
	480	土師器	赤彩坏B・身	C区	グリッド	口19.4 残高4.4	良	赤:い 土:す	良	1/4	製品	-	右
	481	土師器	赤彩坏B・身	C区	グリッド	口19.6 高4.85 台13.2 台高0.65	良好	赤:い 土:て	良	1/4	製品	-	
	482	土師器	赤彩塊	C区	グリッド	口12.1 高3.7 底5.8	良	赤:い 土:せ	通常	3/4	製品	-	
	483	土師器	内黒高坏	C区	グリッド	口17.7 残高4.4	良	赤:こ 土:の	砂多	口1/12	製品	-	右
	484	土師器	内黒高坏	C区	グリッド	残高7.65 基4.8	良	黒:な 土:の	通常	脚部4/5	製品	-	坏部内面ミガキ

遺物観察表 (第74図~79図)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考
74	485	土師器	内黒高坏	C区	グリッド	残高7.2 基4.4	良	黒:こ 土:と	砂多	脚部4/5	製品	-	坏部内面ミガキ
	486	土師器	内黒高坏	C区	グリッド	残高9.1 基6.0	良	黒:こ 土:す	砂多	脚部3/4	製品	-	坏部内面ミガキ
	487	土師器	内黒高坏	C区	グリッド	残高6.25 基6.4	良	土:の	砂多	脚部1/2	製品	-	坏部接合の工具痕
	488	土師器	砥石	C区	グリッド	長12.7 巾2.9 厚2.5	-	-	-	-	製品	-	石製 179.37g
	489	土師器	長胴甕	C区	グリッド	口16.7 残高9.6 頸15.0 頸高1.7 胴16.2	良	土:は	砂多	口1/4	製品	-	-
	490	土師器	小甕	C区	グリッド	口15.0 高12.5 頸14.25 頸高1.4 胴15.2	良	土:は	砂多	略完形	製品	-	底部外面手持ちケズリ
	491	土師器	長胴甕	C区	グリッド	口23.8 残高19.1 頸19.6 頸高2.4 胴23.0	不良	外:へ 内:す	砂多	口1/4	製品	-	左 ハケ
	492	土師器	長胴甕	C区	グリッド	口24.4 残高15.2 頸19.8 頸高2.6 胴21.0	良	土:ね	砂多	口1/4	製品	-	-
	493	土師器	鍋	C区	グリッド	口42.0 残高9.0 頸38.0 頸高1.4	不良	土:へ	砂多	口1/12	製品	-	-
	494	土師器	鍋	C区	グリッド	口37.4 残高6.7 頸33.8 頸高1.4	良	土:へ	砂多	口1/10	製品	-	-
495	土師器	鍋	C区	グリッド	口40.0 残高13.15 頸36.8 頸高1.4	良好	土:へ	砂多	口1/4	製品	-	外:カキメ→タキHb類→ケズリ	
75	496	隴尾	隴尾	A区	2号窯床	厚5.95 孔1.2	堅緻	青灰	砂多	破片	置台	-	1,187.6g
	497	隴尾	隴尾	A区	2号窯床	厚5.8 孔1.0	堅緻	青灰	砂多	破片	置台	-	1,007.6g
	498	隴尾	隴尾	A区	2号窯	厚5.7	良好	灰	砂多	破片	置台	-	1,030.9g
	499	隴尾	隴尾	A区	2号窯床	厚2.7 最厚4.0	良	青灰	砂多	破片	置台	-	638.2g
76	500	隴尾	隴尾	A区	2号窯床	厚6.65	堅緻	青灰	砂多	破片	置台	-	2,034.0g 壺破片付着
	501	隴尾	隴尾	B区	8-II号窯 2次床	厚6.05	堅緻	暗灰 一部酸化	砂多	破片	置台	-	1,060.2g
	502	隴尾	隴尾	B区	8-II号窯 2次床	厚4.6 残高11.8	堅緻	暗灰	砂多	破片	置台	-	924.9g
	503	隴尾	隴尾	B区	8-II号窯1次・2次床	厚4.8	良	灰 一部酸化	砂多	破片	置台	-	2230.9g

遺物観察表 (10世紀遺物)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考	
77	504	須恵器	埴B	A区	1-A号窯床	残高2.7 台7.1 台高1.1	半生	白	砂多	3/8	製品	-	-	
	505	須恵器	埴B	A区	1-A号窯床	残高3.5 台6.9 台高0.75	堅緻	暗灰・ 紫青灰	通常	台完形	製品?	-	右 台底部成形台痕 底部外面へラ記号「×」	
	506	須恵器	埴B	A区	1-A号窯床	残高2.9 台7.45 台高1.7	生焼	白灰	砂多	台完形	製品	-	-	
	507	須恵器	埴B	A区	1-A号窯床	残高2.0 台6.7 台高0.65	良好	青灰	砂多	台完形	製品	-	-	
	508	須恵器	埴B	A区	1-A号窯床	残高2.2 台7.75 台高0.85	生焼	白	通常	台完形	製品	-	台底部成形台痕	
	509	須恵器	壺F系	A区	1-A号窯床	口13.5 残高25.4 頸14.2 頸高7.7 胴27.4	良好	青灰	通常	1/5	製品	-	逆位焼	
	510	須恵器	壺F系	A区	1-A号窯床	口13.1 残高11.6 頸16.0 頸高6.9	良好	青灰	砂多	1/8	製品	-	横倒焼	
	511	須恵器	壺F系	A区	1-A号窯床	口11.0 残高4.1	良好	青灰	通常	頸部上 1/8	製品	-	逆位焼?	
	512	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口26.6 残高8.8 頸27.25 頸高1.45	良好	青灰	通常	口1/4	製品	-	右	
	513	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口26.2 高14.0 頸27.0 頸高1.1 底11.8	半生	白灰	砂多	略完形	製品	-	-	
	514	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口25.5 高13.8 頸26.2 頸高2.0 底13.8	良	青灰	砂多	1/2	製品	-	右 正位焼 胴部黒斑	
	515	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口27.8 残高6.8 頸28.6 頸高1.4	生焼	黄白	通常	口1/6	製品	-	-	
	516	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口26.1 残高8.6 頸27.1 頸高1.15	良好	青灰	通常	口1/6	製品	-	右 逆位焼	
	517	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口25.8 残高9.4	良好	青灰	砂多	口1/6	製品	-	正位焼	
	518	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口24.8 残高8.2	良好	暗青灰	砂多	口1/8	製品	-	右 正位焼	
	519	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯床	口25.8 残高7.75	半生	白灰	砂多	口1/4	製品	-	右	
	78	520	須恵器	コップ型	A区	1-A号窯床	残高3.1 底6.0	良好	青灰	通常	底完形	置台?	-	左 底部糸切り
		521	須恵質 陶製品	風字硯	A区	1-A号窯床	厚1.4 最厚2.95 脚高1.5	堅緻	青灰	通常	1/3?	製品	-	正位焼
	79	522	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.8 高3.8 底6.15	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台	逆位	右 正位焼
523		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.0 高3.45 底5.0	堅緻	暗青灰	砂多	5/8	製品	-	正位焼 壺み 底部外面へラ記号「-」	
524		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.3 高4.0 底5.3	良好	青灰	砂多	1/4	製品	-	左 正位焼	
525		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.7 高3.6 底5.4	堅緻	暗青灰	砂多	5/8	置台	-	正位焼 壺み 底部外面へラ記号「-」	
526		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.3 高3.45 底5.4	良	淡赤灰	砂多	3/8	製品	-	右 正位焼	
527		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.8 高3.65 底5.2	良好	暗青灰	通常	3/4	製品	-	正位焼 底部外面へラ記号「-」	
528		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.7 高3.5 底5.2	良好	暗灰	通常	1/3	置台	逆位	正位焼 底部成形台痕	
529		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口14.0 高3.6 底5.0	堅緻	暗灰	砂多	1/8	置台?	-	正位焼	
530		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.3 高3.75 底5.9	良好	青灰	砂多	1/6	製品	-	右 正位焼	
531		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.4 高3.7 底5.0	堅緻	暗青灰	通常	1/2	製品	-	右 底部外面へラ記号「-」	
532		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.6 高3.5 底5.8	良	暗灰	砂多	1/2	製品	-	右 正位焼	
533		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.0 高4.1 底6.75	良	暗灰	砂多	1/2	製品	-	右 正位焼	
534		須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.2 高3.9 底5.2	堅緻	暗灰	砂多	5/8	置台?	-	正位焼 壺み	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考	
79	535	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑③	口13.3 高3.85 底5.8	堅緻	暗灰	砂多	1/8	製品	—	—	底部外面へラ記号 (判読不可)
	536	須恵器	埴A	A区	1-A号窯燃焼部	口12.2 高3.9 底5.3	堅緻	暗灰	砂多	3/4	製品	—	右	正位焼 底部外面へラ記号「—」
	537	須恵器	埴A	A区	1-A号窯燃焼部	口12.8 高3.7 底5.3	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	—	正位焼 底部外面へラ記号「—」
	538	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.2 高3.95 底6.2	良好	青灰	通常	略完形	製品	—	右	
	539	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.2 高3.8 底6.1	良	淡青灰	通常	1/2	製品	—	右	
	540	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.9 高3.85 底5.9	良	青灰	砂多	3/4	製品	—	右	
	541	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前庭部灰層	口12.2 高3.6 底4.3	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右	正位焼
	542	須恵器	埴 口縁部	A区	1-A号窯前庭部灰層	口12.7 残高4.4	生焼	白	通常	口1/6	製品	—	左	口縁部断面タイプ
	543	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.9 高4.2 台6.3 台高0.6	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	右	正位焼 台底部工具ナデ
	544	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②③	口12.9 高4.5 台6.1 台高0.6	堅緻	青灰	砂多	1/2	置台	逆位	—	正位焼 底部外面へラ記号「—」
	545	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.6 高4.5 台5.1 台高0.7	良	青灰	通常	1/2	製品	—	右	正位焼
	546	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.2 高4.45 台6.0 台高0.6	半生	白	砂多	1/2	製品	—	—	正位焼 台底部成形台痕
	547	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	残高2.4 台6.1 台高0.55	堅緻	暗灰	通常	台完形	製品	—	—	正位焼
	548	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	残高2.35 台6.1 台高0.65	良好	青灰	通常	台完形	製品	—	—	正位焼?
	549	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	残高2.4 台5.2 台高0.55	半生	白灰	砂多	3/8	製品	—	—	
	550	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②	残高3.1 台6.4 台高0.7	堅緻	暗灰	砂多	3/8	製品	—	右	中央へラ記号「—」
	551	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②③	口16.0 高5.65 台8.2 台高1.15	良好	青灰	砂多	3/8	置台	逆位	—	正位焼
	552	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前面土坑②③	残高1.9 台7.0 台高1.3	生焼	白	通常	台完形	製品	—	—	底部外面中央櫛状工具痕
	553	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.7 高4.1 台5.6 台高0.4	堅緻	暗黒褐	砂多	3/8	製品?	—	—	
	554	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.6 高4.25 台6.5 台高0.6	良	青灰	砂多	1/2	製品	—	右	台全体工具ナデ
	555	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.7 高4.6 台6.0 台高0.55	良好	青灰	砂多	1/2	製品	—	右	内面へラ記号「—」
	556	須恵器	埴B	A区	A区上層灰原	口15.2 高5.6 台7.3 台高0.8	堅緻	褐灰	砂多	3/4	製品	—	—	正位焼
	557	須恵器	埴B	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.9 高5.0 台6.7 台高0.6	堅緻	暗灰	砂多	1/4	放置品?	—	—	正位焼?
	558	須恵器	埴A	A区	1-A号窯燃焼部	口13.2 高2.9 底6.4	良好	青灰	通常	1/8	製品	—	—	正位焼
	559	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑③	口13.3 高3.05 底6.5	半生	外: 灰赤褐 内: 灰赤褐	砂多	1/8	製品	—	—	底部へラ切り
	560	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑③	口13.2 高3.2 底7.1	生焼	白灰	通常	1/4	製品	—	—	底部へラ切り
	561	須恵器	埴A	A区	1-A号窯前面土坑③	口13.3 高3.3 底7.0	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右	正位焼 底部へラ切り
	562	須恵器	皿A	A区	1-A号窯前庭部灰層	口11.0 高2.6 底4.8	良	褐	通常	1/3	製品	—	—	正位焼 内面底部円形カキメ工具痕
	563	須恵器	皿B	A区	1-A号窯前面土坑②	口12.3 高2.8 台6.4 台高0.75	堅緻	青灰	通常	3/4	製品	—	—	正位焼 内面中央へラ記号「—」
	564	須恵器	皿B	A区	1-A号窯前面土坑③	口12.7 高3.1 台5.6 台高0.8	堅緻	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	正位焼
	565	須恵器	皿B	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.4 高2.7 台5.6 台高0.6	良好	青灰	砂多	3/4	製品	—	右	正位焼
	566	須恵器	皿B	A区	1-A号窯前庭部灰層	口12.5 高3.5 台5.8 台高0.35	堅緻	暗灰	砂多	3/8	置台	逆位	右?	正位焼 歪み
	567	須恵器	皿B	A区	1-A号窯前面土坑②	口13.7 高3.4 台6.0 台高0.65	堅緻	暗灰	砂多	3/8	置台	逆位?	右	正位焼
	568	須恵器	コップ型	A区	1-A号窯前庭部灰層	口9.2 残高3.6	良好	青灰	通常	1/12	製品	—	—	逆位焼
	569	須恵器	コップ型	A区	1-A号窯前庭部灰層	口9.0 高7.5 底6.4	堅緻	暗灰	砂多	1/8	製品	—	—	正位焼? 底部糸切り
570	土師質品	土師質円盤	A区	1-A号窯前面土坑②	長6.5 巾6.4 最厚1.4 孔径1.1	—	—	—	完形?	製品	—	—	紡錘車?	
571	須恵器	陶錘	A区	1-A号窯前面土坑②	長4.5 巾2.8 孔径0.9	—	—	—	—	製品	—	—	30.2g	
572	須恵器	小型壺	A区	1-A号窯前面土坑②	口10.4 高12.7 頸10.2 頸高1.15 胴13.8 底6.0	良好	青灰	砂多	略完形	製品	—	—	正位焼 底部糸切り 平底小壺系 1.1028	
573	須恵器	壺F系	A区	1-A号窯前庭部灰層	口12.2 残高12.7 頸12.2 頸高5.35 胴22.7	良好	青灰	砂多	口1/2	製品	—	—		
574	須恵器	壺F系	A区	1-A号窯前面土坑②	口8.3 残高4.0 頸8.1 頸高3.8	良好	青灰	通常	頸部上完形	製品	—	—	正位焼	
575	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口13.4 残高6.9 頸13.6 頸高2.45	堅緻	暗灰	砂多	口1/8	製品	—	—	逆位焼	
576	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口14.3 残高3.7 頸14.6 頸高2.05	良好	青灰	砂多	口1/8	製品	—	—	正位焼	
577	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口18.0 残高8.2 頸18.8 頸高2.1 胴20.5	堅緻	灰	砂多	口1/4	製品	—	右?	正位焼?	
578	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口20.8 残高4.0 頸20.9 頸高2.2	堅緻	青灰	砂多	口1/4	製品	—	—	正位焼	
579	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部	口26.1 残高6.0 頸26.2 頸高1.25	良	青灰	砂多	口1/6	製品	—	左	逆位焼	
580	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口28.0 残高4.4 頸28.6 頸高1.7	良好	青灰	通常	口1/8	製品	—	—		
581	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口29.6 残高5.6 頸28.5 頸高1.55 胴29.0	良	灰	通常	口1/8	製品	—	—		
582	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯前庭部灰層	口26.0 残高9.2	良好	青灰	砂多	口1/8	製品	—	—	正位焼?	
583	須恵器	獸型深鉢	A区	1-A号窯前庭部灰層	口23.2 残高9.3	良	青灰	砂多	口1/4	製品	—	右	外面一部黒斑	
584	須恵器	中壺	A区	1-A号窯前庭部灰層	口18.6 残高9.0 頸13.8 頸高4.7	—	—	—	—	製品	—	—	逆位焼 口縁部砂付着 外: タタキHe類 内: 当て具SD類?	
585	須恵器	鉢	A区	1-A号窯前庭部灰層	口48.0 残高2.5	良好	青灰	砂多	口破片	製品	—	右	正位焼	
586	須恵器	鉢	A区	1-A号窯前庭部灰層	口44.2 残高7.5	良	灰	砂多	口1/36	製品	—	—	正位焼?	
587	須恵器	長胴壺	A区	1-A号窯前面土坑②	口20.4 残高3.75	良	褐灰(酸化)	通常	口破片	製品	—	—		
588	須恵器	平底壺	A区	1-A号窯前庭部灰層	口33.4 残高8.4 頸29.8 頸高1.85 胴31.8	良	青灰	通常	口1/8	製品	—	—	逆位焼 外: タタキHe類 内: 当て具Da類?→指ナデ	
589	須恵器	平底壺	A区	1-A号窯前庭部灰層	口31.8 残高8.8 頸29.1 頸高2.25	生焼	白灰	通常	口1/6	製品	—	左?	外: タタキHe類 内: 指ナデ 口縁部後作り?	
590	須恵器	平底壺	A区	1-A号窯前庭部灰層	口36.8 残高12.2 頸35.6 頸高2.4	生焼	白灰	砂多	口1/5	製品	—	左?	外: タタキHe類 内: 当て具スリケン	
591	須恵器	埴A	A区	1-A号窯埋土	口13.0 高3.5 底7.8	不良	暗灰	砂多	1/8	製品	—	—	正位焼? 底部へラ切り 内面酸化	
592	須恵器	埴A	A区	1-A号窯埋土	口13.0 高3.0 底7.3	堅緻	暗灰	砂多	1/8	置台?	—	—	底部へラ切り	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考
82	593	須恵器	埴B	A区	1-A号窯埋土	残高1.8 台5.9 台高0.9	酸化?	青灰・褐灰	砂多	台完形	製品	—	正位焼
	594	須恵器	埴B	A区	1-A号窯埋土	残高2.0 台6.6 台高0.9	半生	白灰	砂多	台完形	製品	—	台底部内面工具ナデ
	595	須恵器	埴B	A区	1-A号窯埋土	残高2.4 台6.2 台高0.85	半生	白灰	砂多	台完形	製品	—	台底部成形台痕 台底部右回り指ナデ 底部外面へラ記号「井」
	596	須恵器	コップ型	A区	1-A号窯埋土	口9.55 高10.2 底6.3	半生	白灰	通常	1/4	製品	—	正位焼? 底部糸切り
	597	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯埋土	口22.2 残高7.3	堅緻	青灰	砂多	口1/10	製品	—	正位焼
	598	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-A号窯埋土	口24.3 残高8.3 頸24.1 頸高1.35	良好	青灰	砂多	口1/4	置台?	—	左
600	須恵器	平底甕	A区	1-A号窯埋土	口29.4 残高7.2 頸26.6 頸高2.1	良好	青灰	砂多	口1/4	製品	—	逆位焼 外:タタキHe類 内:当て具ナデケシ	
83	601	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台6.2 台高0.8	良好	暗黒灰	砂多	台完形	置台?	—	正位焼
	602	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台7.2 台高0.8	半生	青灰・白灰	通常	1/2	製品	—	内面中央指痕 外面中央櫛状工具痕 台底部成形台痕
	603	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台7.2 台高0.8	堅緻	暗灰	砂多	1/2	製品	—	右 正位焼 台底部工具ナデ 内面へラ記号「×」
	604	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台6.1 台高0.75	堅緻	暗青灰	砂多	台完形	置台	—	正位焼 台底部成形台痕 へラ記号「×」 胴端打ち欠き
	605	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台7.4 台高0.7	良好	青灰 酸化	砂多	台完形	製品	—	台に櫛状工具痕 糸切り全体ナデ
	606	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台6.2 台高0.65	良	褐灰	通常	台完形	製品	—	左 台底部にスレ
	607	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台6.9 台高0.75	堅緻	暗黒灰	砂多	台完形	製品	—	左 正位焼 台底部スレ
	608	須恵器	埴B	A区	1-B号窯床	台6.5 台高0.9	堅緻	淡紫青灰	砂多	台完形	製品	—	左 歪み 中央へラ記号「×」
	609	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯床	口28.4 残高10.4 頸27.6 頸高1.4 胴27.8	堅緻	暗灰	砂多	口1/4	製品	—	左 逆位焼
	610	須恵器	埴A	A区	1-B号窯前庭部土坑	口12.35 高3.8 底5.35	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 内面中央指ナデ
84	611	須恵器	埴 口縁部	A区	1-B号窯前庭部土坑	口13.2 残高2.8	良好	青灰	砂多	1/16	製品	—	正位焼
	612	須恵器	埴 口縁部	A区	1-B号窯前庭部土坑	口15.85 残高3.5	生焼	白灰	砂多	1/20	製品	—	—
	613	須恵器	埴B	A区	1-B号窯前庭部土坑	台6.1 台高0.7	良	暗黒灰	砂多	台完形	置台	—	—
	614	須恵器	埴B	A区	1-B号窯前庭部土坑	台7.8 台高0.9	良好	暗灰	砂多	台完形	置台?	—	台底部工具ナデ
	615	須恵器	埴B	A区	1-B号窯前庭部土坑	台7.9 台高1.85	生焼	白灰	砂多	台完形	製品	—	左 台底部工具ナデ
	616	須恵器	埴B	A区	1-B号窯前庭部土坑	台8.2 台高0.7	半生	白灰	通常	台完形	製品	—	左?
	617	須恵器	皿A	A区	1-B号窯前庭部土坑	残高1.35 底5.2	堅緻	青灰	砂多	底2/3	製品	—	正位焼
	618	須恵器	皿A	A区	1-B号窯前庭部土坑	残高0.8 底4.8	良好	青灰	通常	底完形	製品	—	—
	619	須恵器	特殊蓋	A区	1-B号窯前庭部土坑	口11.7 高2.7 つまみ径2.3 つまみ高1.2	半生	褐灰	通常	1/3	製品	—	正位焼
	620	須恵器	特殊蓋	A区	1-B号窯前庭部土坑	口12.8 高2.85 つまみ径2.4 つまみ高1.3	堅緻	青灰	砂多	1/3	製品	—	—
	621	須恵器	特殊蓋	A区	1-B号窯前庭部土坑	口12.1 高2.4 つまみ径2.8 つまみ高1.1	生焼	白灰	通常	3/4	製品	—	—
	622	須恵器	特殊蓋	A区	1-B号窯前庭部土坑	口13.0 高2.5 つまみ径2.6 つまみ高1.15	半生	白灰	砂多	1/2	製品	—	—
	623	須恵器	コップ型	A区	1-B号窯前庭部土坑	口10.3 残高9.15	良好	青灰	通常	口1/4	製品	—	右 逆位焼?
	624	須恵器	壺F系	A区	1-B号窯前庭部土坑	口8.4 残高10.3 頸8.7 頸高4.6 胴16.0	堅緻	青灰	砂多	口9/10	製品	—	右 歪み 逆位焼
625	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口17.2 残高3.25 頸17.5 頸高0.85 胴20.5	良好	青灰	砂多	口1/8	製品	—	右 逆位焼	
626	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口28.6 残高9.8 頸28.0 頸高2.0 胴29.1	良好	青灰	砂多	口1/2	製品	—	右 逆位焼	
627	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口26.6 高12.35 頸27.6 頸高1.35 胴28.4 底14.0	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	逆位焼 胴部重焼痕	
628	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口25.8 残高4.3 頸24.7 頸高1.25 胴25.0	良	灰	砂多	口1/8	製品	—	逆位焼	
629	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口26.6 残高7.5 頸25.8 頸高1.25 胴26.6	生焼	白	砂多	口1/12	製品	—	右	
630	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口27.6 残高6.0 頸27.0 頸高1.35 胴27.8	良好	青灰	砂多	口1/4	製品	—	逆位焼	
631	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯前庭部土坑	口26.5 残高8.65 頸26.6 頸高1.75 胴27.3	良好	青灰	砂多	口1/8	製品	—	右 正位焼?	
85	632	須恵器	平底甕	A区	1-B号窯前庭部土坑	口36.2 残高20.15 頸32.6 頸高3.3 胴36.4	良好	青灰	砂多	口1/3	製品	—	逆位焼? 外:タタキHe類 内:当て具Da類→スリ消し
	633	須恵器	平底甕	A区	1-B号窯前庭部土坑	口40.2 残高11.6 頸38.2 頸高2.0	生焼	白	砂多	口1/3	製品	—	左 外:タタキHe類 内:当て具スリ消し
	634	須恵器	瓶型深鉢	A区	1-B号窯前庭部土坑	口34.4 残高20.8	良	青灰	砂多	口1/4	製品	—	右 逆位焼 外:タタキHe類 内:SDタタキ
	635	須恵器	瓶型深鉢	A区	1-B号窯前庭部土坑	口36.2 高27.2 頸32.2 頸高3.6 胴31.8 底18.8	良好	青灰	砂多	1/3	製品	—	正位焼 外:タタキHe類→指・工具ナデ 内:当て具Da類→ナデ消し 底部外面焼台痕(約10cm)、火ダスキ痕 底部工具おさえ 15.061g
86	636	須恵器	埴B	A区	1-B号窯埋土	台6.25 台高1.2	良好	黒灰	砂多	台完形	置台	—	台底部工具ナデ
	637	須恵器	埴B	A区	1-B号窯埋土	台7.2 台高1.2	半生	灰	通常	台完形	製品	—	右 台底部工具ナデ
	638	須恵器	埴B	A区	1-B号窯埋土	台6.1 台高0.95	良好	青灰	砂多	台完形	製品	—	右 内面中央1本指おさえ? 台底部成形台痕
	639	須恵器	埴B	A区	1-B号窯埋土	台7.2 台高0.8	生焼	白	通常	台完形	製品	—	底部外面へラ記号「×」
	640	須恵器	不明品	A区	1-B号窯埋土	口11.5 残高3.0	生焼	白	通常	口1/3	製品	—	—
	641	須恵器	陶磚	A区	1-B号窯埋土	長5.18 巾3.65 孔1.4	良好	青灰	通常	略完形	製品	—	60.2g
	642	須恵器	壺F系	A区	1-B号窯埋土	口10.8 残高8.7 頸10.8 頸高5.2	生焼	白灰	砂多	口1/4	製品	—	左
	643	須恵器	壺F系	A区	1-B号窯埋土	口10.4 残高10.1 頸11.0 頸高5.9	堅緻	暗青灰	砂多	口1/3	置製品	—	右 正位焼?
	644	須恵器	壺F系	A区	1-B号窯埋土	口12.4 残高16.4 頸13.6 頸高5.6 胴24.3	堅緻	青灰	砂多	1/5	製品	—	右 歪み 斜め倒焼?
	645	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯埋土	口29.4 残高11.3 頸28.8 頸高1.15 胴30.0	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	左 逆位焼
646	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯埋土	口23.0 残高8.8 頸22.0 頸高1.9 胴22.8	生焼	白	砂多	口1/4	製品	—	—	
647	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯埋土	口25.0 残高11.0 頸24.8 頸高1.8 胴25.7	半生	白灰	通常	口1/8	製品	—	—	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考	
86	648	須恵器	平底甕	A区	1-B号窯埋土	□38.6 残高11.0 頸36.4 頸高2.4	堅緻	青灰	砂多	□1/3	製品	—	—	甕み 外:タタキHe類 内:当て具すり消し
	649	須恵器	平底甕	A区	1-B号窯埋土	□34.8 残高22.5 頸32.4 頸高3.0 胴37.0	良好	青灰	砂多	□1/6	製品	—	—	横倒焼 外:タタキHe類 内:当て具 Da類→ナゲ消し 胴部内面下半工具ナ ゲ消し
	650	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯埋土	□25.2 残高6.0 頸25.6 頸高1.7 胴26.4	堅緻	青灰	砂多	□1/8	製品	—	右	逆位焼 甕み
	651	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	1-B号窯埋土	□25.2 残高5.8 頸25.0 頸高1.0 胴25.2	生焼	白灰	砂多	□1/3	製品	—	左	—
	652	須恵器	飯型深鉢	A区	1-B号窯埋土	□35.6 残高15.5	良好	青灰	砂多	□1/4	製品	—	左?	甕み
87	653	須恵器	埴A	A区	SK1	□13.3 高6.0 底3.85	良	やや暗灰	通常	1/2	製品	—	右	内面中央2本ナゲ
	654	須恵器	埴A	A区	SK1	□13.1 高3.65 底5.4	良	灰	通常	1/2	製品	—	右	底部周辺工具痕
	655	須恵器	坏A(10C)	A区	SK1	□12.2 高3.2 底7.6	良	暗青灰	砂多	略完形	製品	—	右	底部ヘラ切り
	656	須恵器	坏A(10C)	A区	SK1	□14.0 高3.5 底8.4	良	褐焼	砂多	□1/6	製品	—	—	—
	657	須恵器	埴A	A区	SK2	□12.8 高3.9 底5.4	良	青灰	通常	1/4	製品	—	右	—
	658	須恵器	埴A	A区	SK3	□11.3 高3.4 底5.0	堅緻	暗青灰	通常	3/4	製品	—	右	—
	659	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	SK3	□17.3 頸16.3 頸高2.5 残高4.8	堅緻	暗灰	砂多	□1/2	製品	—	—	甕み
	660	須恵器	平鉢(鉢C)	A区	SK3	□27.9 高13.4 台12.0 台高1.1	良	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	正位で重焼き
	661	須恵器	大甕	A区	SK3	□39.0 頸31.6 頸高4.8 残高8.5	生焼	白灰	砂多	□1/3	製品	—	左?	外:タタキHa類 内:当て具SD類
	662	須恵器	埴A	A区	SK5	□12.8 高4.2 底5.6	良	暗灰	砂多	1/4	製品	—	右	—
	663	須恵器	埴A	A区	SK5	□12.6 高3.9 底6.0	生焼	白灰	砂多	1/2	製品	—	右	—
	664	須恵器	埴A	A区	SK5	□13.3 高3.9 底6.3	半生	灰	通常	7/8	製品	—	右	糸切り→成形台痕
	665	須恵器	埴A	A区	SK5	□11.8 高3.6 底5.4	生焼	白灰	砂多	1/5	製品	—	左?	—
	666	須恵器	埴A	A区	SK5	□13.1 高3.6 底5.7	生焼	白	砂多	1/2	製品	—	右	—
	667	須恵器	埴A	A区	SK5	□13.7 高3.8 底6.2	生焼	灰褐	通常	1/2	製品	—	右	—
	668	須恵器	埴A	A区	SK5	□13.0 高4.15 底6.2	半生	灰	砂多	3/4	製品	—	右	底部外面成形台痕
	669	須恵器	埴B	A区	SK5	□15.4 高5.2 台7.4 台高0.6	生焼	白	通常	1/2	製品	—	右	—
	670	須恵器	埴B	A区	SK5	□15.2 高5.0 台5.7 台高0.9	堅緻	暗黒灰	砂多	1/2	製品	—	右	—
	671	須恵器	埴B	A区	SK5	□14.5 高5.5 台6.2 台高0.7	生焼	白灰	通常	1/4	製品	—	—	—
	672	須恵器	埴B	A区	SK5	台6.0 台高0.65 残高3.9	堅緻	暗黒灰	砂多	台完形	置台	—	—	埴型
	673	須恵器	埴B	A区	SK5	高2.6 台7.5 台高0.9	堅緻	暗灰	通常	底1/2	製品	—	—	—
	674	須恵器	埴B	A区	SK5	台5.8 台高0.6	堅緻	暗黒灰	砂多	台完形	置台	—	—	外面中央ヘラ記号「-」
	675	須恵器	坏A(10C)	A区	SK5	□12.8 高3.25 底6.4	堅緻	青灰	砂多	1/2	製品	—	—	底部焼台痕 (径6.2cm)
	676	須恵器	坏A(10C)	A区	SK5	□13.0 高3.35 底7.0	生焼	白	砂多	1/5	製品	—	—	—
	677	須恵器	皿B	A区	SK5	□12.5 高3.05 台5.8 台高0.7	良好	暗灰	通常	3/4	製品	—	右	—
	678	須恵器	皿B	A区	SK5	□12.2 高3.1 台5.75 台高0.6	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台	—	右	—
	679	鉄製品	刀子	A区	SK5	残長6.65 残巾1.3 厚0.25	—	—	—	—	製品	—	—	12.24g
680	須恵器	平鉢(鉢C)	A区	SK5	残高3.9 台12.0 台高0.9	良	暗灰	砂多	底1/4	置台	—	左	底部ケズリ右方向回転	
681	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	SK5	□20.6 残高6.0 頸20.2 頸高1.5	良好	暗灰	砂多	1/5	製品	—	左	逆位焼	
682	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	SK5	□27.3 高12.3 頸26.0 頸高0.8 胴26.0 底11.4	良好	青灰	砂多	1/2	製品	—	右?	胴部外面黒斑2カ所	
683	須恵器	双耳瓶	A区	SK5	□14.0 頸7.6 頸高7.0 残高12.6	堅緻	青灰	砂多	□1/3	製品	逆位	左	—	
684	須恵器	平底甕	A区	SK5	□26.4 高6.8 頸24.0 頸高1.8	堅緻	暗灰	砂多	□1/6	製品	—	—	外:タタキHe類 内:当て具すり消し	
685	須恵器	埴A	A区	SK6	□13.3 高3.5 底5.2	堅緻	黒灰	砂多	1/2	製品	—	—	—	
686	須恵器	埴B	A区	SK6	□14.8 高4.4 台6.2 台高0.5	良	暗青灰	砂多	1/4	製品	—	—	—	
687	須恵器	埴B	A区	SK6	□13.2 高4.8 台7.0 台高1.0	良	灰	砂多	3/8	置台	逆位	—	—	
688	須恵器	埴B	A区	SK6	□14.0 高4.2 台7.5 台高0.6	堅緻	暗青灰	砂多	1/8	製品	—	右	—	
689	須恵器	坏A(10C)	A区	SK6	□13.2 高3.6 底7.0	堅緻	青灰	砂多	1/4	置台	—	右	底部ヘラ切り 底部外面置台痕 (径6.4cm)	
690	須恵器	皿B	A区	SK6	□13.3 残高2.7	堅緻	黒暗灰	砂多	1/2	置台	逆位	—	—	
691	須恵器	皿B	A区	SK6	□16.1 高2.9 台7.3 台高0.6	堅緻	黒	砂多	1/4	製品	—	右	—	
692	須恵器	コップ型	A区	SK6	残高4.6 底6.4	良好	暗灰	通常	底略完	製品	—	右	正位焼 底部糸切り→成形台痕	
693	須恵器	皿B	A区	SK7	□13.2 高3.3 台5.6 台高0.7	堅緻	暗青灰	砂多	1/8	製品	—	左	—	
694	須恵器	特殊蓋	A区	SK7	□10.6 高2.35 つまみ径2.1 つまみ高1.05	生焼	灰	通常	略完形	製品	—	—	—	
695	須恵器	壺G	A区	SK7	□8.6 高23.0 頸8.3 頸高1.7 胴21.7 底 13.0	堅緻	暗灰	砂多	完形	製品	—	—	正位焼 底部外面焼台痕 (径11.2cm) 5.579g	
696	須恵器	特殊蓋	A区	2号窯埋土	□12.4 高2.75 つまみ径2.1 つまみ高0.8	生焼	白褐	砂多	5/8	製品	—	右	—	
697	須恵器	特殊蓋	A区	ピット14	□10.4 高3.0 つまみ径1.3 つまみ高1.3	良	灰	通常	1/3	製品	—	左	甕み 天井:糸切り→ツマミ接着→粘土 追加→全体ナゲ→ツマミ上面指押さえ	
89	698	須恵器	埴A	A区	上層灰原	□12.9 高3.8 底5.45	良好	青灰	砂多	3/4	製品	—	右	正位焼
	699	須恵器	埴A	A区	上層灰原	□13.5 高4.15 底5.6	良	青灰	砂多	1/2	製品	—	右	正位焼 甕み
	700	須恵器	埴B	A区	上層灰原	□14.4 高4.45 台6.5 台高0.65	生焼	白灰	砂多	3/8	製品	—	左?	—
	701	須恵器	埴B	A区	上層灰原	□14.1 高4.7 台5.6 台高0.6	良	青灰	砂多	3/5	製品	—	—	甕み
	702	須恵器	埴B	A区	上層灰原	□14.1 高4.6 台6.0 台高0.6	良好	青灰	砂多	1/4	製品	—	右	正位焼
	703	須恵器	埴B	A区	上層灰原	□13.3 高4.05 台6.2 台高0.45	良好	暗青灰	通常	3/4	製品	—	右	甕み
	704	須恵器	埴B	A区	上層灰原	□13.6 高4.2 台5.8 台高0.55	半生	青灰	通常	1/4	製品	—	右	台底部成形台痕
	705	須恵器	埴B	A区	上層灰原	□14.2 高5.0 台5.8 台高0.5	生焼	灰白	通常	1/4	製品	—	右	正位焼

遺物観察表 (第89図～91図)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	フタ 有無	備考	
89	706	須恵器	埴 口縁部	A区	上層灰原	□15.4 残高3.8	生焼	白	砂多	1/18	製品	—	—	口縁端面タイプ	
	707	須恵器	埴 口縁部	A区	上層灰原	□13.0 残高3.4	生焼	白	砂多	1/9	製品	—	—	口縁端面タイプ	
	708	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□12.8 高3.5 底6.9	良	淡灰	通常	1/6	製品	—	—	右	
	709	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□12.4 高3.25 底7.5	良	暗灰	砂多	1/2	置台	逆位	—	—	底部ヘラ切り
	710	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□13.3 高3.3 底7.8	良	紫暗青灰	通常	1/8	製品	—	—	—	正位焼 底部ヘラ切り
	711	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□13.0 高3.5 底7.8	堅緻	暗灰	砂多	3/8	置台	逆位	—	—	正位焼
	712	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□12.9 高3.1 底7.7	酸化	赤茶	砂多	1/6	製品	—	—	—	—
	713	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□13.0 高3.3 底7.0	堅緻	暗黒灰	砂多	1/4	製品	—	—	—	正位焼
	714	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□13.1 高3.2 底8.4	堅緻	褐灰	砂多	3/8	放置品?	—	—	—	底部ヘラ切り
	715	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□13.5 高3.35 底7.5	生焼	白灰	砂多	3/8	製品	—	—	—	正位焼
	716	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□13.1 高2.95 底7.4	良	青灰	通常	1/4	製品	—	—	—	正位焼 底部ヘラ切り→成形台痕
	717	須恵器	坏A(10C)	A区	上層灰原	□14.3 高3.0 底8.6	半生	灰	通常	1/8	製品	—	—	—	正位焼 底部ヘラ切り
	718	須恵器	皿A	A区	上層灰原	□13.7 高3.3 底6.1	良好	青灰	通常	2/5	製品	—	—	—	正位焼
	719	須恵器	皿B	A区	上層灰原	□11.4 高2.7 台5.5 台高0.75	良好	青灰	砂多	1/2割	製品	—	—	—	正位焼 台底部工具ナデ→成形台痕 内面底部ヘラ記号「—」
	720	須恵器	皿B	A区	上層灰原	□12.7 高2.9 台5.8 台高0.6	不良	暗褐灰	通常	1/5	製品	—	—	—	正位焼
	721	須恵器	特殊蓋 口欠	A区	上層灰原	残高1.9 つまみ径1.3 つまみ高0.7	堅緻	青灰	砂多	1/4?	製品	—	—	—	—
	722	須恵器	コップ型	A区	上層灰原	残高3.6 底5.8	良	褐灰	通常	底1/3	製品	—	—	—	正位焼? 底部糸切り→失敗
	723	須恵器	コップ型	A区	上層灰原	□11.0 残高7.4	堅緻	暗灰	砂多	□1/6	製品	—	—	—	—
	724	須恵器	円面碗	A区	上層灰原	径13.9 残高3.1	良好	青灰	砂多	□1/4	製品	—	—	—	逆位焼 3方透かし
	725	須恵器	風字碗	A区	上層灰原	厚1.0 最厚1.7	良	暗灰	砂多	1/4?	製品	—	—	—	正位焼
	726	須恵器	風字碗	A区	上層灰原	巾13.8 厚1.3 最厚1.8	堅緻	灰	砂多	1/2?	製品	—	—	—	—
	727	須恵器	蓋F系	A区	上層灰原	□12.0 残高22.0 頸12.4 頸高6.05 胴21.3	堅緻	青灰	砂多	□1/3	製品	—	—	—	正位焼
	728	須恵器	不明陶製品	A区	上層灰原	□10.0 残高3.7	良好	青灰	通常	□1/4	製品	—	—	—	逆位焼?
	729	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	上層灰原	□13.4 残高6.8 頸12.7 頸高1.6 胴14.3	良	暗黒灰	砂多	□1/3	製品	—	—	—	正位焼 小型
	730	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	上層灰原	□13.2 残高5.2 頸12.9 頸高1.95 胴14.9	堅緻	暗灰	砂多	□1/5	製品	—	—	—	小型
	731	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	上層灰原	□25.0 残高11.4 頸25.0 頸高2.25 胴26.8	堅緻	暗灰	砂多	□1/4	製品	—	—	—	左 正位焼
	732	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	上層灰原	□13.6 残高3.8 頸14.0 頸高0.6 胴16.5	良	灰	砂多	□1/3	製品	—	—	—	右
	733	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	上層灰原	□17.6 高12.8 頸15.9 頸高1.65 胴18.3 底7.4	堅緻	暗灰	通常	3/4	製品	—	—	—	逆位焼? 外:ケズリ→タキH a類 底部砂付着
734	須恵器	平鉢(鉢C)	A区	上層灰原	□31.2 残高12.7	良	青灰	砂多	□1/4	製品	—	—	—	右?	
735	須恵器	平鉢(鉢C)	A区	上層灰原	□30.0 高14.0 台13.2 台高1.45	良好	青灰	砂多	略方形	製品	—	—	—	正位焼? 内外面に火ダスキ痕 内外面口縁部に重焼痕	
736	須恵器	平鉢(鉢C)	A区	上層灰原	□23.4 高5.8 台11.6 台高2.55	良	青灰	砂多	1/2	製品	—	—	—	大型皿?	
737	須恵器	平鉢(鉢C)	A区	上層灰原	□26.4 高4.7 台11.4 台高1.7	良	青灰	砂多	5/8	製品	—	—	—	正位焼 内面底部重焼痕(径11.5cm) 大型皿?	
738	須恵器	ナリ鉢(鉢F)	A区	上層灰原	□16.8 残高7.1	堅緻	暗灰	砂多	1/12	製品	—	—	—	逆位焼	
739	須恵器	甌型深鉢	A区	上層灰原	□40.6 残高12.2	良好	青灰	砂多	□1/6	製品	—	—	—	右? 外:タキH e類 内:当て具SD類?またはスリ消し?	
740	須恵器	甌型深鉢	A区	上層灰原	□37.0 残高9.8	良好	青灰	砂多	□1/8	製品	—	—	—	正位焼 内面ランダムな指ナデ	
741	須恵器	中甌	A区	上層灰原	□26.0 残高5.9 頸21.4 頸高2.6	堅緻	青灰	砂多	□1/8	製品	—	—	—	正位焼?	
742	須恵器	中甌	A区	上層灰原	□24.4 残高7.6 頸20.3 頸高2.6	良	灰	通常	1/10	製品	—	—	—	外:タキH a類 内:スリ消し	
743	須恵器	平底甌	A区	上層灰原	残高5.4 底14.0	良好	灰	通常	底1/4	製品	—	—	—	外:タキH d類? 内:当て具?	
91	744	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.7 高3.6 底5.8	堅緻	暗灰	通常	1/2	製品	—	—	—	左
	745	須恵器	埴A	A区	A区グリッド	□13.5 高3.8 底5.5	良好	青灰	通常	2/5	製品	—	—	—	底部糸切り→成形台痕
	746	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.6 高3.8 底5.0	良	暗赤褐	砂多	1/4	製品	—	—	—	右
	747	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.5 高3.9 底5.6	良好	暗黒灰	通常	1/3	製品	—	—	—	左
	748	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□13.4 高3.8 底6.0	堅緻	黒灰	砂多	1/4	置台	逆位	—	—	—
	749	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.9 高3.6 底6.2	良	青灰	通常	1/2	製品	—	—	—	右 正位焼
	750	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.8 高4.0 底6.0	良	淡紫青灰	通常	1/4	製品	—	—	—	—
	751	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.95 高3.65 底6.0	良好	青灰	通常	3/4	製品	—	—	—	右
	752	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中1	□13.6 高5.0 台6.5 台高0.5	良	暗青灰	砂多	1/4	製品	—	—	—	正位焼
	753	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中1	□13.2 高4.2 台5.5 台高0.5	堅緻	暗灰	砂多	1/2	製品	—	—	—	歪み
	754	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中1	□13.8 高4.2 台6.3 台高0.4	堅緻	暗青灰	通常	1/2	製品	—	—	—	台底部工具ナデ
	755	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中1	□14.8 高4.5 台5.8 台高0.6	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	—	—	右
	756	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中1	□15.6 高4.6 台6.2 台高0.6	堅緻	暗灰	砂多	5/8	製品	—	—	—	歪み
	757	須恵器	坏A(10C)	A区	粘土塊集中1	□13.4 高3.1 底7.0	不良	褐灰	砂多	1/8	製品	—	—	—	底部ヘラ切り
	758	須恵器	坏A(10C)	A区	粘土塊集中1	□12.2 高3.9 底7.4	良好	青灰	砂多	1/8	製品	—	—	—	正位焼 底部ヘラ切り
759	須恵器	坏A(10C)	A区	粘土塊集中1	□13.6 高2.8 底7.2	良	暗青灰	砂多	1/8	製品	—	—	—	底部ヘラ切り	
760	須恵器	坏A(10C)	A区	粘土塊集中1	□13.0 高2.8 底6.5	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	—	—	左 底部ヘラ切り	
761	須恵器	坏A(10C)	A区	粘土塊集中1	□12.8 高2.9 底7.6	良	青灰	通常	1/4	置台	—	—	—	—	
762	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.6 高2.8 底4.4	良	黒	通常	1/4	製品	—	—	—	右 正位焼	
763	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□12.6 高3.3 台6.3 台高0.4	生焼	白灰	通常	1/2	製品	—	—	—	右 正位焼 底部内面ヘラ記号「—」	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考	
91	764	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□13.2 高2.95 台5.3 台高0.4	堅緻	黒	砂多	1/4	置台?	—		
	765	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中1	□13.5 高3.3 台6.0 台高0.7	良	青灰	通常	1/4	製品	—	正位焼	
	766	須恵器	長胴壺	A区	粘土塊集中1	□18.8 残高22.1 頸17.6 頸高1.85 胴20.9	堅緻	灰	砂多	□1/4	製品	—	右 横倒焼 外:タタキHa類 内:当て具SD類	
	767	須恵器	長胴壺	A区	粘土塊集中1	□20.2 残高21.0 頸19.0 頸高2.0 胴22.6	堅緻	青灰	砂多	□1/4	製品	—	左? 逆位焼 外:タタキHa類 内:当て具SD類	
92	768	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中2	□15.4 高5.45 台7.5 台高1.0	酸化	褐灰	通常	1/4	製品	—	右	
	769	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中2	□14.3 高5.05 台6.2 台高0.7	不良	褐灰	砂多	1/2	製品	—		
	770	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中2	□13.6 高4.7 台7.4 台高0.65	不良	褐	通常	3/8	製品	—		
	771	須恵器	埴B	A区	粘土塊集中2	□13.8 残高4.6	良	黒	砂多	1/5	置台?	—	正位焼 埴型	
	772	須恵器	埴A	A区	粘土塊集中2	□13.6 高4.0 底5.65	酸化	褐灰	通常	1/2	製品	—		
	773	須恵器	埴A(10C)	A区	粘土塊集中2	□13.0 高3.2 底7.0	良	青灰	通常	1/8	製品	—		
	774	陶製品	不明陶製品	A区	粘土塊集中2	長4.2 巾4.3 厚0.7	良好	青灰	砂多	—	製品?	—		
	775	須恵質 陶製品	陶鉢	A区	粘土塊集中2	長5.5 巾3.1 孔1.4	良好	青灰	通常	完形	製品	—	横倒焼 46.9g	
	776	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	粘土塊集中2	□24.4 残高6.3 頸22.6 頸高2.4 胴24.2	半生	白灰	砂多	□1/6	製品	—	右 逆位焼	
93	777	須恵器	広口鉢(鉢B)	A区	粘土塊集中2	□21.8 高23.3 頸20.4 頸高2.7 胴22.2 底10.6	良	茶褐	砂多	1/5	放置品?	—	左	
	778	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯床	□29.0 残高12.8 頸28.2 頸高1.2 胴28.4	良	灰	砂多	1/8	置台	逆位	右 外面置台痕(径12cm) 内面砂付着	
	779	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯床	□26.5 残高8.2 頸26.0 頸高1.1 胴27.3	生焼	白灰	砂多	□1/3	製品	—	右 逆位焼	
	780	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯床	□27.0 高12.6 頸26.3 頸高1.0 胴27.2 底12.6	生焼	白灰	砂多	略完形	製品	—	右 逆位焼 底部焼台痕・火ダスキ痕 底部形成時の成形台痕(径8.4cm)	
	781	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯床	□27.8 残高12.0 頸27.0 頸高1.3 胴27.5	堅緻	青灰	砂多	□1/8	置台	—	左	
94	782	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯床	□28.2 残高9.5 頸27.8 頸高0.8 胴28.5	生焼	白灰	砂多	□1/8	製品	—	右	
	783	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□12.8 高3.5 底5.3	良好	灰	砂多	3/8	製品	—		
	784	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□13.0 高3.9 底5.2	良	灰	通常	3/8	製品	—	右 正位焼	
	785	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□12.6 高3.9 底5.0	生焼	白灰	通常	1/8	製品	—	右	
	786	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□12.8 高3.6 底5.6	半生	白灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼 内面底部成形時の重ね痕?	
	787	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□12.2 高4.1 底5.8	良好	青灰	砂多	1/4弱	製品	—	右 正位焼	
	788	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□12.0 高4.0 底6.0	良	青灰	砂多	1/8	製品	—	右 正位焼	
	789	須恵器	埴A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□13.2 高3.5 底5.2	良	灰	通常	1/2	製品	—	右 正位焼	
	790	須恵器	埴B	B区	7号窯前面土坑・灰層	□13.7 高4.7 台6.0 台高0.65	堅緻	暗黒灰	砂多	略完形	製品	—	正位焼 歪み	
	791	須恵器	埴B	B区	7号窯前面土坑・灰層	□13.7 高4.2 台6.2 台高0.7	良	青灰	砂多	1/2	製品	—	右 正位焼 歪み 内面底部成型時の重ね痕	
	792	須恵器	埴B	B区	7号窯前面土坑・灰層	□13.8 高5.5 台6.5 台高0.65	酸化	褐灰	通常	3/8	製品	—	左 内面中央指ナデ(長1cm) 台底部工具ナデ	
	793	須恵器	埴B	B区	7号窯前面土坑・灰層	□14.5 高4.2 台6.6 台高0.7	良好	青灰	砂多	1/2	製品	—	右 正位焼 台底部工具ナデ	
	794	須恵器	埴B	B区	7号窯前面土坑・灰層	残高5.0 台7.4 台高0.9	酸化	明褐	通常	1/2	製品	—	右 台底部工具ナデ	
	795	須恵器	皿A	B区	7号窯前面土坑・灰層	□13.9 高3.25 底5.8	堅緻	暗灰	通常	1/4	製品	—	正位焼	
	796	須恵器	コップ型	B区	7号窯前面土坑・灰層	□9.8 残高5.4	良	暗灰	砂多	□1/8	放置品	—	正位焼	
	797	須恵器	コップ型	B区	7号窯前面土坑・灰層	□9.2 残高5.3	酸化	暗褐灰	砂多	□1/10	製品	—	逆位焼	
	798	須恵質 陶製品	特殊陶製品	B区	7号窯前面土坑・灰層	最厚1.15	堅緻	青灰	砂多	—	製品	—	内外面ケズリ	
	95	799	須恵質 陶製品	特殊陶製品	B区	7号窯前面土坑・灰層	最厚1.1	堅緻	青灰	通常	—	製品	—	内外面ケズリ 凹部降灰
		800	須恵質 陶製品	特殊陶製品	B区	7号窯前面土坑・灰層	最厚1.05	堅緻	青灰	通常	—	製品	—	内外面ケズリ
801		須恵器	壺F系	B区	7号窯燃焼部	□10.7 高23.5 頸10.2 頸高5.0 胴17.9 底11.4	堅緻	青灰	砂多	略完形	製品	—	右 正位焼 底部成形台痕・焼台痕(径8cm) 2.658g	
802		須恵器	壺F系	B区	7号窯前面土坑・灰層	□10.2 高22.2 頸10.6 頸高4.15 胴17.5 底11.2	堅緻	青灰	砂多	1/2	製品	—	正位焼? 歪み 底部成形台痕(径8cm前後) 2.693g	
803		須恵器	壺F系	B区	7号窯前面土坑・灰層	□10.7 高24.8 頸11.65 頸高5.5 胴18.4 底12.4	良好	青灰	砂多	完形	製品	—	正位焼 肩部黒染(径5cm) 底部外面焼台痕(径7.5cm) 3.569g	
804		須恵器	壺F系	B区	7号窯前面土坑・灰層	□10.0 残高6.5 頸7.8 頸高4.75	堅緻	暗灰	通常	□1/3	製品	—	横倒焼?	
805		須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□12.4 残高3.35 頸13.0 頸高1.6 胴14.6	堅緻	暗灰	砂多	□1/6	製品	—	逆位焼	
806		須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□19.4 残高5.0 頸19.6 頸高1.3 胴21.4	良好	青灰	砂多	□1/12	製品	—	逆位焼	
807		須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□23.0 残高5.0 頸23.5 頸高1.35 胴25.0	堅緻	暗灰	砂多	□1/8	製品	—	右 逆位焼	
808		須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□21.3 残高6.6 頸19.7 頸高2.5 胴22.0	良	暗灰	砂多	□1/8	製品	—	右 逆位焼	
809		須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯燃焼部	□27.0 残高11.9 頸26.0 頸高0.6 胴27.0	良好	青灰	砂多	□1/5	置台	逆位	左 胴部外面置台痕(径13cm)	
96	810	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□28.5 残高6.0 胴28.0	良好	青灰	砂多	□1/6	製品	—	右	
	811	須恵器	平鉢(鉢C)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□36.8 残高13.0	堅緻	暗灰	砂多	□1/16	置台	逆位	— 正位焼 外:タタキHa類・砂付着 内面置台痕2カ所(径12cm・15cm)	
	812	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	7号窯前面土坑・灰層	□21.4 残高25.5 頸10.5 頸高8.65 胴18.8	堅緻	青灰	砂多	1/3	製品	—	右 正位焼 耳端面ケズリ	
	813	須恵器	瓶	B区	7号窯前面土坑・灰層	□26.6 残高11.2	良	暗灰	砂多	□1/5	製品	—	右 逆位焼	
	814	須恵器	長胴壺	B区	7号窯前面土坑・灰層	□20.4 残高4.6 頸19.0 頸高2.05	良好	青灰	砂多	□1/9	製品	—	右 正位焼?	
	815	須恵器	中壺	B区	7号窯燃焼部	□20.8 残高6.9 頸16.4 頸高4.5	堅緻	灰	砂多	□1/3	製品	—	横倒焼? 歪み 外:タタキHe類 内:当て具SD類	
97	816	須恵器	大壺	B区	7号窯前面土坑・灰層	□41.2 残高5.5 頸32.2 頸高4.5	良好	青灰	砂多	□1/10	製品	—	正位焼 外:タタキHa類	
	817	須恵器	埴A	B区	7号窯埋土	□12.8 高3.8 底6.4	堅緻	黒灰	通常	1/8	置台	—	糸切り失敗痕 内外とも砂付着	
	818	須恵器	埴B	B区	7号窯埋土	□13.8 残高4.3	良	暗灰	通常	1/4	製品	—	正位焼? 台接着時右クロ回転	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考
97	819	須恵器	埴B	B区	7号窯埋土	□15.2 高4.85 台7.0 台高0.65	良	褐灰	砂多	1/2	製品	—	右 正位焼
	820	須恵器	埴B	B区	7号窯埋土	□15.1 高5.0 台6.7 台高0.75	半生	褐灰	砂多	1/4	製品	—	右
	821	須恵器	埴B	B区	7号窯埋土	残高5.8 台7.3 台高0.9	酸化	褐	砂多	1/2	製品	—	右 台底部内側にかけて工具ナデ
	822	須恵器 陶製品	風字硯	B区	7号窯埋土	厚0.6 最厚1.7	良	灰	通常	—	製品	—	—
98	823	須恵器	壺F系	B区	7号窯埋土	□14.4 残高17.4 頸12.5 頸高5.4 胴21.1	堅緻	暗灰	砂多	□1/4	製品	—	— 横倒焼? 歪み
	824	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□29.0 残高10.7 頸26.6 頸高1.25 胴27.4	良	青灰	砂多	□1/8	製品	—	右 逆位焼
	825	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□26.6 残高13.8 頸26.5 頸高1.0 胴27.2	生焼	白	砂多	□1/6	製品	—	右
	826	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□22.4 残高12.8 頸21.2 頸高2.3 胴24.2	生焼	白灰	通常	□1/6	製品	—	右
	827	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□22.4 残高5.25 頸23.2 頸高1.6 胴24.8	生焼	白	通常	□1/6	製品	—	右
	828	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□23.1 残高5.6 頸23.5 頸高1.0 胴25.2	生焼	白灰	砂多	□1/6	製品	—	—
	829	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□25.9 残高6.4 頸24.7 頸高1.0 胴25.6	堅緻	暗灰	通常	□1/4	製品	—	— 逆位焼
	830	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	残高7.7 底9.0	良	暗灰	砂多	底1/8	製品	—	—
	831	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	7号窯埋土	□21.0 残高7.6 頸20.1 頸高2.35 胴20.6	良好	青灰	砂多	□1/4	製品	—	左
	99	832	須恵器	壺F系	B区	SK4	□12.9 高38.8 頸13.4 頸高7.4 胴26.4 底15.0	半生	灰	通常	略完形	製品	—
833		須恵器	壺F系	B区	SK4	□12.0 高37.55 頸12.6 頸高8.0 胴24.0 底13.0	良好	青灰	通常	完形	製品	—	— 正位焼 底部ヘラズリ 7.9094
100	834	須恵器	皿A	B区	灰原	□13.6 高4.15 底5.7	良	灰	砂多	7/8	製品	—	右 ヘラ記号「一」
	835	須恵器	埴A	B区	灰原	□13.4 高4.1 底5.1	良	灰	通常	3/4	製品	—	右 ヘラ記号「一」
	836	須恵器	埴A	B区	灰原	□12.8 高3.8 底5.1	半生	灰	砂多	1/4	製品	—	右 糸切り→成形台痕
	837	須恵器	埴A	B区	灰原	□12.8 高3.65 底5.2	良	青灰	通常	5/8	製品	—	右 糸切り→成形台痕
	838	須恵器	埴A	B区	灰原	□14.1 高4.2 底5.4	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	— ヘラ記号「二」 糸切り失敗
	839	須恵器	皿B	B区	灰原	□12.8 高3.5 台6.4 台高0.5	堅緻	灰	砂多	1/4	製品	—	— 歪み 台ひも状
	840	須恵器	皿A	B区	灰原	□12.7 高3.9 底5.3	堅緻	灰	通常	3/8	製品	—	— 内面砂付着
	841	須恵器	埴A	B区	灰原	□12.6 高3.8 底5.4	良好	青灰	通常	1/2	製品	—	右
	842	須恵器	埴A	B区	灰原	□12.8 高3.9 底5.8	半生	白灰	通常	1/3	製品	—	—
	843	須恵器	埴A	B区	灰原	□12.6 高3.9 底5.3	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右 糸切り失敗
	844	須恵器	埴A	B区	灰原	□13.2 高3.9 底5.9	酸化	褐	砂多	7/8	製品	—	—
	845	須恵器	埴A	B区	灰原	□13.3 高3.8 底5.8	良好	暗青灰	砂多	完形	製品	—	右
	846	須恵器	埴A	B区	灰原	□14.1 高3.55 底5.5	良	青灰	砂多	1/3	製品	—	— ヘラ記号「二」
	847	須恵器	埴A	B区	灰原	□14.1 高3.9 底6.0	良	青灰	通常	1/4	製品	—	右 内面ヘラ記号 坏Aと埴の中間という印象
	848	須恵器	埴A	B区	灰原	□14.3 高4.0 底6.2	良	青灰	通常	1/4	製品	—	右 内面ヘラ記号
101	849	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.0 高4.5 台4.6 台高0.7	良	青灰	砂多	5/8	製品	—	右 内面ヘラ記号「一」 台底部工具ナデ
	850	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.9 高4.55 台5.5 台高0.7	半生	灰	通常	3/8	製品	—	— 台底部工具ナデ
	851	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.3 高4.5 台5.6 台高0.5	良	灰	通常	1/4	製品	—	右 ヘラ記号「一」 内面底部ケズリ
	852	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.4 高4.5 台5.6 台高0.6	良	灰	砂多	略完形	製品	—	— 内面ヘラ記号「一」 台底部工具ナデ
	853	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.6 高4.7 台5.4 台高0.75	良	灰	砂多	3/4	製品	—	左 内面ヘラ記号「二」 台底部工具ナデ
	854	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.3 高4.9 台5.8 台高0.65	良	暗灰	砂多	1/6	製品	—	右?
	855	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.6 高4.7 台6.2 台高0.8	良	青灰	砂多	3/4	製品	—	右 内面ヘラ記号「一」
	856	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.3 高4.65 台5.8 台高0.65	堅緻	青灰	通常	3/8	製品	—	右 台底部工具ナデ
	857	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.65 高4.7 台5.1 台高0.7	良	灰	通常	3/4	製品	—	右 ヘラ記号「一」 内面工具ナデ
	858	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.4 高3.9 台6.2 台高0.6	良好	青灰	砂多	略完形	製品	—	右 台底部工具ナデ
	859	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.3 高4.3 台6.0 台高0.9	良	暗灰	砂多	1/2	製品	—	右
	860	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.9 高4.45 台6.0 台高0.5	良	青灰	砂多	1/2	製品	—	左?
	861	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.1 高4.6 台5.8 台高0.7	半生	灰	通常	1/4	製品	—	右
	862	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.0 高4.6 台6.4 台高0.6	堅緻	黒灰	砂多	1/2	製品	—	— 歪み
	863	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.7 高4.7 台6.3 台高0.55	良	灰	通常	1/4	製品	—	— 台底部成形台痕
864	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.4 高3.9 台5.8 台高0.6	良	青灰	通常	3/4	製品	—	右 台底部成形台痕 歪み	
865	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.0 高4.4 台6.0 台高0.6	堅緻	暗灰	通常	1/4	製品	—	—	
866	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.4 高4.2 台5.6 台高0.5	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右 台底部工具ナデ	
867	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.2 高3.6 台5.5 台高0.4	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右	
868	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.3 高3.5 台5.9 台高0.7	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右	
869	須恵器	埴B	B区	灰原	□15.7 高4.2 台6.8 台高0.85	良	青灰	通常	1/6	製品	—	右 台底部成形台痕	
870	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.4 高4.3 台6.8 台高0.7	半生	淡青灰	通常	1/4	製品	—	右	
871	須恵器	埴B	B区	灰原	□12.9 高4.9 台5.6 台高0.5	良	青灰	通常	3/8	製品	—	右 内面ヘラ記号「×」 台底部工具ナデ	
872	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.8 高5.15 台6.0 台高0.8	良	暗灰	砂多	3/8	製品	—	右 台底部工具ナデ	
873	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.2 高4.9 台5.6 台高0.7	良	青灰	通常	1/4	製品	—	— 内面ヘラ記号「一」 台底部工具ナデ	
874	須恵器	埴B	B区	灰原	□13.8 高4.65 台6.5 台高0.7	良好	暗青灰	通常	1/4	製品	—	右	
875	須恵器	埴B	B区	灰原	□11.9 高4.7 台6.6 台高0.85	良好	暗灰	砂多	1/4	製品	—	右	
876	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.6 高4.8 台6.2 台高0.75	半生	灰	砂多	1/2	製品	—	右	
877	須恵器	埴B	B区	灰原	□15.8 高5.7 台6.6 台高0.9	堅緻	暗灰	通常	1/6	製品	—	右	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考
102	878	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.7 高6.0 台5.0 台高1.2	堅緻	青紫灰	通常	1/8	製品	—	左
	879	須恵器	埴B	B区	灰原	□14.7 高6.2 台7.4 台高1.2	良好	青灰	通常	1/4	製品	—	左
	880	須恵器	埴B	B区	灰原	□16.2 高5.2 台7.0 台高0.9	良好	青灰	通常	1/8	製品	—	右
	881	須恵器	埴B	B区	灰原	□16.0 高5.7 台7.4 台高0.95	良	暗灰	通常	3/8	製品	—	左
	882	須恵器	埴B	B区	灰原	□15.9 高5.8 台7.4 台高0.95	堅緻	青灰	砂多	1/2	製品	—	右?
	883	須恵器	埴B	B区	灰原	□16.6 高6.0 台7.0 台高0.75	良好	灰	砂多	1/3	製品	—	右 台底部工具ナデ
	884	須恵器	埴B	B区	灰原	□17.6 高8.3 台7.2 台高0.8	半生	褐	通常	1/4	製品	—	— 台底部工具ナデ
	885	須恵器	埴 口縁部	B区	灰原	□15.7 残高4.2	良好酸化	暗褐色	砂多	□1/3	製品	—	右
	886	須恵器	埴 口縁部	B区	灰原	□15.8 残高4.8	堅緻	青灰	通常	□1/4	製品	—	右
	887	須恵器	埴 口縁部	B区	灰原	□19.4 高4.0	堅緻	青灰	通常	□1/3	製品	—	右
	888	須恵器	不明食器	B区	灰原	□15.5 残高3.65	良好	灰	通常	□1/8	製品	—	— 正位焼
	889	須恵器	坏A	B区	灰原	□12.9 高3.2 底7.2	良	青灰	通常	1/8	製品	—	—
	890	須恵器	皿A	B区	灰原	□11.5 高2.0 底5.2	良好酸化	暗褐色	砂多	1/4	製品	—	—
	891	須恵器	皿A	B区	灰原	□12.3 高2.1 底5.7	良	灰	砂多	1/2	製品	—	右 糸切り失敗
	892	須恵器	皿A	B区	灰原	□11.5 高3.25 底5.3	生焼	褐	砂多	5/8	製品	—	— 糸切り失敗
	893	須恵器	皿A	B区	灰原	□13.4 高2.75 底5.0	半生良	淡灰	通常	1/3	製品	—	右
	894	須恵器	皿B	B区	灰原	□12.4 高3.1 台4.5 台高0.7	良好	青灰	通常	3/4	製品	—	右
	895	須恵器	皿B	B区	灰原	□12.2 高2.8 台5.4 台高0.6	堅緻	灰	砂多	1/3	製品	—	右 台成形台痕
	896	須恵器	皿B	B区	灰原	□12.5 高2.5 台5.4 台高0.5	良好	青灰	通常	7/8	製品	—	右
	897	須恵器	皿B	B区	灰原	□14.0 高3.4 台5.8 台高0.6	堅緻	黒灰	通常	1/6	製品?	—	左?
898	須恵器	コップ型	B区	灰原	□10.9 残高5.1	堅緻	暗灰	砂多	□1/5	製品	—	— 横倒焼? 内面光沢黒色	
899	須恵器	特殊埴	B区	灰原	□6.5 残高2.65	良	青灰	通常	□1/4	製品	—	右	
900	須恵器	コップ型	B区	灰原	残高2.2 底5.5	良好	青灰	砂多	底完形	製品	—	—	
901	須恵器 陶製品	風字碗	B区	灰原	長13.1 厚0.7 最厚2.3	良	暗灰	通常	3/4	製品	—	— 正位焼 外面工具ナデ	
902	須恵器 陶製品	風字碗	B区	灰原	厚0.8 最厚2.6	良好	暗灰	砂多	—	製品	—	—	
903	須恵器 陶製品	風字碗	B区	灰原	巾9.0 厚0.6 最厚1.4	堅緻	灰	砂多	—	製品	—	—	
904	須恵器 陶製品	風字碗	B区	灰原	厚0.9 最厚2.4	良好	灰	通常	1/6?	製品	—	—	
905	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	長21.7 巾15.5 厚1.1	良好	青灰	通常	3/4	製品	—	—	
906	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	残長6.1 残巾5.45 厚1.0	生焼	白灰	通常	—	製品	—	—	
907	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	残長5.1 残巾5.6 厚0.85	良好	青灰	通常	—	製品	—	—	
908	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	残長5.3 残巾5.55 厚1.15	良好	青灰	砂多	—	製品	—	—	
909	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	残長11.5 残巾6.35 厚1.0	堅緻	青灰	通常	—	製品	—	—	
910	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	残長12.0 残巾6.95 厚1.1	良好	青灰	通常	—	製品	—	—	
911	須恵器 陶製品	特殊陶製品	B区	灰原	残長19.2 残巾14.2 厚1.25	良好	青灰	砂多	—	製品	—	—	
912	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長6.5 巾4.15 孔1.1	良	暗灰	通常	完形	製品	—	— 109.1 g	
913	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長5.6 巾3.0 孔1.4	良好	青灰	通常	完形	製品	—	— 54.1 g	
914	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長4.9 巾3.25 孔1.2	良	青灰・白灰	通常	9/10	製品	—	— 40.4 g	
915	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長5.1 巾3.0 孔1.4	良	灰	通常	略完形	製品	—	— 39.7 g	
916	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長4.8 巾2.55 孔0.9	良	灰	通常	完形	製品	—	— 28.74 g	
917	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長4.6 巾2.5 孔0.9	良好	青灰	通常	完形	製品	—	— 28.8 g	
918	須恵器 陶製品	陶鉢	B区	灰原	長4.6 巾2.8 孔1.0	良好	灰	通常	完形	製品	—	— 30.2 g	
919	須恵器	壺A	B区	灰原	□14.3 残高7.4 頸14.8 頸高3.1	良好	灰	砂多	□1/4	製品	—	— 内面黒色 フタ伴う	
920	須恵器	壺G	B区	灰原	□12.0 残高7.6 頸12.8 頸高2.6	良好	灰	砂多	□7/8	製品	—	右 横倒焼 フタ伴わず	
921	須恵器	壺G	B区	灰原	□11.5 高29.9 頸12.3 頸高3.1 胴25.1 底11.9	半生	褐	砂多	2/3	製品	—	右 斜倒焼 8.177g	
922	須恵器	壺H	B区	灰原	□14.8 残高8.45 頸14.2 頸高1.6 胴21.3	良	青灰	砂多	□1/5	製品	—	右	
923	須恵器	壺H	B区	灰原	□9.2 残高4.95	堅緻	青灰	砂多	□1/2	製品	—	— 逆位焼 フタを伴わないタイプで短頸	
924	須恵器	壺H	B区	灰原	□12.7 残高10.0 頸11.6 頸高1.7 胴18.4	半生良	灰	砂多	1/4	製品	—	右 斜倒焼	
925	須恵器	壺H	B区	灰原	□13.8 残高8.45 頸14.1 頸高1.65	良好	青灰	砂多	□1/3	製品	—	右 逆位焼 フタ伴わず	
926	須恵器	小瓶 底部	B区	灰原	残高12.6 頸5.9 胴14.5 底9.8	良好	暗灰	砂多	1/2	製品	—	右 逆位焼? 底部糸切り 内面黒色	
927	須恵器	すり鉢(鉢F)	B区	灰原	□16.0 残高12.7 胴16.3	堅緻	青灰	砂多	□1/4	製品	—	—	
928	須恵器	すり鉢(鉢F)	B区	灰原	□16.8 残高8.3 胴18.0	良好	灰	砂多	□1/4	製品	—	— 正位焼	
929	須恵器	平鉢(鉢C)	B区	灰原	□24.4 残高9.4	半生	淡灰	砂多	□1/12	製品	—	右	
930	須恵器	平鉢(鉢C)	B区	灰原	□25.6 高12.5 台11.8 台高1.2	良	暗灰	砂多	□1/7	製品	—	右 正位焼 台底部工具ナデ	
931	須恵器	平鉢(鉢C)	B区	灰原	□39.6 残高6.1	良	暗灰	砂多	□1/12	製品	—	右	
932	須恵器	平鉢(鉢C)	B区	灰原	残高3.35 台13.0 台高1.05	堅緻	暗灰	砂多	底2/3	製品	—	右 台底部工具ナデ 内面重焼痕	

遺物観察表 (第106図～110図)

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性格	使用面	備考	
105	933	須恵器	平鉢(鉢C)	B区	灰原	□24.4 残高8.6	良	灰	砂多	□1/6	製品	—	右	
	934	須恵器	深鉢(瓶?)	B区	灰原	□24.8 残高8.5	良	暗灰	砂多	□1/12	製品	—	— 逆位焼	
106	935	須恵器	瓶	B区	灰原	□27.7 残高6.35	良好	暗灰	通常	□1/4	製品	—	左 逆位焼?	
	936	須恵器	瓶	B区	灰原	□29.2 残高7.6	良好	暗灰	砂多	□1/12	製品	—	右	
	937	須恵器	瓶	B区	灰原	□32.4 残高6.4	良	暗灰 酸化	砂多	□1/14	製品	—	—	
	938	須恵器	瓶	B区	灰原	□34.4 残高6.7		生焼	褐	砂多	□1/9	製品	—	—
	939	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□16.0 残高5.9 頸14.8 頸高1.9 胴15.9	良好	青灰	砂多	□1/3	製品	—	右 斜倒焼 小型	
	940	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□20.5 残高8.85 頸20.0 頸高2.95 胴21.2	良好	青灰	砂多	□1/6	製品	—	— 逆位焼	
	941	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□22.9 残高6.7 頸21.8 頸高2.6 胴23.6	良好	青灰	通常	□1/3	製品	—	左 逆位焼?	
	942	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□26.9 残高8.25 胴28.8	良好	灰	砂多	□1/6	製品	—	右 斜倒焼	
	943	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□25.6 残高7.65 胴28.9	半生	褐灰	砂多	□1/8	製品	—	左	
	944	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□22.4 残高11.75 胴25.4	良好	青灰	砂多	□1/3	製品	—	右 逆位焼	
	945	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□23.8 残高6.85 胴26.7	良好	青灰	砂多	□1/2	製品	—	左 逆位焼?	
	946	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□21.0 残高8.2 頸20.9 頸高1.7 胴23.1	良	青灰	砂多	□1/5	製品	—	右	
	947	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□22.4 残高11.3 頸20.8 頸高2.4 胴23.8	良好	青灰	砂多	□1/5	製品	—	右 斜倒焼	
	948	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□22.0 残高13.8 頸21.0 頸高2.5 胴24.3	半生	淡青灰	通常	1/6	製品	—	右	
949	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□23.3 残高8.0 頸22.5 頸高2.2 胴24.2	酸化	茶褐	砂多	□1/3	製品	—	右 横倒又は斜倒焼		
107	950	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□22.9 残高10.35 頸21.7 頸高2.3 胴23.8	酸化	褐	砂多	□1/5	製品	—	右	
	951	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□14.0 残高9.0 頸12.9 頸高1.55 胴15.7	良好	灰	砂多	□1/3	製品	—	右 正位焼 小型	
	952	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□19.9 残高8.2 頸18.1 頸高2.3 胴20.8	良好	青灰	砂多	□1/5	製品	—	—	
	953	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□27.9 残高6.25 頸27.2 頸高1.7 胴28.0	良好	青灰	砂多	□1/5	製品	—	右 逆位焼	
	954	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□24.8 残高5.3 胴24.8	良	青灰	砂多	□1/6	製品	—	— 逆位焼	
	955	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□27.7 残高7.2 頸26.6 頸高1.9 胴27.2	生焼	白	砂多	□1/8	製品	—	左	
	956	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□29.1 残高6.3 頸28.9 頸高1.8 胴29.4	生焼	白	砂多	□1/4	製品	—	右	
	957	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□25.6 残高6.4 頸25.2 頸高2.1 胴25.6	堅緻	青灰	砂多	□1/6	製品	—	—	
	958	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	□24.5 残高7.7	堅緻	青灰	砂多	1/7	製品	—	左	
	959	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	灰原	残高1.5 底12.2	良好	青灰	砂多	底1/4	製品	—	左 底部へラ書き「□丸右側」 底部のみ	
	960	須恵器	長頸瓶(瓶B)	B区	灰原	□12.4 残高20.4 頸5.8 胴14.5	良好	灰	砂多	1/2 台欠	製品	—	右 正位焼 推1.3180	
	961	須恵器	長頸瓶(瓶B)	B区	灰原	残高6.4 台7.1 台高0.55	良好	暗灰	砂多	底1/4	製品	—	斜倒焼 外面:光沢黒 内面:黒色	
	962	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□20.2 残高10.2 頸18.0	良	灰	砂多	□1/8	製品	—	— 逆位焼	
	963	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□19.4 残高10.9 頸18.0	堅緻	青灰	砂多	□1/4	製品	—	—	
964	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□18.0 残高8.7 頸16.8	良好	青灰	砂多	□1/4	製品	—	—		
965	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□18.8 残高8.4 頸18.4	堅緻	灰	砂多	□1/8	製品	—	—		
966	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□18.0 残高6.8 頸16.5	堅緻	青灰	砂多	□1/6	製品	—	— 逆位焼		
967	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□19.0 残高7.5 頸18.0	良好	暗青灰	砂多	□1/4	製品	—	右? 逆位焼		
968	須恵器	長胴壺	B区	灰原	□18.6 残高5.5 頸18.0	良好	灰	砂多	□1/3	製品	—	—		
108	969	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□12.6 高28.5 頸6.9 胴16.2 底9.8	良好	青灰	砂多	略完形	製品	—	右 底部成形台痕 焼台痕 (径6.5cm) 2.6430	
	970	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□13.4 残高17.1 頸6.5 頸高5.9 胴15.5	良好	青灰	砂多	□完形	製品	—	右	
	971	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□14.2 残高18.35 頸8.1 頸高7.25 胴17.5	良好	青灰	砂多	□1/2	製品	—	— 正位焼	
	972	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□15.0 残高20.4 頸7.3	堅緻	暗灰	砂多	□1/2	製品	—	右 内面黒色	
	973	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□14.1 頸7.4 胴19.1 底11.2	良	灰	砂多	1/2	製品	—	右 正位焼 底部外面成形台痕 焼台痕 推4.0470	
	974	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	残高33.1 頸8.2 胴20.0 底11.9	良	灰	砂多	胴1/2	製品	—	左? 正位焼→斜倒? 焼成中に倒れた可能性 底部焼台痕	
	975	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□17.7 残高38.3 頸8.7 頸高9.8 胴21.4	良好	青灰	砂多	略完形	製品	—	右 斜倒焼 推6.8760	
	976	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	残高27.6 頸11.6 胴21.6	良	青灰	砂多	胴3/4	製品	—	右	
109	977	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□15.2 残高25.5 頸10.8 胴21.1	良	酸化 褐灰	砂多	1/4	製品	—	右 横倒焼	
	978	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□25.0 残高17.85 頸12.5 頸高7.9 胴22.9	不良	茶褐	砂多	□1/4	製品	—	右	
	979	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□17.4 高40.9 頸10.1 頸高9.6 胴22.3	良	灰	砂多	2/3	製品	—	右? 底部成形台痕 焼台痕 正位焼 7.8140	
	980	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□19.7 残高38.9 頸10.3	良好	灰	砂多	1/2	製品	—	— 正位焼 胴部へラ記号「+」 推8.5050	
	981	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□22.6 残高19.7 頸13.0 頸高10.0 胴25.4	生	白	砂多	□1/3	製品	—	—	
	982	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	残高20.6 胴25.4	良好	青灰	砂多	胴1/4	製品	—	— 胴部2ヶ所へラ書き「全揃」	
110	983	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	□21.6 残高29.8 頸10.2 胴22.8	良	灰	砂多	□2/3	製品	—	— 斜倒焼?	
	984	須恵器	双耳瓶(瓶D)	B区	灰原	残高32.5 頸10.2 胴22.3	良好	青灰	砂多	胴1/3	製品	—	右	
	985	須恵器	中壺	B区	灰原	□17.7 残高6.1	良好	灰	砂多	□1/3	製品	—	— 逆位焼 外:タタキHa類 内:すりけし	
	986	須恵器	中壺	B区	灰原	□26.3 残高7.55	堅緻	暗灰	砂多	□1/3	製品	—	— 逆位焼 外:タタキHe類 内:当て具 Da類?→すりけし	
	987	須恵器	中壺	B区	灰原	□29.5 残高12.75	良好	青灰	砂多	□1/5	製品	—	左? 正位焼 外:タタキHe類 内:当て具SD類	
	988	須恵器	平底壺	B区	灰原	底11.8 残高4.95	良	青灰	砂多	底1/2	製品	—	— 正位焼 外:タタキHe類 成形台痕	

図版	番号	種別	器種名	区	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	性状	使用面	備考
111	989	須恵器	平底甕	B区	灰原	底12.9 残高3.95	良好	青灰	砂多	底完形	製品	—	正位焼 外:タキHe類 内:ナデ
	990	須恵器	大甕	B区	灰原	口38.7 残高24.7 頸32.8 頸高10.6 胴57.2	堅緻	青灰	砂多	口1/3	製品	—	口頸部後付け
	991	須恵器	埴A	B区	粘土塊だまり	口12.4 高2.6 底5.4	半生	白灰	砂多	3/4	製品	—	右
	992	須恵器	皿A	B区	粘土塊だまり	口12.4 高3.2 底5.4	堅緻	黒灰	砂多	1/3	置台?	—	—
	993	須恵器	埴A	B区	粘土塊だまり	口12.7 高3.7 底5.0	良	青灰	砂多	1/3	製品	—	右
	994	須恵器	埴A	B区	粘土塊だまり	口13.4 高3.65 底5.6	良	青灰	砂多	1/2	置台	—	逆位
	995	須恵器	埴A	B区	粘土塊だまり	口13.0 高3.7 底5.6	良	青灰	砂多	1/2	製品	—	右
	996	須恵器	皿A	B区	粘土塊だまり	口12.0 高3.65 底5.0	不良	白	通常	7/8	製品	—	右
	997	須恵器	埴A	B区	粘土塊だまり	口12.3 高3.55 底6.0	良好酸化	青灰	砂多	1/4	製品	—	右
	998	須恵器	埴B	B区	粘土塊だまり	口13.8 高4.1 台5.7 台高0.55	良	暗青灰	砂多	1/2	製品	—	右
999	須恵器	埴B	B区	粘土塊だまり	口14.0 高4.2 台6.0 台高0.55	良好	青灰	砂多	1/2	製品	—	右	工具ナデ
1000	須恵器	埴B	B区	粘土塊だまり	口13.6 高4.2 台5.8 台高0.5	半生	淡青灰	砂多	1/3	製品	—	右	台工具ナデ
1001	須恵器	埴B	B区	粘土塊だまり	口14.0 高4.95 台6.2 台高0.5	良	茶褐	砂多	3/4	製品	—	右	
1002	須恵器	皿B	B区	粘土塊だまり	口12.8 高2.4 台5.0 台高0.5	堅緻	暗灰	砂多	1/2	置台?	—	右	内面へラ記号「#」 台底部工具痕 台砂付着
1003	須恵器	皿A	B区	粘土塊だまり	口11.7 高2.25 台4.7	堅緻	暗灰	砂多	1/4	置台	—	—	
1004	須恵器	皿A	B区	粘土塊だまり	口11.8 高2.85 底5.0	堅緻	灰	砂多	1/4	製品	—	右	
1005	須恵器	皿A	B区	粘土塊だまり	口13.2 高2.9 台5.8	良好酸化	暗灰 酸化	砂多	1/3	製品	—	右	釜み
1006	須恵器	特殊蓋	B区	粘土塊だまり	口12.6 残高1.9	良好	灰	砂多	口1/3	製品	—	右	
1007	須恵質 陶製品	風字硯	B区	粘土塊だまり	厚0.8 最厚2.55	堅緻	灰	通常	1/3?	製品	—	—	
1008	須恵質 陶製品	特殊陶製品	B区	粘土塊だまり	最厚1.15	良	灰	通常	—	製品	—	—	
1009	須恵器	特殊陶製品	B区	粘土塊だまり	巾19.1 最厚1.2	堅緻	青灰	通常	—	製品	—	—	
1010	須恵器	陶鉢	B区	粘土塊だまり	長4.6 巾3.0 孔径1.1	良好	暗灰	砂多	完形	製品	—	—	
1011	須恵器	陶鉢	B区	粘土塊だまり	長4.6 巾3.1 孔径1.15	堅緻	暗灰	砂多	完形	製品	—	—	
1012	須恵器	陶鉢	B区	粘土塊だまり	長5.2 巾3.7 孔径1.25	良好	青灰	通常	完形	製品	—	—	
1013	須恵器	陶鉢	B区	粘土塊だまり	長5.7 巾3.0 孔径1.1	堅緻	青灰	砂多	完形	製品	—	—	
1014	須恵器	陶鉢	B区	粘土塊だまり	長5.4 巾3.1 孔径1.0	堅緻	暗灰	砂多	完形	製品	—	—	
1015	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	粘土塊だまり	口13.6 高11.0 頸13.4 頸高1.9 胴15.9 底7.6	良好	青灰	通常	2/3	製品	—	右	糸切り→成形台痕 小型
1016	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	粘土塊だまり	口19.6 頸18.8 頸高2.1 胴21.0 残高9.5	良好	青灰	砂多	口1/6	製品	—	右	
1017	須恵器	広口鉢(鉢B)	B区	粘土塊だまり	口23.0 頸20.6 頸高2.1 胴22.6 残高8.7	良	淡青灰	砂多	口1/6	製品	—	右	
1018	須恵器	ナリ鉢(鉢F)	B区	粘土塊だまり	残高4.5 底9.3	良好	青灰	砂多	底完形	製品	—	右	底部孔あけ→成形台痕
1019	須恵器	小甕	B区	粘土塊だまり	口15.8 頸14.4 頸高1.8 胴16.5 残高9.9	良好	青灰	砂多	口1/3	製品	—	右	
1020	須恵器	長胴甕	B区	粘土塊だまり	口18.5 残高16.0	良好	青灰	通常	口1/3	製品	—	左	

10世紀窯道具 (焼台・匣鉢) 観察表

図版	番号	出土地区・種別	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	分類	備考	
135	1069	A区 焼台	う3グリット	口13.3 高3.7 底8.0	堅緻	暗灰	砂多	略完	A①	左	
	1070	A区 焼台	う3グリット	口12.6 高3.0 底7.8	堅緻	暗灰	砂多	完形	A①	右	
	1071	A区 焼台	上層灰原	口11.8 高3.1 底7.6	堅緻	暗灰	砂多	略完	A①	右	
	1072	A区 焼台	上層灰原	口12.3 高4.35 底7.8	半生	灰色	砂多	3/4	A①	—	糸切り
	1073	A区 焼台	う3グリット	口11.0 高2.95 底8.6	堅緻	青灰	砂多	完形	A①	—	
	1074	A区 焼台	上層灰原	口10.5 高2.4 底8.0	堅緻	灰色	砂多	完形	A①	—	
	1075	A区 焼台	1-A号窯 前面土坑② ③、1-B号窯前庭部	口11.4 高2.55 底8.0 孔0.9	良好	茶褐灰	砂多	3/4	A①	—	3方透かし
	1076	A区 焼台	SK4	口16.0 高4.8 底13.0	堅緻	青灰	砂多	完形	A②	—	
	1077	A区 焼台	上層灰原	口7.8 高2.87 底6.2	堅緻	灰	砂多	略完	A②	—	
	1078	A区 焼台	上層灰原	口10.0 高2.8 底6.4	半生	灰色	通常	1/2	A②	—	
	1079	A区 焼台	粘土塊集中2	口9.9 高2.95 底6.8	良好	青灰	砂多	1/2	A②	—	
	1080	A区 焼台	う3グリット	口10.0 高3.42 底6.6	堅緻	灰色	砂多	略完	A②	—	
	1081	A区 焼台	上層灰原	口8.8 高2.8 底5.6	良好	青灰	通常	1/4	A②	—	へラ記号「一」
	1082	A区 焼台	粘土塊集中1	口10.4 高3.5 底8.0	堅緻	青灰	砂多	3/4	A②	—	
	1083	A区 焼台	上層灰原	口12.2 高4.9 底8.0 孔1.15	堅緻	青灰色	砂多	口1/2	A②	—	4方透かし 外面黒灰
	1084	A区 焼台	粘土塊集中1	口13.4 高4.95 底9.6 孔縦0.5:横2.1	堅緻	暗青灰	砂多	1/2	A②	—	右 短穿孔 4方透かし
	1085	A区 焼台	1-B号窯床	口10.3 高3.15 底9.0	良好	青灰	砂多	完形	A②	—	
	1086	A区 焼台	1-A号窯 前面土坑②	口9.4 高4.1 底8.0 孔1.0	堅緻	灰色	砂多	1/2	A②	—	透かしあり
	1087	A区 焼台	粘土塊集中2	口8.9 高2.4 底7.8	良好	青灰	砂多	略完	A③	—	

遺物観察表 (第135,136図)

図版	番号	出土地区・種別	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	分類	備考	備考
135	1088	A区 焼台	上層灰原、1-B号窯埋土	口9.3 高2.4 底8.0	堅緻	青灰色	通常	完形	A③	-	
	1089	A区 焼台	上層灰原	口6.7 高3.35 底5.6	良好	淡青灰	砂多	1/2	B①	-	
	1090	A区 焼台	1-A号窯床、焚口全面土坑・灰層	口8.3 高3.5 底6.8	半生	灰	砂多	略完	B①	-	糸切り
	1091	A区 焼台	SK4	口10.4 高3.92 底9.0	堅緻	青灰	砂多	完形	B①	-	
	1092	A区 焼台	1-A号窯床	口10.0 高3.8 底7.2	生焼	白色	砂多	完形	B①	-	糸切り
	1093	A区 焼台	1-A号窯床	口11.3 高4.28 底8.2 孔0.9	生焼	白色	砂多	完形	B①	-	糸切り 3方透かし
	1094	A区 焼台	1-A号窯床	口12.2 高3.6 底8.4	半生	灰色	砂多	2/3	B①	-	糸切り 4方透かし
	1095	A区 焼台	SK7	口10.8 高3.45 底6.6	良好	青灰	砂多	完形	B①	-	
	1096	A区 焼台	上層灰原	口9.5 高2.0 底7.8	堅緻	青灰	砂多	5/6	B②	-	
	1097	A区 焼台	1-A号窯焚口全面土坑・灰層	口11.8 高3.08 底8.2	半生	灰白	砂多	1/6	B②	-	
	1098	A区 焼台	SK5	口12.9 高3.45 底10.0	堅緻	暗灰	砂多	完形	B②	-	
	1099	A区 焼台	1-B号窯 前面土坑	口9.6 高3.0 底7.8	堅緻	暗灰	砂多	1/2	B①	-	右
	1100	A区 焼台	上層灰原	口8.8 高3.15 底8.2	堅緻	暗灰	砂多	3/8	B①	-	
	1101	A区 焼台	う6グリッド	口9.4 高4.35 底6.6	堅緻	淡青灰	砂多	略完	B①	-	
	1102	A区 焼台	SK4	口10.4 高4.5 底9.0	生焼	灰色	砂多	完形	B①	-	
	1103	A区 焼台	SK4	口10.2 高4.35 底8.6	堅緻	青灰	砂多	略完	B①	-	右
	1104	A区 焼台	粘土塊集中2	口9.8 高3.92 底7.8	堅緻	青灰	砂多	略完	B①	-	
	1105	A区 焼台	粘土塊集中1	口7.8 高2.5 底7.0	良好	青灰	砂多	略完	B③	-	
	1106	A区 焼台	粘土塊集中2	口8.8 高2.6 底8.3	良好	褐灰	砂多	完形	B③	-	
	1107	A区 焼台	粘土塊集中1	口8.2 高5.4 底8.0	堅緻	青白灰	砂多	完形	B③	-	
	1108	A区 焼台	1-A号窯埋土	口8.3 高2.2 底8.6	堅緻	青灰	砂多	略完	B③	-	
1109	A区 焼台	SK4	口9.5 高2.6 底8.0	良好	青灰	砂多	完形	B③	-		
1110	A区 焼台	う3グリッド	口9.4 高2.45 底7.8	堅緻	暗青灰	砂多	完形	B③	-		
1111	A区 焼台	う3グリッド	口10.5 高3.0 底9.4	堅緻	暗青灰	砂多	完形	B③	-		
136	1112	A区 焼台	SK4	口9.0 高4.55 底7.4	堅緻	青灰	砂多	完形	C	-	
	1113	A区 焼台	1-A号窯前庭部灰層埋土、上層灰原	口11.0 高5.28 底9.0 孔0.8	堅緻	茶褐灰	砂多	7/8	C	-	3方透かし
	1114	A区 焼台	う6グリッド	口8.2 高4.5 底8.0	堅緻	青灰	砂多	略完	C	-	
	1115	A区 焼台	1-A号窯床	口12.0 高5.35 底10.0	良好	暗灰	砂多	1/2	C	-	4方透かし
	1116	A区 焼台	1-A号窯埋土、粘土塊集中1	口7.6 高3.08 底8.7	堅緻	灰	砂多	3/4	C	-	
	1117	A区 焼台	粘土塊集中1	口9.3 高3.5 底9.2	堅緻	灰	砂多	略完	C	-	
	1118	A区 焼台	上層灰原	口7.9 高3.38 底5.8	堅緻	灰	砂多	1/2	D①	-	
	1119	A区 焼台	SK6	口9.7 高5.6 底6.4	良好	青灰	砂多	略完	D①	-	
	1120	A区 焼台	粘土塊集中2	口10.8 高5.4 底8.0	良好	青灰	砂多	1/4	D①	-	
	1121	A区 焼台	2号窯埋土	口11.8 高4.2 底8.7	良好	暗灰	砂多	1/2	D①	-	右
	1122	A区 焼台	上層灰原、1-A号窯前面土坑②	口11.4 高3.85 底8.0	良	暗灰	砂多	1/2	D①	-	右
	1123	B区 焼台	8号窯埋土	口8.3 高3.5 底3.4	良	青灰	砂多	1/2	A①	-	
	1124	B区 焼台	粘土塊だまり	口8.7 高3.05 底5.6	良好	青灰	砂多	完形	A①	-	右 底部糸切り
	1125	B区 焼台	灰原	口9.1 高2.6 底6.0	良	暗灰	砂多	7/8	A①	-	右
	1126	B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層	口9.4 高2.6 底7.0	良	暗灰	砂多	略完	A①	-	
	1127	B区 焼台	粘土塊だまり、7号窯埋土	口10.2 高2.88 底7.2	堅緻	青灰	砂多	略完	A①	-	糸切り
	1128	B区 焼台	灰原	口11.2 高3.5 底5.8	良	青灰	砂多	3/4	A①	-	右
	1129	B区 焼台	い8グリッド	口12.1 高3.78 底9.0 孔1.2	良好	暗灰	砂多	5/8	A①	-	右 3方透かし
	1130	B区 焼台	SK3、灰原	口12.0 高3.38 底6.8	良	暗灰	砂多	3/4	A①	-	右
	1131	B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層灰原	口10.7 高3.48 底6.2	堅緻	青灰	砂多	1/2	A①	-	右
	1132	B区 焼台	粘土塊だまり	口12.8 高3.0 底8.6	堅緻	暗灰	砂多	7/8	A①	-	右 糸切り
	1133	B区 焼台	粘土塊だまり	口11.6 高4.8 底7.2	良好	青灰	砂多	1/3	A①	-	
	1134	B区 焼台	灰原	口15.4 高4.7 底10.2 孔1.0	良	青灰	砂多	1/2	A①	-	右 4方透かし
	1135	B区 焼台	灰原	口9.5 高3.7 底5.0	堅緻	青灰	砂多	1/2	A②	-	
1136	B区 焼台	粘土塊だまり	口9.3 高2.9 底6.3	堅緻	青灰	砂多	1/2	A②	-	右	
1137	B区 焼台	灰原	口9.5 高3.5 底5.2	良	灰色	砂多	1/2	A②	-	右?	
1138	B区 焼台	灰原	口12.0 高4.0 底9.4	良好	灰色	砂多	1/3	A②	-		
1139	B区 焼台	灰原、粘土塊だまり	口12.8 高3.2 底8.0	良好	青灰	砂多	1/2	A②	-		
1140	B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層	口10.8 高2.25 底8.6	良好	青灰	砂多	1/2	B②	-		
1141	B区 焼台	う7グリッド	口9.7 高2.8 底8.0	良好	灰	砂多	7/8	B②	-	右	
1142	B区 焼台	7号窯床	口9.5 高2.6 底7.6	良好	青灰	砂多	1/2	B①	-	糸切り	
1143	B区 焼台	灰原	口8.2 高3.0 底7.0	堅緻	灰	砂多	略完	B①	-	3方透かし	
1144	B区 焼台	7号窯床	口10.3 高3.0 底6.8	堅緻	青灰	砂多	7/8	B①	-	糸切り	
1145	B区 焼台	灰原	口7.1 高3.2 底6.0	堅緻	青灰	砂多	1/6	B①	-	小型	

図版	番号	出土地区・種別	出土地点	法量	焼成	焼色 (色調)	胎土	完存	分類	方位	備考
136	1146	B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層 灰原	口7.4 高3.35 底6.3	堅緻	青灰	砂多	略完	B①	右	
	1147	B区 焼台	灰原	口11.2 高3.1 底10.0	堅緻	暗灰	砂多	1/8	B①	右	
	1148	B区 焼台	7号窯埋土	口10.5 高3.9 底8.2	良好	青灰	砂多	7/8	B①	—	
	1149	B区 焼台	灰原	口10.8 高4.0 底7.2	良	暗灰	砂多	1/4	B①	右	
	1150	B区 焼台	灰原	口9.6 高2.6 底8.4	堅緻	暗灰	砂多	7/8	B①	—	
	1151	B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層 灰原	口8.4 高3.4 底8.0	堅緻	暗灰	砂多	1/2	B①	右	
	1152	B区 焼台	灰原	口9.6 高3.85 底6.0	堅緻	暗灰	砂多	1/2	B①	右	
	1153	B区 焼台	灰原、7号窯埋土	口10.7 高3.0 底8.2	堅緻	暗茶褐	砂多	1/2	B①	—	
	1154	B区 焼台	灰原	口11.3 高3.58 底9.2	良	青灰	砂多	1/2	B①	右	
	1155	B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層、 粘土塊だまり	口10.4 高3.2 底9.0	良好	青灰	通常	3/4	B①	—	
	1156	B区 焼台	灰原	口10.0 高4.4 底8.7	堅緻	灰	砂多	略完	B①	—	
	1157	B区 焼台	灰原	口10.3 高3.15 底9.0	良好	暗灰	砂多	1/3	B①	—	
	1158	B区 焼台	粘土塊だまり、7号窯	口10.0 高3.35 底9.2	良好 酸化	暗褐	砂多	1/2	B①	右	
	137	1159	B区 焼台	灰原	口11.0 高3.2 底8.6	良	青灰	砂多	1/6	B①	右
1160		B区 焼台	灰原	口13.8 高3.82 底9.4	良	暗灰	砂多	1/4	B①	右	
1161		B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層 灰原	口13.9 高3.88 底11.0 孔1.1	良好	青灰	砂多	2/3	B①	—	4方透かし
1162		B区 焼台	灰原	口9.9 高2.7 底8.6	良	青灰	砂多	略完	B③	—	
1163		B区 焼台	粘土塊だまり	口9.6 高2.75 底7.4	良好	青灰	砂多	略完	B③	右	
1164		B区 焼台	7号窯埋土、粘土塊だまり 灰原	口10.1 高2.58 底8.9	堅緻	暗灰	砂多	5/8	B③	—	
1165		B区 焼台	灰原	口8.0 高4.3 底8.4	堅緻	青灰	砂多	2/3	C	—	
1166		B区 焼台	粘土塊だまり	口6.3 高3.5 底7.0	堅緻	青灰	砂多	1/2	C	右	
1167		B区 焼台	SK4	口8.0 高4.0 底7.6	堅緻	青灰	砂多	略完	C	右	
1168		B区 焼台	い9グリット	口9.5 高5.2 底10.0	堅緻	青灰	砂多	完形	C	右	
1169		B区 焼台	灰原	口8.3 高4.5 底8.7	良	白灰	砂多	1/4	C	—	
1170		B区 焼台	7号窯焚口全面土坑・灰層	口9.7 高4.3 底8.2 孔0.5~0.8	良	青灰	砂多	1/2	D①	右	3方透かし 2タイプ穿孔
1171		B区 焼台	灰原、粘土塊だまり	口10.7 高5.4 底8.6 孔縦0.2:横1.15	良好	青灰	砂多	3/4	D①	—	3方透かし
1172		B区 焼台	灰原	口10.3 高4.08 底8.6	堅緻	灰	砂多	1/2	D①	右	
1173		B区 焼台	う7グリッド	口10.1 高4.18 底8.5	堅緻	灰	砂多	完形	D①	右	
1174		B区 焼台	粘土塊だまり、 7号窯焚口全面土坑・灰層	口11.5 高4.2 底6.8	半生	灰	通常	1/2	D②	右	
1175		B区 焼台	粘土塊だまり、 7号窯焚口全面土坑・灰層	口11.9 高4.25 底8.9	良	青灰	砂多	略完	D②	右	
1176		B区 焼台	7号窯燃焼部	口15.2 高6.0 底10.4	良	青灰	砂多	3/4	D②	右	
1177		B区 焼台	灰原	口13.5 高6.85 底11.0	良	暗灰	砂多	1/5	D②	—	
1178		A区 匣鉢	上層灰原	口13.6 高8.4	堅緻	暗灰	砂多	口1/4	—	—	
1179		B区 匣鉢	粘土塊だまり、灰原	口14.8 高9.1 底12.6	良好	青灰	砂多	1/4	—	—	
1180	B区 匣鉢	粘土塊だまり	口13.0 高9.8 底13.6	良好	青灰	砂多	1/2	—	右?	糸切り	
1181	B区 匣鉢	粘土塊だまり	口12.8 高9.8	良	灰	砂多	1/3	—	—	左	
1182	B区 匣鉢	粘土塊だまり	残高8.15 底13.8	良好	青灰	砂多	底1/3	—	—	右	
1183	B区 匣鉢	粘土塊だまり	口14.4 高10.7 底13.2	半生	白	砂多	1/2	—	—		
1184	B区 匣鉢	粘土塊だまり	口15.4 高10.2 底13.5	不良	褐色	砂多	1/3	—	—	右 土師質	
1185	B区 匣鉢	7号窯焚口全面土坑・灰層	底14.2 残高6.9	堅緻 酸化	暗茶灰	砂多	底1/4	—	—		

狐山遺跡発掘調査

第1章 遺跡の位置と環境

1. 月津台地と遺跡の立地

小松市南部地域は、地形的特徴において概ね3区分することができ、遺跡の分布はこの地理的条件に適応する形で展開している。まず、白山連峰の前山地帯から続く標高20～50mの低丘陵地には、戸津・二ツ梨・那谷金毘羅山古窯跡などをはじめとした日本海側有数の規模を誇る南加賀古窯跡がある。また、加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）に囲まれた標高10～20mの洪積台地には、縄文時代から中世に至る集落跡や、古墳時代後期の古墳がみられる。そして残る地域は、加賀三湖各々をとりまいて形成している潟埋積平野で、水田地帯となっている。

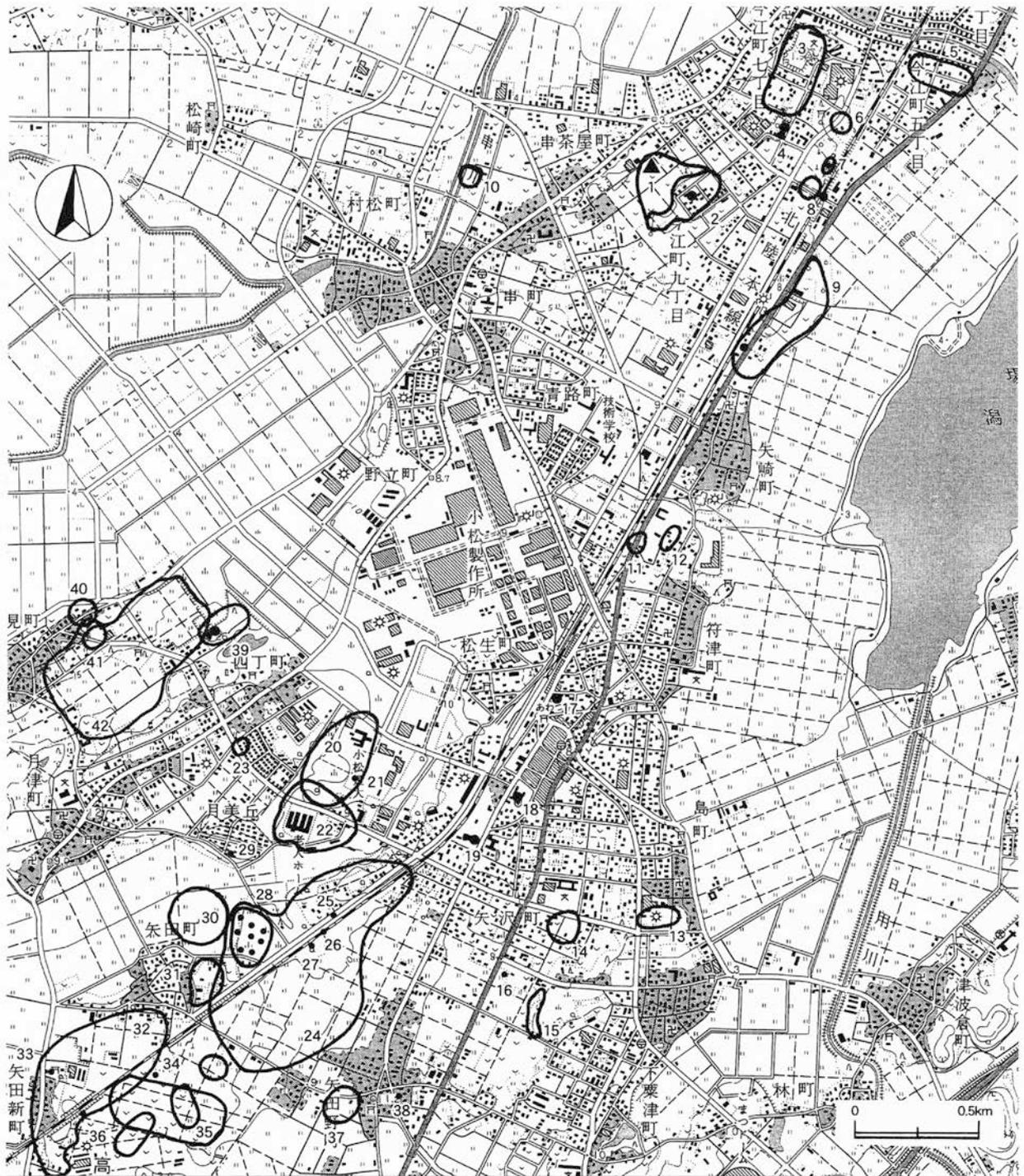
本遺跡が所在する月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋め立て、農地開発等によって、現在では殆ど旧地形の把握が困難な状況にある。樫田氏の作成した明治42年測量の50,000分の1の測量図をもとに往時の地形を読み取った図を参照すると、本遺跡は複数の小頂部をもつ起伏の激しい地形形状の中に位置している月津台地の最北端にあたる。また本遺跡は、東側に現在は消滅してしまった狐山古墳、西側には水田地帯がひろがることから、小頂部から今江潟に向かって傾斜する箇所位置することが理解できる。

2. 周辺の遺跡

中・南部地域の本遺跡周辺を中心に遺跡の展開のあり方を追ってみたい。

この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡(20)出土の石槍で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。その他、旧石器時代の可能性がある彫器に分類されるものが矢田野エジリ古墳(19)の周溝内よりみつまっている。集落としての明確な展開がみられるのは、三湖が入り江の状態にあったと考えられる縄文時代前期と思われるが、木場潟東南岸丘陵縁に位置する大谷山貝塚がみられるもののいまだ木場潟西岸台地上においては発見されておらず、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文中期になると、月津台地上を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡(20)、念仏林南遺跡(22)、今江五丁目遺跡[2000報告](6)で集落跡がみつまっているのをはじめとし、台地上で中期中葉～後葉にかけての土器が広く採取されている。また、図には記載していないが、白のほぞ古墳の東側に隣接する串町地内所在串町遺跡[2002報告]では、縄文時代晩期 長竹式の浅鉢がほぼ完形で出土しており、今後、この周辺地域の調査成果が期待される。弥生時代前期～後期にかけては低地部に移動しているものと思われ、島遺跡[1998報告]にて弥生時代中期の遺物がみつまっているのみである。次に集落が展開するのは、弥生時代末～古墳時代初頭の月形式である。念仏林南遺跡、額見町西遺跡では良好な竪穴式住居跡が検出しており、念仏林南遺跡では県内の出土例も少ない山陰系甕が出土、額見町西遺跡では、鉄製品・管玉製作関連遺物が出土している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地上を占有している。月津台地上に展開する古墳は、距離的に梯川流域以北の丘陵を舞台とする能美古墳群と江沼盆地を取り巻く丘陵・台地を舞台とした江沼古墳群の中間的位置に属し、この台地上の古墳群は三湖台古墳群と汎称され、埴輪祭祀を取り入れていることから、江沼古墳群の1ブロックとする考えが主流である。詳しくは矢田野エジリ古墳を参照されたい。三湖台古墳群は、多くが開発によって削平・消滅しており、その内容等は、能美・江沼両郡誌などにおける、破壊時あるいは盗難時の伝聞の記録におうところが大きい。当遺跡に近接する狐山古墳は、御幸塚古墳(4)・土百古墳(8)・矢崎B古墳(9)を含めた1グループに位置付けられている。狐山古墳は、円墳で、埋葬施設は切石組合石棺ともいわれるが詳細は不明である。なお、三湖台古墳群は、後期古墳以外の展開は確認されていない。古墳後期からの集落遺跡では、月津と矢田野とを分断して柴山潟に通じる大きな谷平野の周囲に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡(24)・矢田B遺跡(31)・刀何理遺跡(47)などが群集し、概期の古墳分布との重なりをみせている。飛鳥・奈良時代になると木場潟西岸台地上では、狐山遺跡(1)、今江五丁目遺跡・薬師遺跡(9)等、柴山潟に面した箇所、馬渡川から北側には古代末までの複合遺跡である額見町遺跡(42)、馬渡川より南側には矢田新遺跡(32)、等がみられ、月津台地上で広域に分布がみられる。

註 樫田 誠 1992 「第Ⅱ章 遺跡の環境」【矢田野エジリ古墳発掘調査報告書】
引用参考文献 1. 上野与一 1965 「第二篇 考古篇」【小松市史】 第4巻



※ 石川県遺跡地図(1992)に一部加筆

遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1. 狐山遺跡	古墳	15. 下粟津横穴	古墳	29. 念仏塚古墳	古墳
2. 狐山古墳	古墳	16. 鳥経塚	不詳	30. 矢田A遺跡	縄文
3. 御幸塚城遺跡	不詳	17. 石山古墳	古墳後期	31. 矢田B遺跡	古墳
4. 御幸塚古墳	古墳	18. 養輪塚古墳	古墳後期	32. 矢田新遺跡	奈良後期・中世
5. 五郎座貝塚	縄文	19. 矢田野エジリ古墳	古墳後期	33. 丸山古墳	古墳
6. 今江五丁目遺跡	縄文・奈良	20. 念仏林遺跡	縄文後期～古墳	34. 狐森塚古墳	古墳
7. 大領遺跡	奈良・平安	21. 念仏林古墳	古墳後期	35. 刀何理遺跡	古墳後期・中世
8. 土百遺跡	縄文	22. 念仏林南遺跡	縄文中期～古墳	36. 無名古墳群	古墳
9. 薬師遺跡	縄文・奈良	23. 月津新遺跡	縄文	37. 矢田野神社前遺跡	平安
10. 串台竃跡	安土・桃山	24. 矢田野遺跡	古墳後期	38. 中村古墳	古墳
11. 符津B遺跡	縄文	25. 百人塚古墳	古墳	39. 白のほぞ古墳	古墳
12. 符津A遺跡	縄文	26. 矢田野2号墳	古墳	40. 額見神社前A遺跡	弥生～古墳
13. 島遺跡	古墳～奈良	27. 矢田野1号墳	古墳	41. 額見神社前B遺跡	縄文
14. 島B遺跡	奈良・平安	28. 借屋1～8号墳	古墳後期	42. 額見町遺跡	飛鳥・奈良～中世

第1図 周辺の遺跡分布 (S=1/25,000)

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至るまでの経緯

市内今江町在住の小坂茂則、扶見両氏は、串茶屋町丙56番3に住宅建設を計画し、平成15年7月19日付けで埋蔵文化財の取り扱いについて協議書を提出された。これを受けて、小松市教育委員会は当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「狐山遺跡」の範囲に含まれることにより、その旨と事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の状況等の確認が必要との旨を、同年7月10日に回答した。早急に試掘調査の実施依頼を受け、同年7月16日に国庫補助事業として試掘調査を実施した。同調査は、人力による掘削で予定地内に任意に2ヶ所の試掘溝を設けて行われた。結果、両トレンチからは遺物包含層を確認、須恵器の出土がみられ、埋蔵文化財包蔵地「狐山遺跡」の域内に含まれると判断され、事業者である小坂茂則、扶見両氏に平成15年7月18日付けでこの旨を報告した。その後、平成15年7月31日、事業者より文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘の届出が県教育委員会宛に提出され、8月8日付けで県教育委員会より事業者に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知がなされた。

宅地の建設工事は、表土を撤去し客土にて造成する方法であるため、遺物包含層に影響が及ぶものと判断され、現状保存は不可能であり、住宅建設予定地全域を対象に発掘調査を実施することになる。

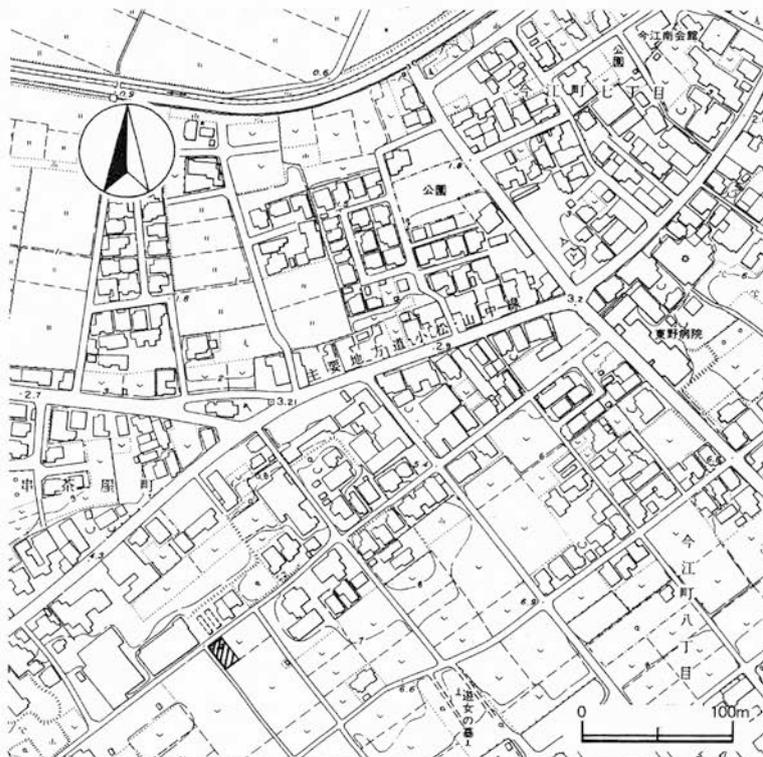
小松市教育委員会 教育長宛に発掘調査の実施依頼が提出され、平成15年8月22日に事業者と市教育委員会との間で、埋蔵文化財の取り扱い・発掘調査終了後の措置等基本事項について協定書が交わされ、発掘調査を実施するに至った。

埋蔵文化財発掘調査は、平成15年度国庫補助事業である市内遺跡発掘調査事業として、平成15年9月1日から開始し、天候にも恵まれ同年9月18日に終了した。

第2節 発掘調査の経過

平成15年

- 9月1日 作業開始。調査区の掘削域の設定及び発掘器材搬入作業。
- 9月2日 重機による表土除去作業。
- 9月3日、4日 遺構検出作業及び掘削作業。予想以上に遺構密度が希薄であること判明。2日間にて遺構の全体把握は終了する。
- 9月5日 レベル移動を行い、調査区に標高地を設ける。SB01・土坑SK01、SK02、SK03土層断面図作成。
- 9月8日 遺構掘削作業。及び調査区壁精査。
- 9月9日～11日 調査区土層断面図及びSB01エレベーション図、光波トランシットにより2.5mの方眼メッシュを設定し、1/20の全体平面図作成。
- 9月12日 器材の搬出作業。
- 9月17・18日 重機による調査区埋め戻し作業。



第2図 調査位置図 (S=1/5,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査区の状況と概要

調査区は、狐塚と称された狐山古墳が存する小丘から続く緩やかな尾根上に位置し、緩やかな鞍部にあたる。第3図は地山検出面のコンター図である。調査区北側はもっとも高く、標高地で6.20mをはかる。南に向かい低く標高5.6mをはかり、比高差は60cmである。雨天の際には南側に水が溜まる状況であった。現況からも旧地形に即して土は堆積しているようである。調査区南半分には、遺物包含層、月津台地上でみられる谷部に堆積する黒色砂壤土が多くみられ、鞍部にさしかかった状況が見受けられた。表土除去の際には3層上面で止め、残りは半月鍬による掘削を行ったが、実際のところ遺物包含層に含有する遺物量は希少であった。調査区内において、発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑3基、時期不詳のピットと少なく、殆ど切り合いが認められないことから、極めて遺構密度は低いと理解できよう。

第2節 遺構

1. SB01 (第4図)

調査区内東側に位置する。運良く調査区内で全柱穴が検出された。3間×3間の側柱建物跡で、主軸はほぼ北-南をとる。規模は桁2.5m×梁1.8mを測る。桁の柱間寸法は70~90cm内に収まり、梁の柱間寸法は60~70cm内に収まる。柱穴の形状は円形であり、15cm~20cm内に収まる比較的小さいものと思われる。この建物は、柱穴掘削途中で建物になることがわかり柱穴の土層断面図全て図化はできず、図化できたもののみを第4図に掲載している。断面図でみるように比較的20cm程度のものは、地山粒が多く含有する人為的埋土がみられる掘り方をもち、それを切り込む10cm程度の柱根埋土がみられる。また、柱穴の下底面に硬化面が確認できたことにより柱根範囲は平面でも確認することができた。15cm程度の小さいものは、断面に掘り方埋土は確認されず柱根埋土のみであった。断面を確認できたものは、基本的に柱を抜き取らずそのまま放置したものである。

出土遺物は、柱穴内からは土師器屑しかみられず、詳細な時期は不明である。

2. SK01 (第5図)

調査区の北西隅に位置する。調査区内では半分しか検出されなかった。規模は、南北80cm×東西65cm(検出範囲)を測る。調査区内ではもっとも深く、箱掘りである。調査区の壁際に位置するため、表土からの土層断面を作成した。土坑の堆積土は3層からであり、基本的に地山ブロックを含有する黒褐色砂壤土と地山ブロック主体のである。遺物は自然礫1つのみで4層内の出土である。よって、詳細な時期は不明である。

3. SK02 (第5図)

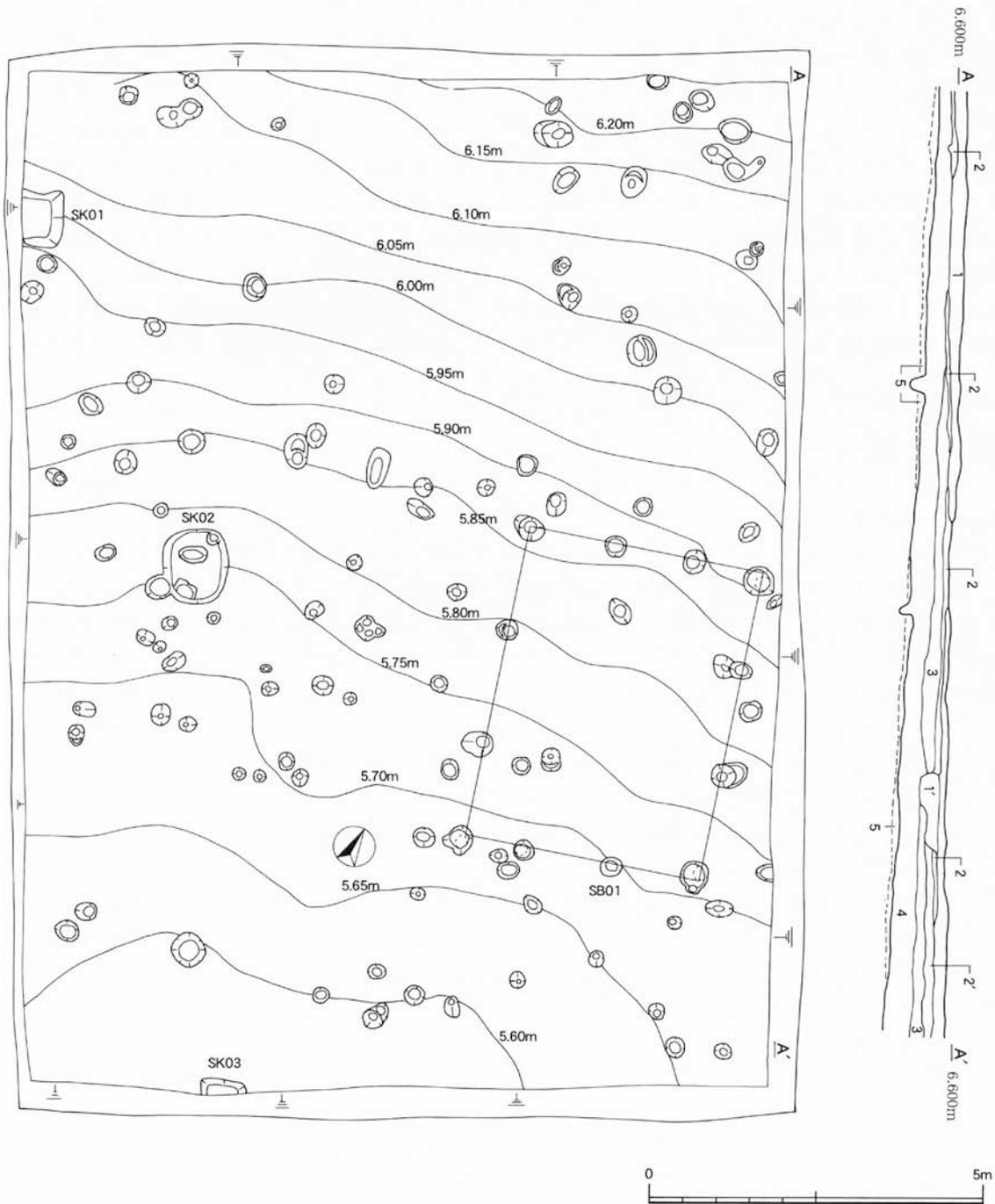
調査区西隅に位置する。全形を確認することができた。規模は長軸110cm×98cmを測る。検出時には浅く、深さは15~20cm程度である。底面は水平ではなく、部分的に窪みがみられる。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明である。

4. SK03 (第5図)

調査区南隅に位置する。調査区内で検出されたのは半分以下と思われる。規模は東西65cm×南北25cm(検出範囲)を測る。調査区南壁での検出であったため、SK01同様、表土からの土層断面図を作成している。遺構埋土は5層のみで基本的に黒褐色砂壤土を呈す。20cm程度の浅い土坑である。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第3節 遺物 (第6図)

出土した遺物は、土師器10点・須恵器7点であり、図化可能であるもののみ掲載した。なお、1・2・8は調査区隣の畑からの表採遺物であり、3~7は試掘調査の際の包含層遺物である。遺構からの出土は、ピットのみで、細片である。ただ情報としては、外面はハケ調整、内面はケズリ調整ということのみである。1は坏蓋で坏Gに該当する。口縁残存率は1/18と少なく、つまみ部分は剥離している。復元口径は約11cmである。2は坏身の底部付近の破片である。おそらく口径11cm台であろう。なお、土器は立ち上がりにかかる接合部で剥離したものと考えられる。3~7はいずれも5cm程度の破片である。3は大型貯蔵具甕の頸部の一部と思われ、波状文が施されている。5~7は甕の体



- 1. 10YR3/2 黒褐色砂壤土 (耕作土)
- 1'. 10YR2/2~2/3 黒褐色砂壤土 1層に比しやや明るみを増す。軟質。(耕作土)
- 2. 10YR2/2~2/3 黒褐色砂壤土 1層に比し、砂気が多く、しまり良し。
- 2'. 10YR2/2~2/3 黒褐色砂壤土 2層に比し、黒味を帯びる。2~3層への中間残移層。
- 3. 10YR2/2 黒褐色砂壤土 5mm程度のカーボン含有。(土器含有層)
- 4. 10YR2/1 黒色砂壤土 カーボン、地山粒含有。しまり悪く、軟質。
- 5. 10YR3/3 暗褐色砂壤~埴壤土 しまり良し。(地山面)

第3図 狐山遺跡 全体図及び調査区土層断面図 (S=1/100)

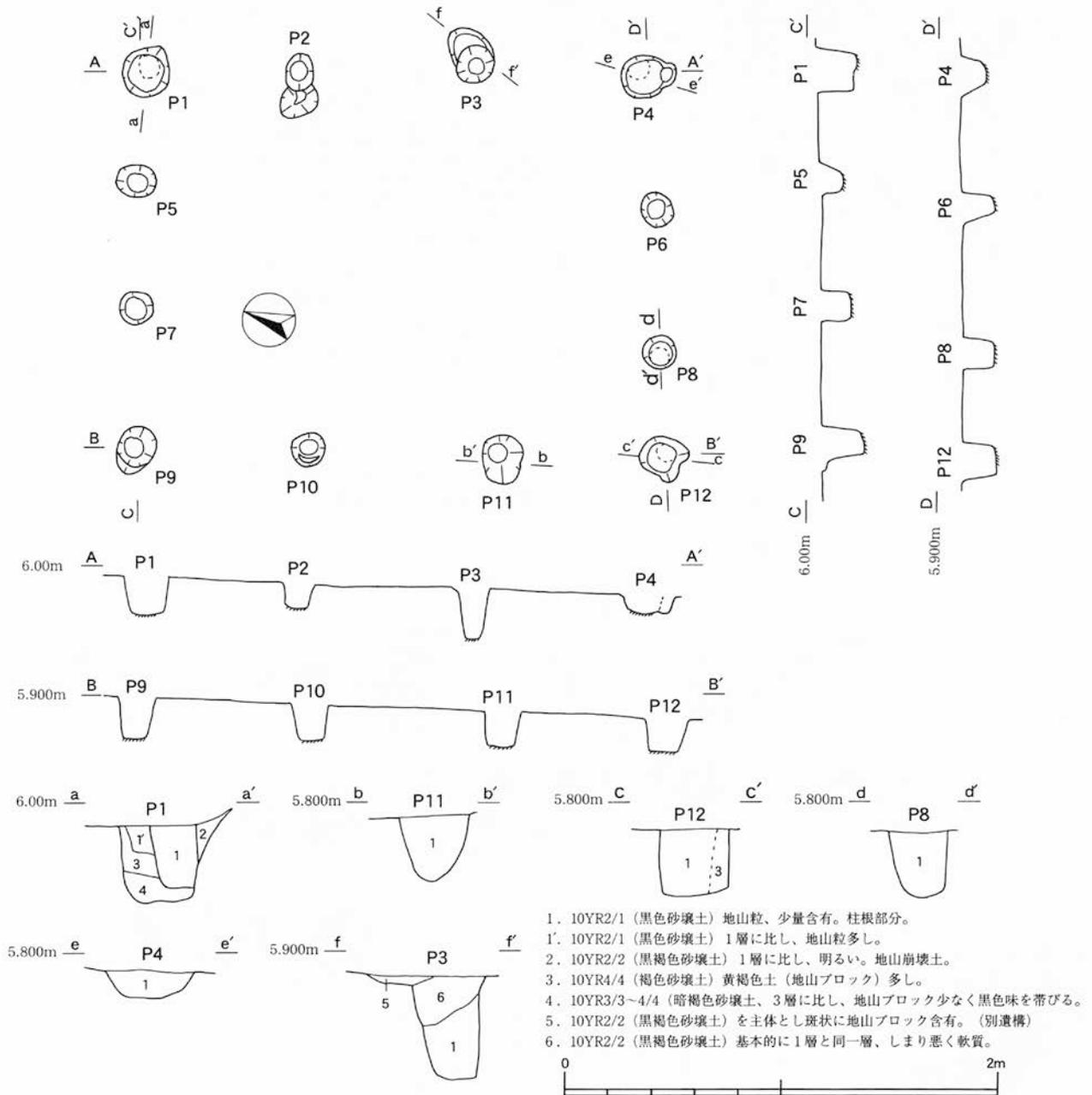
部破片と思われ、6、7は接点はないものの同一個体の可能性が高い。内面には同心円当て具痕、外面にはタタキ後カキ目がみられる。8は土師器で小甕の口縁部破片であろう。

総じて、1、2の2点の時期は望月氏のご教授によると、Ⅱ1（金比羅山7-2号窯）併行、7世紀後半に位置付けられ南加賀産であろうとのことで、それ以外の土器に関しても、大きく時期は前後しないものとのことである。

第4節 遺跡の時期の評価

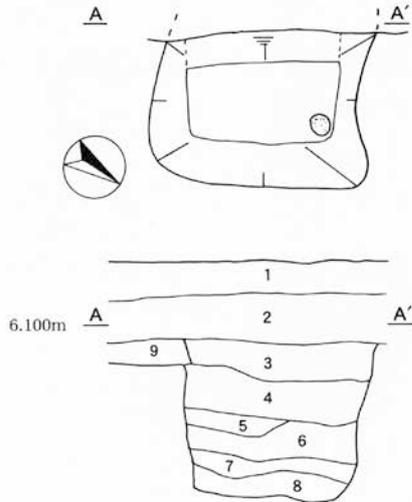
以上、遺構・遺物の検討をしてきたわけだが、建物跡及び土坑に伴う遺物はないものの、包含層ないし表採遺物はほぼ単時期であり、これらの遺物が遺構の時期を示しているものと思われる。また、この周囲の畑地からは、より多く遺物の表採がみられ、当調査区は、地形的にも鞍部にかかることから、当調査区の北東側に主体である集落は展開しているものと思われる。

SB01

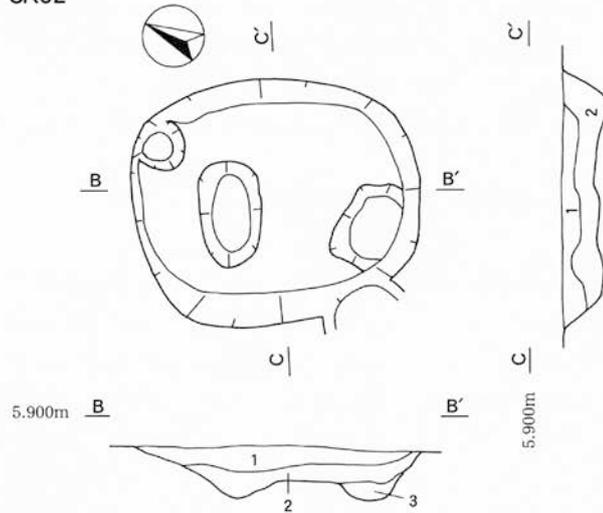


第4図 SB01 平面及び断面図 (平面・エレベ図・S=1/60, 土層断面図・S=1/30)

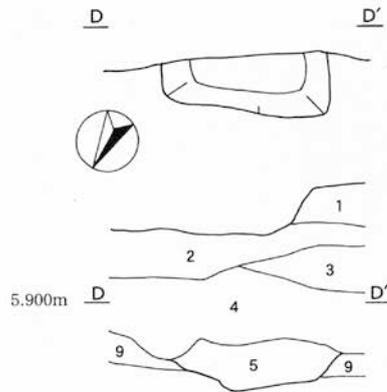
SK01



SK02



SK03



SK01

1. 10YR2/2 (黒褐色砂壤土) 耕作土。
2. 10YR2/2~2/3 (黒褐色砂壤土) 1層に比し、しまり良い。
3. 10YR2/1 (黒色砂壤土) 黄褐色土(地山ブロック)少量含有。
4. 10YR3/3 (暗褐色砂壤土) 3層に比し、地山ブロック、黒色土ブロック含有。
5. 10YR2/3 (黒褐色砂壤土) を主体とし斑状に地山ブロック含有。
6. 10YR4/6 (褐色砂壤土) 粘性を帯び地山土主体。
7. 10YR2/2 (黒褐色砂壤土) 4層と含有物は類似。
8. 6層に類似。6層に比し軟質。
9. 10YR3/3 (暗褐色砂壤~埴壤土) 地山面。

SK02

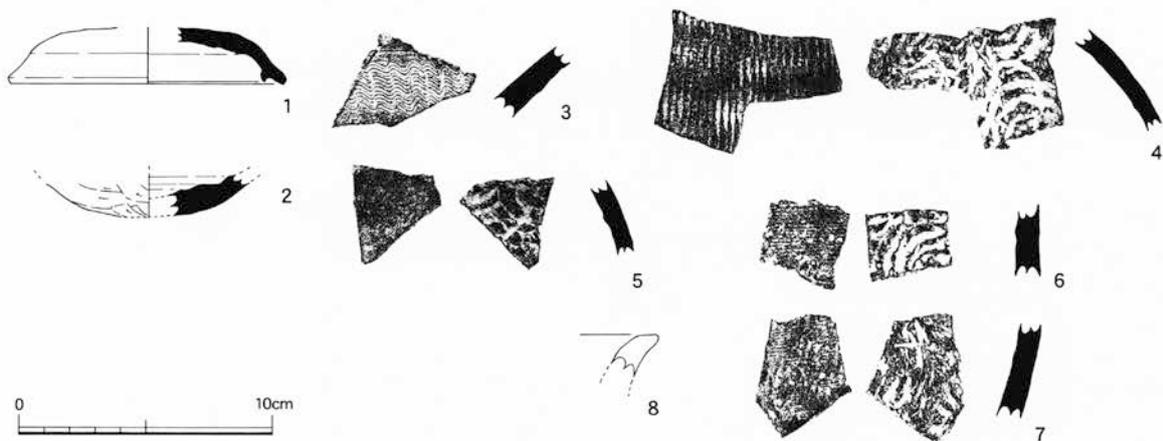
1. 10YR2/1 (黒色砂壤土) 地山粒少量含有。
2. 10YR3/3~2/3 (黒褐色~暗褐色砂壤土) 1層に比し明るい。
3. 10YR4/4 (褐色埴壤土) 暗褐色土ブロック少量含有。

SK03

- 1、2、9はSK01と同一層
3. 10YR2/2 (黒色砂壤土) 極僅かに地山粒含有。
4. 10YR2/1 (黒色砂壤土) 3層に比し、地山粒多し。
5. 10YR2/1~2/2 (黒色~黒褐色砂壤土) 1cm程度の地山ブロック少量含有 (SK03覆土)。



第5図 土坑 平面及び断面図 (S=1/30)



第6図 狐山遺跡 出土遺物 (S=1/3)



二ツ梨豆岡向山窯跡
西側斜面遠景
航空写真



A地区（西側斜面）
全景
航空写真



2号窯（左）と1-A号窯（右）の位置



1-A号窯（左）と1-B号窯（右）の位置



2号窯 全景



2号窯 天井残存状況と埋土状況



2号窯 焚口から前庭部への被熱層



2号窯 全景アップ



2号窯 奥壁側1次床状況



2号窯 焼成部地山掘削痕



1-A号窯 全景



1-A号窯 焚口燃焼部及び焼成部口残存状況



1-A号窯 右側壁転換点並びに修復痕跡



1-A号窯 奥壁から



1-A号窯 焼成部口上位の修復痕跡



1-A号窯 舟底状ビット



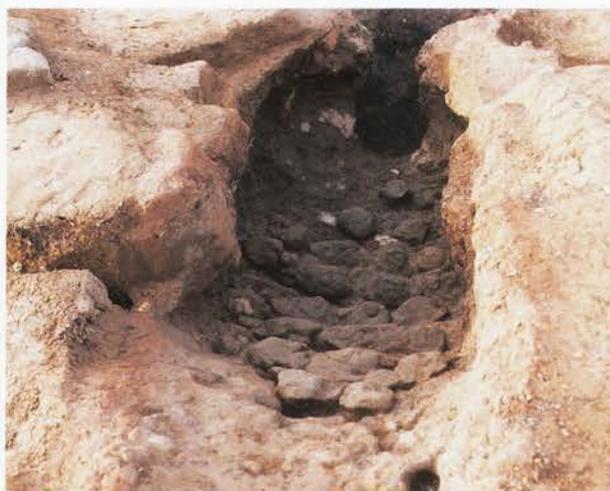
1-A号窯 焼成部断ち割り



1-A号窯 焼成部口断ち割り



1-B号窯 全景



1-B号窯 窯尻より



1-B号窯 傾斜燃焼部と焚口前面土坑



1-B号窯 埋土状況



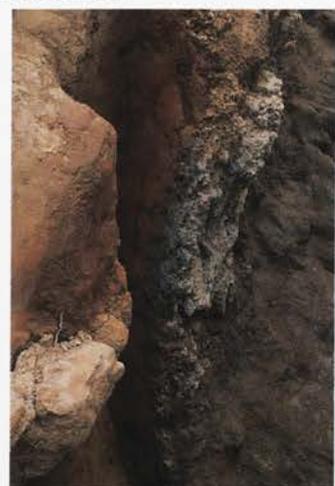
1-B号窯 焼成部口残存状況



1-B号窯 焚口前面土坑覆土



1-B号窯 焼成部口断ち割り



1-B号窯 焼成部修復断ち割り



B地区(北側斜面)遠景 航空写真



B地区南東側1/2区域遠景(垂直)



8-II号窯2次床(左)と7号窯(右)の位置



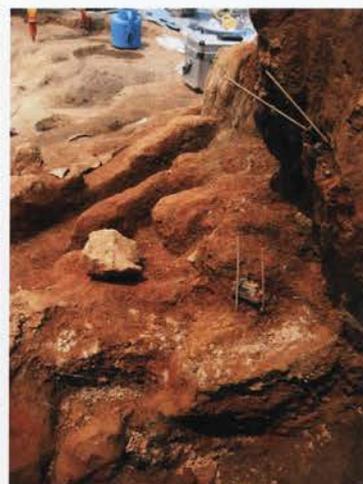
8-II号窯2次床全景



8-II号窯 天井残存状況及び埋土



8-II号窯 煙道残存状況



8-II号窯 燃焼部仮設天井崩落土検出状況



8-II号窯 煙道



8-II号窯 燃焼部 仮設天井崩落土検出アップ(右)



8-II号窯 燃成部の焼成部口側修復痕跡



8-II号窯 燃成部口 仮設天井架構 構築材(左) 検出状況



8-II号窯 2次床 床下断ち割り



8-II号窯 奥壁側の地山掘削痕



8-II号窯1次床 全景



8-I号窯2次床 全景



8-I号窯1次床 全景



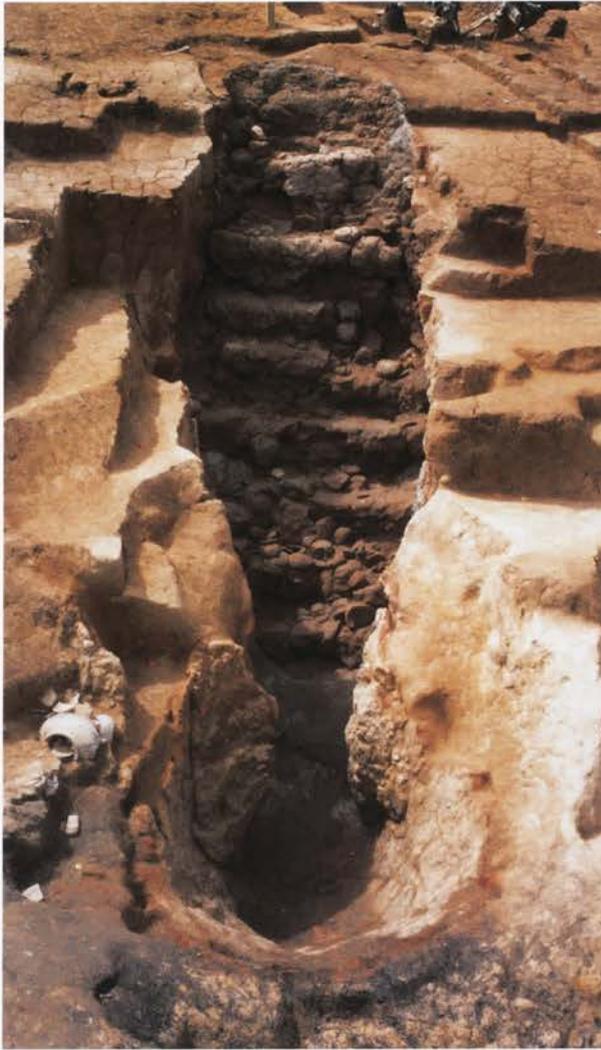
8-II号窯1次床 奥壁 置台検出状況及び奥壁掘削痕跡



8-I号窯1次床 舟底状ビット



8-I号窯1次床 斜め写真（8-II号窯と8-I号窯の側壁差違状況）



7号窯 全景



7号窯 窯尻より



右側位置より

左側位置より



7号窯 焼成部
段構築状況



7号窯 焚口燃焼部 (傾斜燃焼部構造の状況)



7号窯
焼成部口
検出状況



7号窯 天井残存状況



7号窯 天井修復痕跡アップ



7号窯 焼成部焼成部口付近の修復痕跡 (右)



7号窯 焼成部口 断ち割り



焼成部 焼成部口付近の修復痕跡 (左)



7号窯 舟底状ピット (焼成部床側)



B地区 テラス及び灰原検出状況



B地区 灰原検出状況



B地区 灰原層除去後のテラス状況



B地区 灰原お7-Bセクション Hライン アップ



C地区 (南東側斜面) 遠景 航空写真



C地区 遠景 航空写真 (垂直) 左: 9号窯 右: 10号窯



9号窯 焚口より



9号窯 窯尻より



9号窯 焚口・燃焼部



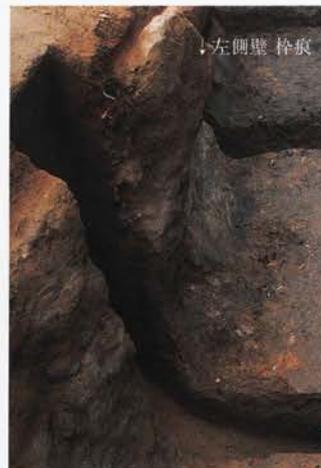
9号窯 床直上炭層検出状況



9号窯 床直上炭層アップ



9号窯 埋土



9号窯 焼成部口の粹痕跡状況





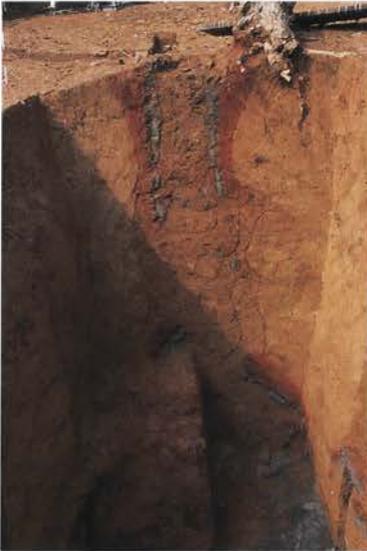
9号窯 床断ち割り 1次床検出状況



9号窯 後背部テラス



▲10号窯 全景



10号窯 煙道残存状況（断面）



10号窯 遺物除去後 窯尻より



10号窯 埋土



10号窯 焼成部口の被熱状況



A地区出土 8世紀須恵器



B地区出土 8世紀須恵器



C地区出土 8世紀須恵器



A地区出土 10世紀須恵器



B地区出土 10世紀須恵器



C地区出土 8世紀土師器（赤彩・内黒食繕具、煮炊具）



B地区出土 窯道具（貯蔵具専用焼台・焼成粘土塊・匣鉢）



496外面



497外面



500外面



496側・内面



497側・内面



500内面溶着

A地区 2号窯床 出土鷗尾鱗部破片



499断面



499内面

A地区 2号窯床 出土鷗尾腹部頂部片
(粘土積みによる先端のしぼり痕)

B地区 8-II ▶
号窯 2次床
出土鷗尾
鱗部破片



501外面

B地区 8-II 号窯
2次床出土鷗尾
腹部片？
▼



503内面



982上・下字

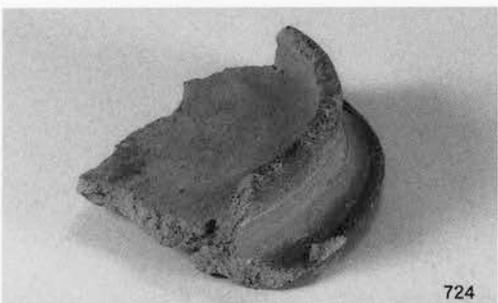


982上字



982下字

B地区出土 刻書須恵器「全堤」



724

A地区出土 円面硯



959底面

B地区出土 刻書須恵器「・・□丸右開カ」



905凸面



1007内面



905側面

B地区出土 板状陶製品（風字硯？）



901

B地区出土 風字硯（二面硯）



1007底面

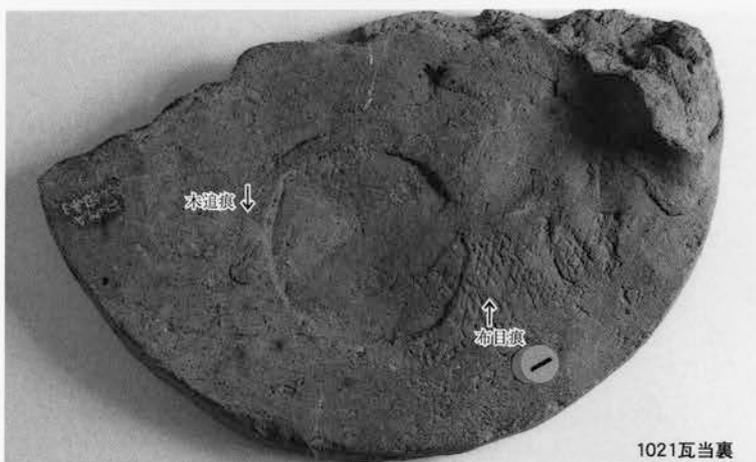
B地区出土 風字硯



1021瓦当面



1023瓦当面



1021瓦当裏



1022瓦当面

A地区出土 複弁四葉蓮華文軒丸瓦（軒丸Ⅱ類）



1025瓦当面



1024瓦当面

A地区出土 唐草文系軒平瓦（軒平Ⅱ類）



1027瓦当面



1030瓦当面



1031瓦当面

B地区出土 複弁四葉蓮華文軒丸瓦（軒丸Ⅱ類）



1028・1029瓦当面

B地区出土 複弁四葉蓮華文軒丸瓦



1038瓦当面



平行叩き後
斜格子線刻

1044瓦当面

B地区出土 斜格子文軒丸瓦



1042瓦当面



1040瓦当面



1032瓦当面



1032平瓦凹面

糸切りは
見えない



↑ 凸面布目痕

1032平瓦凸面

B地区出土 偏向唐草文軒平瓦(軒平Ⅲ類)



1033
瓦当面

B地区出土 偏向唐草文軒平瓦 (軒平Ⅲ類)



1046凸面

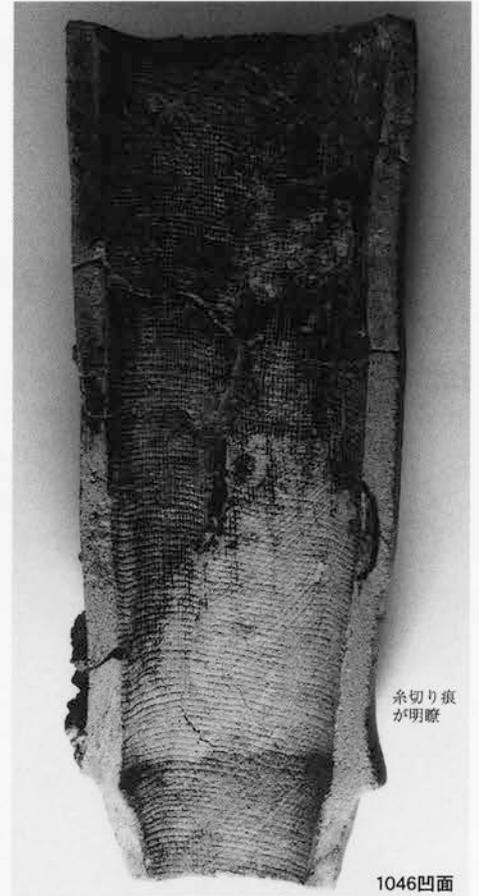


1048凸面



1048凹面

B地区出土 軒丸瓦 筒部



糸切り痕が明瞭

1046凹面

B地区出土 布目丸瓦

◀B地区出土 ロク口成形丸瓦



1051
1052
凸面



1051
1052
凹面



1053凸面の
縄目・平行叩き重複アップ



縦位縄目叩き後に斜方向の平行叩き
1053凸面



糸切り痕はなく
布が大きくのびる
1053凹面

B地区出土 平瓦(凸面平行叩き・局部縄目叩き重複)



1054凸面の
縄目叩き広端右
隅付近アップ



縦位縄目叩き
後に斜方向、
横方向の縄目
叩き

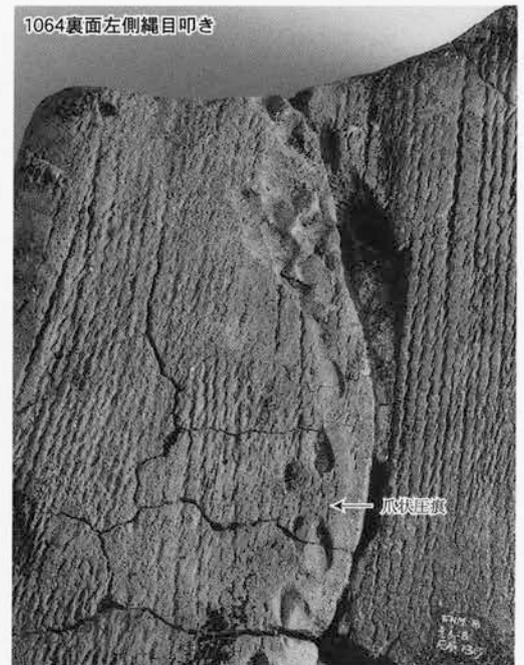
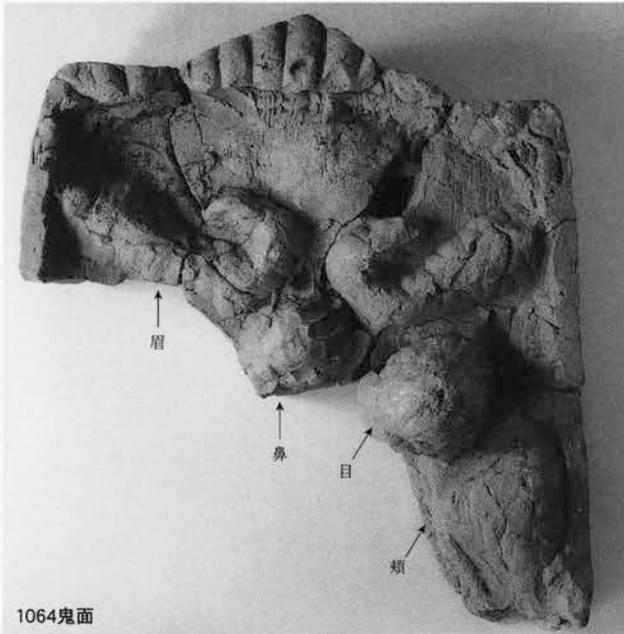
1054凸面



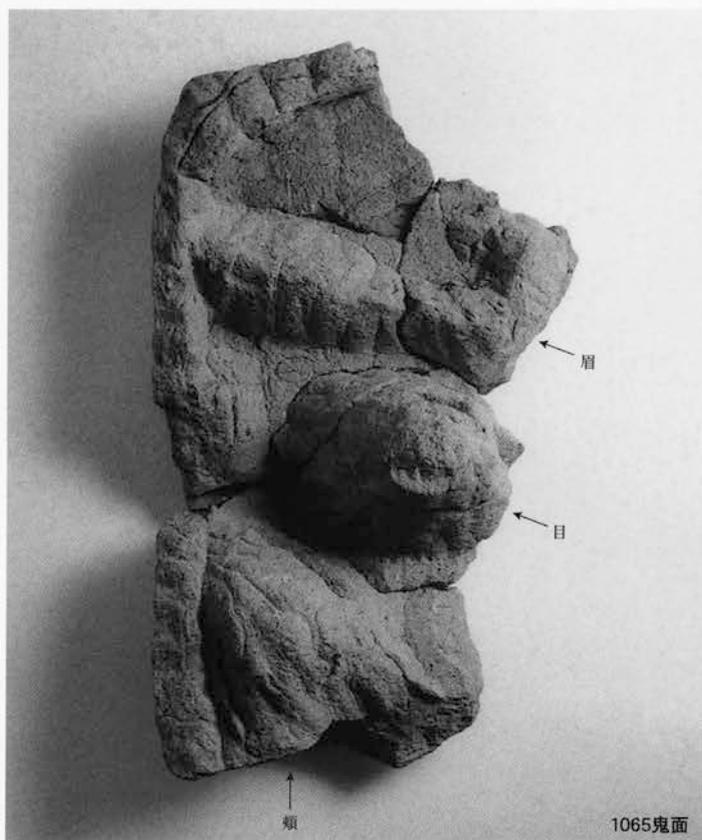
糸切り痕
を残す

1054凹面

B地区出土 平瓦(凸面縄目叩きの縦位・横位重複)



B地区出土 鬼面文鬼瓦（1064）



B地区出土 鬼面文鬼瓦（1065）

B地区出土 鬼面文鬼瓦鼻部片（1067）



B地区出土 鬼面文鬼瓦左側下端部片（1066）



SK02 完掘状況 (北西から)



SK03 土層断面



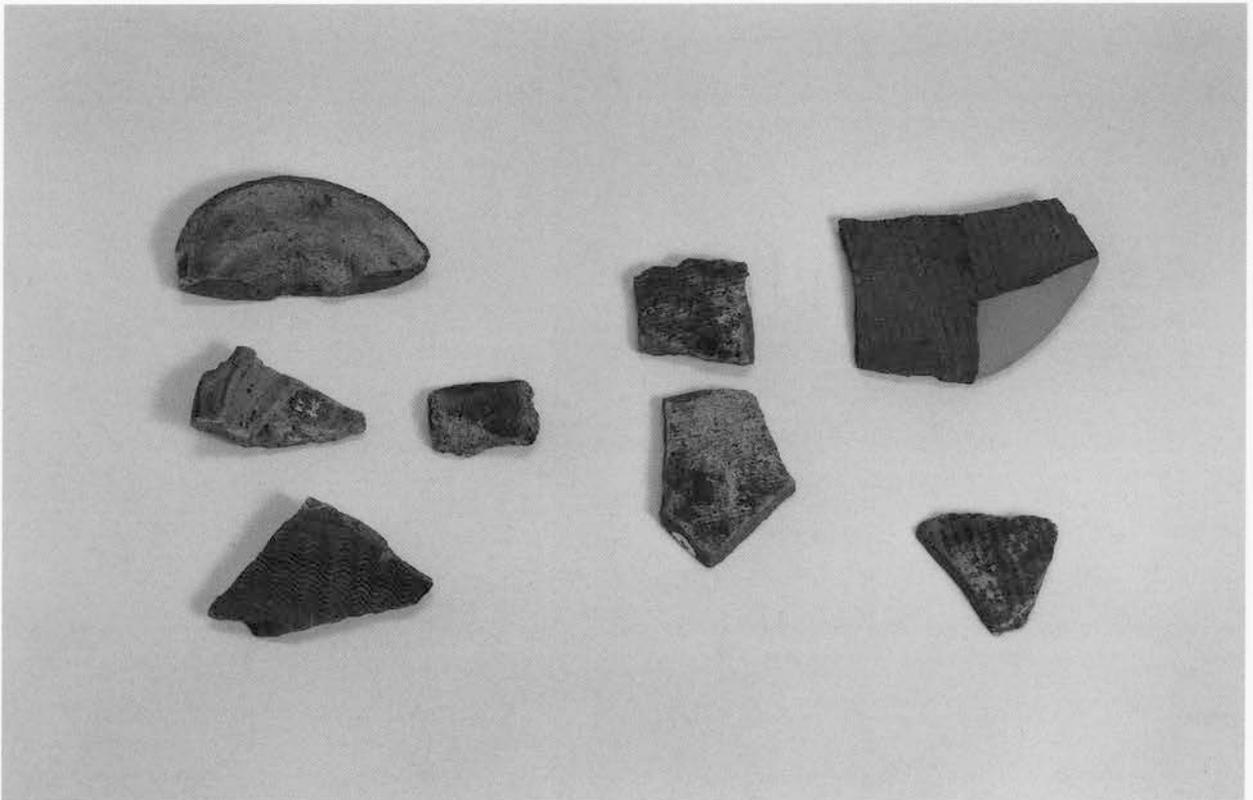
SB01 完掘状況 (南東から)



SK01 土層断面



狐山遺跡全景（南東から）



狐山遺跡 出土土器

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはくつちょうさほうこくしょⅠ
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	二ツ梨豆岡向山窯跡・狐山遺跡
巻次	
シリーズ名	
編著者名	望月精司・廣田いずみ・西田由美子・下濱貴子
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたつなしめおか 二ツ梨豆岡 むかいやまかまあと 向山窯跡	いしかわけん こまつ 石川県小松 市二ツ梨町 かみあらやまち ・上荒屋町	17203	03014	36度 19分 44秒	136度 25分 59秒	2001.10.11 ～2002.03.26	1,100㎡	果樹園平 地化事業
						2002.06.12 ～2003.02.26	700㎡	
						2003.05.09 ～2003.09.18	100㎡	
きつねやまいせき 狐山遺跡	いしかわけん こまつ 石川県小松 市串茶屋町	—	—	36度 22分 21秒	136度 25分 57秒	2003.09.01 ～2003.09.18	211㎡	個人住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨豆岡 向山窯跡	窯跡	古墳・奈良 平安	須恵器窯跡5基、 瓦陶兼業窯3基、 灰原、土坑、製 炭土坑	須恵器・瓦・鬼 瓦・鴟尾・窯道 具・土師器	
狐山遺跡	集落跡	飛鳥	掘立柱建物跡	須恵器・土師器	

小松市内遺跡発掘調査報告書 I

—二ツ梨豆岡向山窯跡・狐山遺跡—

発行年 2005（平成17）年3月31日
編集・発行者 石川県小松市教育委員会
〒923-8650 石川県小松市小馬出町91
電話（0761-22-4111）

印刷 アイワ印刷株式会社
〒923-0926 石川県小松市旭町19
電話（0761-22-8613）